

—— 農業開発総合センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ ——

農業開発総合センター遺跡群Ⅴ

SU WA WAKI

諏訪脇遺跡

SOU EN BORI

宗内堀遺跡

KAN BARU

神原遺跡

KASITA NASI

頭無遺跡

KASITA NASI SAKO DA

頭無迫田遺跡

2008年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



遺跡遠景（空中写真）



①諏訪協遺跡 出土土器（市来式）

②諏訪協遺跡 出土埋設土器



宗円堀遺跡 土坑内出土遺物



①頭無遺跡 溝状遺構（空中写真）
②宗円掘・神原・頭無迫田遺跡 旧石器

序 文

この報告書は、鹿児島県農業開発総合センター建設に伴って、平成11年度から平成15年度にかけて実施した南さつま市金峰町（旧日置郡金峰町）に所在する諏訪脇遺跡、宗円堀遺跡、神原遺跡、頭無遺跡及び頭無迫田遺跡の発掘調査の記録です。

諏訪脇遺跡では、縄文時代早期・晩期、弥生時代、古墳時代、古代、中世。宗円堀遺跡では、旧石器時代、縄文時代早期・晩期、中世。神原遺跡では、旧石器時代、縄文時代草創期・早期・晩期、古代。頭無遺跡では、縄文時代早期・晩期。頭無迫田遺跡では、旧石器時代、縄文時代早期・晩期、中世の遺構・遺物がそれぞれ発見されました。

旧石器時代では、宗円堀遺跡でナイフ形石器の製作跡と考えられるブロックが検出されたのをはじめ、神原遺跡、頭無迫田遺跡でそれぞれブロックや礫群、落とし穴が発見されています。

縄文時代早期では、前平式土器・吉田式土器・石坂式土器・押型文土器等の各型式土器が出土していますが、石坂式土器の出土量が多い点が注目されます。

縄文時代晩期では、諏訪脇遺跡で埋設土器が2基検出され、1間×1間の掘立柱建物跡や柱穴列が検出されています。

弥生時代・古墳時代の遺構・遺物は極端に少なく、諏訪脇遺跡で弥生時代前期の土器片が数点出土したのみです。

古代では、神原遺跡から頭無遺跡へかけての大溝が検出され、溝内から須恵器・土師器が出土しています。この溝は北側と南側に谷がせまっている野首状の地形に南北に掘られているもので、用途を考える手がかりになりそうです。

中世は、諏訪脇遺跡、宗円堀遺跡等で溝が検出されているほか、諏訪脇遺跡では、竪穴遺構も検出されています。

本報告書が、県民の皆様はじめ多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に、調査に当たりご協力いただいた県農政部、南さつま市の教育委員会及び発掘調査に従事された地域の方々に厚く御礼申しあげます。

平成20年 3 月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 宮 原 景 信

報告書抄録

ふりがな	のうぎょうかいはつそうごうせんたーいせきぐんす　わわき　いせき　そうえんぼりいせき　かんばる　いせき　かしたなしいせき　かしたなしきこだいせき							
書名	農業開発総合センター遺跡群Ⅴ（諏訪協遺跡・宗円堀遺跡・神原遺跡・頭無遺跡・頭無迫田遺跡）							
副書名	農業開発総合センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	Ⅴ							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	122							
編著者名	中村耕治・佐藤義明・関　明恵・吉岡康弘・石原田高広・新中なるみ・福園慶明							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号　TEL0995－48－5811							
発行年月日	2008年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ　ー　ド 市町村　遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査起因
すわわき 諏訪協遺跡	かごしまけん 鹿児島県 みなみさつまし 南さつま市	462209	35－68	31°28′ 37″	130° 20′45″	2000年度 2001年度 2002年度 2003年度	66,160	農業開発総合センター 建設
そうえんぼり 宗円堀遺跡	きんぼうちょう 金峰町	462209	35－83	31°28′ 31″	130° 20′38″	2000年度 2001年度 2002年度	28,000	
かんばる 神原遺跡		462209	35－91	31°28′ 35″	130° 20′21″	2001年度 2002年度	13,050	
かしたなし 頭無遺跡		462209	35－90	31°28′ 28″	130° 20′27″	2003年度	3,190	
かしたなしきこだ 頭無迫田遺跡		462209	35－131	31°28′ 26″	130° 20′37″	1999年度 2000年度 2003年度	12,079	
所収遺跡名	種別	主　な　時　代		主　な　遺　構		主　な　出　土　遺　物		特記事項
諏訪協遺跡	集落	縄文時代 （早期） （後期） （晩期） 弥生時代 中　世		集石遺構 掘立柱建物跡・土坑 柱穴列・埋設土器 方形土坑 竪穴状遺構・掘立柱 建物跡・溝状遺構		押型文 指宿式・市来式 上加世田式・入佐式・管玉 珏状耳飾 高橋式 青磁・白磁・土師器・須恵器		
宗円堀遺跡	集落	旧石器時代 縄文時代 （早期） （後期） （晩期） 中　世		ブロック・礫群 集石遺構 柱穴列 溝状遺構		ナイフ形石器・三稜尖頭器 細石核・細石刃 前平式・石坂式・押型文 中原式 市来式 上加世田式・入佐式・玉類 青磁・白磁・土師器・須恵器		
神原遺跡	集落	旧石器時代 縄文時代 （草創期） （早期） （晩期） 古　代		礫群 集石遺構 集石遺構 掘立柱建物跡・柱穴 列・土坑 溝状遺構		ナイフ形石器・細石刃 スクレイパー・剥片 石坂式 入佐式 土師器・須恵器		
頭無遺跡	散布地	縄文時代 （早期） （晩期） 古　代				前平式・石坂式・平杵式 上加世田式		
頭無迫田遺跡	集落	旧石器時代 縄文時代 （早期） （晩期） 中　世		落とし穴・ブロック 集積遺構 集石遺構 柱穴列 掘立柱建物跡		ナイフ形石器・台形石器 前平式・吉田式・石坂式・押型文 ・塞ノ神式 入佐式 青磁・土師器・須恵器		
要約	諏訪協遺跡では、縄文時代早期と晩期の遺構・遺物が多く、早期の集石遺構、晩期の掘立柱建物跡（1間×1間）、柱穴列が検出され、遺物も珏状耳飾りや管玉等が出土している。また、古代・中世では、溝状遺構・掘立柱建物跡、竪穴状遺構等の遺構が検出されている。宗円堀遺跡では、旧石器時代の石器製作に関わるブロックや礫群が検出されている。晩期では、土坑が検出され、上加世田式土器と管玉が出土している。神原遺跡では、旧石器時代の礫群、縄文時代草創期の集石遺構、晩期の柱穴列等が検出されている。また、古代のV字溝が頭無遺跡へかけて延びている。溝中からは須恵器・土師器が出土している。頭無迫田遺跡では、旧石器時代の集積遺構（チャート礫）と落とし穴、ブロックが検出され、縄文時代早期では集石遺構が10基検出されている。							



農業センター遺跡群 位置図 (1/50,000)

例 言

- 1 本書は、鹿児島県農業開発総合センター建設に伴う諏訪脇遺跡、宗円堀遺跡、神原遺跡、頭無遺跡、頭無迫田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県南さつま市金峰町（旧日置郡金峰町）に所在する。
- 3 発掘調査及び報告書作成は、鹿児島県農政部農業開発総合センター整備事務局から鹿児島県教育委員会が依頼を受け、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 発掘調査は、諏訪脇遺跡を平成12・13・14・15年度に、宗円堀遺跡を平成12・13・14年度に、神原遺跡を平成13・14年度に、頭無遺跡を平成15年度に、頭無迫田遺跡を平成11・12・15年度に実施した。
整理作業・報告書作成は平成18・19年度に実施した。
- 5 遺物番号は、各遺跡毎に通し番号とし、本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
- 6 挿図の縮尺は、基本的に土器は3分の1、大型石器は3分の1、小型石器は原寸とするが、遺物によっては2分の1、4分の1、6分の1としたものがある。
また、各挿図毎に縮尺を示している。
- 7 本書で用いたレベル数値は、農業開発総合センター整備事務局が提示した工事計画図面に基づく海拔絶対高である。
- 8 発掘調査における図面の作成、写真の撮影は調査担当者が行ったが、一部は株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。空中写真撮影は、有限会社ふじたに委託した。
- 9 遺構実測図のトレースは、整理担当者が行った。
- 10 土器の実測・トレースは、整理作業員の協力を得て整理担当者が行った。
- 11 石器の実測・トレースは、整理作業員の協力を得て整理担当者が行ったが、一部は国際航業株式会社、株式会社パスコ、株式会社九州文化財研究所、株式会社埋蔵文化財サポートシステム、大成エンジニアリング株式会社に委託し、監修は整理担当者が行なった。
- 12 遺構内から出土した炭化物の放射性炭素年代測定、樹種同定、火山灰の分析、埋設土器のリン・カルシウムの分析等は、株式会社古環境研究所とパリノサーベイ株式会社に委託した。
- 13 遺物の写真撮影は、吉岡康弘が行った。
- 14 本書の執筆・編集は、中村耕治・佐藤義明・関明恵・吉岡康弘・石原田高広・新中なるみ・福蘭慶明が担当し、執筆分担は以下のとおりである。
第Ⅰ章 発掘調査の経過 中村耕治
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境 佐藤義明
第Ⅲ章 層位 中村耕治
第Ⅳ章 諏訪脇遺跡の発掘調査成果 佐藤義明・吉岡康弘・石原田高広
第Ⅴ章 宗円堀遺跡の発掘調査成果 関 明恵・川元禎久・新中なるみ・福蘭慶明
第Ⅵ章 神原遺跡の発掘調査成果 福蘭慶明・中村耕治
第Ⅶ章 頭無遺跡の発掘調査成果 遠矢勝幸・新中なるみ
第Ⅷ章 頭無迫田遺跡の発掘調査成果 中村耕治・鶴田静彦・佐藤義明
- 15 遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示活用する予定である。なお、各遺跡の遺物注記の略号は次のとおりである。諏訪脇遺跡（ノセワキ）、宗円堀遺跡（ノセソウ）神原遺跡（ノセカン）、頭無遺跡（ノセカシ）、頭無迫田遺跡（ノセカサコ）。

凡 例



：煤付着範囲



：石皿作業面



：丹塗り範囲



：黒色範囲

目 次

序文	
報告書抄録	
例言	
凡例	
第Ⅰ章 調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の経過	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	2
第1節 遺跡の位置	2
第2節 周辺遺跡	2
第Ⅲ章 層位	4
第Ⅳ章 諏訪脇遺跡の発掘調査成果	5
第1節 調査の経過と層位	5
第2節 発掘調査の方法及び概要	6
第3節 縄文時代の調査	10
1 縄文時代早期の調査	10
(1) 遺構	10
(2) 遺物	14
2 縄文時代前期・中期・後期の調査	27
(1) 遺物	27
3 縄文時代晩期の調査	29
(1) 遺構	29
(2) 遺物	44
第4節 弥生時代・古墳時代の調査	67
(1) 遺構	67
(2) 遺物	68
第5節 古代・中世の調査	69
(1) 遺構	70
(2) 遺物	94
第6節 小結	97
第Ⅴ章 宗円堀遺跡の発掘調査	99
第1節 調査の経過	99
第2節 遺跡の層序	105
第3節 発掘調査の方法及び概要	105
第4節 旧石器時代の調査	105
1 遺構	105
2 遺物	109
第5節 縄文時代の調査成果	123
1 縄文時代早期	123
(1) 遺構	123
(2) 遺物	125

2 縄文時代中期・後期	160
(1) 遺物	160
3 縄文時代晩期	160
(1) 遺構	160
(2) 遺物	166
第6節 小結	169
第Ⅵ章 神原遺跡の発掘調査成果	171
第1節 調査の経過と層位	171
第2節 遺跡の層序	179
第3節 発掘調査の方法及び概要	179
第4節 旧石器時代の調査	182
1 遺構	182
2 遺物	185
第5節 縄文時代の調査	192
1 縄文時代草創期	192
2 縄文時代早期	196
(1) 遺物	196
3 縄文時代中期・後期	202
4 縄文時代晩期	202
(1) 遺構	202
(2) 遺物	204
第6節 古墳時代の調査	209
第7節 古代・中世の調査	209
1 遺構	209
2 遺物	218
第8節 小結	219
第Ⅶ章 頭無遺跡の発掘調査成果	221
第1節 調査の経過	221
第2節 遺跡の層序	224
第3節 調査の方法及び概要	224
第4節 縄文時代の調査	224
1 縄文時代早期	224
(1) 遺構	224
(2) 遺物	227
2 縄文時代晩期	230
(1) 遺物	230
第5節 古墳時代の調査	233
1 遺物	233
第6節 古代の調査	233
1 遺構	233
第7節 小結	233

第Ⅶ章 頭無迫田遺跡の発掘調査成果	235
第1節 調査の経過	235
第2節 発掘調査の方法及び概要	239
第3節 遺跡の層序	239
第4節 旧石器時代の調査成果	240
1 遺構	240
2 遺物	241
第5節 縄文時代の調査	254
1 縄文時代早期の調査成果	254
(1) 遺構	254
(2) 遺物	260

2 縄文時代後期の調査成果	298
3 縄文時代晩期の調査成果	298
(1) 遺構	298
(2) 遺物	298
第6節 中・近世の調査成果	302
(1) 遺構	302
(2) 遺物	302
第7節 小結	302
写真図版	303
あとがき	

挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡地図	3
第2図 模式柱状図	4

諏 訪 脇 遺 跡

第1図 諏訪脇遺跡位置図	6
第2図 地形図及びグリッド配置図	7
第3図 土層断面図1	8
第4図 土層断面図2	9
第5図 縄文時代早期遺構配置図	10
第6図 縄文時代早期集石遺構1	11
第7図 縄文時代早期集石遺構2	12
第8図 縄文時代早期遺物出土状況図	13
第9図 I・II類土器1	15
第10図 II類土器2	16
第11図 II類土器3	17
第12図 II類土器4～Ⅶ類土器	18
第13図 石鏃分類図	21
第14図 縄文時代早期石器1	22
第15図 縄文時代早期石器2	23
第16図 縄文時代早期石器3	24
第17図 縄文時代早期石器4	25
第18図 縄文時代早期石器5	26
第19図 Ⅷ～Ⅺ類土器	27
第20図 縄文時代晩期遺構配置図	28
第21図 縄文時代晩期土坑配置図	29
第22図 縄文時代晩期土坑1及び土坑内遺物1	30
第23図 縄文時代晩期土坑内遺物2	31
第24図 縄文時代晩期土坑2	32
第25図 縄文時代晩期埋設土器1	33
第26図 縄文時代晩期埋設土器2	34
第27図 縄文時代晩期掘立柱建物跡	35

第28図 縄文時代晩期柱穴列1	37
第29図 縄文時代晩期柱穴列2	38
第30図 縄文時代晩期柱穴列3	39
第31図 縄文時代晩期遺物出土状況図	43
第32図 Ⅻ・Ⅻa類土器1	45
第33図 Ⅻa類土器2	46
第34図 Ⅻb類土器1	47
第35図 Ⅻb類土器2	48
第36図 Ⅻb類土器3, Ⅻ・Ⅻ類土器1	49
第37図 Ⅻ・Ⅻ類土器2	50
第38図 Ⅻ・Ⅻ類土器3	51
第39図 Ⅻ・Ⅻ類土器4	52
第40図 Ⅻ類土器1	55
第41図 Ⅻ類土器2	56
第42図 Ⅻ類土器3	57
第43図 縄文時代晩期石器1	59
第44図 縄文時代晩期石器2	60
第45図 縄文時代晩期石器3	61
第46図 縄文時代晩期石器4	62
第47図 縄文時代晩期石器5	63
第48図 縄文時代晩期石器6	64
第49図 縄文時代晩期石器7	65
第50図 縄文時代晩期石器8(垂飾品)	66
第51図 弥生・古墳時代遺構配置図及び遺物出土状況図	67
第52図 弥生時代竪穴状遺構	67
第53図 弥生・古墳時代の遺物	68
第54図 古代・中世遺構配置図及び遺物出土状況図	69
第55図 古代・中世掘立柱建物跡1	71
第56図 古代・中世掘立柱建物跡2	72
第57図 古代・中世掘立柱建物跡3	73
第58図 古代・中世掘立柱建物跡4	74

第59図	古代・中世掘立柱建物跡 5	75
第60図	古代・中世掘立柱建物跡 6	76
第61図	古代・中世溝状遺構 1	79
第62図	古代・中世溝状遺構 2	81
第63図	古代・中世溝状遺構 3	82
第64図	古代・中世竪穴状遺構	83
第65図	古代・中世溝状遺構内出土遺物 1	84
第66図	古代・中世溝状遺構内出土遺物 2	86
第67図	古代・中世溝状遺構内出土遺物 3（鉄滓）	87
第68図	古代・中世溝状遺構内出土遺物 4（鉄滓）	88
第69図	古代・中世溝状遺構 4	89
第70図	古代・中世溝状遺構 5	90
第71図	古代・中世溝状遺構 6	91
第72図	古代・中世溝状遺構 7	92
第73図	古代・中世溝状遺構 8	93
第74図	古代・中世遺物 1（須恵器）	95
第75図	古代・中世遺物 2（土師器・白磁）	96

宗 円 堀 遺 跡

第 1 図	宗円堀遺跡位置図	99
第 2 図	地形図及びグリッド配置図	100
第 3 図	土層断面図（1）	101
第 4 図	東側調査区（O-10区～P-11区）遺物出土状況図	102
第 5 図	旧石器時代遺物出土状況図・遺構配置図	103
第 6 図	石材毎の分布図	104
第 7 図	礫群 1	105
第 8 図	礫群 2	106
第 9 図	礫群 3	107
第10図	礫群 4	108
第11図	礫群 5	109
第12図	礫群 6	110
第13図	旧石器 1	111
第14図	旧石器 2	112
第15図	旧石器 3	113
第16図	旧石器 4	114
第17図	旧石器 5	115
第18図	旧石器 6	116
第19図	旧石器 7	117
第20図	旧石器 8	118
第21図	旧石器 9	119
第22図	旧石器10	120
第23図	旧石器11	121
第24図	旧石器12	122
第25図	縄文時代早期集石遺構	123
第26図	縄文時代早期遺物出土状況図・遺構配置図	124

第27図	I～V類土器	125
第28図	Ⅵ a 類土器 1	126
第29図	Ⅵ a 類土器 2	127
第30図	Ⅵ a 類土器 3	128
第31図	Ⅵ a 類土器 4	129
第32図	Ⅵ b 類土器 1	130
第33図	Ⅵ b 類土器 2	131
第34図	Ⅵ b 類土器 3	132
第35図	Ⅵ類土器 1	133
第36図	Ⅵ類土器 2	134
第37図	Ⅵ類土器 3	135
第38図	Ⅵ類土器 4	136
第39図	Ⅶ類土器 1	137
第40図	Ⅶ類土器 2	138
第41図	Ⅶ類土器 3	139
第42図	Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ・Ⅻ類土器	140
第43図	縄文時代早期石器 1	144
第44図	縄文時代早期石器 2	145
第45図	縄文時代早期石器 3	146
第46図	縄文時代早期石器 4	147
第47図	縄文時代早期石器 5	148
第48図	縄文時代早期石器 6	149
第49図	縄文時代早期石器 7	150
第50図	縄文時代早期石器 8	151
第51図	縄文時代早期石器 9	152
第52図	縄文時代早期石器10	153
第53図	縄文時代早期石器11	154
第54図	縄文時代早期石器12	155
第55図	縄文時代早期石器13	156
第56図	縄文時代早期石器14	157
第57図	Ⅼ・Ⅽ・Ⅾ類土器	160
第58図	土坑	161
第59図	縄文時代晩期遺構配置図	162
第60図	土坑内出土遺物 1	162
第61図	土坑内出土遺物 2	163
第62図	土坑内出土遺物 3	164
第63図	柱穴列	165
第64図	Ⅿ・ⅰ類土器	166
第65図	縄文時代晩期石器	168

神 原 遺 跡

第1図	神原遺跡位置図	171
第2図	地形図及びグリッド配置図	172
第3図	土層断面図（1）	173
第4図	土層断面図（2）	174
第5図	旧石器時代遺構配置図及び遺物出土状況	175
第6図	旧石器時代石材別分布図	176
第7図	旧石器時代石器別分布図	177
第8図	旧石器時代礫群1	178
第9図	旧石器時代礫群2	179
第10図	旧石器1	180
第11図	旧石器2	181
第12図	旧石器3	182
第13図	旧石器4	183
第14図	旧石器5	184
第15図	旧石器6	185
第16図	旧石器7	186
第17図	旧石器8	187
第18図	旧石器9	188
第19図	旧石器10	189
第20図	縄文時代草創期遺構配置図	191
第21図	縄文時代草創期集石遺構1	192
第22図	縄文時代草創期集石遺構2	193
第23図	縄文時代早期遺物出土状況図	194
第23図	I類・II類土器	195
第25図	III類・IV類土器	196
第26図	縄文時代早期石器1	197
第27図	縄文時代早期石器2	198
第28図	縄文時代早期石器3	199
第29図	縄文時代早期石器4	200
第30図	縄文時代早期石器5	201
第31図	V類・VI類・VII類土器	202
第32図	縄文時代晩期遺構配置図	203
第33図	縄文時代晩期土坑及び土坑内遺物	204
第34図	縄文時代掘立柱建物跡	205
第35図	縄文時代晩期柱穴列	206
第36図	縄文時代晩期土器	207
第37図	縄文時代晩期石器	208
第38図	古墳時代土器	209
第39図	古代溝状遺構1	210
第40図	古代溝状遺構2	211
第41図	古代溝状遺構3（断面図）	212
第42図	古代溝状遺構内遺物出土状況図1	213
第43図	古代溝状遺構内遺物出土状況図2	214
第44図	古代溝状遺溝内出土遺物1	215

第45図	古代溝状遺溝内出土遺物2	216
第46図	古道及び古道内出土遺物	217
第47図	古代・中世遺物	218

頭 無 遺 跡

第1図	頭無遺跡位置図	221
第2図	地形図及びグリッド配置図	222
第3図	土層断面図	223
第4図	縄文時代早期1～6号集石遺構	225
第5図	縄文時代早期7・8号集石遺構	226
第6図	集石遺構内遺物	227
第7図	縄文時代早期土器	228
第8図	縄文時代早期石器	229
第9図	縄文時代晩期土器	230
第10図	縄文時代晩期石器1	231
第11図	縄文時代晩期石器2	232
第12図	古墳時代土器	233

頭無迫田遺跡

第1図	頭無迫田遺跡位置図	235	第45図	V類土器 9	281
第2図	頭無迫田遺跡地形図グリッド配置図	236	第46図	V類土器10	282
第3図	土層断面図 1	237	第47図	V類土器11	283
第4図	土層断面図 2	238	第48図	V類土器12	284
第5図	旧石器時代遺物出土状況	239	第49図	Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ類土器	287
第6図	落とし穴	240	第50図	縄文早期石器 1	288
第7図	チャート集積遺構	240	第51図	縄文早期石器 2	289
第8図	旧石器 1	241	第52図	縄文早期石器 3	290
第9図	旧石器 2	242	第53図	縄文早期石器 4	291
第10図	旧石器 3	243	第54図	縄文早期石器 5	292
第11図	旧石器 4	244	第55図	縄文早期石器 6	293
第12図	旧石器 5	245	第56図	縄文早期石器 7	294
第13図	旧石器 6	246	第57図	縄文早期石器 8	295
第14図	旧石器 7	247	第58図	縄文早期石器 9	296
第15図	旧石器 8	248	第59図	縄文早期石器10	297
第16図	旧石器 9	249	第60図	Ⅻ類土器	298
第17図	旧石器10	250	第61図	縄文時代晩期柱穴列	298
第18図	旧石器11	251	第62図	Ⅼ類土器	299
第19図	旧石器12	252	第63図	縄文晩期石器 1	300
第20図	旧石器13	253	第64図	縄文晩期石器 2	301
第21図	縄文時代早期集石遺構配置図・1号集石遺構	254	第65図	中・近世の遺物	302
第22図	2号・3号集石遺構	255			
第23図	4号・5号・6号集石遺構	256			
第24図	7号・8号集石遺構	257			
第25図	9号・10号集石遺構	258			
第26図	縄文時代早期遺物出土状況	259			
第27図	I類土器	260			
第28図	Ⅱ類土器 1	261			
第29図	Ⅱ類土器 2	262			
第30図	Ⅱ類土器 3	263			
第31図	Ⅱ類土器 4	264			
第32図	Ⅲ類土器 1	266			
第33図	Ⅲ類土器 2	267			
第34図	Ⅲ類土器 3	268			
第35図	Ⅲ類土器 4	269			
第36図	Ⅳ類土器	270			
第37図	V類土器 1	273			
第38図	V類土器 2	274			
第39図	V類土器 3	275			
第40図	V類土器 4	276			
第41図	V類土器 5	277			
第42図	V類土器 6	278			
第43図	V類土器 7	279			
第44図	V類土器 8	280			

図 版 目 次

巻頭カラー 1	遺跡遠景（空中写真）	
巻頭カラー 2	①諏訪脇遺跡出土土器（市来式）	
	②諏訪脇遺跡出土埋設土器	
巻頭カラー 3	宗円堀遺跡土坑内出土遺物	
巻頭カラー 4	①頭無遺跡溝状遺構（空中写真）	
	②宗円堀，神原，頭無迫田遺跡旧石器	
図版 1	諏訪脇遺跡遠景及び土層・集石遺構	303
図版 2	諏訪脇遺跡埋設土器	304
図版 3	諏訪脇遺跡遺構検出状況・遺物出土状況	305
図版 4	①諏訪脇遺跡弥生時代竪穴状遺構	306
図版 4	②～⑦諏訪脇遺跡古代・中世遺構	306
図版 5	①～④諏訪脇遺跡古代・中世溝状遺構	307
図版 5	⑤・⑥諏訪脇遺跡掘立柱建物跡	307
図版 6	諏訪脇遺跡掘立柱建物跡	308
図版 7	諏訪脇遺跡縄文時代早期土器	309
図版 8	①諏訪脇遺跡縄文時代早期石器	310
図版 8	②諏訪脇遺跡縄文時代中期・後期土器	310
図版 9	諏訪脇遺跡縄文時代晩期土器 1	311
図版 10	諏訪脇遺跡縄文時代晩期土器 2	312
図版 11	諏訪脇遺跡縄文時代晩期石器	313
図版 12	諏訪脇遺跡弥生・古墳時代・古代・中世遺物	314
図版 13	①宗円堀遺跡土層断面	315
図版 13	②宗円堀遺跡遠景	315
図版 13	③・④・⑤・⑥宗円堀遺跡旧石器出土状況	315
図版 13	⑦宗円堀遺跡作業風景	315
図版 13	⑧宗円堀遺跡土層断面	315
図版 14	宗円堀遺跡旧石器遺物出土状況	316
図版 15	宗円堀遺跡旧石器礫群・縄文晩期柱穴列	317
図版 16	宗円堀遺跡縄文晩期土坑・調査終了状況	318
図版 17	宗円堀遺跡旧石器時代石器 1	319
図版 18	宗円堀遺跡旧石器時代石器 2	320
図版 19	宗円堀遺跡縄文時代早期土器 1	321
図版 20	宗円堀遺跡縄文時代早期土器 2	322
図版 21	宗円堀遺跡縄文時代早期石器 1	323
図版 22	宗円堀遺跡縄文時代早期石器 2・3	324
図版 23	①宗円堀遺跡縄文時代中期・後期土器	325
図版 23	②宗円堀遺跡縄文時代晩期土坑内土器 1	325
図版 24	宗円堀遺跡縄文時代晩期土坑内土器 2	326
図版 25	神原遺跡遠景及び旧石器時代礫群	327
図版 26	①神原遺跡旧石器遺物集中区	328
図版 26	②・③神原遺跡草創期集石遺構	328
図版 26	④～⑧神原遺跡縄文時代晩期遺構	328
図版 27	①～④神原遺跡縄文時代晩期遺構	329

図版 27	⑤・⑥神原遺跡古代溝状遺構	329
図版 28	神原遺跡古代溝状遺構及び古道	330
図版 29	神原遺跡旧石器時代石器	331
図版 30	神原遺跡縄文時代早期土器	332
図版 31	神原遺跡縄文時代中期・後期・晩期土器	333
図版 32	神原遺跡溝状遺構内出土遺物	334
図版 33	①頭無遺跡調査風景	335
図版 33	②頭無遺跡古代溝状遺構	335
図版 33	③～⑦頭無遺跡縄文時代早期集石遺構	336
図版 34	①頭無遺跡縄文時代土器	336
図版 34	②頭無遺跡縄文時代石器	336
図版 35	①頭無迫田遺跡近景	337
図版 35	②頭無迫田遺跡旧石器時代ブロック検出状況	337
図版 35	③頭無迫田遺跡旧石器時代チャート集積遺構	337
図版 35	④頭無迫田遺跡旧石器時代落とし穴半裁状況	337
図版 36	①頭無迫田遺跡縄文時代早期遺物出土状況	338
図版 36	②頭無迫田遺跡旧石器時代（ナイフ）出土状況	338
図版 36	③～⑤頭無迫田遺跡縄文時代早期集石遺構	338
図版 37	①・②頭無迫田遺跡縄文時代早期集石遺構	339
図版 37	③頭無迫田遺跡縄文時代早期土器出土状況	339
図版 37	④頭無迫田遺跡縄文時代晩期土器出土状況	339
図版 37	⑤・⑥頭無迫田遺跡縄文時代晩期 1 号・2 号柱穴列	339
図版 38	頭無迫田遺跡旧石器時代石器	340
図版 39	頭無迫田遺跡縄文時代早期土器 1	341
図版 40	頭無迫田遺跡縄文時代早期土器 2	342
図版 41	頭無迫田遺跡縄文時代早期土器 3	343
図版 42	頭無迫田遺跡縄文時代早期土器 4	344
図版 43	頭無迫田遺跡縄文時代早期土器 5	345
図版 44	頭無迫田遺跡縄文時代早期土器 6	346
図版 45	頭無迫田遺跡縄文時代早期石器	347
図版 46	頭無迫田遺跡縄文時代晩期土器・石器	348

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

県農政部農業開発総合センター整備事務局（以下農開総センター整備事務局）は、「鹿児島県総合基本計画」（平成6年）に基づく戦略プロジェクト「食の創造拠点鹿児島の形成」の一環として、鹿児島県農業開発総合センター建設事業を日置市吹上町（大字入来・中之里・湯之浦・和田）南さつま市金峰町（大字大野・代表地番南さつま市金峰町大野諏訪前2935-1番地）内において計画した。このため農開総センター整備事務局は、本事業に先立って、対象地内における埋蔵文化財の有無について県教育庁文化課（平成8年から文化財課以下文化財課）に照会を行った。これを受けた文化財課は、平成6年11月に分布調査を実施した。その結果、事業区域内の対象面積1,347,900㎡に10遺跡が存在することが判明した。

分布調査の結果を受けて、県農政部・文化財課・県立埋蔵文化財センター（以下埋文センター）の三者で協議した結果、対象地内の遺跡の範囲と性格を把握するために当該地域において確認調査を実施することとし、調査は埋文センターが担当した。

確認調査は、平成8・9年度に実施した。確認調査の結果、24遺跡（約10,000㎡）が存在することが明らかになり、建築物予定地及び圃場整備により削平される部分等について記録保存のための本調査を平成15年度まで実施した。

報告書作成のための整理作業は平成15年度からはじめて、平成16年度に日置市（旧日置郡吹上町）に所在する7遺跡の報告書を刊行した。平成17年度に南さつま市（旧日置郡金峰町）に所在する4遺跡について報告書を刊行した。平成18年度は南さつま市金峰町における諏訪牟田遺跡・諏訪前遺跡・南原内堀遺跡・加治屋堀遺跡の4遺跡の報告書を刊行した。平成19年度は、南さつま市金峰町の諏訪協遺跡・宗円堀遺跡・神原遺跡・頭無遺跡・頭無迫田遺跡の5遺跡について報告書を刊行することにした。

平成18年度からは、事業主体者が農開総センター整備事務局から、経営技術課技術管理課に移管された。

第2節 調査の組織

平成19年度

事業主体者 鹿児島県経営技術課技術管理係

整理主体者 鹿児島県教育委員会

整理責任者 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長 宮原 景信

整理企画者 “ 次長兼総務課長 平山 章

“ 次長兼

南の縄文調査室長 新東 晃一

“ 調査第一課長 池畑 耕一

“ 主任文化財主事兼調査第一課

第二調査係長 中村 耕治

整理担当者 “ 第二調査係長 中村 耕治

“ 文化財主事 佐藤 義明

“ 文化財主事 関 明恵

“ 文化財主事 吉岡 康弘

“ 文化財主事 石原田高広

“ 文化財主事 新中なるみ

“ 文化財主事 福蘭 慶明

事務担当者 “ 総務係長 寄井田正秀

“ 主事 田之畑美幸

整理指導 鹿児島大学法文学部准教授 本田 道輝

報告書作成検討委員会 平成19年12月17日（月）

宮原所長他11名

報告書作成指導委員会 平成19年12月11日（火）

新東次長他1名

企画担当 井ノ上秀文・黒川忠広・横手浩二郎

第3節 調査の経過

諏訪協遺跡・宗円堀遺跡・神原遺跡・頭無遺跡・頭無迫田遺跡は、平成6年度の分布調査により確認されたもので、平成8・9年度の確認調査で旧石器時代から中世までの遺物が出土することが判明した。本調査は、平成10年度から平成15年度まで、農業大学校用地及び耕種試験場用地の中で建築物予定地、幹線道路、研究畑等で削平される範囲、深さについて実施した。詳細については各遺跡の概要で記す。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置

農業開発総合センター建設予定地は南さつま市金峰町大野と日置市吹上町和田・中之里・入来に計画され、敷地面積180ヘクタールと広範囲に及ぶものである。

南さつま市は、平成17年度に加世田市・笠沙町・大浦町・金峰町の1市3町が合併してできたもので、人口約4,200人の市となったものである。

南さつま市金峰町は、西側は東シナ海に面し、中央に金峰山がそびえ、東から西へ山地・シラス台地・低地・海岸砂丘へと続く地勢を示す。また、万之瀬川の支流堀川・鏡川・岩元川・長谷川が山地や台地を縫うように西流している。これらの河川に開析された谷が発達し、谷に面した台地上に多くの遺跡が存在する。代表的な遺跡としては、縄文時代の阿多貝塚・弥生時代の高橋貝塚・松木藺遺跡、古墳時代の中津野遺跡が知られているが、近年万之瀬川の河川改修に伴う調査で、持鉢松遺跡・芝原遺跡など古代から中世の重要な遺跡も発見されている。

第2節 周辺遺跡

金峰町側は主に耕種試験場関連の計画地であるが、大字は大野で大野原と呼ばれている広大な台地である。遺跡は、ほぼ全域に渡って存在し、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代・中世・近世と各時代の遺構・遺物が出土している。金峰町は、古くより発掘調査が行われ、県内外で著名な遺跡が多い。以下に代表的な遺跡を挙げる。

【小中原遺跡】旧石器時代・縄文時代早期・古代の遺構・遺物が多く出土した遺跡である。現在残っている阿多という地名と同じ「阿多」という文字が刻まれた土師器が出土したことでも注目された遺跡である。

【阿多貝塚】縄文時代前期を中心とした遺跡で、人骨の出土した上焼田遺跡と共に貝塚を形成する希少な遺跡である。

【上水流遺跡】縄文時代前期～晩期の夥しい遺物が出土している。その中には、南島との交流を窺わせる遺物(南島系の土器)も見られる。古墳時代になると遺構数も増加し内容も豊富になる。

【下原遺跡】縄文時代から弥生時代への移行期に当たる遺跡で、粃痕の認められる土器片が出土し、早くから稲作が行われていたことが窺えるもので

ある。

【高橋貝塚】下原遺跡に後続するものであるが、弥生時代前期の土器（高橋式）と共に粃痕のある土器片・柱状挟入石器・ノミ形石器・磨製石鎌・磨製石剣・石鎌・石庖丁等が出土しており、稲作農耕がいち早く伝わってきたことを物語る遺跡である。また、南海産のゴホウラ貝が出土することから、南島との関わりも考えられる。

【下小路遺跡】県内では数少ない合口甕棺が発見され、弥生時代中期に北部九州との交流があったことが知られる。

【下堀遺跡】弥生時代中期の集落が確認され、大隅半島から西海岸に分布する間仕切りをもつ竪穴住居跡が当地方にも存在することが知られた。また、中九州や北部九州系の土器が多く出土している点も注目されている。

【松木藺遺跡】弥生時代後期の大溝（幅4～5m・深さ3mのV字状）が発見され環状集落の可能性を想定させられる。また、溝中より一括出土した多量の土器は、それまで希薄だった弥生時代後期の土器編年に欠かせないものである。

【中津野遺跡】弥生時代から古墳時代への移行期にあたる土器群が出土している。

【持鉢松遺跡・芝原遺跡・渡畑遺跡】万之瀬川改修工事に伴う近年の調査から古代・中世の遺構・遺物が数多く発見されている。特に中世の中国製陶磁器が大量に出土しており、南島・中国との交流が大きく取り沙汰されている。平成16・17年度の調査では、縄文時代後期の足形土製品が渡畑遺跡と芝原遺跡から出土し接合している。

【荒平古窯跡群】県内でも数少ない古代須恵器窯で生産遺跡の研究上欠かせないものである。

【白檜野遺跡】石組を伴った墓壇が発見され、中から土師器の蔵骨器と四隅に「山」と墨書された土師器坏と鍛冶滓・轆の羽口2点が出土している。

南薩地域は、鹿児島県内でも遺跡の多い地域で、考古学の調査がいち早く行われている。特に金峰町・吹上町は前述のような鹿児島県を代表するような遺跡が目白押しである。農業開発総合センター建設の予定地も広大な台地の中に大小の開析谷が入り込み遺跡の立地条件としてふさわしい地域をなしている。そのため、旧石器時代から近世まで幅広い時代の遺跡が24か所も存在する。各遺跡についてはそれぞれで詳述することにする。

遺跡地名表（金峰町）

番号	遺跡名	所在地	時 代	番号	遺跡名	所在地	時 代
1	塚山	大 野	古墳	22	寺下	大 野	中世
2	大塚	〃	古墳	23	京田	〃	縄文・古墳・中世
3	尾ヶ原	〃	縄文早～晩期・弥生・古墳	24	京田原	〃	古墳
4	諏訪牟田	〃	縄文・古墳・古代・中世	25	鎮守尾	〃	古墳・中世
5	諏訪前	〃	縄文早期・晩期	26	南原A	〃	縄文中期・後期
6	馬塚松	〃	縄文晩期・中世・近世	27	砂漠	池 辺	古墳
7	諏訪脇	〃	縄文早期・晩期・中世	28	小堀	〃	古墳・古代
8	大門口	〃	縄文早期・晩期	29	萩ノ上	〃	古墳
9	宗円堀	〃	旧石器・縄文早期・中世	30	地頭堀	〃	古墳・古代
10	荒田	〃	旧石器・縄文早期	31	塩屋堀	〃	古墳
11	秋場	〃	旧石器	32	玄同堀	〃	古墳・中世
12	桜谷	〃	旧石器・縄文早期・弥生	33	主水堀	〃	弥生・古墳
13	神原	〃	旧石器・縄文早期・古代	34	秋葉下	〃	古墳
14	頭無	〃	縄文早期・古代	35	島田	〃	古墳
15	市堀	〃	縄文早期・中世	36	宮園	〃	古墳・古代
16	頭無迫田	〃	旧石器・縄文早期・中世	37	牟礼ヶ城跡	〃	中世
17	加治屋堀	〃	縄文	38	小城田	〃	縄文
18	中尾	〃	旧石器・縄文草創期・早期	39	本寺	〃	古墳
19	南原内堀	〃	縄文後期・晩期	40	前平	〃	縄文・古墳
20	南原外堀	〃	古墳・古代	41	宮の前	〃	縄文・古代
21	原口	〃	古墳・古代				



第1図 周辺遺跡位置

第Ⅲ章 層位

I 層 灰黒色土	農業開発総合センター予定地は、旧日置郡金峰町と吹上町にまたがる南北2km、東西1.5kmの広大な範囲に及ぶ。地形も標高86mから13mと高低差があり、山・台地・沖積地・開析谷と変化に富んでいる。そのために、それぞれの地点で層位が異なっている。第2図は、台地部分の標準的な地層の模式図である。
II 層黒色土	また、以下の各層の説明も標準的なものである。
III 層 黄橙色火山灰土	本遺跡もほぼ同様であり、これにならうこととする。
IV 層 黄褐色土	【I 層 灰黒色土】 現在の耕作土。白色の小軽石を含むことによってII層との区別が可能である。地点によっては、a・b・cの3層に細分できる。I c層は黒色に近い色調であるが、3mm大の白色軽石が混在している。中世末から近世初めの層である。I層の平均的な厚さは20cm程度であるが、圃場整備により削平されたり、盛り土されたりしており一定ではない。
V 層 黒褐色土	【II 層 黒色土】 弥生時代・古墳時代・奈良時代～鎌倉時代の遺物包含層である。圃場整備により削平されている部分が多いが、谷の部分などを中心に良好残存している。層厚10～30cm。
VI 層 暗黄橙色火山灰土	【III 層 黄橙色火山灰土】 鬼界カルデラ起源のアカホヤ火山灰（BP6400年）とその腐植土である。上位（III a層）はII層と
VII 層 明茶褐色土	
VIII 層 茶褐色粘質土	
IX 層 暗茶褐色粘質土	
X 層 黄橙色シルト質	
XI 層 白色シラス	

第2図 模式柱状図

の漸位層であり、やや黒色を帯びている。縄文時代晩期及び弥生時代前期の遺物包

含層である。中位（III b層）は縄文時代前期から後期の遺物包含層である。下位（III c層）はアカホヤ火山灰の一次堆積と考えられるが残存状況は悪く、IV層との境目が明瞭ではない。層厚30～40cm。

【IV層 黄褐色土】

III層と類似するが、より褐色味を帯び粘質である。縄文時代早期の遺物包含層で層厚20～30cm。

【V層 黒褐色土】

硬質でよくしまる。2～3cm大の黄橙色のパミスが混入する。縄文時代早期の遺物包含層で層厚30cm。

【VI層 暗黄橙色火山灰土】

桜島起源の薩摩火山灰（BP11,500年）である。非常に薄くブロック状に堆積している。層厚は厚い所で15cm程度堆積している。

【VII層 明茶褐色土】

粘質土であるが、火山灰の混入によるザラついた感触をもつ。縄文時代草創期の遺物包含層である。層厚10cm。

【VIII層 茶褐色粘質土】

いわゆるチョコ層である。粘質が強く含水率が高い。旧石器時代から縄文時代草創期の遺物包含層である。層厚10cm。

【IX層 暗茶褐色粘質土】

VIII層とほとんど同じ土質であるが、VIII層に比べてやや褐色味を帯び、シルト質化している。旧石器時代の遺物包含層である。層厚30cm。

【X層 黄橙色シルト質（シラス質）】

シラスの腐植したもので、5cm大の黄色軽石を含む。上位は旧石器時代（ナイフ形石器文化）の遺物包含層である。層厚80cm。

【XI層 白色シラス】

始良カルデラ起源のシラス（BP24,500年）である。近辺の露頭では、十数mの堆積が見られる。

各遺跡の大半が標準土層のとおりであるが、宗田掘遺跡の丘陵部分については、上位の層の堆積が薄く、基盤である岩盤までが浅いため層位的にとらえられなかった部分もある。また、諏訪脇遺跡・頭無迫田遺跡などでは上層部が削平されている範囲も見られた。詳細については各遺跡の調査成果の項で記述することとする。

跡 遺 脇 訪 諏

第Ⅳ章 諏訪協遺跡の発掘調査成果

第1節 調査の経過と層位

諏訪協遺跡の本調査は、平成12年7月に行った農開総センター事務局との現地協議の結果に基づいて調査区域と調査深度を設定し、国土座標に沿って一辺20mの調査区画（グリッド）を設け、平成12～15年度に実施した。

1 平成12年度日誌抄

- 9月 調査開始。グリッド設定の準備・杭打ち。
表土剥ぎ（ユンボ）。確認トレンチ掘り下げ。
- 10月 A-1・2区、B-2・3区、C-1～4区、
D-3・4区、F-5・6区Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ層上面
までの掘り下げ。H-5・6区 先行ト
レンチ（シラス上面までの下層確認）。柱穴
列・土坑・掘立柱建物跡、検出、写真撮影、
実測。
- 11月 A-1・2区、B-2・3区Ⅳ層掘り下げ
C-2・3区Ⅳ～Ⅴ層上面掘り下げ。土坑
検出、写真撮影、遺物取り上げ。土坑内遺
物出土状況写真撮影、実測。
- 12月 B-2・3区、C-2・3区Ⅴ層掘り下げ。
集石検出。B-2区土層断面図実測。拡張
部分表土剥ぎ（ユンボ）。
- 1月 拡張部分Ⅲ層上面まで掘り下げ。コンタ図
作成。グリッド杭打ち。B-2区集石写真
撮影。A-1・2区、B-1・2区Ⅳ層掘り
下げ。B・C-い区、C-え区、D-う～
え区、D・E-お区下層確認トレンチ掘り
下げ。幹道トレンチ北壁土層断面実測終了。
- 2月 道路部分トレンチ1西壁断面実測。土坑、
集石、実測。B-3区土坑周辺部掘り下げ。

平成13年度日誌抄

- 2月 Ⅲ層遺物取り上げ。遺構精査・半裁。

平成14年度日誌抄

- 10月 表土剥ぎ。Ⅲ層精査。遺構検出。
配置図作成。B-4・6区トレンチ掘り下
げ。Ⅲ層掘り下げ。遺物取り上げ。
- 11月 D-6区溝状遺構写真撮影。A・B-3・4

区Ⅲ層掘り下げ。

遺物取り上げ。遺構検出。溝状遺構検出写
真撮影。埋土掘り下げ。

- 12月 竪穴状遺構断面写真撮影。溝状遺構土層断
面図作成。掘立柱建物跡埋土掘り下げ。ト
レンチ掘り下げ。Ⅲ層遺物取り上げ。
- 1月 J-5・4、I-2・3、H-2Ⅱ層掘り下
げ。遺物取り上げ（Ⅱ～Ⅳ層）K・L-18
～20区Ⅳ層掘り下げ
- 2月 K-20区Ⅲ層上加世田式土器出土。
J・K-18～20区Ⅲ層掘り下げ。旧石器出
土。空中写真撮影。集石実測。J・K-
18・19区、L-19区Ⅷ層掘り下げ。G・H-
1・2区、I-2・3区Ⅱ～Ⅳ層掘り下げ。
遺物取り上げ。精査。写真撮影。礫群検出。
実測。
- 3月 M・N-7・8区、N-3・4区、N～P-
1～3区溝状遺構完掘、写真撮影。コンタ
図。
C-1・2・あ、D-1・あ、E-1・あ区Ⅲ
層遺物取り上げ。E・F-1・あ、D・E-
い・う、H・I-う・え区ⅡⅢ層掘り下げ。

平成15年度日誌抄

- 5月 D・E・F-1・あ・い区Ⅲ層掘り下げ。
遺物取り上げ。遺構実測。埋設土器写真撮
影。竪穴状遺構実測。

2 層序

諏訪協遺跡は大野原台地の北側に位置しており、その層序は、農業開発総合センター遺跡群における標準的な層序と同様である。昭和40年代に圃場整備が行われているため、現在はほぼ平坦な地形である。

古代～中世は、Ⅱ層に当たり、溝状遺構・掘立柱建物跡・竪穴状遺構・鉄滓・陶磁器類等が検出された。弥生時代もⅡ～Ⅲa層に相当し、方形土坑・壺型土器等が検出された。縄文時代晩期は、Ⅲa層に当たり、掘立柱建物跡・柱穴列・土坑・埋設土器・石器が検出された。縄文時代後期～中期は、Ⅲb層に相当し僅かではあるが土器が出土した。縄文時代早期はⅣ～Ⅴ層に当たり、集石遺構・土器・石器が検出された。

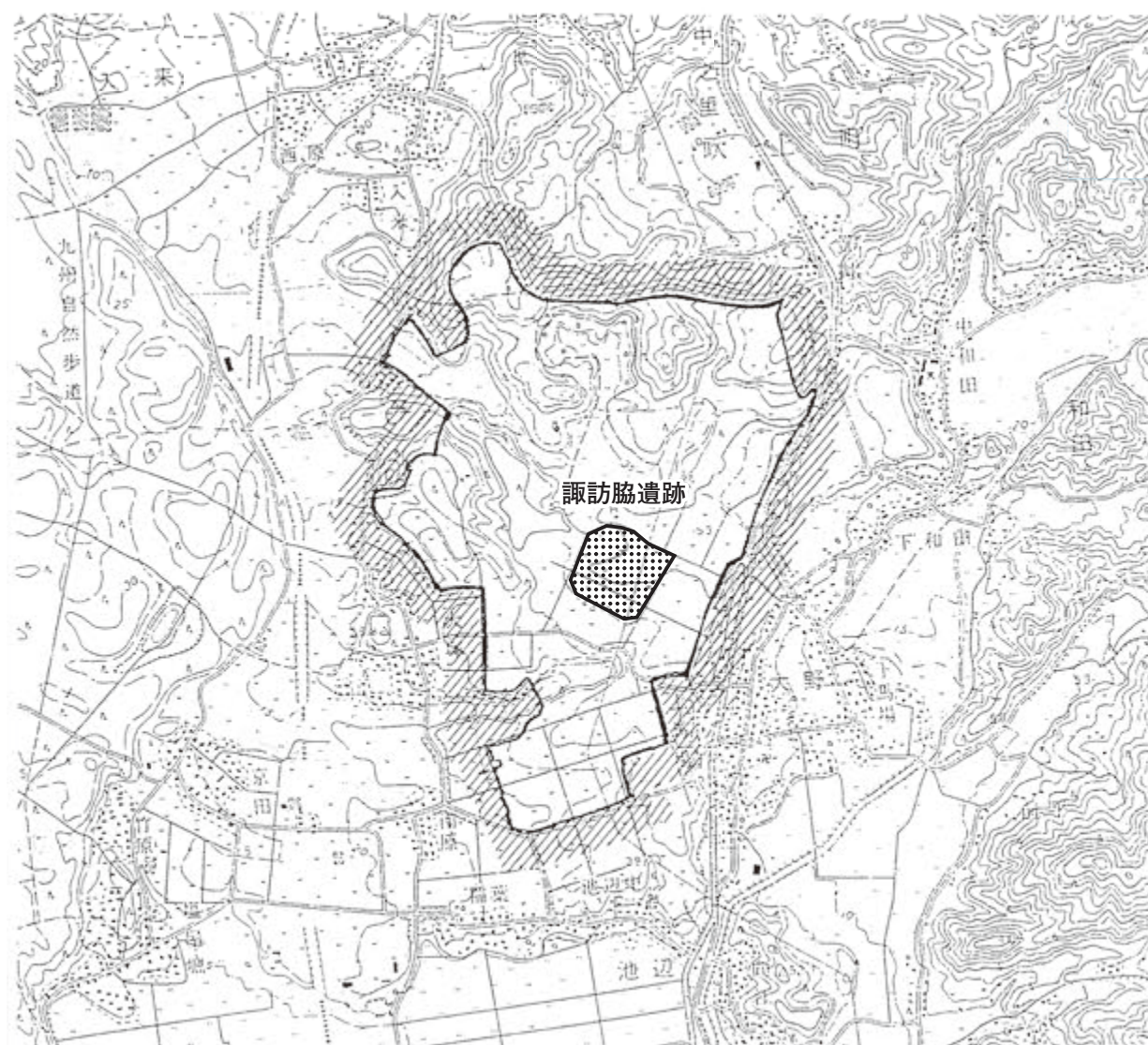
第2節 発掘調査の方法及び概要

諏訪脇遺跡は、農業開発総合センターの研究畑並びに展示施設予定地部分で、南南西方向に緩やかに傾斜した台地の中程に立地し、台地先端部の宗門堀遺跡と隣接している。また、北側は諏訪牟田遺跡、東側は大門口遺跡、西側は馬塚松遺跡とも、それぞれ隣接している。

調査前の現状は、畑地として利用されていた。調査のためのグリッドは20m×20mで設定し、調査面積は約48,300㎡である。調査方法は表土を重機で掘り下げ、その後、人力での掘削を行った。縄文時代早期・後期・晩期、弥生時代、古代、中世の遺構・遺物が検出・出土した。

表土剥ぎを行ったところ、一部分はV～X層が露出していた。Ⅲ層にもトレンチャーや芋穴が入ったところがあるなど畑作利用でかなり錯乱や削平を受けていた。しかし、Ⅱ層から下位の層が残っている場所を中心に縄文時代早期から中世のものと思われる遺物が出土し、縄文時代晩期以降のピットや溝状遺構を多く検出した。

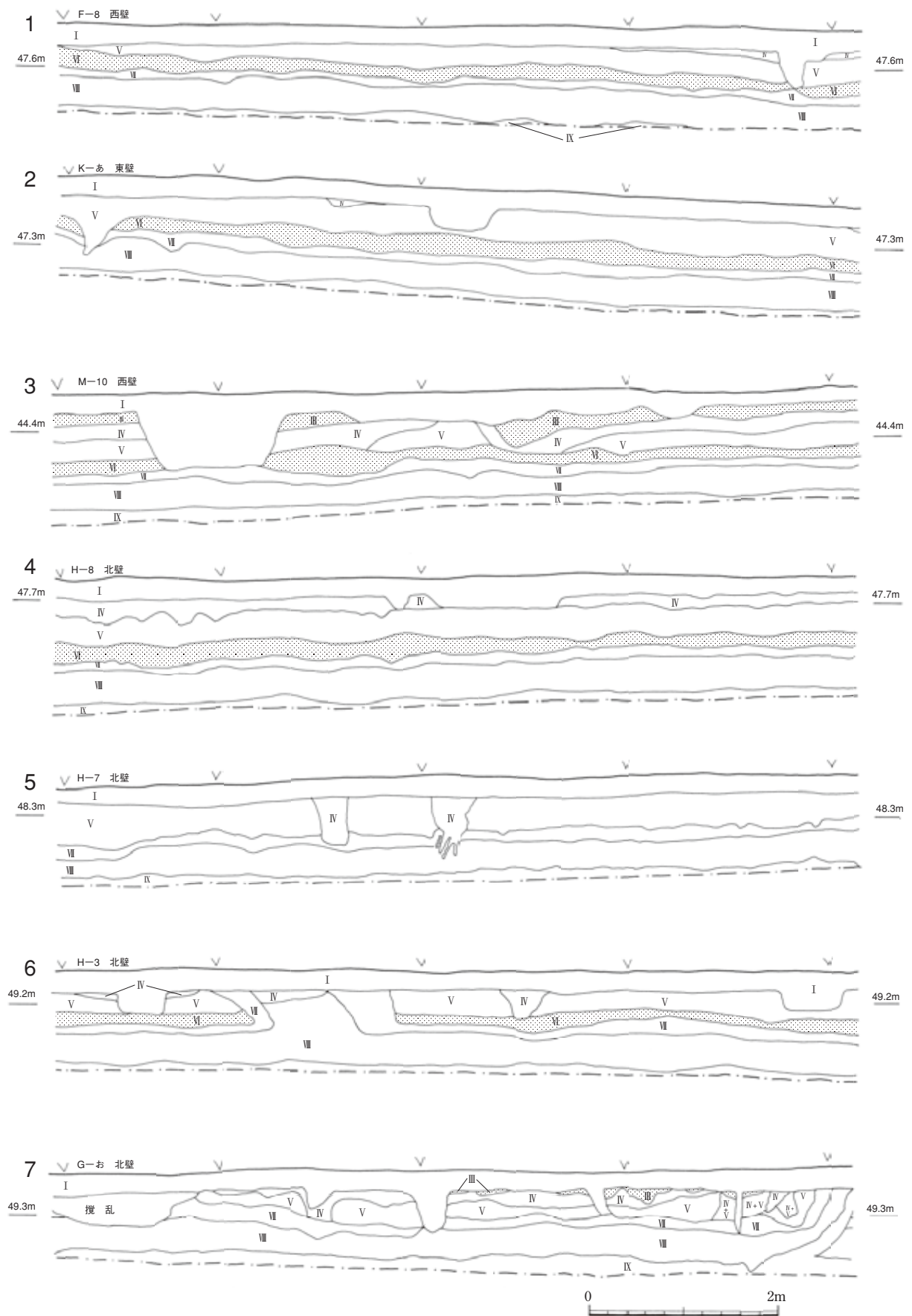
縄文時代早期は、押型文土器が数点出土した。縄文時代晩期は、遺構・遺物ともに数多く検出・出土した。弥生時代前期は、壺型土器が若干出土した。古代～中世は、神社前で竪穴状遺構1基と溝状遺構が切り合う形で検出され、埋土内から鉄滓が出土した。



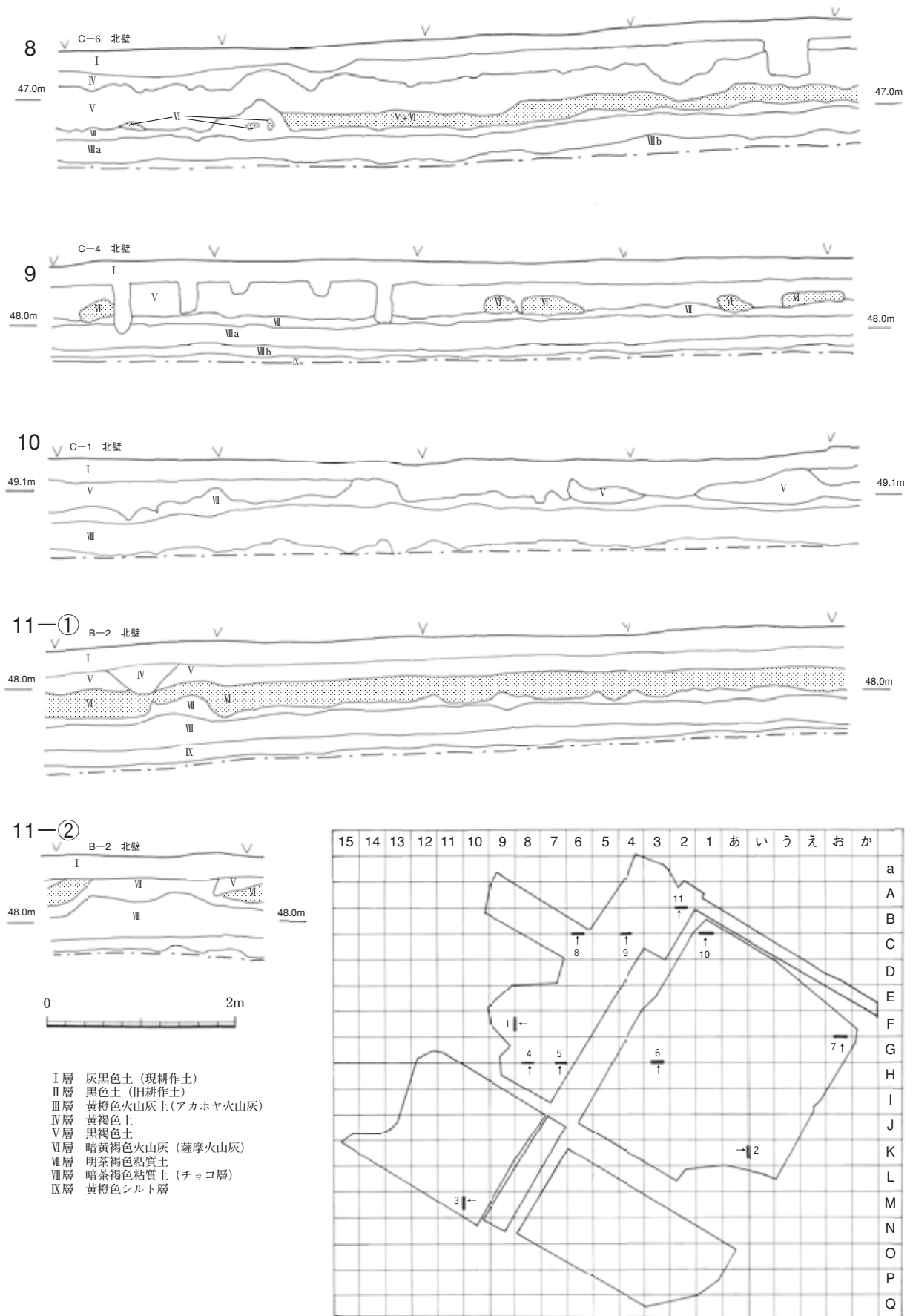
第1図 諏訪脇遺跡位置図（1／25,000）



第2図 諏訪脇遺跡地形図（1グリッド：20m）



第3図 土層断面図1



第4図 土層断面図2

第3節 縄文時代の調査

縄文時代は、早期及び晩期の遺物出土量が際だっている。早期では集石遺構4基が検出され、土器が多く出土している。晩期では、土坑、埋設土器、掘立柱建物跡、柱穴列等の遺構が多く検出され、土器・石器も多く出土している。土器は上加世田式土器、入佐式土器が主体である。中後期の土器も出土しているが、量は少なく遺構も検出されなかった。

1 縄文時代早期の調査

縄文時代早期では、集石遺構が4基検出されたのみで遺構は少なかった。

土器はⅠ類からⅦ類まで分類されるものが出土している。しかしながら大半はⅡ類土器である。石器は、石鏃・異形石器・打製石斧・礫器・磨石・敲石・石皿等が出土した。

(1) 遺構 (第5～7図)

遺構は、集石遺構が4基ともA・B-2区において検出された。

① 1号集石遺構 (第6図)

A-2区において検出されたもので、15センチを超える礫と10cm以下の角礫数十個で構成されている。礫の密集具合は低い。掘り込みは確認されていない。図化できなかったが、集石内及び周辺より、押型文土器片やチャート、黒曜石の剥片が数点出土している。

② 2号集石遺構 (第7図)

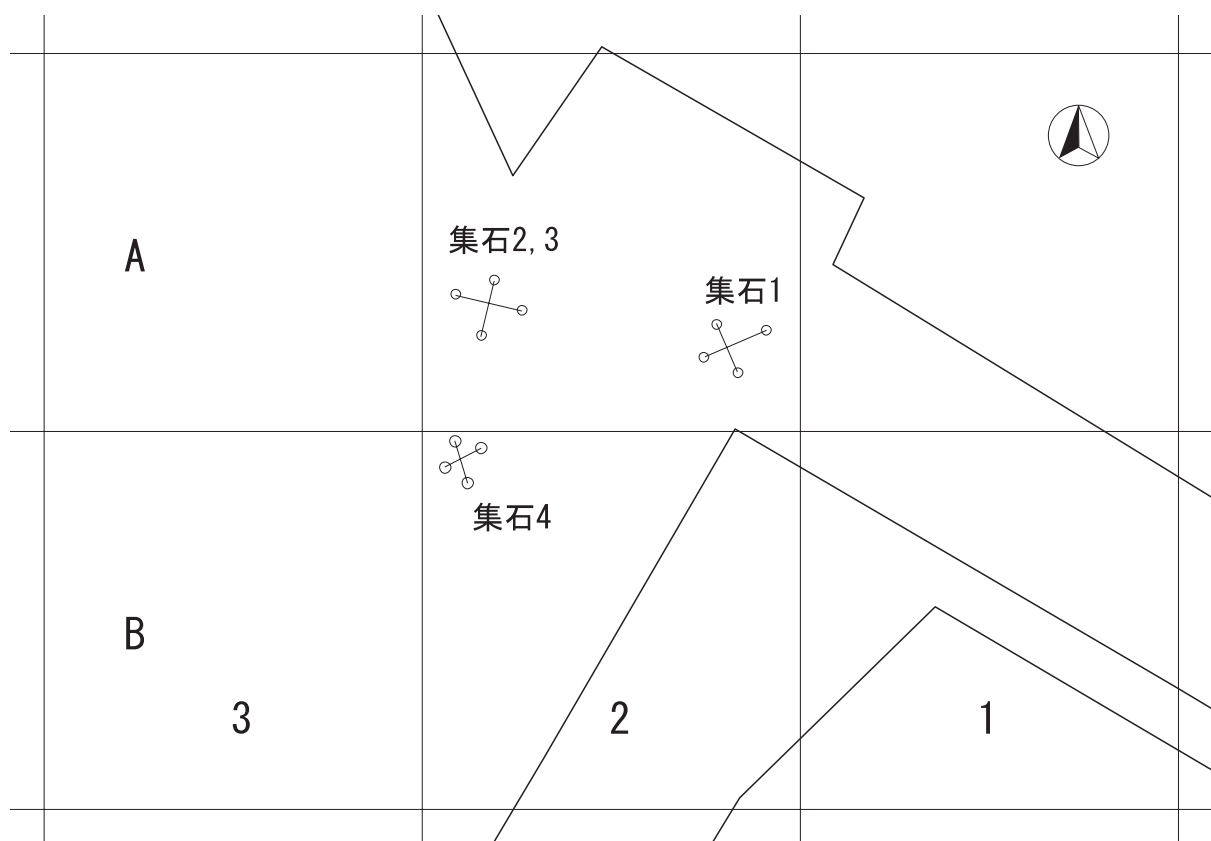
A-2区で検出された。礫数約200個、平均重量約190gである。約50cmの台石状の礫が1個と10cm以下の礫から構成される。4基中最も礫の密度が高い。掘り込みは確認されていない。

③ 3号集石遺構 (第7図)

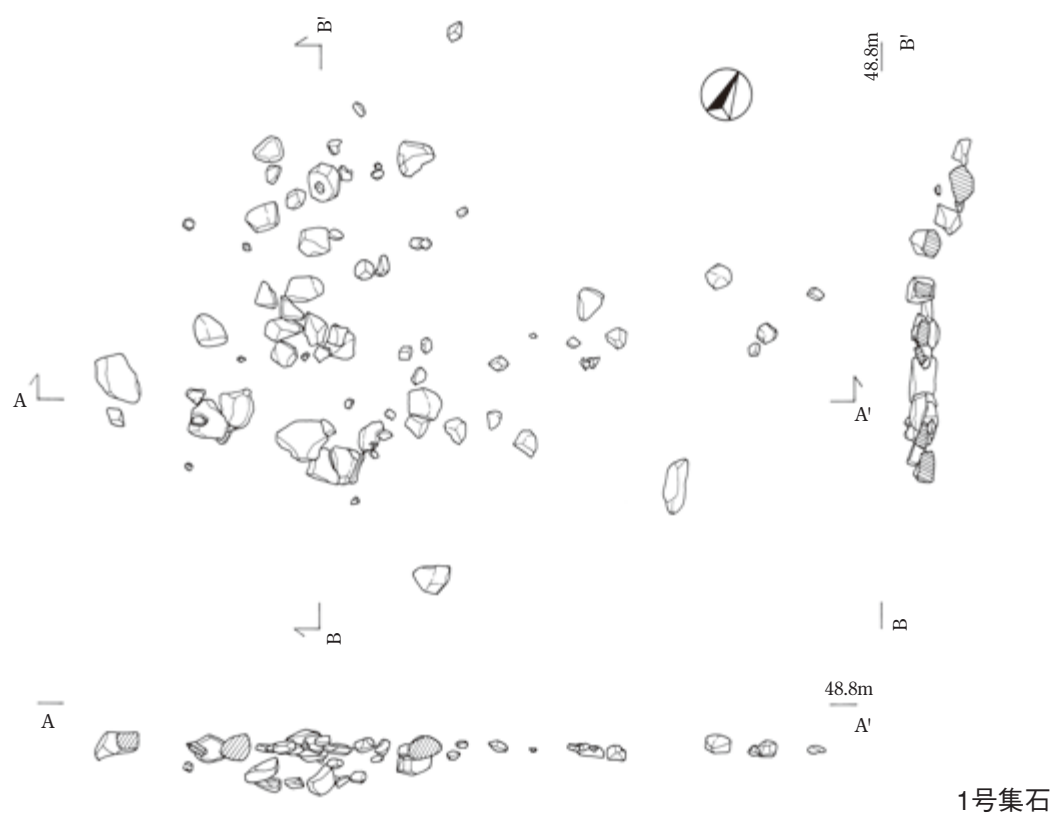
A-2区で検出された。礫数約33個、平均重量約89gである。残存する礫も少量でまとまりに欠ける。掘り込みは確認されていない。

④ 4号集石遺構 (第6図)

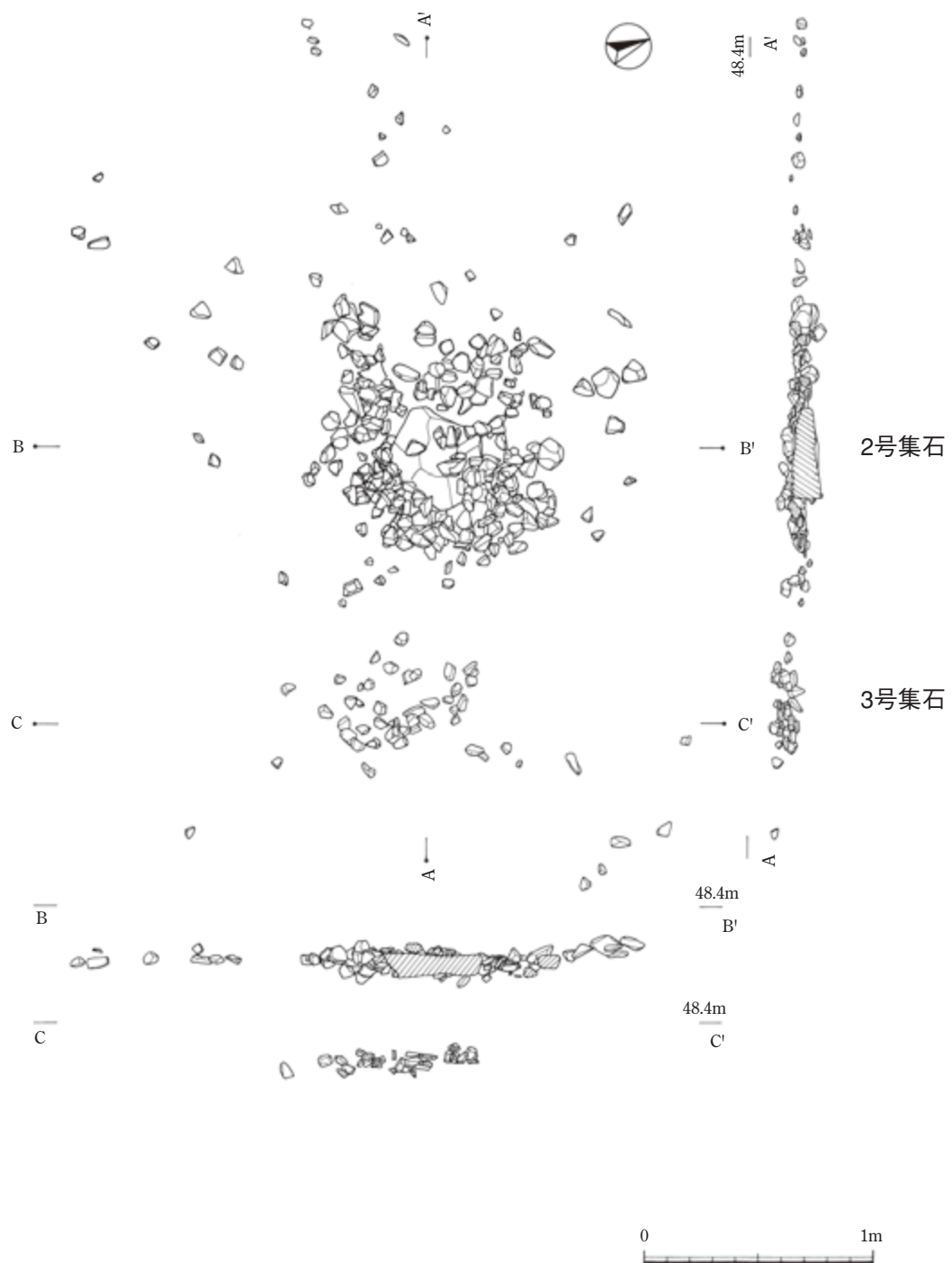
B-2区で検出された。礫数35個、平均重量185g。掘り込みは見られないが範囲全体に炭が点在する。礫は少量だが密集している。



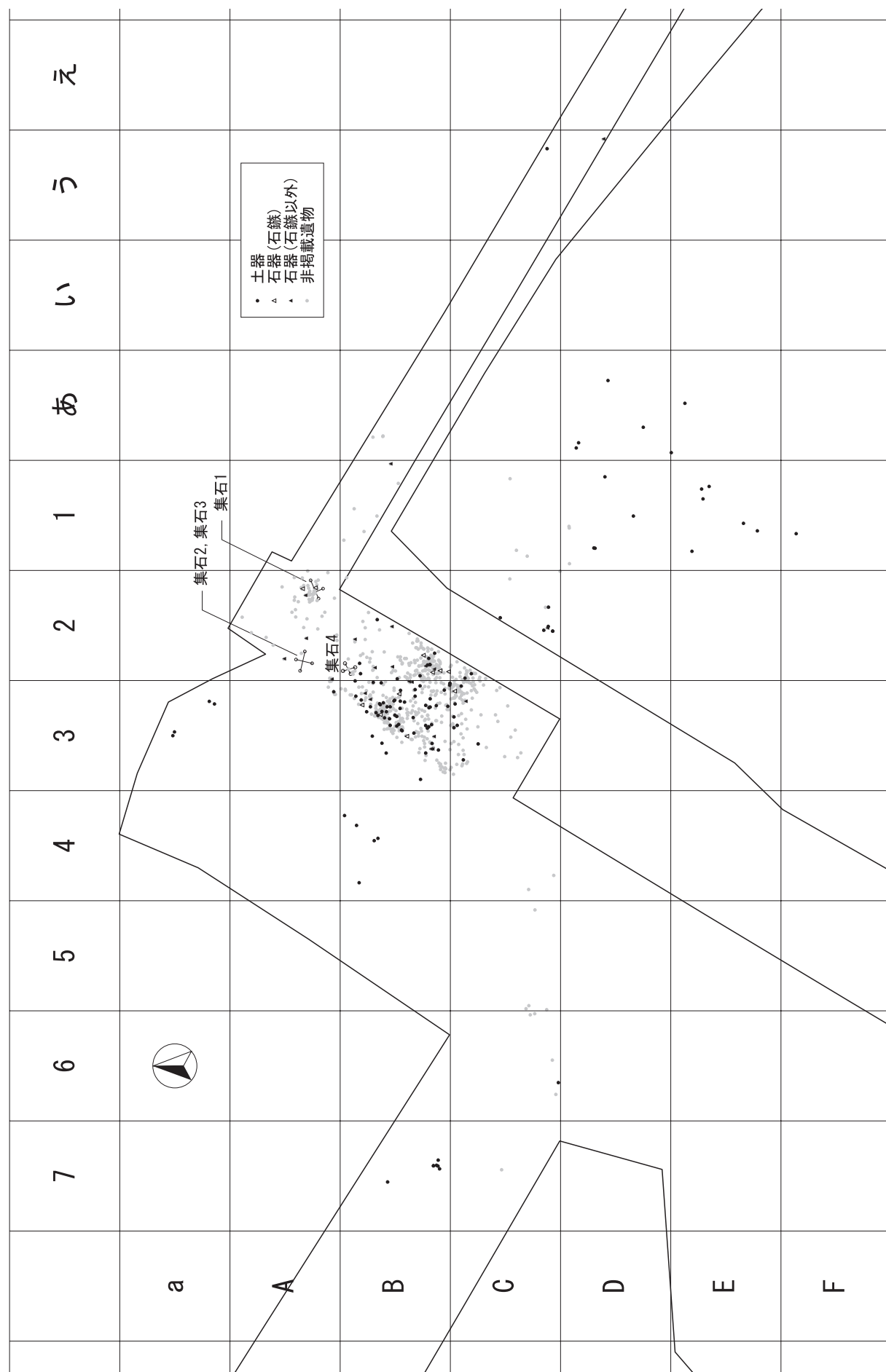
第5図 縄文時代早期遺構配置図 (1 グリッド: 20m)



第 6 図 縄文時代早期 集石 1



第7図 縄文時代早期 集石2



第8図 縄文時代早期遺物出土状況図 (1グリッド: 20m)

(2) 遺物

①土器 (第9～12図)

土器はⅠ類～Ⅶ類に分類される。

Ⅰ類土器 (第9図)

1～5の5点である。1は、口縁部が内湾し、口縁部内面が肥厚している深鉢型土器である。胴部には短い綾杉状の貝殻条痕が施される。内面調整は丁寧なナデ整形である。2～5は胴部である。内面調整はミガキである。2～4は、貝殻条痕文が見られる。5は斜位の貝殻条痕が施される。

Ⅱ類土器 (第9～11図)

Ⅱ類土器は器面に山形・楕円の押型文を施文するものである。

6～64は山形の押型文土器である。6～18は口縁部である。6～17の口縁部は外反もしくは直行するものである。18はふくらんだ胴部から口縁部にかけずばまり外反するものである。19～45は胴部である。縦方向の施文が多い。46は底部である。47～64は山形の押型文を施文した後にナデで調整したものである。47～51は口縁部である。47～50は口縁部内面に山形の施文を施してある。口縁部は緩やかに外反するものである。51は口縁部内面をヘラケズリによる調整がなされている。52～64は胴部である。65は外面はナデで調整され、口縁部内面に山形の押型文が施されている。66は外面はナデで調整され、口唇部に山形の押型文が施文されている。

67～110は楕円の押型文土器である。67～75は口縁部である。67～68は緩やかに外反する。69～75は短めの口縁部が外反するものである。76～94は胴部である。95～110は楕円の押型文を施文した後にナデで調整したものである。95～98は口縁部である。楕円の押型文が外面、口唇部、口縁部の内面に施されている。95は短めの口縁部が急に外反している。96は長めの口縁部が外反している。97は短めの口縁部が緩やかに外反している。98の口縁部は直行しており、107と同一個体と思われる。99～110は胴部である。内面はヘラケズリかナデで調整されている。111は山形の押型文と楕円の押型文が施されている。

Ⅲ類土器 (第12図)

Ⅲ類土器は撚糸文が施されるものである。

112, 113は胴部である。「く」の字状に屈曲している。縦位の撚り糸による施文が見られる。113は綾杉状の撚り糸による文様が施されている。114は斜め方向の撚り糸による文様が施されている。器壁は薄く内面にも撚糸文が見られる。115, 116は撚糸文が斜位に施されている。

Ⅳ類土器 (第12図)

Ⅳ類土器は2点だけの出土で縄文が施されるものである。117, 118の2点は同一個体と考えられるものである。

Ⅴ類土器 (第12図)

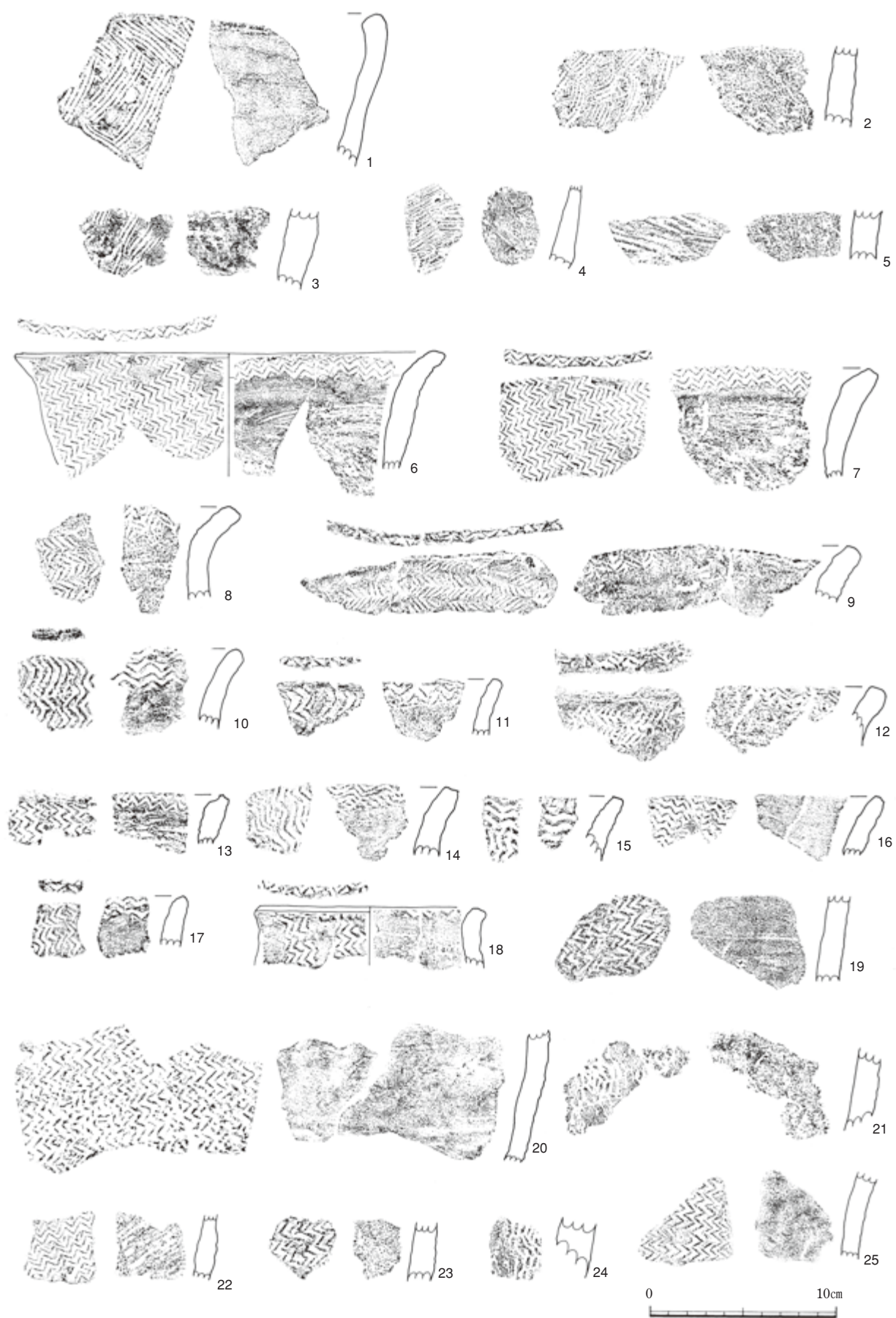
Ⅴ類土器は2点だけの出土である。119は2本の沈線が施され、沈線の上に棒状の施文具による刺突文が施されている。120は「く」の字状に屈曲した器形をもつ。貼り付け突帯の下部に斜めの沈線が施されている。

Ⅵ類土器 (第12図)

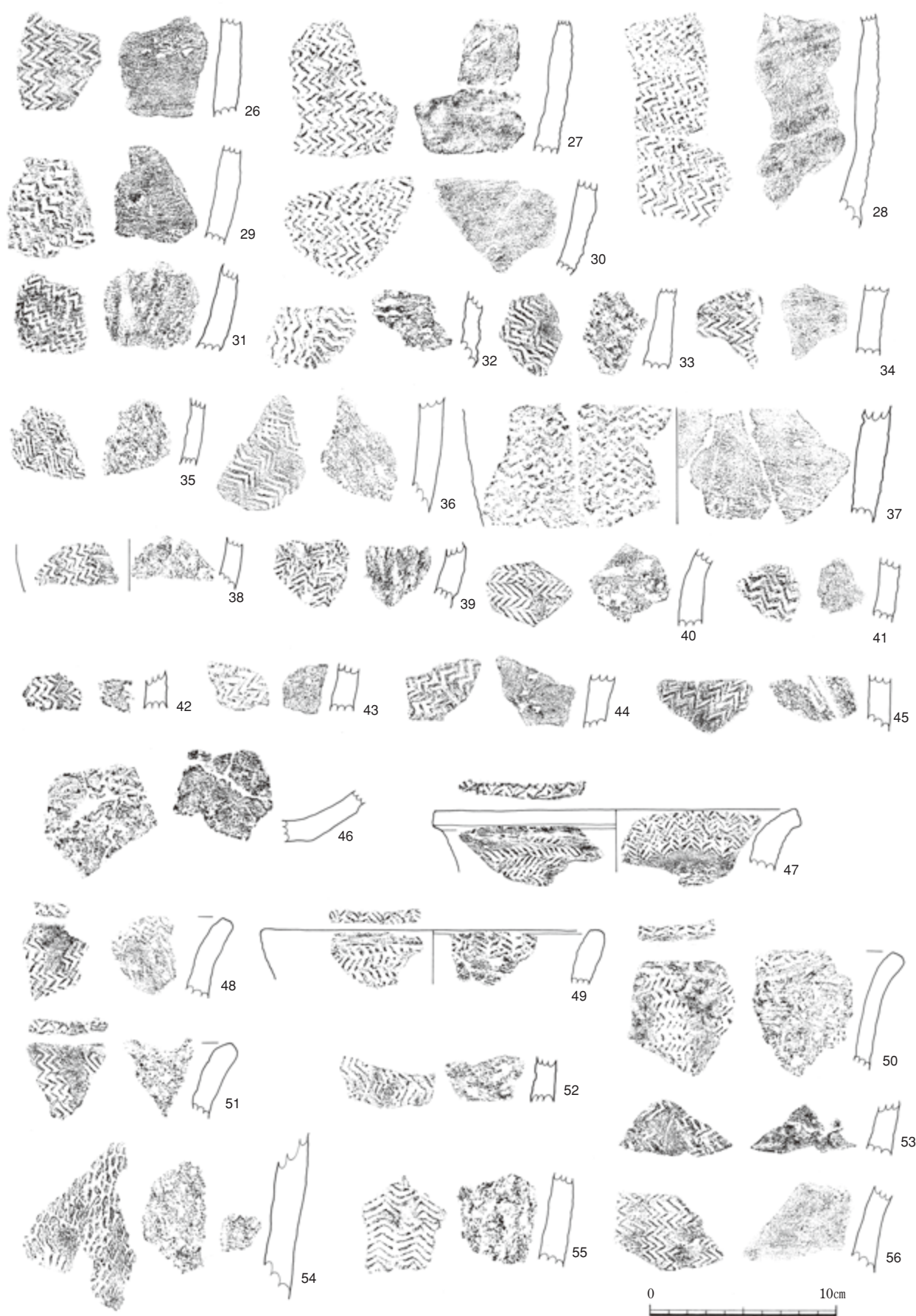
Ⅵ類土器は1点だけの出土である。121は胴部である。結節縄文の原体の結節部分を用い縦方向に施文したものである。

Ⅶ類土器 (第12図)

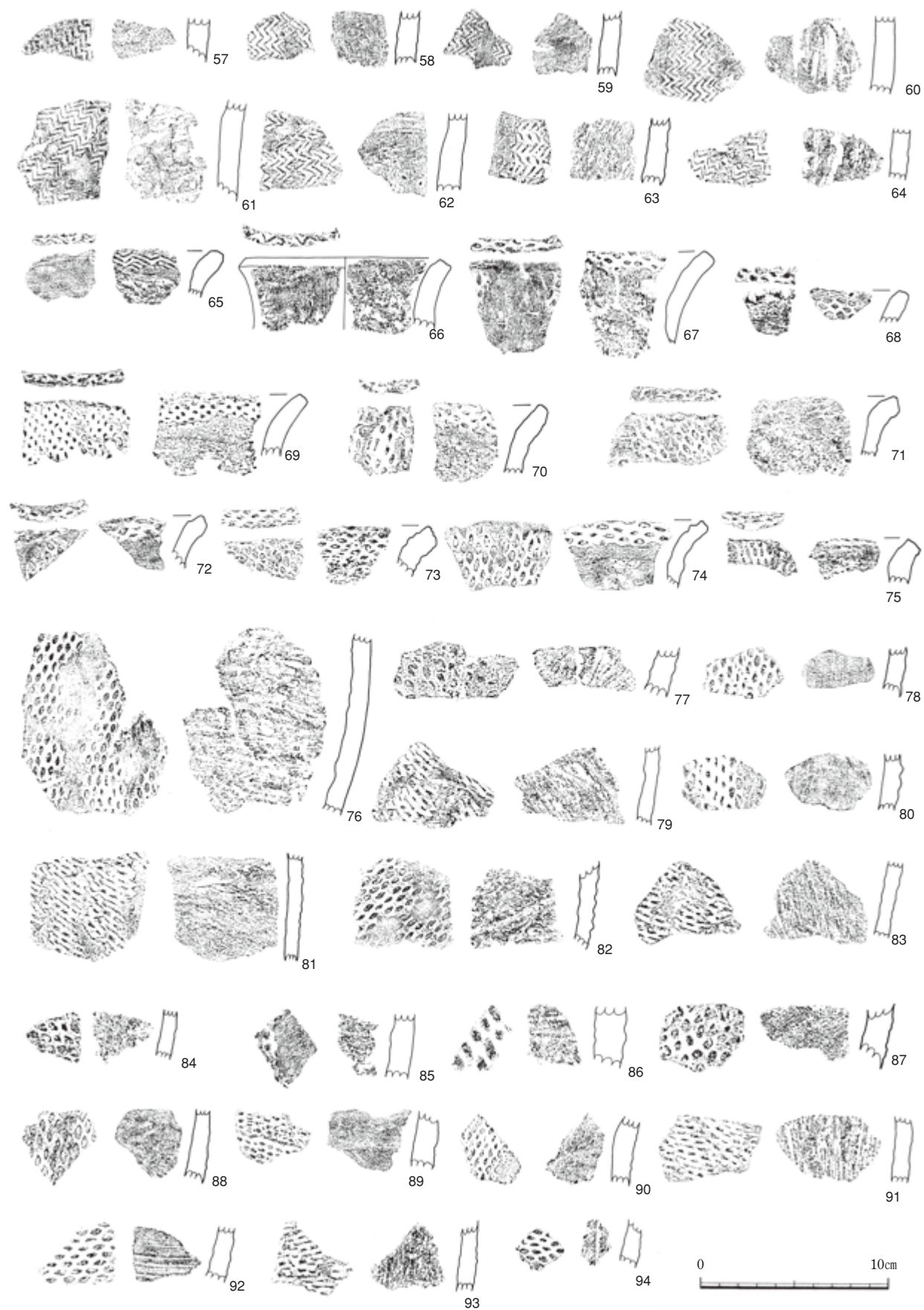
早期の土器の特徴を持つものの、細分化が不可能なものを一括してⅦ類として扱った。122は円筒で口縁は直行する。外面調整は貝殻条痕文が施されている。口唇部は内側に傾斜する。123は底部である。底面が磨かれているものである。



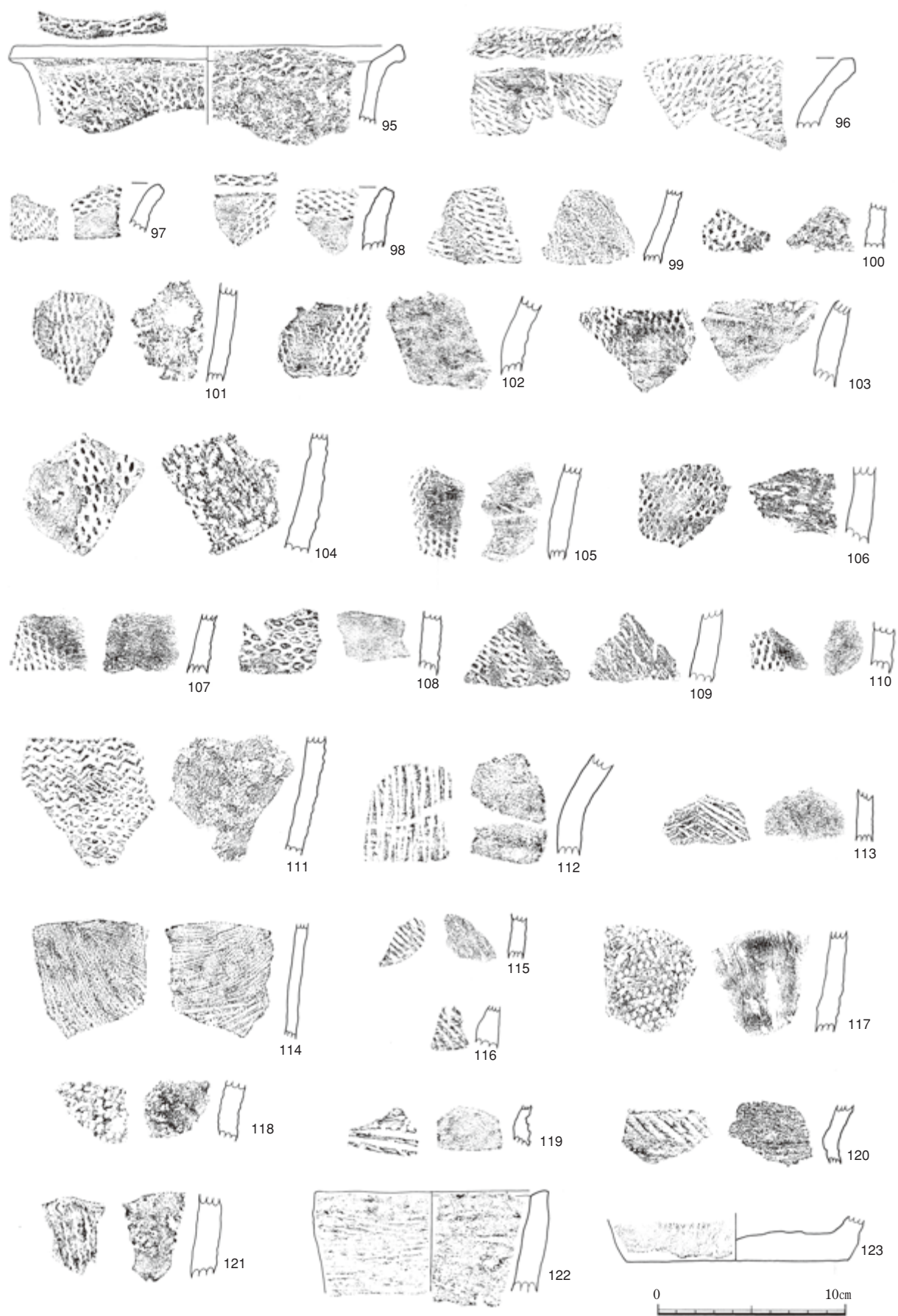
第9図 I・II類土器(1)



第10図 II類土器（2）



第11図 II類土器（3）



第12図 II類土器（4）～Ⅶ類土器

縄文時代早期土器観察表 1

挿図 番号	番号	出土区	層位	部位	色 調		胎 土		焼成	外 面	内 面	類	備 考
					内	外	石英	長石					
第 9 図	1	C-1	Ⅲ	口縁部	橙	褐	○	○		良	綾杉状貝殻条痕文	ナデ	I
	2	D-1	Ⅲ	胴部	にぶい黄褐	明褐	○	○		良	貝殻条痕文	ナデ	I
	3	C-2	Ⅲ	胴部	黒褐	にぶい赤褐	○	○		良	条痕	ナデ	I
	4	B-3	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	明褐	○	○		良	羽状文	ナデ	I
	5	—	—	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○		良	貝殻条痕文	ケズリ	I
	6	B-3	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○		良	山形押型文	山形押型文,ヘラケズリ	Ⅱ
	7	B-2	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	褐灰	○	○		良	山形押型文	ヘラケズリ	Ⅱ
	8	C-2	V	口縁部	にぶい褐	にぶい赤褐	○	○		良	山形押型文	山形押型文,ナデ	Ⅱ
	9	B-3	V	口縁部	にぶい黄褐	黒褐	○	○		良	山形押型文	山形押型文,ナデ	Ⅱ
	10	a-3	Ⅲ	口縁部	暗灰黄	黄褐	○	○		良	山形押型文	山形押型文,ナデ	Ⅱ
	11	B-5	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	○	○		良	山形押型文	山形押型文,ナデ	Ⅱ
	12	B-3	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	灰黄褐	○	○		良	山形押型文	山形押型文,ナデ	Ⅱ
	13	B-3	Ⅲ	口縁部	黒褐	橙	○	○		良	山形押型文	山形押型文,ナデ	Ⅱ
	14	a-3	Ⅲ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○		良	山形押型文,ナデ	山形押型文,ナデ	Ⅱ
	15	D-1	Ⅲ	口縁部	橙	橙	○	○		良	山形押型文	山形押型文,ナデ	Ⅱ
	16	B-3	Ⅲ	口縁部	明黄褐	浅黄	○	○		良	山形押型文	ナデ	Ⅱ
	17	B-3	Ⅳ	口縁部	灰黄褐	にぶい黄褐	○	○		良	山形押型文	山形押型文,ナデ	Ⅱ
	18	B-3	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○		良	山形押型文	ナデ	Ⅱ
	19	B-3	Ⅳ	胴部	灰褐	にぶい褐	○	○		良	山形押型文	ナデ	Ⅱ
	20	a-3	V	胴部	にぶい黄褐	灰黄褐	○	○		良	山形押型文	ナデ	Ⅱ
	21	C-2	V	胴部	にぶい黄褐	褐	○	○		良	山形押型文	ヘラケズリ	Ⅱ
	22	B-3	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○		良	山形押型文	ヘラケズリ	Ⅱ
	23	A-3	Ⅲ	胴部	橙	にぶい橙	○	○		良	山形押型文	ナデ	Ⅱ
	24	E-あ	Ⅲ	胴部	にぶい褐	橙	○	○		良	山形押型文	ヘラケズリ	Ⅱ
	25	C-3	V	胴部	にぶい黄褐	明褐	○	○		良	山形押型文	ナデ	Ⅱ
第 10 図	26	B-3	Ⅳ	胴部	にぶい黄	橙	○	○		良	山形押型文	ナデ	Ⅱ
	27	a-3	Ⅱ	胴部	明黄褐	にぶい黄橙	○	○		良	山形押型文	ナデ	Ⅱ
	28	—	Ⅲ	胴部	灰黄褐	橙	○	○		良	山形押型文	ナデ	Ⅱ
	29	B-3	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	明褐	○	○		良	山形押型文	ナデ	Ⅱ
	30	—	—	胴部	にぶい黄橙	橙	○	○		良	山形押型文	ナデ	Ⅱ
	31	C-2	V	胴部	にぶい黄褐	にぶい赤褐	○	○		良	山形押型文	ヘラケズリ	Ⅱ
	32	D-1	Ⅲ	胴部	橙	橙	○	○		良	山形押型文	ヘラケズリ	Ⅱ
	33	B-3	Ⅳ	胴部	にぶい橙	橙	○	○		良	山形押型文	ヘラケズリ	Ⅱ
	34	C-2	V	胴部	にぶい褐	にぶい褐	○	○		良	山形押型文	ナデ	Ⅱ
	35	E-1	Ⅲ	胴部	暗オリーブ褐	にぶい赤褐	○	○		良	山形押型文	ヘラケズリ	Ⅱ
	36	B-3	V	胴部	にぶい黄褐	明黄褐	○	○		良	山形押型文	ヘラケズリ	Ⅱ
	37	B-3	Ⅳ	胴部	にぶい橙	橙	○	○		良	山形押型文	ナデ	Ⅱ
	38	B-3	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	橙	○	○		良	山形押型文	ヘラケズリ	Ⅱ
	39	B-4	Ⅲ	胴部	にぶい黄褐	橙	○	○		良	山形押型文	ヘラケズリ	Ⅱ
	40	B-3	Ⅳ	胴部	明赤褐	明褐	○	○		良	山形押型文	ヘラケズリ	Ⅱ
	41	B-4	Ⅲ	胴部	にぶい黄	にぶい黄	○	○		良	山形押型文	ナデ	Ⅱ
	42	B-3	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	橙	○	○		良	山形押型文	ヘラケズリ	Ⅱ
	43	B-3	Ⅳ	胴部	にぶい褐	橙	○	○		良	山形押型文	ナデ	Ⅱ
	44	—	—	胴部	にぶい黄橙	灰黄褐	○	○		良	山形押型文	ナデ	Ⅱ
	45	B-3	Ⅳ	胴部	にぶい橙	橙	○	○		良	山形押型文	ナデ	Ⅱ
	46	B-3	Ⅳ	底部	褐	明黄褐	○	○		良	山形押型文	ナデ	Ⅱ
	47	B-3	Ⅳ	口縁部	橙	灰黄褐	○	○		良	山形押型文,ナデ	ナデ	Ⅱ 口唇部(山形押型文)
	48	—	Ⅳ	口縁部	浅黄橙	橙	○	○		良	山形押型文,ナデ	山形押型文,ヘラケズリ	Ⅱ 口唇部(山形押型文)
	49	B-3	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	灰褐	○	○		良	山形押型文,ナデ	山形押型文,ナデ	Ⅱ 口唇部(山形押型文)
	50	B-3	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	灰黄褐	○	○		良	山形押型文,ナデ	ヘラケズリ	Ⅱ 口唇部(山形押型文)
	51	B-3	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	にぶい黄褐	○	○		良	山形押型文,ナデ	ヘラケズリ	Ⅱ 口唇部(山形押型文)
第 11 図	52	B-3	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	橙	○	○		良	山形押型文,ナデ	ヘラケズリ	Ⅱ
	53	B-3	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	褐灰	○	○		良	山形押型文,ナデ	ナデ	Ⅱ
	54	D-あ	Ⅲ	胴部	オリーブ褐	橙	○	○		良	山形押型文,ナデ	ヘラケズリ	Ⅱ
	55	B-3	Ⅳ	胴部	にぶい橙	橙	○	○		良	山形押型文,ナデ	ヘラケズリ	Ⅱ
	56	B-3	Ⅳ	胴部	橙	にぶい橙	○	○		良	山形押型文,ナデ	ナデ	Ⅱ
	57	B-3	Ⅳ	胴部	浅黄橙	橙	○	○		良	山形押型文,ナデ	ナデ	Ⅱ
	58	B-3	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	橙	○	○		良	山形押型文,ナデ	ナデ	Ⅱ
	59	B-3	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	にぶい橙	○	○		良	山形押型文,ナデ	ナデ	Ⅱ
	60	B-3	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	橙	○	○		良	山形押型文,ナデ	ヘラケズリ	Ⅱ
	61	B-3	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○		良	山形押型文,ナデ	ヘラケズリ	Ⅱ
	62	B-3	Ⅳ	胴部	にぶい橙	橙	○	○		良	山形押型文,ナデ	ナデ	Ⅱ
	63	B-3	Ⅳ	胴部	灰黄褐	橙	○	○		良	山形押型文,ナデ	ナデ	Ⅱ
	64	B-3	Ⅳ	胴部	黒褐	橙	○	○		良	山形押型文,ナデ	ヘラケズリ,ミガキ	Ⅱ
	65	C-3	Ⅳ	口縁部	灰黄褐	橙	○	○		良	ナデ	山形押型文	Ⅱ 口唇部(山形押型文)
	66	B-3	V	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○		良	無文	ヘラケズリ	Ⅱ 口唇部(山形押型文)
	67	B-2	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	にぶい黄褐	○	○		良	楕円押型文	楕円押型文,ナデ	Ⅱ 口唇部(押型文)
	68	B-2	Ⅳ	口縁部	灰褐	灰黄褐	○	○		良	楕円押型文	ナデ	Ⅱ 口唇部(押型文)
	69	B-3	V	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○		良	楕円押型文	楕円押型文,ナデ	Ⅱ 口唇部(押型文)

縄文時代早期土器観察表 2

挿図 番号	番号	出土区	層位	部位	色 調		胎 土				焼成	外 面	内 面	類	備 考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他					
第 11 図	70	B-2	V	口縁部	橙	にぶい黄橙	○	○			良	楕円押型文	楕円押型文,ナデ	Ⅱ	口唇部(押型文)
	71	B-2	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			良	楕円押型文	ナデ	Ⅱ	口唇部(押型文)
	72	B-3	Ⅳ	口縁部	にぶい赤褐	にぶい褐	○	○			良	楕円押型文	楕円押型文,ナデ	Ⅱ	口唇部(押型文)
	73	B-4	Ⅲ	口縁部	褐	赤褐	○	○		金雲母	良	楕円押型文	楕円押型文,ナデ	Ⅱ	口唇部(押型文)
	74	C-3	V	口縁部	灰黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	楕円押型文	楕円押型文,ナデ	Ⅱ	
	75	B-3	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○		金雲母	良	楕円押型文	楕円押型文,ナデ	Ⅱ	口唇部(押型文)
	76	D-1	V	胴部	にぶい褐	褐	○	○			良	楕円押型文	ヘラケズリ	Ⅱ	
	77	C-6	Ⅳ	胴部	灰黄褐	橙	○	○			良	楕円押型文	ナデ	Ⅱ	
	78	B-3	V	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			良	楕円押型文	ナデ	Ⅱ	
	79	B-3	Ⅳ	胴部	灰黄褐	橙	○	○			良	楕円押型文	ヘラケズリ	Ⅱ	
	80	B-3	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			良	楕円押型文	ナデ	Ⅱ	
	81	B-3	Ⅲ	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			良	楕円押型文	ヘラケズリ	Ⅱ	
	82	D-1	V	胴部	橙	にぶい褐	○	○			良	楕円押型文	ヘラケズリ	Ⅱ	
	83	B-3	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○			良	楕円押型文	ヘラケズリ	Ⅱ	
	84	F-1	Ⅲ	胴部	浅黄	浅黄	○	○			良	楕円押型文	ナデ	Ⅱ	
	85	—	—	胴部	にぶい赤褐	橙	○	○			良	楕円押型文	ナデ	Ⅱ	
	86	B-4	Ⅲ	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	楕円押型文	ナデ	Ⅱ	
	87	—	—	胴部	褐灰	明黄褐	○	○			良	楕円押型文	ナデ	Ⅱ	
	88	B-3	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			良	楕円押型文	ナデ	Ⅱ	
	89	—	—	胴部	灰黄褐	にぶい褐	○	○			良	楕円押型文	ナデ	Ⅱ	
	90	B-7	Ⅳ	胴部	灰オリーブ	にぶい黄	○	○			良	楕円押型文	ナデ	Ⅱ	
	91	—	—	胴部	にぶい黄橙	橙	○	○			良	楕円押型文	ヘラケズリ	Ⅱ	
	92	B-3	Ⅲ	胴部	浅黄	にぶい黄	○	○			良	楕円押型文	ナデ	Ⅱ	
	93	C-2	Ⅲ	胴部	にぶい黄	橙	○	○			良	楕円押型文	ナデ	Ⅱ	
	94	B-3	Ⅳ	胴部	にぶい褐	灰褐	○	○			良	楕円押型文	ナデ	Ⅱ	
第 12 図	95	B-2	Ⅳ	口縁部	橙	にぶい黄橙	○	○			良	楕円押型文,ナデ	楕円押型文,ヘラケズリ後ナデ	Ⅱ	口唇部(押型文)
	96	B-3	Ⅲ・Ⅳ	口縁部	橙	褐灰	○	○			良	楕円押型文,ナデ	楕円押型文,ナデ	Ⅱ	
	97	C-3	V	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	○	○			良	楕円押型文,ナデ	楕円押型文,ナデ	Ⅱ	
	98	B-7	Ⅳ	口縁部	にぶい黄	にぶい黄	○	○			良	楕円押型文,ナデ	楕円押型文,ナデ	Ⅱ	口唇部(押型文)
	99	B-4	Ⅲ	胴部	黒褐	にぶい橙	○	○			良	楕円押型文,ナデ	ヘラケズリ	Ⅱ	
	100	B-3	Ⅳ	胴部	灰黄褐	にぶい黄橙	○	○			良	楕円押型文,ナデ	ナデ	Ⅱ	
	101	C-2	V	胴部	黒褐	暗褐	○	○		金雲母	良	楕円押型文,ナデ	ヘラケズリ	Ⅱ	
	102	B-7	Ⅳ	胴部	灰オリーブ	明黄褐	○	○			良	楕円押型文,ナデ	ナデ	Ⅱ	
	103	B-7	Ⅳ	胴部	黄灰	浅黄	○	○			良	楕円押型文,ナデ	ナデ	Ⅱ	
	104	D-1	Ⅲ	胴部	褐	明赤褐	○	○			良	楕円押型文,ナデ	ヘラケズリ	Ⅱ	
	105	B-7	Ⅳ	胴部	灰	暗灰黄	○	○			良	楕円押型文,ナデ	ナデ	Ⅱ	
	106	B-3	Ⅳ	胴部	にぶい褐	橙	○	○			良	楕円押型文,ナデ	ヘラケズリ	Ⅱ	
	107	B-7	Ⅳ	胴部	灰黄	灰黄	○	○			良	楕円押型文,ナデ	ナデ	Ⅱ	98と同一個体
	108	C-3	V	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			良	楕円押型文,ナデ	ナデ	Ⅱ	
	109	A-3	V	胴部	にぶい褐	橙	○	○			良	楕円押型文,ナデ	ヘラケズリ	Ⅱ	
	110	B-7	Ⅳ	胴部	黄灰	黄灰	○	○			良	楕円押型文,ナデ	ナデ	Ⅱ	
	111	C-2	Ⅲ	胴部	黄灰	黄褐	○	○			良	楕円押型文,山形押型文	ナデ	Ⅱ	
	112	C-3	Ⅳ	胴部	黄褐	にぶい黄	○	○			良	捺糸文	ナデ	Ⅲ	
	113	C-3	Ⅳ	胴部	黄褐	暗灰黄	○	○			良	捺糸文	ナデ	Ⅲ	
	114	E-あ	Ⅲ	胴部	黄橙	橙	○	○			良	捺糸文	条痕,ナデ	Ⅲ	
	115	B-3	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○			良	捺糸文	ナデ	Ⅲ	
	116	B-3	Ⅳ	胴部	褐灰	灰黄褐	○	○			良	捺糸文	ナデ	Ⅲ	
	117	C-2	V	胴部	黒褐	橙	○	○			良	捺糸文	ヘラケズリ	Ⅳ	
	118	D-2	Ⅲ	胴部	暗オリーブ褐	橙	○	○			良	捺糸文	ヘラケズリ	Ⅳ	縄目模様
	119	N-2	Ⅲ上	胴部	明黄褐	明黄褐	○	○			良	沈線,刺突文	ナデ	V	
	120	E-あ	Ⅲ	胴部	明黄褐	明黄褐	○	○			良	沈線	ナデ	V	
	121	C-2	Ⅲ	胴部	浅黄	浅黄橙	○	○			良	捺糸文	ナデ	Ⅵ	
	122	C-2	Ⅳ	口縁部	橙	明赤褐	○	○			良	条痕	ナデ	Ⅶ	
	123	—	—	底部	赤褐	赤褐	○	○			良	ミガキ	ナデ	Ⅶ	

縄文時代中・後期土器観察表

挿図 番号	番号	出土区	層位	部位	色 調		胎 土				焼成	外 面	内 面	類	備 考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他					
第 19 図	161	N-3	Ⅲ	胴部	赤褐	暗赤褐	○	○			良	凹線文	ナデ	Ⅷ	
	162	N-3	—	口縁部	橙	橙	○	○			良	凹線文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅸ	
	163	A-2	Ⅲ・Ⅳ	胴部	灰黄褐	赤褐	○	○	○		良	沈線文,ナデ	ヘラケズリ	X	
	164	A-2・3	Ⅱ・Ⅲ	完形	褐	にぶい赤褐	○	○	○		良	凹線文,条痕,貝殻刺突文	条痕,ナデ	XI	

②石器（第14～18図 124～160）

縄文時代早期の石器は、石鏃・異形石器・打製石斧・礫器・磨石・敲石・石皿等が出土した。

石鏃（第14図 124～138）

石鏃15点は、B-2・3区を中心に出土している。素材は、黒曜石7点、安山岩2点、チャート2点、凝灰岩1点、玉髓1点、頁岩2点である。その内、黒曜石は、肉眼観察によると西北九州系（腰岳）3点、上牛鼻産3点、三船産1点である。また、頁岩と安山岩の素材判定材料の一つに帯磁率計も用いた。

形態は、下記の石鏃分類表をもとに分類した。Aaa 1点、Aab 5点、Aac 1点、Abb 5点、Bbb 1点、Bcb 1点、Cba 1点である。

石鏃は打製で、ほとんどのものが入念な交互剥離により調整されている。欠損していると思われるものは、8点である。その内、基端の片方のみ欠損しているものは7点である。玉髓製の137は、大久保型石鏃と考えられ、近隣の宗円堀遺跡でも1点出土している。

	A (ほぼ三角形)	B (ほぼ五角形)	C (ほぼ丸形)	
形状				
	a (1~1.5: ほぼ正三角形)	b (1.5~2: ほぼ二等辺三角形)	C (2以上: 縦長)	
長幅比 (長さ幅)				
	a (平坦)	b (浅い)	c (深い)	d (U字状)
基部				

第13図 石鏃分類図

異形石器（第14図 139・140）

2点ともホルンフェルス製の石鏃状の異形石器である。全体的に剥離調整が見られ、139は片面だけ、140は両面に剥離調整が施されている。類似した形態の異形石器は、接する諏訪牟田遺跡で1点出土している。他の農業センター遺跡群内の遺跡で出土した異形石器と違う点は、頭部に入念な剥離が施され、刃部を形成している所である。また、器面に磨耗した部分や脚の両端が外開きになる等トロトロ石器の特徴が見られないので、その石器の範疇に入るとは考えにくい。石鏃の未製品か特殊な狩猟具として使用した可能性も考えられるが、用途不明である。熊本県の瀬田裏遺跡では、本遺跡の異形石器と同じ形態の石器が出土しているが、押型文土器とその異形石器が相伴している点が共通する。関連性があるか今後の検討課題である。

打製石斧（第15図 141～143）

141はホルンフェルス製の短冊形の打製石斧である。裏面は自然面が残されており、刃部にはていねいな縦位の研磨が行われている。142は粘板岩製の短冊形の打製石斧である。全面をていねいな剥離調整を行っている。143は、頁岩製のやや大型の打製石斧の未製品と思われる。自然面を多く残し、剥離調整により刃部を作り出している。

礫器（第15図 144・145）

144・145とも頁岩製の礫器である。自然面を多く残し、粗い剥離により刃部を作り出している。

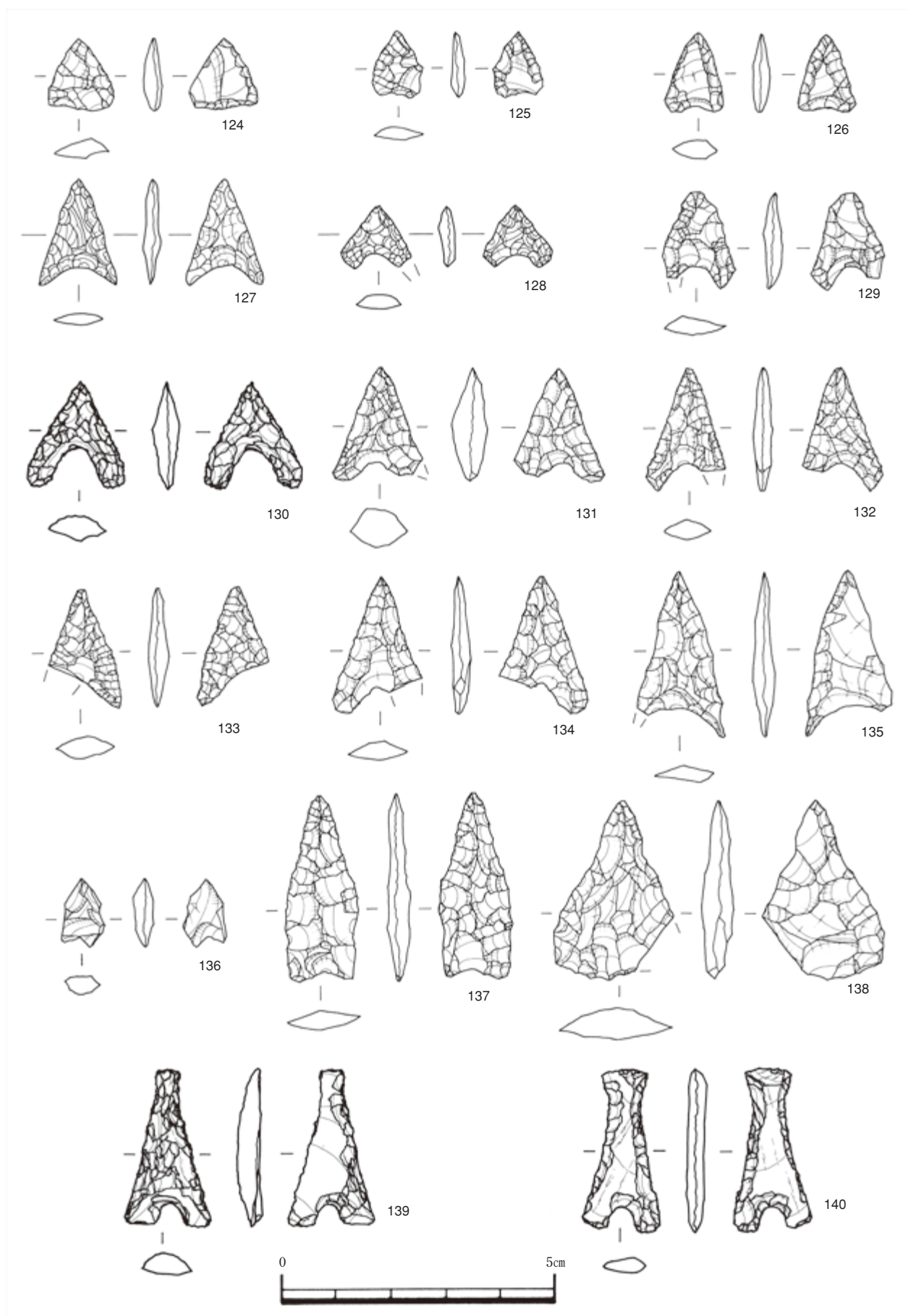
磨石・敲石（第16・17図 146～156）

146～149は、砂岩製の円礫を用いた磨石だけの機能を持つものである。149は、欠損品である。

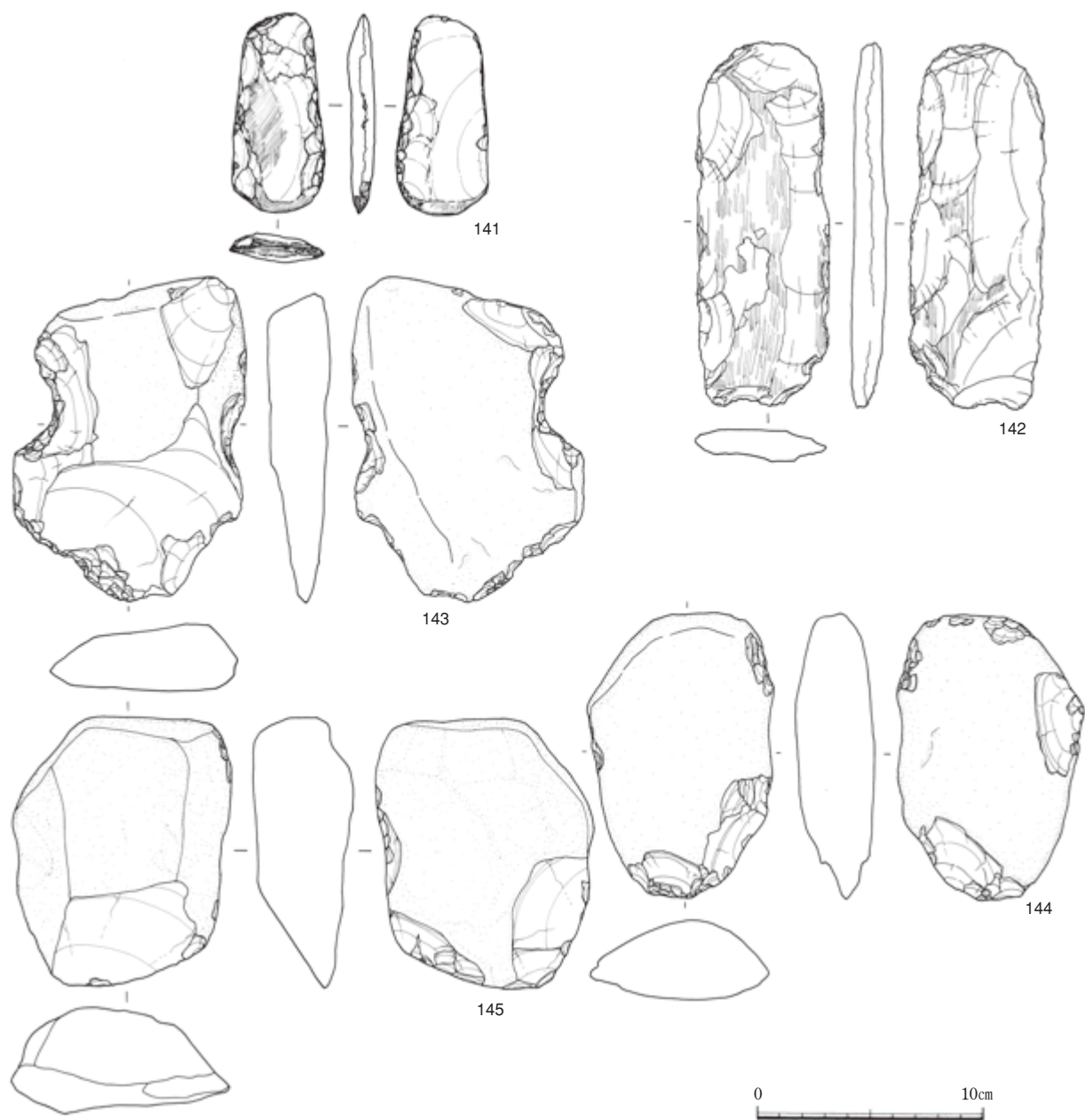
150～156は、円礫を用いた磨石・敲石の機能をあわせ持つものである。152は頁岩製で、それ以外は砂岩製である。154～156は、欠損品である。

石皿（第18図 157～160）

4点とも砂岩製の石皿である。157は、両面に作業面を有するものである。158は、表面にのみ作業面を有するものである。159は、表面に作業面を有し、敲打痕や木の実などの食材を潰したと思われる黒褐色の痕跡も見られる。160は、表面と側縁部に作業面を有するものである。



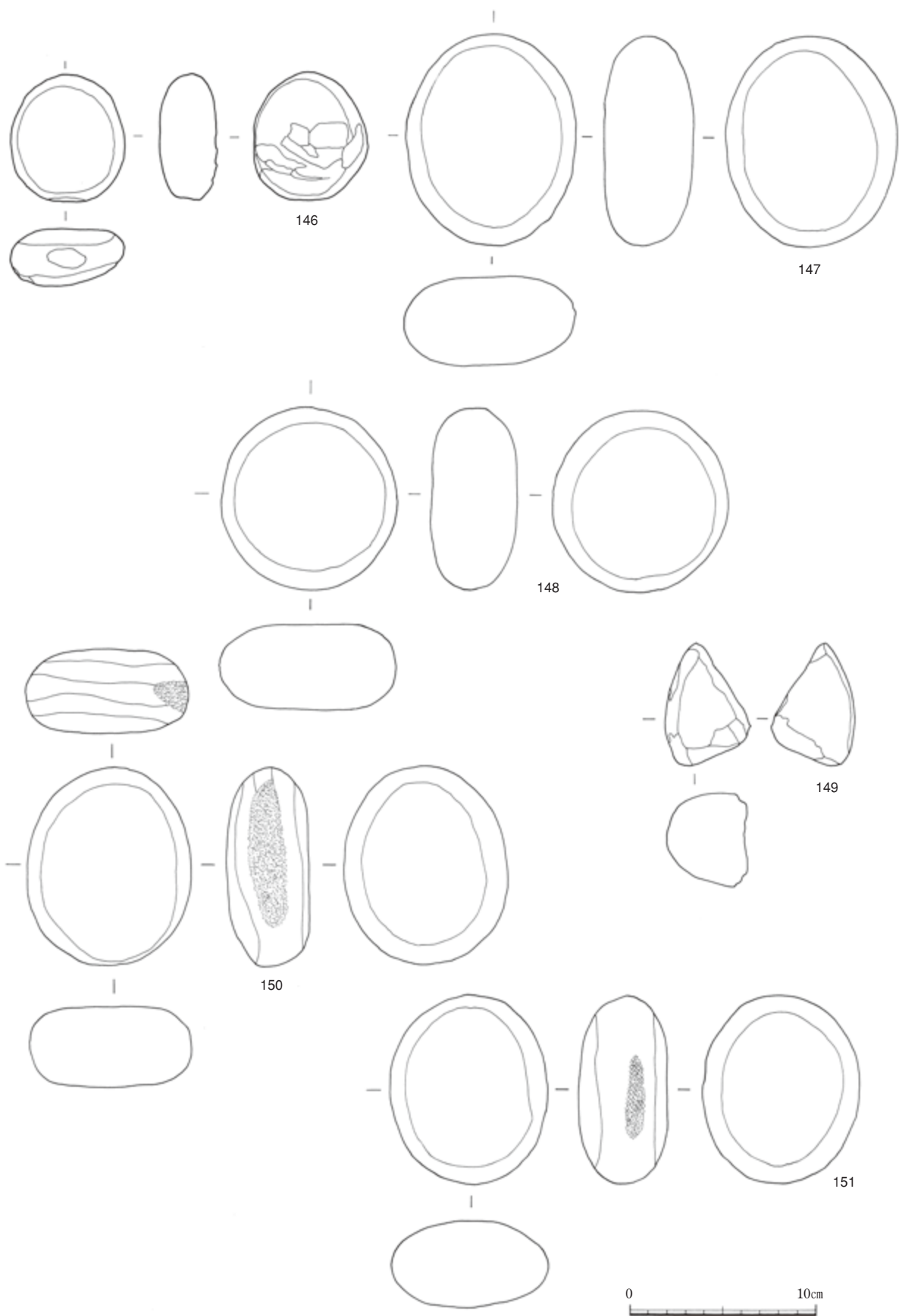
第14図 縄文時代早期 石器 1



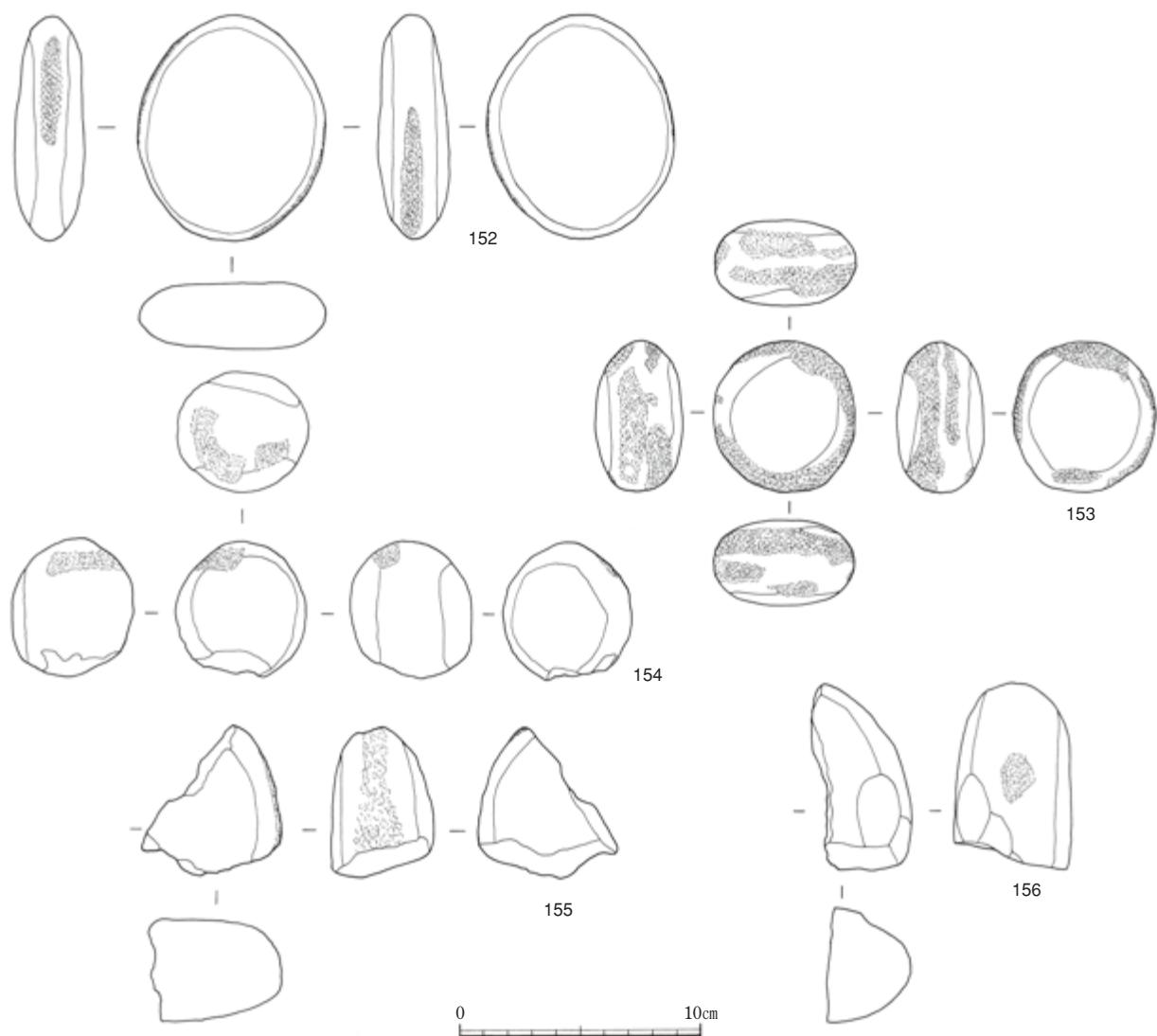
第15図 縄文時代早期 石器 2

縄文時代早期石器（石鏃）観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	出土区	層	石材	長さ(残存) cm	幅(残存) cm	厚さ cm	重さ g	長幅比	形状	長幅比	基部	備考 (欠損部)
第 14 図	124	石鏃	D-お	V	チャート	1.35	1.30	0.30	0.44	1.04	A	a	a	なし
	125	石鏃	A-2	V	黒曜石(腰岳)	1.35	0.90	0.30	0.23	1.50	A	a	b	なし
	126	石鏃	D-お	V	黒曜石(上牛鼻)	1.40	1.05	0.30	0.39	1.33	A	a	b	なし
	127	石鏃	C-2	IV	頁岩	1.85	1.30	0.40	0.60	1.42	A	a	b	なし
	128	石鏃	C-3	IV	黒曜石(三船)	1.10	1.25	0.30	0.29	0.88	A	a	b	基端の片方
	129	石鏃	B-3	IV	黒曜石(腰岳)	1.35	1.30	0.35	0.56	1.04	A	a	b	基端の片方
	130	石鏃	—	IV	頁岩	2.00	1.80	0.50	0.90	1.11	A	a	c	なし
	131	石鏃	C-2	IV	黒曜石(上牛鼻)	2.10	1.55	0.75	1.29	1.35	A	b	b	基端の片方
	132	石鏃	A-2	IV	凝灰岩	2.25	1.40	0.40	0.73	1.61	A	b	b	基端の片方
	133	石鏃	B-3	IV	黒曜石(腰岳)	2.15	1.30	0.40	0.57	1.65	A	b	b	基端の片方
	134	石鏃	B-2	IV	安山岩	2.50	1.50	0.35	0.78	1.67	A	b	b	基端の片方
	135	石鏃	B-2	IV	安山岩	3.00	1.60	0.40	1.06	1.88	A	b	b	基端の片方
	136	石鏃	B-2	IV	黒曜石(上牛鼻)	1.30	0.70	0.35	0.31	1.86	B	b	b	なし
	137	石鏃	B-3	IV	玉髄	3.40	1.35	0.40	1.75	2.52	B	c	b	なし, 大久保型
	138	石鏃	B-3	IV	チャート	3.25	2.10	0.60	3.32	1.55	C	b	a	基端の片方



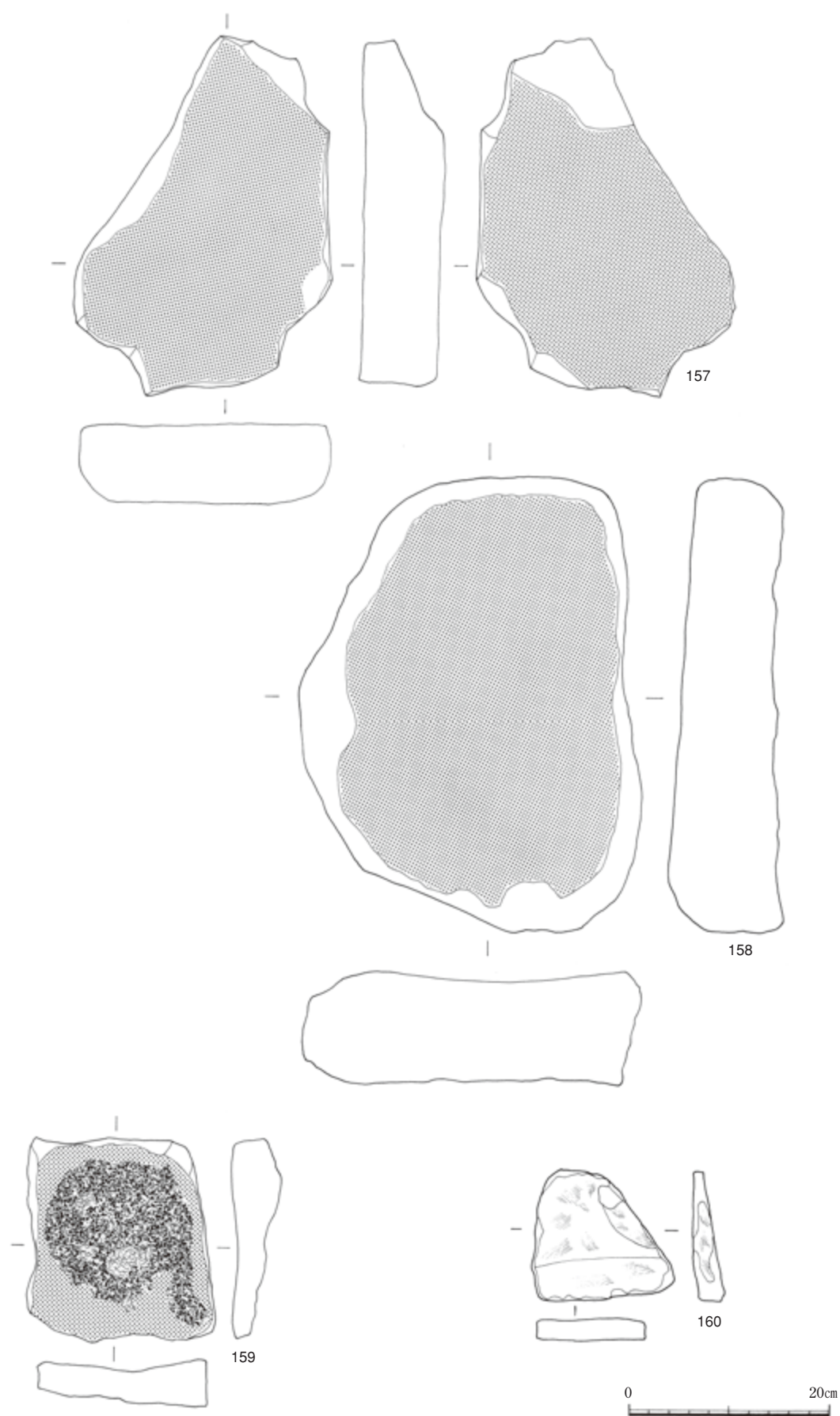
第16図 縄文時代早期 石器 3



第17図 縄文時代早期 石器 4

縄文時代早期石器観察表

挿図 番号	遺物 番号	器種	出土区	層	石材	長さ(残存) cm	幅(残存) cm	厚さ cm	重さ g	備考
第14 図	139	異形石器	B-3	Ⅳ	ホルンフェルス	2.90	1.60	0.50	1.60	
	140	異形石器	A-2	Ⅳ	ホルンフェルス	3.00	1.40	0.40	1.40	
第15 図	141	打製石斧	D-う	Ⅳ	ホルンフェルス	8.90	4.20	1.30	52.40	
	142	打製石斧	B-2	Ⅳ	粘板岩	16.20	6.00	1.50	180.83	
	143	打製石斧	A-2	Ⅳ	頁岩	13.40	10.00	2.70	481.50	未製品
	144	礫器	B-2	V	頁岩	12.50	8.10	3.50	451.00	
第16 図	145	礫器	C-3	Ⅳ	頁岩	11.80	9.30	4.50	651.00	
	146	磨石	A-2	Ⅳ	砂岩	6.80	6.10	3.10	180.50	
	147	磨石	B-2	V	砂岩	11.20	9.20	4.75	691.50	
	148	磨石	B-2	V	砂岩	9.80	9.35	4.50	635.00	
	149	磨石	B-2	Ⅳ	砂岩	6.50	4.50	5.00	148.00	欠損
	150	磨石・敲石	B-3	Ⅳ	砂岩	10.60	8.75	4.40	651.50	
第17 図	151	磨石・敲石	B-2	V	砂岩	10.20	8.40	4.70	606.00	
	152	磨石・敲石	B-3	Ⅳ	頁岩	9.35	7.80	2.90	306.00	
	153	磨石・敲石	A-2	Ⅳ	砂岩	6.30	5.80	3.60	180.00	
	154	磨石・敲石	B-2	V	砂岩	5.50	5.30	5.00	205.50	一部欠損
	155	磨石・敲石	C-2	V	砂岩	5.80	5.60	4.20	156.50	欠損
第18 図	156	磨石・敲石	B-3	V	砂岩	7.50	3.40	4.80	177.00	欠損
	157	石皿	B-3	Ⅳ	砂岩	34.40	25.00	7.80	10200.00	
	158	石皿	B-3	Ⅳ	砂岩	45.00	32.90	11.20	21800.00	
	159	石皿	B-1	Ⅳ	砂岩	20.00	18.40	5.00	1893.00	
	160	石皿	A-2	Ⅳ	砂岩	13.00	13.80	2.60	687.00	



第18図 縄文時代早期 石器 5

2 縄文時代中期・後期の調査

縄文時代中期・後期については遺物の出土量は少なく、遺構も検出されなかった。

(1) 遺物 (第19図)

遺物は、中後期のⅧ類 (南福寺式土器) からⅪ類 (市来式土器) まだが出土している。

Ⅷ類土器

161は口縁部の破片である。器面をヘラケズリ調整した後に口縁から約3cmの文様帯を設け直線及び曲線の凹線文が施される。口縁部はわずかに内湾し、口唇部には刻目が施される。

Ⅸ類土器

162は口縁部の破片である。口縁部下位に、先端が二叉状の施文工具を使って凹線文を横位に施すものである。焼成は良好で内面はヘラケズリの後ナデで調整されている。

Ⅹ類土器

163は、外面はナデ調整で、胴部の上部から下部にかけて波状の沈線文が2条施される。

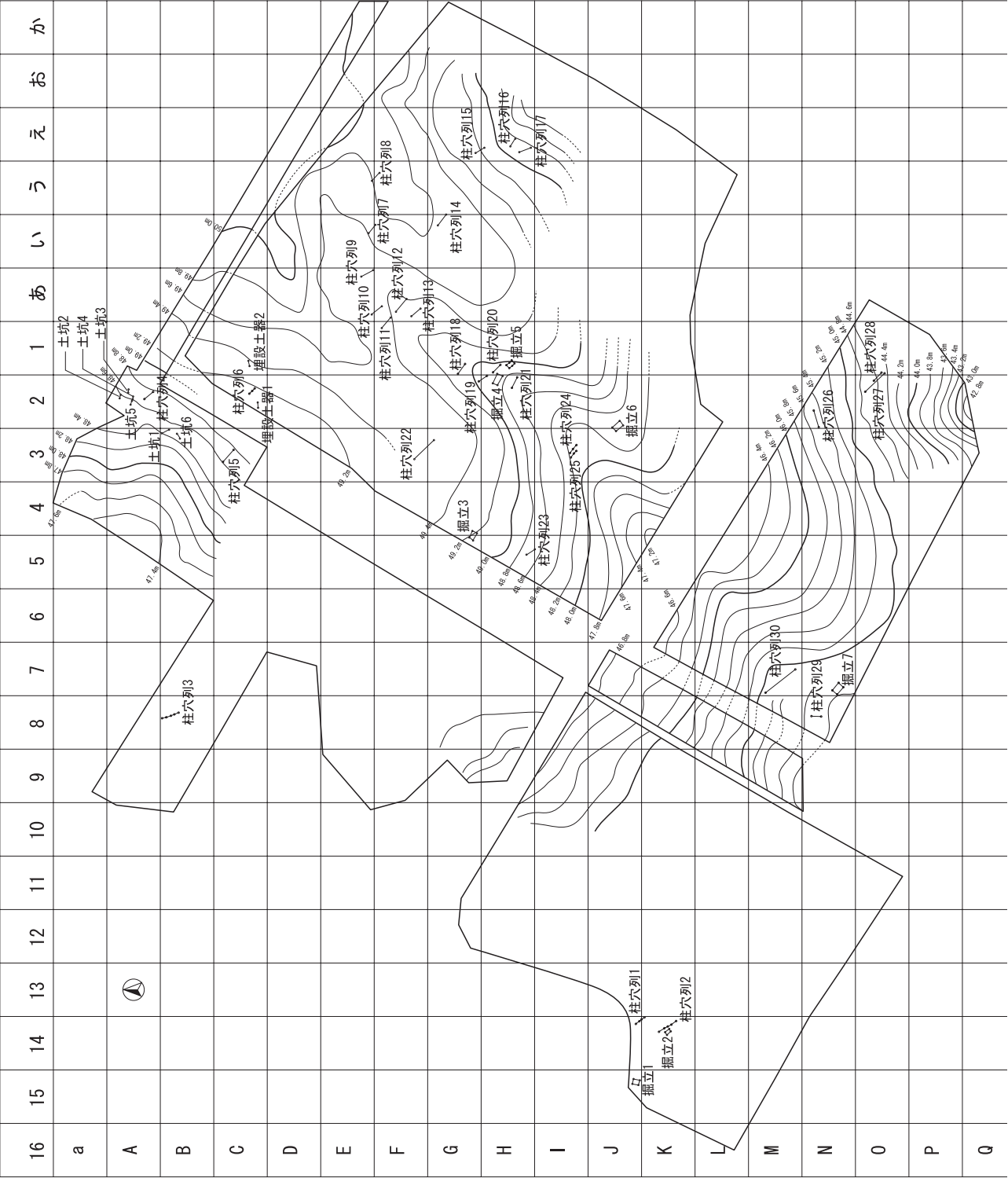
Ⅺ類土器

164は口縁部及び胴部を復元できたもので、口縁部を断面三角に肥厚させ文様帯とするものである。

口縁部の上端と下端に同一施文工具で施したと思われる楕円状の刺突がある。その間に2条の凹線が施されている。波状口縁の波頂部の左右にそれぞれ5・6条の縦位の貝殻刺突文が施される。



第19図 Ⅷ～Ⅺ類土器



第20図 縄文時代晩期遺構配置図 (1グリッド：20m)

3 縄文時代晩期の調査

(1) 遺構

縄文時代晩期の遺構は、土坑6基、埋設土器2基、掘立柱建物跡7棟、柱穴列30列が検出された。

①土坑（第21～24図）

6基の土坑は、全てA・B-2・3区に集中して検出された。

1号土坑（第22・23図）

B-3区で検出され、長径2.11m、短径1.94m、深さ1.05mの平面プランがほぼ円形の土坑である。埋土から炭化物が多く検出され、自然科学分析を行った。（詳しい結果は、P98参照）土坑内からは、多数土器片が出土した。埋土の上半分から出土した口縁部165と口径29.8cmの166は、頸部より口縁部が外反するもので、内外面ともナデ調整を施している。165と166は、同一個体の可能性も考えられる。167は、床面付近から出土し、口径34.6cm、器高29.8cmの完形に復元できた。直行する口縁部の狭い文様帯に3条の沈線を施すものである。166・167は、煤が多量に付着しており、煮炊き等に使用されたと思われる。165と166は、沈線は施されていないが、器形等より167と同じく、Ⅻ類土器の範疇に入るとと思われる。石器は、埋土上部より砂岩製の砥石の欠損品と思われる168が出土し、両面とも使用痕と思われる研磨痕がみられる。

2号土坑（第24図）

A-2区で検出され、長径1.08m、短径0.95m、深さ0.19mの平面プランが円形の土坑である。土坑内からは、土器片が多数出土したが、図化できるものはなかった。

3号土坑（第24図）

A-2区で検出され、長径0.85m、短径0.84m、深さ0.15mの平面プランが円形の土坑である。埋土からは、炭化物がまばらに見える程度であった。土坑内からは、遺物等は出土していない。

4号土坑（第24図）

A-2区で検出され、長径0.67m、短径0.45m、深さ0.13mの平面プランが楕円形の土坑である。土坑内からは、遺物等は出土していないが、土坑上から礫が1点出土したが、土坑と関連性があるかは不

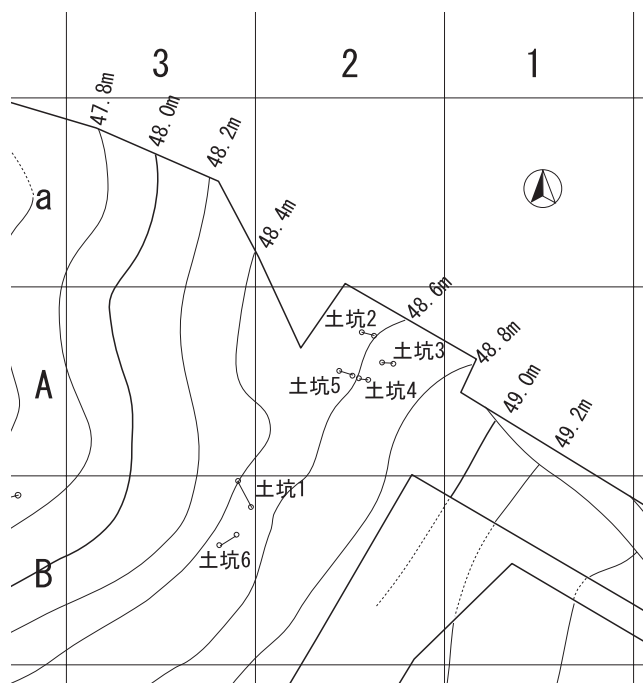
明である。

5号土坑（第24図）

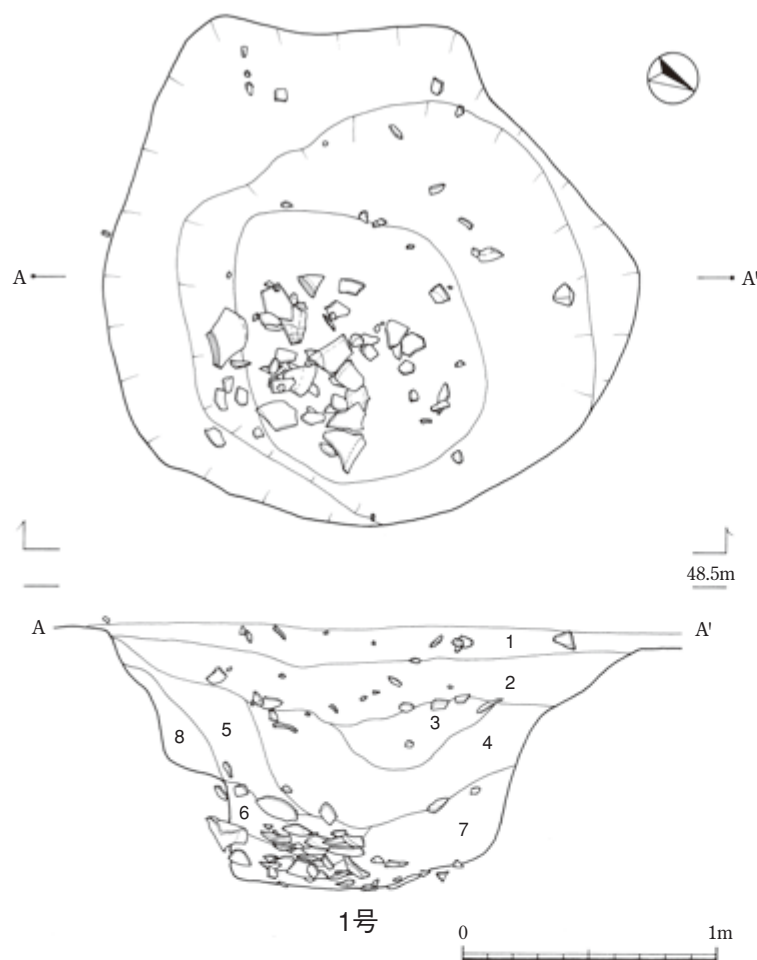
A-2区で検出され、長径1.35m、短径1.09m、深さ0.28mの平面プランが楕円形の土坑である。土坑内からは、土器片が2点出土しているが、図化できるものはなかった。

6号土坑（第24図）

B-3区で検出され、長径1.1m、短径0.92m、深さ0.51mの平面プランがほぼ円形の土坑である。土坑内からは、土器片が3点出土しているが、図化できるものはなかった。遺構内にピットが検出されたが、土坑に伴うものかどうかは不明。

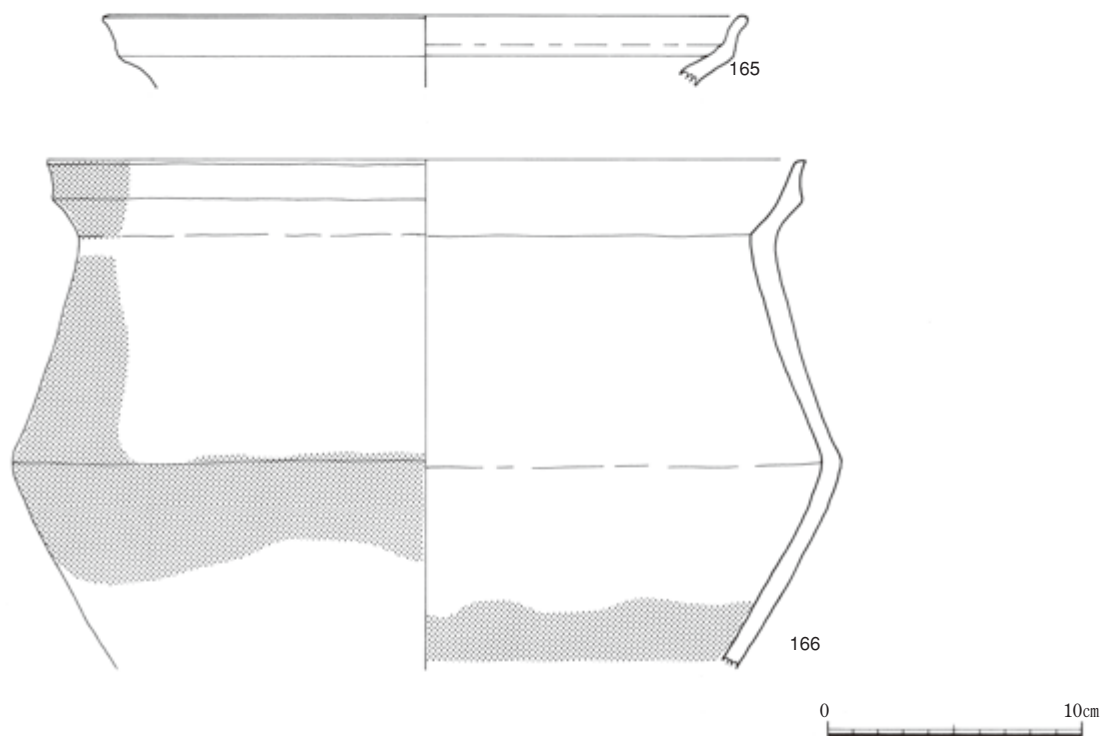


第21図 縄文時代晩期土坑配置図
(1グリッド：20m)



1号土坑 土層観察表

1	黄橙色火山灰土（Ⅲ層）
2	含パミス白黄褐色土 （5mm～1cm程度の黄粒、パミス含む）
3	白色の強い黄褐色土
4	含炭化物黄褐色土
5	明黄褐色土
6	暗黄褐色土
7	含パミス暗黄褐色土 （若干の炭化物含む）
8	黒褐色土（Ⅴ層）



第22図 縄文時代晩期土坑1及び土坑内遺物（1）



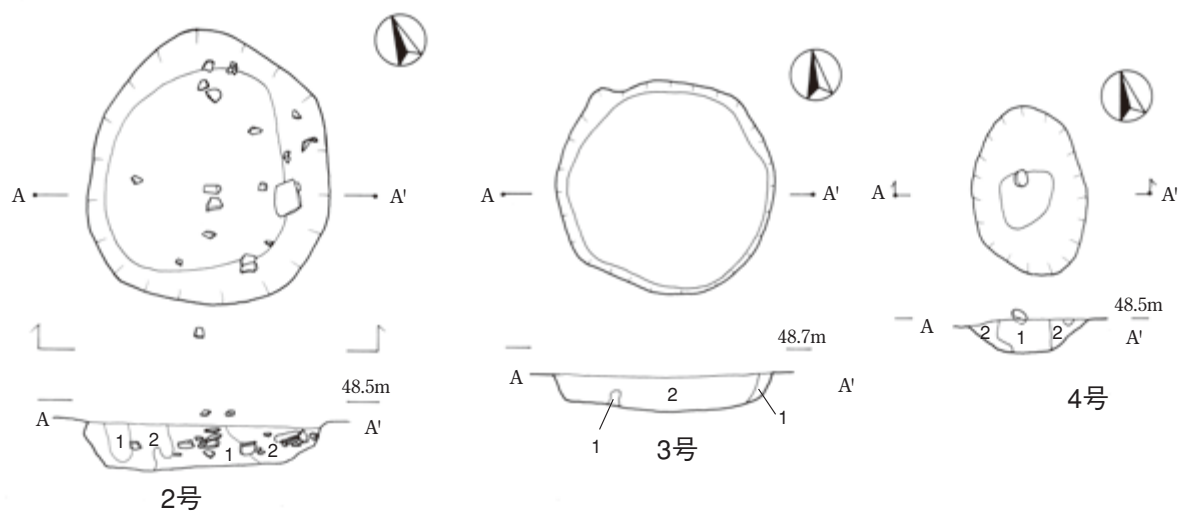
第23図 縄文時代晩期土坑内遺物（2）

縄文時代晩期遺構（土坑）内遺物土器観察表

挿図 番号	番号	遺構	部位	色 調		胎 土				焼成	外 面	内 面	類	備 考
				内	外	石英	長石	角閃石	その他					
第22図	165	土坑1	口縁部	灰黄褐	褐灰	○	○	○		良	ナデ	ナデ	XII	外面スス付着
	166		口縁～胴部	灰黄褐	褐灰	○	○	○		良	ナデ	ナデ	XII	内外面スス付着
第23図	167		完形	浅黄橙	浅黄橙	○	○	○		良	ナデ	ナデ	XII	内外面スス付着

縄文時代晩期遺構（土坑）内遺物石器観察表

挿図 番号	番号	遺構	器種	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
第23図	168	土坑 1	砥石	砂岩	7.8	7.6	7.0	334	



2号土坑 土層観察表

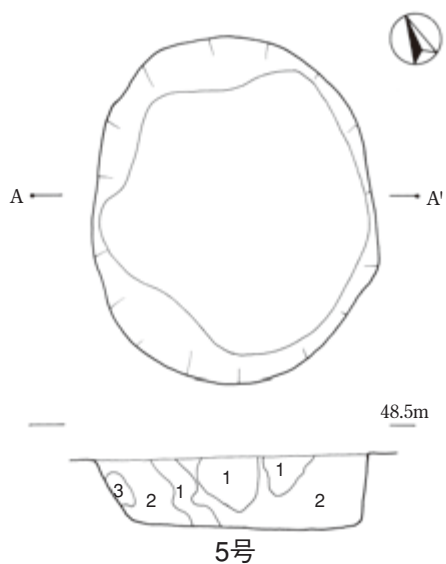
1	Ⅳ層
2	Ⅳ層に白っぽいパミスが広がる

3号土坑 土層観察表

1	黄褐色の暗い色
2	Ⅳ層に白っぽいパミス（やや黄みがかった）が広がる

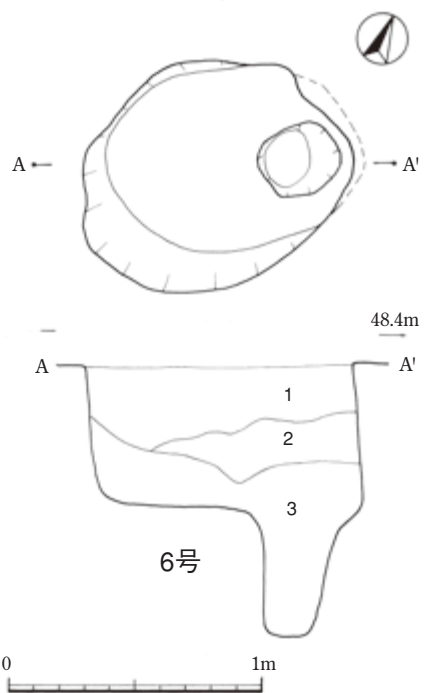
4号土坑 土層観察表

1	Ⅳ層に白っぽいパミスが広がる
2	ややサツマが混在するⅣ層



5号土坑 土層観察表

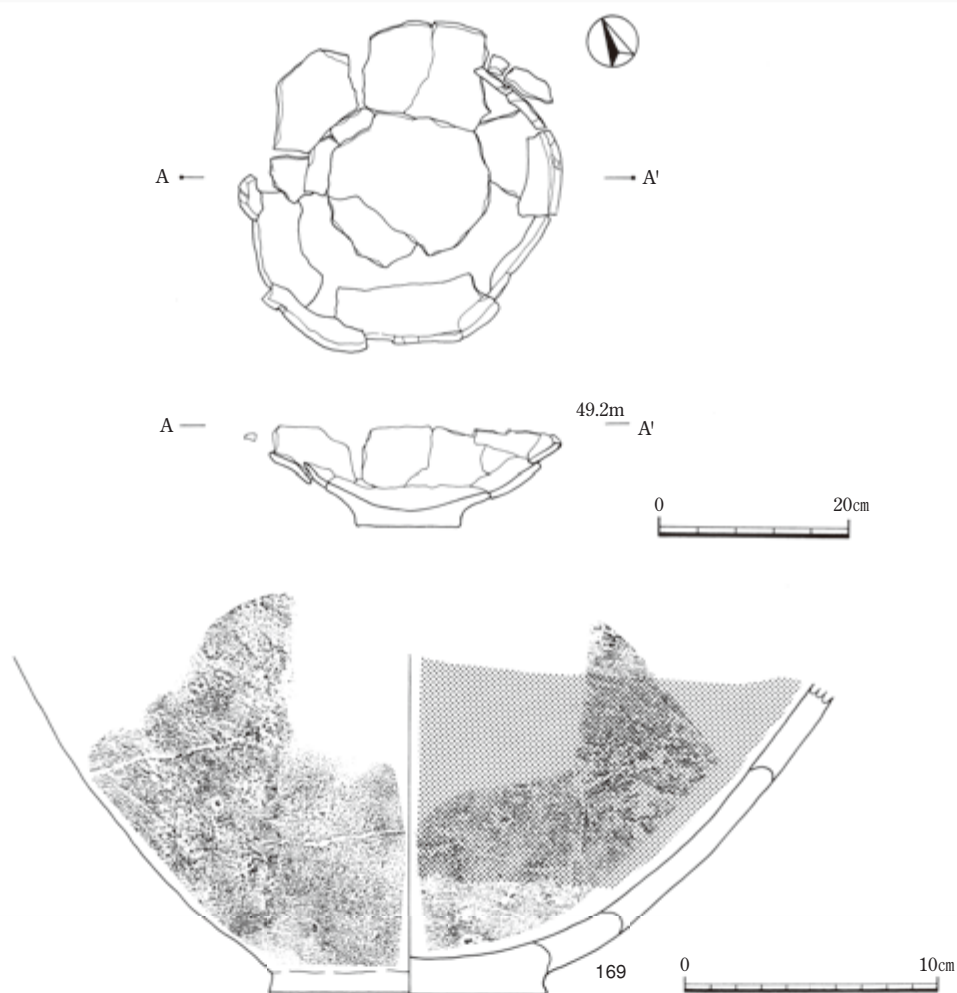
1	Ⅳ層に白っぽいパミスが広がる
2	Ⅳ層に砂質のある土が混ざる
3	Ⅴ層



6号土坑 土層観察表

1	黄褐色土。1～8mm程度のオレンジ色のパミスや2～3cm程度のブロック状火山灰を含む。2～3mmの炭化物も多量に含む
2	暗黄褐色土。1より暗い。1～8mm程度のオレンジ色のパミスを多量に含み、2～3cmのブロック状火山灰がわずかに含む。2～3mmの炭化物も多量に含む
3	黒褐色土

第24図 縄文時代晩期土坑 2



第25図 縄文時代晩期 埋設土器 1

②埋設土器

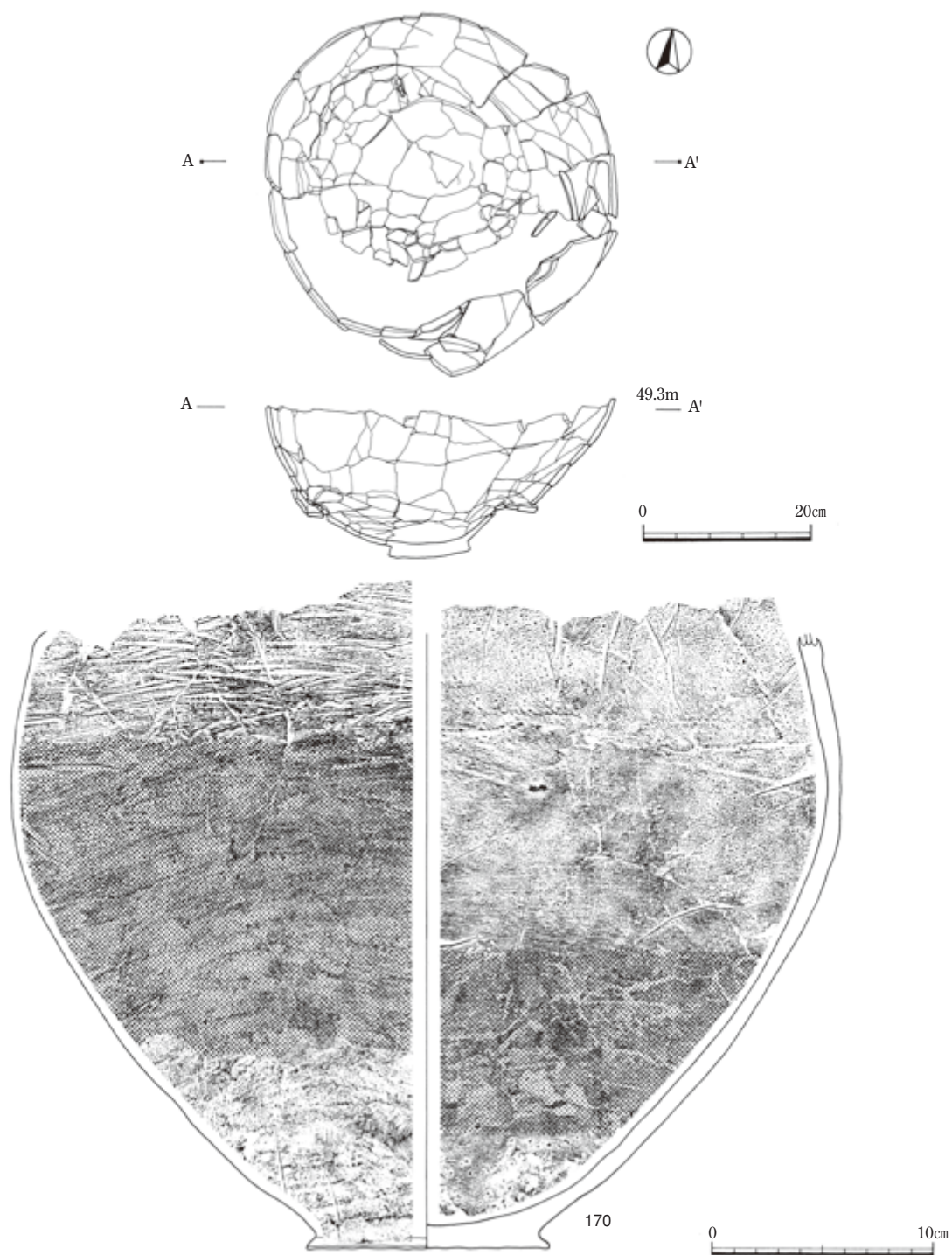
埋設土器 1 号（第25図）

C-2区Ⅲ層において検出された。土器はほぼ正位置に埋設されており、上蓋は確認されなかった。また、胴部付近から上部は以前の圃場整備により削除されている。掘り込みは存在するが、掘り込みの

径が胴部付近の径とほぼ同じであるため、上面からは確認できなかった。底径は10.8cmを図る。色調は明茶褐色で、器面調整は、外面はヘラケズリ、内面はナデ調整を施されている。また、煤の付着が認められ、煮炊きに利用されたものを転用されたものと思われる。ⅩⅢ類土器に相当するものと考えられる。

埋設土器観察表

挿図 番号	番号	層位	遺構	部位	色 調		胎 土				焼成	外 面	内 面	類	備 考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他					
25	169	Ⅲ	埋設土器 1	胴～底部	浅黄	橙	○	○	○		良	ヘラケズリ	ナデ	XⅢ	内面煤付着
26	170	Ⅲ	埋設土器 2	胴～底部	浅黄	褐灰	○	○	○		良	ナデ、貝殻条痕	ナデ	XⅢ	内外面煤付着



第26図 縄文時代晩期 埋設土器 2

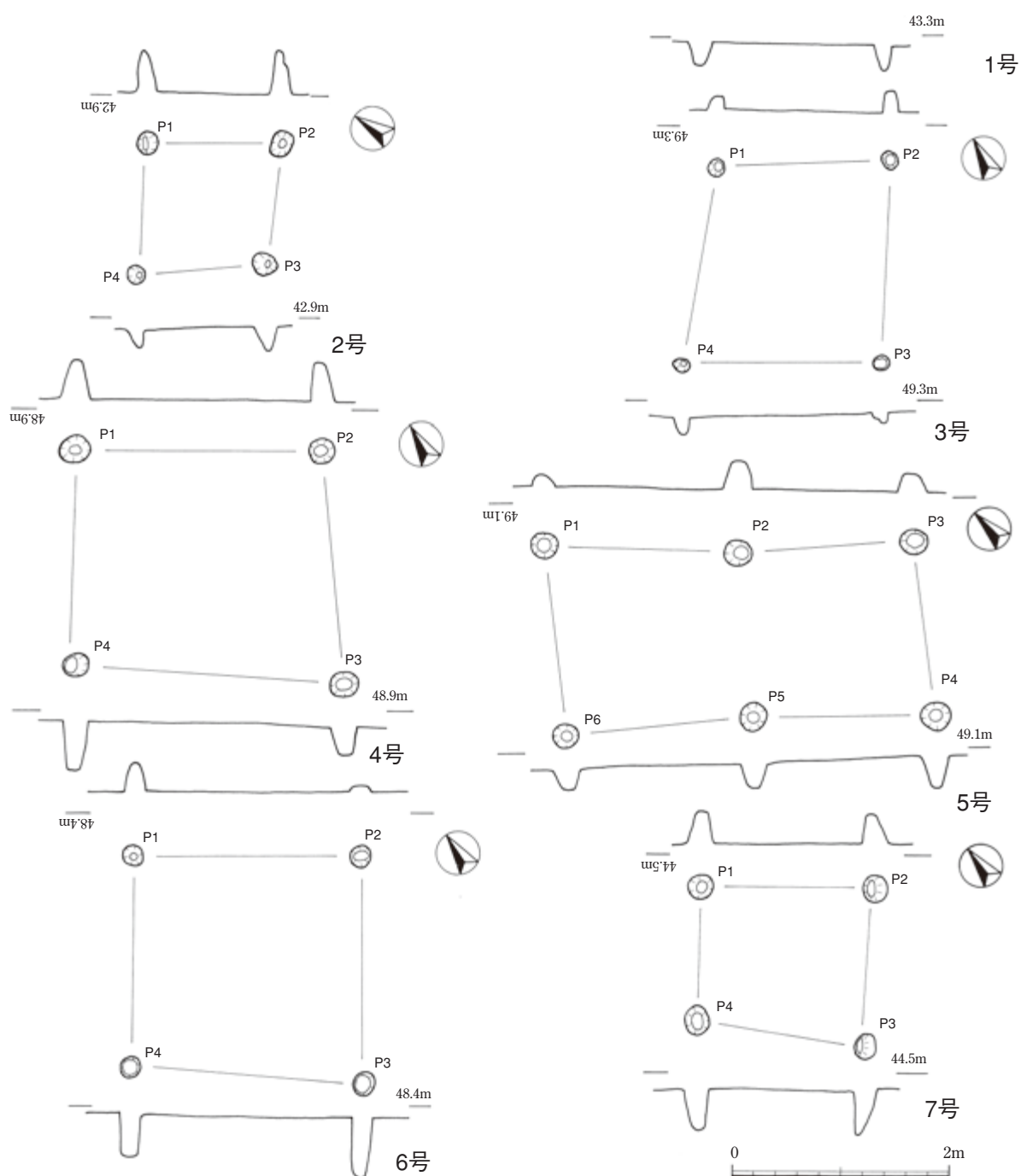
埋設土器 2 号 (第26図)

C-1区Ⅲ層において検出された。土器はほぼ正位置に埋設されており、上蓋は確認されなかった。また、上位半分は以前の圃場整備により削除・欠損した状態であった。掘り込みは存在するが、一部土器の口縁径より突出した箇所があるもののほぼ同じであるため、上面では確認しづらかった。黄褐色の

埋土で、見た目には周辺土壌とほとんど見分けがつかないが、土質は少し柔らかい。底径は10.8cm、器高は27.4cm(残存部分)を測る。器面は、内外面共にナデ調整で、外面には貝殻条痕が横位に施されている。また、内外面に煤付着跡が見られ、煮炊きに利用したものを転用したものと思われる。Ⅷ類土器に相当するものと考えられる。

③ 掘立柱建物跡（第27図）

縄文時代晩期の掘立柱建物跡7棟のうち、6棟が1間×1間の建物で、1棟が1間×2間の建物である。柱穴、桁行柱間などは観察表で示した。諏訪脇遺跡だけでなく農業開発総合センター遺跡群内の各遺跡で多くみられる。大きさ・方向・柱間・形状等に統一性はみられない。柱穴内の埋土は、ほとんどが暗黒茶褐色の一層である。柱穴等からの遺物は出土していない。



第27図 縄文時代晩期 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡観察表

1号掘立柱建物跡観察表 1間×1間

	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	P i t	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (㎡)	備考
棟部	P1ーP2	192	1	24	22	19	円	3.78	
	P2ーP3	209	2	23	25	23	円		
	P3ーP4	171	3	24	23	21	円		
	P4ーP1	206	4	21	23	21	円		
	平均	194.5		23	23.25	21			

2号掘立柱建物跡観察表 1間×1間

	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	P i t	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (㎡)	備考
棟部	P1ーP2	124	1	38	22	20	円	1.42	
	P2ーP3	112	2	39	27	19	楕円		
	P3ーP4	117	3	24	23	22	円		
	P4ーP1	123	4	15	17	17	円		
	平均	119		29	22.25	19.5			

3号掘立柱建物跡観察表 1間×1間

	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	P i t	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (㎡)	備考
棟部	P1ーP2	158	1	12	18	13	楕円	3.15	
	P2ーP3	187	2	21	18	13	楕円		
	P3ーP4	182	3	9	15	15	円		
	P4ーP1	183	4	16	15	12	円		
	平均	177.5		14.5	16.5	13.25			

4号掘立柱建物跡観察表 1間×1間

	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	P i t	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (㎡)	備考
棟部	P1ーP2	224	1	36	28	26	楕円	4.96	
	P2ーP3	217	2	36	24	22	円		
	P3ーP4	252	3	25	24	22	円		
	P4ーP1	198	4	46	23	21	円		
	平均	222.75		35.75	24.75	22.75			

5号掘立柱建物跡観察表 1間×2間

	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	P i t	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (㎡)	備考
棟部	P1ーP2	181	1	13	24	23	円	5.48	
	P2ーP3	158	2	27	26	23	円		
	P3ーP4	162	3	16	25	23	円		
	P4ーP5	167	4	30	28	27	円		
	P5ーP6	172	5	23	27	26	円		
	P6ーP1	177	6	18	27	26	円		
	P1ーP3	338							
	P4ーP6	339							
	平均	169.5		21.17	26.17	24.67			

6号掘立柱建物跡観察表 1間×1間

	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	P i t	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (㎡)	備考
棟部	P1ーP2	207	1	26	19	18	円	4.28	
	P2ーP3	211	2	5	19	19	円		
	P3ーP4	213	3	56	22	20	円		
	P4ーP1	197	4	39	19	19	円		
	平均	207		31.5	19.75	19			

7号掘立柱建物跡観察表 1間×1間

	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	P i t	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (㎡)	備考
棟部	P1ーP2	154	1	31	24	24	円	2.04	
	P2ーP3	144	2	30	24	23	円		
	P3ーP4	149	3	42	21	20	円		
	P4ーP1	124	4	37	28	23	楕円		
	平均	142.75		35	24.25	22.5			

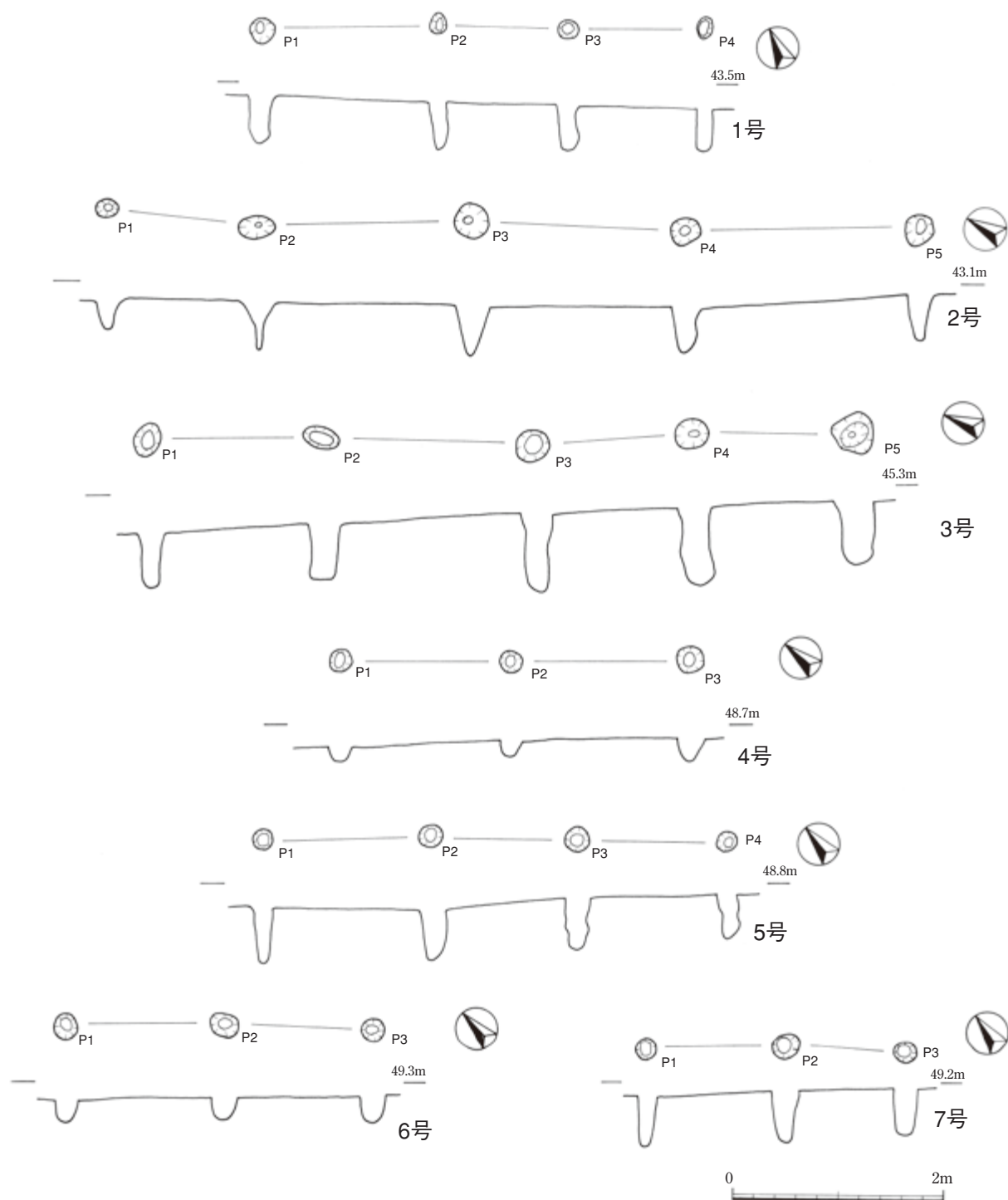
④柱穴列（第28～30図）

柱穴列も農業開発総合センター遺跡群においては、よく見られる遺構である。3個以上の柱穴が直線上に並んでいるものを人為的な遺構としてとらえた。

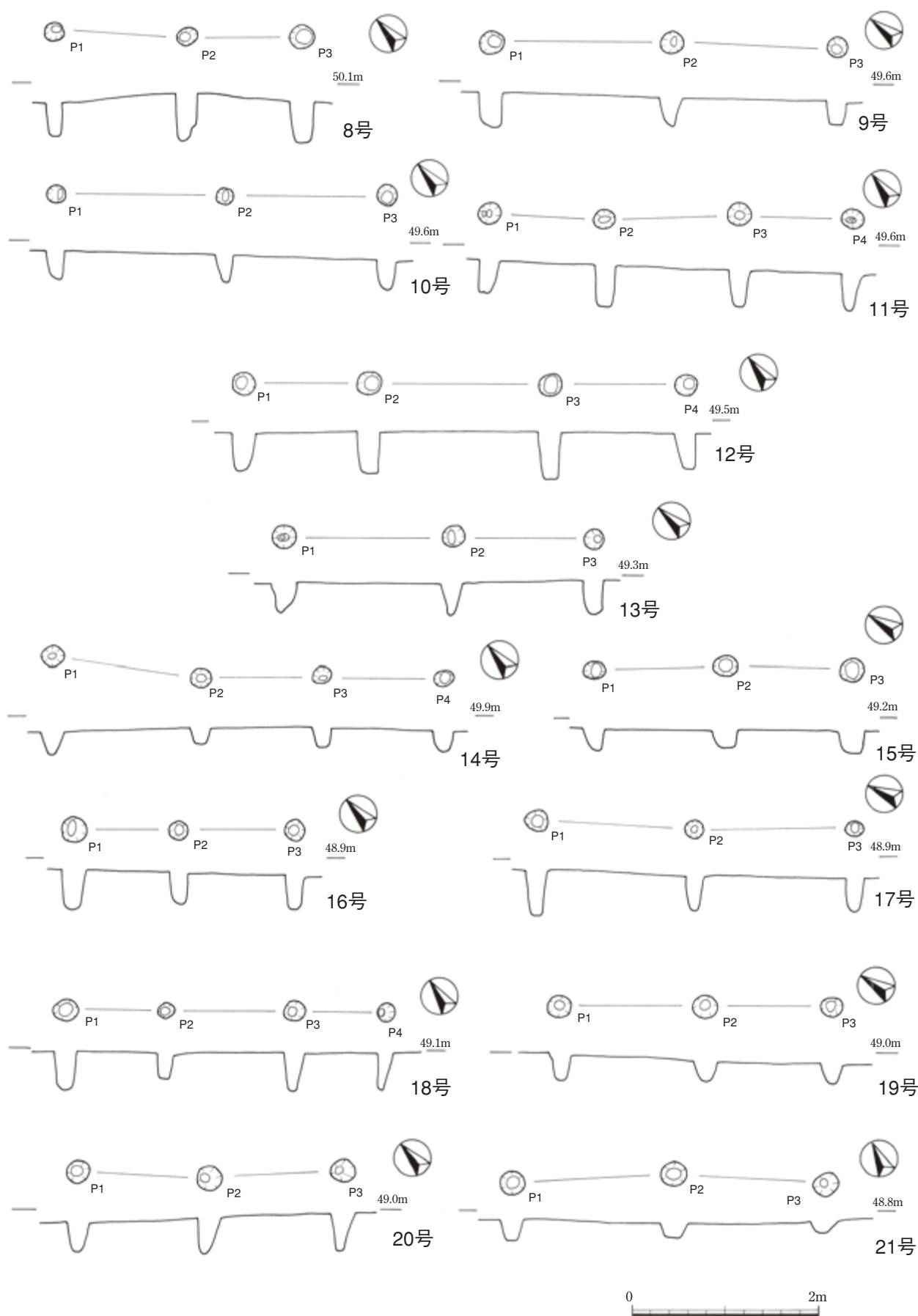
柱穴の深さ・長径・短径・掘り方、柱間などは観察表で示した。柱穴内の埋土は、ほとんどが黒褐色

であった。

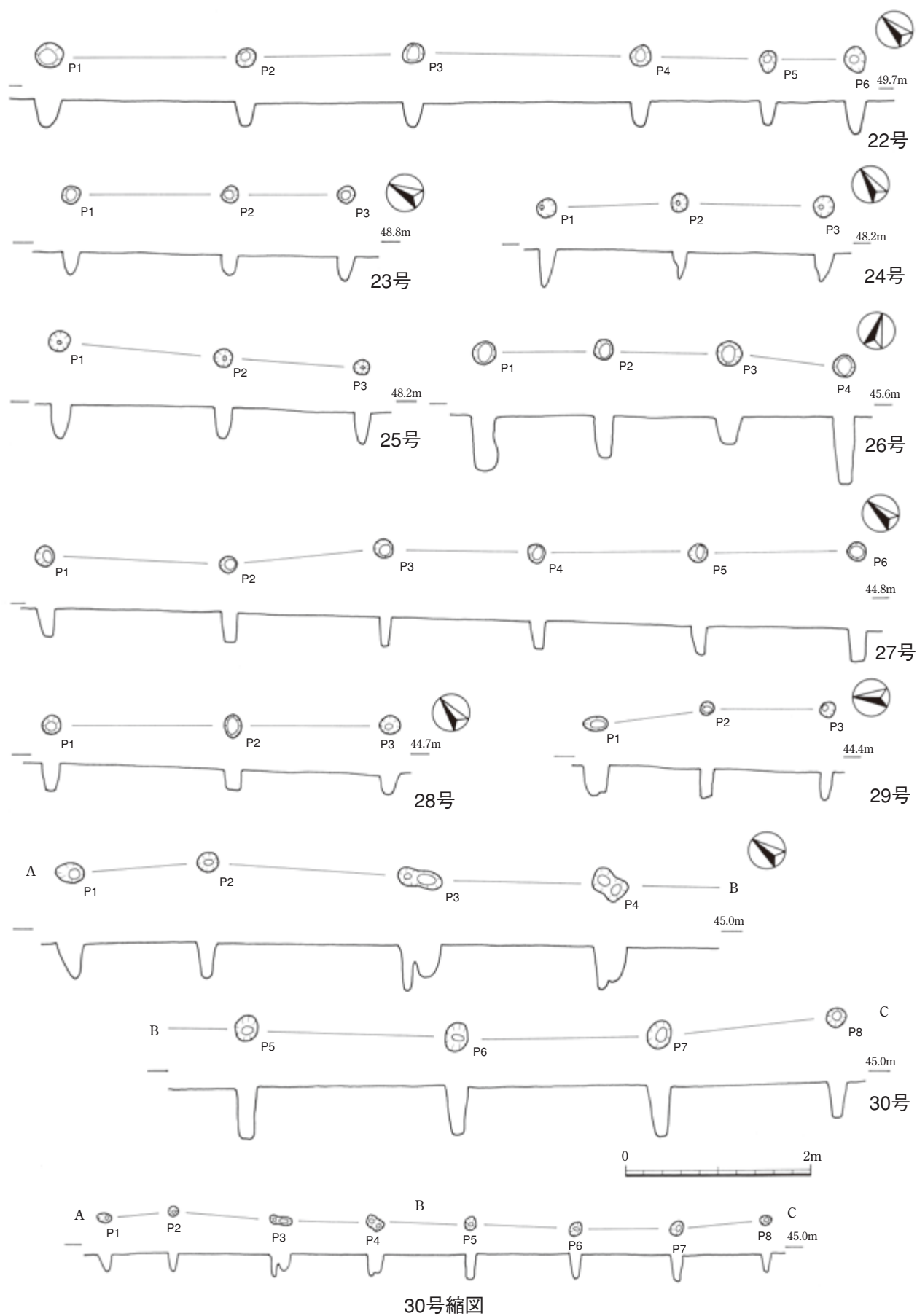
本遺跡においては、30列の柱穴列を検出した。柱穴が3個の柱穴列が最も多く17列で、最大で8個の柱穴が並んだものも1列あった。柱穴の大きさ等に規則性はみられないが、方位については北西に軸をとっているものが多い。



第28図 縄文時代晩期 柱穴列 1



第29図 縄文時代晩期 柱穴列 2



第30図 縄文時代晩期 柱穴列 3

柱穴列観察表 1

1号柱穴列

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
1	45	25	23	円
2	45	19	16	楕円
3	45	22	18	円
4	40	20	16	楕円
平均	43.8	21.5	18.3	
柱間距離 (cm)		平均 (cm)	全長 (cm)	
P1-P2	167	139.3	418	
P2-P3	121			
P3-P4	130			

3号柱穴列

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
1	51	33	25	楕円
2	55	33	20	円
3	77	30	27	楕円
4	76	35	28	円
5	62	40	36	円
平均	64.2	34.2	27.2	
柱間距離 (cm)		平均 (cm)	全長 (cm)	
P1-P2	165	162.5	650	
P2-P3	195			
P3-P4	145			
P4-P5	145			

5号柱穴列

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
1	54	20	20	円
2	50	24	16	円
3	52	25	24	円
4	43	20	19	円
平均	50	22	20	
柱間距離 (cm)		平均 (cm)	全長 (cm)	
P1-P2	158	147.3	440	
P2-P3	140			
P3-P4	144			

7号柱穴列

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
1	50	21	19	楕円
2	49	26	24	円
3	45	22	19	円
平均	48	23.0	20.7	
柱間距離 (cm)		平均 (cm)	全長 (cm)	
P1-P2	131	122	243	
P2-P3	113			

9号柱穴列

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
1	38	26	25	円
2	33	26	25	円
3	29	23	23	円
平均	33.3	25	24.3	
柱間距離 (cm)		平均 (cm)	全長 (cm)	
P1-P2	191	183	366	
P2-P3	175			

2号柱穴列

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
1	30	22	18	円
2	45	34	22	楕円
3	50	35	32	円
4	45	28	25	円
5	45	29	26	円
平均	43	29.6	24.6	
柱間距離 (cm)		平均 (cm)	全長 (cm)	
P1-P2	145	192.5	767	
P2-P3	197			
P3-P4	204			
P4-P5	224			

4号柱穴列

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
1	14	22	22	円
2	15	22	22	円
3	22	25	24	円
平均	17	23	22.7	
柱間距離 (cm)		平均 (cm)	全長 (cm)	
P1-P2	160	165	330	
P2-P3	170			

6号柱穴列

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
1	23	23	22	円
2	23	27	23	円
3	26	23	22	円
平均	24	24.3	22.3	
柱間距離 (cm)		平均 (cm)	全長 (cm)	
P1-P2	150	141.5	288	
P2-P3	133			

8号柱穴列

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
1	32	20	17	円
2	53	23	20	円
3	45	27	27	円
平均	43.3	23.3	21.3	
柱間距離 (cm)		平均 (cm)	全長 (cm)	
P1-P2	137	133	267	
P2-P3	129			

10号柱穴列

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
1	32	20	20	円
2	31	19	19	円
3	32	22	22	円
平均	31.7	20.3	20.3	
柱間距離 (cm)		平均 (cm)	全長 (cm)	
P1-P2	180	177.5	355	
P2-P3	175			

柱穴列観察表 2

11号柱穴列

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
1	37	23	23	円
2	42	22	21	円
3	41	24	25	円
4	42	22	22	円
平均	40.5	22.8	22.8	
柱間距離 (cm)		平均 (cm)	全長 (cm)	
P1-P2	124	126.3	382	
P2-P3	136			
P3-P4	119			

13号柱穴列

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
1	33	26	25	円
2	35	23	23	円
3	39	22	21	円
平均	35.7	23.7	23.0	
柱間距離 (cm)		平均 (cm)	全長 (cm)	
P1-P2	181	168.5	337	
P2-P3	156			

15号柱穴列

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
1	27	23	19	円
2	21	27	21	楕円
3	24	28	24	円
平均	24	26	21.3	
柱間距離 (cm)		平均 (cm)	全長 (cm)	
P1-P2	140	138	274	
P2-P3	136			

17号柱穴列

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
1	51	24	23	円
2	38	20	19	円
3	39	20	18	円
平均	42.7	21	20.0	
柱間距離 (cm)		平均 (cm)	全長 (cm)	
P1-P2	168	170	340	
P2-P3	172			

19号柱穴列

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
1	32	25	24	円
2	25	28	25	円
3	24	24	22	円
平均	27	25.7	23.7	
柱間距離 (cm)		平均 (cm)	全長 (cm)	
P1-P2	155	144	288	
P2-P3	133			

21号柱穴列

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
1	23	25	25	円
2	16	29	28	円
3	14	27	25	円
平均	17.7	27	26	
柱間距離 (cm)		平均 (cm)	全長 (cm)	
P1-P2	174	116.5	232	
P2-P3	160			

12号柱穴列

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
1	40	26	25	円
2	44	25	25	円
3	52	25	25	円
4	38	24	23	円
平均	45.3	25	25.0	
柱間距離 (cm)		平均 (cm)	全長 (cm)	
P1-P2	137	158.7	476	
P2-P3	193			
P3-P4	146			

14号柱穴列

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
1	27	25	25	円
2	20	24	21	円
3	23	20	19	円
4	23	23	18	楕円
平均	23.3	23	20.8	
柱間距離 (cm)		平均 (cm)	全長 (cm)	
P1-P2	161	140.7	416	
P2-P3	131			
P3-P4	130			

16号柱穴列

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
1	47	29	27	円
2	36	21	21	円
3	37	22	21	円
平均	40	24.0	23.0	
柱間距離 (cm)		平均 (cm)	全長 (cm)	
P1-P2	116	119	238	
P2-P3	122			

18号柱穴列

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
1	43	26	24	円
2	29	18	18	円
3	43	22	18	円
4	42	20	18	円
平均	39.3	21.5	19.5	
柱間距離 (cm)		平均 (cm)	全長 (cm)	
P1-P2	104	111.7	335	
P2-P3	136			
P3-P4	95			

20号柱穴列

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
1	30	25	24	円
2	41	26	26	円
3	41	27	25	円
平均	37.3	26	25	
柱間距離 (cm)		平均 (cm)	全長 (cm)	
P1-P2	136	140	280	
P2-P3	144			

柱穴列観察表 3

22号柱穴列

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
1	33	30	28	円
2	24	29	20	円
3	27	22	21	円
4	27	24	22	円
5	27	23	18	円
6	37	27	24	円
平均	29	25.8	22.2	
柱間距離 (cm)		平均 (cm)	全長 (cm)	
P1-P2	213	173.6	863	
P2-P3	180			
P3-P4	242			
P4-P5	138			
P5-P6	95			

25号柱穴列

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
1	39	23	22	円
2	37	20	20	円
3	35	18	17	円
平均	37	20	20	
柱間距離 (cm)		平均 (cm)	全長 (cm)	
P1-P2	177	163.5	322	
P2-P3	150			

27号柱穴列

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
1	31	22	20	円
2	35	20	19	円
3	32	20	20	円
4	31	20	18	円
5	32	19	19	円
6	36	21	20	円
平均	32.8	20.3	19.3	
柱間距離 (cm)		平均 (cm)	全長 (cm)	
P1-P2	195	173.4	865	
P2-P3	167			
P3-P4	162			
P4-P5	174			
P5-P6	169			

29号柱穴列

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
1	33	28	15	楕円
2	34	14	14	円
3	32	22	16	円
平均	33	21.3	15	
柱間距離 (cm)		平均 (cm)	全長 (cm)	
P1-P2	118	122.5	242	
P2-P3	127			

23号柱穴列

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
1	24	17	17	円
2	20	19	18	円
3	27	20	16	円
平均	23.7	18.7	17	
柱間距離 (cm)		平均 (cm)	全長 (cm)	
P1-P2	170	147.5	295	
P2-P3	125			

24号柱穴列

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
1	41	20	20	円
2	30	19	16	円
3	30	22	21	円
平均	33.7	20.3	19	
柱間距離 (cm)		平均 (cm)	全長 (cm)	
P1-P2	147	150	300	
P2-P3	153			

26号柱穴列

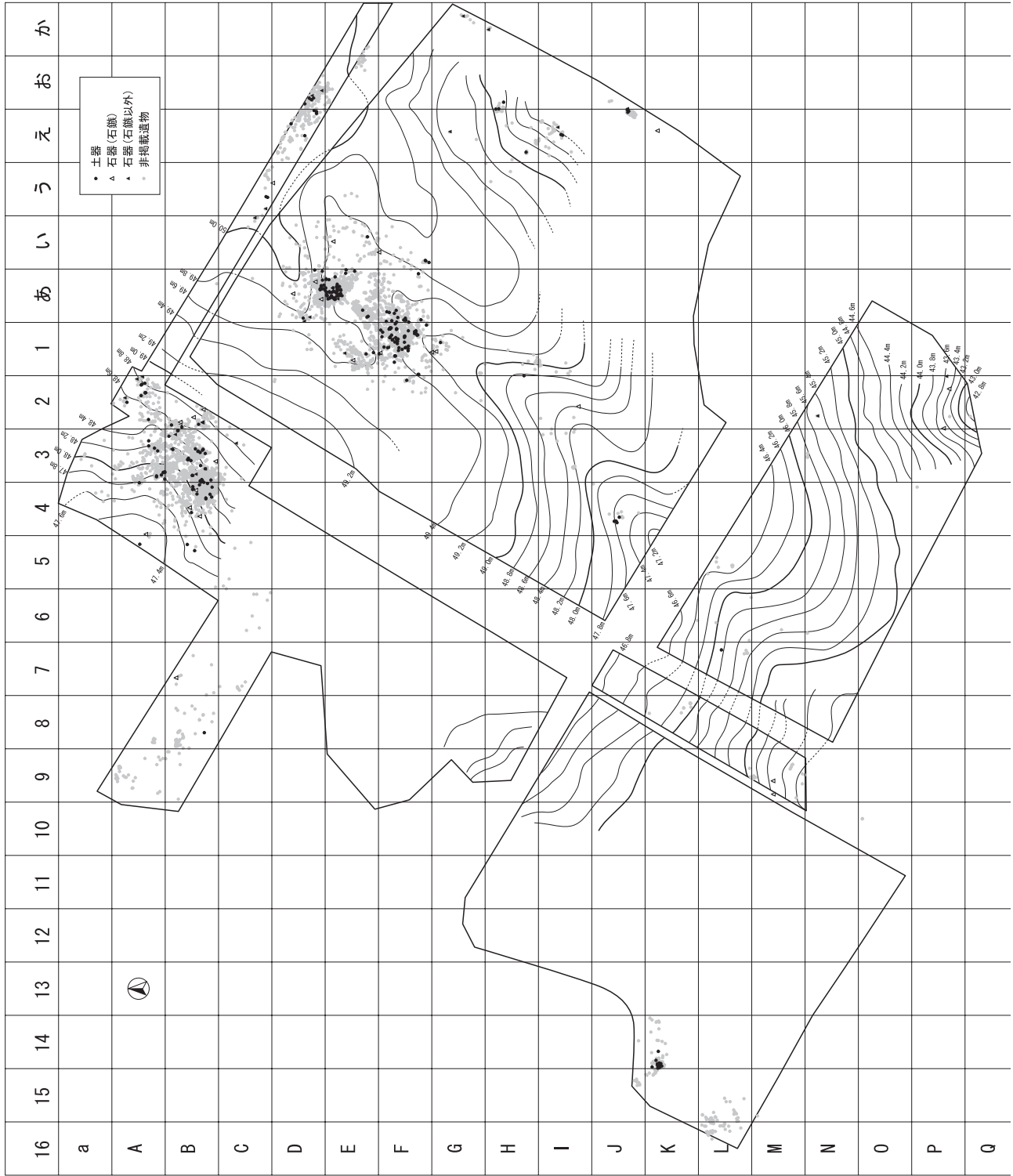
Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
1	60	25	24	円
2	47	26	22	円
3	30	27	25	円
4	74	23	24	円
平均	52.8	25.3	23.8	
柱間距離 (cm)		平均 (cm)	全長 (cm)	
P1-P2	137	132.0	395	
P2-P3	134			
P3-P4	125			

28号柱穴列

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
1	30	19	19	円
2	24	24	18	円
3	23	22	19	円
平均	25.7	21.7	18.7	
柱間距離 (cm)		平均 (cm)	全長 (cm)	
P1-P2	196	181.5	363	
P2-P3	167			

30号柱穴列

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
1	38	31	22	楕円
2	39	21	20	円
3	50	51	19	楕円
4	46	38	26	楕円
5	56	28	25	楕円
6	53	32	25	楕円
7	54	30	25	楕円
8	39	21	20	円
平均	46.9	31.5	22.8	
柱間距離 (cm)		平均 (cm)	全長 (cm)	
P1-P2	160	205	1430	
P2-P3	230			
P3-P4	210			
P4-P5	195			
P5-P6	240			
P6-P7	215			
P7-P8	185			



第31図 縄文時代晩期遺物出土状況図 (1グリッド: 20m)

(2) 遺物 (第32～50図)

①土器 (第32～42図)

縄文時代晩期の土器は、深鉢形土器と浅鉢形土器に形態分類できる。概して深鉢形土器は粗製、浅鉢形土器は精製である。

深鉢形土器は、主に口縁部の外反の仕方、胴部の張り出し具合や角度、厚みや文様等によりⅫ・Ⅻ類の2つに大別できる。

なお、土器の出土状況については、主に、Eーあ区、Fー1区、Bー3・4区の3地点に集中しており、遺構との関わりについては明確な関連性は見出せない。

Ⅻ類土器 (第32図)

171～186までは、Ⅻ類に分類した。これらは概ねどれも、口縁部は外反するものの先端部にかけて緩やかに内側に折れ、数条の沈線を有するものである。173～176は、特に、頸部あたりでくっきりと張り出ししながら、先端部分は内側に屈曲するものである。185・186は頸部あたりの破片であるが、ここでもはっきりと外面に張り出ししながら、内側に湾曲する様子や施されている深い沈線が見て取れる。

Ⅻa類土器 (第32・33図)

187～199までは、Ⅻa類に分けられる。これらは、口縁部の端が、直立するか外側にやや広がるものであり、口縁部の幅は狭いタイプである。大形のものも多く、191・193・195は、口径がそれぞれ、41.4cm・40cm・42.7cmを測り、外面には条痕が施されている。188・189・199は、外面に煤が付着し、煮炊きに利用されていたようである。

Ⅻb類土器 (第34～36図)

200～229は、Ⅻa類よりも口縁部の端が外側に広がり、幅が広くⅫb類に分類した。また、施されている条痕も深くはっきりとしているものが多い。200～204は、外面はナデ調整で条痕が、内面はナデ調整が施されている。205の外面は、条痕を施した後ナデ仕上げをしており、表面が滑らかである。206～212は、外面はナデ調整に条痕が施され、内面調整はナデである。213は、外面は条痕を施した後、表面をナデ滑らかに仕上げしており、内面はナデ調整である。214・223・229は、仕上げが粗く、外面は

胎土の粒子の動き具合から、ヘラケズリ後に条痕を施しているものと考えられる。また、223は他の個体の条痕が左右に施されているのに対し、上下に施されているところが特筆される。217は、外面が軽いナデ程度の調整であるのに対し、内面には条痕が施されている。200・215・216・218は、特に大型のもので、口径はそれぞれ42.6cm・43cm・44.2cm・44cmを測る。

頸部～胴部 (第36～38図)

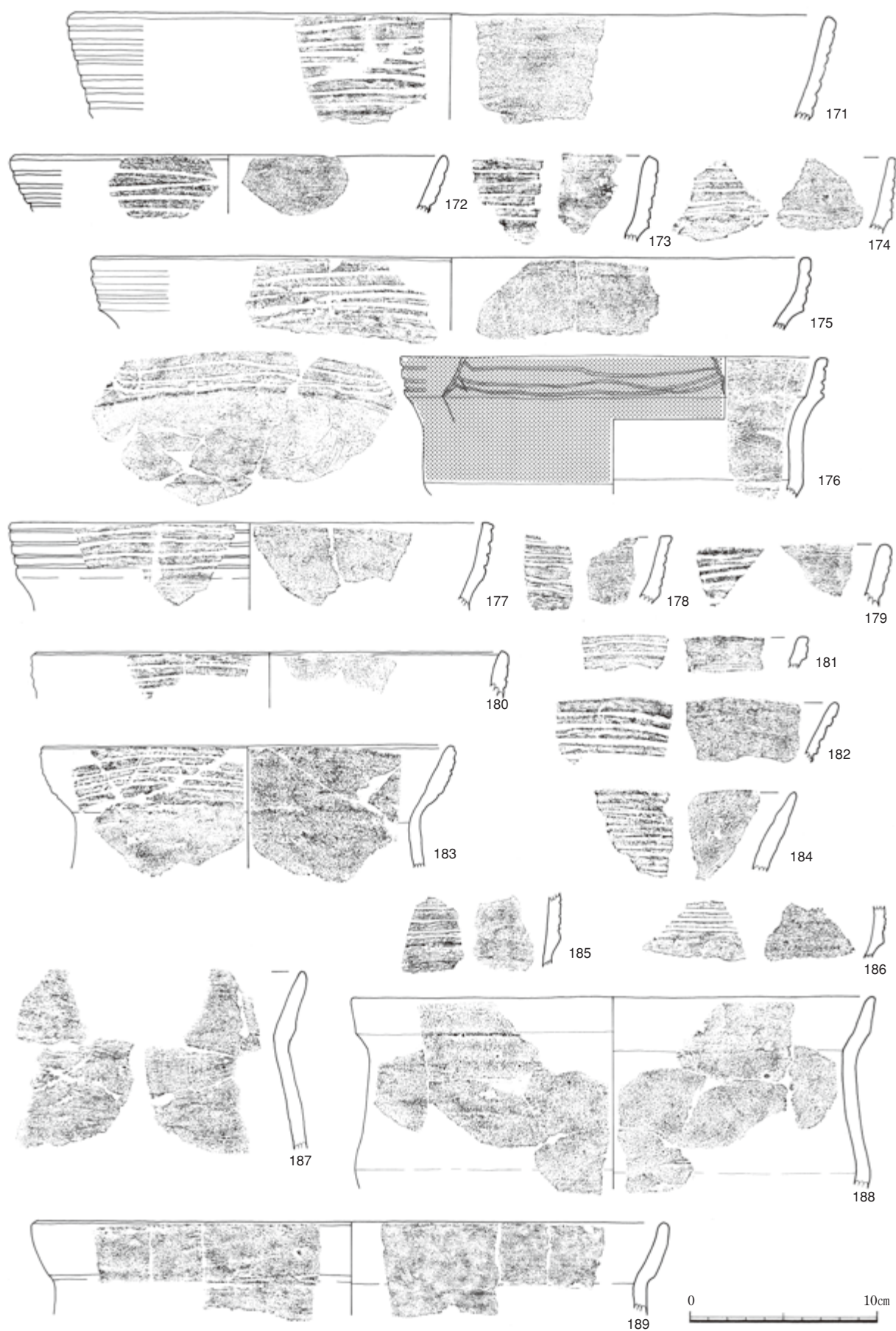
230～243は、頸部から胴部である。231・232・243は、内外面共にナデ調整で、条痕が施されている。234・240の外面調整は、ヘラケズリ後ナデ仕上げをしている。241には、外面に煤が残る。胴部の張り出し具合では、230は急角度で古い段階のものであると考えられる。237は胴部最大径30.6cmを測り、外面に煤の付着が確認できる。238・241は、緩やかに張りだしており新段階のものであると思われる。

244は碗形をし、245は丁寧なミガキの精製で、平皿タイプの特異な器形をしており、外面に煤が付着している。

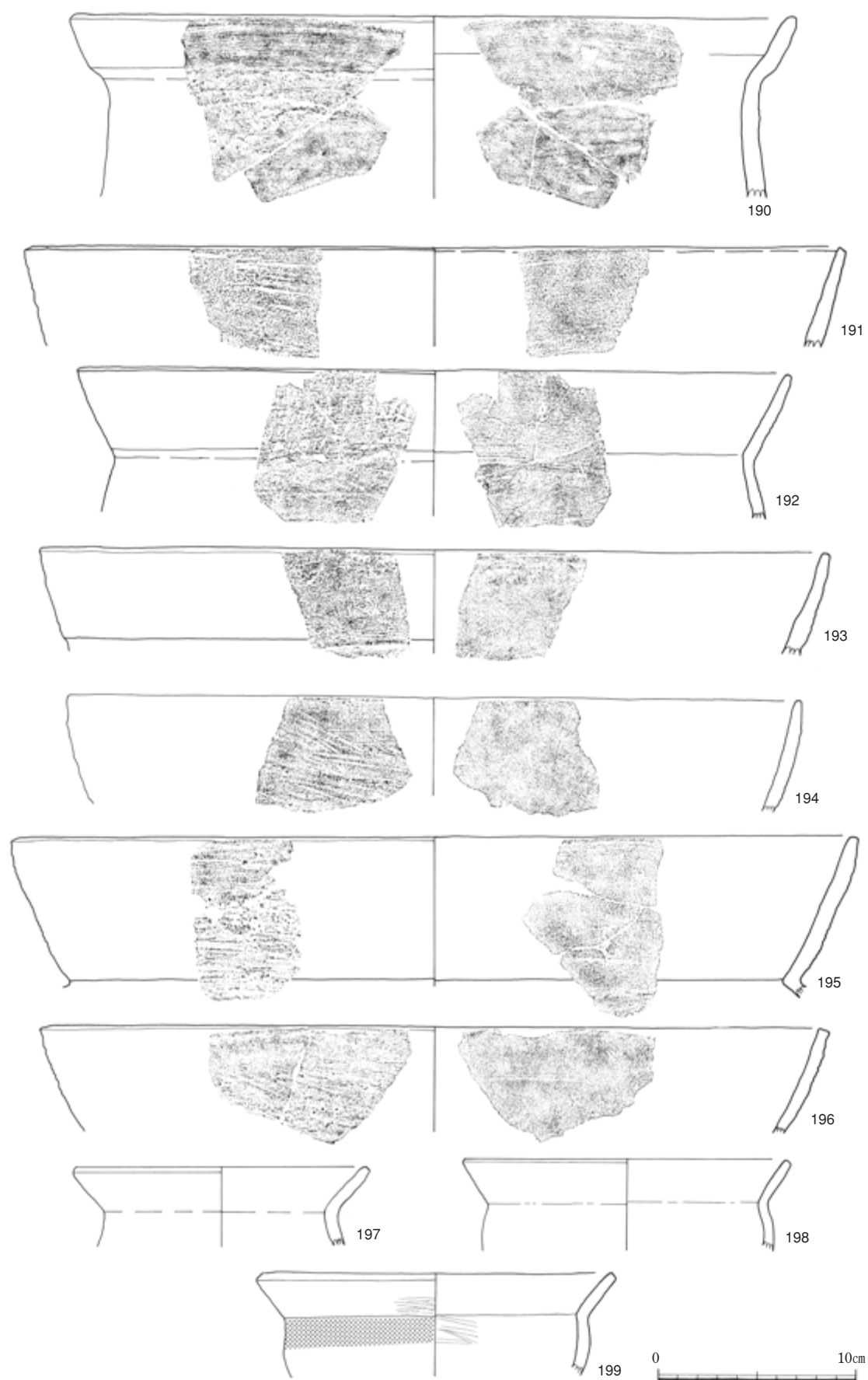
底部 (第38・39図)

246～278は、底部である。底部は上げ底・平底の2つに大別できる。また、平底タイプは、底部の端が胴部から直線的に下りてくるタイプと、外側に張りだしてくるタイプとに分けられる。内外面共にナデ調整がほとんどで、中には条痕が残るものもある。

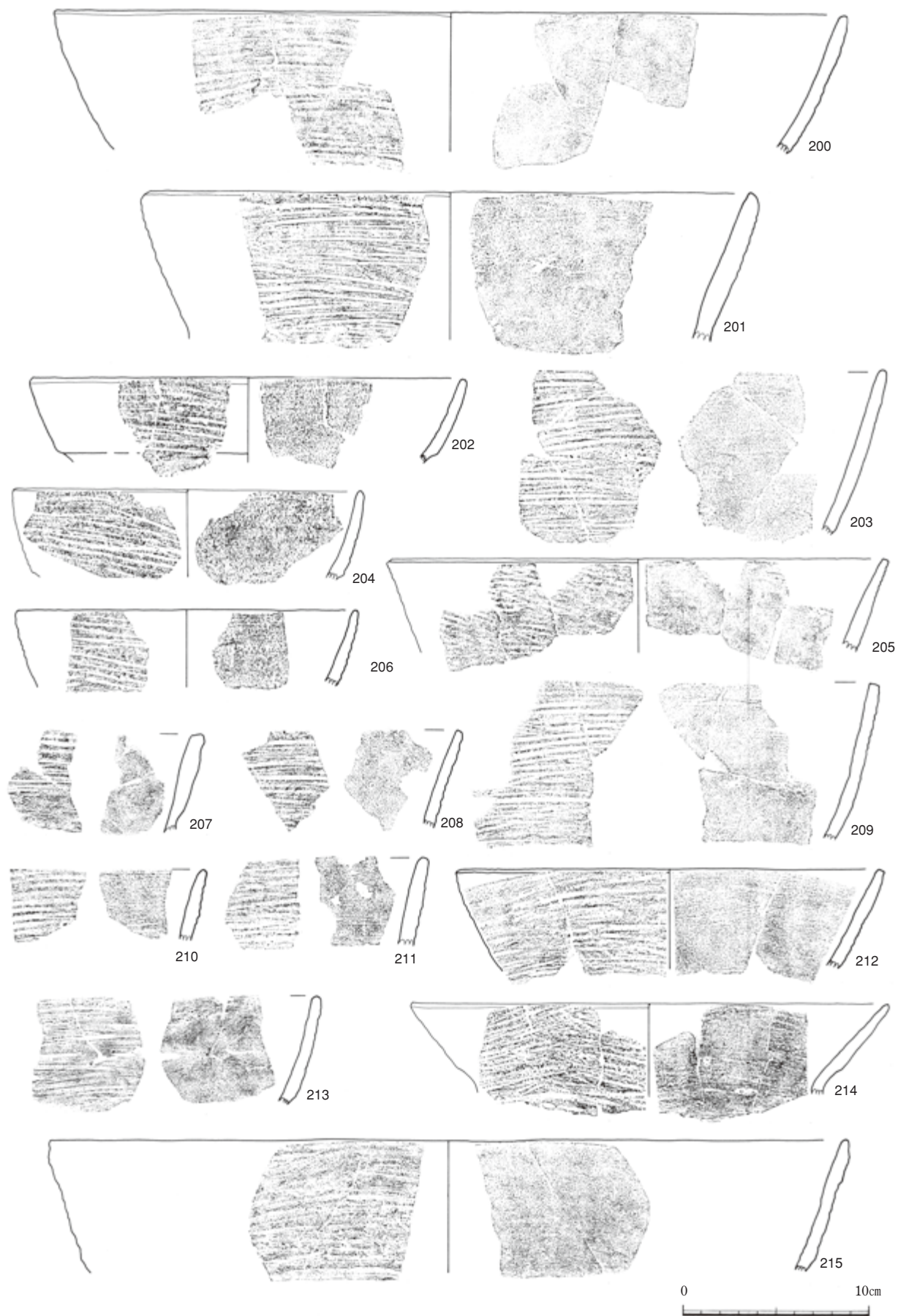
上げ底は247の一点のみで、他の個体より比較的古いものであると考えられる。246は、底径11.6cmを測る。248～259は、胴部から底部にかけて外反せず直線的に端まで下りてくるもので、260～278は、張り出し具合は大小様々であるが、端の部分が外側に張り出すものである。前者が古いタイプで、後者が新しいタイプであると思われる。268・277は、外面に条痕が残る。246は内外面に、269は内面に煤が付着する。



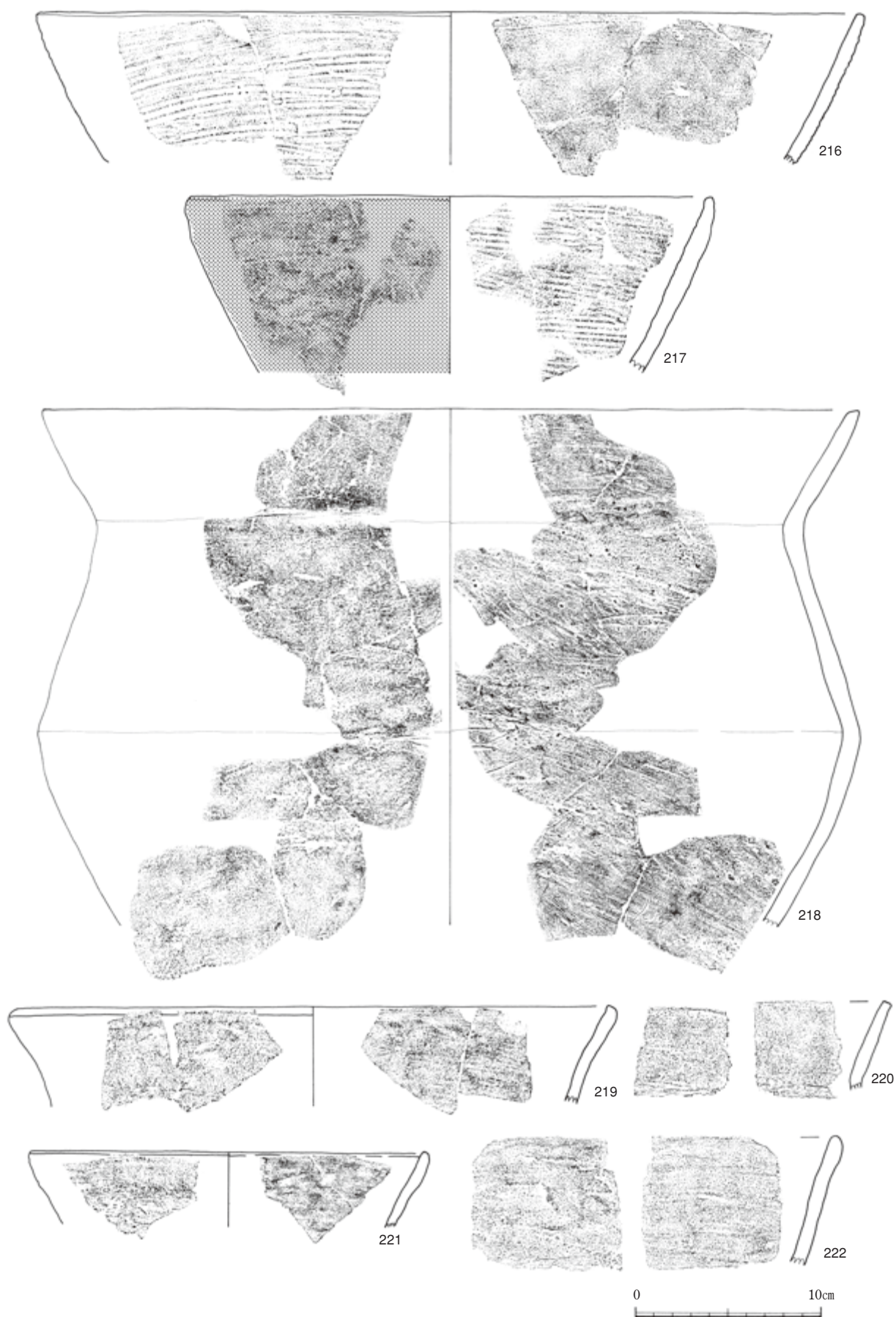
第32図 XII類土器, XII a類土器 (1)



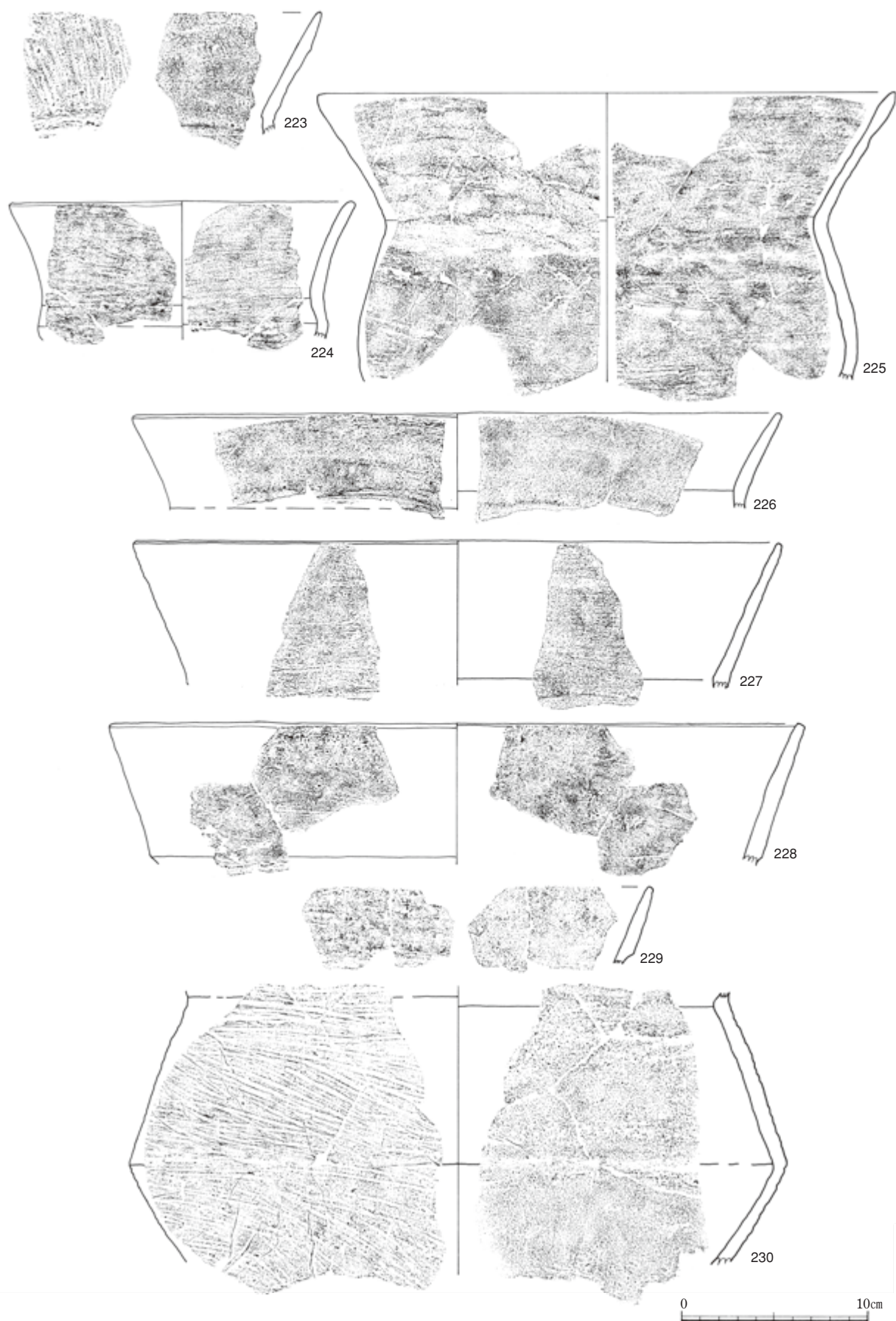
第33図 Ⅲa類土器（2）



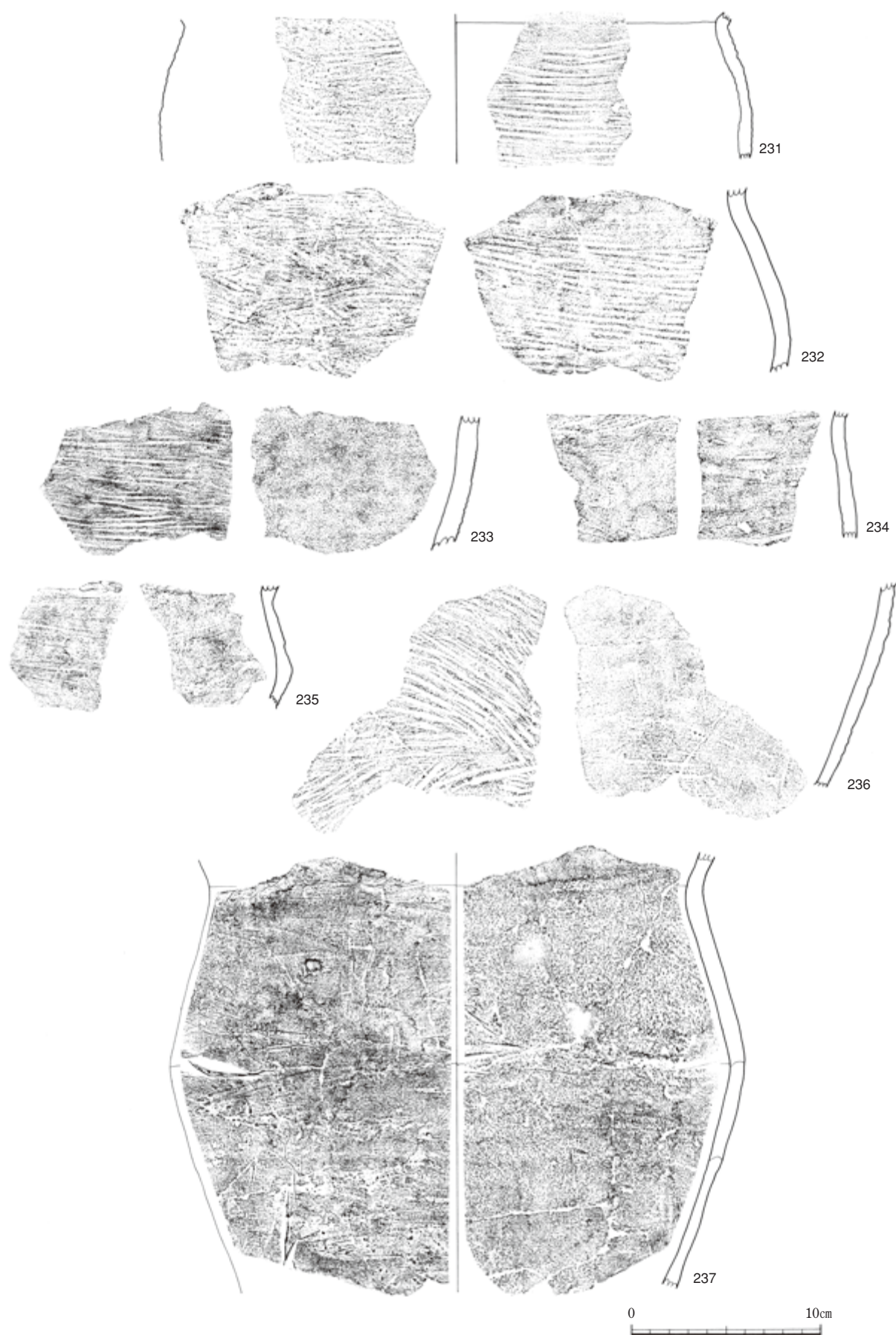
第34図 Ⅻb類土器(1)



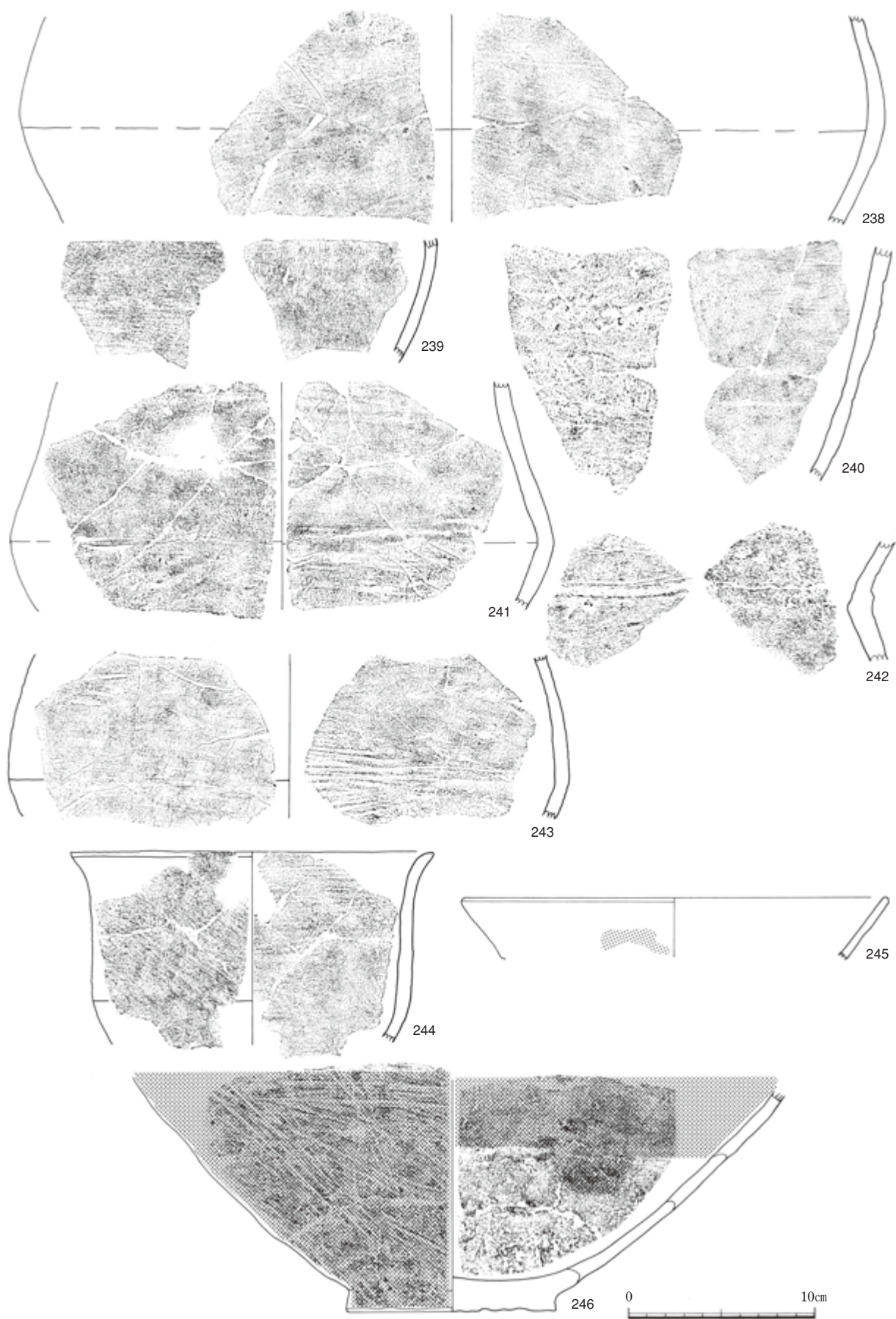
第35図 Ⅲb類土器（2）



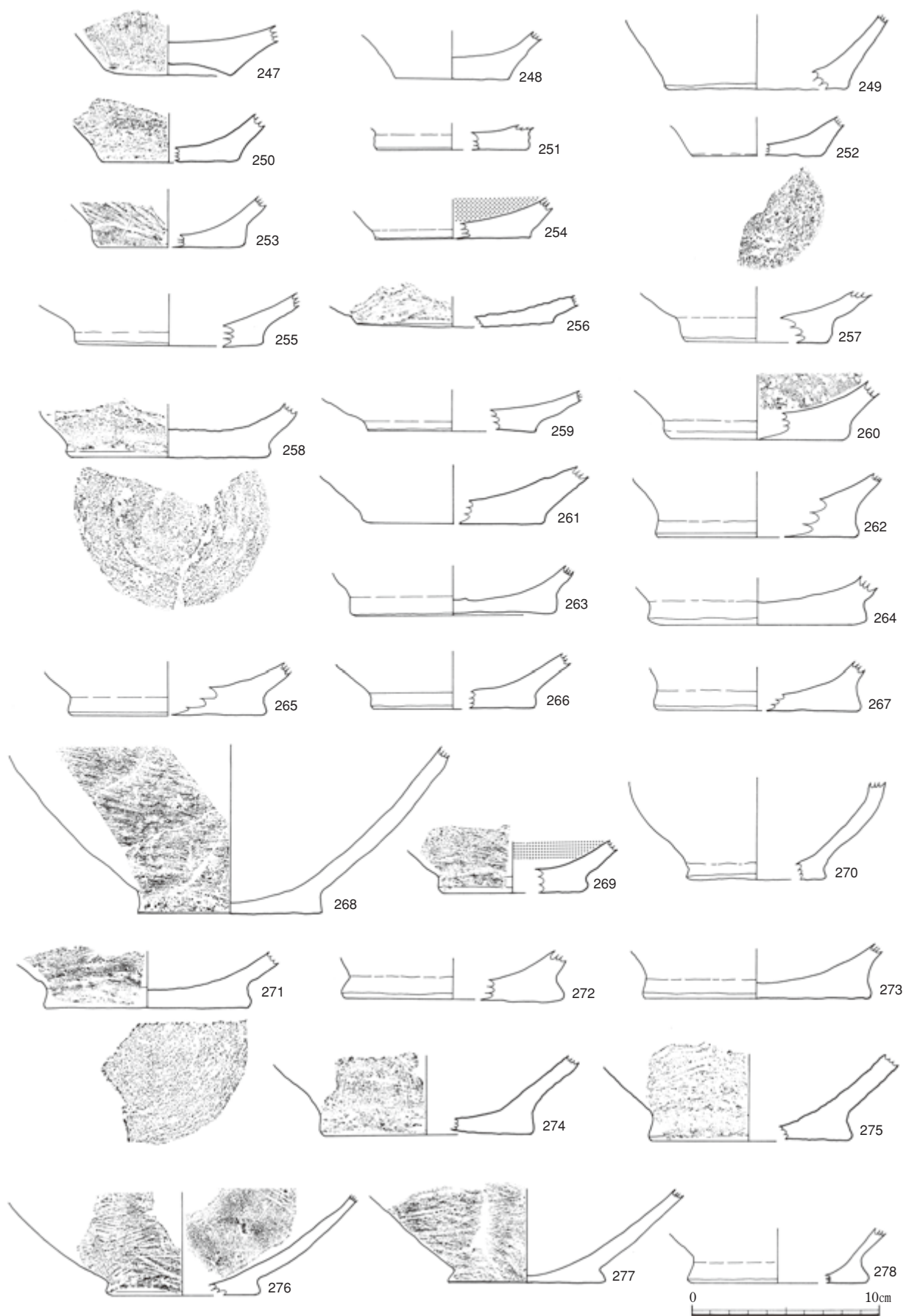
第36図 XII b類土器 (3), XII・XIII類土器 (1)



第37図 XII・XIII類土器（2）



第38図 XII・XIII類土器（3）



第39図 XII・Ⅲ類土器（4）

縄文時代晩期土器観察表 1

採図 番号	遺物 番号	層位	出土区	部位	色 調		胎		土		焼成	外 面	内 面	類	備 考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他					
第 32 図	171	Ⅲ	B-3	口縁部	にぶい黄褐	黒 褐	○	○			良	沈線,ナデ	ナデ	XII	
	172	Ⅲ	I-え	口縁部	にぶい黄橙	橙	○	○			良	沈線,ナデ	ナデ	XII	
	173	Ⅲ	H-お	口縁部	黒 褐	暗 褐	○	○	○		良	沈線,ナデ	ナデ	XII	
	174	Ⅲ	K-13	口縁部	褐	黒 褐	○	○			良	沈線	ナデ	XII	
	175	Ⅱ	A-2	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	○	○			良	沈線,ナデ	ナデ	XII	
	176	Ⅲ	A-2	口縁部	浅 黄	灰黄褐	○	○			良	沈線,ナデ	ナデ	XII	外面煤付着
	177	Ⅲ	I-え	口縁部	にぶい黄	黒 褐	○	○	○		良	沈線,ナデ	ナデ	XII	
	178	Ⅲ	K-14	口縁部	暗 褐	暗 褐	○	○			良	沈線,ミガキ	ミガキ	XII	
	179	Ⅲ	Q-11	口縁部	オリブ黒	オリブ黒	○				良	条痕,ナデ	条痕,ナデ	XII	
	180	Ⅲ	H-お	口縁部	黒 褐	黒 褐	○	○			良	沈線,ナデ	ナデ	XII	
	181	Ⅲ	K-14	口縁部	橙	橙	○	○			良	沈線,ミガキ	ミガキ	XII	
	182	Ⅲ	B-4	口縁部	橙	褐	○	○			良	沈線,ミガキ	ミガキ	XII	
	183	Ⅲ	A-2	口縁部	褐	暗赤褐	○	○	○		良	沈線,ナデ	ナデ	XII	
	184	Ⅲ	E-あ	口縁部	にぶい黄褐	黒 褐	○	○			良	条痕	ナデ	XII	
	185	Ⅲ	K-14	口縁部	にぶい赤褐	暗赤褐	○	○			良	沈線,ナデ	ナデ	XII	
	186	Ⅲ	K-14	口縁部	暗赤褐	黒 褐	○	○			良	沈線,ナデ	ナデ	XII	
	187	Ⅲ	E-い	口縁部	オリブ黒	灰	○	○	○		良	ナデ	ナデ	XIIIa	
	188	Ⅲ	J-4	口縁部	にぶい黄橙	黒	○	○			良	ナデ	ナデ	XIIIa	外面煤付着
	189	Ⅲ	B-4	口縁部	黄 灰	にぶい黄橙	○	○			良	ナデ	ナデ	XIIIa	外面煤付着
第 33 図	190	Ⅲ	A-2	口縁部	浅 黄	黒 褐	○	○			良	ナデ	ナデ	XIIIa	
	191	Ⅲ	E-あ	口縁部	灰	灰 黄	○	○			良	条痕,ナデ	ナデ	XIIIa	
	192	Ⅲ	D-え	口縁部	浅 黄	灰 黄	○	○			良	条痕,ナデ	ナデ	XIIIa	外面煤付着
	193	Ⅲ	B-3	口縁部	灰 黄	にぶい黄褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	XIIIa	
	194	Ⅲ	E-あ	口縁部	黒 褐	灰黄褐	○	○			良	条痕,ミガキ	ミガキ	XIIIa	
	195	Ⅲ	F-1	口縁部	にぶい褐	黒 褐	○	○			良	ヘラケズリ後条痕	ミガキ	XIIIa	
	196	Ⅲ	F-1	口縁部	にぶい黄褐	黒 褐	○	○			良	ナデ	ナデ	XIIIa	
	197	Ⅲ	A・B-5	口縁部	褐	明 褐	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIIIa	
	198	Ⅲ	F-あ	口縁部	オリブ黒	オリブ黒	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIIIa	
	199	Ⅲ	F-あ	口縁部	黄 灰	灰暗黄	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIIIa	外面煤付着
第 34 図	200	Ⅲ	F-1・あ・い	口縁部	にぶい黄褐	黒 褐	○	○			良	条痕,ナデ	ナデ	XIIIb	
	201	Ⅲ	E-あ	口縁部	灰黄褐	褐	○	○	○		良	条痕,ナデ	ナデ	XIIIb	
	202	Ⅲ	F-1	口縁部	黄 灰	暗灰黄	○	○			良	条痕,ナデ	ナデ	XIIIb	
	203	Ⅲ	F-1	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	○	○			良	条痕,ナデ	ナデ	XIIIb	
	204	Ⅲ	E-1	口縁部	黒 褐	黒 褐	○	○	○		良	条痕,ナデ	ナデ	XIIIb	
	205	Ⅲ	E-あ	口縁部	にぶい黄橙	灰黄褐	○	○			良	条痕後ナデ	ナデ	XIIIb	
	206	Ⅲ	F-1	口縁部	黄 灰	暗灰黄	○	○	○		良	条痕,ナデ	ナデ	XIIIb	
	207	Ⅲ	K-14	口縁部	明黄褐	黒 褐	○	○			良	条痕,ナデ	ナデ	XIIIb	
	208	Ⅲ	E-あ	口縁部	黄 灰	黒 褐	○	○	○		良	条痕,ナデ	ナデ	XIIIb	
	209	Ⅲ	E-あ, F-1	口縁部	黒	にぶい黄褐	○	○			良	条痕,ナデ	ナデ	XIIIb	
	210	Ⅲ	D-あ	口縁部	黄 褐	明黄褐	○	○			良	条痕,ナデ	ナデ	XIIIb	
	211	Ⅲ	D-あ	口縁部	黒 褐	黒	○	○			良	条痕,ナデ	ナデ	XIIIb	
	212	Ⅲ	E・F-あ	口縁部	にぶい黄橙	黒 褐	○	○			良	条痕,ナデ	ナデ	XIIIb	外面煤付着
	213	Ⅲ	B-3	口縁部	にぶい橙	褐	○	○			良	条痕後ナデ	ナデ	XIIIb	外面煤付着
	214	Ⅲ	F-1	口縁部	灰オリブ	オリブ黒	○	○			良	ヘラケズリ後条痕	ナデ	XIIIb	
	215	Ⅲ	F-1	口縁部	橙	橙	○	○			良	条痕	ミガキ	XIIIb	
第 35 図	216	Ⅲ	F-あ	口縁部	黒 褐	にぶい黄褐	○	○			良	条痕,ナデ	ナデ	XIIIb	
	217	Ⅲ	E-あ	口縁部	灰 黄	黒 褐	○	○			良	ナデ	条痕	XIIIb	沈線(弱),外面煤付着
	218	Ⅲ	A-3, B-4, F-1	口縁部	暗 褐	明赤褐	○	○			良	ヘラケズリ後ナデ	ナデ	XIIIb	外面煤付着
	219	Ⅲ	E-あ	口縁部	浅 黄	にぶい黄	○	○			良	ナデ	ナデ	XIIIb	
	220	Ⅲ	E-あ	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	○	○			良	ナデ	ナデ	XIIIb	
	221	Ⅲ	E-あ	口縁部	にぶい黄橙	褐 灰	○	○			良	ナデ	ナデ	XIIIb	
	222	Ⅲ	C-3	口縁部	浅 黄	褐 灰	○	○			良	ナデ	ナデ	XIIIb	
	223	Ⅲ	D-あ	口縁部	灰黄褐	黒 褐	○	○			良	ヘラケズリ後条痕	ナデ	XIIIb	
	224	Ⅲ	N-7・8	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	○	○			良	ナデ	ナデ	XIIIb	
	225	Ⅲ	E-1・あ, F-1	口縁部	浅黄橙	浅 黄	○	○	○		良	条痕,ナデ	ナデ	XIIIb	
第 36 図	226	Ⅲ	E-あ	口縁部	黒 褐	黒 褐	○	○			良	条痕,ナデ	ナデ	XIIIb	
	227	Ⅲ	E-1	口縁部	橙	浅黄橙	○	○			良	ナデ	ナデ	XIIIb	
	228	Ⅲ	E-あ	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	○	○			良	ナデ,沈線	ナデ	XIIIb	
	229	Ⅲ	K-14	口縁部	オリブ褐	黄 褐	○	○			良	ヘラケズリ後ナデ,沈線	ナデ	XIIIb	
	230	Ⅲ	E-あ	胴 部	黄 灰	暗灰黄	○	○	○		良	条痕,ナデ	ナデ	XII・XIII	
	231	Ⅲ	E-あ	胴 部	橙	黒 褐	○	○			良	条痕,ナデ	条痕,ナデ	XII・XIII	
	232	Ⅲ	D-あ	胴 部	オリブ褐	明 褐	○	○	○		良	条痕,ナデ	条痕,ナデ	XII・XIII	
	233	Ⅲ	E-あ	胴 部	にぶい橙	黒 褐	○	○	○		良	条痕,ナデ	ナデ	XII・XIII	
	234	Ⅲ	E-あ	胴 部	浅 黄	にぶい黄	○	○	○		良	ヘラケズリ後ナデ	ナデ	XII・XIII	
	235	Ⅲ	E-あ	胴 部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			良	条痕,ナデ	ナデ	XII・XIII	
第 37 図	236	Ⅲ	E-あ, F-1	胴 部	黒	明黄褐	○	○			良	条痕,ナデ	ナデ	XII・XIII	
	237	Ⅲ	A-2	胴 部	明黄褐	暗オリブ褐	○	○			良	ナデ	ナデ	XII・XIII	外面煤付着
	238	Ⅲ	A-3, K-13・14	胴 部	暗黄褐	黒褐	○	○			良	ヘラケズリ後ナデ	ナデ	XII・XIII	外面煤付着
	239	Ⅲ	E-あ, F-1	胴 部	黒	灰オリブ	○	○			良	ナデ	ナデ	XII・XIII	
	240	Ⅲ	E-あ	胴 部	灰黄褐	にぶい褐	○	○			良	ナデ	ナデ	XII・XIII	
	241	Ⅲ	E-あ	胴 部	にぶい黄橙	黒 褐	○	○			良	ヘラケズリ後ナデ	ナデ	XII・XIII	外面煤付着
	242	Ⅲ	D-あ	頸 部	黄 褐	灰黄褐	○	○			良	ナデ	ナデ	XII・XIII	
	243	Ⅲ	—	胴 部	黄 灰	黒 褐	○	○			良	条痕,ナデ	条痕,ナデ	XII・XIII	外面煤付着
	244	Ⅲ	L-7	口縁部	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○			良	ナデ	ナデ	XII・XIII	
	245	Ⅲ	F-1	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	○	○			良	ナデ	ナデ	XII・XIII	外面煤付着
第 38 図	246	Ⅲ	B-3	胴部	暗茶褐色	暗茶褐色	○	○			良	ヘラケズリ	ナデ	XII・XIII	内外面煤付着

浅鉢形土器（第40～42図）

浅鉢は、総括してⅧ類に分類する。

279と280は、口縁部に沈線を有し、端部が内傾するものである。281～296は、口縁部に沈線を有し、肩部から「くの字状」に大きく屈曲し、口縁部が外反するものである。端部は、直線上に立ち上がるもの（288・290・293・296）、外傾するもの（281・291）などがある。

297～300は、肩部から「くの字状」に大きく屈曲し、口縁部が外反するものであるが、沈線を有しないものである。肩部から口縁部にかけての立ち上がりは、直線的なもの（297・299）、内湾気味のもの（300）、外反気味のもの（298）などに分けられる。また、298は形態的にやや深くなるとされる。

301～314は、胴部片である。301～303・307・309・312は、胴部で屈曲し直接外反しながら口縁部へと立ち上がるものである。306・310は、胴部中央部で大きく外へ張り出し最大径を測り、頸部へと内傾していくものである。308・313・314は、明瞭な

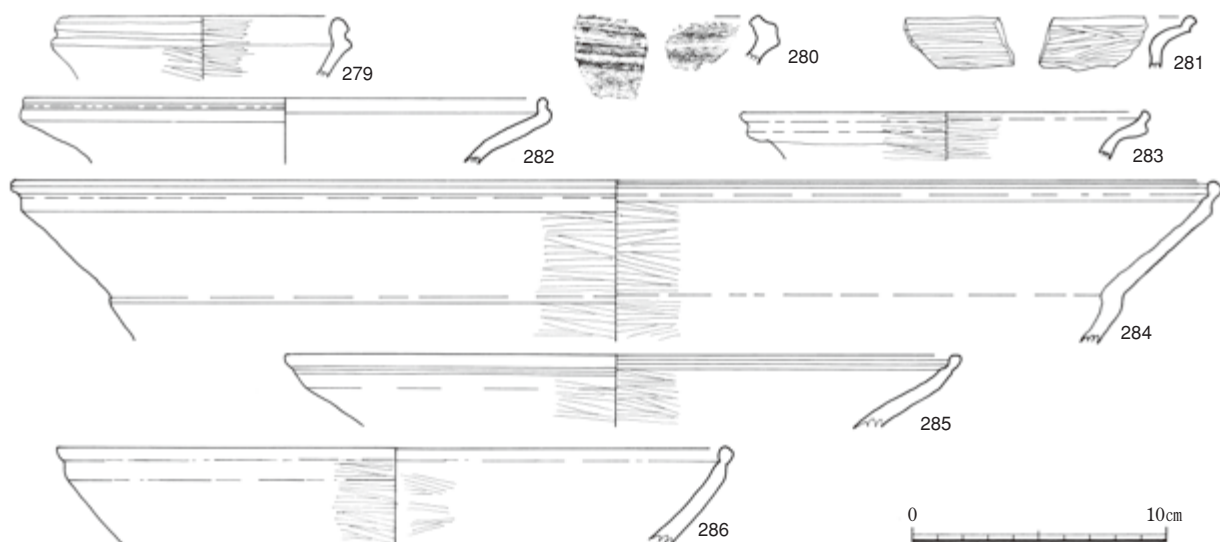
屈曲部を持たず碗状になる。特に308・313は、内外面共にミガキによる丁寧な調整を行っており、薄手で黒光りするものである。306・312は共に外面に煤が付着する。

315～330は、明瞭な屈曲部を持たず弧を描くように碗状に口縁部へと立ち上がる精製タイプの浅鉢土器である。内外面共にミガキによる丁寧な調整が施される。316～323、325～330は口縁部に沈線が施されており、321は小型である。頸部でわずかにくびれ、口縁部は直行する。324は、胴部から内湾気味に口縁部に至るものである。口縁部は、外反するもの（322・323）、直線的に立ち上がるもの（328・330）、内湾するもの（327）などに分類できる。

326は、他の個体とは器形が異なり、胴部で口縁部より径が大きく広がり、口縁部に向かい「逆くの字状」に屈曲するものである。器形では、310に類似する。口縁部内側に沈線が見られる。

縄文時代晩期土器観察表 2

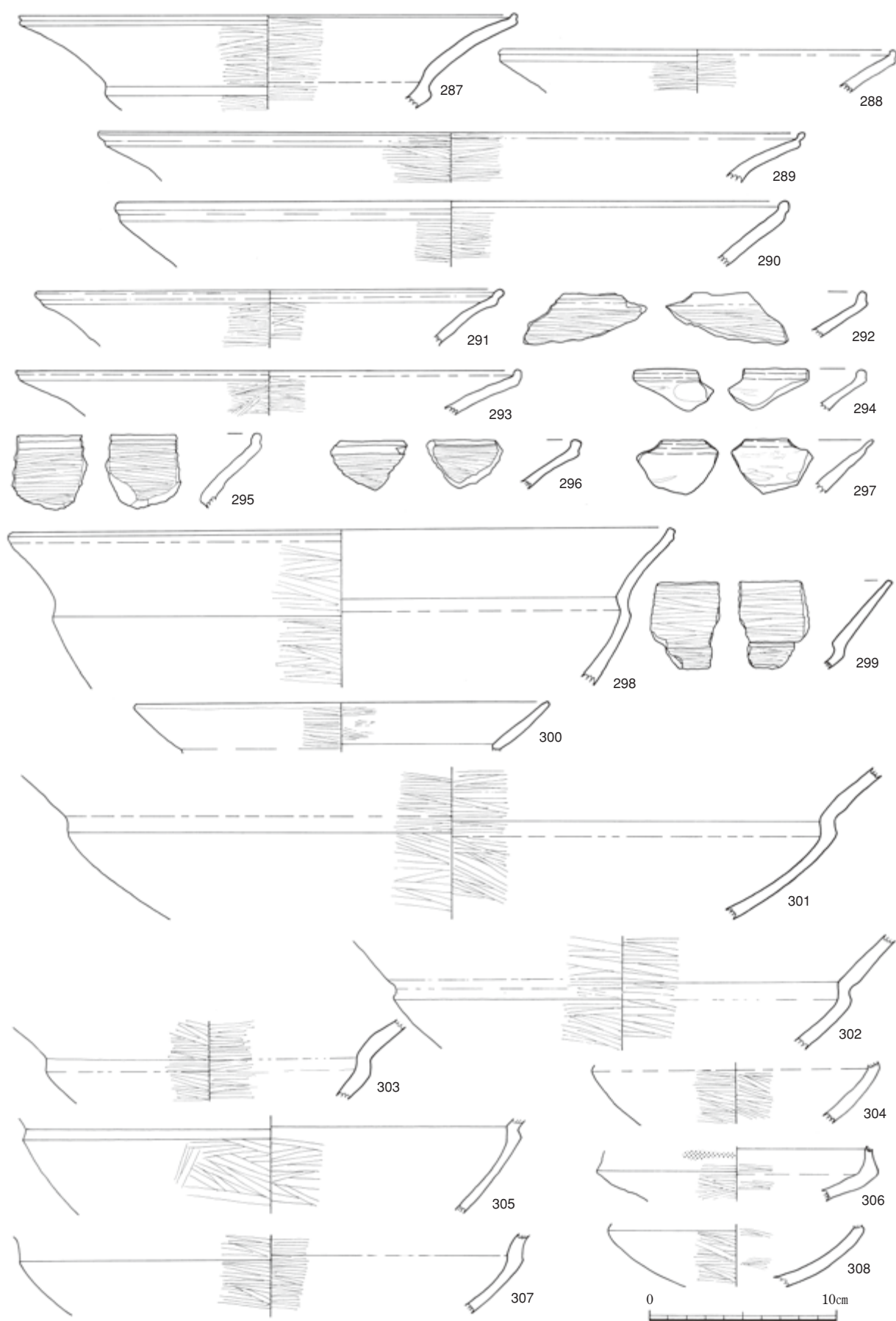
挿図 番号	遺物 番号	層位	出土区	部位	色 調		胎		土		焼成	外 面	内 面	類	備 考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他					
第 39 図	247	Ⅲ	A-2	底 部	浅 黄	橙	○	○			良	ナデ	ナデ	XII・XIII	
	248	Ⅲ	I-え	底 部	にぶい橙	黒 褐	○	○			良	ナデ	ナデ	XII・XIII	
	249	Ⅲ	E-あ	底 部	灰黄褐	橙	○	○			良	ナデ	ナデ	XII・XIII	
	250	Ⅱ	B-3	底 部	にぶい黄褐	浅 黄	○	○	○		良	ナデ	ナデ	XII・XIII	
	251	Ⅲ	B-3	底 部	にぶい黄橙	褐 灰	○	○			良	ナデ	ナデ	XII・XIII	
	252	Ⅲ	A-2	底 部	黄 灰	灰 黄	○	○			良	ナデ	ナデ	XII・XIII	
	253	Ⅲ	F-1	底 部	にぶい黄橙	浅黄橙	○	○	○		良	ナデ	ナデ	XII・XIII	
	254	Ⅲ	B-3	底 部	にぶい黄褐	黒 褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	XII・XIII	内面煤付着
	255	Ⅲ	E-あ	底 部	にぶい黄橙	暗オリーブ褐	○	○	○		良	ヘラケズリ	ナデ	XII・XIII	
	256	Ⅱ	B-2	底 部	暗灰黄	にぶい黄褐	○	○			良	ナデ	ナデ	XII・XIII	
	257	Ⅲ	E-あ	底 部	にぶい黄橙	橙	○	○	○		良	ナデ	ナデ	XII・XIII	
	258	Ⅱ	C-う	底 部	明 褐	明赤褐	○	○			良	ナデ	ナデ	XII・XIII	
	259	Ⅲ	A-3,B-3・4	底 部	暗 褐	赤 褐	○	○			良	ナデ	ナデ	XII・XIII	
	260	Ⅲ	A-3	底 部	灰 黄	橙	○	○	○		良	ナデ	ナデ	XII・XIII	
	261	Ⅲ	D-3	底 部	暗灰黄	浅黄橙	○	○	○		良	ナデ	ナデ	XII・XIII	
	262	Ⅲ	G-1	底 部	暗灰黄	にぶい橙	○	○	○	砂粒	良	ナデ	ナデ	XII・XIII	
	263	Ⅲ	A-3,B-4	底 部	灰 黄	にぶい黄橙	○	○	○		良	ナデ	ナデ	XII・XIII	
	264	Ⅲ	B-3	底 部	にぶい黄	橙	○	○	○		良	ナデ	ナデ	XII・XIII	
	265	Ⅲ	F-2	底 部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	ナデ	ナデ	XII・XIII	
	266	Ⅲ	F-1	底 部	明黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	ナデ	ナデ	XII・XIII	
	267	Ⅲ	B-8	底 部	黒 褐	灰 黄	○	○	○		良	ナデ	ナデ	XII・XIII	
	268	Ⅲ	E-あ,F-1	胴部～底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○		良	ナデ	条痕,ナデ	XII・XIII	
	269	Ⅲ	D-お	底 部	黒 褐	にぶい褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	XII・XIII	内面煤付着
	270	Ⅲ	D-1	底 部	にぶい褐	黒	○		○		粗	ナデ	ナデ	XII・XIII	外面煤付着
	271	Ⅱ・Ⅲ	A・B-3	底 部	浅 黄	にぶい黄	○	○			良	ナデ	ナデ	XII・XIII	
	272	Ⅲ	E-1,F-あ	底 部	褐 灰	にぶい黄橙	○	○			良	ナデ	ナデ	XII・XIII	
	273	Ⅲ	D-あ	底 部	灰	明黄褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	XII・XIII	
	274	Ⅲ	B-3	底 部	暗灰黄	浅 黄	○	○			良	ナデ	ナデ	XII・XIII	
	275	Ⅱ	D-え	底 部	黒 褐	明 褐	○	○			良	ヘラケズリ後ナデ	条痕後ナデ	XII・XIII	
	276	Ⅲ	F-1	底 部	にぶい黄褐	にぶい橙	○	○	○		良	ナデ	板ナデ	XII・XIII	
	277	Ⅲ	F-1・あ	底 部	にぶい黄褐	にぶい褐		○	○		良	条痕,ナデ	板ナデ	XII・XIII	
	278	Ⅲ	E-あ	底 部	にぶい黄橙	にぶい黄	○		○		良	ナデ	ナデ	XII・XIII	



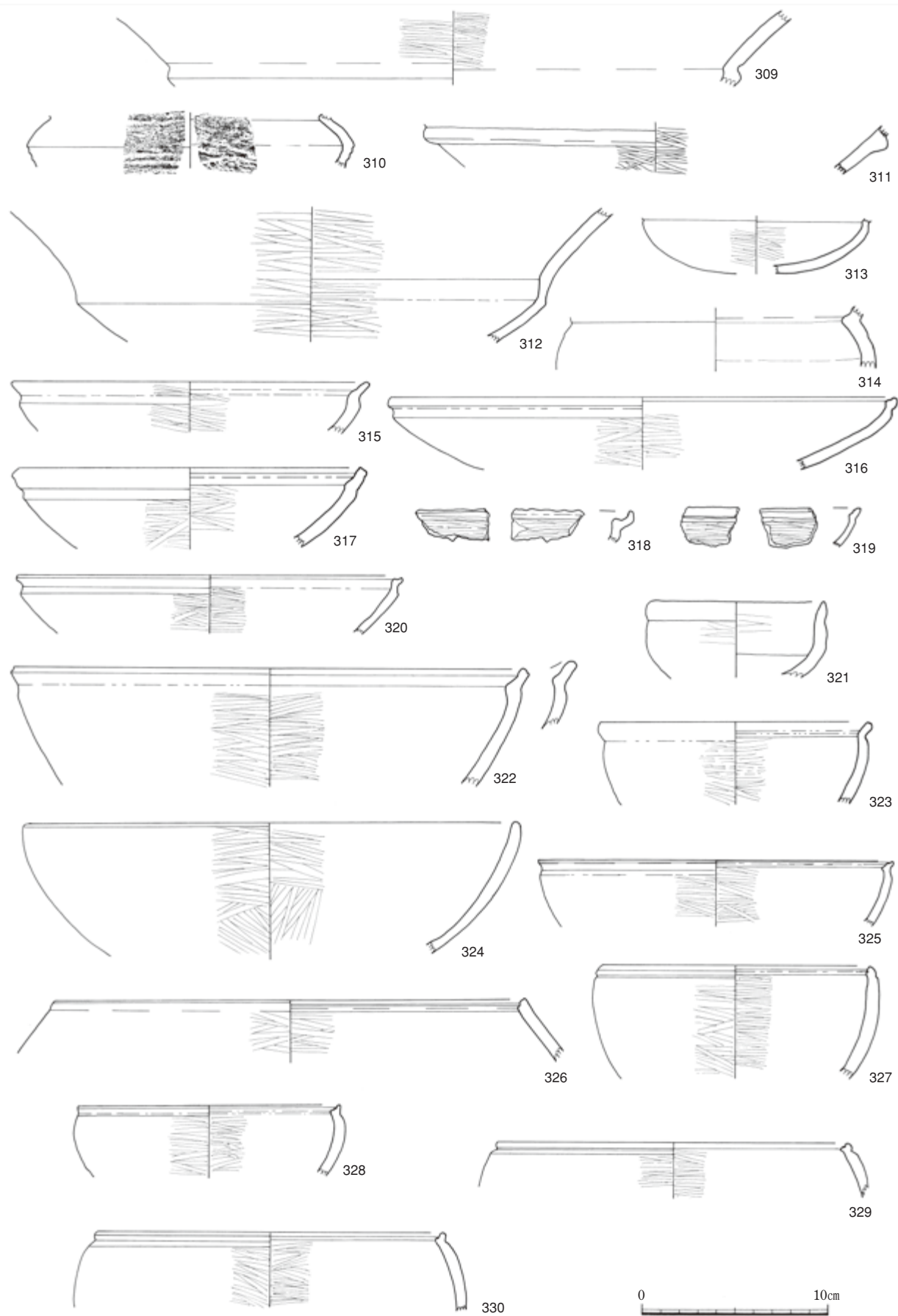
第40図 XII類土器（1）

縄文時代晩期土器観察表 3

挿図 番号	番号	出土区	層位	部位	調		胎 土				焼 成	外 面	内 面	類	備 考
					色 内	色 外	石英	長石	角閃石	その他					
第 40 図	279	D-お	Ⅲ	口縁部	黒 褐	灰黄褐	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	280	—	—	口縁部	褐	にぶい褐		○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	281	—	—	口縁部	黄 褐	明赤褐	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	282	D-い	Ⅲ	口縁部	黒 褐	黒	○			金雲母	良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	283	I-え	Ⅲ	口縁部	黒	黒	○				良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	284	B-3	Ⅲ	口縁部	褐	にぶい褐	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	285	B-3	Ⅲ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
第 41 図	286	B-4	Ⅲ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	287	F-1	Ⅲ	口縁部	黒	黒 褐	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	288	B-3	Ⅲ	口縁部	黒 褐	にぶい黄褐	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	289	I-1	Ⅲ	口縁部	にぶい黄褐	暗 褐	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	290	D-え	Ⅲ	口縁部	灰	暗灰黄	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	291	F-1	Ⅲ	口縁部	灰黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	292	—	Ⅱ	口縁部	灰 黄	灰黄褐	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	293	F-1・あ	Ⅲ	口縁部	黄 灰	黄 灰	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	294	B-3	Ⅲ	口縁部	黄	浅 黄	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	295	—	—	口縁部	黒	にぶい黄褐	○	○	○		良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	296	A-4	Ⅲ	口縁部	黒	暗灰黄	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	297	E-い	Ⅲ	口縁部	黒 褐	にぶい黄橙	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	298	E-あ	Ⅲ	口縁～胴部	黄 灰	にぶい黄	○	○	○		良	ミガキ	ナデ	XIII	
	299	B-5	Ⅲ	口縁部	黒 褐	黒 褐	○	○	○		良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	300	B-3	Ⅲ	口縁部	にぶい黄褐	黒 褐	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	301	E-あ・い,F-1	Ⅲ	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	302	F-1	Ⅲ	胴部	灰 黄	黒 褐	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	303	D-お	Ⅲ	胴部	黒	褐 灰	○				良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	304	D-え	Ⅲ	口縁部	黒 褐	黒	○	○	○		良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	305	B-4	Ⅲ	胴部	黒 褐	黒	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
第 42 図	306	E-あ	Ⅲ	胴部	にぶい黄	にぶい黄褐	○	○			良	ミガキ後ナデ	ミガキ	XIII	外面煤付着
	307	E-あ	Ⅲ	胴部	灰黄褐	にぶい黄	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	308	F-あ	Ⅲ	口縁部	黒 褐	黒	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	309	D-お	Ⅲ	胴部	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	310	F-あ	Ⅲ	胴部	褐	灰黄褐	○	○		赤小石	良	条痕,ナデ	ナデ	XIII	
	311	B-4	Ⅲ	胴部	黒 褐	暗 褐	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	312	B-3	Ⅲ	胴部	黒 褐	黒 褐	○	○	○		良	ミガキ	ミガキ	XIII	外面煤付着
	313	F-1	Ⅲ	胴～底部	黒	黒 褐	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	314	D-え	Ⅲ	胴部	黒 褐	暗灰黄	○	○			良	ナデ	ナデ	XIII	
	315	B-3	Ⅲ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	316	A-3	Ⅲ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	317	A-3	Ⅲ	口縁部	にぶい黄褐	黒 褐	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	318	B-2	Ⅲ	口縁部	暗 褐	黒 褐	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	319	E-あ	Ⅲ	口縁部	黒 褐	黒 褐	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	320	A-3	Ⅲ	口縁部	黒褐	黒褐	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	321	E-あ	Ⅲ	胴部	暗灰黄	にぶい黄	○	○	○		良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	322	K-14	Ⅲ	口縁～胴部	にぶい黄	にぶい黄褐	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	323	B-2	Ⅲ	口縁部	黄 灰	灰 黄	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	324	F-1	Ⅲ	口縁～胴部	黒 褐	黒	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	325	B-4	Ⅲ	口縁部	黒	黒	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	326	H-え	Ⅲ	口縁部	黒	黄 灰	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	327	F-あ	Ⅲ	口縁部	黒褐	灰黄褐	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	328	E-あ	Ⅲ	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	329	F-1	Ⅲ	口縁部	明黄褐	黄 褐	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	330	E・F-1	Ⅲ	口縁部	明赤褐	橙	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	



第41図 Ⅷ類土器（2）



第42図 Ⅷ類土器（3）

②石器（第43図～第50図 331～407）

縄文時代晩期の石器は、石鏃・石匕・ドリル・くさび形石器・管玉・スクレイパー・打製石斧・磨製石斧・磨石・敲石・耳飾・石皿等が出土した。

石鏃（第43・44図 331～365）

石鏃は、35点出土している。素材は、黒曜石14点、頁岩5点、チャート6点、安山岩5点、瑪瑙1点、凝灰岩1点、ホルンフェルス1点、鉄石英1点、玉随1点である。その内、黒曜石は、肉眼観察によると西北九州系（腰岳10点、針尾3点）が多く13点、他は上牛鼻産1点である。また、頁岩と安山岩の素材判定材料の一つに帯磁率計も用いた。

形態は、本報告書P21の石鏃分類図をもとに分類した。Aabが最も多く13点、他はAaa2点、Aac5点、Aad3点、Aba1点、Abb5点、Abc1点、Bab1点、Ba-2点、Cab1点、Cad1点である。

石鏃は打製で、ほとんどのものが入念な交互剥離により調整されている。欠損していると思われるものは、21点である。先端のみ欠損しているものは8点、基端の片方のみ欠損しているものは4点、基端の両方とも欠損しているものは2点、先端と基端の片方のみ欠損しているものは5点、先端と基端の両方とも欠損しているものは1点、基部が欠損しているものは1点である。

くさび形石器（第44図 366）

366は、水晶製のくさび形石器である。両端に剥離及びつぶれの痕跡が認められる。

石匕（第44図 367）

367は頁岩の横長剥片を素材とする小型の石匕である。全体に両面からていねいで細かな交互剥離が施されており、裏面には節理面を残している。

ドリル（第45図 368）

368は頁岩製のドリルであり、本遺跡からの出土は、1点のみである。入念な交互剥離が施されて先端部を形成している。

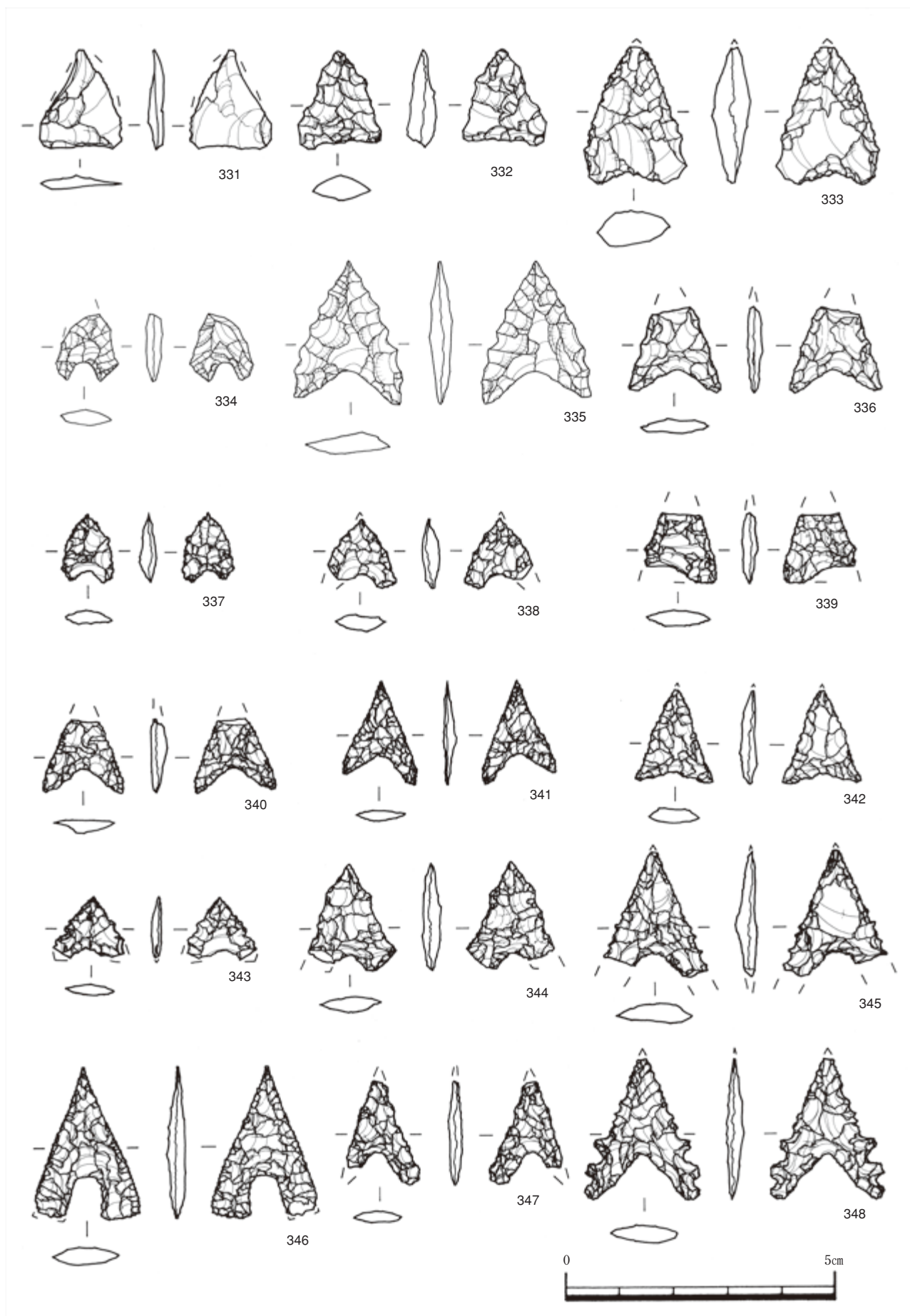
スクレイパー（第45・46図 369～375）

晩期のスクレイパーは、7点出土している。369は頁岩製の横型のスクレイパーである。両面から細かな交互剥離が施され、細かな段をつけて刃部を形成している。370は頁岩製で、裏面に自然面を残し、

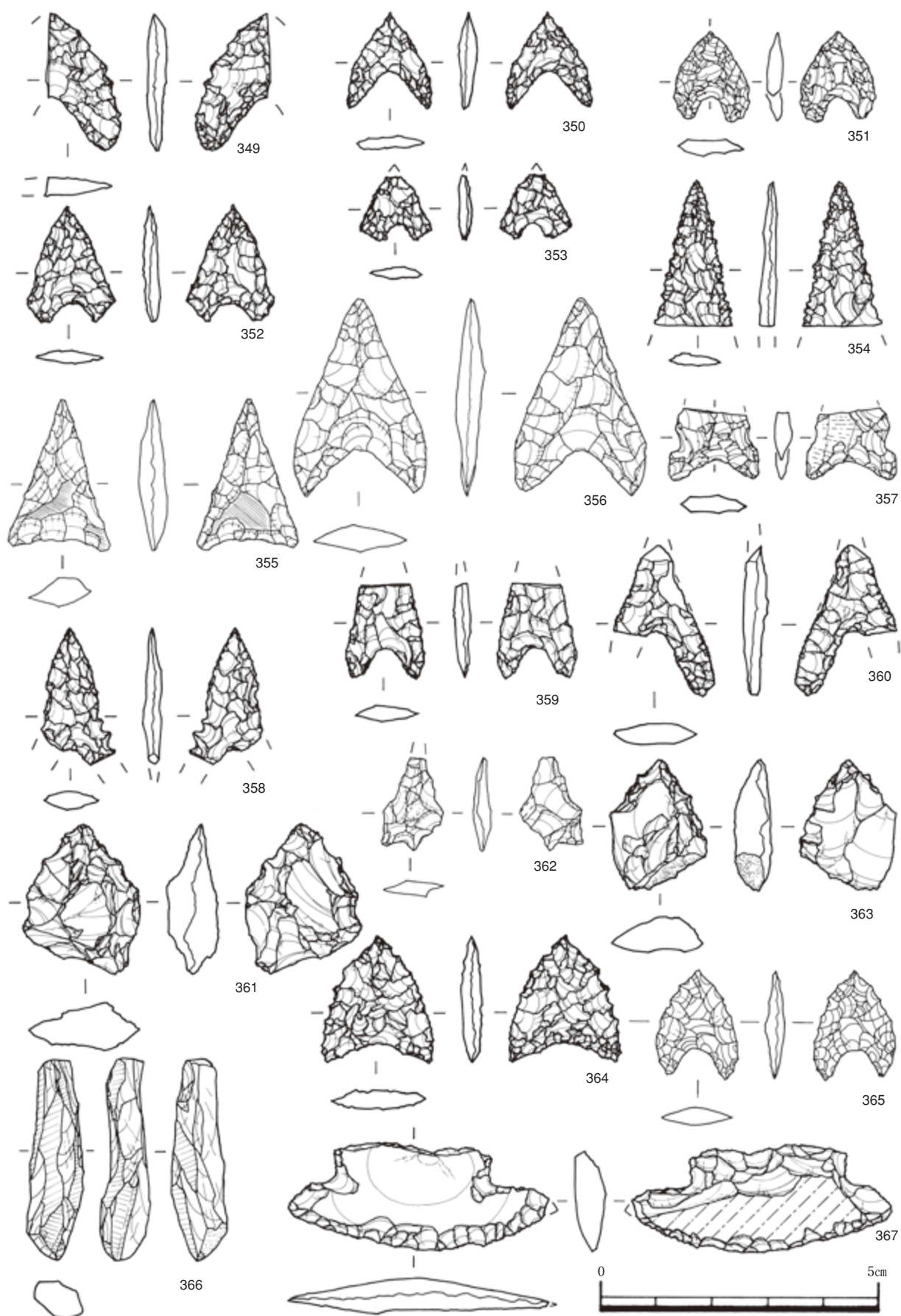
両面から細かな交互剥離が施され、細かな段をつけて刃部を形成している。371は頁岩製の横型のスクレイパーである。表裏面とも大剥離面を残し、両面から細かな交互剥離が施され、細かな段をつけて刃部を形成している。372は砂岩製の横型のスクレイパーである。表面に自然面を裏面に大剥離面を残し、両面から細かな交互剥離が施され、細かな段をつけて刃部を形成している。373は、頁岩製の縦長剥片を素材としている。右側面に両面から細かな交互剥離が施され、細かな段をつけて刃部を形成している。374は、頁岩製の横長剥片を素材としている。左側面に両面から交互剥離が施されて刃部を形成している。375は、粘板岩製の横長剥片を素材としており、多くの鉄分が付着していた。表面に自然面を残し、両側面に刃部を形成している。

磨製石斧（第46図 376～379）

磨製石斧は、縄文時代晩期は、4点出土している。376がホルンフェルス製で、それ以外は頁岩製である。376は、敲打痕が見られる。377は、刃部付近しか残存していないが、短冊状に剥片をとり、全面に入念な研磨を施したと思われる。378は、基部のみ残存していたが、裏面は全面にわたり欠損している。側縁部に敲打調整が施され、わずかに抉りが見られる。379は、表面のほぼ全面にわたって研磨が施され、比較的粗雑な刃部が形成されている。



第43図 縄文時代晩期 石器 1



第44図 縄文時代晩期 石器 2

打製石斧（第46図 380～384）

打製石斧は、縄文時代晩期は、5点出土しており、全部頁岩製である。380は、有肩の打製石斧で、基部より刃部の方が長いものである。381は、両面からやや粗雑な交互剥離が施されて刃部を形成している。刃部に使用による磨耗が見られる。382は、有肩の打製石斧の欠損品と思われる。383は、薄手で両面から交互剥離が施されて刃部を形成している。刃部に使用による磨耗が見られる。384は、両面に自然面を残し、一部刃部が欠損しているが、入念な交互剥離が施されている。

磨石・敲石（第47・48図 385～403）

全て砂岩製の磨石・敲石である。385～397は、磨石だけの機能を持つものである。398～402は、磨石・敲石の機能をあわせ持つものである。403は敲石である。縦長のばち状の形をしており、頭部・底部に敲打痕が見られる。本遺跡では、明確に凹石の機能をあわせ持つ磨石等は、見つからなかった。

石皿（第49図 404・405）

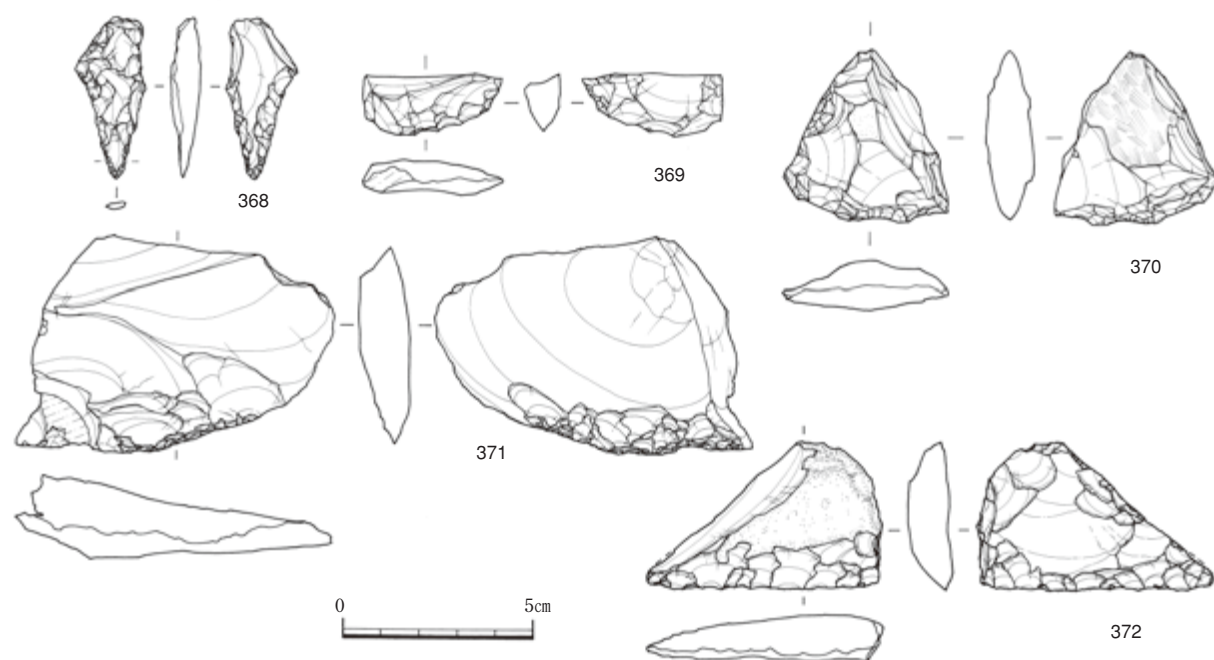
2点とも砂岩製の石皿である。404は表面にのみ作業面を、405は両面に作業面を有するものである。

玦状耳飾り（第50図 406）

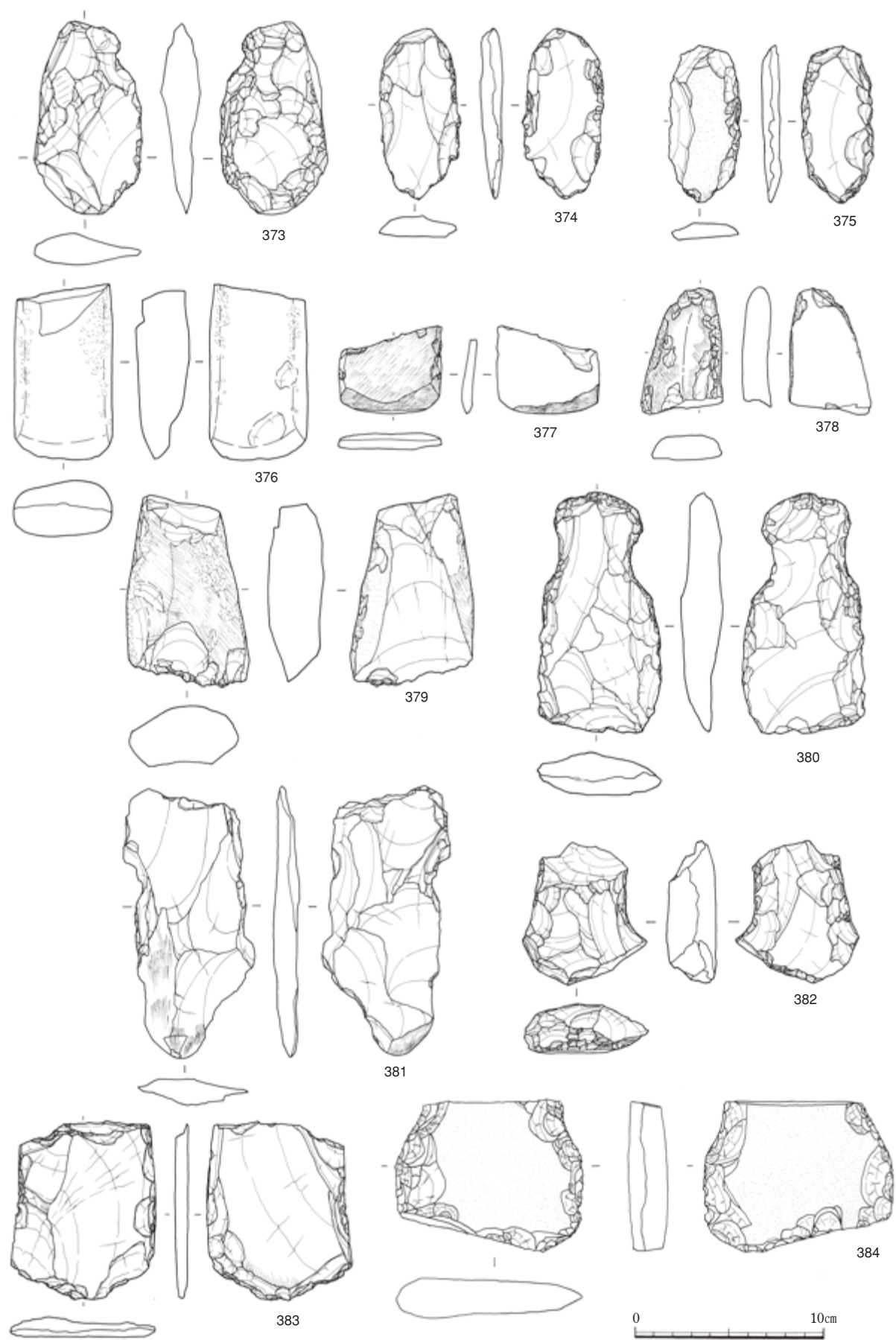
装飾品の玦状耳飾りと考えられる。軟玉製で欠損品であるが、直径5.7cmの円状の形に直径0.9cmの孔があいている。全面にていねいな研磨が施されている。玦状耳飾りは、農業センター遺跡群では、大門口遺跡と本遺跡の2点のみ出土している。

管玉（第50図 407）

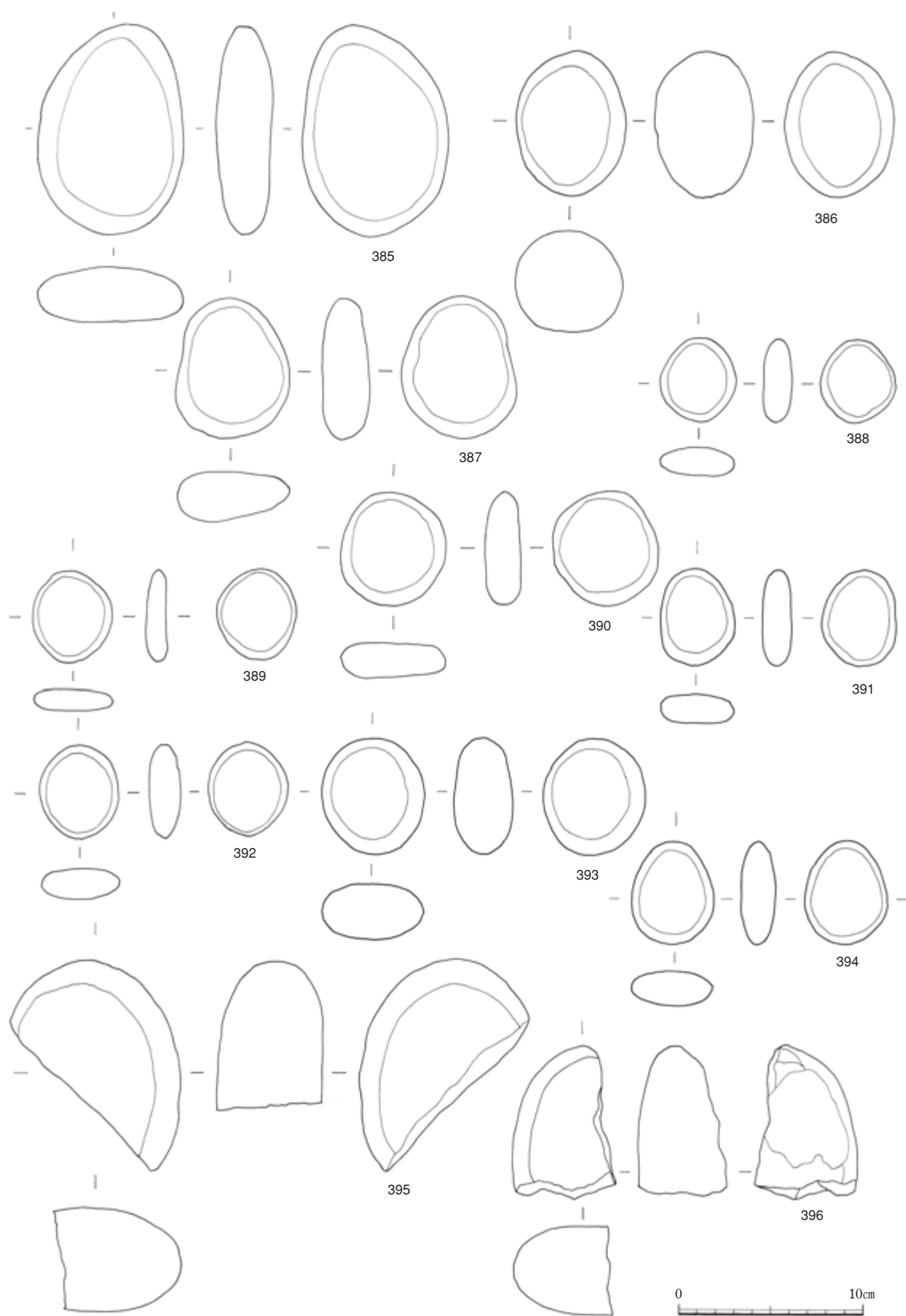
407は、結晶片岩様緑色岩製の管玉である。0.3cmの孔があいている。隣接する諏訪前遺跡からも出土している。



第45図 縄文時代晩期 石器 3



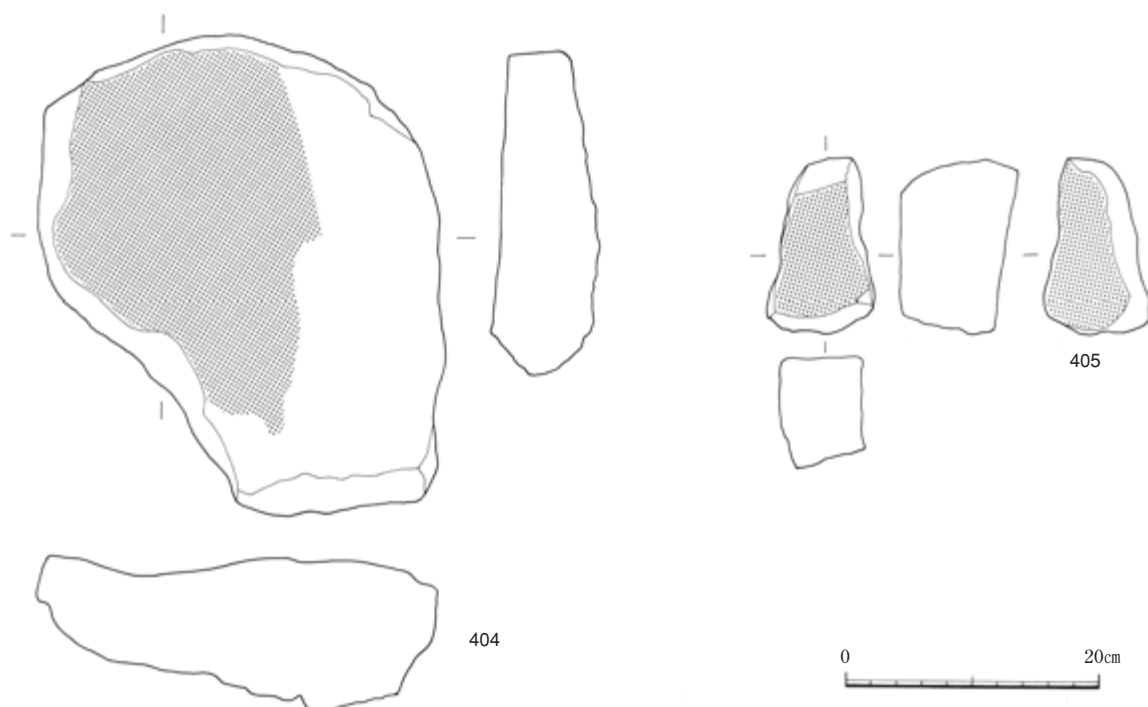
第46図 縄文時代晩期 石器 4



第47図 縄文時代晩期 石器 5



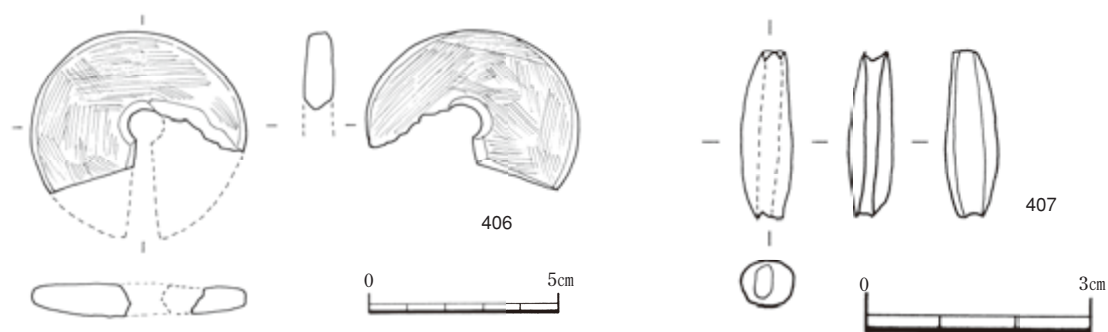
第48図 縄文時代晩期 石器 6



第49図 縄文時代晩期 石器 7

縄文時代晩期石器観察表 1 (石鏃)

挿図 番号	遺物 番号	器種	出土区	層	石材	長(残存) cm	幅(残存) cm	厚さ cm	重さ g	長幅比	形状	長幅 比	基部	備考 (欠損部)
第 43 図	331	石鏃	B-4	Ⅲ	安山岩	1.80	1.50	0.30	0.60	1.20	A	a	a	なし
	332	石鏃	E-あ	Ⅲ	頁岩	1.80	1.60	0.50	1.00	1.13	A	a	a	なし
	333	石鏃	E-あ	Ⅲ	チャート	2.60	1.90	0.70	2.50	1.37	A	a	b	先端
	334	石鏃	B-2	Ⅲ	黒曜石(腰岳)	1.30	1.15	0.30	0.31	1.13	A	a	b	先端
	335	石鏃	M-9	Ⅲ	黒曜石(針尾)	2.70	2.00	0.40	1.30	1.35	A	a	b	なし
	336	石鏃	D-2	Ⅲ	頁岩	1.60	1.70	0.30	0.70	0.94	A	a	b	先端
	337	石鏃	B-4	Ⅲ	黒曜石(腰岳)	1.30	1.00	0.30	0.30	1.30	A	a	b	基端の片方
	338	石鏃	—	Ⅲ	黒曜石(腰岳)	1.30	1.30	0.30	0.40	1.00	A	a	b	基端の片方
	339	石鏃	—	—	黒曜石(腰岳)	1.30	1.40	0.30	0.50	0.93	A	a	b	先端,基端の片方
	340	石鏃	—	Ⅲ	黒曜石(腰岳)	1.40	1.50	0.30	0.40	0.93	A	a	b	先端
	341	石鏃	—	—	黒曜石(腰岳)	1.90	1.40	0.30	0.30	1.36	A	a	b	なし
	342	石鏃	B-7	Ⅱ	頁岩	1.70	1.50	0.40	0.60	1.13	A	a	b	なし
	343	石鏃	—	Ⅲ	黒曜石(針尾)	1.20	1.30	0.20	0.30	0.92	A	a	b	基端の両方
	344	石鏃	A-4	Ⅲ	黒曜石(腰岳)	2.00	1.70	0.40	0.80	1.18	A	a	b	基端の片方
	345	石鏃	F-1	Ⅲ	ホルンフェルス	2.30	1.90	9.40	1.10	1.21	A	a	b	先端,基端の両方
	346	石鏃	—	Ⅲ	黒曜石(腰岳)	2.80	1.90	0.40	1.10	1.47	A	a	c	基端の片方
第 44 図	347	石鏃	D-あ	Ⅲ	チャート	1.90	1.40	0.30	0.50	1.36	A	a	c	先端,基端の片方
	348	石鏃	—	Ⅲ	黒曜石(針尾)	2.60	2.20	0.40	0.40	1.18	A	a	c	先端
	349	石鏃	—	—	黒曜石(腰岳)	2.50	1.40	0.40	0.80	1.79	A	a	c	基端の片方
	350	石鏃	E-い	Ⅲ	安山岩	1.70	1.60	0.30	0.60	1.06	A	a	c	なし
	351	石鏃	B-3	Ⅲ	チャート	1.65	1.35	0.35	0.59	1.22	A	a	d	なし
	352	石鏃	—	Ⅲ	チャート	2.10	1.60	0.30	0.80	1.31	A	a	d	なし
	353	石鏃	E-い	Ⅲ	チャート	1.20	1.30	0.20	0.30	0.92	A	a	d	先端
	354	石鏃	G-1	Ⅲ	黒曜石(腰岳)	2.60	1.40	0.30	0.90	1.86	A	b	—	基部
	355	石鏃	D-う	Ⅱ	安山岩	2.75	1.80	0.50	1.56	1.53	A	b	b	なし
	356	石鏃	J-え	Ⅲ	安山岩	3.55	2.30	0.45	2.42	1.54	A	b	b	なし
	357	石鏃	B-4	Ⅲ	頁岩	1.30	1.65	0.30	0.61	0.79	A	b	b	先端
	358	石鏃	I-2	Ⅲ	安山岩	2.50	1.40	0.30	0.80	1.79	A	b	b	基端の両方
	359	石鏃	E-い	Ⅲ	頁岩	1.70	1.40	0.30	0.70	1.21	A	b	b	先端
	360	石鏃	D-あ	Ⅲ	チャート	2.70	1.80	0.50	1.10	1.50	A	b	c	先端,基端の片方
	361	石鏃	D-あ	Ⅲ	玉随	2.70	2.10	1.00	4.40	1.29	B	a	—	なし
	362	石鏃	O-10	Ⅲ	瑪瑙	1.70	1.10	0.35	0.44	1.55	B	a	b	先端,基端の片方
	363	石鏃	B-4	Ⅲ	鉄石英	2.40	1.80	0.70	2.70	1.33	B	a	—	なし
	364	石鏃	P-2	Ⅲ	黒曜石(上牛鼻)	2.30	2.00	0.40	1.50	1.15	C	a	b	なし
	365	石鏃	B-3	Ⅲ	凝灰岩	1.95	1.40	0.35	0.66	1.39	C	a	d	なし



第50図 縄文時代晩期 石器 8（垂飾品）

縄文時代晩期石器観察表 2

挿図 番号	遺物 番号	器 種	出土区	層	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
						cm	cm	cm	g	
第44図	366	くさび形石器	P-1	Ⅲ	水晶	3.60	0.90	0.60	3.08	
	367	石匕	A-2	Ⅲ	頁岩	2.00	4.70	0.60	4.80	
第45図	368	ドリル	I-え	Ⅲ	頁岩	4.20	1.80	0.80	5.16	
	369	スクレイパー	E-あ	Ⅲ	頁岩	1.60	3.60	0.90	5.35	
	370	スクレイパー	—	Ⅲ	頁岩	4.55	4.25	1.30	19.47	
	371	スクレイパー	D-お	Ⅲ	頁岩	5.15	8.30	2.20	78.33	
	372	スクレイパー	D-お	Ⅲ	砂岩	4.00	6.30	1.30	27.10	
第46図	373	スクレイパー	B-3	Ⅲ	頁岩	10.00	5.50	2.10	114.58	
	374	スクレイパー	N-6	Ⅱ	頁岩	8.90	4.10	1.20	49.37	
	375	スクレイパー	E-あ	Ⅲ	頁岩	8.30	3.70	0.90	34.46	
	376	磨製石斧	—	Ⅲ	ホルンフェルス	9.00	5.10	2.90	236.01	
	377	磨製石斧	G-か	Ⅲ	頁岩	4.20	5.40	0.90	22.35	
	378	磨製石斧	F-か	Ⅲ	頁岩	6.30	4.20	1.30	57.01	
	379	磨製石斧	E-1	Ⅲ	頁岩	9.40	6.40	2.90	273.29	
	380	打製石斧	—	—	頁岩	12.50	6.40	2.30	191.69	
	381	打製石斧	F-1	Ⅲ	頁岩	14.20	6.10	1.30	111.63	
	382	打製石斧	E-あ	Ⅲ	頁岩	7.50	6.40	2.50	137.77	
	383	打製石斧	B-3	Ⅲ	頁岩	9.10	7.30	1.00	77.27	
第47図	384	打製石斧	E-あ	Ⅲ	頁岩	7.90	9.80	2.10	254.67	
	385	磨石	G-え	Ⅲ	砂岩	11.30	7.90	3.00	378.00	
	386	磨石	O-6	Ⅲ	砂岩	7.50	5.90	5.30	288.00	
	387	磨石	B-3	Ⅱ	砂岩	7.60	6.15	2.60	156.50	
	388	磨石	B-2	Ⅲ	砂岩	4.50	4.10	1.50	37.00	
	389	磨石	B-2	Ⅲ	砂岩	4.90	4.25	1.10	34.00	
	390	磨石	A-2	Ⅲ	砂岩	6.15	5.50	1.85	105.00	
	391	磨石	B-2	Ⅲ	砂岩	5.20	4.00	1.50	50.00	
	392	磨石	B-2	Ⅲ	砂岩	5.10	4.20	1.70	50.50	
	393	磨石	A-2	Ⅲ	砂岩	6.30	5.50	3.00	152.50	
	394	磨石	B-2	Ⅲ	砂岩	5.60	4.45	1.85	63.00	
第48図	395	磨石	D-1	Ⅲ	砂岩	9.40	8.50	5.60	656.00	欠損
	396	磨石	I-お	Ⅲ	砂岩	8.10	5.50	4.80	289.50	欠損
	397	磨石	C-う	Ⅲ	砂岩	9.10	8.80	6.60	741.50	欠損
	398	磨石・敲石	B-3	Ⅲ	砂岩	5.65	5.00	2.10	83.00	
	399	磨石・敲石	D-お	Ⅲ	砂岩	4.90	4.45	1.30	43.00	
	400	磨石・敲石	N-2	Ⅲ	砂岩	10.60	9.95	4.20	585.50	
	401	磨石・敲石	C-2	Ⅲ	砂岩	5.50	6.00	4.70	189.00	欠損
第49図	402	磨石・敲石	D-あ	Ⅲ	砂岩	8.40	9.70	5.70	668.50	欠損
	403	敲石	—	—	砂岩	21.70	3.80	2.70	164.50	
	404	石皿	—	—	砂岩	36.70	31.40	12.00	15800.00	
第50図	405	石皿	C-3	Ⅱ	砂岩	13.70	8.70	8.10	1481.50	
	406	耳飾	O-6	Ⅲ	軟玉	5.7 (径)		0.90	22.81	
	407	管玉	N-2	Ⅲ	結晶片岩様緑色岩	2.20	0.70	0.60	1.23	

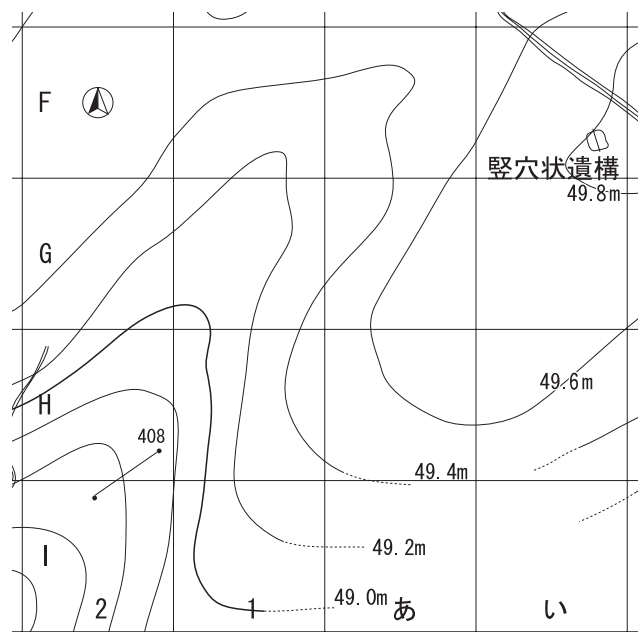
第4節 弥生・古墳時代の調査

弥生・古墳時代の遺物包含層は、削平されているため遺物はほとんど出土しなかった。遺構も、Ⅲ層上面において弥生時代と思われる竪穴状遺構が1軒検出されたのみであった。

1 遺構（第51・52図）

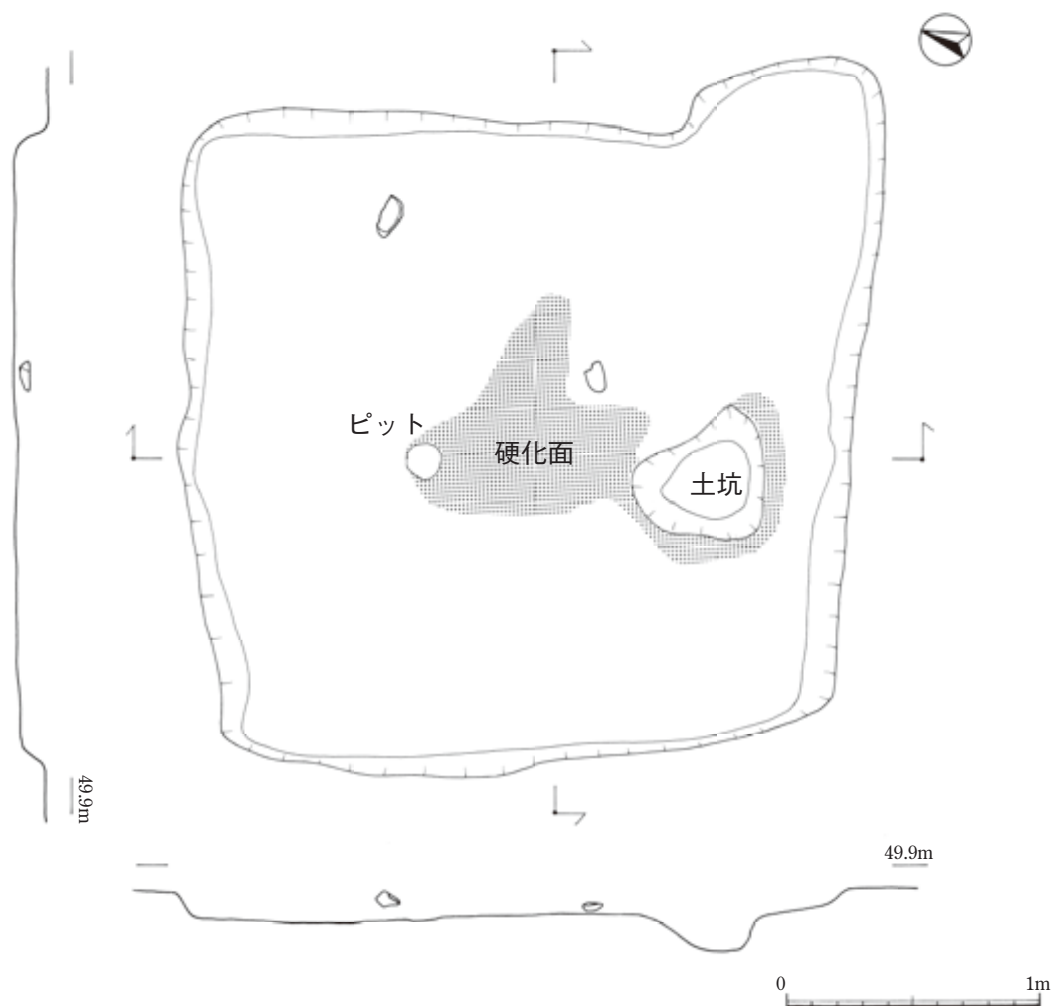
（1）竪穴状遺構（方形土坑）

Fーい区から検出された。約2.6m×2.5mの略方形プランである。検出面からの掘り込みも約12cmと浅く、遺構内に礫が数点検出されただけで遺物もほとんど出土しなかった。そのため、性格及び時期判断が難しかった。遺構内の埋土は、縄文時代晩期の埋土に似たうすい黒褐色土。炭化物は検出されなかった。中央付近に硬化面が広がる。遺構内に浅いピット1個と土坑1基検出されたが、竪穴状遺構と関連があるかは不明。土坑の埋土は、黒色が強い。



第51図 弥生・古墳時代
遺坑配置図及び出土状況図
(1グリッド：20m)

（1）遺構



第52図 弥生・古墳時代 竪穴状遺構

2 遺物（第53図）

弥生時代のものと思われる土器2点，古墳時代のものと思われる土器3点が出土した。石器も石包丁が1点出土した。

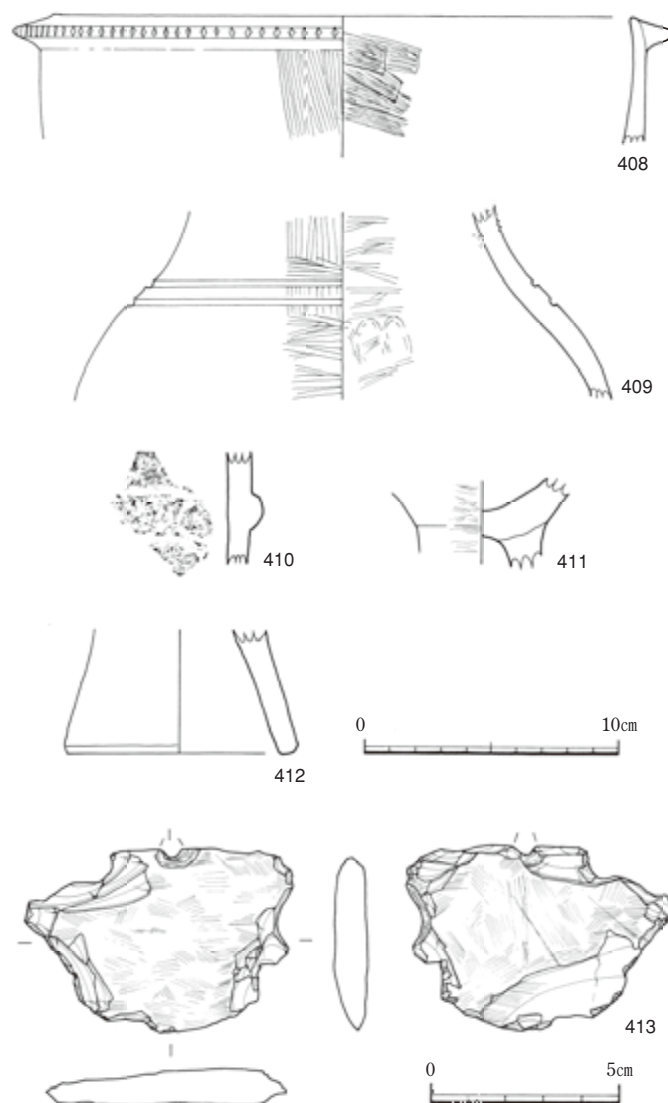
（1）土器

408は，弥生時代前期のものと思われる壺形土器の「逆L」字状を呈する口縁部である。口唇部にはヘラ状工具による縦位の刻み目が施されている。409は，弥生時代前期のものと思われる壺形土器の頸～胴部である。頸部には，沈線が2条施されている。

410～412は，古墳時代のものと思われる。410は，刻み目突帯を巡らしている甕形土器の胴部である。411，412は，甕形土器の脚部である。411は，竪穴状遺構の上部で検出されたが，流れ込みと思われ，遺構との関連性はないと判断した。

（2）石器

413は，頁岩製の石包丁である。刃部は湾曲し片端に紐掛用と思われる抉りが見られる。



第53図 弥生・古墳時代 土器・石器

弥生・古墳時代土器観察表

挿図 番号	番号	出土区	層位	部位	色 調		胎 土				焼成	外 面	内 面	備 考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他				
第53図	408	H-I-2	Ⅱ	口縁部	にぶい黄褐	橙	○	○	○		良	ハケ目,刻目突帯	板ナデ	
	409	H-2	Ⅱ	胴部	暗褐	暗赤褐	○	○			良	ヘラミガキ,沈線文	指頭押圧,ミガキ後ナデ	
	410	—	Ⅱ	胴部	浅黄橙	橙	○	○			良	ナデ,突帯	ナデ	
	411	F-い	—	脚部	黒	にぶい赤褐	○	○	○	金雲母	良	ナデ	ナデ	
	412	—	Ⅱ	脚部	赤橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	ナデ	ナデ	

弥生・古墳時代石器観察表

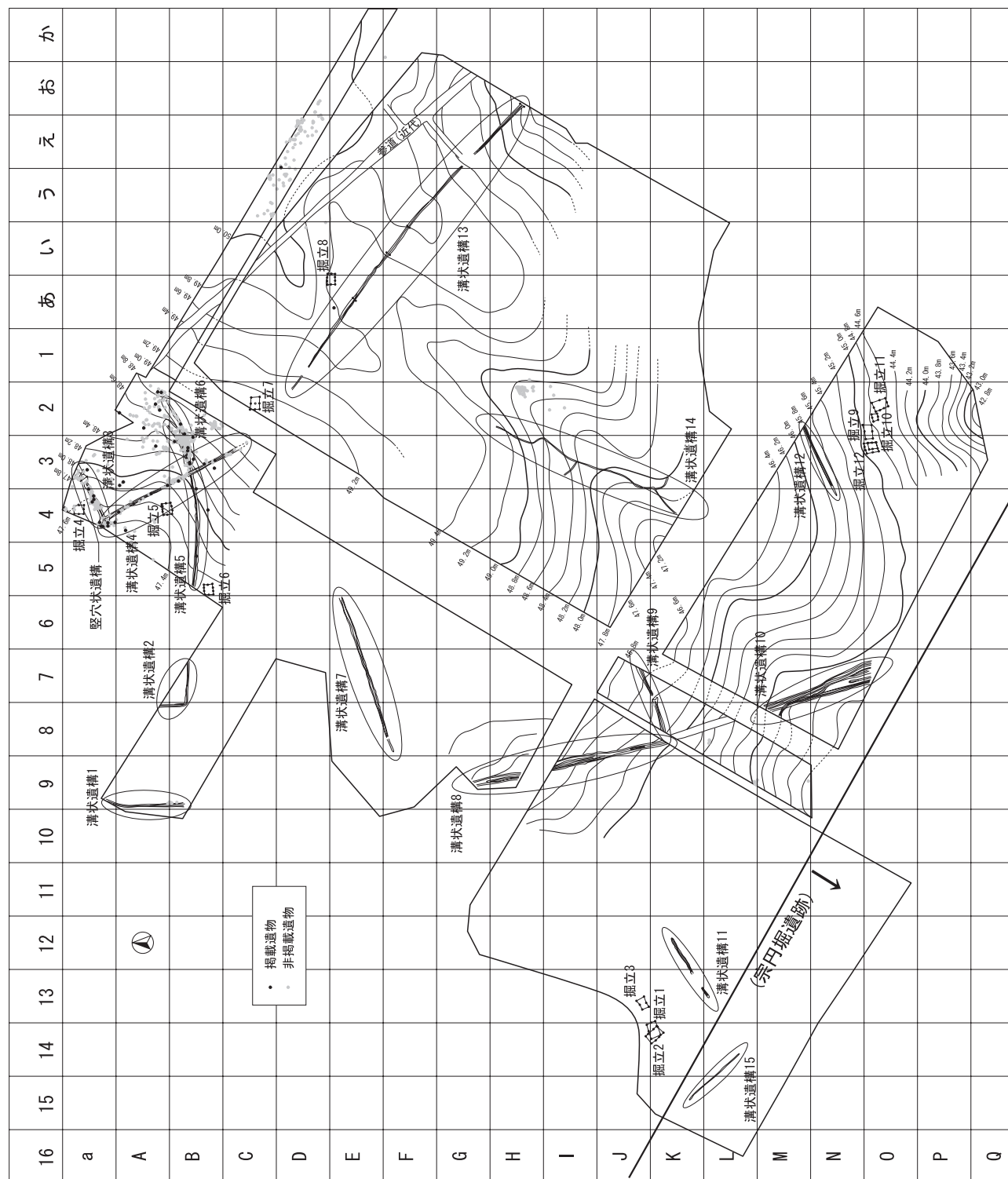
挿図	番号	器種	出土区	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
第53図	413	石包丁	E~H-4~6	頁岩	4.80	6.80	0.90	38.44	

第5節 古代・中世の調査

古代・中世については、時代の判別が難しい遺構があったため、まとめて取扱うこととしたが、時代が分かるものについては文章中に明記した。

遺構は、掘立柱建物跡、溝状遺構、竪穴状遺構が検出された。

遺物は、土師器・須恵器・青磁・白磁・瓦質土器・鉄滓等が出土している。



第54図 古代・中世遺構配置図及び出土状況図 (1グリッド：20m)

(1) 遺構

① 掘立柱建物跡

古代～中世の掘立柱建物跡は、12棟が検出された。この中で、1棟が庇付である。柱穴、桁行柱間などは観察表で示した。諏訪脇遺跡だけでなく農業開発総合センター遺跡群内の各遺跡で多くみられる。大きさ・柱間・形状等に統一性はみられないが、主軸が東西方向の棟が多くみられた。

掘立柱建物跡1号(第55図)

J・K-13・14区で検出された。主軸を東西にとる2間×2間の建物跡である。掘立柱建物跡2号と切り合っている。ピット1と7の間にピットと考えられるものは検出できなかった。遺物は出土していない。

掘立柱建物跡2号(第55図)

J・K-14区で検出された。主軸を東西にとる1間×3間の建物跡である。棟部の床面積が12棟のうち最大の推定19.90㎡である。掘立柱建物跡1号と切り合っている。ピット5と6は、後世に削平されていたが、存在していたと考えられる。遺物は出土していない。

掘立柱建物跡3号(第56図)

J-13区で検出された。主軸を東西にとる1間×2間の建物跡である。遺物は出土していない。

掘立柱建物跡4号(第56図)

a-4区で検出された。平面プランが方形に近い2間×2間の建物跡である。ピット1と7の間にピットと考えられるものは検出できなかった。遺物は出土していない。

掘立柱建物跡5号(第57図)

A・B-4区で検出された。主軸を東西にとる2間×3間の建物跡である。遺物は出土していない。ピットの埋土は、黒色土で、時代は中世と考えられる。図面化することはできなかったが、南面に庇の可能性が考えられるピットも検出した。

掘立柱建物跡6号(第57図)

B-5区で検出された。主軸を東西にとる2間×3間の建物跡である。遺物は出土していない。

掘立柱建物跡7号(第58図)

C-2区で検出された。主軸を東西にとる2間×2間の建物跡である。ピット2の埋土から古代に相当する土師器の甕の胴部と思われる土器片414が出土した。ピット3の底からは、少量だが、炭化物が検出された。

掘立柱建物跡8号(第58図)

D・E-あ・い区で検出された。主軸を東西にとる2間×3間の建物跡である。遺物は出土していない。

掘立柱建物跡9号(第59図)

O-2・3区で検出された。主軸を東西にとる1間×2間の建物跡である。遺物は出土していない。ピットの埋土は、黒色土で、時代は中世と考えられる。

掘立柱建物跡10号(第59図)

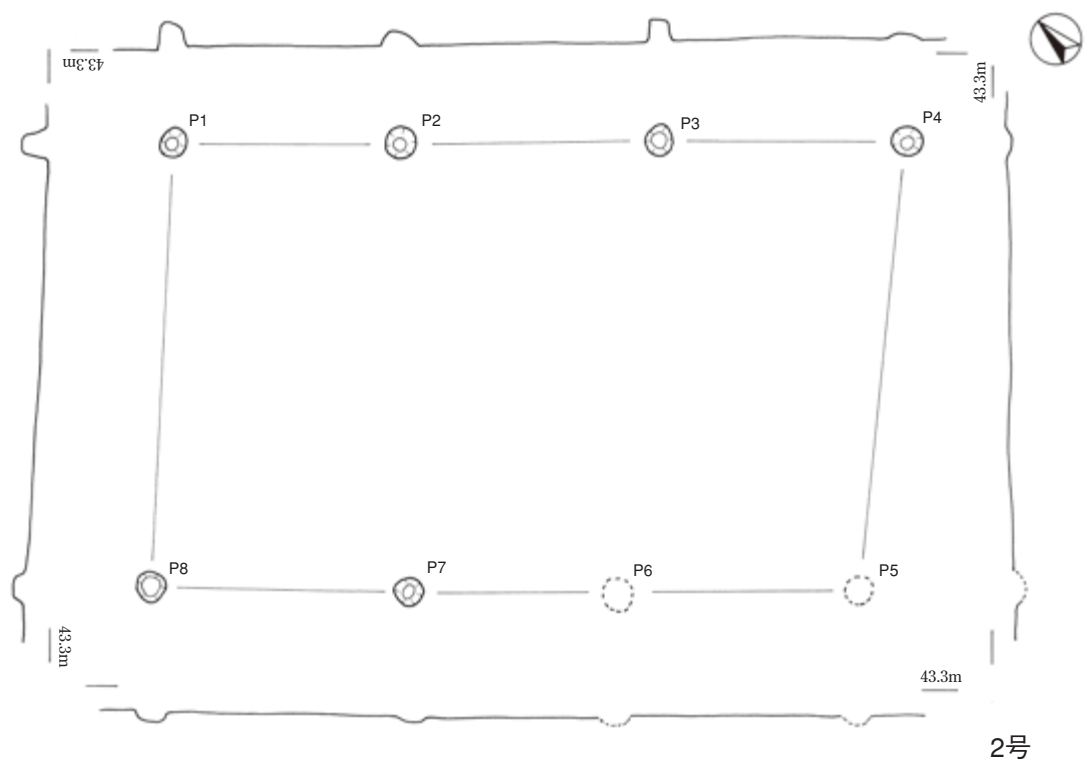
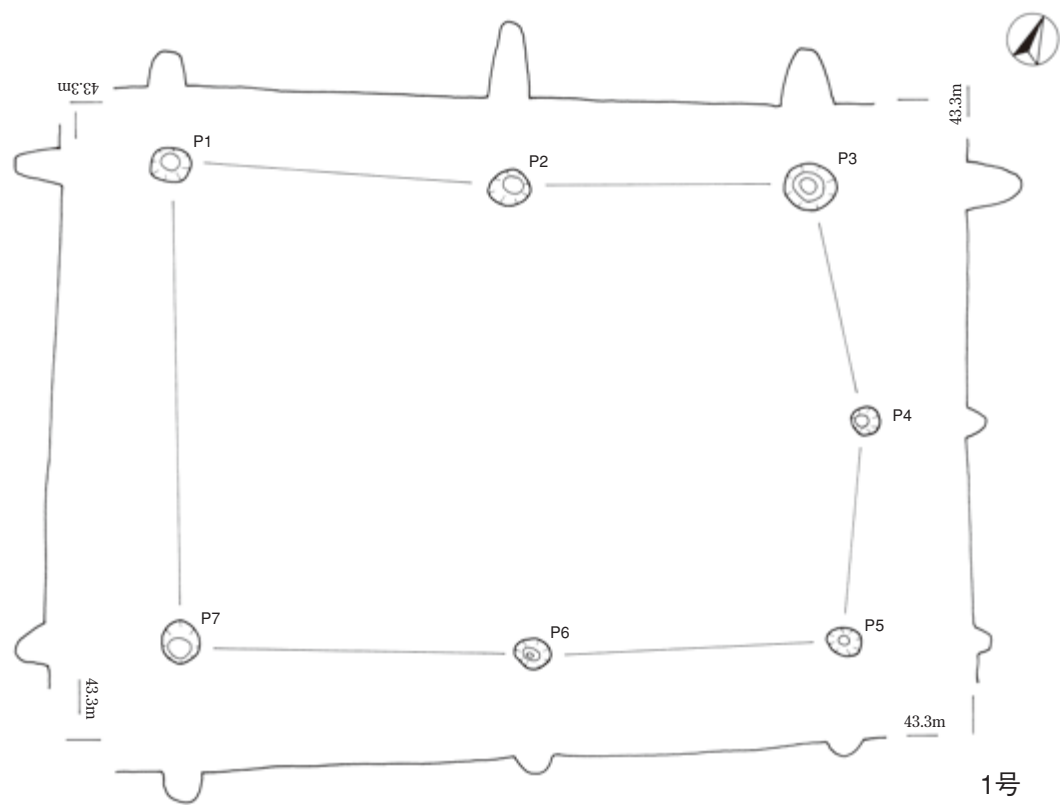
O-2区で検出された。平面プランが方形に近い1間×2間の建物跡である。遺物は出土していない。ピットの埋土は、黒色土で、時代は中世と考えられる。

掘立柱建物跡11号(第60図)

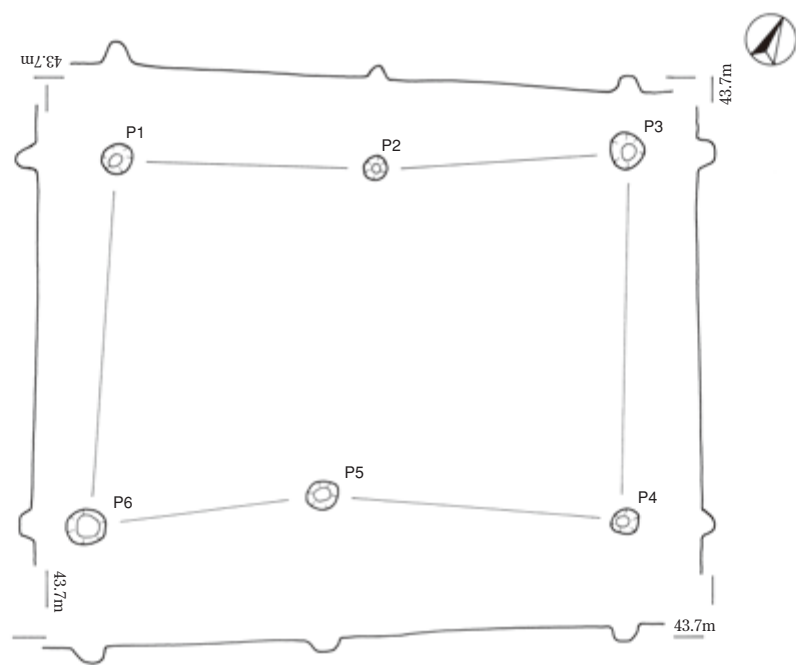
O-2区で検出された。主軸を東西にとる2間×3間の建物跡である。遺物は出土していない。ピットの埋土は、黒色土で、時代は中世と考えられる。

掘立柱建物跡12号(第60図)

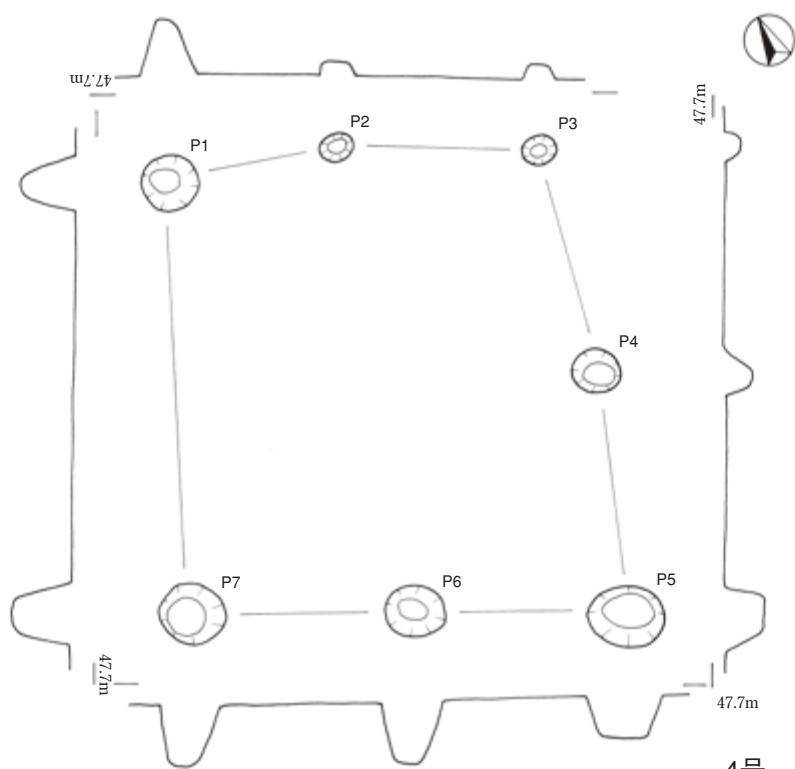
O-3区で検出された。主軸を東西にとる1間×2間の建物跡である。北面と西面の2方で庇が確認された。遺物は出土していない。ピットの埋土は、黒色土で、時代は中世と考えられる。



第55図 古代・中世 掘立柱建物跡 1



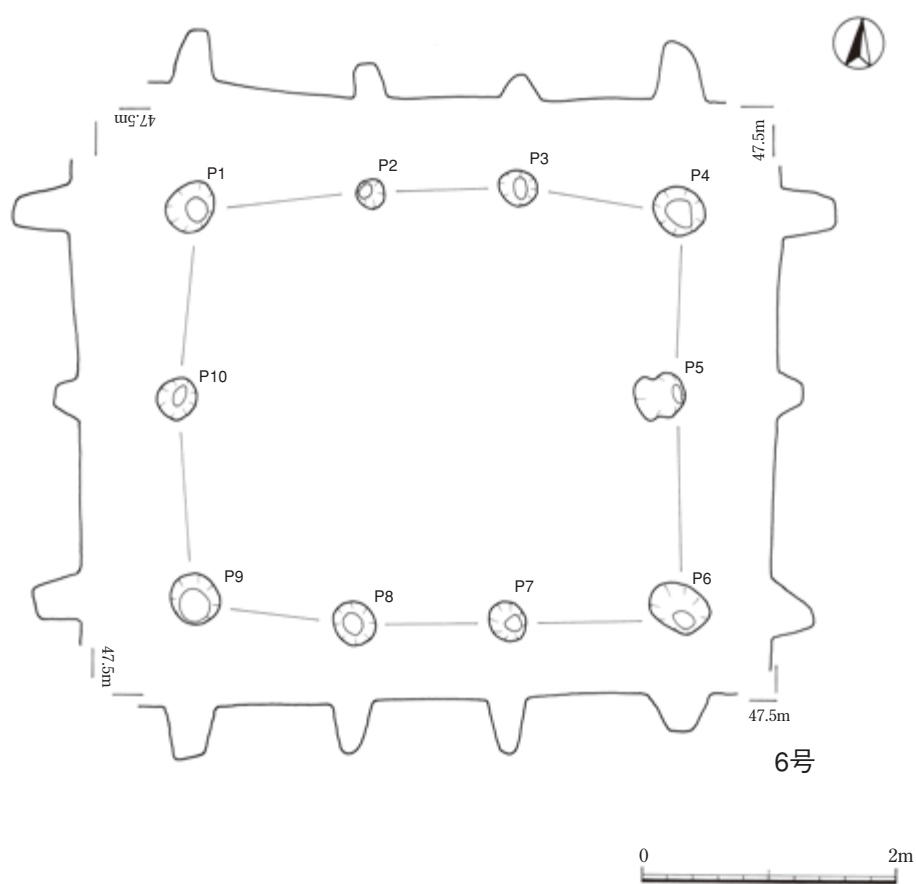
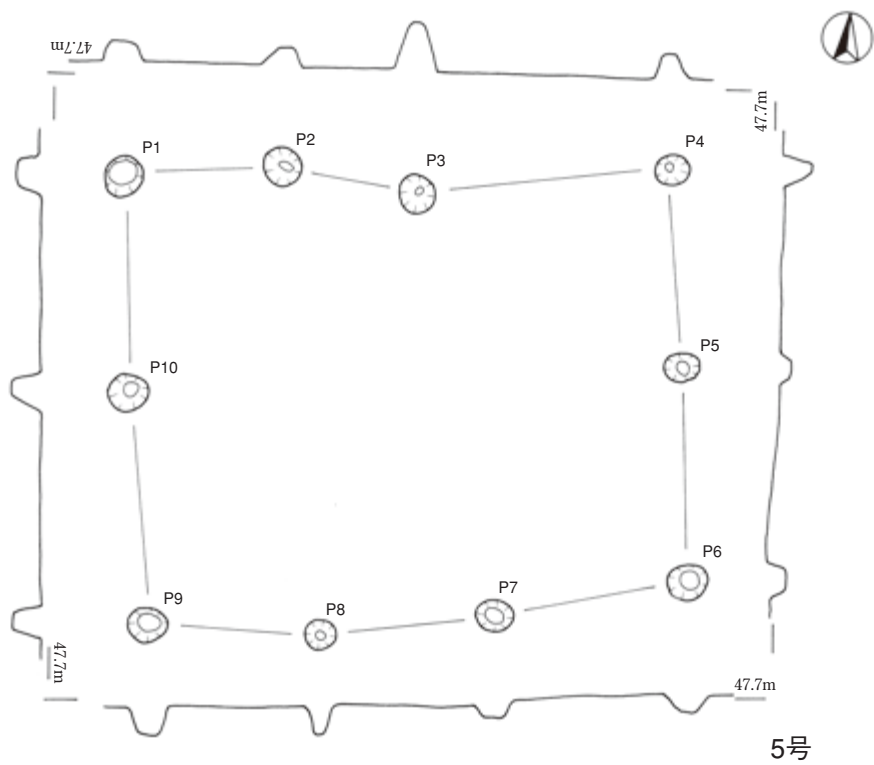
3号



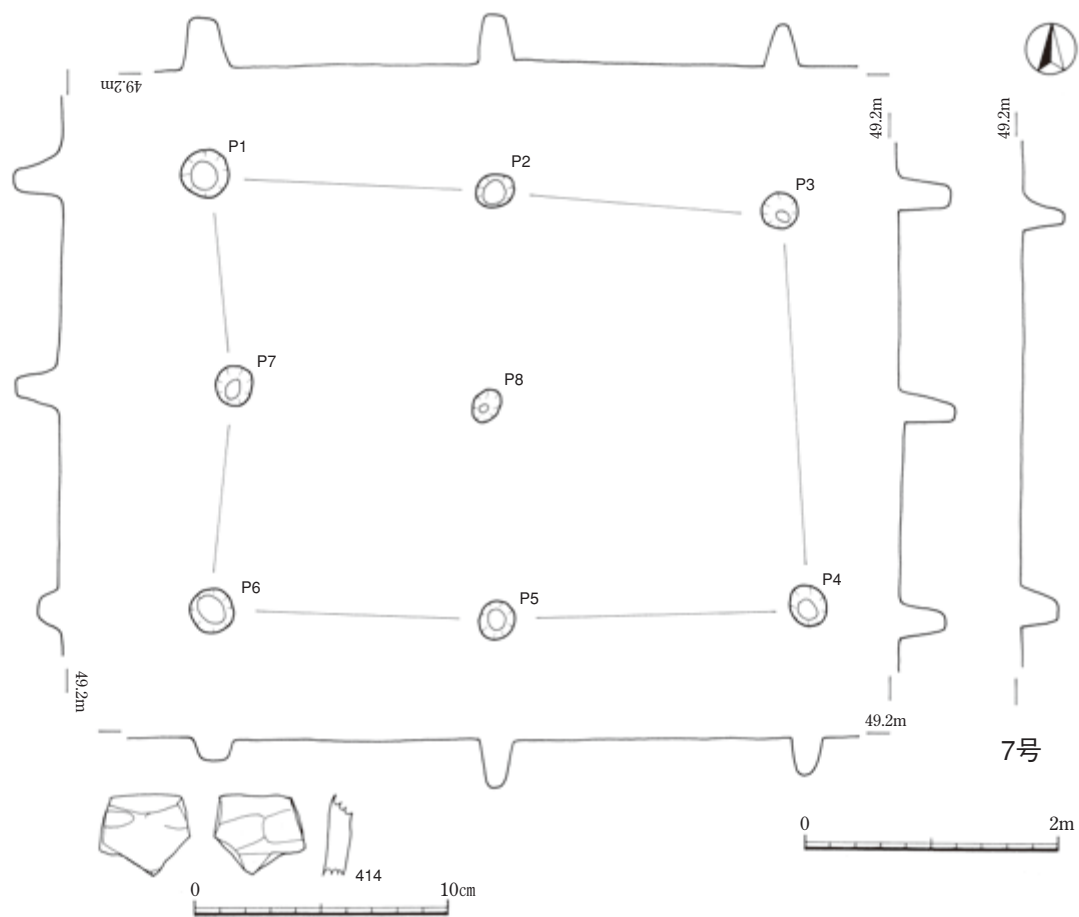
4号



第56図 古代・中世 掘立柱建物跡 2

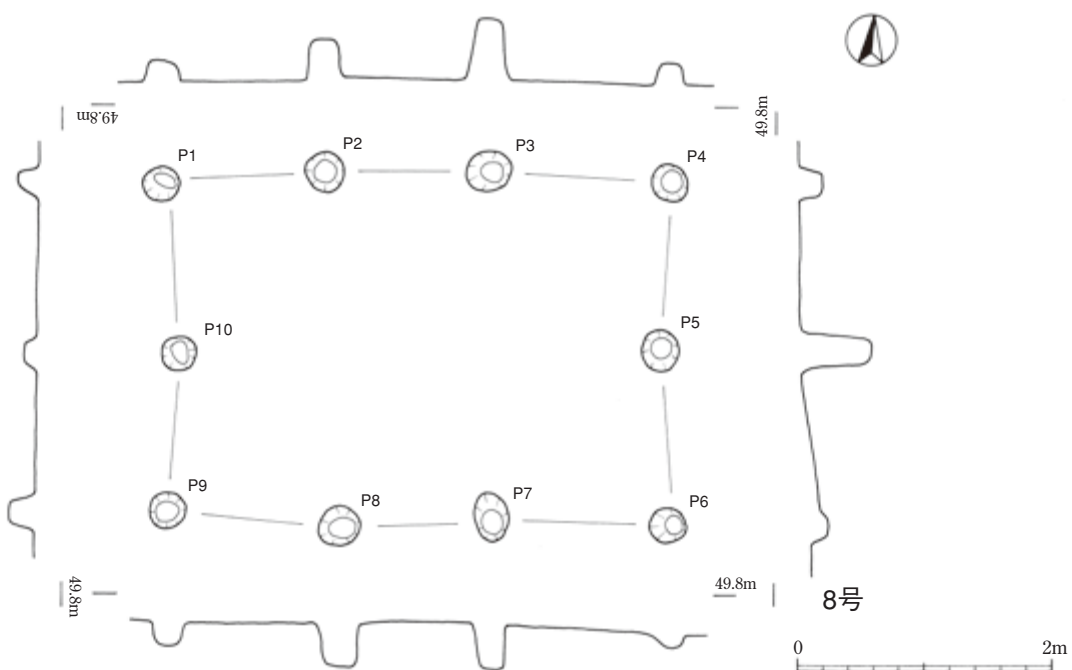


第57図 古代・中世 掘立柱建物跡 3

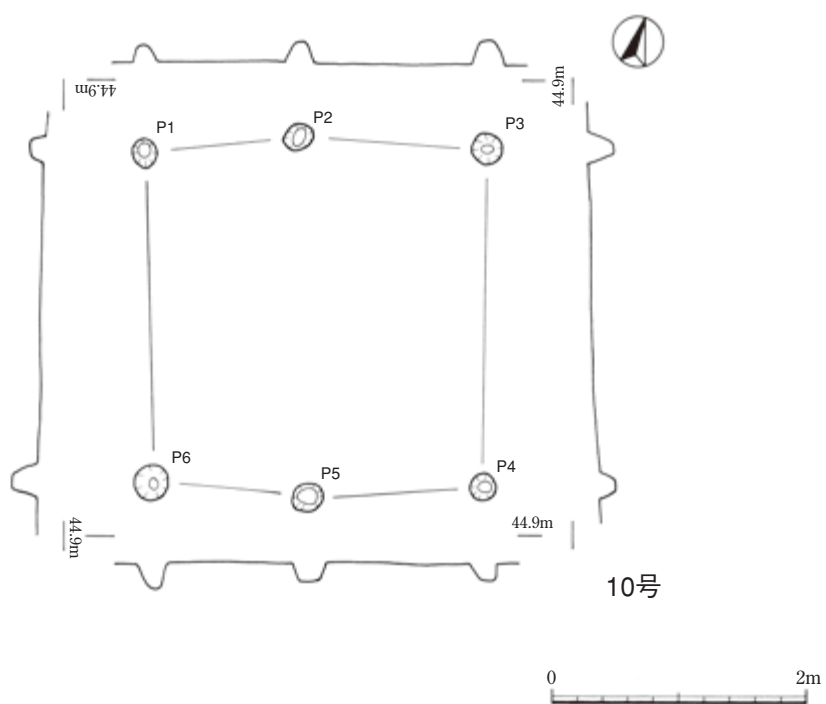
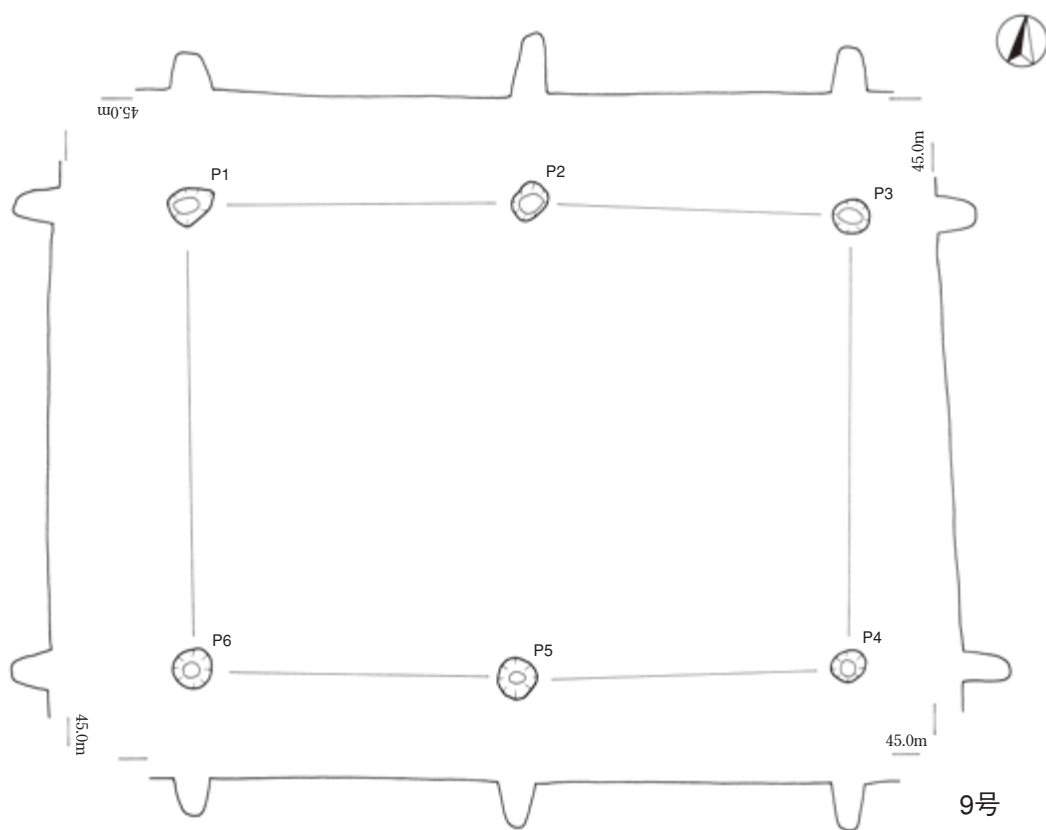


古代・中世 掘立柱建物跡 ピット内遺物観察表

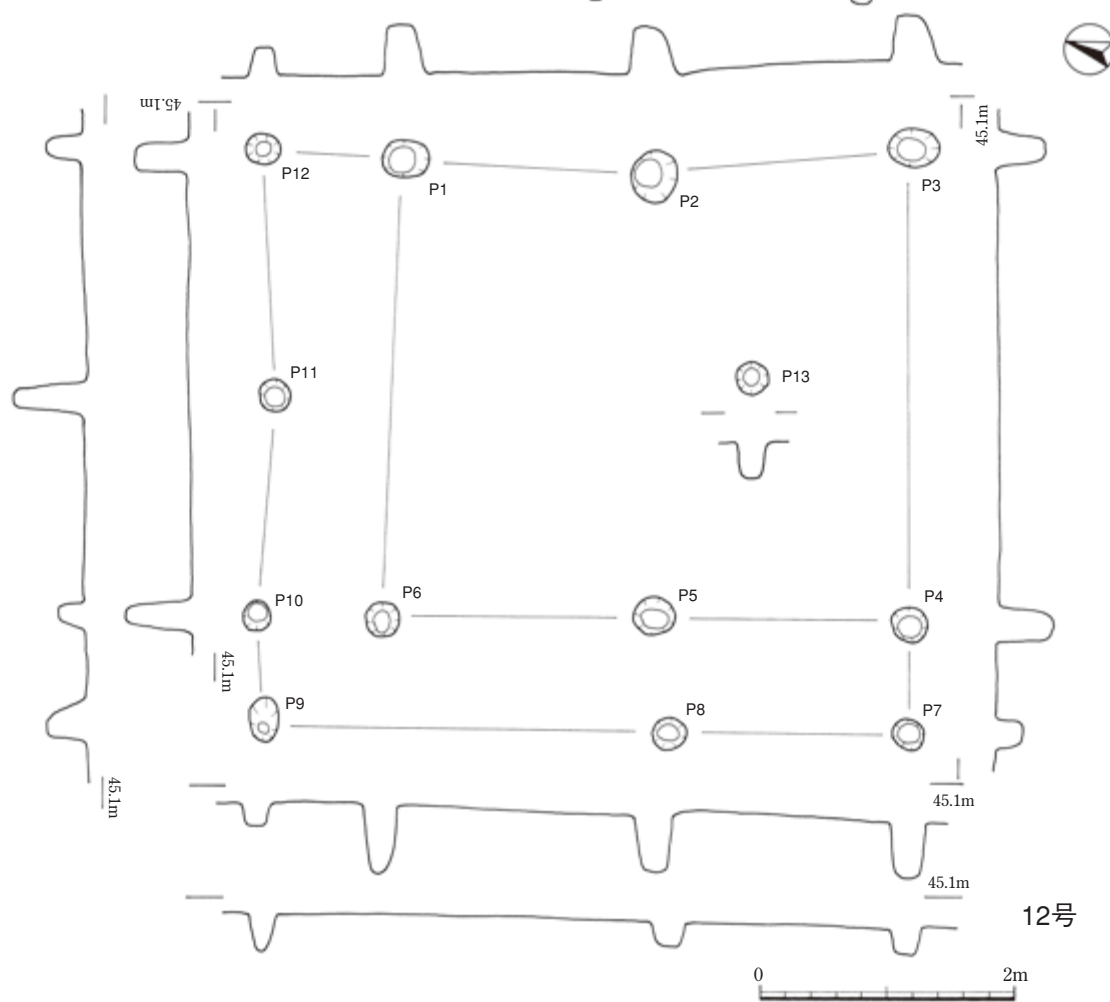
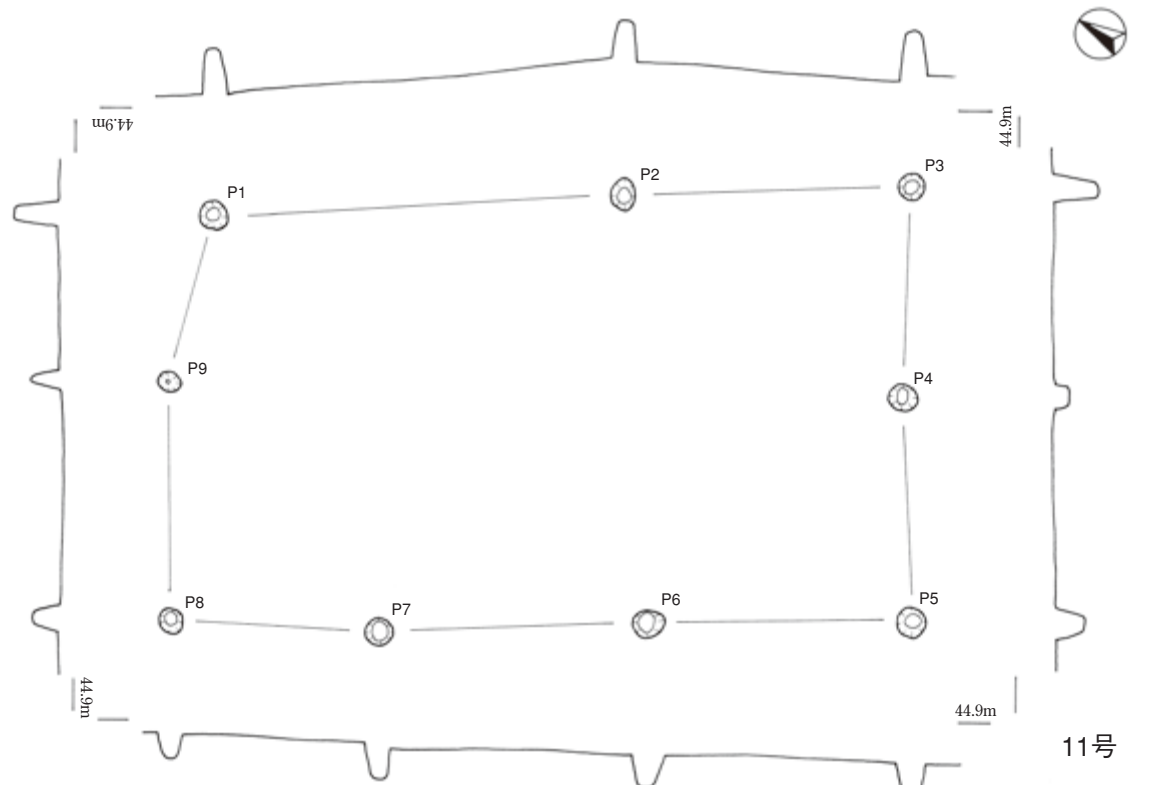
挿図 番号	番号	器種	出土区	遺構	部位	色		調		胎		土		焼成	外 面	内 面	備 考
						内	外	内	外	石英	長石	角閃石	その他				
第58図	414	甕	C-2	7号掘立柱建物跡ピット2内	胴部	黒褐	明赤褐			○	○	○		良	ナデ	ヘラケズリ	古代



第58図 古代・中世 掘立柱建物跡 4 及び出土遺物



第59図 古代・中世 掘立柱建物跡 5



第60図 古代・中世 掘立柱建物跡6

掘立柱建物跡観察表 1

掘立柱建物跡		柱穴番号	梁間柱間 (cm)	梁間 (cm)	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	桁行 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (㎡)	備考
1号 2間×2間	棟部	P1-P7	—	385	P1-P2	267	500	1	26	31	29	円	19.10	
		P3-P4	192	362	P2-P3	233		2	61	33	30	円		
		P4-P5	175		P5-P6	247	523	3	44	40	39	円		
					P6-P7	277		4	17	25	23	円		
								5	14	30	22	楕円		
								6	16	30	25	楕円		
								7	25	35	30	楕円		
		平均	183.5	373.5		256	511.5		29	32	28.30			
2号 1間×3間	棟部	P1-P8	—	350	P1-P2	180	577	1	21	24	20	楕円	19.90	
		(P4-P5)	—	352	P2-P3	202		2	14	27	26	円		
					P3-P4	195	557	3	17	26	22	楕円		
					(P5-P6)	190		4	5	25	25	円		
					(P6-P7)	163	557	5	—	—	—	—		
					P7-P8	205		6	—	—	—	—		
								7	5	23	23	円		
		平均	—	351		189.2	567		8	10	25	24	円	
3号 1間×2間	棟部	P1-P6	—	290	P1-P2	205	402	1	20	25	24	円	11.92	
		P3-P4	—	290	P2-P3	197	420	2	10	19	19	円		
					P4-P5	187		3	14	30	27	円		
					P5-P6	235		4	14	22	21	円		
								5	11	25	24	円		
		平均	—	290		206	411		6	14	30	28	円	
4号 2間×2間	棟部	P1-P7	—	345	P1-P2	140	296	1	45	45	40	楕円	11.48	
		P3-P4	182	370	P2-P3	158	346	2	11	26	21	楕円		
		P4-P5	189		P5-P6	169		3	14	25	24	円		
					P6-P7	178		4	21	39	35	楕円		
								5	32	61	47	楕円		
								6	49	49	41	楕円		
		平均	185.5	357.5		161.3	321		7	50	51	49	円	
5号 2間×3間	棟部	P1-P10	171	355	P1-P2	128	427	1	16	34	31	円	14.53	
		P10-P9	184		P2-P3	105		2	15	33	29	楕円		
		P4-P5	159	327	P3-P4	197	425	3	39	31	30	円		
		P5-P6	168		P6-P7	155		4	21	25	25	円		
					P7-P8	138		5	9	29	24	楕円		
					P8-P9	135		6	15	34	30	楕円		
								7	15	27	25	円		
								8	25	25	24	円		
								9	25	32	27	楕円		
		平均	170.5	341		143	426		10	23	33	30	円	
6号 2間×3間	棟部	P1-P10	148	311	P1-P2	130	380	1	42	42	33	楕円	12.14	
		P10-P9	165		P2-P3	125		2	29	25	22	円		
		P4-P5	145	323	P3-P4	127	386	3	20	30	28	円		
		P5-P6	180		P6-P7	135		4	45	43	40	円		
					P7-P8	125		5	20	40	34	楕円		
					P8-P9	128		6	34	45	31	楕円		
								7	43	32	27	楕円		
								8	42	35	32	円		
								9	43	41	40	円		
		平均	159.5	317		128.3	383		10	19	35	30	楕円	
7号 2間×2間	棟部	P1-P7	170	341	P1-P2	228	455	1	43	38	38	円	15.03	土器片 炭化物
		P7-P6	174		P2-P3	227		2	39	31	26	楕円		
		P3-P4	—	313	P4-P5	243	464	3	35	29	29	円		
					P5-P6	221		4	28	35	28	楕円		
								5	37	32	28	楕円		
								6	17	34	35	円		
								7	34	33	29	楕円		
		平均	172	327		229.8	459.5		8	42	30	21	楕円	
									34.4	32.8	29.3			

掘立柱建物跡観察表 2

掘立柱建物跡		柱穴番号	梁間柱間 (cm)	梁間 (cm)	柱穴番号	桁行柱間 (cm)	桁行 (cm)	Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方	床面積 (㎡)	備考
8号 2間×3間	棟部	P1-P10	135	263	P1-P2	125	397	1	17	30	28	円	10.61	
		P10-P9	128		P2-P3	132		2	33	35	30	楕円		
		P4-P5	132	272	P3-P4	140	396	3	50	37	32	楕円		
		P5-P6	140		P6-P7	142		4	18	30	25	楕円		
					P7-P8	118		5	55	34	30	楕円		
					P8-P9	139		6	10	29	28	円		
								7	37	38	27	楕円		
								8	34	34	32	円		
								9	18	30	29	円		
								10	10	28	27	円		
		平均	133.8	267.5		132.7	396.5		28.2	32.5	28.8			
9号 1間×2間	棟部	P1-P6	—	366	P1-P2	270	520	1	30	38	29	楕円	18.69	
		P3-P4	—	357	P2-P3	251	514	2	51	34	22	楕円		
					P4-P5	260		3	36	27	27	円		
					P5-P6	254		4	37	26	26	円		
								5	36	34	29	楕円		
								6	30	30	30	円		
		平均	—	361.5		258.8	517		36.7	31.5	27.2			
10号 1間×2間	棟部	P1-P6	—	264	P1-P2	122	270	1	14	24	19	楕円	7.02	
		P3-P4	—	266	P2-P3	149	260	2	17	24	21	円		
					P4-P5	140		3	20	25	24	円		
					P5-P6	121		4	13	22	21	円		
								5	14	26	23	円		
								6	19	26	25	円		
		平均	—	265		133	265		16.2	24.5	22.2			
11号 2間×3間	棟部	P1-P9	136	322	P1-P2	322	547	1	36	20	20	円	18.74	
		P9-P8	188		P2-P3	225	582	2	32	26	20	楕円		
		P3-P4	164	342	P5-P6	210		3	37	21	21	円		
		P4-P5	177		P6-P7	209		4	12	25	22	円		
					P7-P8	164		5	23	24	23	円		
								6	26	26	21	楕円		
								7	25	22	22	円		
								8	19	20	20	円		
								9	22	18	16	円		
		平均	166.3	332		226	564.5		25.8	22.4	20.6			
12号 1間×2間	棟部	P1-P6	—	357	P1-P2	195	400	1	41	35	28	楕円	14.98	
		P3-P4	—	379	P2-P3	207	414	2	37	41	36	楕円		
					P4-P5	200		3	38	37	30	楕円		
					P5-P6	215		4	44	29	29	円		
								5	44	31	31	円		
								6	52	29	26	円		
		平均	—	368		204.3	407	13	25	27	25	円		
	底部	P9-P10	90	457	P7-P8	188	505	7	21	24	24	円	総床面積 (㎡)	
		P10-P11	174		P8-P9	317		8	20	27	26	円		
		P11-P12	195					9	31	35	23	楕円	23.08	
								10	20	25	24	円		
								11	55	26	26	円		
		平均	153	457		252.5	505	12	24	26	24	円		
									29	27.2	24.5			

②溝状遺構と竪穴状遺構（第61～73図）

諏訪脇遺跡における溝状遺構は、多数検出されたので、15のグループに分けてまとめた。また、竪穴状遺構1基が溝状遺構と切り合って検出された。

溝状遺構1～6は、層や出土遺物により、古代の遺構の可能性が高い。

溝状遺構や竪穴状遺構の埋土からは、鉄滓が出土しており、溝状遺構が鍛冶工房に水を流す為のものか等、今後の検討課題である。

溝状遺構1（第61図）

A・B-8区にかけて南北方向にほぼ直線状に検出された。長さ約31.5m、幅約1.5～3.0m、深さ約13～26cmである。遺構内遺物は、検出されなかった。

溝状遺構1 土層断面A

1	明茶褐色土（1～2mmのパミスがごく少量見られる）
2	黒褐色土

土層断面B

1	明茶褐色土
2	黒褐色土

土層断面C

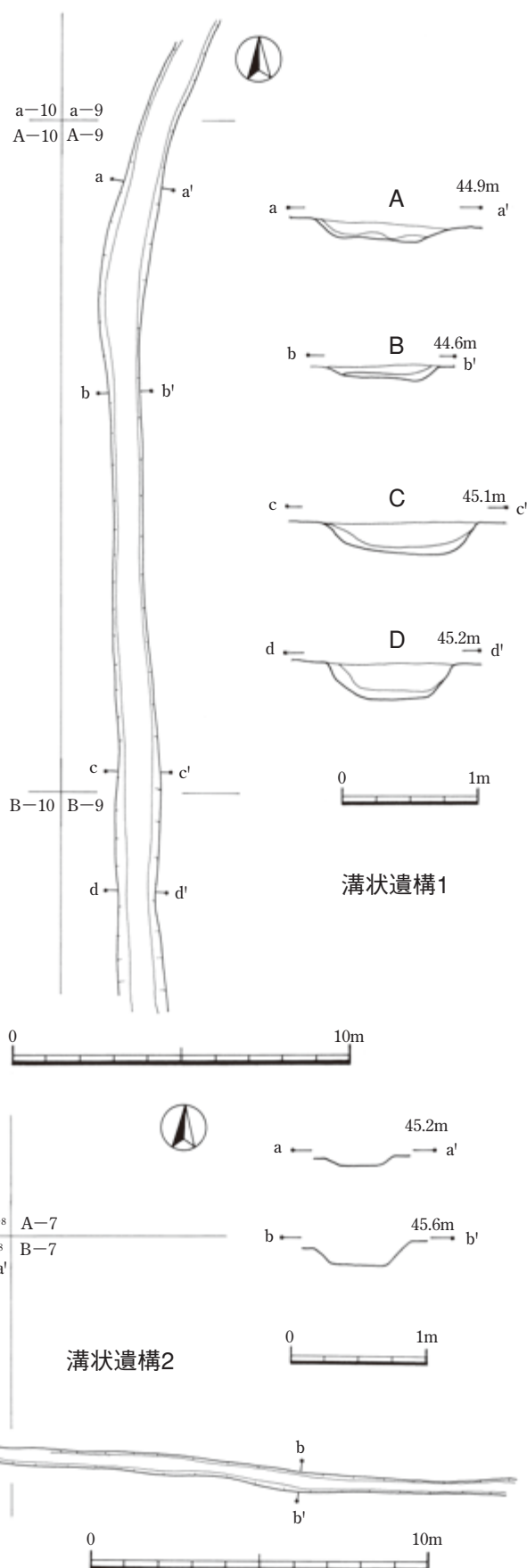
1	茶褐色土（1～2mmのパミスがごく少量見られる）
2	明茶褐色土（下層のアカホヤがブロックで混ざったような感じ）

土層断面D

1	茶褐色土（1～2mmのパミスがごく少量見られる）
2	明茶褐色土

溝状遺構2（第61図）

A-8区～B-7区にかけてほぼ直角にカーブして検出された。長さ約53m、幅約0.9～1.3m、深さ約5.5～15.2cmである。遺構内遺物は、検出されなかった。



第61図 古代・中世 溝状遺構1

溝状遺構 3（第62図）

a-3・4区にかけてほぼ直線状に検出された。長さ約22m、幅約1.4～1.9m、深さ約75～80cmである。竪穴状遺構と切り合っている。時代は、切り合いの関係から竪穴状遺構の方が新しいと思われる。a-4区で、溝状遺構4とも切り合っている。遺構内遺物は、少なめであったが、土器は、須恵器、土師器、鉄滓などが出土した。中世の青磁も出土しているが、それ以外はほとんど古代の遺物であった。鉄滓は小さ目が多く、溝状遺構4で出土した鉄滓より古いと思われる。近隣に掘立柱建物跡4号が検出されている。

415～417は、須恵器の甕の胴部である。3点とも外面は格子目タタキ、内面は415と417が同心円タタキで、416が平行タタキが施されている。418～420は、土師器の甕の口縁部である。421は、13世紀中葉の青磁であり、口縁部はやや外反し、外面には鎗蓮弁を有するものである。博多でも同様のものが見受けられる。

溝状遺構 4（第62図）

a-4区～C-3区にかけて北西～南東方向にほぼ直線状に検出された。長さ約58m、幅約0.6～1.5m、深さ約10～70cmであるが、溝状遺構3と切り合っている所が深くなっており、落ち込みの可能性も考えられる。溝状遺構3とa-4区で切り合っているが、4の方がやや深い。遺構内遺物は、少なめであったが、遺物は、須恵器、土師器、瓦質土器、鉄滓などが出土した。鉄滓はやや大きめが多く、溝状遺構3で出土した鉄滓より新しいと思われる。

422～429は、須恵器の甕の胴部である。423・428は、内面が磨られており、硯に転用された可能性が考えられる。430は、内面が黒色の土師器碗の底部

である。床面に近い層から出土した431は、胎土質から、身近な土を利用した瓦質土器と考えられる。熊本県荒尾市の樺番城窯跡に見られる中世須恵器（瓦器）に類似しており、13～14世紀のものと思われる。口縁部の注ぎ口と思われる部分や見込みの刷り目から播鉢であることが分かるが、器形は当時の備前焼を模倣した感がある。

溝状遺構 5（第62・63図）

B-5～2区にかけて東西方向にほぼ直線状に検出された。長さ約60m、幅約0.5～1.6m、深さ約10cm（残存）である。B-3区で溝状遺構6と切り合っており、溝状遺構6の方が古い時期だと思われる。

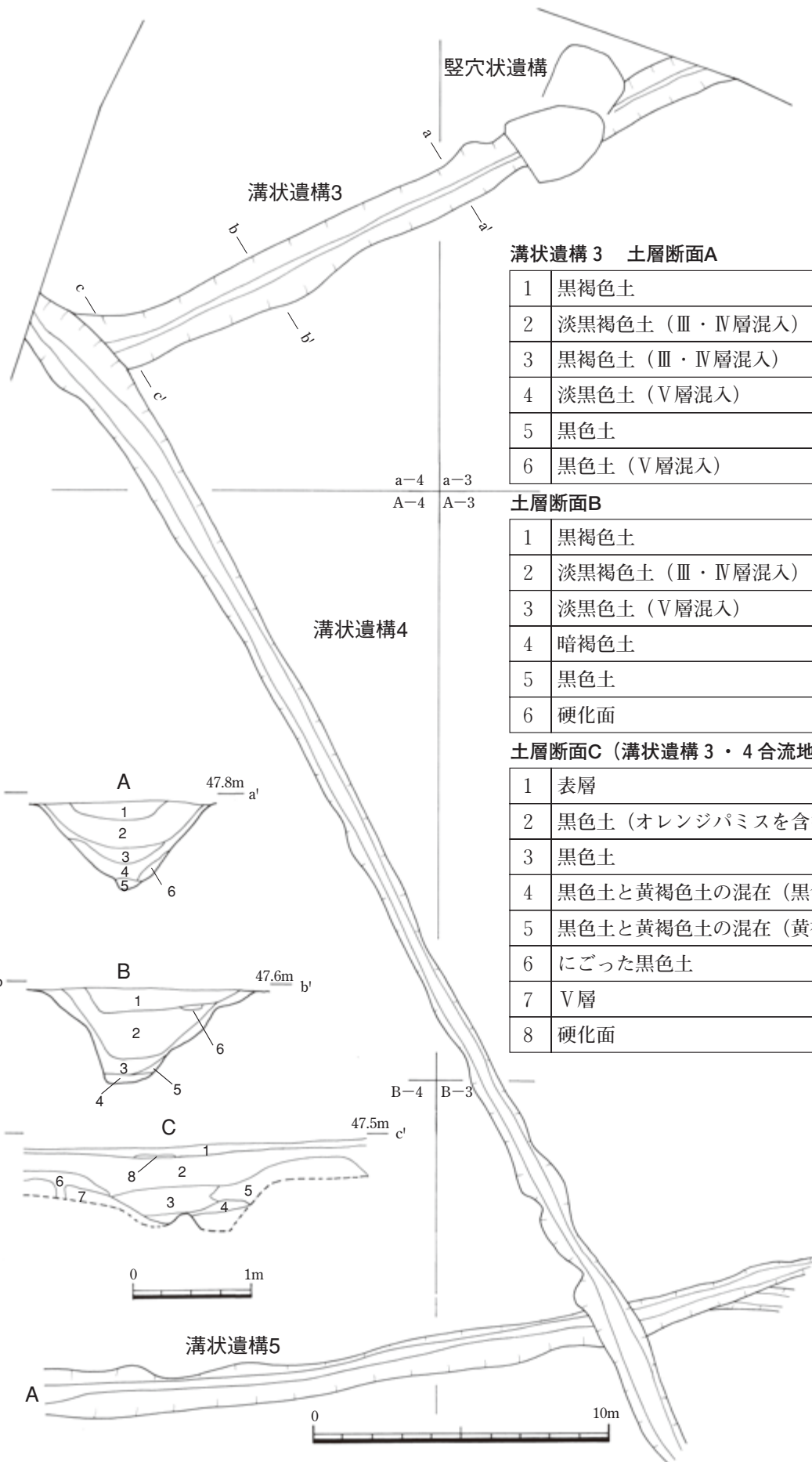
溝状遺構 6（第63図）

B-3・2区にかけて東西方向にほぼ直線状に検出された。長さ約13m、幅約0.6～1.2m、深さ約10cmである。B-3区で溝状遺構5と切り合っており、溝状遺構5の方が新しい時期だと思われる。遺物は、須恵器、土師器、瓦質土器、鉄滓などが出土した。

432は、須恵器の甕の胴部である。433～438は、土師器である。433・434は、甕の口縁部である。口縁部から底部までである435は、口径9.2cm、底径7.8cmを測る。底部の切り離しは糸切りによるものである。436～438は、内面が赤色の碗の底部である。436は、脚部分が磨滅している。439は、431と同じく胎土質から、身近な土を利用した瓦質土器と考えられる。口縁部の注ぎ口や見込みの刷り目から播鉢であることが分かるが、器形は当時の備前焼を模倣した感がある。内面は、斜位及び横位の撫での後、右斜め上方に向けて1単位10条程の揃り目が施される。

古代・中世 溝状遺構内遺物観察表

挿図 番号	番号	種別	器種	出土区	遺構	層位	部位	法量 (cm)				色 調		胎土	焼成	外 面	内 面	備考
								口径	底径	高	台高	内	外					
第 65 図	415	須恵器	甕	a-4	溝 3	Ⅱ	胴部	—	—	—		暗灰黄	暗赤褐	精緻	良	格子目タタキ	同心円・平行タタキ	
	416	須恵器	甕	a-4		Ⅱ	胴部	—	—	—		灰オリーブ	灰	精緻	良	格子目タタキ	平行タタキ	
	417	須恵器	甕	a-4		Ⅱ	胴部	—	—	—		にぶい黄褐	黄褐	精緻	良	格子目タタキ	同心円タタキ	
	418	土師器	甕	B-3・4・5		—	口縁部	—	—	—		にぶい黄橙	にぶい褐	精緻	良	—	—	
	419	土師器	甕	a-4		Ⅱ	口縁部	28	—	—		浅黄橙	浅黄橙	精緻	良	—	—	
	420	土師器	甕	a-3・4		—	口縁部	—	—	—		明黄褐	明黄褐	精緻	良	—	—	
	421	青磁	碗	a-4		Ⅱ	口縁部	6.6	—	—		灰オリーブ	灰オリーブ	精緻	良	—	—	

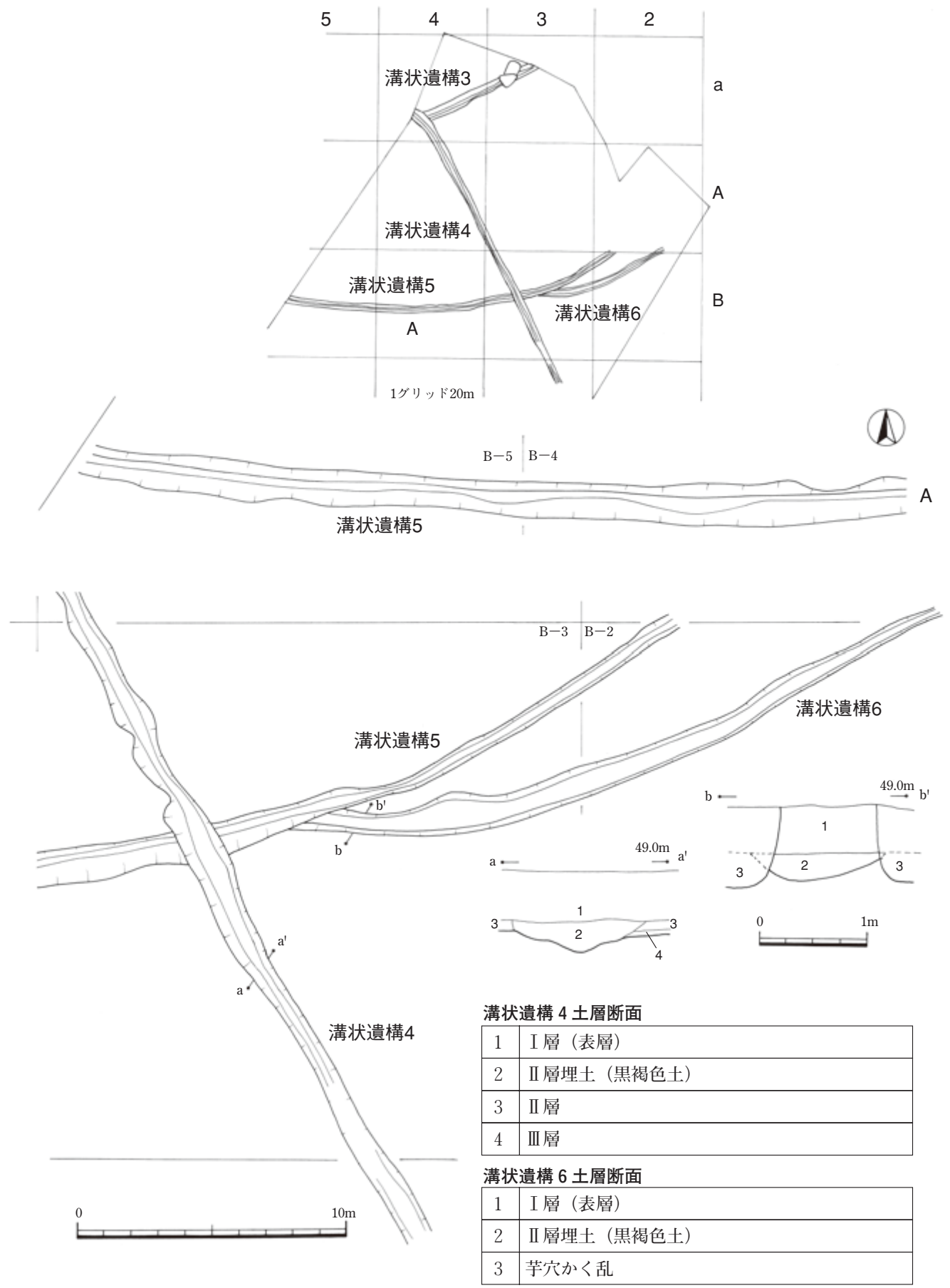


1	黒褐色土
2	淡黒褐色土 (Ⅲ・Ⅳ層混入)
3	黒褐色土 (Ⅲ・Ⅳ層混入)
4	淡黒色土 (Ⅴ層混入)
5	黒色土
6	黒色土 (Ⅴ層混入)

1	黒褐色土
2	淡黒褐色土 (Ⅲ・Ⅳ層混入)
3	淡黒色土 (Ⅴ層混入)
4	暗褐色土
5	黒色土
6	硬化面

1	表層
2	黒色土 (オレンジパミスを含む)
3	黒色土
4	黒色土と黄褐色土の混在 (黒色土が強い)
5	黒色土と黄褐色土の混在 (黄褐色土が強い)
6	にごった黒色土
7	Ⅴ層
8	硬化面

第62図 古代・中世 溝状遺構 2



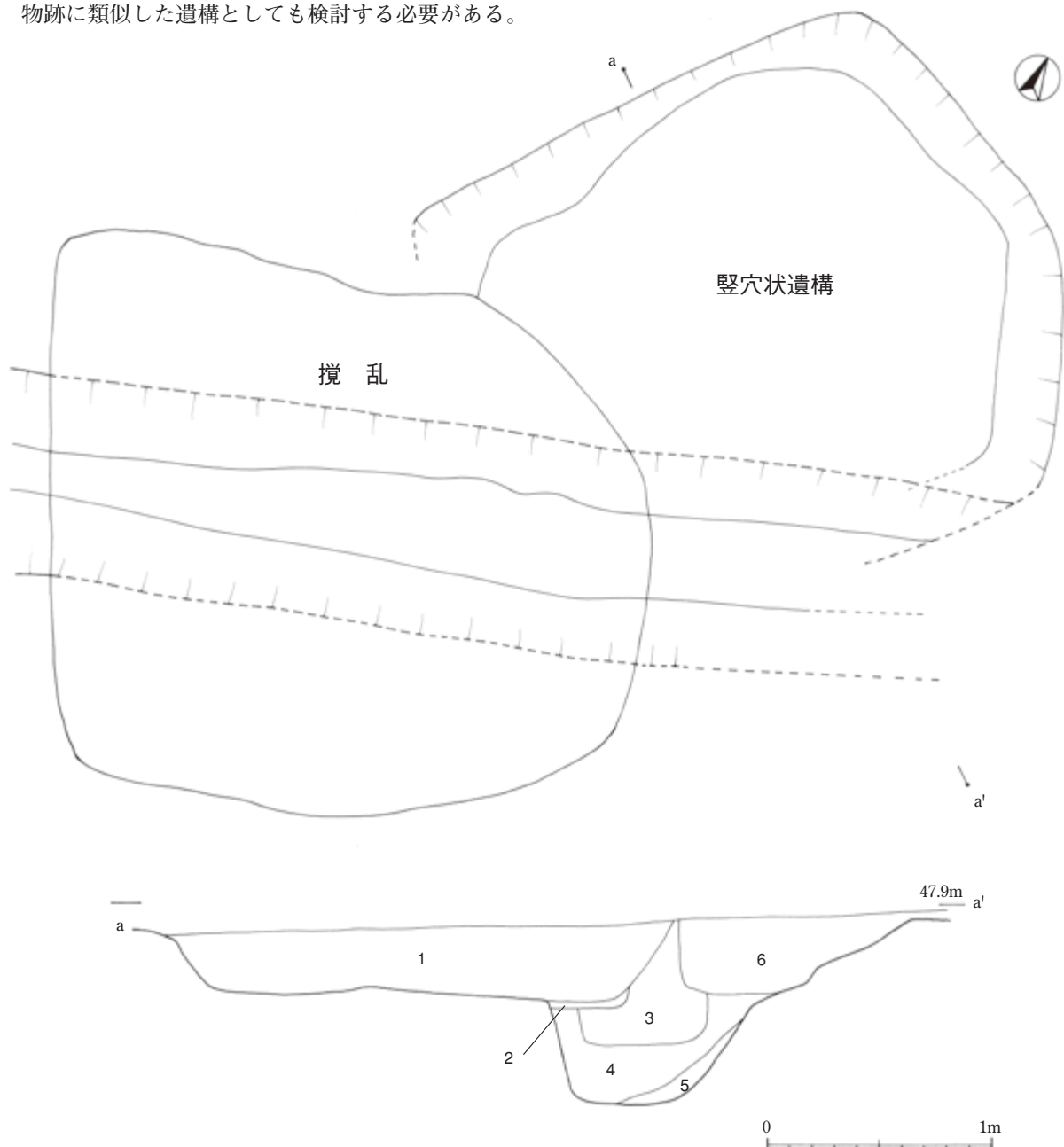
第63図 古代・中世 溝状遺構 3

竪穴状遺構（第64図）

a－3区で、溝状遺構3と切り合って検出された中世の竪穴状遺構である。一部削平をうけていたが、残存部分より隅丸方形形状と思われる。最初、2基の竪穴遺構と思われて検出されたが、埋土状況等により、1基は攪乱によるものと判断した。埋土から鉄滓が少量出土したが、溝状遺構3の埋土から出土した鉄滓と色や硬さなどほぼ同じ状態であった。竪穴状遺構が溝状遺構を切っている状態で検出されたため、時期差は竪穴状遺構の方が新しいと思われる。焼土跡や炭化物は検出されなかった。今後、竪穴建物跡に類似した遺構としても検討する必要がある。

竪穴状遺構 土層断面図

1	黄黒色明褐色パミス状土混入
2	黒色硬質土
3	黒褐色土
4	淡黒褐色土
5	黒色土
6	攪乱



第64図 古代・中世 竪穴状遺構



第65図 古代・中世 溝状遺構内遺物（1）

溝状遺構内出土遺物（第66図）

溝状遺構内一括遺物は、全て、溝状遺構3～6から出土したものである。

440～459は、古代の須恵器と思われる。440は、甕の口径23.6cmの口縁～頸部である。内外面ともナデ調整が施されている。441・442は、甕の頸～胴部である。441は、外面が格子目タタキ、内面が同心円タタキとナデ調整を施し、442は、外面が平行タタキ、内面が同心円タタキとナデ調整を施している。443～457は甕の胴部である。外面は、格子目タタキが多く444～447・450～452・455・457、平行タタキが443・449・453・454、格子目・平行タタキが448である。内面は、同心円タタキが多く443～448、同

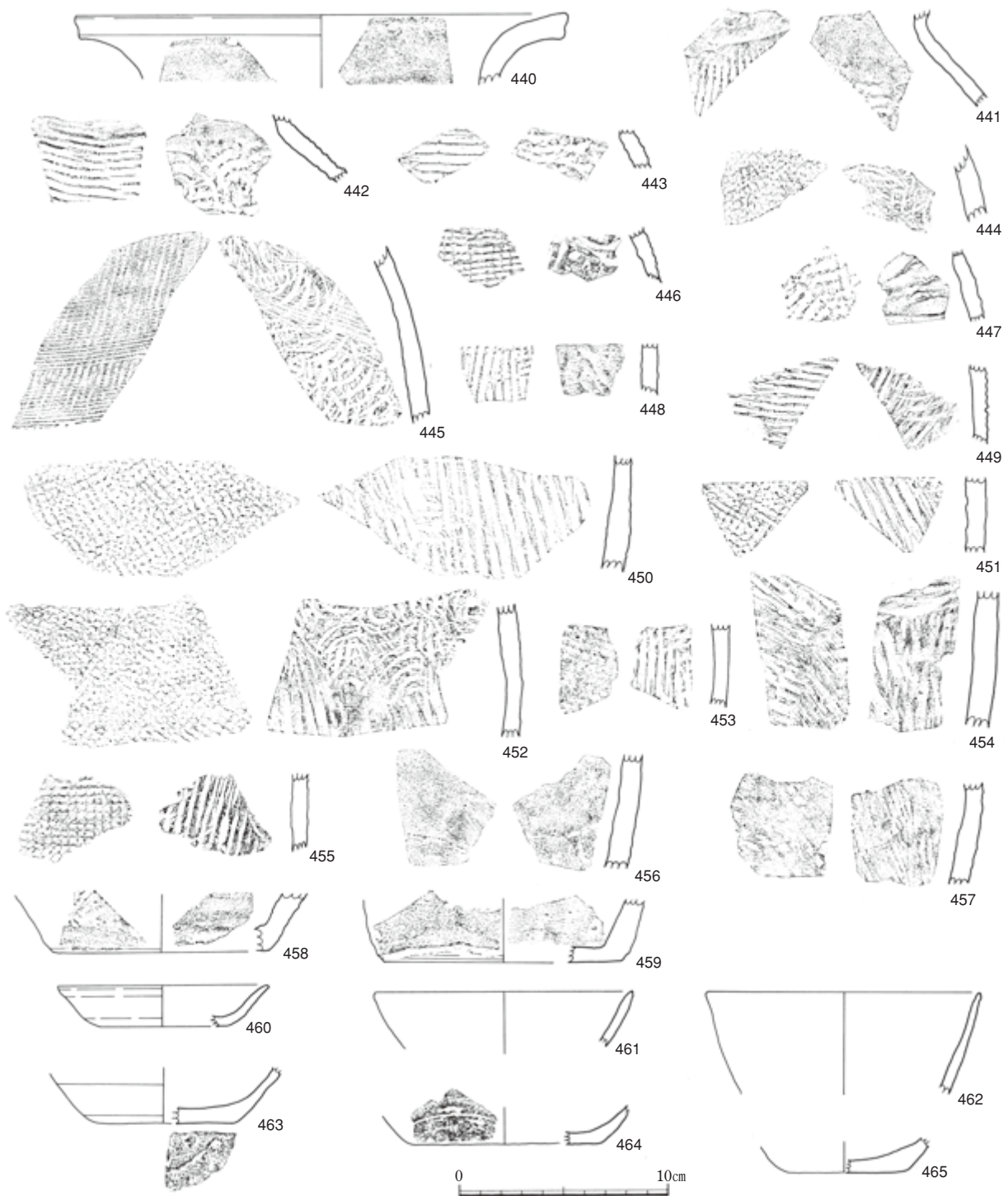
心円・平行タタキが449・452・454・457、平行タタキが451・455、平行・格子目が450、格子目が453である。456は、内外面ともナデ調整が施されている。

458・459は壺の底部である。458は、底径10.2cmで外面が平行タタキ、内面がナデである。459は、底径11.2cmで内外面ともナデである。

460～465は、古代の土師器である。460は、口径9.8cmの皿の口縁～胴部である。461～465は、坏である。461は、内黒の口径12.2cmを測る口縁部である。462は、内面に朱塗の口径13cmを測る口縁～胴部である。463～465の底部は、糸切りによる切り離しだと思われる。

古代・中世 溝状遺構内遺物観察表

挿図 番号	番号	種別	器種	出土区	遺構	層位	部位	法量 (cm)			色 調		胎土	焼成	外 面	内 面	備考
								口径	底径	高台高	内	外					
第 65 図	422	須恵器	甕	A-4	溝 4	Ⅱ	胴部	—	—	—	灰	灰黄	精緻	良	格子目タタキ	同心円タタキ	
	423	須恵器	甕	B-3		Ⅱ	胴部	—	—	—	灰	灰	精緻	良	格子目タタキ	同心円タタキ	
	424	須恵器	甕	A-4		Ⅱ	胴部	—	—	—	褐灰	にぶい赤褐	精緻	良	格子目タタキ	同心円タタキ	
	425	須恵器	甕	a-4		Ⅱ	胴部	—	—	—	褐灰	にぶい赤褐	精緻	良	格子目タタキ	同心円タタキ	
	426	須恵器	甕	B-3	溝 6	Ⅱ	胴部	—	—	—	褐灰	暗赤褐	精緻	良	平行タタキ	同心円タタキ	
	427	須恵器	甕	a-4		Ⅱ	胴部	—	—	—	黄灰	にぶい赤褐	精緻	良	格子目タタキ	同心円タタキ	
	428	須恵器	甕	A-4		Ⅱ	胴部	—	—	—	浅黄	にぶい黄橙	精緻	良	格子目タタキ	同心円タタキ	
	429	須恵器	甕	A-3		Ⅱ	胴部	—	—	—	黄灰	灰	精緻	良	格子目タタキ	平行タタキ	
	430	土師器	椀	a-3・4	溝 6	—	底部	—	7.6	1.0	にぶい黄橙	橙	精緻	良	—	—	内黒
	431	瓦質土器	捏鉢	a-4		Ⅲ	口縁部	—	—	—	淡黄	淡黄	精緻	良	ろくろによるナデ	ろくろによるナデ	東播系
	432	須恵器	甕	B-2		Ⅱ	胴部	—	—	—	褐灰	浅黄	精緻	良	格子目タタキ	平行・同心円タタキ	
	433	土師器	甕	B-3・4・5		—	口縁部	—	—	—	橙	黒褐	精緻	良	—	—	
	434	土師器	甕	a-3,A・B-4		—	口縁部	—	—	—	橙	橙	精緻	良	—	—	
	435	土師器	皿	B-3		Ⅱ	完形	9.2	7.8	—	黄橙	にぶい橙	精緻	良	—	—	糸切り
	436	土師器	椀	B-3		Ⅱ	底部	—	—	—	橙	橙	精緻	良	—	—	内赤
	437	土師器	椀	B-3		Ⅱ	底部	—	7.3	1.1	浅黄橙	明黄褐	精緻	良	—	—	内赤
	438	土師器	椀	B-2		Ⅱ	底部	—	8.5	0.5	橙	浅黄橙	精緻	良	—	—	内赤
	439	瓦質土器	捏鉢	B-3		Ⅱ	口縁部	32	—	—	灰黄	黄灰	精緻	良	ナデ	ハケ目	東播系
第 66 図	440	須恵器	甕	一括			口縁～頸部	24	—		褐灰	黄灰	精緻	良	ナデ	ナデ	
	441	須恵器	甕	一括			頸部～胴部	—	—		褐	にぶい黄褐	精緻	良	格子目タタキ	同心円タタキ・ナデ	
	442	須恵器	甕	一括			頸部～胴部	—	—		暗赤褐	にぶい赤褐	精緻	良	平行タタキ	同心円タタキ・ナデ	
	443	須恵器	甕	一括			胴部	—	—		にぶい褐	にぶい赤褐	精緻	良	平行タタキ	同心円タタキ	
	444	須恵器	甕	一括			胴部	—	—		暗灰黄	褐	精緻	良	格子目タタキ	同心円タタキ	
	445	須恵器	甕	一括			胴部	—	—		黄灰	黄灰	精緻	良	格子目タタキ	同心円タタキ	
	446	須恵器	甕	一括			胴部	—	—		オリーブ黒	暗褐	精緻	良	格子目タタキ	同心円タタキ	
	447	須恵器	甕	一括			胴部	—	—		灰黄褐	褐灰	精緻	良	格子目タタキ	同心円タタキ	
	448	須恵器	甕	一括			胴部	—	—		にぶい黄褐	褐灰	精緻	良	格子目・平行タタキ	同心円タタキ	
	449	須恵器	甕	一括			胴部	—	—		にぶい黄褐	褐	精緻	良	平行タタキ	平行・同心円タタキ	
	450	須恵器	甕	一括			胴部	—	—		暗灰黄	黄灰	精緻	良	格子目タタキ	平行・格子目タタキ	
	451	須恵器	甕	一括			胴部	—	—		暗灰黄	黒褐	精緻	良	格子目タタキ	平行タタキ	
	452	須恵器	甕	一括			胴部	—	—		黄灰	にぶい赤褐	精緻	良	格子目タタキ	平行・同心円タタキ	
	453	須恵器	甕	一括			胴部	—	—		暗灰黄	黒褐	精緻	良	格子目タタキ	平行タタキ	
	454	須恵器	甕	一括			胴部	—	—		にぶい褐	にぶい褐	精緻	良	平行タタキ	平行・同心円タタキ	
	455	須恵器	甕	Ⅱ			胴部	—	—		灰黄褐	灰黄褐	精緻	良	格子目タタキ	平行タタキ	
	456	須恵器	甕	一括			胴部	—	—		灰黄	黄灰	精緻	良	ナデ	ナデ	
	457	須恵器	甕	一括			胴部	—	—		にぶい黄褐	にぶい褐	精緻	良	格子目タタキ	平行・同心円タタキ	
	458	須恵器	壺	一括			底部	—	10		にぶい褐	にぶい褐	精緻	良	平行タタキ	ナデ	
	459	須恵器	壺	一括			底部	—	11		褐灰	灰黄	精緻	良	ナデ	ナデ	



第66図 古代・中世 溝状遺構内遺物（2）

古代・中世 溝状遺構内遺物観察表（土師器）

挿図 番号	番号	種別	層	器 種	部位	法量 (cm)		色		胎土	焼成	外 面	内 面	備考
						口径	底径	内	外					
第 66 図	460	土師器	一括	皿	口縁～胴部	9.8	—	にぶい橙	にぶい橙	精緻	良	—	—	
	461	土師器	一括	坏	口縁	12.2	—	オリーブ黒	淡黄	精緻	良	—	—	内黒
	462	土師器	一括	坏	口縁～胴部	13	—	黄橙	明赤褐	精緻	良	—	—	内朱塗
	463	土師器	一括	坏	底部	—	9	橙	橙	精緻	良	—	—	
	464	土師器	一括	坏	底部	—	6.6	赤黄褐	赤黄褐	精緻	良	—	—	
	465	土師器	一括	坏	底部	—	5.4	にぶい橙	にぶい橙	精緻	良	—	—	

鉄滓（第67・68図）

鍛冶炉跡は確認することができなかったが、溝状遺構の埋土から轆の羽口や鉄滓が出土したことから、鍛冶工房が存在した可能性も考えられる。また、農業開発総合センター遺跡群では、唯一のまとまった出土である。

竪穴状遺構とも切り合っている溝状遺構3で検出された鉄滓は、黒色のものが多く、溝状遺構4・5・6から検出された鉄滓は、溝状遺構3の鉄滓より明るい色のものが多かった。鉄滓の総重量は、14.2kgであった。

鉄滓等の色調は、錆のため変色も考えられるが、観察表に色調を記入した。やや黒色に近いものと明るいものに分けられ、受けた熱によるものか時代差によるかは検討が必要である。今回は、羽口や碗形滓の中でも残りのよいものを選び、図化した。

466～468は、羽口の先端部分付近である。466は、鉄滓が付着している。鉄滓の一部には炉床が付着し、羽口の表面は溶けガラス化している。467は、羽口の先端部付近に鉄塊が付着しており、外径12.5cmに対し内径は2.2cmと細めだと思われる。

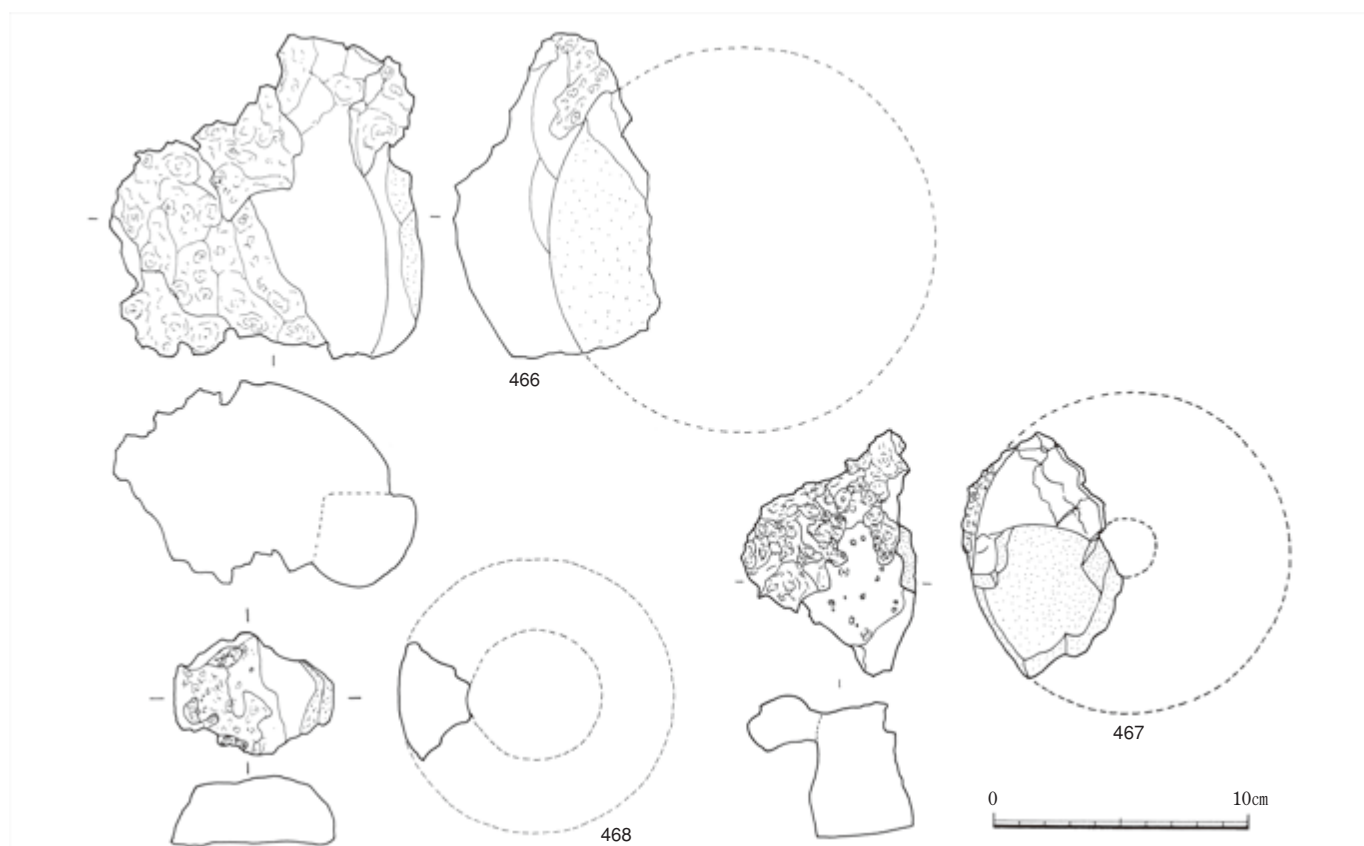
468は、右側が先端部となり、表面は鉄分が付着しているために赤茶けた部分がある。

鉄滓は、大きく2タイプに分けられた。黒色で小型、薄手、表面の凹凸、気泡が見られるAタイプと茶色で大型が多いBタイプに分けた。

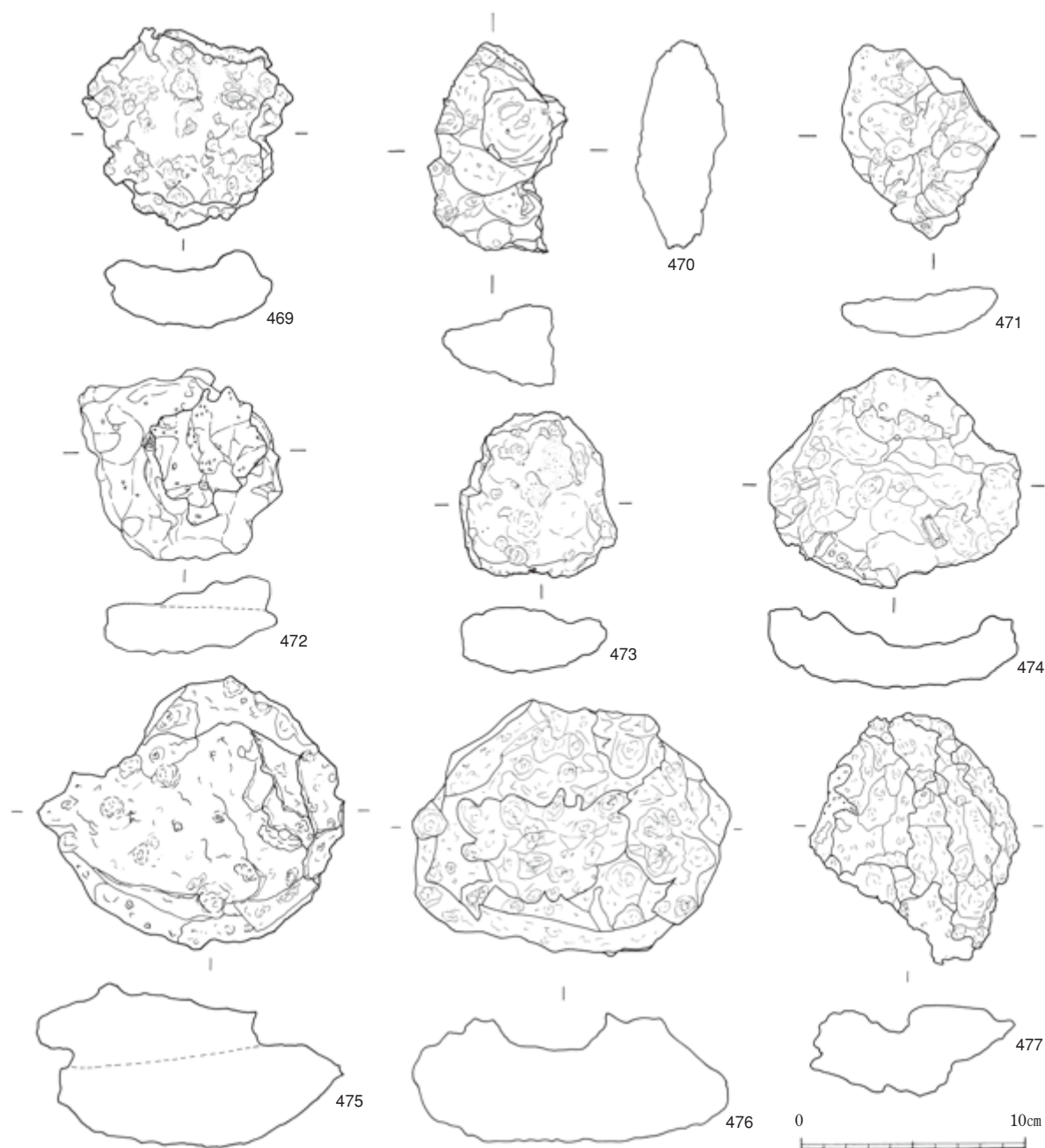
Aタイプは、469～472である。469は、ほぼ円形で、上部がわずかに窪む。470は、碗形滓が破断したものと思われ、上部には膨らみがあり中は空洞となっている。471も、碗形滓が破断したものと思われ、やや薄手である。472は、やや小さ目の碗形滓の上部にガラス質滓が付着したと思われる。

Bタイプは、473～477である。473は、小さ目の碗形滓が一部破断したものである。上部がわずかに窪む。474は、上部がわずかに窪む。475は、ほぼ完形の円形で、2個の鉄滓が付着している。本遺跡の鉄滓の中で最も大きく、長さ11.4cm、重さ1160gを測る。476は、平面形が楕円形を呈し、上部がわずかに窪む。1050gと他に比べ重い。477は、下部に炉床の土が付着したと思われる痕跡が見られる。

Bタイプには、磁石反応が強いものが多かった。



第67図 古代・中世 溝状遺構内遺物（3）（鉄滓）



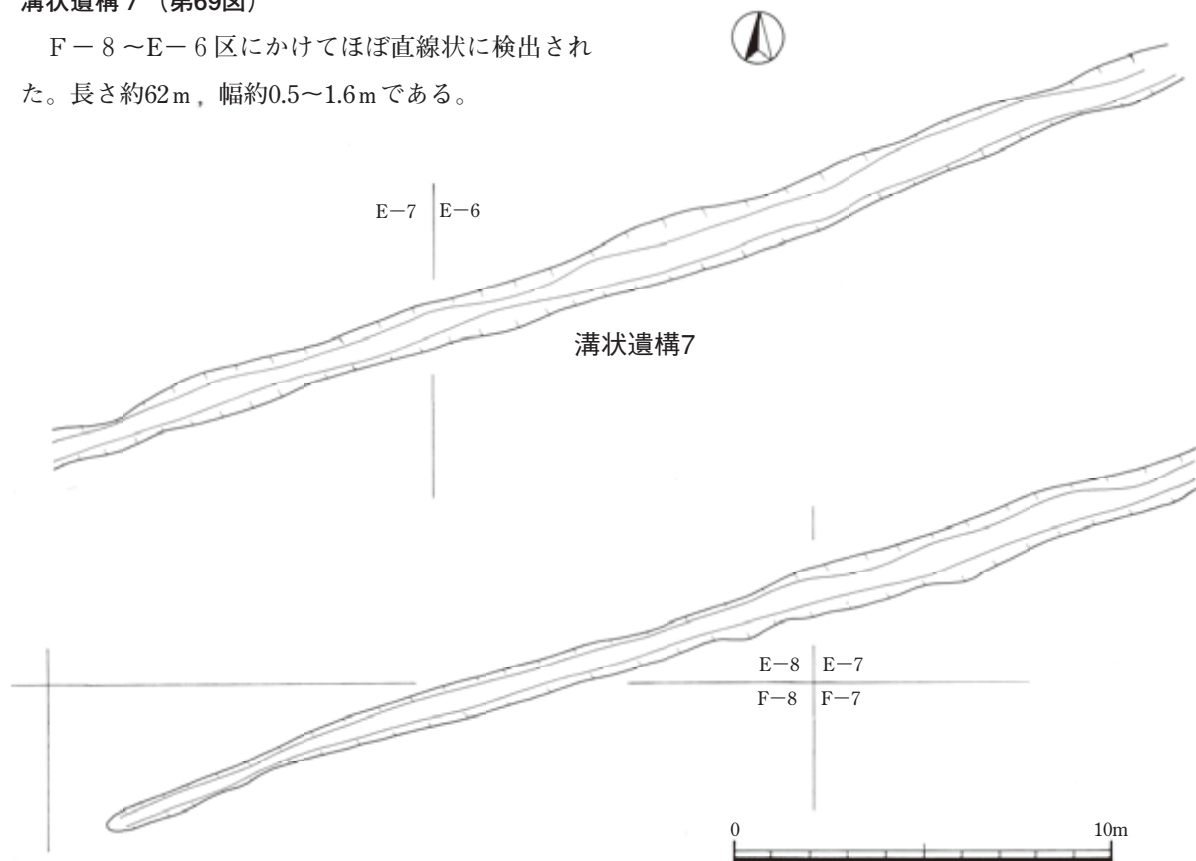
第68図 古代・中世 溝状遺構内遺物（4）（鉄滓）

鉄滓観察表

挿図 番号	番号	器種	出土区	層位遺構	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	色調	磁石 反応	羽口部 (cm)		備考
											内径	外径	
第 67 図	466	鉄滓,羽口	a-3・4	溝状遺構	12.1	11.8	7.9	830	浅黄橙	○	—	(15.3)	
	467	鉄滓,羽口	a-3・4	溝状遺構	7.5	6.4	5	200	浅黄橙	×	(2.2)	(12.5)	
	468	鉄滓,羽口	a-3・4	溝状遺構	4.6	6.3	2.5	50	浅黄橙	×	(5.2)	(10.6)	
第 68 図	469	椀形滓	a-3・4	溝状遺構3	8.6	7.3	2.4	350	黒褐	△	—	—	
	470	椀形滓	a-3・4	溝状遺構3	9.3	5	3.5	225	灰褐	×	—	—	
	471	椀形滓	a-3・4	溝状遺構4	7.7	7	1.8	145	黒褐	△	—	—	
	472	椀形滓	a-3・4	溝状遺構3	8.3	8.2	2.8	275	黒褐	△	—	—	ガラス質滓附着
	473	椀形滓	a-3・4	溝状遺構	7	6.4	2.7	195	橙	△	—	—	
	474	椀形滓	a-3・4	溝状遺構	9.7	11.1	1.9	410	にぶい橙	○	—	—	
	475	椀形滓	a-3・4	溝状遺構	11.4	13.8	6.7	1160	黄橙	○	—	—	
	476	椀形滓	a-3・4	溝状遺構	10.6	13.9	4.1	1050	黄橙	○	—	—	
	477	椀形滓	B-5	溝状遺構5	9.3	10.9	4	360	明褐	○	—	—	

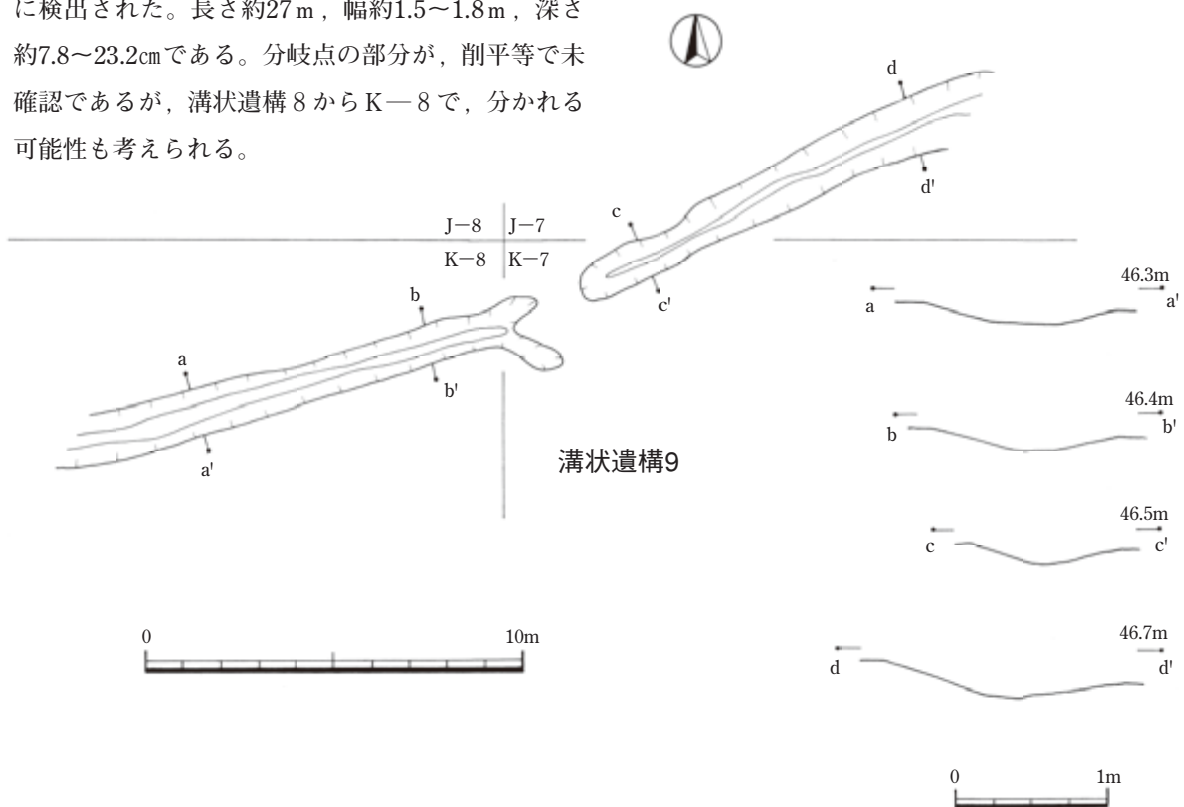
溝状遺構 7 (第69図)

F-8～E-6区にかけてほぼ直線状に検出された。長さ約62m、幅約0.5～1.6mである。



溝状遺構 9 (第69図)

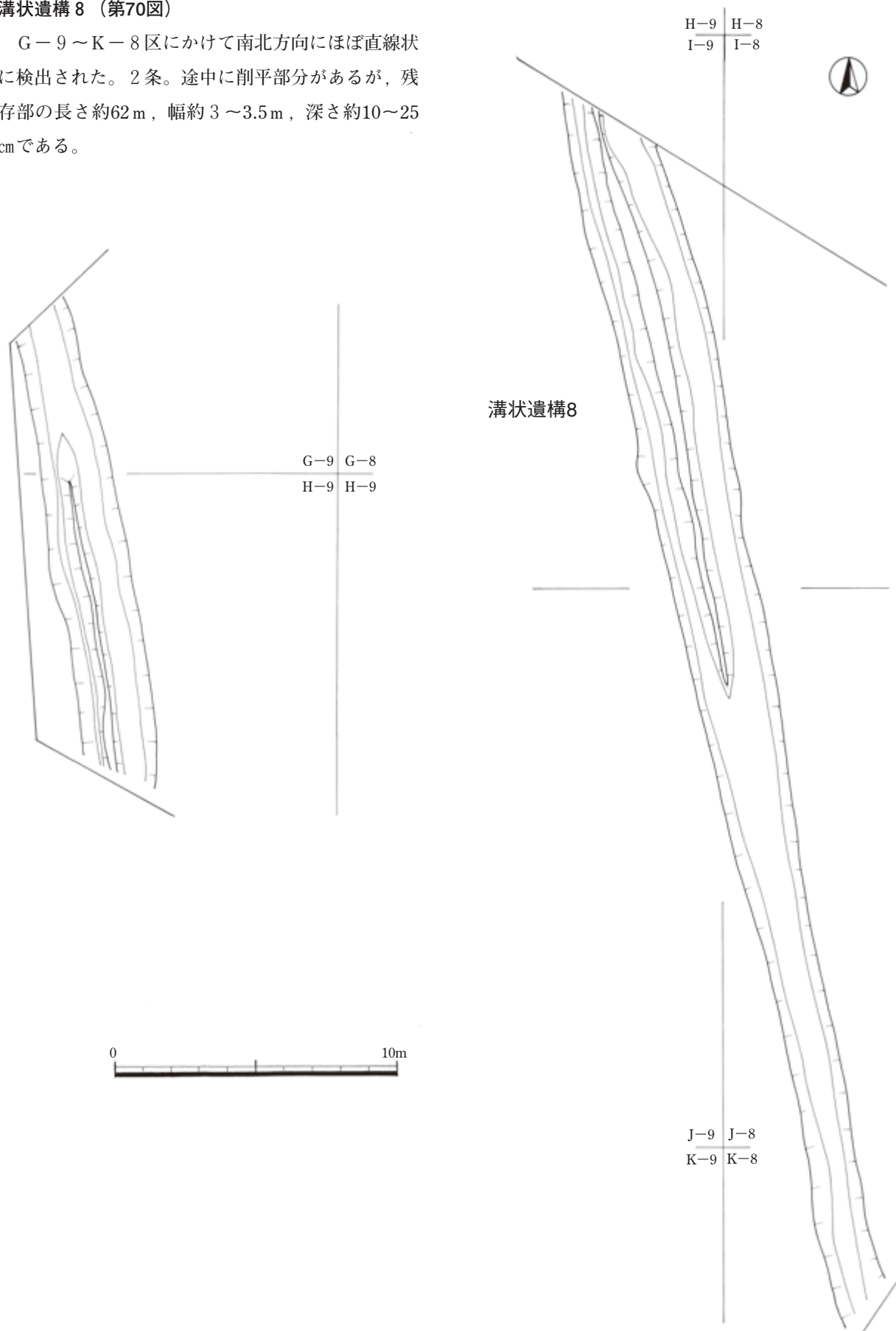
K-8～J-7区にかけて東西方向にほぼ直線状に検出された。長さ約27m、幅約1.5～1.8m、深さ約7.8～23.2cmである。分岐点の部分が、削平等で未確認であるが、溝状遺構 8 から K-8 で、分かれる可能性も考えられる。



第69図 古代・中世 溝状遺構 4

溝状遺構 8（第70図）

G-9～K-8区にかけて南北方向にほぼ直線状に検出された。2条。途中に削平部分があるが、残存部の長さ約62m，幅約3～3.5m，深さ約10～25cmである。

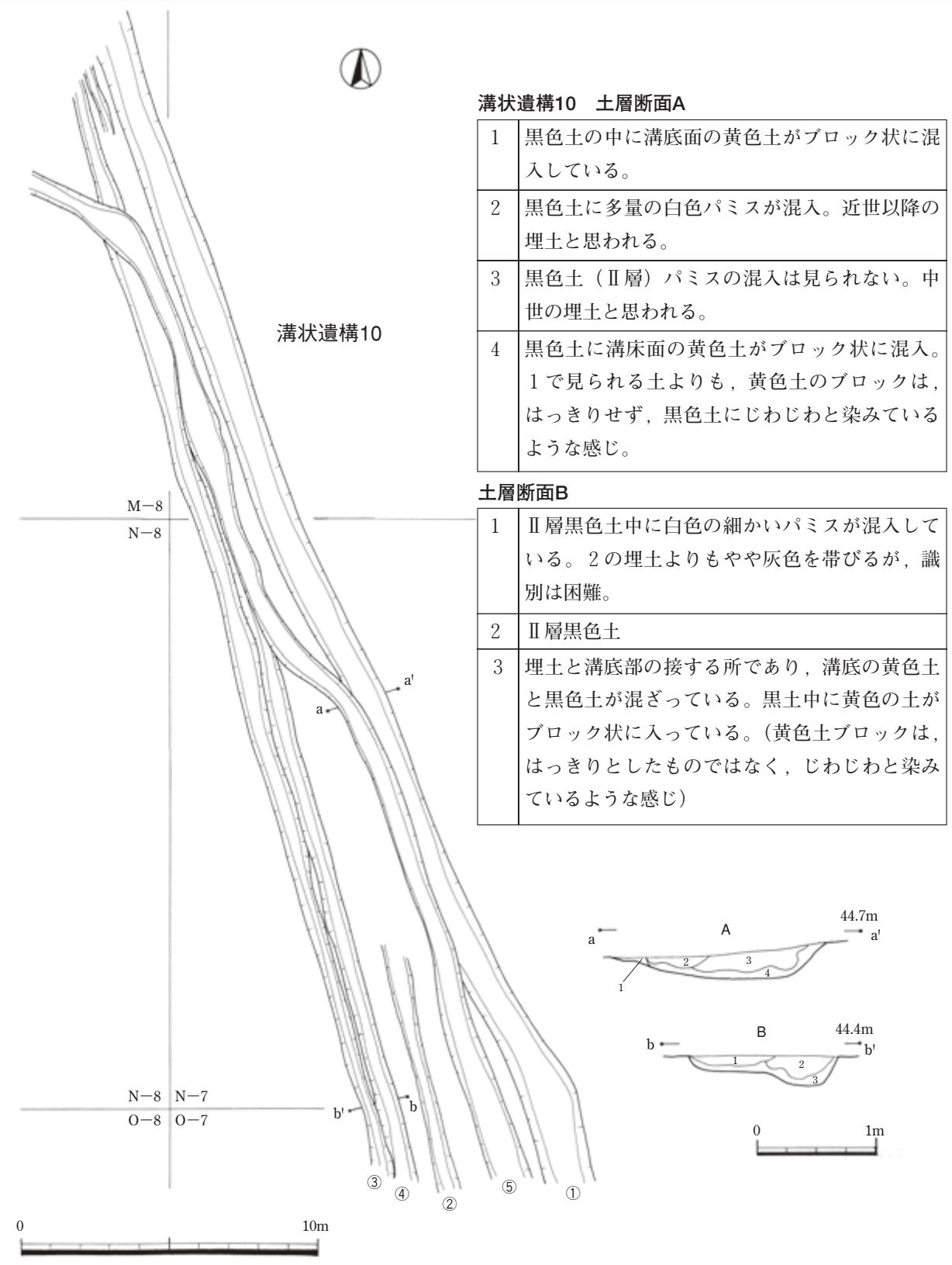


第70図 古代・中世 溝状遺構 5

溝状遺構10（第71図）

M-8～O-7区にかけてほぼ南北方向にほぼ直線状に5条検出された。溝状遺構8とつながると思われる。検出された5条は、切り合い関係や埋土な

どにより、時期の新しい方から①→②→③→④→⑤の順になると思われる。③～⑤は、ほぼ同時期と見られる。



第71図 古代・中世 溝状遺構 6

溝状遺構11

L-13～K-12区にかけてほぼ直線状に検出された。途中の削平部分も含めると、長さ約26.5m、幅約0.5～1.1mである。

溝状遺構12

N-4～M-2区にかけてほぼ東西方向に直線状に検出された。長さ約29m、幅約0.7～0.8m、深さ約23～30cmである。埋土は、黒色土一層で、遺構内遺物は、出土しなかった。検出状況や埋土などにより、時代は中世と思われる。

溝状遺構13

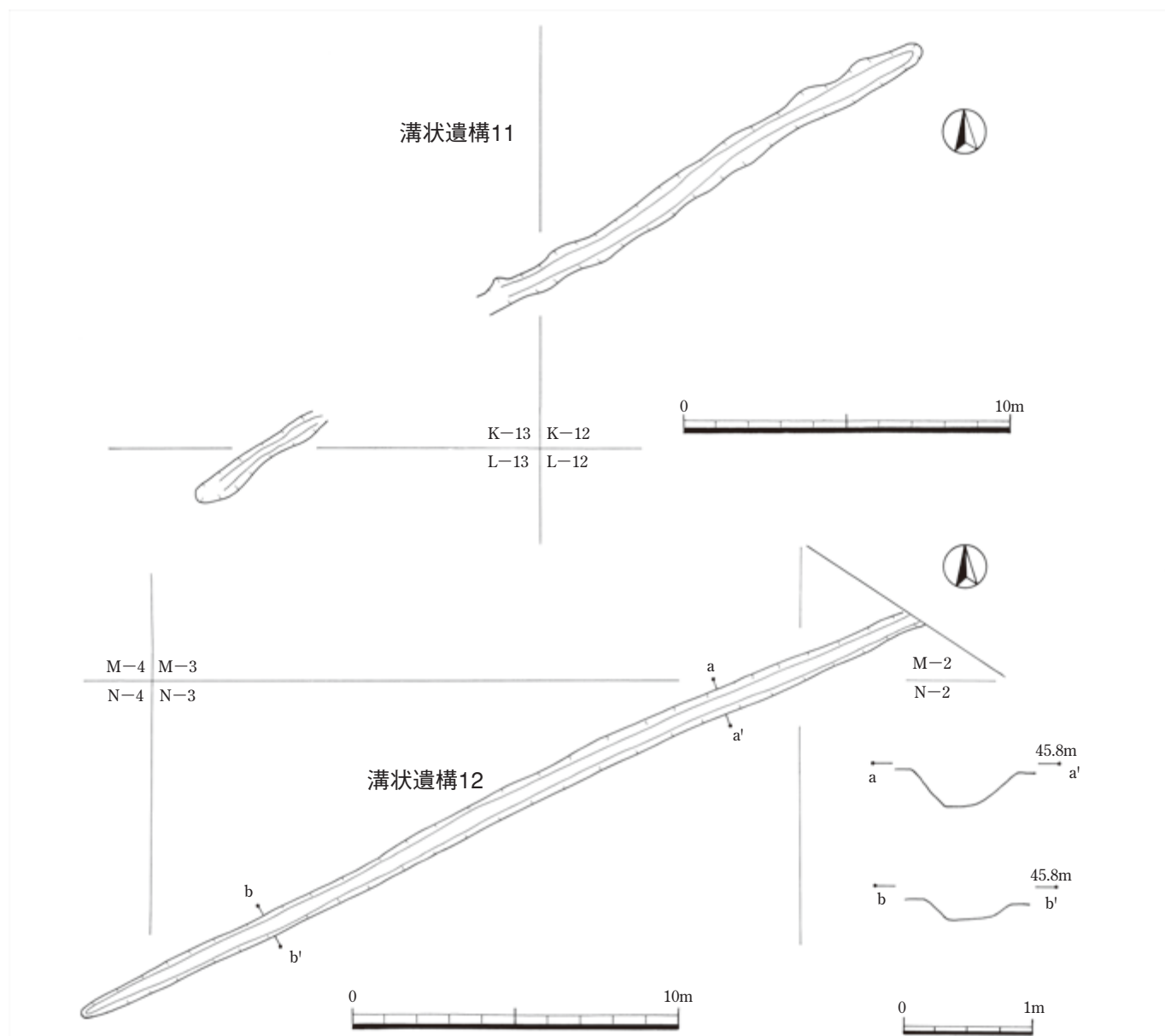
D-2～H-お区にかけて参道に平行して、ほぼ直線上に検出された。長さ約144m、幅約0.9～1.6m、深さ約20～45cmである。

溝状遺構14

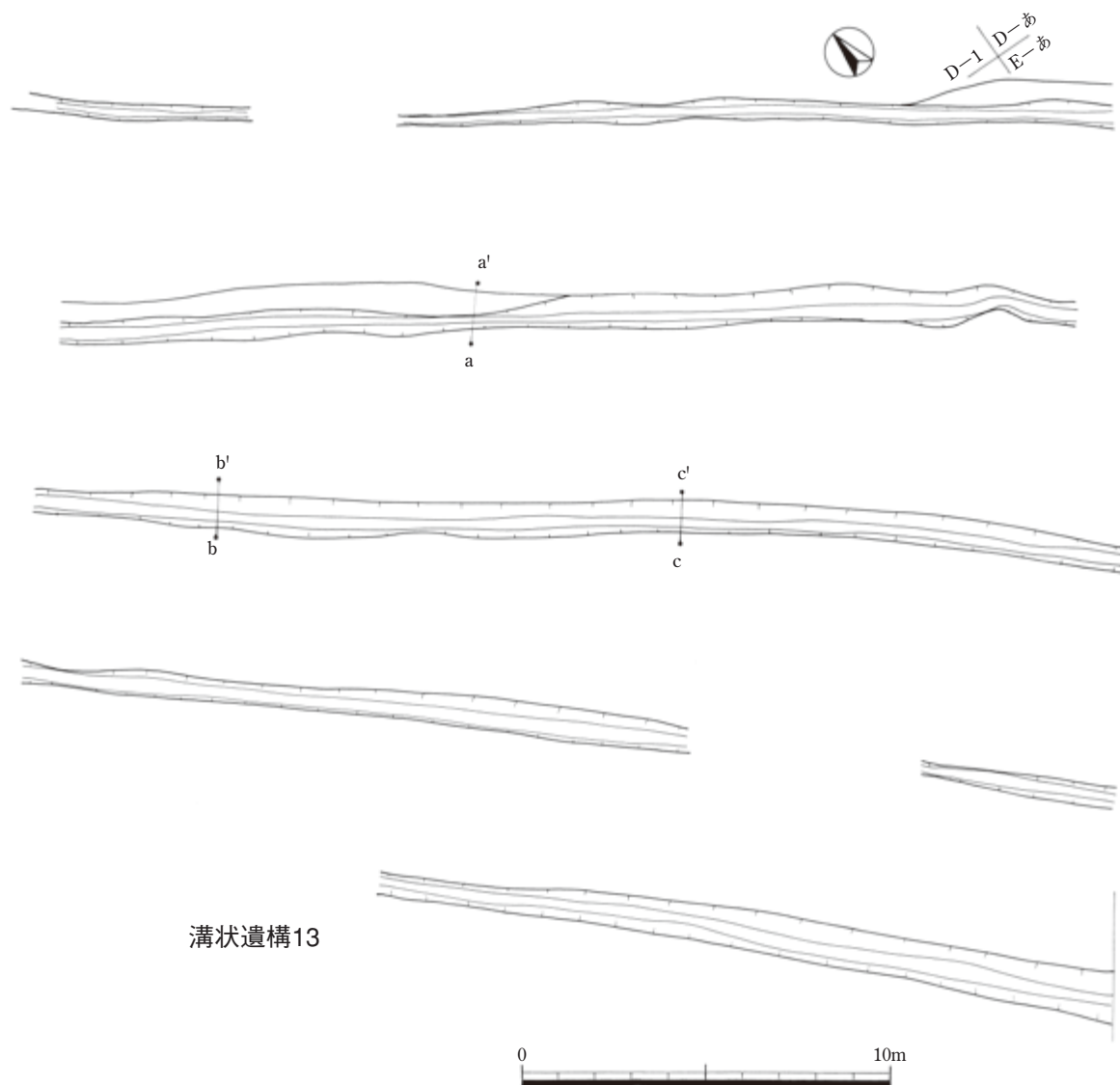
K-4～H-2区にかけてほぼ南北方向にやや波状に検出された。

溝状遺構15

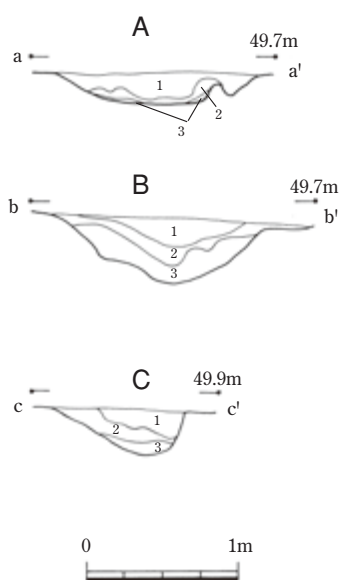
宗門掘遺跡の範囲内の中世と思われる溝状遺構である。K-15～L-14区にかけてほぼ直線状に検出された。長さ約25m、幅約0.3～1.3mである。埋土は、黒色土一層で、遺構内遺物は、出土しなかった。



第72図 古代・中世 溝状遺構 7



溝状遺構13



溝状遺構13 土層断面A

1	黒色土
2	色の薄い黒色土 (パミス)
3	茶褐色土

土層断面B

1	黒色土 (ザラザラしている)
2	黒色土 (粘り気がある)
3	色の薄い黒色土 (パミス)

土層断面C

1	黒色土 (パミス少し)
2	黒色土 (パミス多い)
3	茶褐色土

(2) 遺物

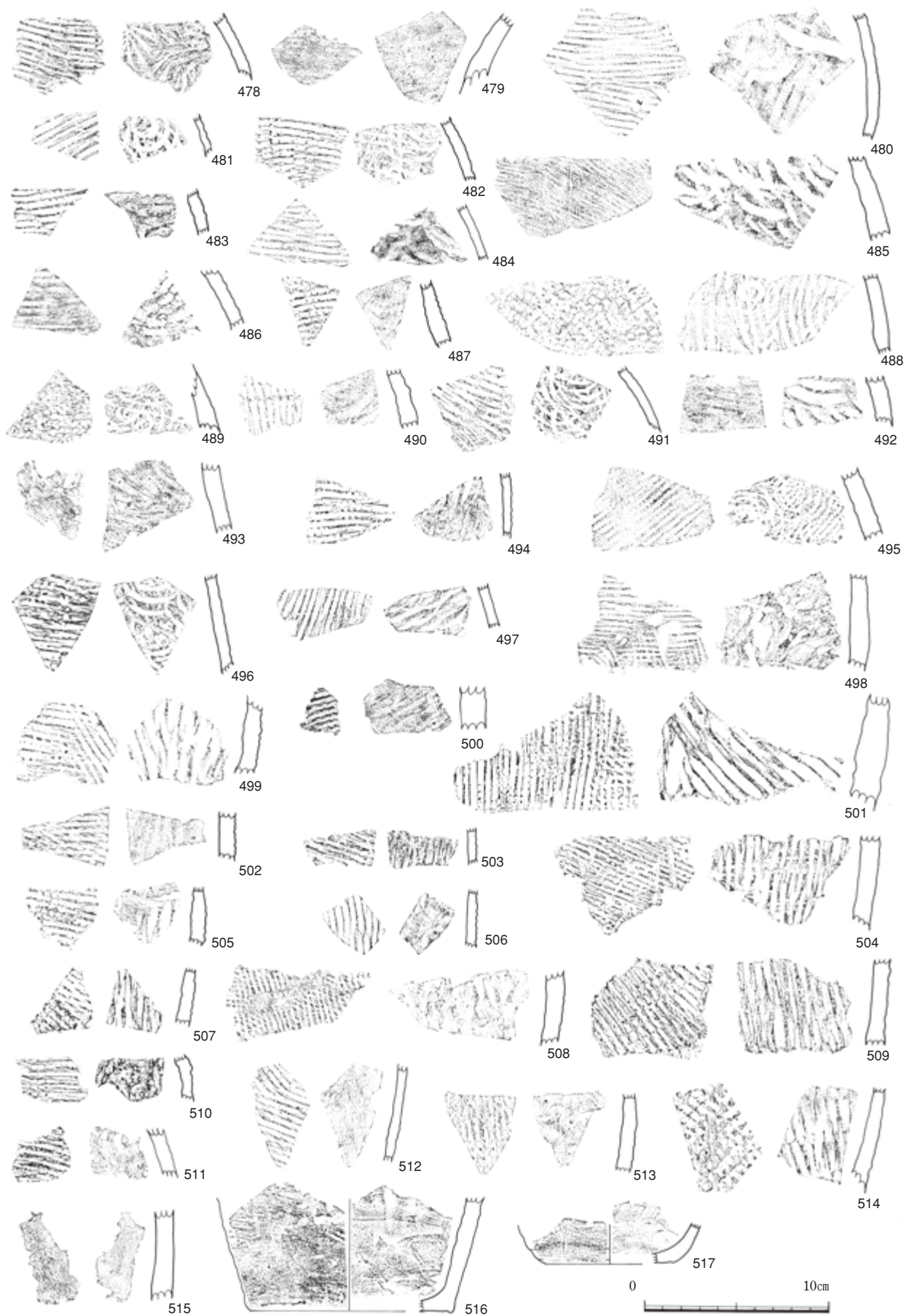
①須恵器 (第74図)

478～517は、須恵器である。478は、碗の胴部で、外面は平行タタキ、内面は放射状タタキである。479～514は、甕である。479は、内外面ともナデ調整の頸部である。他の甕は、胴部である。480は、外面が平行タタキで、内面が平行・同心円タタキ後

ナデ調整を施している。他の甕の胴部の内面はほとんど平行タタキや格子目タタキで、外面はほとんど同心円タタキや平行タタキ調整を施している。515は、壺の胴部で、内外面ともナデ調整を施している。516は、壺の底径11cmを測る底部で、内外面ともナデ調整を施している。517は、坏の底部で、内外面とも丁寧なナデ調整を施している。

古代・中世 遺物観察表 (須恵器)

挿図 番号	番号	出土区	層位	器 種	部位	法量 (cm)	色		胎土	焼 成	外 面	内 面	備考
						底径	内	外					
第 74 図	478	A-2	Ⅱ	碗	胴部	—	黄灰	黄灰	精緻	良	平行タタキ	放射状タタキ	
	479	a-4	Ⅲ	甕	頸部	—	灰黄褐	にぶい褐	精緻	良	ナデ	ナデ	
	480	—	—	甕	胴部	—	オリーブ褐	黄灰	精緻	良	平行タタキ	平行・同心円タタキ後ナデ	
	481	A-2	Ⅱ	甕	胴部	—	褐灰	灰褐	精緻	良	平行タタキ	同心円タタキ	
	482	—	Ⅱ	甕	胴部	—	にぶい黄褐	褐	精緻	良	平行タタキ	平行・同心円タタキ	
	483	—	—	甕	胴部	—	オリーブ褐	黄褐	精緻	良	格子目タタキ	同心円タタキ	
	484	—	—	甕	胴部	—	暗灰黄	黄灰	精緻	良	平行タタキ	同心円タタキ	
	485	—	—	甕	胴部	—	暗灰黄	暗灰黄	精緻	良	平行タタキ	同心円タタキ	
	486	A-3	Ⅱ	甕	胴部	—	灰白	灰白	精緻	良	平行タタキ	同心円タタキ	
	487	B-3	Ⅲ	甕	胴部	—	明灰黄	明灰黄	精緻	良	格子目タタキ	同心円タタキ	
	488	A-2	Ⅱ	甕	胴部	—	灰	灰	精緻	良	格子目タタキ	同心円・平行タタキ	
	489	—	Ⅰ	甕	胴部	—	灰黄褐	にぶい赤褐	精緻	良	格子目タタキ	格子目・同心円タタキ	
	490	B-3	Ⅲ上	甕	胴部	—	にぶい褐	灰オリーブ	精緻	良	格子目タタキ	同心円タタキ	
	491	A-2	Ⅱ	甕	胴部	—	黄灰	褐	精緻	良	平行タタキ	同心円タタキ	
	492	—	—	甕	胴部	—	灰黄褐	黒褐	精緻	良	平行タタキ	平行・同心円タタキ	
	493	—	—	甕	胴部	—	灰オリーブ	暗赤褐	精緻	良	格子目タタキ	同心円タタキ	
	494	—	—	甕	胴部	—	黄褐	黄褐	精緻	良	格子目タタキ	平行タタキ	
	495	—	—	甕	胴部	—	灰黄褐	灰黄褐	精緻	良	平行タタキ	平行・同心円タタキ	
	496	—	Ⅱ	甕	胴部	—	にぶい赤褐	にぶい赤褐	精緻	良	格子目タタキ	同心円タタキ	
	497	A-4	Ⅱ	甕	胴部	—	にぶい黄褐	灰黄	精緻	良	平行タタキ	平行・同心円タタキ	
	498	—	—	甕	胴部	—	にぶい褐	にぶい黄褐	精緻	良	平行タタキ	同心円タタキ	
	499	—	Ⅰ	甕	胴部	—	暗灰黄	にぶい黄褐	精緻	良	格子目タタキ	平行タタキ	
	500	B-4	Ⅲ	甕	胴部	—	灰褐	にぶい赤褐	精緻	良	平行タタキ	平行タタキ	
	501	—	—	甕	胴部	—	暗灰黄	褐	精緻	良	格子目タタキ	平行タタキ	
	502	—	Ⅰ	甕	胴部	—	にぶい褐	暗褐	精緻	良	平行タタキ	平行タタキ後ナデ	
	503	—	—	甕	胴部	—	にぶい黄褐	灰黄褐	精緻	良	平行タタキ	同心円タタキ	
	504	—	—	甕	胴部	—	褐	灰黄褐	精緻	良	平行タタキ	平行タタキ	
	505	—	—	甕	胴部	—	暗灰黄	暗褐	精緻	良	格子目・平行タタキ	平行タタキ	
	506	—	—	甕	胴部	—	黄灰	暗灰黄	精緻	良	平行タタキ	ナデ	
	507	—	—	甕	胴部	—	褐灰	灰褐	精緻	良	格子目タタキ	平行タタキ	
	508	a-4	Ⅱ	甕	胴部	—	暗灰黄	暗灰黄	精緻	良	平行タタキ	同心円タタキ	
	509	—	—	甕	胴部	—	黄灰	灰褐	精緻	良	格子目・平行タタキ	平行タタキ	
	510	A-3	Ⅱ	甕	胴部	—	灰黄褐	褐灰	精緻	良	平行タタキ	同心円タタキ	
	511	—	—	甕	胴部	—	にぶい赤褐	にぶい赤褐	精緻	良	平行タタキ	同心円タタキ	
	512	B-3	Ⅳ	甕	胴部	—	褐灰	褐灰	精緻	良	平行タタキ	ナデ	
	513	A-3	Ⅲ	甕	胴部	—	暗赤褐	暗赤褐	精緻	良	格子目タタキ	ナデ	
	514	—	Ⅰ	甕	胴部	—	にぶい褐	黄灰～黒褐	精緻	良	格子目タタキ	平行タタキ	
	515	—	Ⅰ	壺	胴部	—	褐灰	褐灰	精緻	良	ナデ	ナデ	
	516	N-6	Ⅱ	壺	底部	11.0	暗灰黄	にぶい黄褐	精緻	良	ナデ	ナデ	
	517	A-2	Ⅱ	坏	底部	7.0	にぶい黄橙	にぶい橙	精緻	良	ナデ	ナデ	



第74図 古代・中世 遺物 1 (須恵器)

②土師器（第75図）

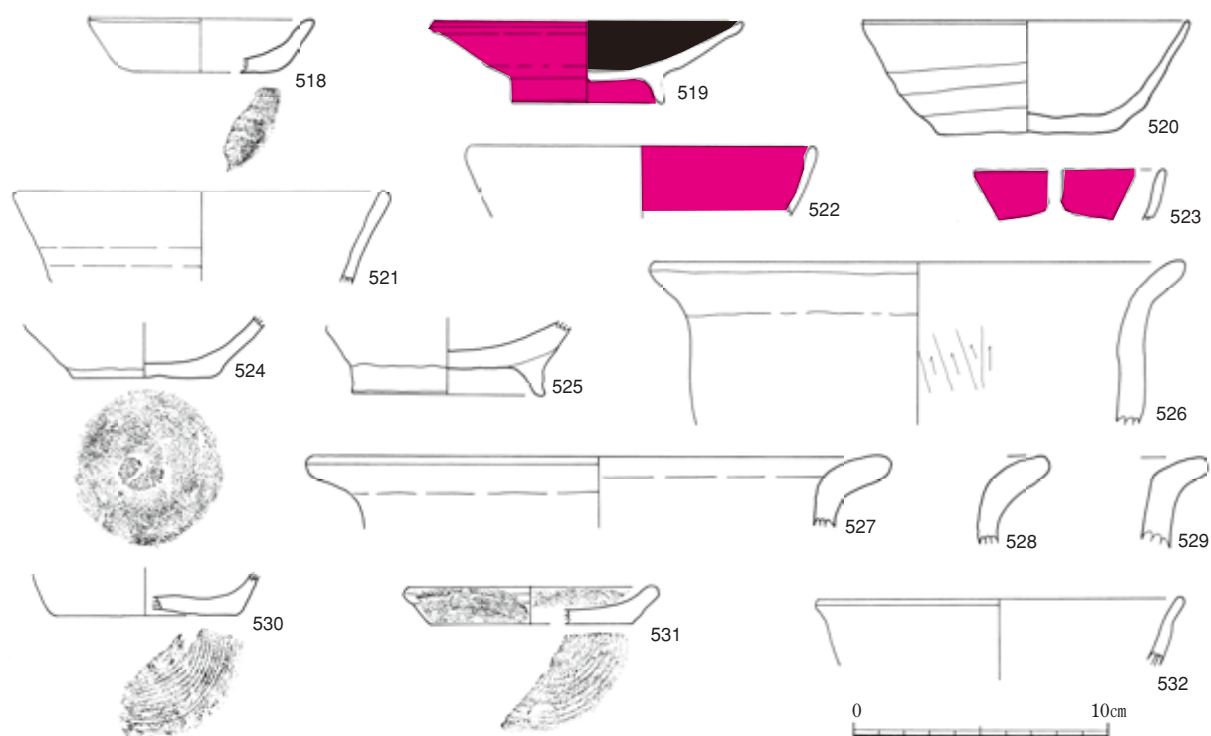
518は、口縁部から底部まで残る口径9cm、器高2.2cmを測る皿である。底部の切り離しは、糸切りによるものと考えられる。519は、口径12cm、底径6cm、器高3.2cmを測る高台付皿である。口縁部から底部にかけて、ほぼ完形に近い状態に残る内黒土器で、外面には丹塗りが施されている。器形は、「ハの字状」に外側に広がった高台から、口縁部にかけて大きく直線的に立ち上がる浅いタイプである。520～523は精緻な坏で、520は完形、521～523は口縁部を残すのみである。522は内面に、523は内外面に丹塗りが確認できる。524は底径5.6cmの皿で、底部の切り離しは、糸切りによるものである。

525は、高台付皿の底部であり、高台から口縁部

にかけて内湾しながら立ち上がっていくアウトラインを描く。526～529は、どれも甕の口縁部である。526・527の口径はそれぞれ21cm・23cmとあまり大きなものではない。526は、口縁端部が薄く、緩やかに外反するのに対し、527～529は、耳朶状の肉厚タイプで急激に外反する。530は、切り離しが糸切りによる皿の底部である。531は、糸切りの坏の口縁部から底部である。表面は、煤に覆われたように黒ずんでいる。

③白磁（第75図）

532は、白磁の碗の口縁部で、口径7.3cmを測る。14世紀頃の白磁と思われる。口縁部がわずかに外反し、外面に一箇所空気の抜け穴と思われるピンホールが確認できる。



第75図 古代・中世 遺物2（土師器、白磁）

古代・中世 遺物観察表（土師器・白磁）

挿図 番号	番号	器種	出土区	層位	部位	法量 (cm)				色		胎土	焼成	備考
						口径	底径	器高	高台高	内	外			
第75図	518	皿	—	I	口縁～底部	9	—	2.2	—	にぶい黄	浅黄	精緻	良	
	519	高台付皿	B-3	II	口縁～底部	12	6	3.2	—	黒	明赤褐	精緻	良	内黒・外朱塗,ピット内?
	520	坏	—	I	完形	12.9	7	4.4	1	黄橙	橙	精緻	良	
	521	坏	—	I	口縁部	13	—	—	—	浅黄橙	にぶい黄橙	精緻	良	
	522	坏	A-2	II	口縁部	13.5	—	—	—	朱塗り	橙	精緻	良	内朱塗
	523	坏	B-3	II	口縁部	—	—	—	—	朱塗り	朱塗り	精緻	良	内外朱塗
	524	皿	—	なし	底部	—	5.6	—	—	浅黄	にぶい黄橙	精緻	良	
	525	高台付皿	B-3	II	底部	—	—	—	1.3	にぶい黄橙	橙	精緻	良	ピット内?
	526	甕	—	I	口縁部	21	—	—	—	橙	橙	精緻	良	
	527	甕	—	なし	口縁部	23	—	—	—	灰黄褐	にぶい黄橙	精緻	良	
	528	甕	—	なし	口縁部	—	—	—	—	浅黄橙	浅黄橙	精緻	良	
	529	甕	E-あ	III	口縁部	—	—	—	—	オリーブ灰	浅黄	精緻	良	
	530	皿	D-え	II下	底部	—	7	—	—	浅黄橙	浅黄橙	精緻	良	糸切り,中世
	531	坏	a-4	II	口縁～底部	—	—	—	—	灰黄褐	灰黄褐	精緻	良	中世
	532	白磁(碗)	F-1	II	口縁部	7.3	—	—	—	灰	灰	精緻	良	

第6節 小結

諏訪協遺跡においては、縄文時代早期・中後期・晩期、弥生時代、古墳時代、古代から中世の各時代の遺構・遺物が出土している。

1 縄文時代早期

早期の遺構は、集石を4基検出されている。

遺物は、土器を7類に分類した。Ⅰ類を桑ノ丸、Ⅱ類を押型文、Ⅲ類を手向山、Ⅳ類を縄文、Ⅴ類を平埴、Ⅵ類を塞ノ神式に類するもの、Ⅶ類をその他の早期の土器とした。石器は、石鏃・異形石器・打製石斧・礫器・磨石・敲石・石皿等が出土した。類似した形態の異形石器は、接する諏訪牟田遺跡で1点出土している。他の農業センター遺跡群内の遺跡で出土した異形石器と違う点は、頭部にも入念な剥離が施され、刃部を形成している所である。

2 縄文時代中後期

中後期の遺構は検出できなかったが、土器は、Ⅷ類からⅪ類の4類に分類された。Ⅷ類は南福寺式系土器、Ⅸ類とⅩ類は岩崎上層式、Ⅺ類は市来式に類するものと思われる。なお、岩崎上層式は、口縁部下位に先端が二又状の施文工具を使って凹線文を横位に施すものをⅨ類に、胴部の上部から下部にかけて波状の沈線文が2条施されるものをⅩ類に分類したが、今後細分される可能性を持つものである。

3 縄文時代晩期

晩期の遺構は、土坑が6基、掘立柱建物跡7棟、柱穴列が30列、埋設土器が2基検出されている。

土坑からは、完形に復元された上加世田式に相当するものが出土し、その中には、口縁部に沈線の施されているタイプと沈線の施されていないタイプと思われるものがあった。埋設土器は、諏訪牟田遺跡等隣接した遺跡で検出された埋設土器と同じく、2基とも入佐式土器に相当するものと思われる。

遺物のうち、土器は、粗製深鉢形土器と精製浅鉢形土器に形態分類できる。深鉢形土器は、Ⅻ類を上加世田式、Ⅼ類を入佐式の2つに大別した。なお、入佐式は、口縁部の端が直立するか外側にやや広がるもので、口縁部の幅は狭い旧タイプをa類に、口縁部の端が外側に広がり、a類より幅が広い新タイプをb類に分類した。浅鉢型土器は、一括してⅭ類

の入佐式として扱ったが、口縁部に施された沈線や頸部の長さ等から上加世田式の可能性の残るものもある。

石器は、石鏃・くさび形石器・管玉・スクレイパー・打製石斧・磨製石斧・磨石・敲石・耳飾・石皿等が出土している。

4 弥生・古墳時代

出土遺物は少なかったが、遺構は、竪穴状遺構が1軒検出されている。土器は、弥生時代のものと思われる壺型土器が2点、古墳時代のものと思われる甕型土器が3点、石器は、石包丁が1点出土している。

5 古代～中世

遺構は、掘立柱建物跡12棟、溝状遺構14条、竪穴状遺構1軒が検出された。特に溝状遺構からは、鉄滓が検出されており、農業開発総合センター遺跡群で唯一のまとまった出土である。遺物は、土師器・須恵器・青磁・白磁・瓦質土器等が出土している。

近代の参道と平行して溝状遺構が検出されているが、近隣遺跡で検出された溝状遺構等も含め、関連性があるか今後詳細な検討が必要である。

参考文献

- 1 鹿兒島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(28) 国分上野原テクノパーク第3工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅱ)「上野原遺跡(第10地点)」第7・8分冊 2001年3月鹿兒島県立埋蔵文化財センター 異形石器
- 2 熊本県文化財調査報告第148集 県営農業農村整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査「無田原遺跡」1995年3月熊本県教育委員会
- 3 熊本県大津町文化財調査報告「瀬田裏遺跡調査報告」1992年大津町教育委員会瀬田裏遺跡調査団、(株)阿蘇大津ゴルフ場
- 4 鹿兒島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(69) 九州新幹線鹿兒島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ「大原野遺跡」2004年3月鹿兒島県立埋蔵文化財センター 石鏃
- 5 喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(8) 喜界島通信所整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書「城久遺跡群」山田中西遺跡Ⅰ 2006年3月喜界町教育委員会 掘立柱建物跡
- 6 鹿兒島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(39) 九州新幹線鹿兒島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ「鍛冶屋馬場遺跡」2003年3月鹿兒島県立埋蔵文化財センター 鉄滓
- 7 鹿兒島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(71) 東九州自動車道建設(末吉財部IC～国分IC間)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ「踊場遺跡、高篠遺跡」2004年3月鹿兒島県立埋蔵文化財センター

諏訪協遺跡の植物珪酸体分析

株式会社 古環境研究所

1 はじめに 植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 2000)。

2 試料 分析試料は、諏訪協遺跡の1号土坑から採取されたものである。

3 分析法 植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法 (藤原, 1976) をもとに、次の手順で行った。

- (1) 試料を105℃で24時間乾燥 (絶乾)
- (2) 試料約1gに直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加 (電子分析天秤で0.1mgの精度で秤量)
- (3) 電気炉灰化法 (550℃・6時間) による脱有機物処理
- (4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- (5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- (6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- (7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10^{-5}g) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。ヨシ属 (ヨシ) の換算係数は6.31, ススキ属 (ススキ) は1.24, メダケ節は1.16, ネザサ節は0.48, クマザサ属 (チシマザサ節・チマキザサ節) は0.75, ミヤ

コザサ節は0.30である。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4 分析結果

(1) 分類群 分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。

〔イネ科〕キビ族型, ヨシ属, ススキ属型 (おもにススキ属), ウシクサ族A (チガヤ属など), ウシクサ族B

〔イネ科ータケ亜科〕メダケ節型 (メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節, ヤダケ属), ネザサ節型 (おもにメダケ属ネザサ節), クマザサ属型 (チシマザサ節やチマキザサ節など), ミヤコザサ節型 (おもにクマザサ属ミヤコザサ節), 未分類等

〔イネ科ーその他〕表皮毛起源, 棒状珪酸体 (おもに結合組織細胞由来), 未分類等

〔樹木〕ブナ科 (シイ属), クスノキ科, その他

(2) 植物珪酸体の検出状況 諏訪協遺跡1号土坑の埋土底部 (試料7) および埋土下部 (試料4～6) について分析を行った。その結果、埋土底部 (試料7) ではクスノキ科が多量に検出され、ミヤコザサ節型も比較的多く検出された。また、ウシクサ族A・メダケ節型・ネザサ節型・クマザサ属型およびブナ科 (シイ属) なども検出された。埋土下部 (試料4～6) では、クスノキ科が大幅に増加しており、試料4では密度が5万個/g以上にも達している。また、ブナ科 (シイ属) もやや増加しているが、イネ科はあまり見られなくなっている。今回の分析では、イネ科栽培植物 (イネ・ムギ類・ヒエ・アワ・キビなど) に由来する植物珪酸体の検出が期待されたが、これらの植物珪酸体はいずれの試料からも検出されなかった。

5 参考文献

- 杉山真二 (1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体。富士竹類植物園報告, 第31号, p.70-83.
- 杉山真二 (1999) 植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史。第四紀研究, 38 (2), p.109-123.
- 杉山真二 (2000) 植物珪酸体 (プラント・オパール)。考古学と植物学, 同成社, p.189-213.
- 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) 一数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法一。考古学と自然科学, 9, p.15-29.
- 室井緯 (1969) 竹・笹の話ーよみもの植物記ー, 北隆館

宗 円 掘 遺 跡

第Ⅴ章 宗円堀遺跡の発掘調査成果

(平成14年度)

第1節 調査の経過

宗円堀遺跡は、平成12年度、14年度に本調査を実施した。本調査は幹線道路、研究畑部分に相当する範囲を対象とした。

1 日誌抄

(平成12年度)

10月 調査開始。環境整備。

O～R-10～12区Ⅱ～Ⅳ層掘り下げ。縄文時代晩期土器出土。柱列検出、写真撮影、図面実測。P-10・11, R-11・12トレンチ調査。土層断面実測。

11月 O～R-10～12区Ⅴ～Ⅹ層, シラス上面まで掘り下げ。P-10区, 旧石器時代遺物出土。トータルステーションで取り上げ。

12月 O～P-10・11区, Ⅷ～Ⅹ層, シラス上面まで掘り下げ。幹線道路部分Ⅲ～Ⅷ層掘り下げ。旧石器時代遺物出土。取り上げ。調査終了。

11月 調査開始。環境整備。

K～P-13～16区Ⅱ～Ⅷ層掘り下げ。縄文時代晩期土器出土、取り上げ。K～L-14・15溝状遺構検出。L-16区柱穴列検出。写真撮影、図面実測。

12月 J～N-16～20区Ⅲ～Ⅳ層掘り下げ。縄文時代晩期・早期遺物出土。平板遺物取り上げ。M-14, O-11トレンチ調査。土層断面実測。

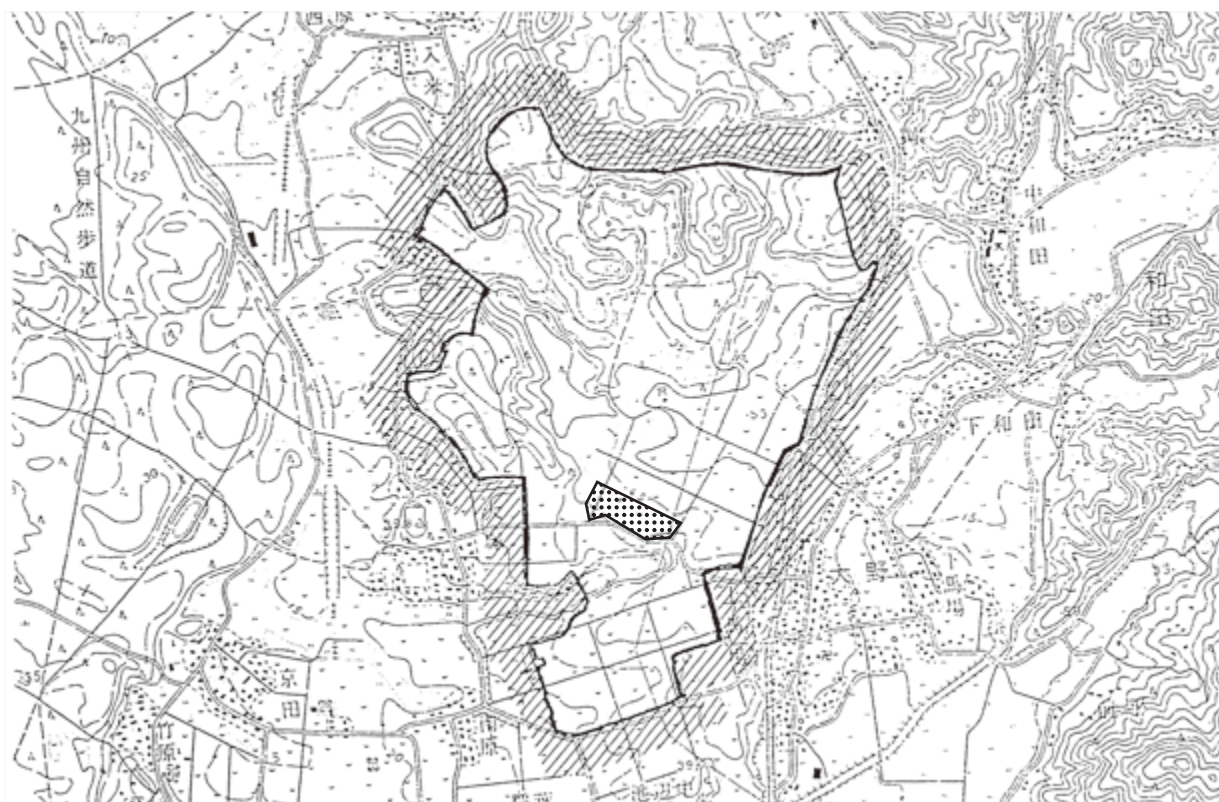
1月 J～L-17～19区Ⅲ～Ⅳ層掘り下げ。遺物取り上げ。K-20区土坑検出。J-19区集石検出。写真撮影、図面実測。

O～Q-7～10区Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ。

2月 J～L-18・19区Ⅲ～Ⅷ層掘り下げ。遺物取り上げ。空中写真撮影。

J・K-18・19区礫群検出, Q-10区柱列検出。写真撮影、図面実測。

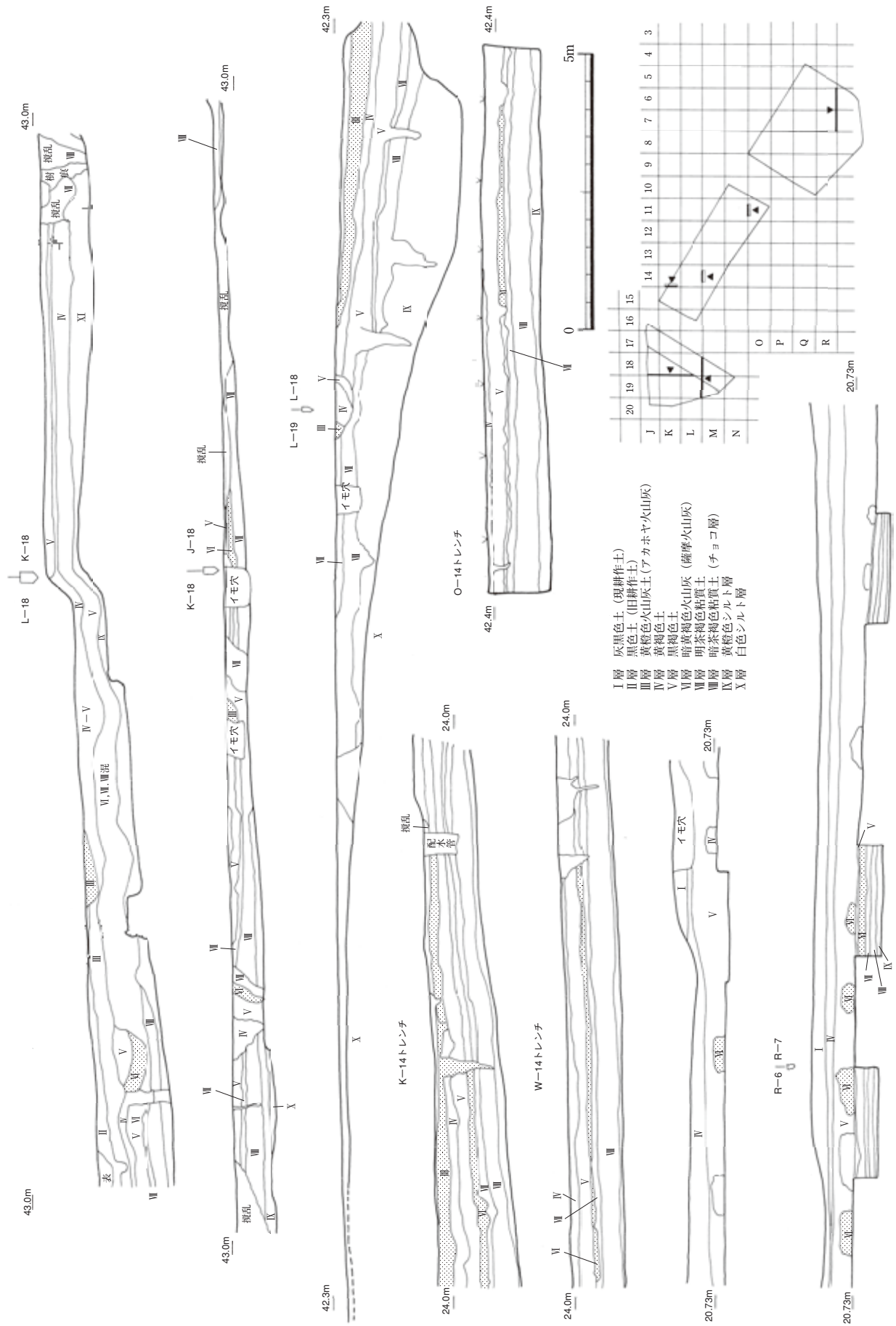
3月 J・K-18～20区Ⅳ～Ⅷ層掘り下げ。遺物取り上げ。土層断面実測。K-17区礫群, P-9区柱列検出。写真撮影、図面実測。調査終了。



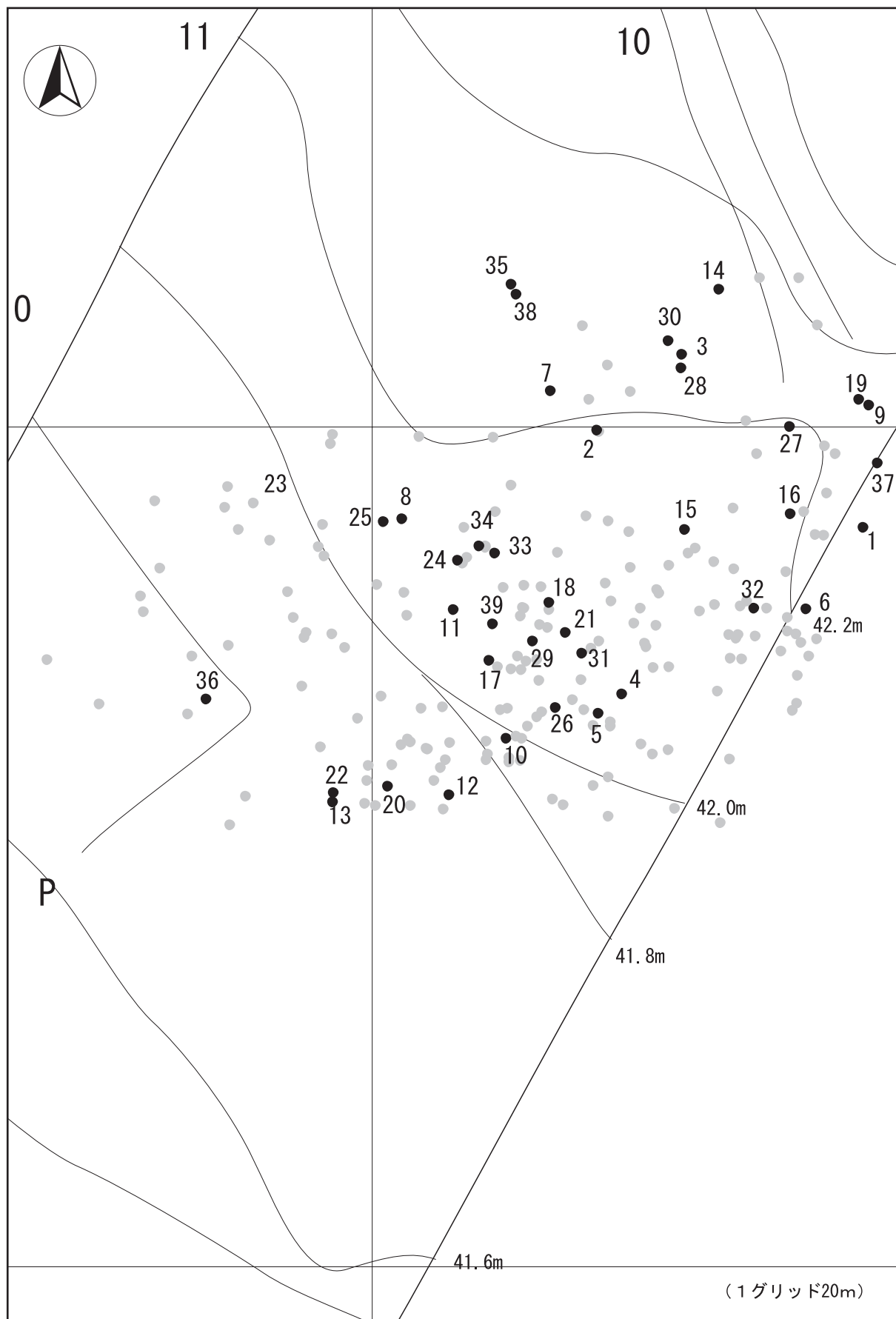
第1図 宗円堀遺跡位置図 (1/25,000)



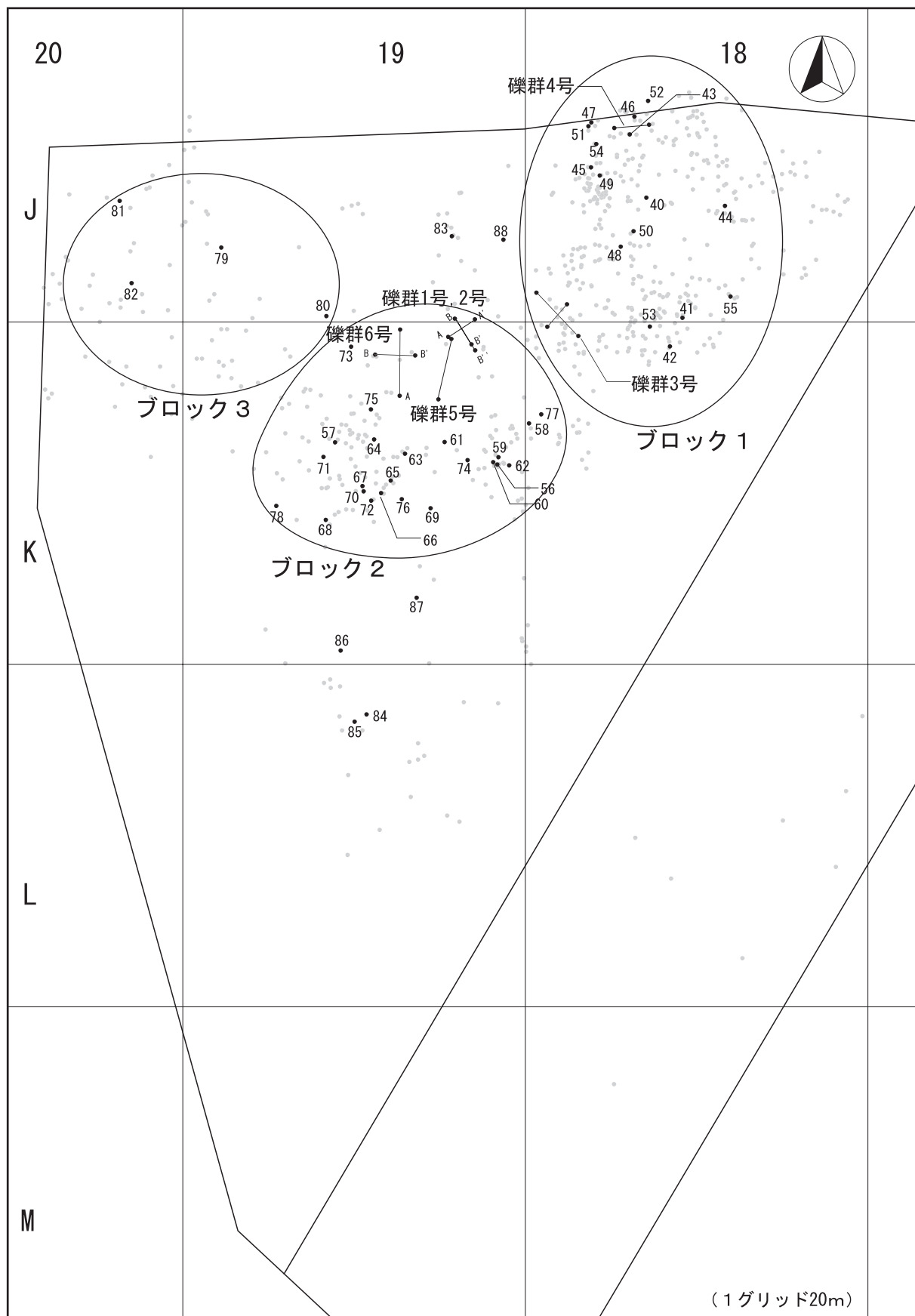
第2図 地形図及びグリッド配置図 (1/2,000)



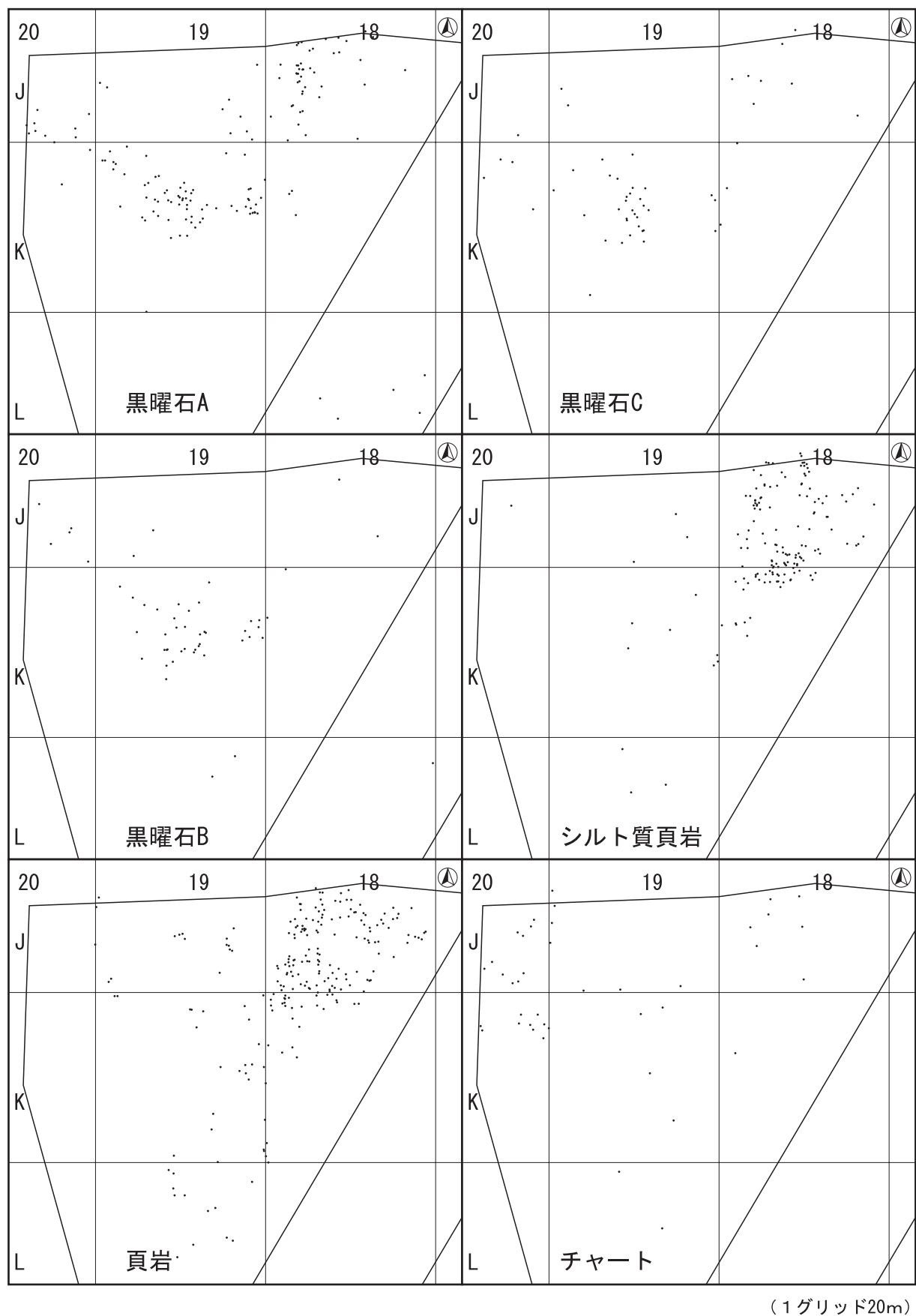
第3図 土層断面



第4図 東側調査区（0—10区～P—11区）遺物出土状況図



第5図 旧石器時代遺物出土状況図・遺構配置図

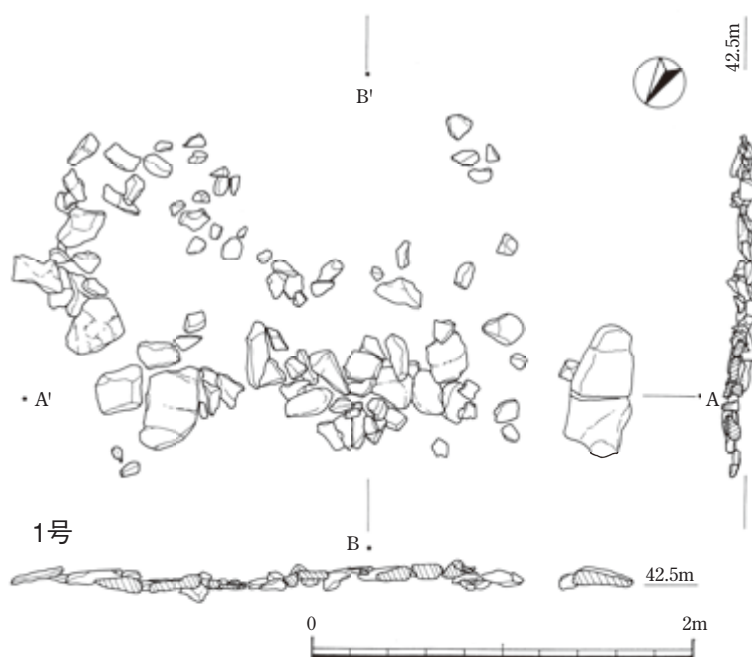


第6図 石材毎の分布図

第2節 遺跡の層序

宗円堀遺跡における層序は、農業開発総合センター遺跡群の基本的な層序と同一である。主な時代と包含層、遺構・遺物は以下の通りである。

- ・ 平安時代～中世（Ⅱ層）
溝
- ・ 縄文時代晩期（Ⅲ～Ⅳ層）
柱列・土坑
土器・石器・装飾品
- ・ 縄文時代中期～後期（Ⅳ層）
土器
- ・ 縄文時代早期（Ⅳ層）
集石
土器・石器
- ・ 旧石器（Ⅷ層）
礫群
石器・剥片



第7図 礫群1

第3節 発掘調査の方法及び概要

宗円堀遺跡は平成12年度に調査を行った幹線道路部分と、平成14年度に調査を行った園花キ畑西側の尾根状の台地部分（西側調査区）と東側調査区の3つに分けられる。西側調査区は旧道路により南東側が一部カットされている。幹線道路部分東側調査区の北東側が諏訪協遺跡と隣接する。

本調査前の状況は、西側調査区が南東方向に傾斜して荒れ地で、東側調査区は用地買収後に荒地化したほぼ平坦な旧畑地であった。調査のためのグリッドは20m×20mで設定し、遺跡地内の東側から1, 2, 3…とし、北側からA, B, C…とした。

調査面積の調査はⅠ層を重機により除去し、Ⅱ～Ⅹ層上面までを人力で行った。Ⅱ層からは平安時代～中世の溝が検出されたが、遺物は出土しなかった。Ⅲ～Ⅳ層からは、縄文時代晩期の土坑や柱列が検出された。西側調査区で検出された土坑内からは、上加世田式土器に比定される土器が大量に出土したほか、管玉も2個出土している。柱列は東側調査区に集中している。Ⅳ層からは、西側調査区で縄文時代中期～後期の土器（市来式他）が出土している。

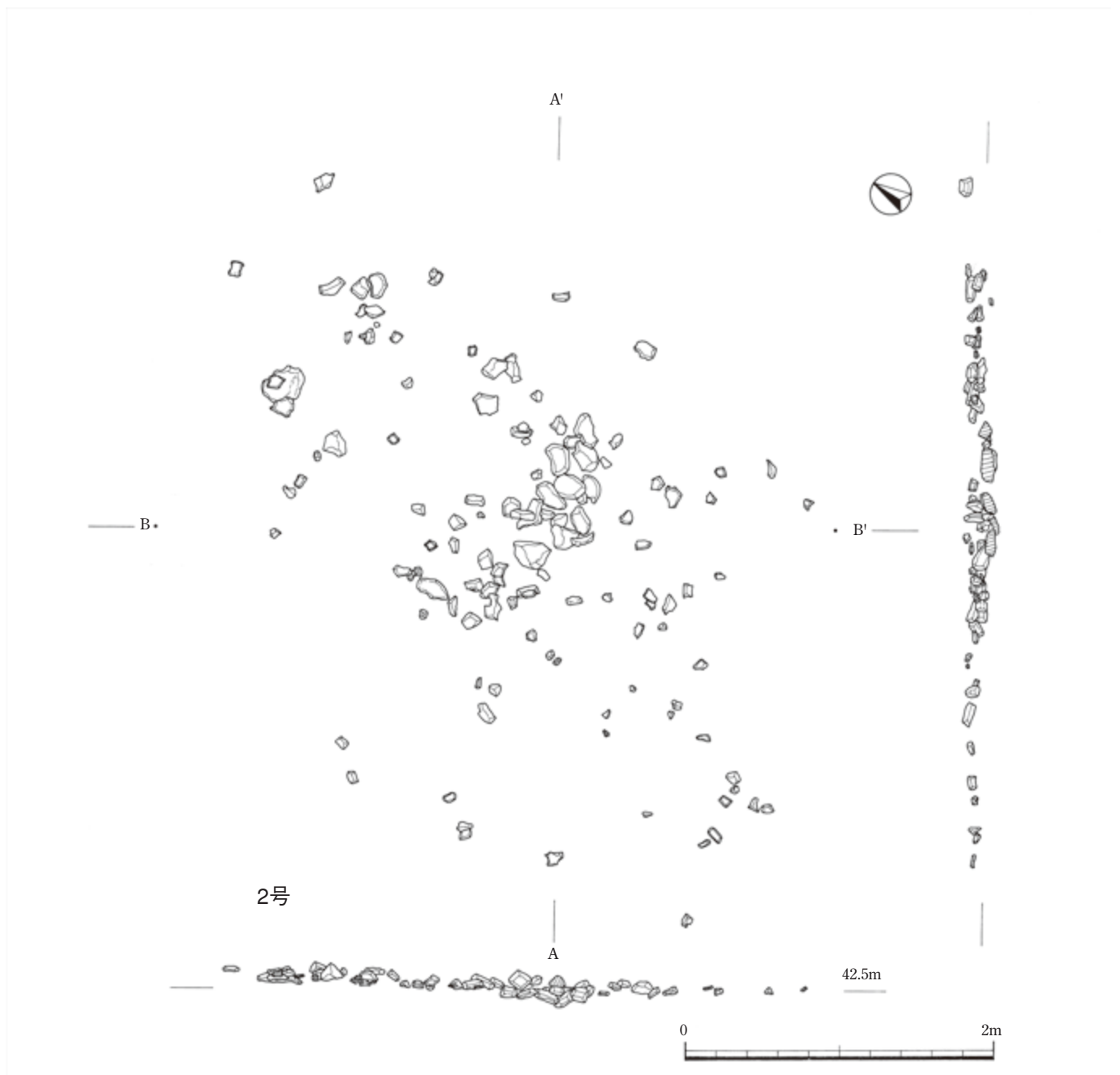
また、縄文時代早期の土器（吉田式・石坂式）や石器類も大量に出土している。その他縄文早期のものと思われる集石も3基検出されている。Ⅷ層からは、幹線道路部分で旧石器時代（ナイフ形石器文化期）の石器類が出土した。ブロックは確認されなかった。また、西側調査区からは旧石器時代の包含層が2枚（細石器文化期・ナイフ形石器文化期）が確認され、特に細石器文化期の石器類がまとまった形で出土している。

第4節 旧石器時代の調査

旧石器時代は、西側調査区で遺構・遺物が、東側調査区で遺物が出土した。西側調査区では、細石器文化期に相当すると思われる礫群6基が検出された。細石刃や細石刃核等の遺物も集中して出土しており、ブロックも3か所確認された。その他、ナイフ形石器も3点出土している。

（1）遺構

西側調査区Ⅷ層上面で礫群を6基検出した。4号礫群はJ-18区とやや離れるが、他の5基はJ-19区とK-19区のグリッド境に集中して検出された。



第8図 礫群2

1号礫群（第7図）

K-19区Ⅶ層中位で検出されたもので、長径180cm，短径70cmを測る。15cm×35cm大の大型の礫をはじめ，拳大よりやや大きめの礫が十数個と，10cm×10cm以下の小型の礫が混在して構成される。礫は平面的に検出されており，掘り込みは確認されなかった。

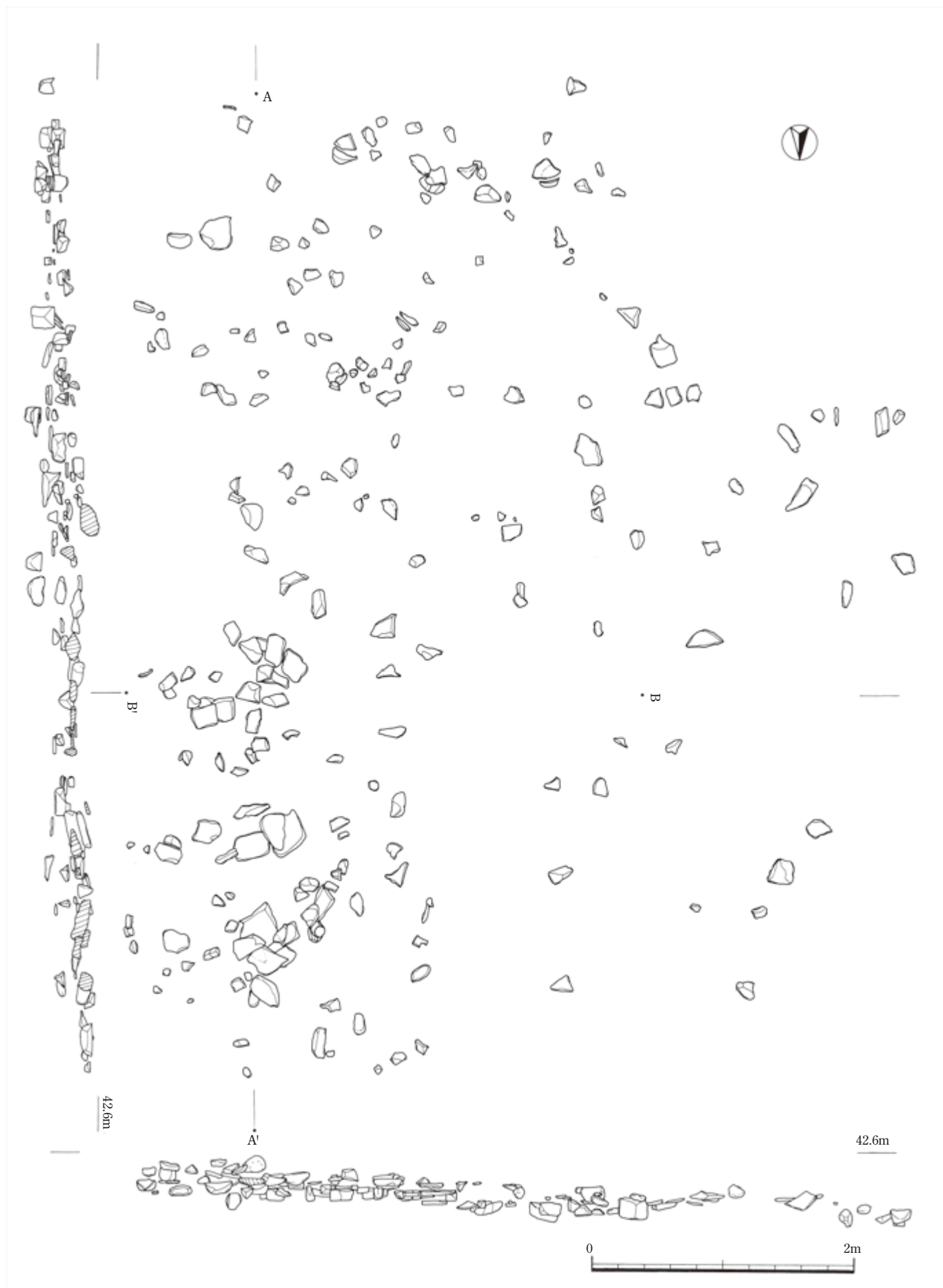
2号礫群（第8図）

K-19区Ⅶ層中位で，1号礫群と一部重なる状況で検出されたが，礫の集中域が1号と重ならず2つ

に分けられたため，別々の礫群として取り扱った。礫の集中域には拳大程度の角礫が数個重なっているが，他は10cm未満の角礫が平面的に散在する。集中域は長径90cm×短径50cmを測る。掘り込みは確認されなかった。

3号礫群（第9図）

J-18区とK-19区のグリッド境Ⅶ層中位で検出された。20cm×15cm大の大型の角礫数個の他，拳大程度の角礫が平面的に散在するもので，掘り込みは見られなかった。



第9図 礫群3

4号礫群（第10図）

西側調査区の北側，K-18区Ⅷ層中位で検出された。拳大程度の角礫が十数個集中している箇所も見られるが，それ以下の小礫は数も多く，平面的に広く散在している。礫の集中域は150cm×80cmを測る。掘り込みは確認されなかった。

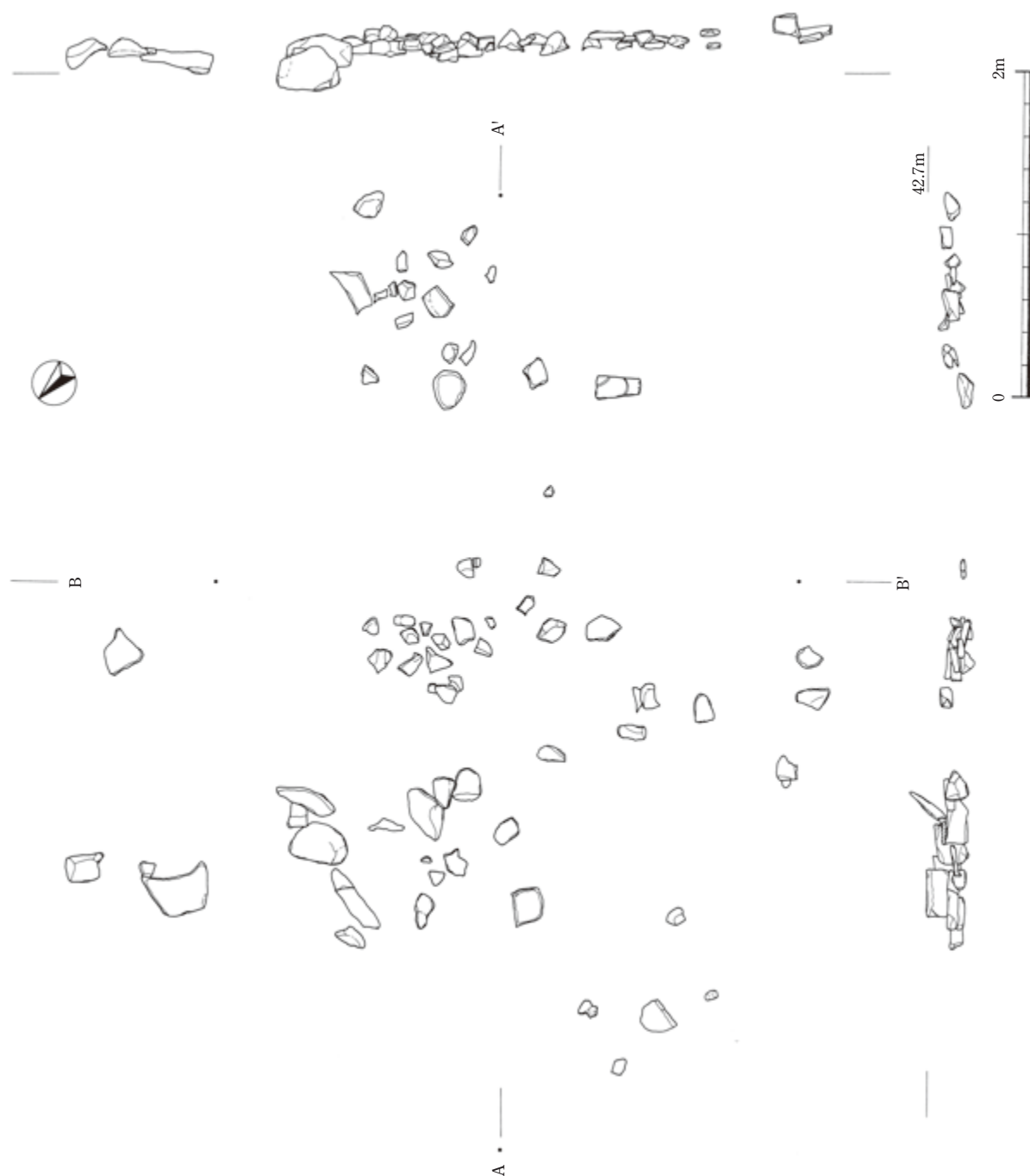
5号礫群（第11図）

K-19区Ⅷ層上面で，拳大程度の角礫が平面的に

密集して検出された。長径150cm×短径100cmの楕円形プランを呈する。掘り込みは見られなかった。

6号礫群（第12図）

K-18区Ⅷ層中位で検出された。礫群として取り上げたが，基盤の熔結凝灰岩の上で火を焚いた痕跡が残るものである。火を受けた部分は赤く変色しており，炭化物も見られた。



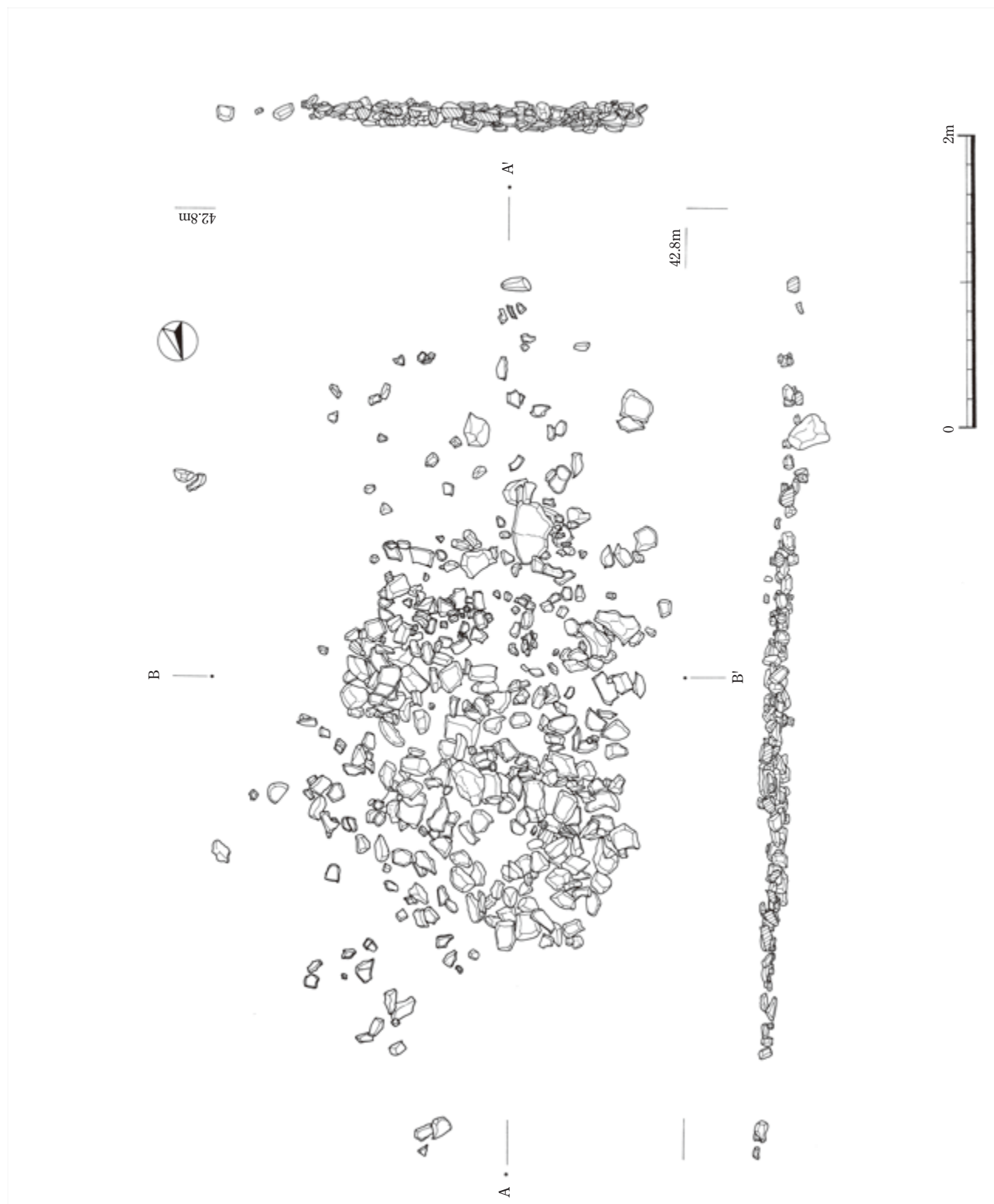
(2) 遺物

宗円堀遺跡の旧石器時代の遺物は、遺跡の東側の範囲と西側の範囲で出土している。東側は、調査範囲全面に遺物が散在しており、明確なブロックは確認できなかった。西側では、石材分類を行ない、それぞれの集中区を検出したところ、3つのブロックを確認できた。

なお、黒曜石は肉眼により観察した特徴をもとに、下記のように分類を行なった。

黒曜石A・・・黒色で炭化している。不純物が少なく光を通さない。樋脇町上牛鼻産に類似する。

黒曜石B・・・黒色、アメ色で不純物を含む。鹿児島市三船産に類似する。



第11図 礫群5



第12図 礫群6

黒曜石C・・・黒色，ガラス質で小粒の不純物が多く含まれる。大口市日東産に類似する。

黒曜石D・・・全体的に灰色で黒色の筋が入る。光沢がある。

黒曜石E・・・半透明のガラス質で，不純物が少ない。桑ノ木津留産に類似する。

黒曜石F・・・黒色で縞状の筋が透けて見える。不純物はほとんどない。

黒曜石G・・・灰色がかったガラス質で，縞状の筋が入る。極小の黄色い粒が，わずかに含まれる。

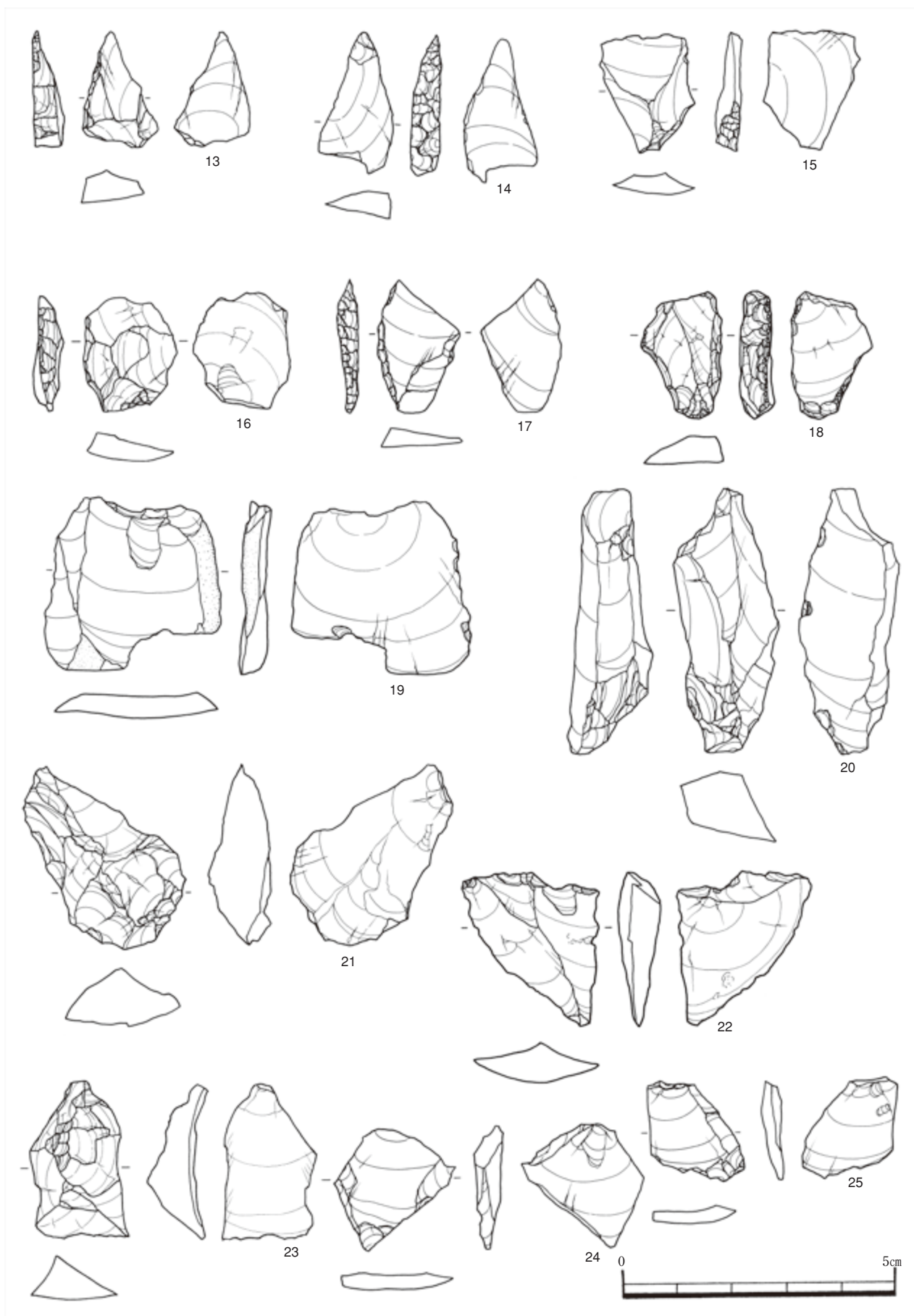
黒曜石H・・・光沢のある黒色で，極小の黄色い粒が筋状に入る。

東側調査区（第13～17図 1～39）

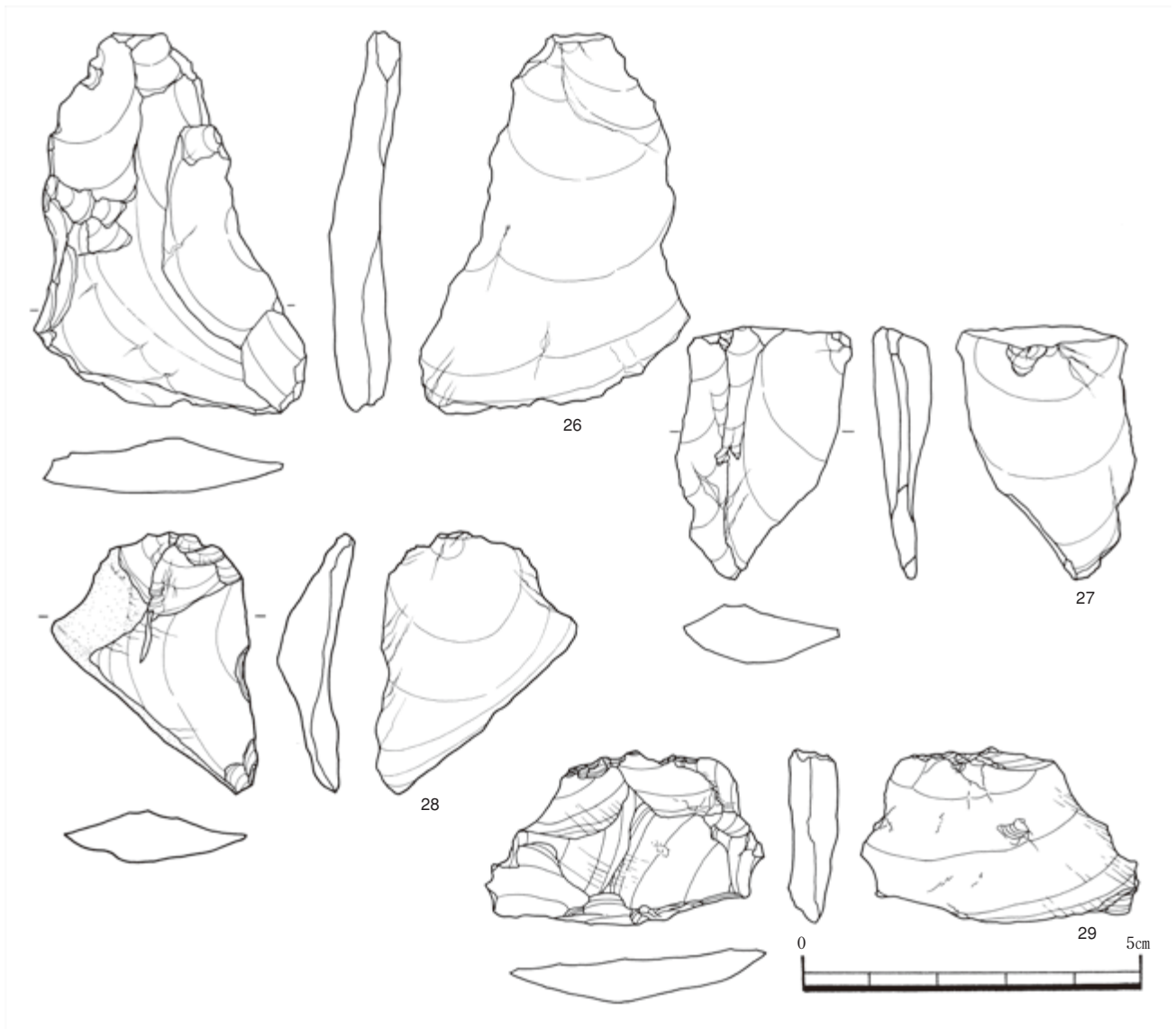
1～18はナイフ形石器である。石材の選択は，玉髓製のものが多く見られる。1は玉髓の縦長剥片を利用し，基部を細かな剥離で形成している。右側面にブランディングを施す。2は下部が膨らむ横長剥片を素材としている。右側縁下部に裏面からの加工を施す。3は黒曜石製。右側縁に細かな剥離を施している。先端部に使用痕を観察できる。4は玉髓製。先端部を打点として剥ぎ取ったやや厚みのある剥片を素材としている。5はシルト質頁岩の縦長剥片を素材とし，右側面に細かな調整を施す。6は基部に細かい加工を施し，左側縁にブランディングを施す。7は横長の剥片を素材とし，左側面に正面から細かな剥離を形成している。8は縦長剥片の打点を基部



第13図 旧石器 1



第14図 旧石器 2

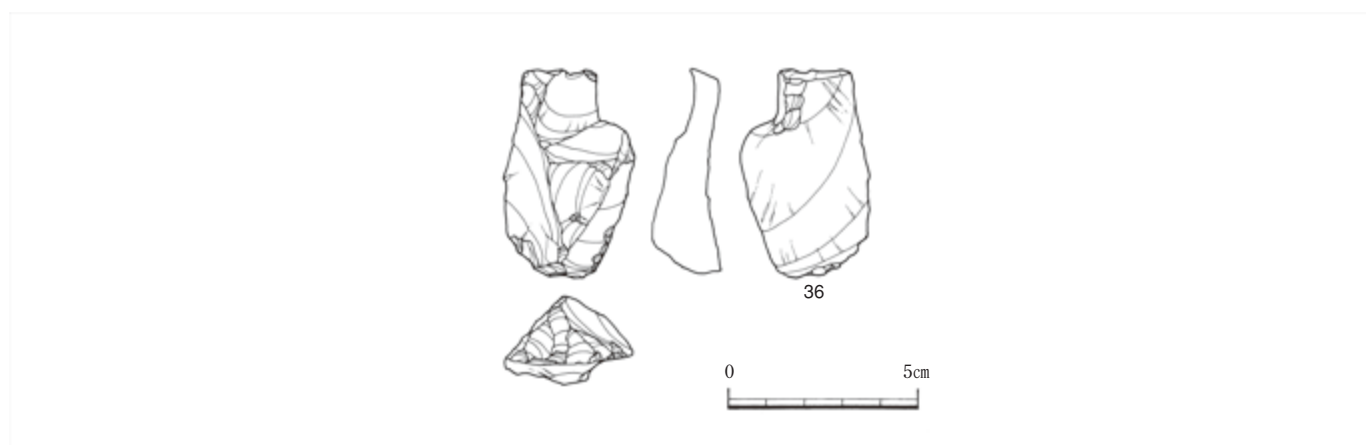


第15図 旧石器 3

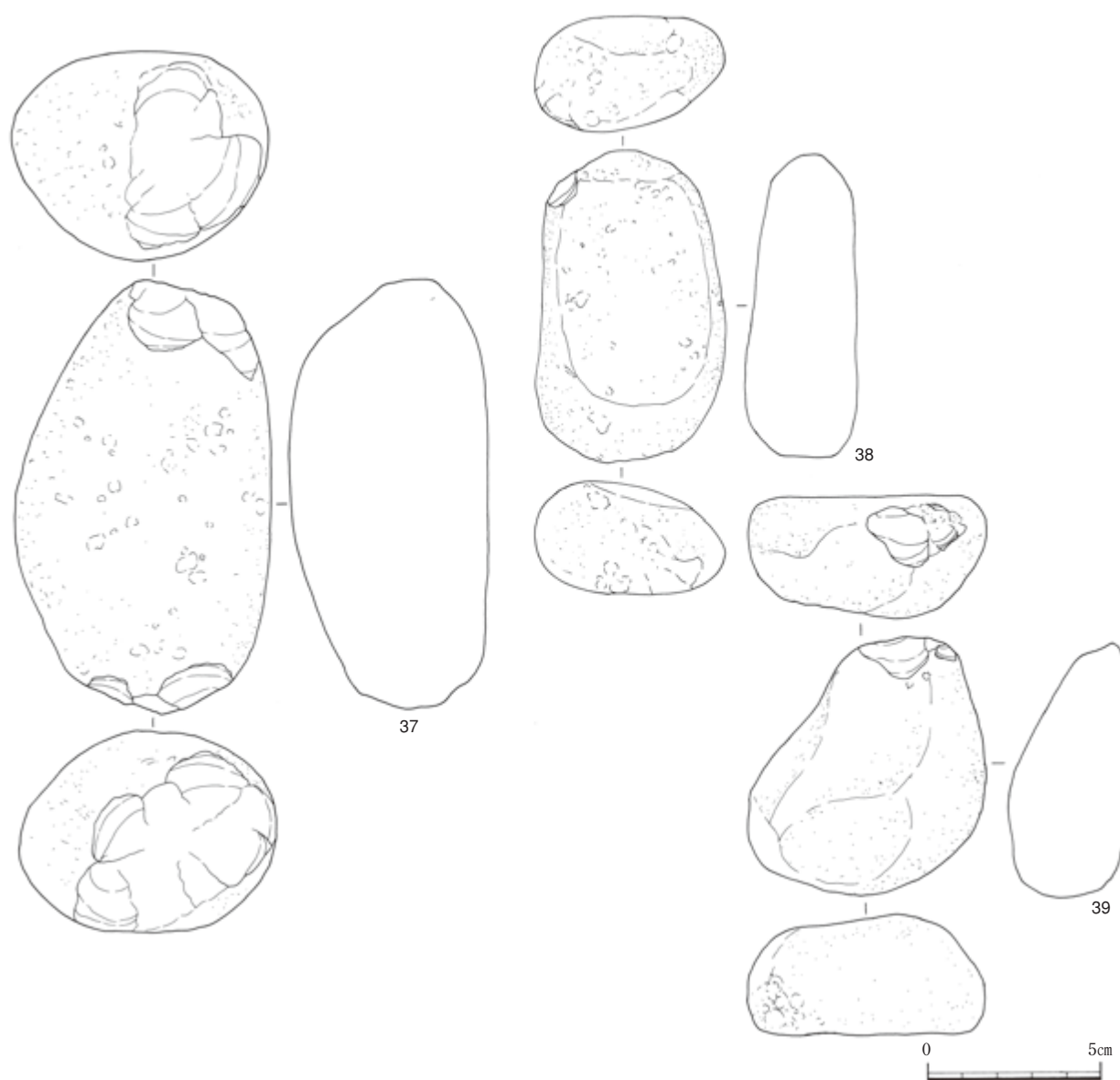
として加工している。先端部には使用痕が観察される。9は玉髄製。右側縁部全体にブランディングが施される。左側縁部下部にも細かな調整を施し、基部を形成している。10は鉄石英製。右側面に細かな剥離が観察される。左側面上部には、使用痕が観察できる。11は左側面下部に細かな剥離を施し、基部を加工している。12は左側縁にブランディングを施す。13は縦長剥片を素材とし、基部が平坦である。左側縁部に正面から加工を施す。14は右側縁部に正面と裏面より細かな加工を施す。15は薄い剥片を素材として、下部に基部調整を施す。上部・両側縁部

は薄く、細かな調整は見られない。17は薄い縦長剥片を素材とし、左側縁に裏面より細かな加工を施している。18は黒曜石製。縦長剥片を素材とし、左側縁上部には使用痕が観察できる。

19～29は剥片である。19・26～29はシルト質頁岩製、それ以外は玉髄製である。19は薄い縦長の剥片で、左側縁部に細かな使用痕が確認できる。20・21は下部に細かな剥離を施しており、ナイフ形石器の製作途中の可能性が考えられる。22・23はいずれも上部より打撃を加えて剥片を取り出し、その後細かな剥離を施している。24・25は薄い剥片である。下



第16図 旧石器 4



第17図 旧石器 5

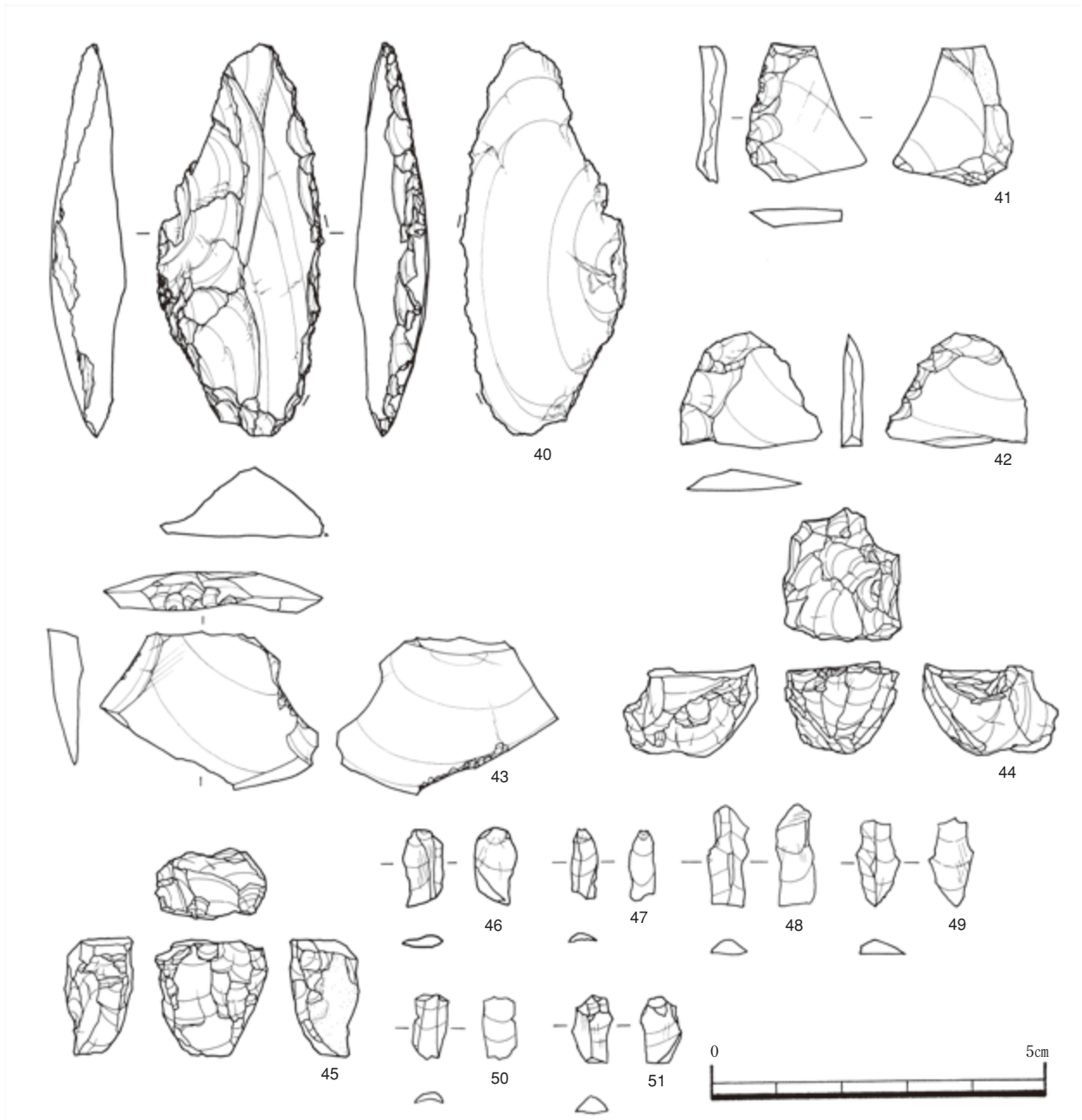
部に細かな剥離を観察できる。26は縦長の剥片を素材とし、左側面に正面からの加工を施す。27・28は縦長の剥片で、使用痕は確認できない。29は横長の剥片で、上部に細かな剥離が観察できる。

30～35は石核。30～32は玉髄製，33～35はシルト質頁岩製である。30は自然面を残すもので，正面の下方向より剥片を剥ぎ取っている。31は打面を転移させながら剥片を剥いでいるものである。32は上部の平坦面を打点として剥片を剥いでいるものである。33は下部からの打撃で母岩より取り出したものであ

る。上部を平坦に加工し，縦方向に剥片を剥ぎ出している。34は縦長のもので，上面・下面・右側面から剥片を取り出している。35は拳大のもので，主として正面から剥ぎ取っている。

36は玉髄製のスクレイパーである。縦長の剥片の下部を正面から加工し，刃部を形成している。

37～39は敲石である。37・38は安山岩製。39は砂岩製。37は縦長の円礫で，長軸の両端広範囲に敲打痕が認められる。38は長軸両端に細かな敲打痕が認められる。39は上部に大きめの敲打痕，左側縁下部



第18図 旧石器 6

に細かな敲打痕が認められる。

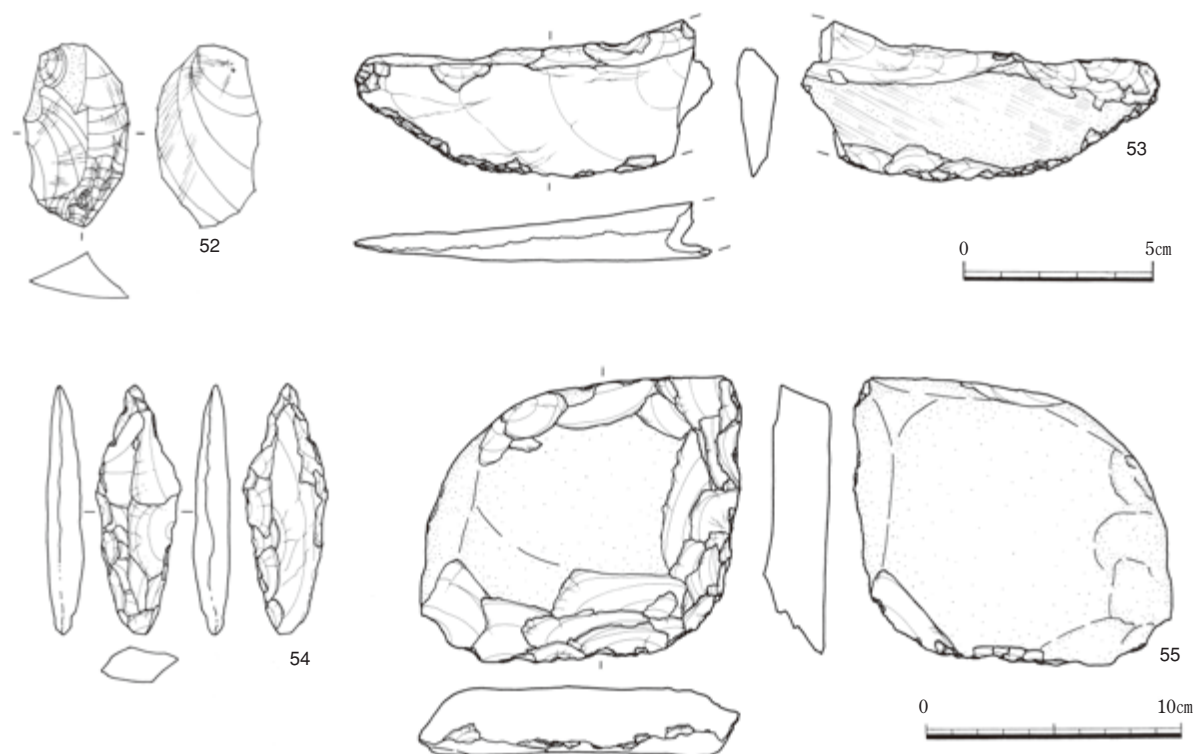
西側調査区（第18～24図40～88）

ブロック1（第18～19図40～55）

J・K-18区にまたがる約16m×18mの範囲で、シルト質頁岩・頁岩が多く出土している。

40は頁岩製のナイフ形石器。横長剥片を素材とし、右側縁部に基部から先端部に向かって細かな加工を施す。41～43は使用痕剥片。41は左側縁部に、42は

両側縁部に使用痕が観察できる。43は横長の薄い剥片を素材としている。下面に使用痕と思われる細かな剥離が観察できる。44・45は細石刃核。44は上面を右方向から打面調整を行なっている。45は上面が平坦な打面で、正面の作業面とほぼ垂直に交わる。右側面に自然面を残す。46～51は細石刃。47は使用痕が確認できる。49は鉄石英製。52は黒曜石であるが、産地の特定が困難なため、石材の参考資料とし



第19図 旧石器 7

て掲載した。灰色がかったガラス質で、縞状の筋が入る。極小の黄色い粒が、わずかに含まれる。53はシルト質頁岩製のスクレイパー。横長剥片を真中で切断また欠損し、弧を描く正面の下部に剥離を施している。剥離は先端部に行くほど細かなものになる。54は表面が風化している頁岩製の尖頭器である。両側縁部は裏面からの二次加工、および先端部と基部は稜上加工により整形される。55は頁岩製の礫器である。平坦な円礫の自然面をほぼ残し、右側縁部と下面に比較的粗い二次加工で刃部を形成している。

ブロック 2 (第20～22図56～78)

K-18・19区にまたがる約16m×22mの範囲で、三船産類似・日東産類似の黒曜石が多く出土している。

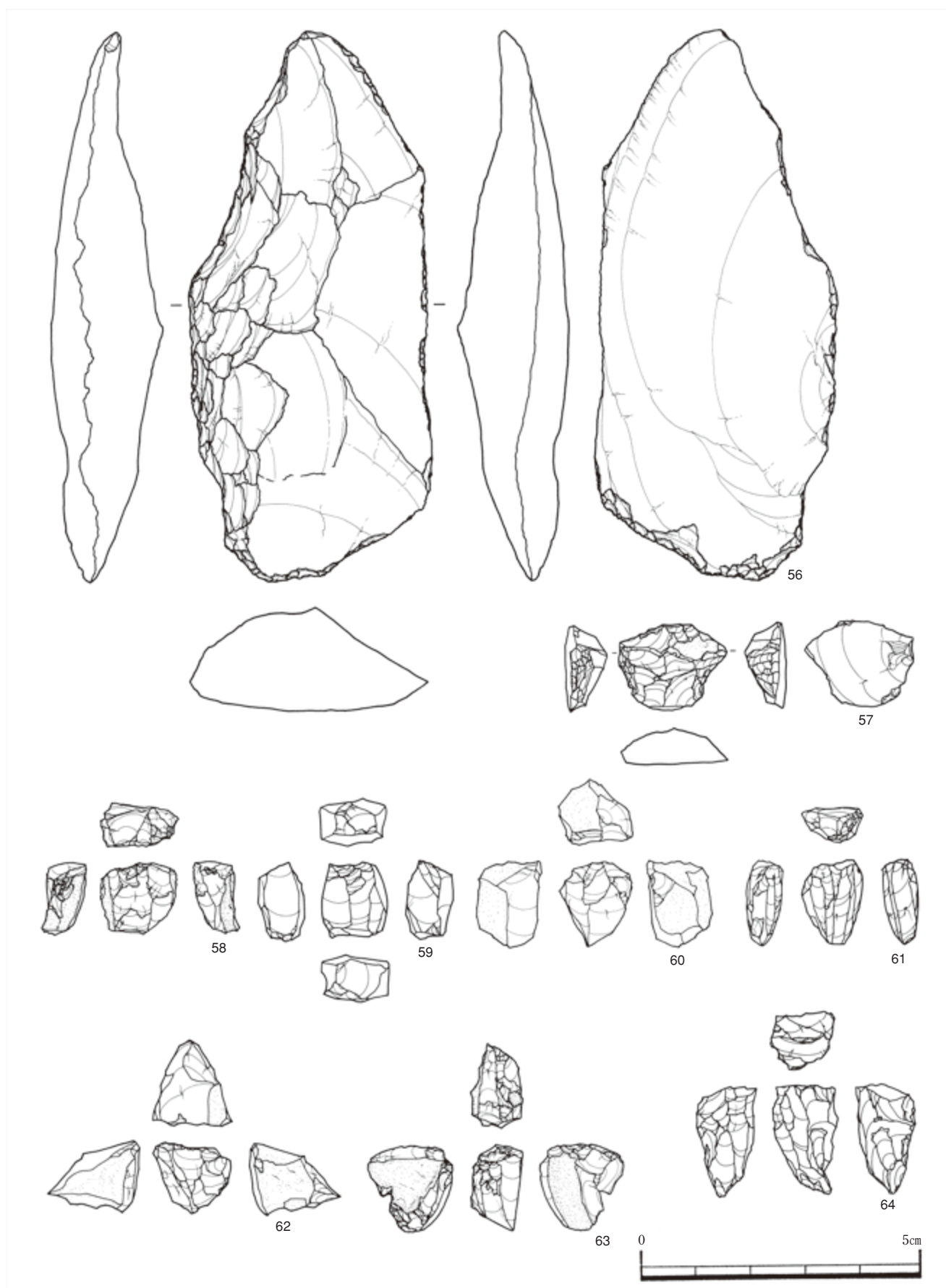
56は大型のナイフ形石器である。頁岩製の横長剥片を素材としている。表面は風化している。左側縁部及び基部に細かな二次加工を施している。右側縁部から先端部にかけて使用痕が観察できる。57は台形石器。両側縁部及び上面に正面からブランディングを施す。58～72は細石刃核。作業面が1cm程度の小さなものが多い。58は作業面に対して打面が狭い。59は主作業面は正面であるが、裏面および右側面に

剥離痕がある。60は正面以外の面に自然面を残すものである。61は主作業面は正面であるが、両側面にも剥離痕があり、作業面と平行な裏面を有する。62は打面が後方に傾斜している。63は作業面が狭い。64は縦長の石核を素材としたもので、作業面と平行な裏面を有する。65は上面に打面調整によるものと思われる細かな剥離を観察できる。66は打面がV状に凹んでいる。67は縦長の作業面を有するもので、下部に行くに従って窄まる。68は左側面に自然面を残すものである。69は上面・正面・下面に作業面が残るものである。70は残存作業面が1.2cmと小型のものである。下部に行くに従って窄まる。71・72も小型のもの。71は打面が後方に傾斜し、作業面が菱形に残る。72は左側面・裏面に自然面が残るものである。73～77は細石刃。74・75は使用痕と思われる微細な剥離が観察できる。78は縦長剥片を素材とするスクレイパーである。右側面に細かな剥離を施し、横断面が三角形を呈す。

ブロック 3 (第23図79～82)

J・K-19・20区にまたがる約20m×10mの範囲で、チャートの出土が目立つ。

79は細石刃核。作業面は正面であるが、打面は作



第20図 旧石器 8



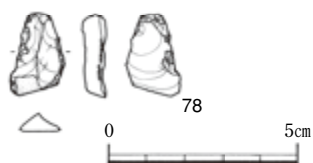
第21図 旧石器 9

業面に対して左側面及び後方に傾斜している。80～82はチャート製の細石刃である。使用痕は肉眼では観察できない。

その他（第23～24図83～88）

83は上牛鼻類似黒曜石の細石刃核。上面に平坦な打面を有し、作業面とほぼ垂直に交わる。84は三稜尖頭器である。裏面は剥離面をほぼ残し、先端部は正面からの二次加工と稜上加工によって整形される。85は大型の台形石器である。横長で、下部に厚みのある剥片を素材としている。両側縁下部に正面

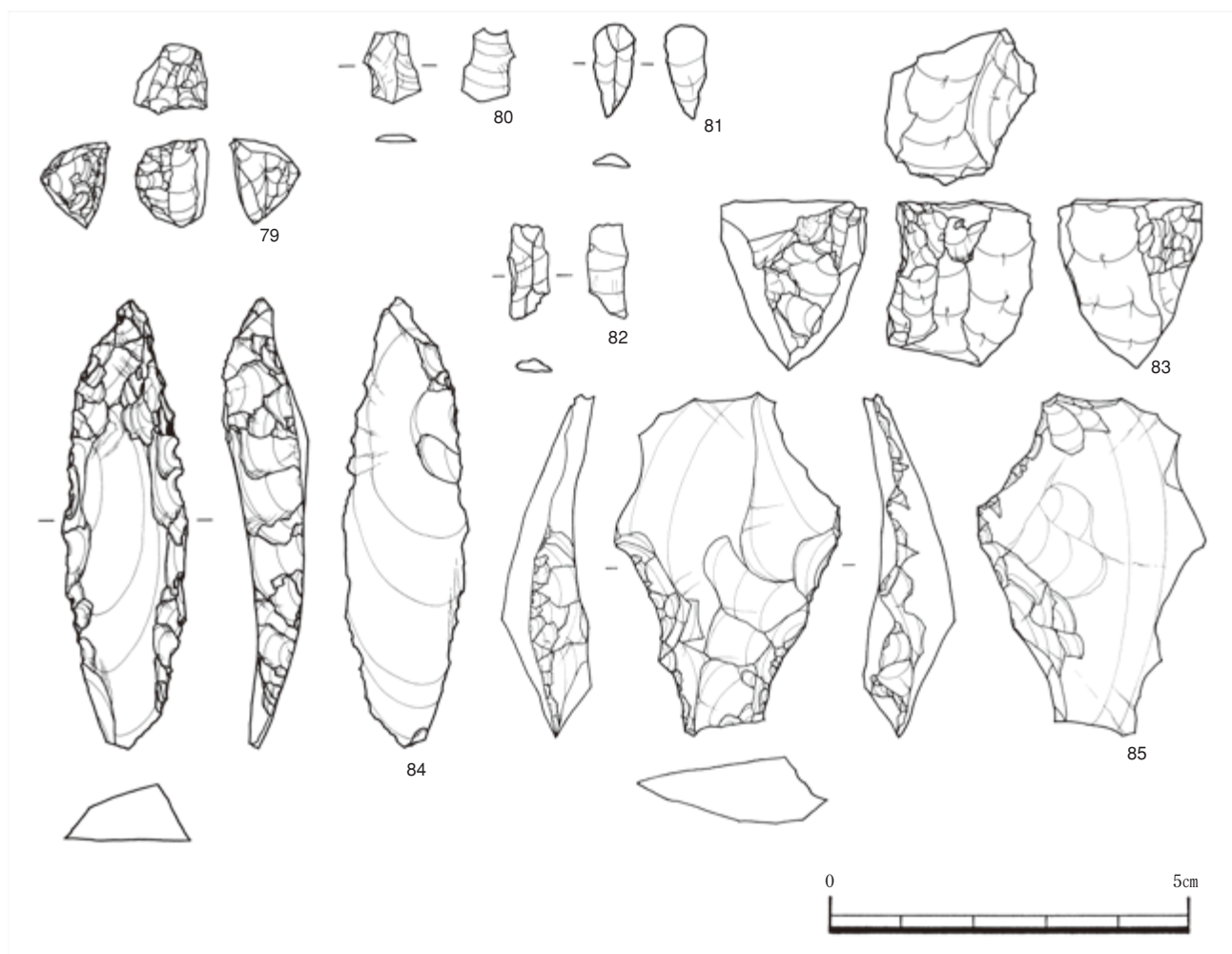
からの、右側面全体に裏面からの細かな加工が観察される。86・87はスクレイパーである。86は自然面を残す礫を、ほぼ加工せずに使用している。87も自然面を残すもので、右側面・上面に加工を加えて整形している。下部となる刃部には、使用痕と思われる細かな剥離が観察できる。88は裏面に平坦な自然面を残す頁岩製の礫器である。正面は大きな剥離で整形した後、細かな剥離で刃部を形成している。



第22図 旧石器10

旧石器時代石器観察表

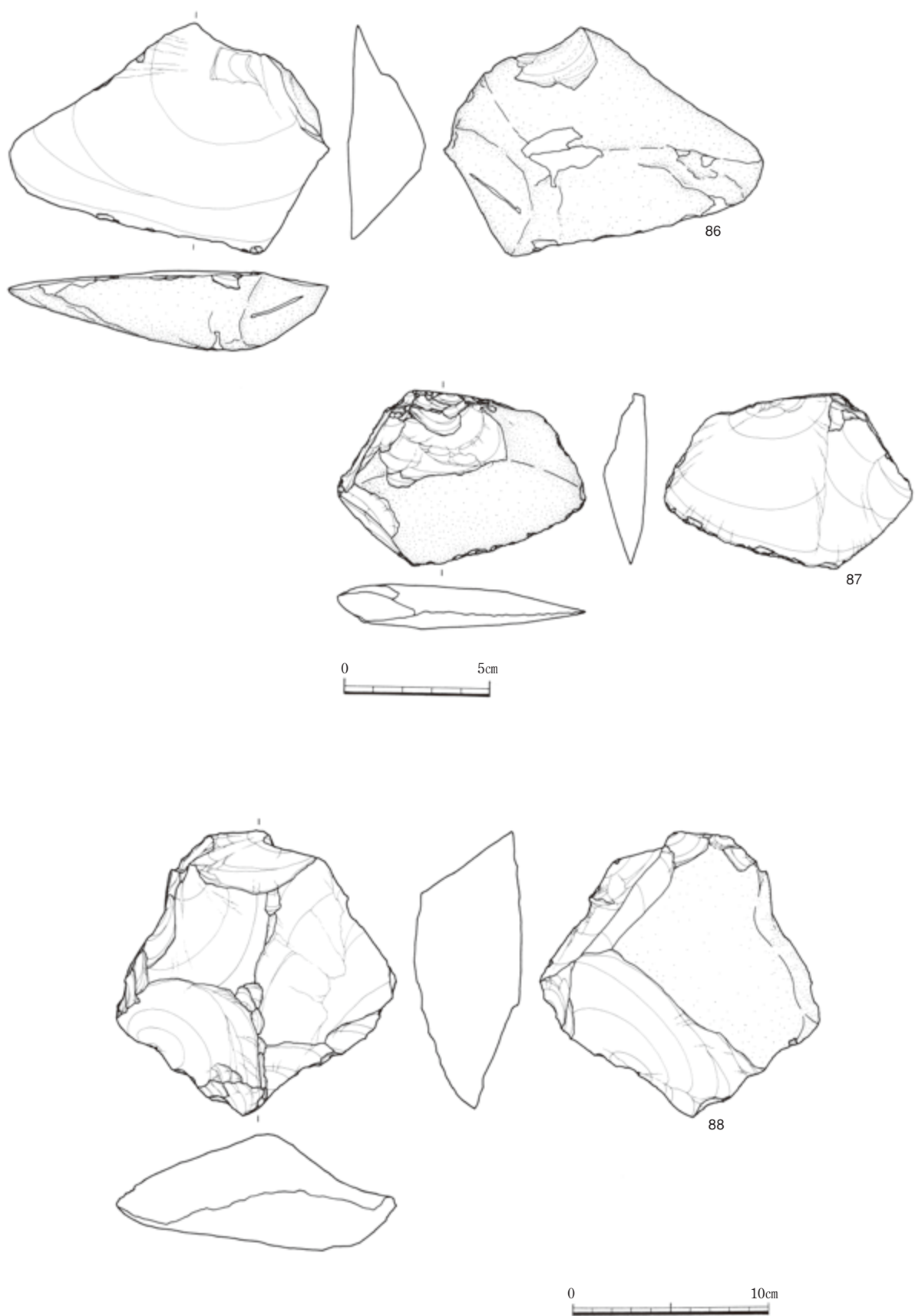
挿図 番号	報告 番号	出土区	層位	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
						cm	cm	cm	g	
第13図	1	P-9	VIII	ナイフ形	玉髄	4.05	1.7	0.8	4.5	
	2	O-10	VII	ナイフ形	玉髄	2.85	2.05	1	3.6	
	3	O-10	VII	ナイフ形	黒曜石D	2.9	1.25	0.35	1.3	
	4	P-10	VII	ナイフ形	玉髄	3.3	1.5	0.95	4	
	5	P-10	VII	ナイフ形	シルト質頁岩	3.7	1.9	0.8	4.7	
	6	P-9	VIII	ナイフ形	玉髄	3.3	1.7	1	4.2	
	7	O-10	VII	ナイフ形	チャート	3.65	1.85	0.8	4.4	
	8	P-10	VII	ナイフ形	玉髄	3.45	1.9	0.6	4.9	
	9	O-10	VIII	ナイフ形	玉髄	2.8	1.4	0.6	1.7	
	10	P-10	VIII	ナイフ形	鉄石英	2.55	1.25	0.7	1.6	
	11	P-10	VII	ナイフ形	玉髄	2.8	1.2	0.4	1.1	
	12	P-10	VII	ナイフ形	玉髄	1.85	1.6	0.4	1.2	
第14図	13	P-11	VIII	ナイフ形	玉髄	2.1	1.4	0.55	1.4	
	14	O-10	VII	ナイフ形	玉髄	2.6	1.4	0.5	1.1	
	15	P-10	VII	ナイフ形	玉髄	2.15	1.75	0.5	1.2	
	16	P-10	VII	ナイフ形	玉髄	2.1	1.7	0.6	1.6	
	17	P-10	VII	ナイフ形	玉髄	2.45	1.5	0.4	1	
	18	P-10	VIII	ナイフ形	黒曜石E	2.3	1.5	0.7	2	
	19	O-10	VII	加工痕剥片	シルト質頁岩	3.15	3.25	0.5	4.3	
	20	P-10	VII	加工使用痕剥片	チャート	4.8	1.9	1.45	9.5	
	21	P-10	VII	剥片	玉髄	3.3	2.9	1.15	6.1	
	22	P-11	VIII	剥片	玉髄	2.8	2.45	0.8	3.2	
	23	P-11	VII	剥片	玉髄	2.9	1.8	1.05	3.2	
	24	P-10	VII	剥片	玉髄	2.25	2.25	0.6	1.6	
第15図	25	P-10	VII	剥片	玉髄	1.85	1.8	0.4	0.8	
	26	P-10	VII	剥片	シルト質頁岩	5.65	4	1.05	15.3	
	27	O-10	VII	剥片	シルト質頁岩	3.7	2.6	0.85	6.3	
	28	P-10	VII	剥片	シルト質頁岩	3.8	3	0.8	5.3	
	29	P-10	VII	剥片	シルト質頁岩	2.6	4.2	0.7	23.5	
第16図	30	O-10	VII	石核	玉髄	4.6	5.65	2.5	58.6	
	31	P-10	VII	石核	玉髄	4.6	4	4.4	55.2	
	32	P-10	VII	石核	玉髄	3.1	3.5	2.4	15	
	33	P-10	VII	石核	シルト質頁岩	8.6	2.9	7.8	145.8	
	34	P-10	VII	石核	シルト質頁岩	12.9	5	8.2	342.1	
	35	O-10	VII	石核	シルト質頁岩	7.1	7.3	4.9	217.4	
	36	P-11	VII	スクレイパー	玉髄	5.5	3.4	2.3	26.4	
第17図	37	P-9	VII	ハンマー	安山岩	12.6	7.4	5.9	699.9	
	38	O-10	VII	ハンマー	安山岩	9.1	5.5	3.2	225.4	
	39	P-10	VII	ハンマー	砂岩	7.5	6.9	3.5	217.4	
第18図	40	J-18	VIII	ナイフ形石器	安山岩	6.04	2.58	1.16	13.5	
	41	J-18	VIII	使用痕剥片	シルト質頁岩	2.15	1.75	0.3	1.33	
	42	K-18	VIII	使用痕剥片	シルト質頁岩	1.8	2.1	0.35	1.26	
	43	J-18	VIII	使用痕剥片	黒曜石F	2.4	3	0.5	3.46	
	44	J-18	VII	細石刃核	黒曜石A	1.4	1.7	1.9	4.7	
	45	J-18	VIII	細石刃核	黒曜石A	1.8	1.7	1	3.55	
	46	J-18	VII	細石刃	黒曜石G	1.2	0.8	0.15	0.12	
	47	J-18	VIII	細石刃	黒曜石A	1.1	0.4	0.1	0.06	
	48	J-18	VII	細石刃	鉄石英	1.35	0.6	0.25	0.12	
	49	J-18	VIII	細石刃	黒曜石A	1.6	0.7	0.3	0.18	
	50	J-18	VII	細石刃	黒曜石A	1	0.5	0.1	0.07	
	51	J-18	VIII	細石刃	黒曜石A	1.1	0.6	0.3	0.14	
第19図	52	J-18	VII	使用痕剥片	黒曜石G	4.9	2.75	1.15	15.6	
	53	J-18	VIII	スクレイパー	頁岩	4.2	9.45	1.6	40.6	
	54	J-18	VII	尖頭器	頁岩	10	3.5	0.9	37.3	
	55	J-18	VIII	礫器	頁岩	11.35	12.65	2.8	590	
第20図	56	K-19	VIII	ナイフ形石器	頁岩	10.1	4.45	2.05	88	
	57	K-19	IV	台形石器	黒曜石A	1.6	2	0.75	1.92	
	58	K-18	IV	細石刃核	黒曜石B	1.3	1.4	0.7	1.49	
	59	K-19	VIII	細石刃核	黒曜石E	1.4	1.2	0.8	2.1	
	60	K-19	VIII	細石刃核	黒曜石B	1.5	1.4	1.1	2.55	
	61	K-19	IV	細石刃核	黒曜石E	1.5	1.1	0.6	1.06	
	62	K-19	VIII	細石刃核	黒曜石A	1.2	1.4	1.6	2.23	
	63	K-19	IV	細石刃核	黒曜石B	1.6	0.8	1.5	1.98	
	64	K-19	IV	細石刃核	黒曜石A	1.9	1.2	1	2.42	



第23図 旧石器11

旧石器時代石器観察表

挿図 番号	報告 番号	出土区	層位	器種	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
第21 図	65	K-19	Ⅳ	細石刃核	黒曜石B	1.9	1.9	1.6	5.35	
	66	K-19	Ⅳ	細石刃核	黒曜石B	1.8	1	1.2	2.04	
	67	K-19	Ⅷ	細石刃核	黒曜石B	2.4	1.2	0.9	2.82	
	68	K-19	Ⅳ	細石刃核	黒曜石B	1.5	0.8	1.5	1.51	
	69	K-19	Ⅳ	細石刃核	黒曜石A	1.4	1.2	1.4	2.19	
	70	K-19	V落ち込み	細石刃核	黒曜石C	1.3	0.9	0.7	0.95	
	71	K-19	Ⅳ	細石刃核	黒曜石C	1.6	1.4	1	1.18	
	72	K-19	Ⅳ	細石刃核	黒曜石C	1.3	0.9	0.6	0.72	
	73	K-19	Ⅳ	細石刃	黒曜石C	1.4	0.5	0.15	0.11	
	74	K-19	V落ち込み	細石刃	黒曜石A	1.55	0.4	0.1	0.07	
	75	K-19	Ⅷ	細石刃	黒曜石B	1.4	0.5	0.1	0.16	
第22図	76	K-19	Ⅳ	細石刃	黒曜石B	1.1	0.55	0.15	0.1	
	77	K-18	Ⅳ	細石刃	黒曜石C	1.35	0.6	0.2	0.13	
	78	K-19	Ⅷ	スクレイパー	黒曜石B	2.1	0.6	1.3	1.31	
	79	J-19	Ⅳ	細石刃核	黒曜石C	1.2	1	0.9	0.97	
	80	J-19	Ⅷ	細石刃	チャート	1.05	0.7	0.1	0.09	
	81	J-20	Ⅳ	細石刃	チャート	1.35	0.6	0.2	0.09	
	82	J-20	Ⅷ	細石刃	チャート	1.35	0.6	0.2	0.11	
	83	J-19	Ⅳ	細石刃核	黒曜石A	2.3	1.9	2	8.38	
	84	L-19	Ⅷ	三稜尖頭器	ホルンフェルス	6.25	1.75	1.2	10.1	
	85	L-19	Ⅷ	台形石器	黒曜石H	4.8	3.1	1.15	12.38	
	86	K-19	Ⅷ	スクレイパー	頁岩	7.93	11.05	2.75	184.6	
第24 図	87	K-19	Ⅷ	スクレイパー	頁岩	6.09	8.51	1.6	79.7	
	88	J-19	Ⅷ	礫器	安山岩	14.7	14.4	6	1016	



第24図 旧石器12

第5節 縄文時代の調査

縄文時代は、早期、晩期の遺構・遺物と中期～後期の土器が出土した。

1 縄文時代早期

縄文時代早期は、西側調査区において遺構・遺物が検出された。

遺構は、J—19区に集石遺構が3基、近接する状態で検出された。遺物は、Ⅳ層柱から土器・石器が出土した。土器は、早期前半のⅠ類土器から早期終末のⅤ類土器までが出土したが、その大半はⅣ類土器が占める。石器は、石鏃・打製石斧・磨製石斧・磨石・敲石・石皿が出土した。

(1) 遺構

① 1号集石 (第25図)

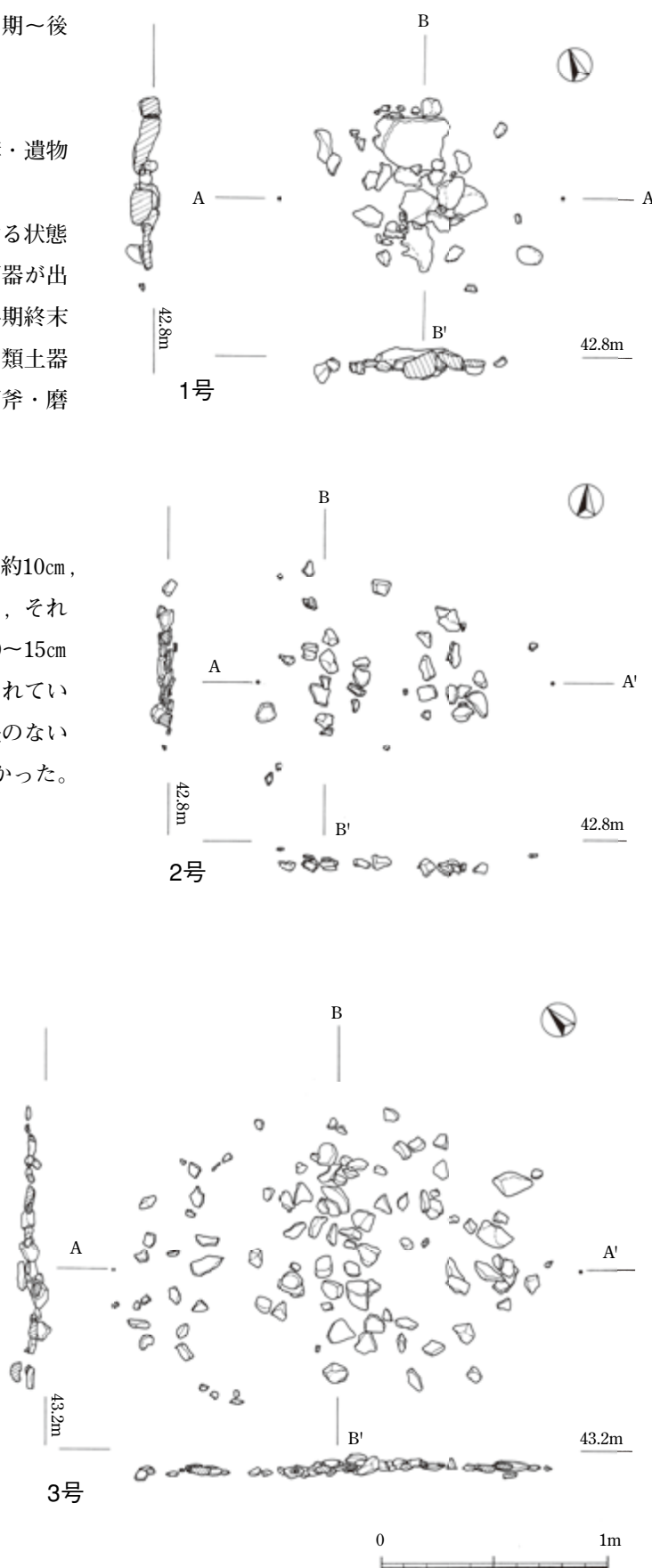
J—19区Ⅳ層から検出されたもので、厚さ約10cm、縦横の幅がどちらも約30cmの大型の石1個と、それよりやや小型の厚さ約10cm、縦横の幅が約10～15cm大の石が5個、他は拳大以下の小石で構成されている。礫の密集度合いは低い。礫はほぼ高低差のない状態で広がっており、掘り込みも確認されなかった。

② 2号集石 (第25図)

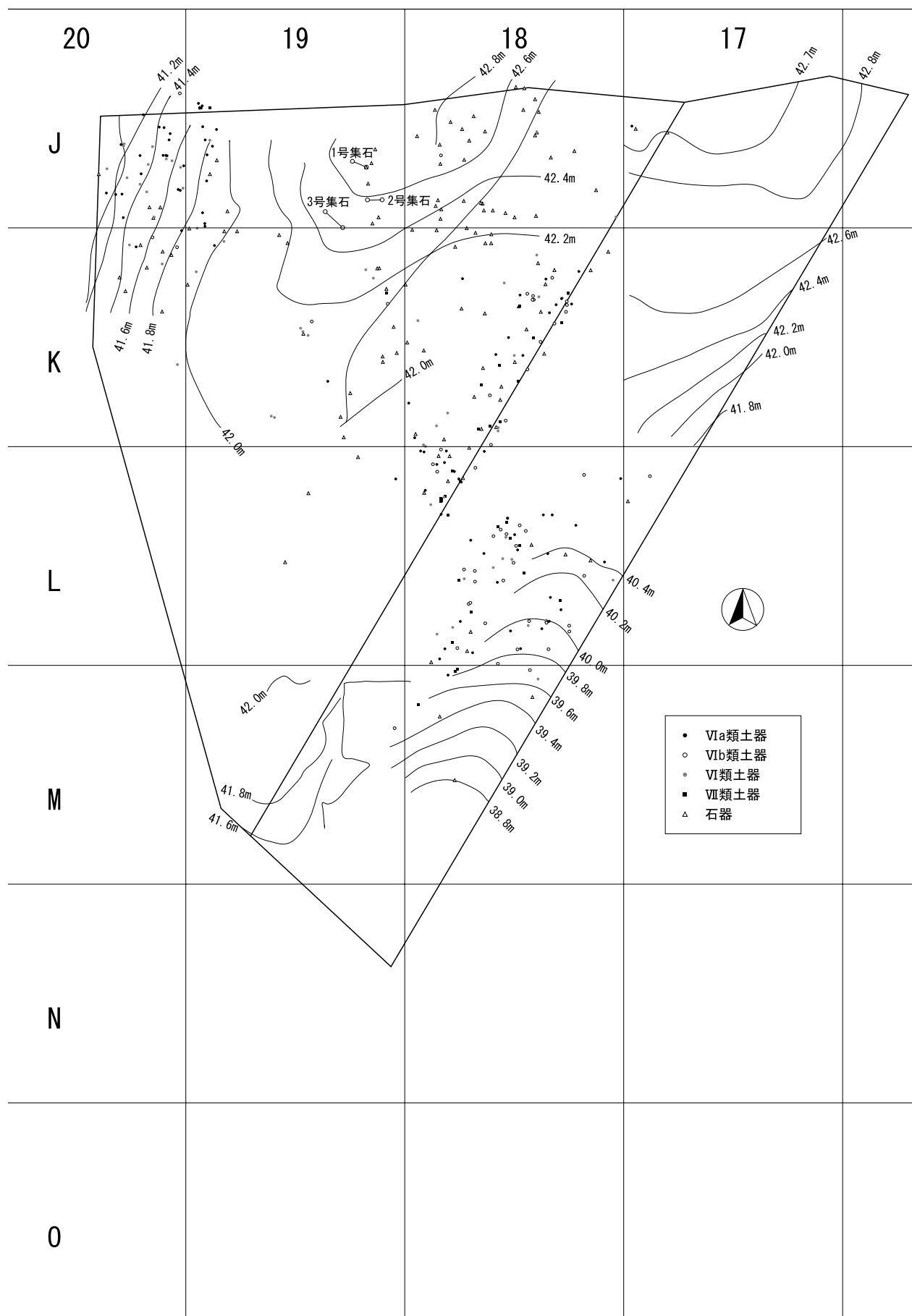
J—19区Ⅳ層から検出されたもので、礫に大小の差はほとんどみられず、拳大の角礫が30個ほどで構成されている。礫の密集度合いは低い。礫はほぼ高低差がない状態で広がっており、掘り込みも確認されなかった。

③ 3号集石 (第25図)

J—19区Ⅳ層から検出されたもので、3基のうち礫の散乱範囲が一番広く、2m×1.5m四方の範囲で散乱している。礫は角礫で、拳大よりやや大きめのものが8個と、拳大またはそれ以下の大きさのものが数十個で構成されている。礫の密集度合いは非常に低く、散乱している。礫はほぼ高低差がない状態で広がっており、掘り込みも確認されなかった。



第25図 縄文時代早期集石遺構



第26図 縄文時代早期遺物出土状況図・遺構配置図

(2) 遺物

遺物は西側調査区において集中して出土したほかは、ほとんど見られなかった。

①土器

I類土器からⅤ類までの12種に分類できる。

I類土器 (第27図 89)

I類土器は1点である。89は口唇部内側に段を有し、外側にはヘラによる刻目を施すものである。口

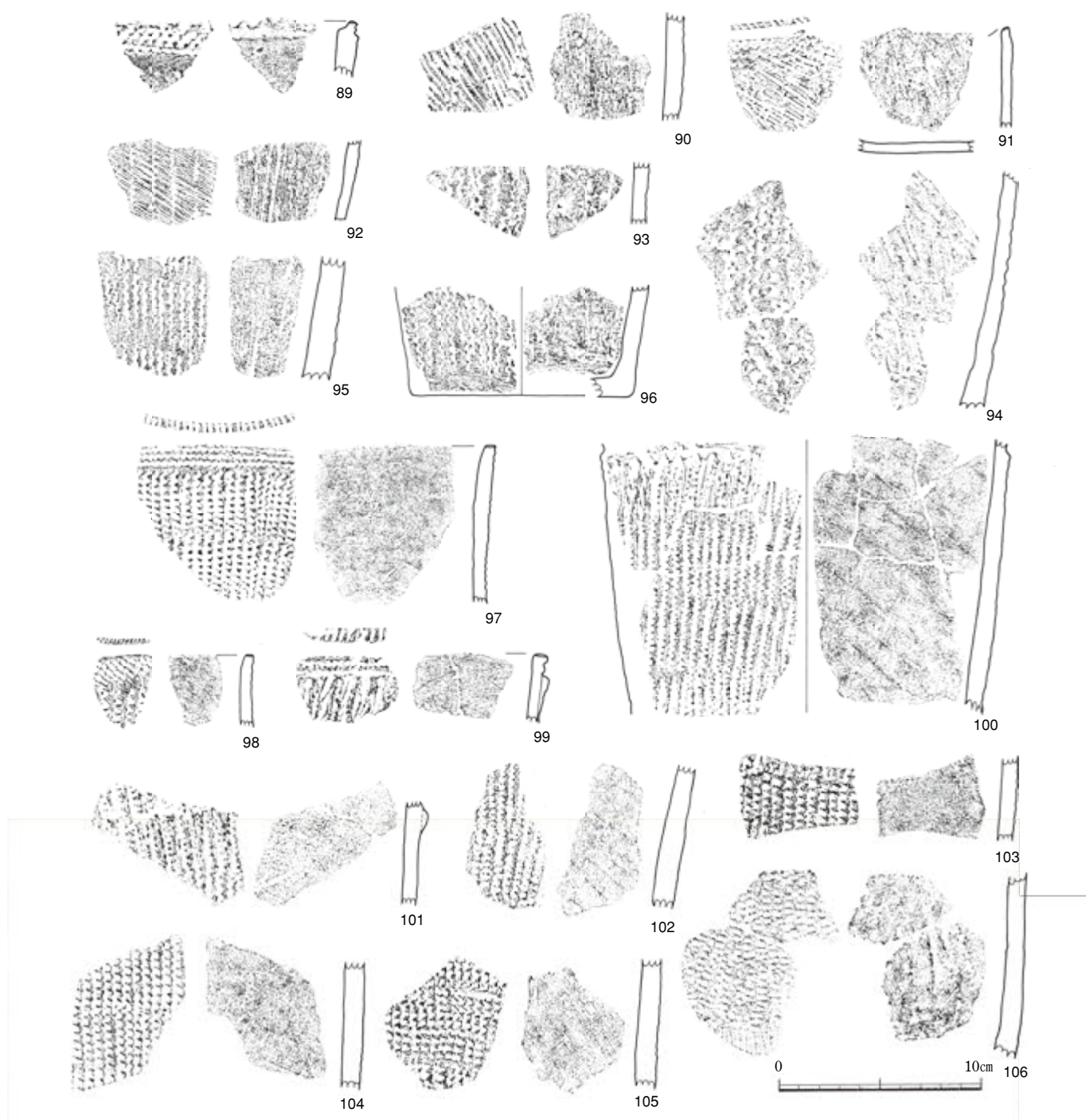
縁部外面には斜位に貝殻刺突文を施し、その下に横位の貝殻刺突文を施す。

Ⅱ類土器 (第27図 90)

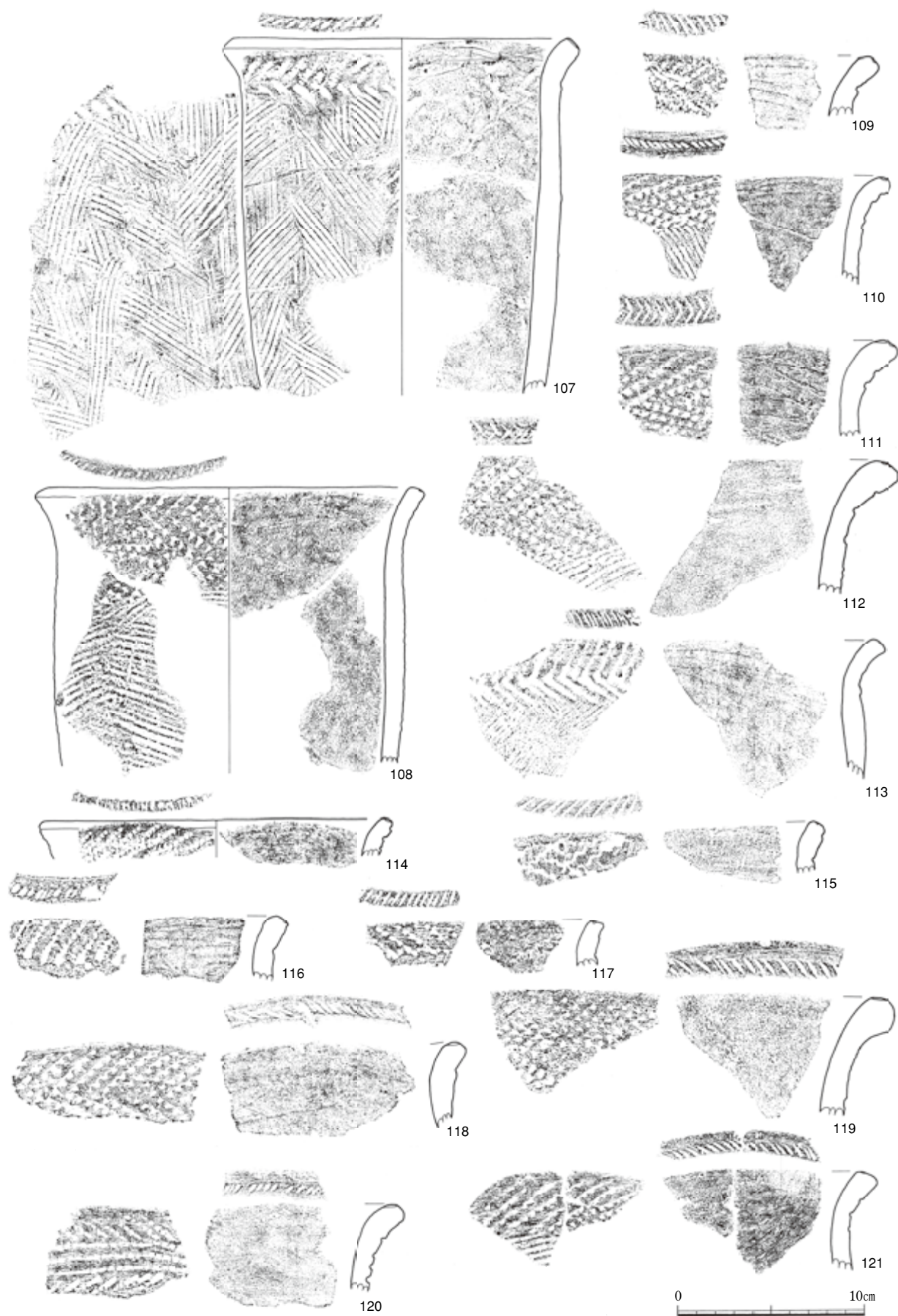
Ⅱ類土器も1点である。90は円筒の胴部で、斜位の貝殻条痕文の上に、2条の貝殻刺突文を施す。

Ⅲ類土器 (第27図 91・92)

Ⅲ類土器は2点である。胴部外面は押引状の条痕文を施し、その上に貝殻刺突線文を縦位又は斜位に



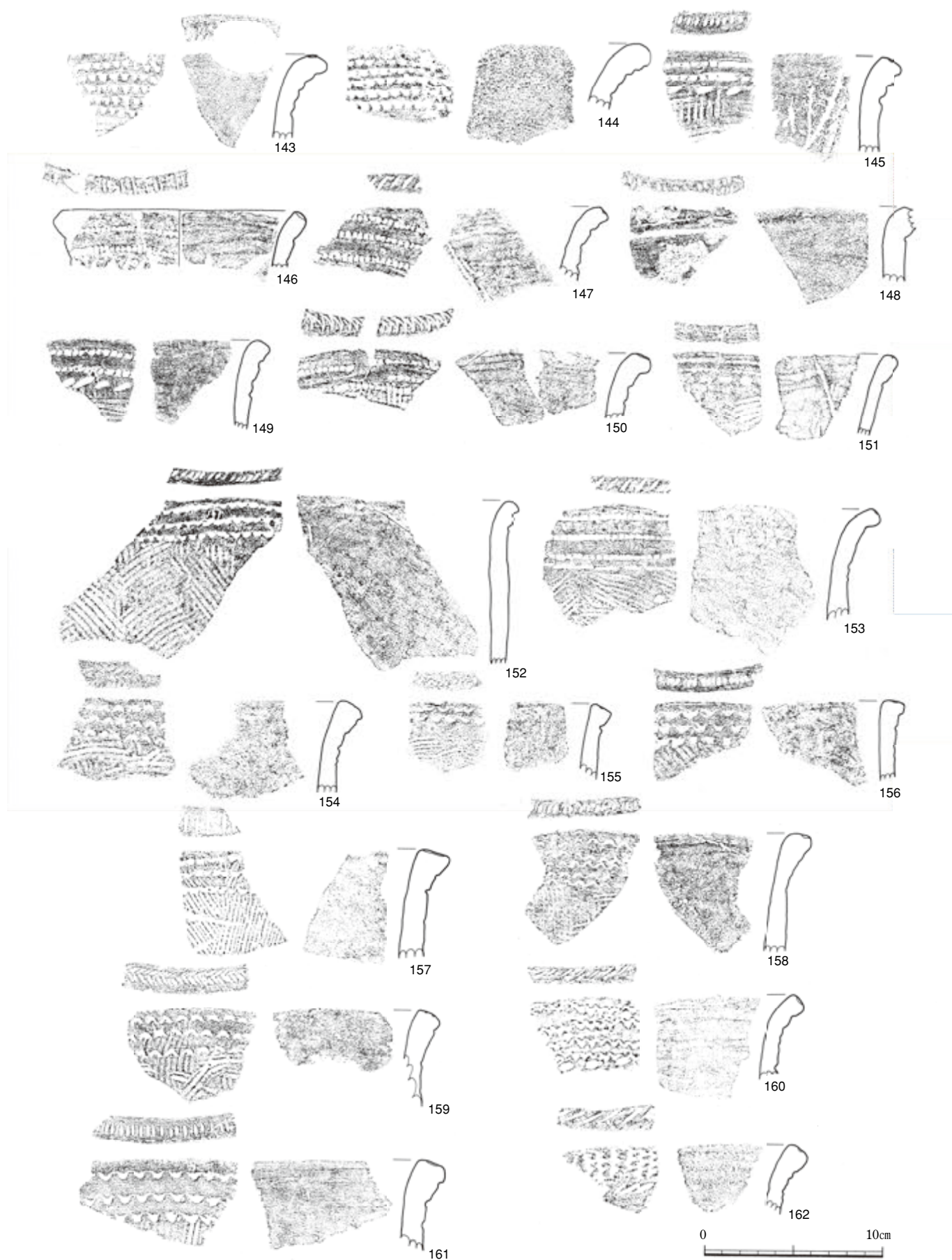
第27図 I～Ⅴ類土器



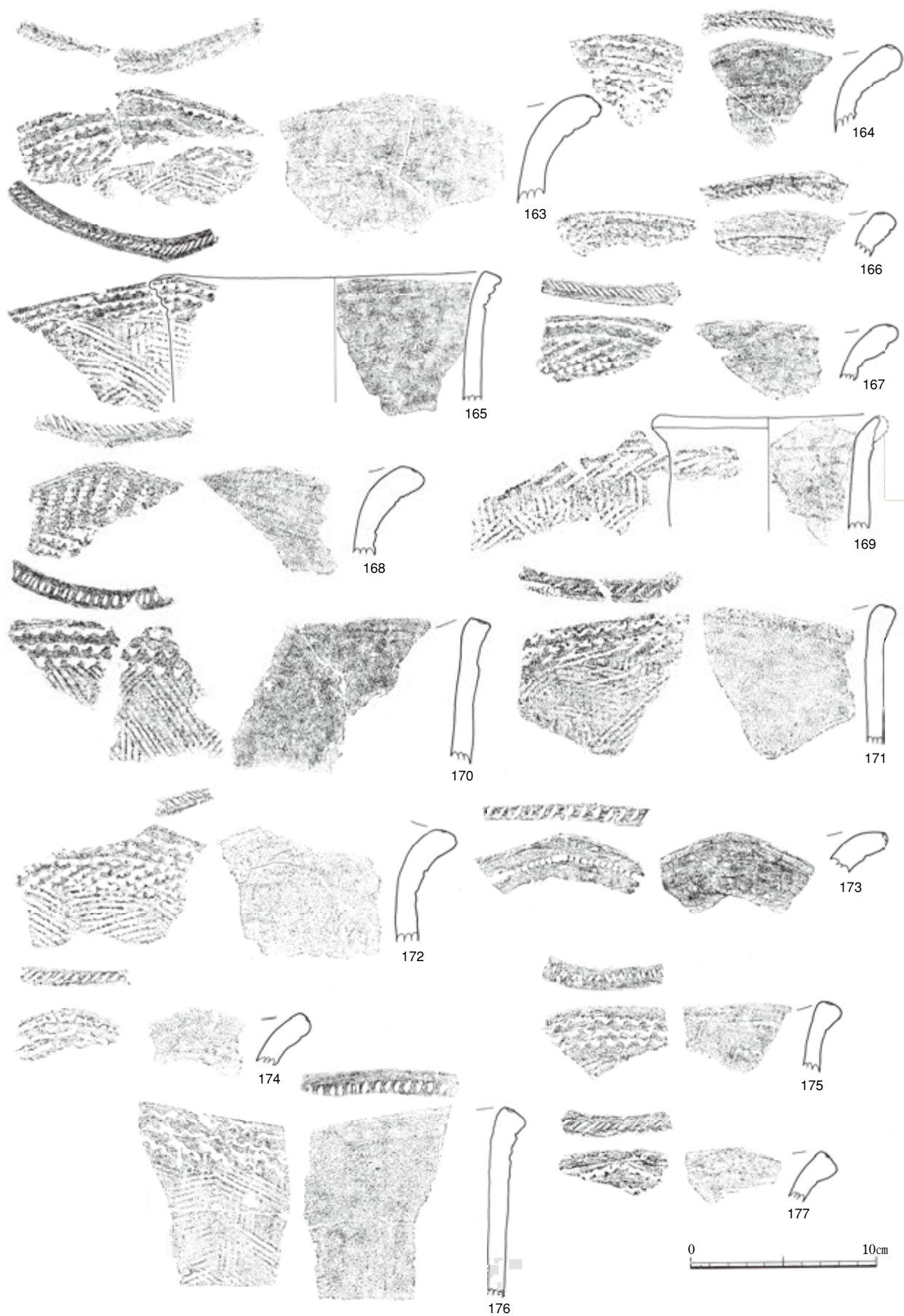
第28図 Via類土器 1



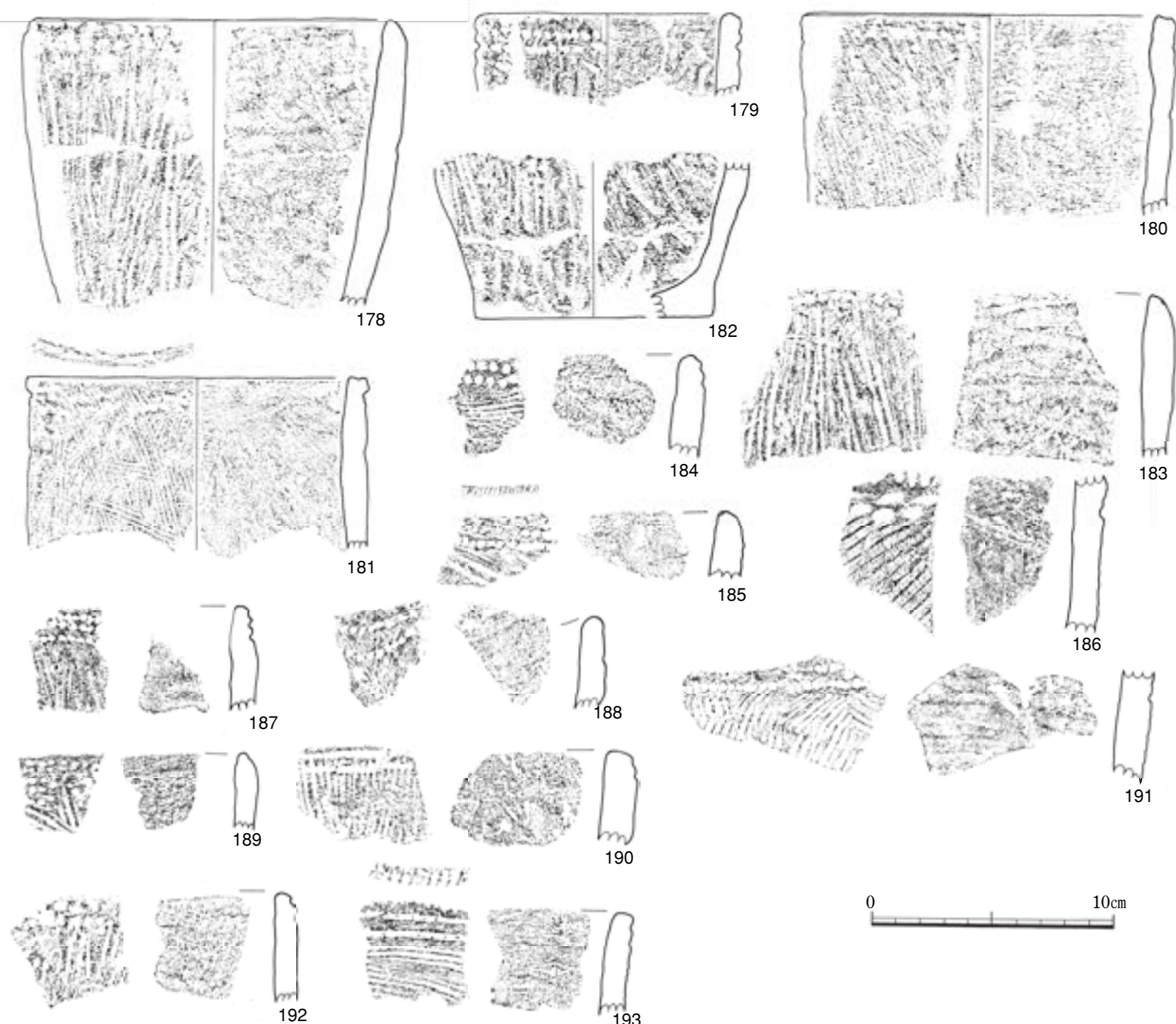
第29図 Via類土器 2



第30図 Vla類土器 3



第31図 V Ia類土器 4



第32図 VIb類土器 1

施す二重施文である。91・92は角筒で、91は波状口縁を呈し、口唇部にはヘラで刻目を施す。口縁部外面には横位の貝殻刺突文を施す。

Ⅳ類土器（第27図 93～96）

Ⅳ類土器は、口縁部外面に横位の貝殻刺突文が施され、胴部に縦位又は斜位の貝殻刺突線文が施されるものである。内面はヘラケズリが施される。

Ⅴ類土器（第27図 97～106）

Ⅴ類土器は、口縁部が外反し、外面には横位又は斜位の貝殻刺突文が施されるもので、楔形突起を有するものもある。口唇部に貝殻筋による横圧やヘラによる刻目が施され、胴部は貝殻筋の押引きによる横方向の施文、胴部下位には縦位の沈線が施される。97・98は楔形突起がないタイプのものである。口縁

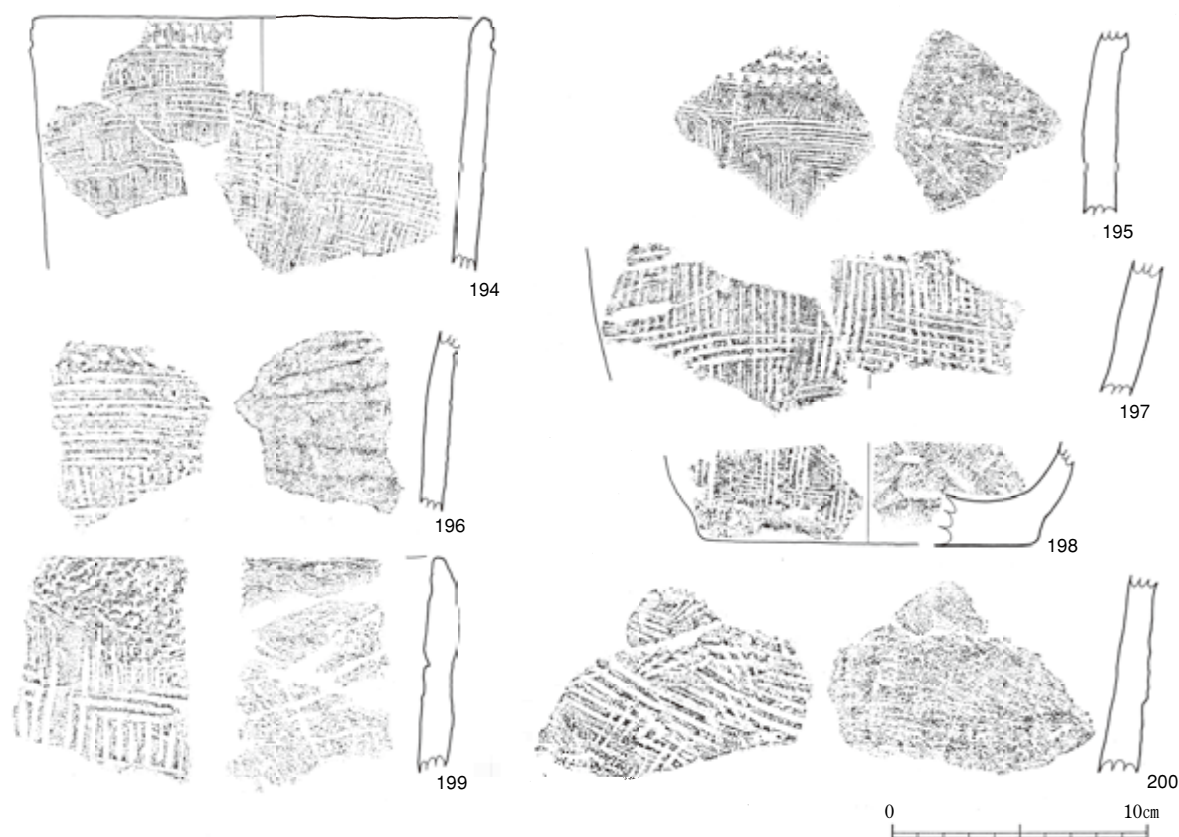
部はわずかに外反する。99～101は楔形突起を有するものである。楔は雑な作りで間隔も狭く貼り付けられる。99・100は楔と楔の間に、101は楔の両脇に貝殻刺突文を施す。102～106は貝殻による横方向の押引きが施された胴部である。

Ⅵ類土器（第28図～第38図 107～271）

Ⅵ類土器は、縄文時代早期の中心を占める円筒土器である。口縁部が外反もしくはやや外反するものをa、直行もしくはやや内湾するものをbとした。

Ⅵa類（第28図～第31図 107～177）

107～177は口縁部が外反もしくはやや外反するものである。口唇部はヘラによる刻目が施されるものが多い。口縁部は貝殻腹縁による刺突文が、斜位・横位・縦位・羽状に施される。胴部には貝殻腹縁に



第33図 VIb類土器 2

よる条痕文が斜位もしくは綾杉文状に施される。底部には浅い刻目が観察されるものが多い。VI類土器の中でも中心を占める土器である。

107は復元口径19.0cmを測る。108は復元口径20cmを測る。111・112は口唇部の刻みが羽状に刻まれる。114は復元口径18cmを測る。118～121は口縁部の外反の度合いが強く、口唇部の刻目が内面寄りに刻まれる。125・127・128は口縁部の貝殻刺突文の下にも条痕文を施す。126は補修孔が看取される。127には未貫通の補修孔と思われる凹みが見られる。130・131・134・135は口唇部の刻目が内側寄りに施される。134は復元口径31.4cmを測る大型のものである。145・149・151・153・160は横位に施された貝殻刺突文の下にヘラ状工具による連続刺突文が横位もしくは斜位に施される。143は口唇部の刻目が内側寄りに施され、口縁部の外反の度合いも強い。146は復元口径14.2cmを測る。

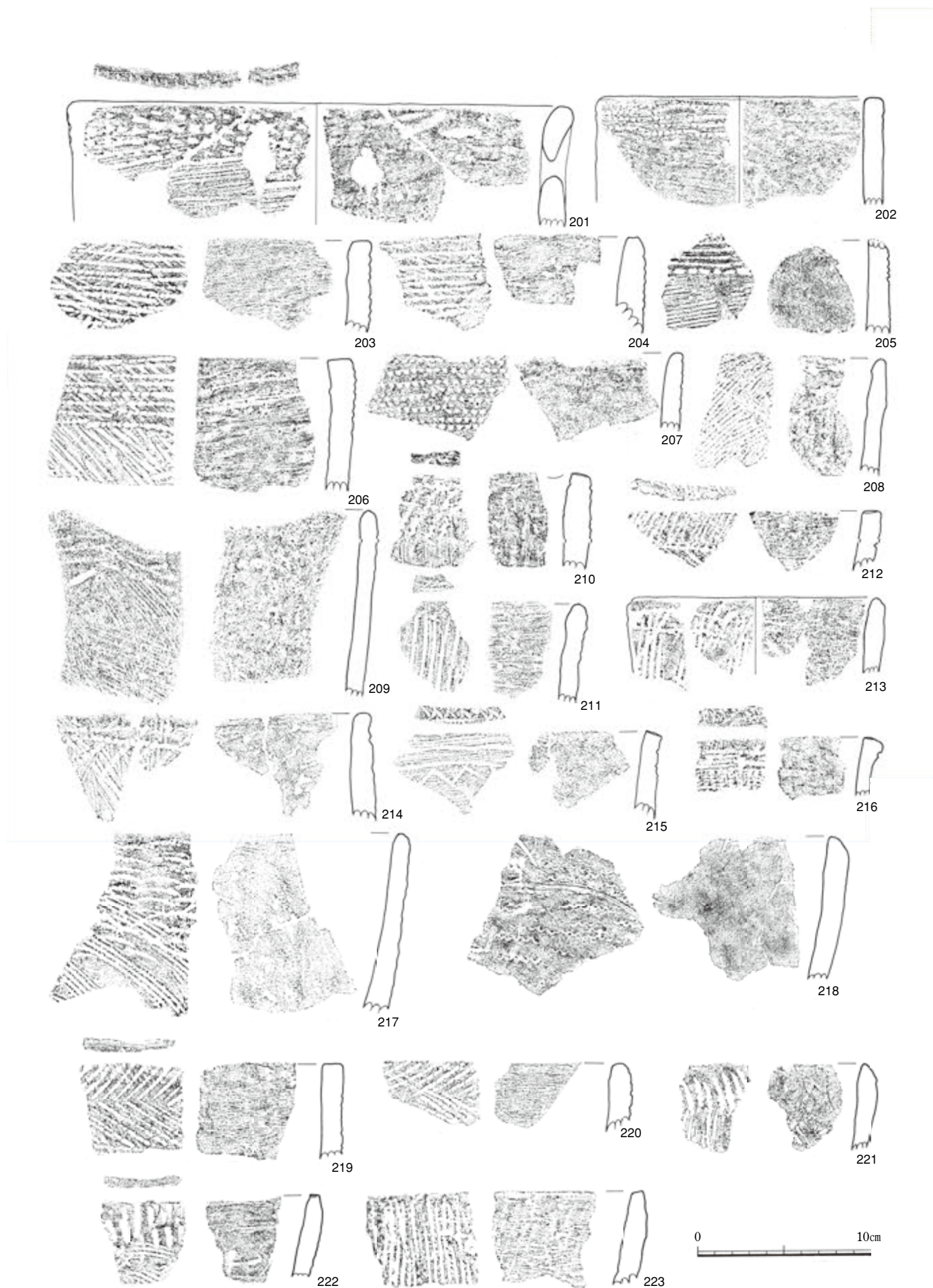
163～177は口縁部が外反し、さらに波状口縁を呈するものである。口縁部には横位、斜位、羽状、横

位の下に斜位に貝殻刺突文が施される。164・166・176は口唇部の刻目が内面寄りに施される。165・169の復元口径はそれぞれ19cm、12.8cmを測る。

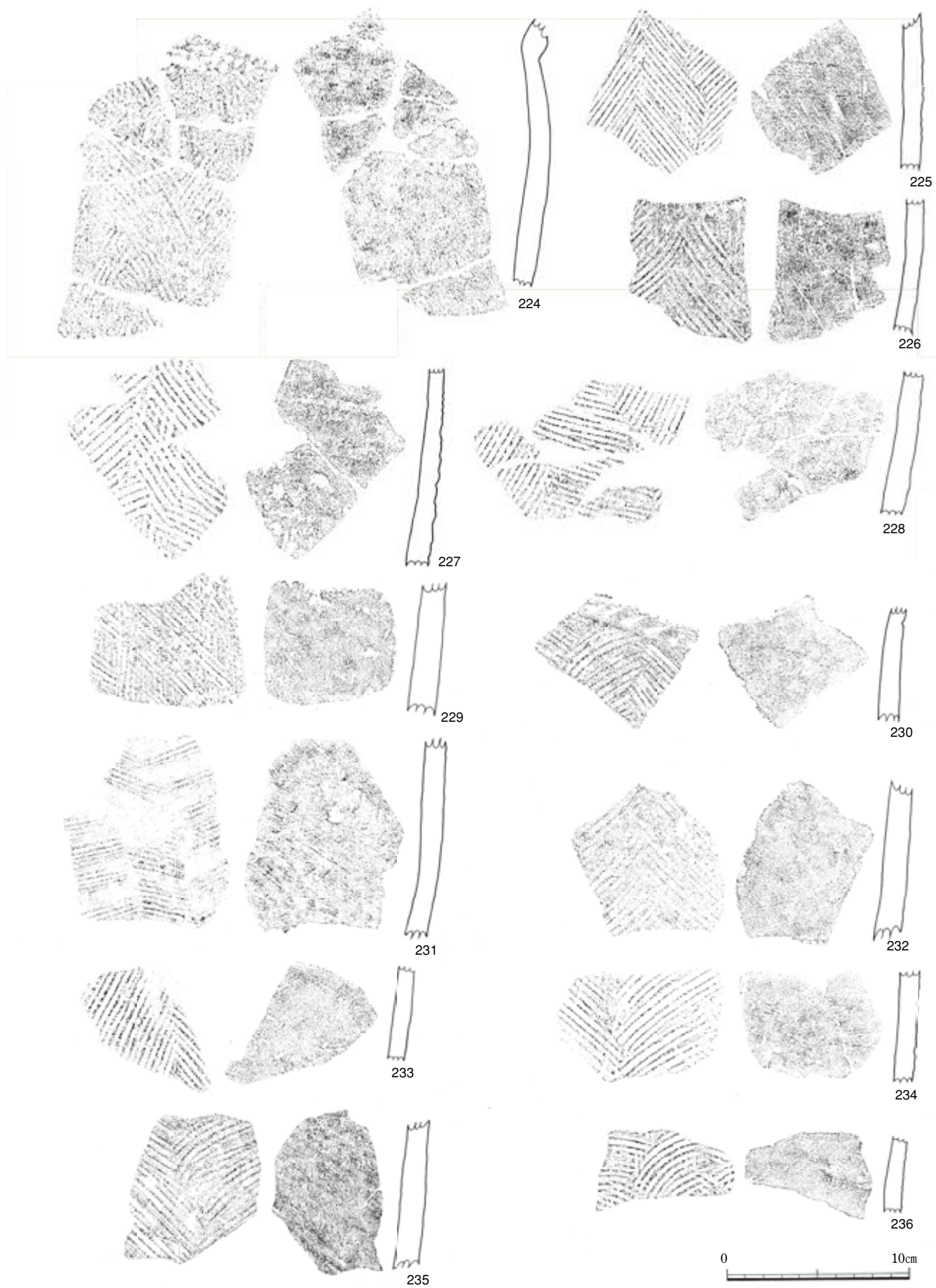
VI b 類土器（第32図～第34図 178～223）

178～223は口縁部が直行もしくはやや内湾するものである。口唇部は丸くつくられるものとほぼ平坦につくられるものがあり、ヘラによる刻目が施されるものもある。口縁部は棒状の工具による連点文や貝殻による刺突文が、斜位・横位・縦位・羽状、またはそれらを組み合わせて施される。胴部にはヘラや貝殻による条痕文が縦位・横位・斜位もしくは格子状に施される。

178～189は口縁部に棒状の工具で連点文を施すものである。178～183は、ヘラケズリ調整を面取り状に行った上から縦位の条痕文を雑に施す。178～180・183の復元口径は、順に14.8cm、11.0cm、15.2cm、14.0cmを測る。182は底部で、復元底径9.8cmを測る。178～180・183のいずれかと同一個体であると思われる。188は波状口縁を呈する。



第34図 VIb類土器 3



第35図 VI類土器 1

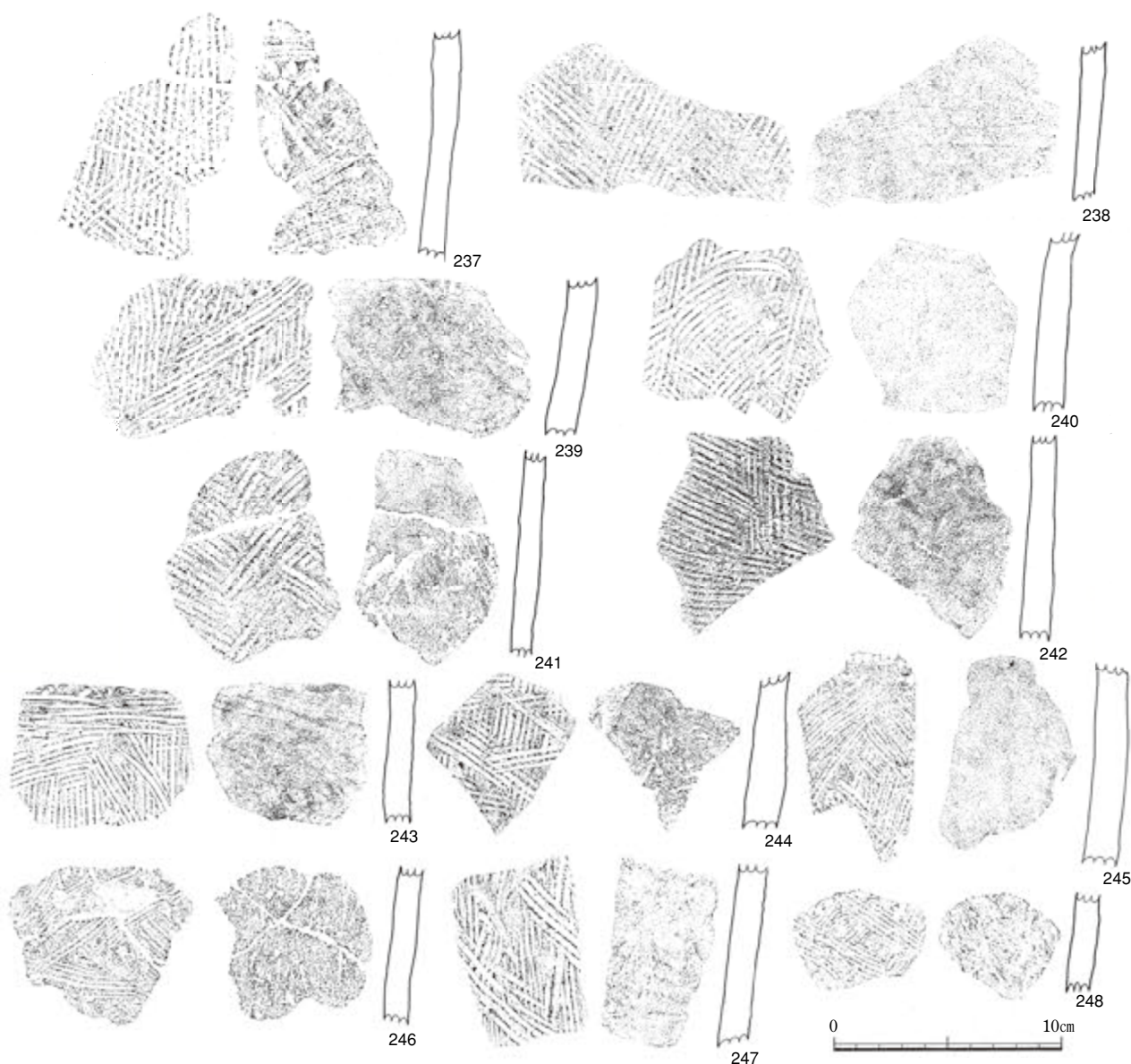
190～193は胴部に貝殻条痕文，その上から口縁部に貝殻刺突文を施す。190は貝殻で刺突後そのまま条痕を引いたものと思われる。

194～200は胴部に格子目状の条痕文が施されるものである。194は口縁部に棒状の工具による連点文が廻る。復元口径17.4cmを測る。195は口縁部に貝殻刺突文を横位に施す。198は底部である。199・200は条痕文を格子状に深く施すもので，199の口縁部には貝殻刺突文を斜位に施す。

201は口縁部に大型の貝殻を使用して縦位の貝殻刺突文を押引き状に施し，下には条痕文も施される。復元口径14.7cmを測り，補修孔が見られる。

202～208は口縁部に横位の貝殻刺突文を数条施す。202は復元口径16.4cmを測る。209は波状口縁を呈する。212は口縁部にヘラ状工具による斜位の沈線と，それに接して横位の沈線が施される。213は復元口径14.0cmを測る。218は内面にミガキ調整が施される。219・220は羽状の貝殻刺突文が施される。221～223は縦位の貝殻刺突文が施されるもので，223は刺突文の下にも強い縦位の貝殻条痕文が施される。

224～258はⅥ類土器の胴部である。貝殻もしくはヘラ状工具による条痕文を綾杉状，斜位，縦位，横位に施す。



第36図 Ⅵ類土器 2

259～271はⅥ類土器の底部である。胴部には貝殻もしくはヘラ状工具による条痕文が施される。259～265の底部下面には刻目が見られる。264の底面はミガキを施したように滑らかである。

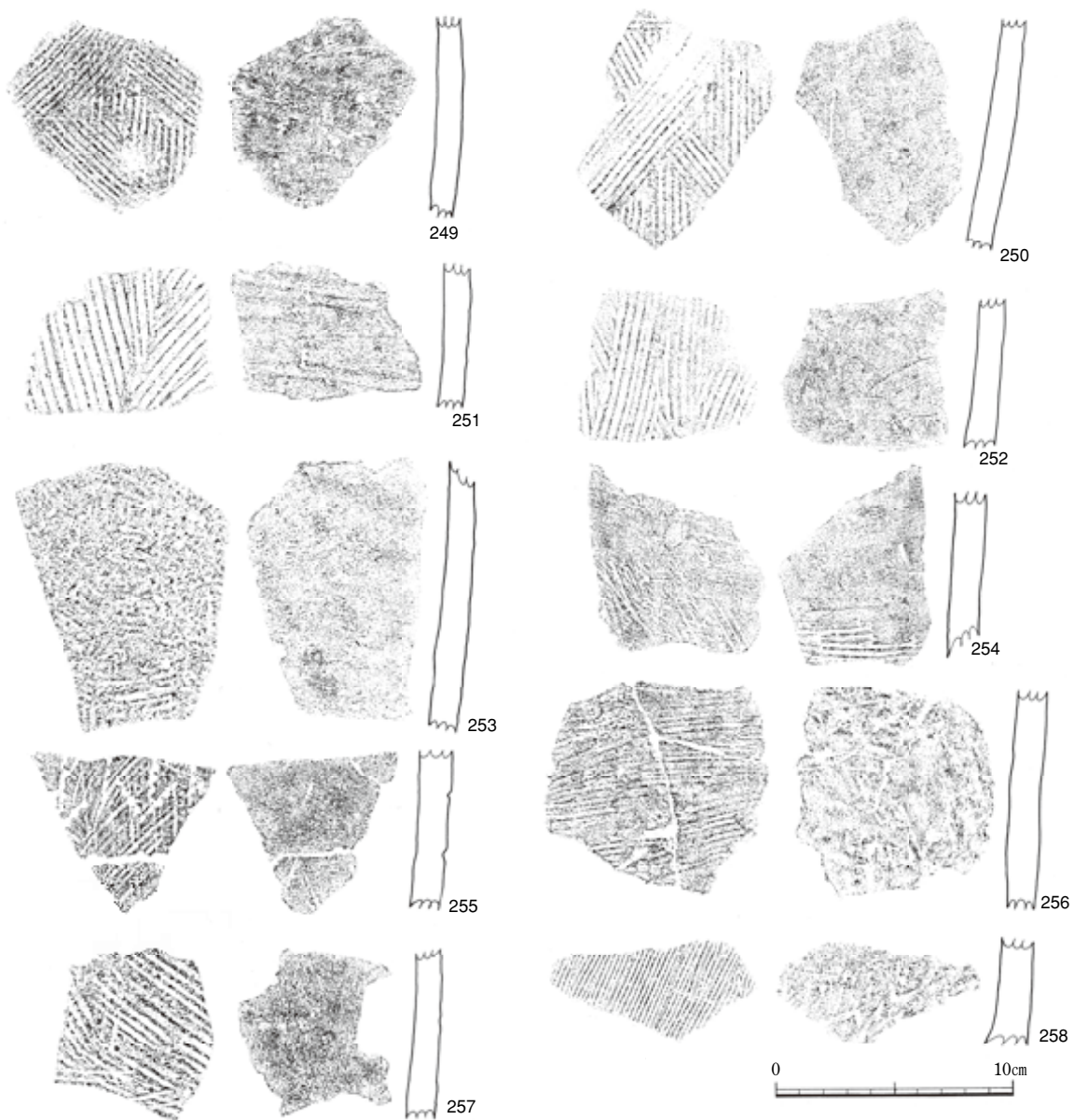
Ⅶ類土器（第39図～第41図 272～303）

Ⅶ類土器は、胴部に貝殻腹縁による刺突文が羽状に施されるものである。口縁部は直行またはやや内湾し、瘤を有するものも見られる。272は、横方向に羽状の貝殻刺突文を施すものである。胴部中位から上と下では刺突文が変化しており、施文具の貝殻を途中で変えたものと思われる。273～278は羽状の貝殻刺突文を縦方向に施したものである。273は波

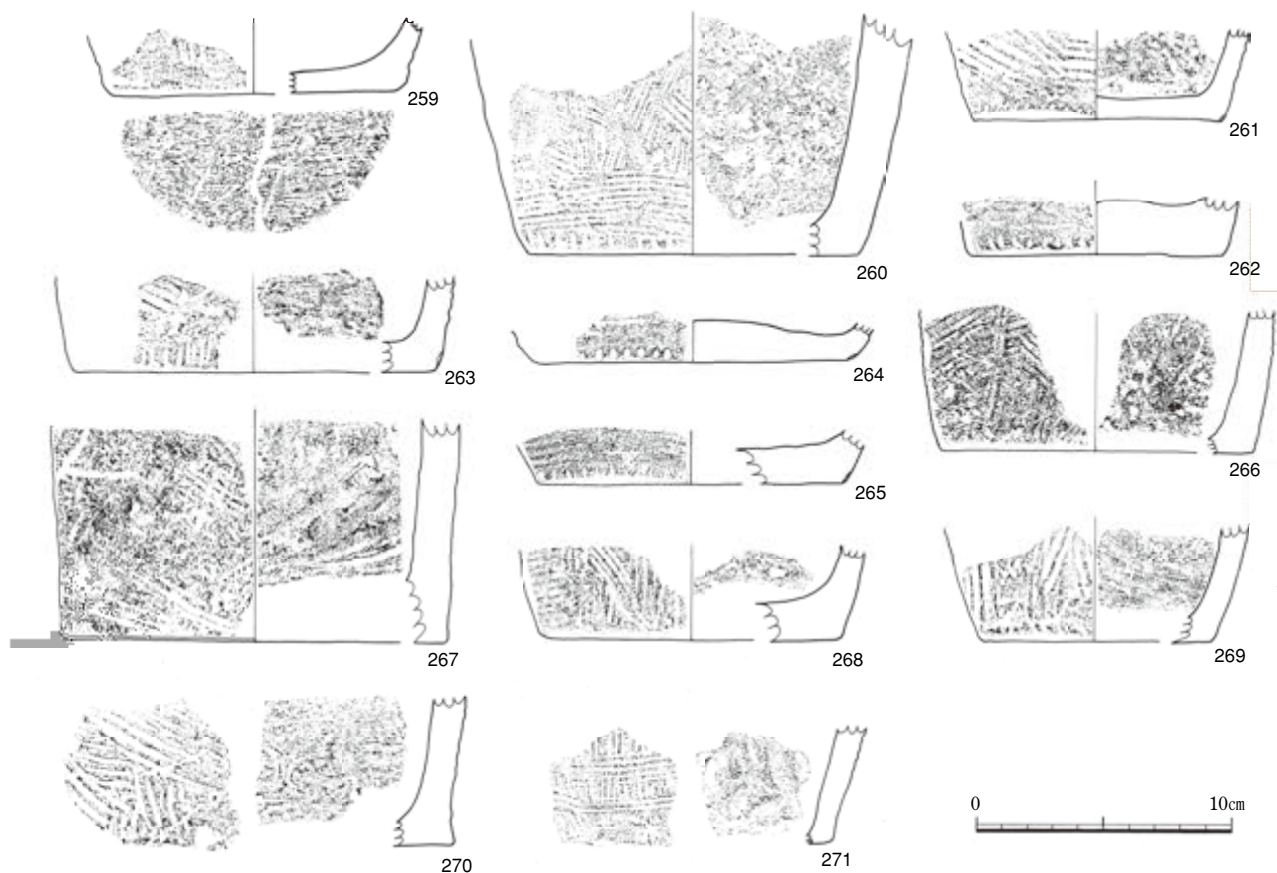
状口縁を呈し、口縁部直下に棒状の工具による連点文を1条施したあと、貝殻刺突文を羽状に施す。

279～282は斜位の貝殻刺突文を組み合わせた上から、横位の刺突文を施す。283～286は小型の貝殻を使用して刺突文を施すものである。287はヘラ状工具により綾杉状に文様を施したものである。290～298は羽状の貝殻刺突文を横方向に施したものである。290は復元口径18.6cmを測る。298は底部である。299はヘラ状工具により綾杉状の文様が施されるもので、Ⅵ類の範疇に入る可能性もある。

300～302は口縁部に瘤を有するものである。300は口縁部と瘤上に横位の貝殻刺突文を施し、胴部に



第37図 Ⅵ類土器 3



第38図 VI類土器 4

羽状の貝殻刺突文を縦方向位に施す。瘤は横形のもので、4か所もしくは5か所付くものと思われる。301・302は縦形の瘤を有し、301の瘤には縦位の貝殻刺突文が施されるが、302の瘤は無文である。303は貝殻を押引き状に刺突して羽状の文様を施したもので、波状口縁を呈する。

VII類土器（第42図 304）

VII類土器は1点であった。304は小型の鉢形土器で、ほぼ完形に復元できた。器壁は小型のわりに厚く、口唇部は平坦につくられる。外面には丁寧なナデ調整の上から斜位の短沈線が施される。

VIII類土器（第42図 305～311）

円筒形条痕文土器と呼ばれるものである。305～311はわずかに外反する口縁部で、端部は丸くつくられる。外面には横位の条痕文が施される。305・306の復元口径は、それぞれ28.6cm、20.8cmを測る。310は胴部である。口縁部に近い部位には、波状の条痕文が施される。311は310と同一個体と思われる

底部である。

IX類土器（第42図 312）

IX類土器は1点で、底部は欠損しているものの口縁部から胴部まで図上復元することができた。312は口縁部が外反し、胴部は中位でやや膨らむ器形を呈するもので、胴部には楕円押型文が施される。復元口径25.4cmを測る。

X類土器（第42図 313・314）

X類土器は2点掲載した。313は「ハ」の字状に開く口縁部である。外面には2条の貝殻刺突文で縦位の刺突文を施し、口唇部にも同じ工具を使い、刺突文を斜位に施す。314は頸部から胴部である。頸部の縊れ部には刺突文が、胴部には条痕文が施される。

XI類土器（第42図 315）

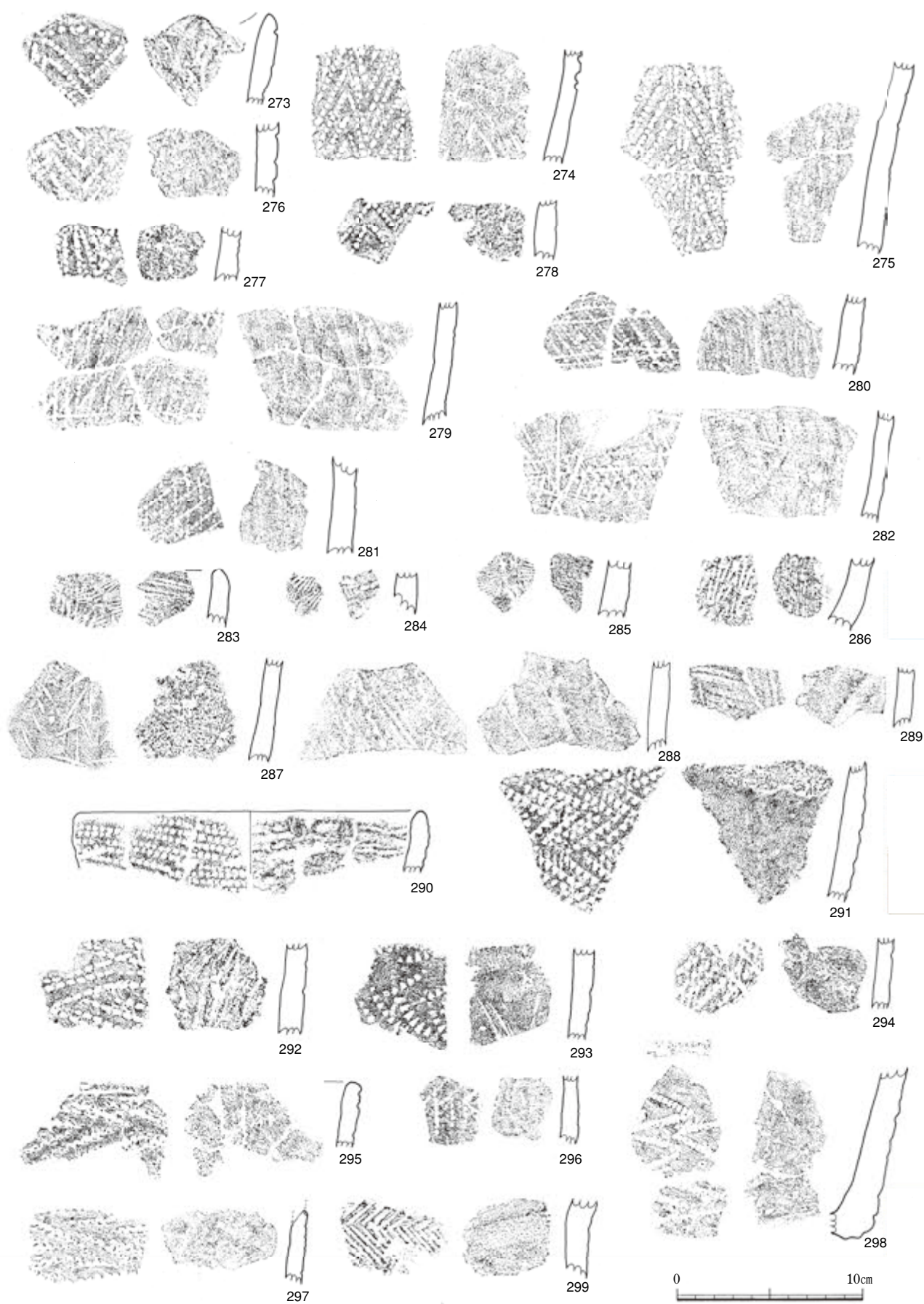
XI類土器は1点である。315は口縁部はわずかに開き、口唇部は平坦につくられる。外面には貝殻条痕文が横位又は斜位に施される。



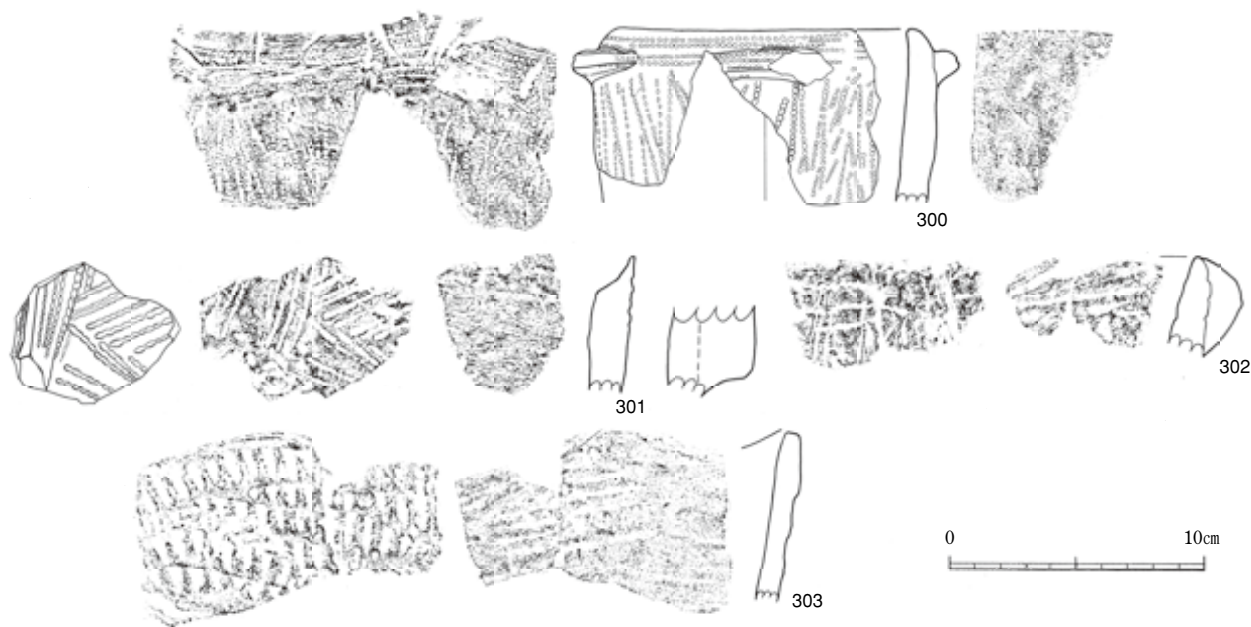
第39図 VII類土器 1

早期土器観察表 1

挿図 番号	報告 番号	出土区	層位	部位	色調		胎土				焼成	外 面	内 面	備 考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他				
第 27 図	89	L-18	Ⅳ	口縁部	明褐	灰黄褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	90	K-19	Ⅳ	胴部	褐	にぶい黄橙	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	91	K-20	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻押引文	ヘラケズリ	
	92	K-19	Ⅳ	胴部	赤褐	橙	○				良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	93	—	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	94	L-18,K-19	Ⅳ	胴部	灰黄褐	にぶい黄橙		○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	95	J-18	Ⅶ	胴部	にぶい褐	橙	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	96	K-20	Ⅳ	底部	明黄褐	黄灰	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	97	K-20	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻押引文	ヘラケズリ後ナデ	
	98	K-19	Ⅳ	口縁部	明赤褐	明赤褐	○	○			良	貝殻押引文	ヘラケズリ後ナデ	
	99	M-18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	貝殻刺突文・くさび形貼付文	ヘラケズリ	
	100	L・M-18,J-19	Ⅳ	胴部	褐	明褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻押引文	ヘラケズリ後ナデ	
	101	L-19	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			良	貝殻刺突文・くさび形貼付文	ヘラケズリ後ナデ	
	102	K-19	Ⅳ	胴部	暗灰黄	灰黄褐		○			良	貝殻押引文	ヘラケズリ後ナデ	
	103	K-19	Ⅴ	胴部	明赤褐	にぶい赤褐	○	○			良	貝殻押引文	ヘラケズリ後ナデ	
	104	K-19	Ⅳ	胴部	にぶい橙	にぶい橙	○	○			良	貝殻押引文	ヘラケズリ後ナデ	
第 28 図	105	K-19	Ⅳ	胴部	橙	橙	○	○			良	貝殻押引文	ヘラケズリ後ナデ	
	106	K-19	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	明褐	○	○			良	押型文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	107	J-19・20	Ⅳ	口縁部	褐	にぶい褐	○	○			良	貝殻刺突文・菱杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	108	J-19,L-18	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	にぶい橙	○	○			良	貝殻刺突文・菱杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	109	L-19	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	110	L-18	Ⅳ	口縁部	褐	灰黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	111	L-18	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	112	K-18	Ⅳ	口縁部	オリーブ褐	にぶい褐	○				良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	113	J-19	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	114	J-20	Ⅶ	口縁部	にぶい黄褐	褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	115	K-19	Ⅳ	口縁部	明褐	明褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	116	K-20	Ⅶ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	117	L-18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄	にぶい黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	118	L-18	Ⅳ	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	119	J-20	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	120	L-18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	121	J-20	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	明褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	



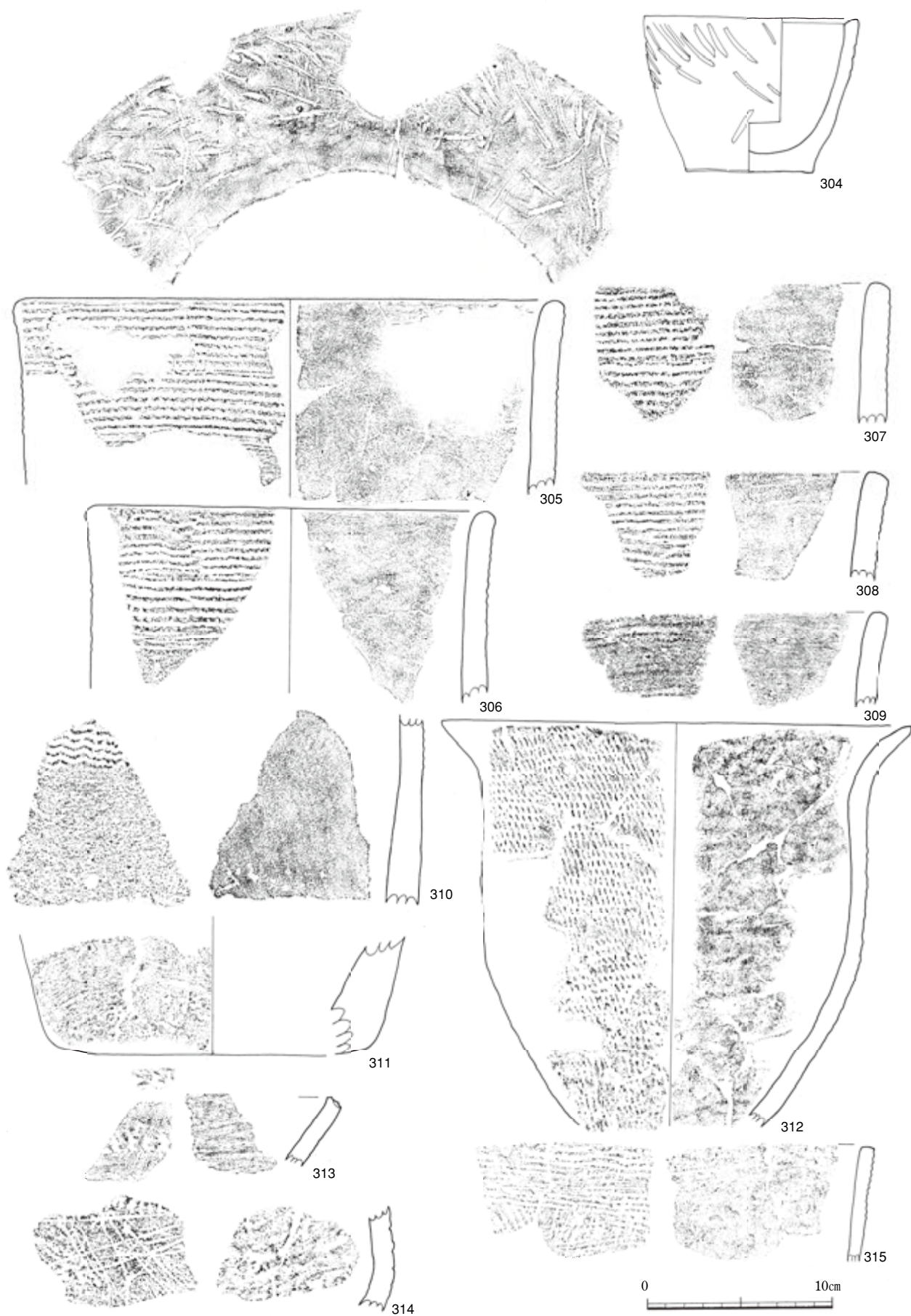
第40図 VII類土器 2



第41図 VII類土器 3

早期土器観察表 2

挿図 番号	報告 番号	出土区	層位	部位	色調		胎土				焼成	外 面	内 面	備 考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他				
第 29 図	122	L-18	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	123	L-18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○		○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	124	L-18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○		○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	125	L-18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	灰黄褐	○				良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラミガキ	
	126	J-20	Ⅳ	口縁部	褐	暗褐		○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラミガキ	補修孔あり
	127	K-20	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	128	L-18	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラミガキ	
	129	K-18	Ⅳ	口縁部	褐	灰黄褐	○				良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラミガキ	
	130	J-19	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	橙	○		○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	131	J-19	Ⅳ	口縁部	明赤褐	にぶい橙	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	132	J-17	Ⅳ	口縁部	明赤褐	にぶい黄褐	○		○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	133	K-18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	黄灰	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	134	J-20	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	135	K-18	Ⅳ	口縁部	赤褐	赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・菱形状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
第 30 図	136	J-20	Ⅳ	口縁部	にぶい黄	にぶい褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・菱形状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	137	L-18	Ⅳ	口縁部	赤褐	にぶい褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	138	L-18	Ⅳ	口縁部	明褐	褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	139	K-18	Ⅳ	口縁部	橙	にぶい褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	140	L-18	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	にぶい黄褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	スス
	141	J-19	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	142	L-18	Ⅳ	口縁部	褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	143	J-20	Ⅳ	口縁部	明赤褐	明赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	144	J-20	Ⅳ	口縁部	明褐	明赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	145	L-18	Ⅳ	口縁部	明褐	明赤褐	○		○		良	貝殻刺突文・刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	146	L-18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄	浅黄	○				良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	147	L-18	Ⅳ	口縁部	橙	明黄褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	148	K-18	Ⅳ	口縁部	明褐	明赤褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	149	K-18	Ⅳ	口縁部	黒褐	黒褐	○	○			良	貝殻刺突文・刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
第 30 図	150	J-20	Ⅳ	口縁部	赤褐	灰褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	151	K-18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○		○		良	貝殻刺突文・菱形状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	152	—	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	橙	○				良	貝殻刺突文・菱形状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	153	L-18	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○				良	貝殻刺突文・刺突文・菱形状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	154	K-18	Ⅳ	口縁部	明褐	明褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	155	J-19	Ⅳ	口縁部	褐	褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	156	L-18	Ⅳ	口縁部	橙	にぶい黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	157	L-18	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・菱形状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	158	K-18	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	明褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	159	J-20	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	160	L-18	Ⅳ	口縁部	灰黄褐	暗灰黄	○	○	○		良	貝殻刺突文・刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	161	L-18	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	162	M-18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・刺突文	ヘラケズリ後ナデ	



第42図 VIII・IX・X・XI・XII類土器

早期土器観察表 3

挿図 番号	報告 番号	出土区	層位	部位	色調		胎土				焼成	外 面	内 面	備 考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他				
第 31 図	163	J-20	Ⅳ	口縁部	明赤褐	明赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	164	K-18	Ⅳ	口縁部	赤褐	明赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	165	K-18	Ⅳ	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○			良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	166	L-18	Ⅳ	口縁部	明赤褐	橙	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	167	J-20	Ⅳ	口縁部	明赤褐	明赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	168	J-20	Ⅳ	口縁部	橙	にぶい赤褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	169	L-18	Ⅳ	口縁部	黄褐	明黄褐	○	○			良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	170	L-18	Ⅳ	口縁部	明赤褐	にぶい赤褐	○	○			良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	171	K-19	Ⅷ	口縁部	褐	赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	172	K-18	Ⅳ	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○			良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	173	L-18	Ⅴ	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	174	L-18	Ⅳ	口縁部	明黄褐	明黄褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	175	L-18	Ⅲ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	176	L-18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	177	L-18	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	橙	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
第 32 図	178	K-18	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	179	L-18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	橙	○	○	○		良	刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	180	L-18	Ⅳ	口縁部	黒褐	明褐	○	○			良	刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	181	L-18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	明褐	○	○	○		良	刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	182	—	Ⅳ	底部	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	183	K-18	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	橙	○	○	○		良	刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	184	K-18	Ⅴ	口縁部	黄褐	にぶい黄橙	○	○			良	刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	185	L-18	Ⅳ	口縁部	暗灰黄	にぶい赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	186	L-18	Ⅳ	胴部	橙	浅黄	○				良	刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	187	K-19	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○			良	刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	188	L-18	Ⅳ	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	○	○			良	刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	189	K-18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	明褐	○	○	○		良	刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	190	K-18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	191	L-18	Ⅳ	胴部	にぶい黄	にぶい黄	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	192	K-18	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○			良	刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	193	K-18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	194	L-18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○			良	刺突文・格子状条痕文	ヘラケズリ	
	195	L-18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	灰黄褐	○	○			良	貝殻刺突文・格子状条痕文	ヘラケズリ	
	196	L-18	Ⅳ	胴部	にぶい褐	橙	○	○			良	刺突文・格子状条痕文	ナデ	
	197	L-18	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	橙	○	○			良	縦・横条痕文	ヘラケズリ	
第 33 図	198	L-18	Ⅳ	底部	にぶい黄橙	暗灰黄	○	○			良	格子状条痕文	ヘラケズリ	
	199	L-18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○	○			良	貝殻刺突文・格子状条痕文	?	
	200	K-19	Ⅳ	胴部	にぶい黄	にぶい黄橙	○	○			良	貝殻刺突文・横条痕文	ヘラケズリ	
	201	J-19	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	明黄褐	○	○	○		良	貝殻押引文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	補修孔
	202	K-18	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	
	203	—		口縁部	橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	204	K-18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	明黄褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	205	L-18	Ⅳ	胴部	にぶい橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	206	L-18	Ⅳ	口縁部	橙	にぶい黄橙	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	207	J-18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	208	L-18	Ⅳ	口縁部	黒褐	橙	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	209	—	Ⅳ	口縁部	灰黄褐	黄褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
第 34 図	210	K-19	Ⅴ	口縁部	にぶい赤褐	明赤褐	○				良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	211	J-20	Ⅳ	口縁部	灰黄褐	明褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	212	K・L-18	Ⅳ・Ⅴ	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	○	○			良	刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	213	L-18	Ⅳ	口縁部	黒褐	橙	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	214	K・L-18	Ⅳ	口縁部	暗褐	灰黄褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	215	M-18	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	216	K-18	Ⅴ	口縁部	黒褐	オリブ褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	217	K-20	Ⅳ	口縁部	橙	赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	218	M-18	Ⅳ	口縁部	明赤褐	明赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	ス
	219	—	Ⅳ	口縁部	橙	明黄褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	220	L-18	Ⅳ	口縁部	橙	にぶい黄褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	221	K-18	Ⅳ	口縁部	黒褐	にぶい橙	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	222	—	Ⅷ	口縁部	にぶい黄	明黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	223	L-18	Ⅳ	口縁部	明黄褐	橙	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	224	K-18	Ⅳ	胴部	橙	橙	○	○			良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	225	L-18	Ⅳ	胴部	橙	橙	○	○			良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
第 35 図	226	J-18	Ⅳ	胴部	明赤褐	明黄褐	○	○	○		良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	227	J-18	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	明黄褐	○	○			良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	228	K-18	Ⅳ	胴部	にぶい褐	明赤褐	○	○			良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	229	K-19	Ⅳ	胴部	黄褐	明黄褐	○	○			良	斜格子貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	230	J-20	Ⅳ	胴部	にぶい褐	にぶい褐	○	○			良	ヘラ刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	231	K-19	Ⅳ	胴部	褐	明褐	○	○			良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	232	K-20	Ⅳ	胴部	橙	橙	○	○	○		良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	233	J-20	Ⅳ	胴部	明黄褐	橙	○	○	○		良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	234	L-18	Ⅳ	胴部	明褐	橙	○	○			良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	235	J-20	Ⅳ	胴部	橙	明褐	○	○			良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ	
第 36 図	236	L-18	Ⅳ	胴部	橙	橙	○	○			良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	237	M・L-18	Ⅳ	胴部	暗灰黄	明黄褐	○	○			良	斜格子貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	238	J-20	Ⅳ	胴部	明黄褐	橙	○	○	○		良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	239	K-18	Ⅳ	胴部	橙	橙	○	○	○		良	斜格子貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	240	K-19	Ⅳ	胴部	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○		良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	241	K-18	Ⅲ	胴部	橙	橙	○	○			良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	242	L-18	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	橙	○	○			良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	243	L-18	Ⅳ	胴部	明褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	斜格子貝殻条痕文・貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	

早期土器観察表 4

挿図 番号	報告 番号	出土区	層位	部位	色調		胎土				焼成	外 面	内 面	備 考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他				
第36図	244	K-19	Ⅳ	胴部	暗灰黄	灰オリーブ	○	○	○		良	斜格子貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	スス
	245	L-18	Ⅳ	胴部	浅黄	にぶい黄橙	○	○	○		良	斜格子貝殻条痕文・貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	246	L-18	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	明赤褐	○	○			良	斜格子貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	247	J-18	Ⅳ	胴部	黒褐	橙	○		○		良	斜格子貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	248	K-19	Ⅳ	胴部	黄褐	明褐	○	○			良	斜格子貝殻条痕文	ヘラケズリ	
第37図	249	K-18	Ⅳ	胴部	褐	褐	○	○			良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	250	J-20	Ⅳ	胴部	にぶい橙	橙	○	○	○		良	斜格子貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	251	K-18	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	252	K-18	Ⅳ	胴部	にぶい褐	にぶい褐	○	○			良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	253	K-19	Ⅳ	胴部	明黄褐	明黄褐	○	○	○		良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	254	L-18	Ⅳ	胴部	明黄褐	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	条痕・ヘラケズリ後ナデ	
	255	J-18	Ⅳ	胴部	黄褐	明褐	○	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	256	L-18	Ⅳ	胴部	黒褐	赤褐	○	○			良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	257	J-19	Ⅳ	胴部	にぶい褐	明褐	○	○	○		良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	258	K-19	Ⅳ	胴部	にぶい橙	橙	○	○			良	条痕文	ヘラケズリ	
第38図	259	K-19	Ⅷ	底部	橙	橙	○				良	条痕文・指圧痕	ヘラケズリ後ナデ	
	260	L-18	Ⅳ	底部	にぶい黄橙	明黄褐	○	○	○		良	斜格子貝殻条痕文・刻目	ヘラケズリ	
	261	J-20	Ⅳ	底部	橙	にぶい赤褐	○	○	○		良	綾杉状貝殻条痕文・刻目	ヘラケズリ	
	262	J-20	Ⅳ	底部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	刻目	ヘラケズリ後ナデ	
	263	J-20	Ⅳ	底部	橙	にぶい褐	○	○	○		良	貝殻条痕文・刻目	ヘラケズリ後ナデ	
	264	K-20	Ⅳ	底部	橙	橙	○	○	○		良	刻目	ヘラケズリ後ナデ	
	265	K-18	Ⅳ	底部	橙	橙	○	○	○		良	刻目	ヘラケズリ	
	266	K-18	Ⅳ	底部	明赤褐	灰黄褐	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	267	K・L-18	Ⅳ	底部	黄褐	黄褐	○	○			良	斜格子貝殻条痕文・刻目	ヘラケズリ	
	268	J-19	Ⅳ	底部	暗灰黄	にぶい褐	○	○			良	条痕文	ヘラケズリ	
	269	K-20	Ⅳ	底部	にぶい赤褐	橙	○	○			良	綾杉状貝殻条痕文・刻目	ヘラケズリ	
	270	J-18	Ⅷ	底部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	271	K-18	Ⅳ	底部	暗黄褐	暗黄褐	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
第39図	272	L-18	Ⅳ	胴部	褐灰	明褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	273	K-18	Ⅳ	口縁部	黄褐	にぶい黄橙	○	○			良	刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	274	L-18	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○					刺突文	ヘラケズリ	
	275	K・M-18	Ⅳ	胴部	暗黄褐	橙	○					刺突文	ヘラケズリ	
	276	—	Ⅳ	胴部	褐灰	にぶい橙		○				刺突文	ヘラケズリ	
	277	K-18	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○					刺突文	ヘラケズリ	
	278	K-18	Ⅳ	胴部	灰黄褐	にぶい橙	○					刺突文	ヘラケズリ	
	279	K-18	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐		○			良	貝殻刺突文・刺突文	ヘラケズリ	
	280	L-18	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	にぶい橙	○					貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	281	K-18	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○				貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	282	M-18	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○					貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	283	L-18	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	にぶい褐	○					貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	284	L-18	Ⅳ	胴部	灰褐	にぶい黄褐	○					貝殻押型文	ヘラケズリ後ナデ	
	285	L-18	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○					貝殻押型文	ヘラケズリ後ナデ	
第40図	286	K-18	Ⅳ	胴部	褐灰	にぶい黄橙	○					貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	287	L-18	Ⅳ	胴部	灰黄褐	にぶい黄褐	○	○				板状工具による刺突文	?	
	288	K-19	Ⅴ	胴部	にぶい橙	にぶい橙	○					貝殻刺突文	ナデ	
	289	K-18	Ⅳ	胴部	にぶい褐	にぶい褐	○					貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	290	K-18	Ⅳ	口縁部	明褐	にぶい黄橙	○		○			貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	291	K-18	Ⅳ	胴部	橙	橙	○	○				貝殻刺突文	ナデ?	
	292	—	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	橙	○		○			貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	293	L-18	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○				貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	294	J-19	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	橙	○					貝殻刺突文	ナデ	
	295	L-18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○					貝殻刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
	296	L-18	Ⅳ	胴部	褐灰	にぶい褐	○					貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	297	L-18	Ⅳ	胴部	灰黄褐	にぶい橙		○				貝殻刺突文	ナデ	
	298	M-18	Ⅳ	胴～底部	褐灰	褐灰	○	○				貝殻刺突文	ナデ	
	299	K-18	Ⅳ	胴部	にぶい褐	灰褐	○	○				羽状文	?	
第41図	300	L-18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい橙		○				貝殻刺突文	ヘラケズリ	瘤状突起
	301	L-18	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	にぶい橙		○				貝殻刺突文	ナデ	
	302	K-18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい褐		○				貝殻刺突文	ナデ	
	303	—	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	褐灰	○	○				貝殻押し引き文	ヘラケズリ後ナデ	
第42図	304	L-18	Ⅳ	完形	灰黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	沈線	ヘラケズリ後ナデ	
	305	K-18	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	にぶい黄橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	306	M-18	Ⅳ	口縁部	黄褐	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	307	L-18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄橙	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	308	J-18	Ⅳ	口縁部	黒褐	灰黄褐	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	309	J-18	Ⅳ	口縁部	浅黄	にぶい黄褐	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	310	K-20	Ⅳ・Ⅴ	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			波状文	ナデ	
	311	K-20	Ⅳ	底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		良	波状文	ナデ	
	312	L・K-18	Ⅳ	口縁～胴部	にぶい黄	にぶい黄橙	○	○			良	楕円型押型文	ヘラケズリ後ナデ	
	313	K-19	Ⅳ	口縁部	にぶい赤褐	赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	314	J-18	Ⅳ	胴部	明黄褐	浅黄	○	○	○		良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	
	315	L-18	Ⅳ	口縁部	にぶい黄	橙	○	○			良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	

(3) 遺物 (石器)

縄文時代早期の石器は、石鏃、石槍、石斧、礫器、磨石、石皿等が出土した。

石鏃 (第43図・44図)

石鏃は、遺跡の西側調査区の J-18~20区から16点、K-18~20区から13点、L-18区から2点、M-18区から3点その他1点の合計35点が出土している。

素材は黒曜石、安山岩、頁岩、チャート等である。その内、黒曜石は肉眼観察によると三船産に類似するものが3点、上牛鼻産に類似するものが2点、合計5点が出土している。

分類は、本報告書P21の農業開発総合センター遺跡群内の石鏃分類図によって分類した。Aab 7点、Abb 8点、Abc 3点、Aca 2点、Acb 4点、Acc 1点、Baa 1点、Caa 1点、Cba 1点、Ccb 1点、不明なものが4点である。石鏃は打製でほとんどが入念な交互剥離により調整されている。35点中22点が破損しており、先端部が破損しているものは5点、先端部と基端の両方破損しているのは7点、基端が破損しているのは10点で片方のみ欠損が5点、両方とも欠損しているのが5点である。

その内、珪質岩製の349は大久保型石鏃と考えられ、近隣の諏訪協遺跡でも出土している。

石槍 (第44図)

351はホルンフェルス素材とする。縦長剥片を素材にし、丁寧な両面剥離加工が施される。下部は欠損している。

スクレイパー・剥片 (第45図)

352~355はスクレイパーである。352の石材は頁岩で、両面に剥離を施される。353は横長剥片を使用し、下部に刃部を施している。354は自然面を多く残した横長剥片の下部を刃部としている。355は上部、下部、側縁に刃部を有している。356・357は剥片である。357は自然面を多く残した剥片で使用痕は認められない。石斧の一部である可能性もある。

磨製石斧 (第45図)

358~360は磨製石斧である。358は縦長剥片を利用したもので、刃部は丁寧に研磨している。359は、二次加工を施したものである。360は自然面を利用

し、刃部を丁寧に研磨加工している。

打製石斧 (第46図)

361~363は打製石斧である。361は敲打による整形痕が明瞭に観察され、刃部は剥離による上位の両側縁に挟りが見られる。362・363は有肩打製石斧で362は基部、363は刃部が欠損している。

礫器 (第46図)

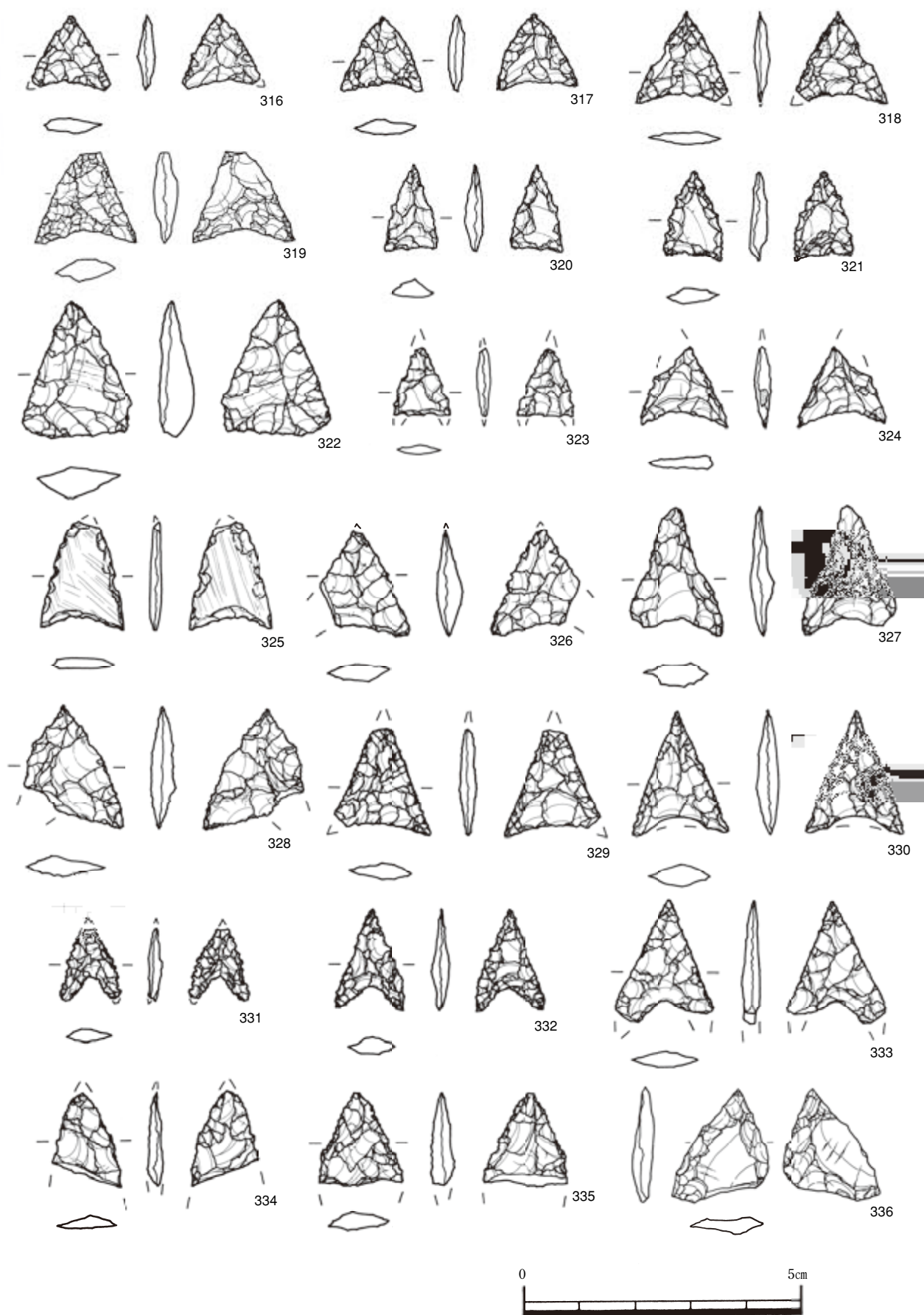
364~367は礫器である。364は自然面を多く残し、全体に剥離痕がある。365~367は自然面を多く残し、下部に刃部形成を行っている。

磨石・敲石・凹石 (第47図~55図)

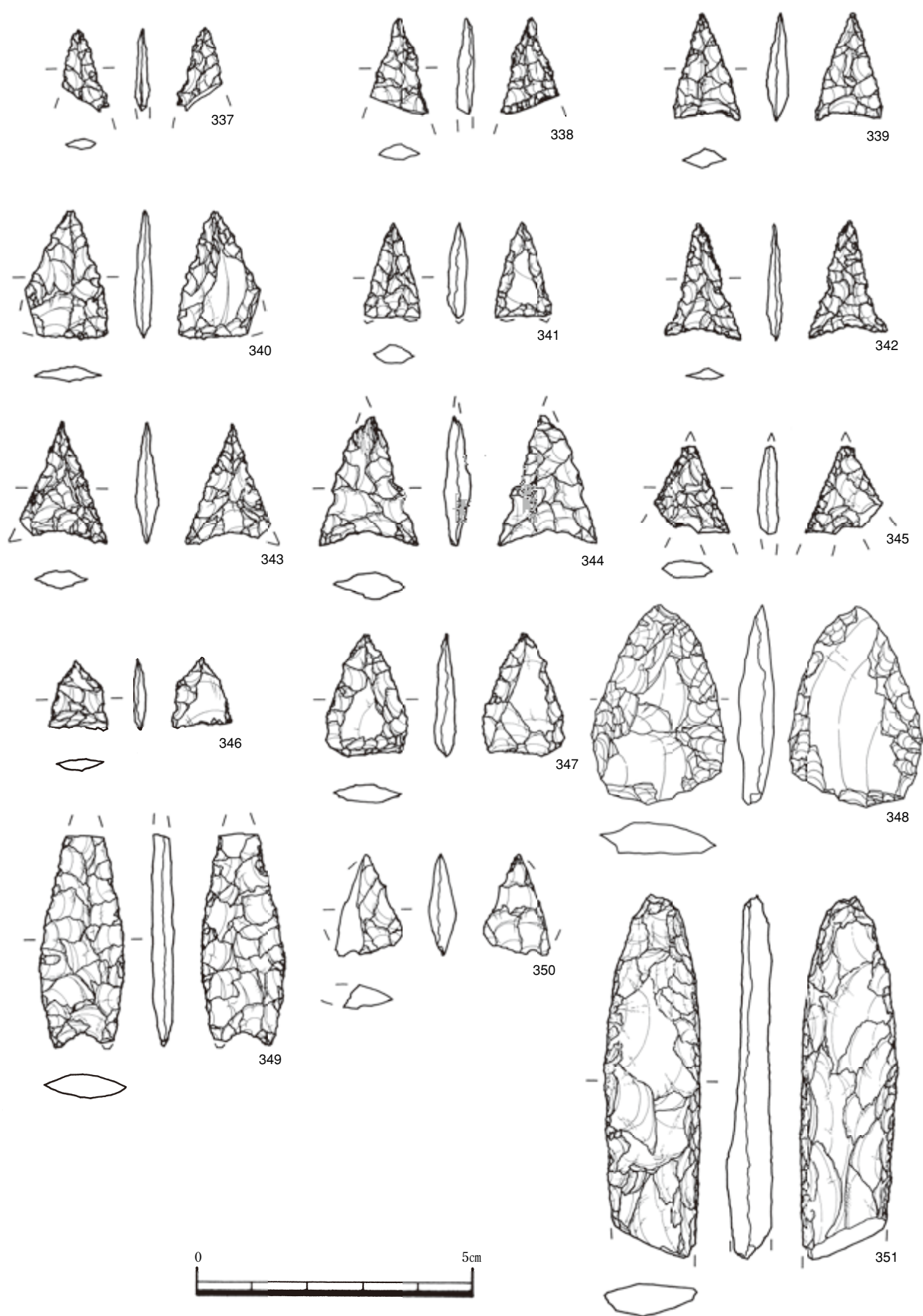
円礫を用いた磨石が多く、石材は砂岩が多い。368~371は片面のみに磨石の機能のあるもの。372~394は両面に磨石の機能のあるもの。395~398は両面と側縁部に磨石の機能のあるものである。399~422は磨石と敲石の機能を持つものである。399は片面に磨石と敲石の機能を持つもの。400~404は両面に磨石の機能を持ち、片面に敲石の機能を持つもの。405~422は両面と側面に磨石の機能を持ち、敲石の機能も持ったもの。423~434は磨石、敲石と凹石の機能を持つものである。

石皿 (第56図)

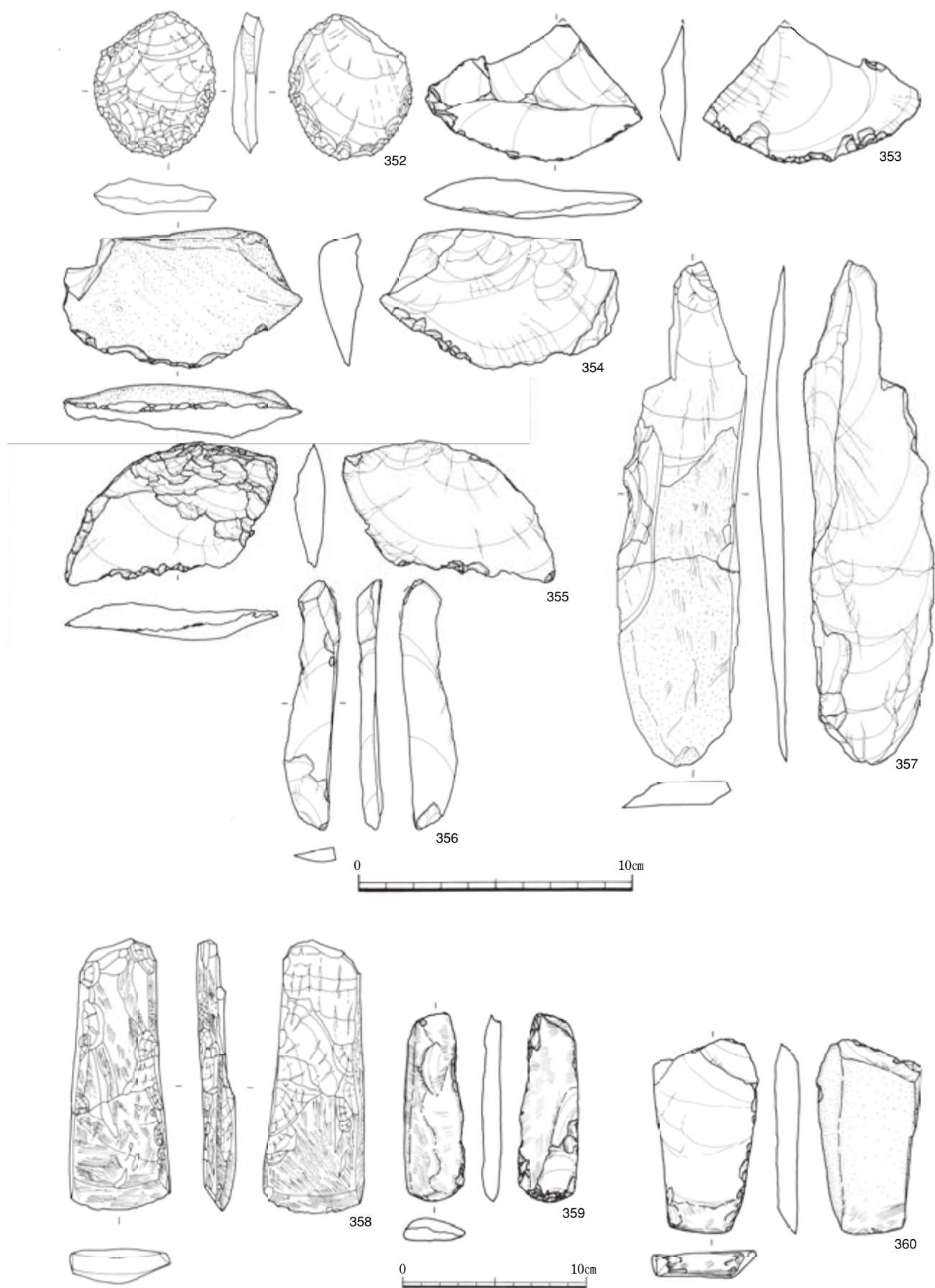
5点を図化した。石材は砂岩のことが多い。435・437は両面とも作業面があるものである。436・438・439は片面のみの作業面である。5点とも敲打痕などは見られなかった。



第43図 縄文時代早期石器 1



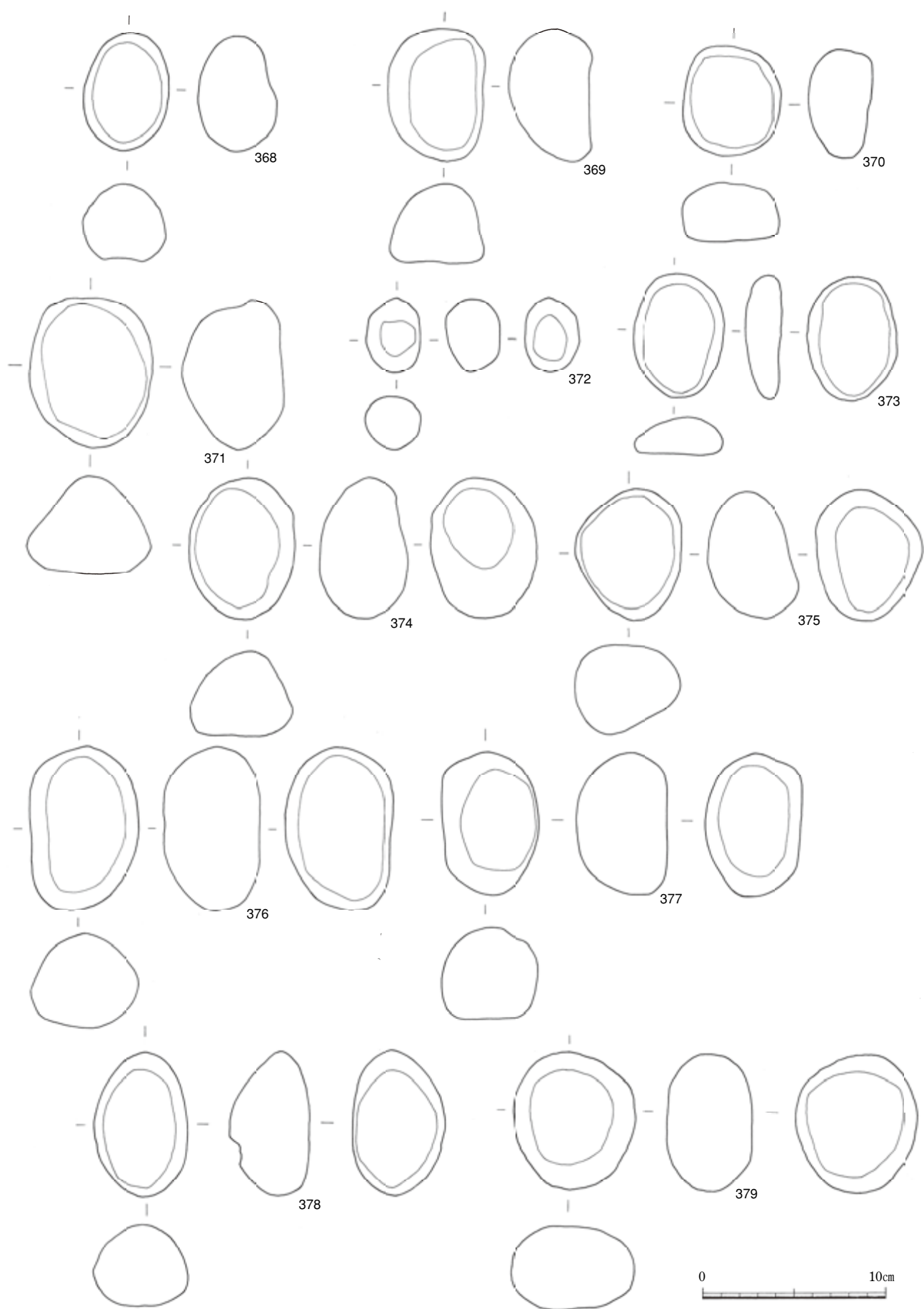
第44図 縄文時代早期石器 2



第45図 縄文時代早期石器 3



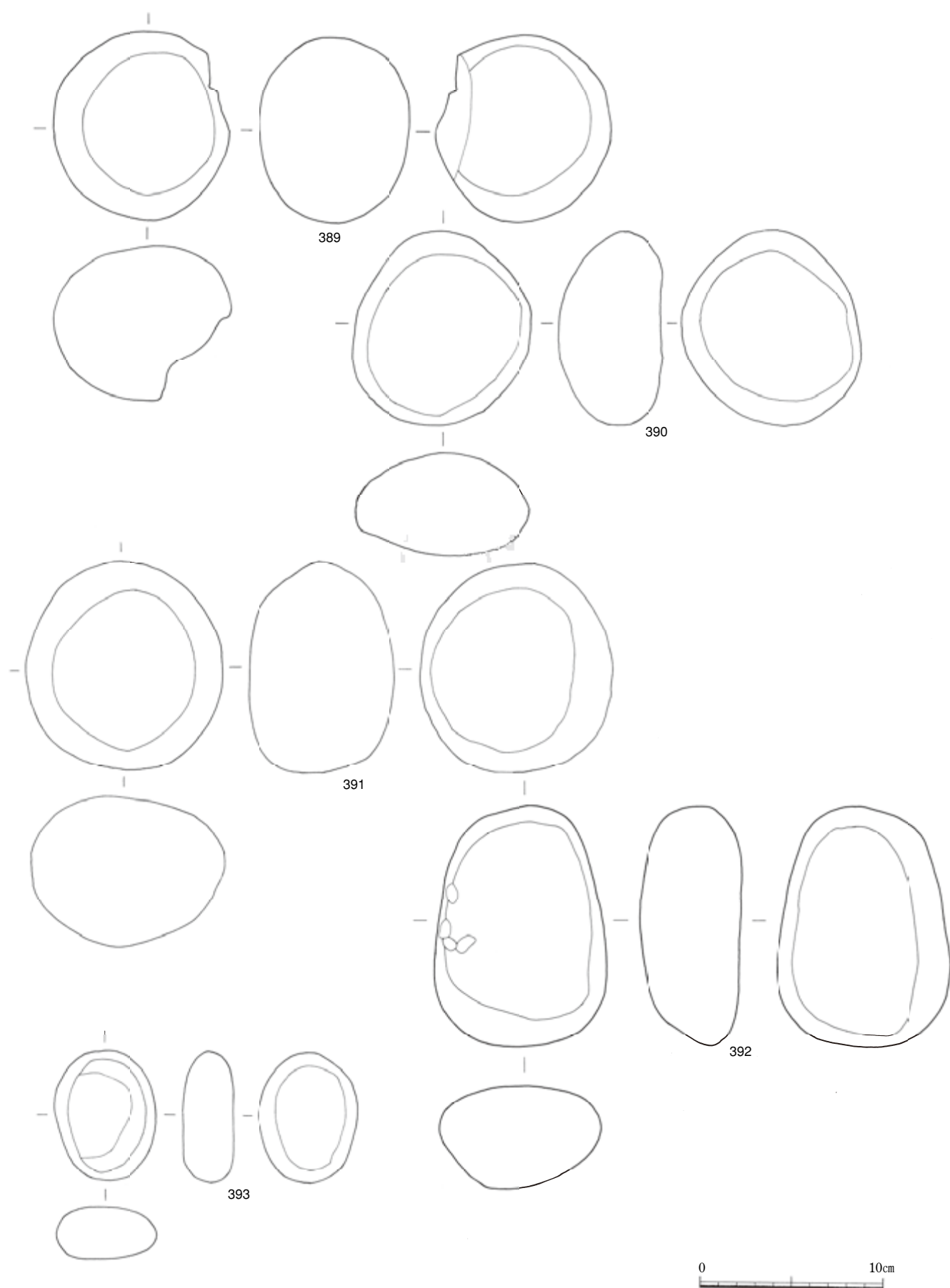
第46図 縄文時代早期石器 4



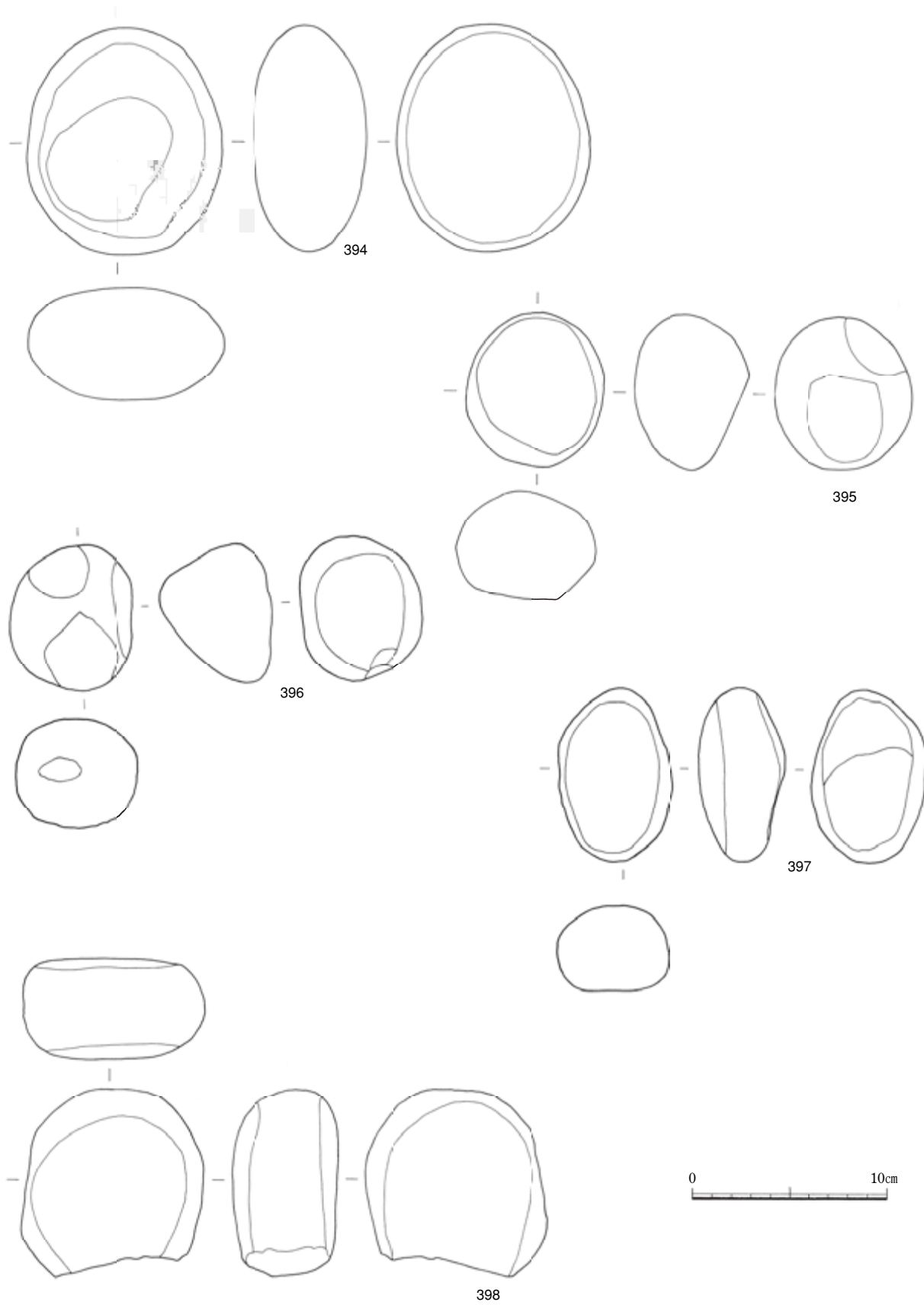
第47図 縄文時代早期石器 5



第48図 縄文時代早期石器 6



第49図 縄文時代早期石器 7



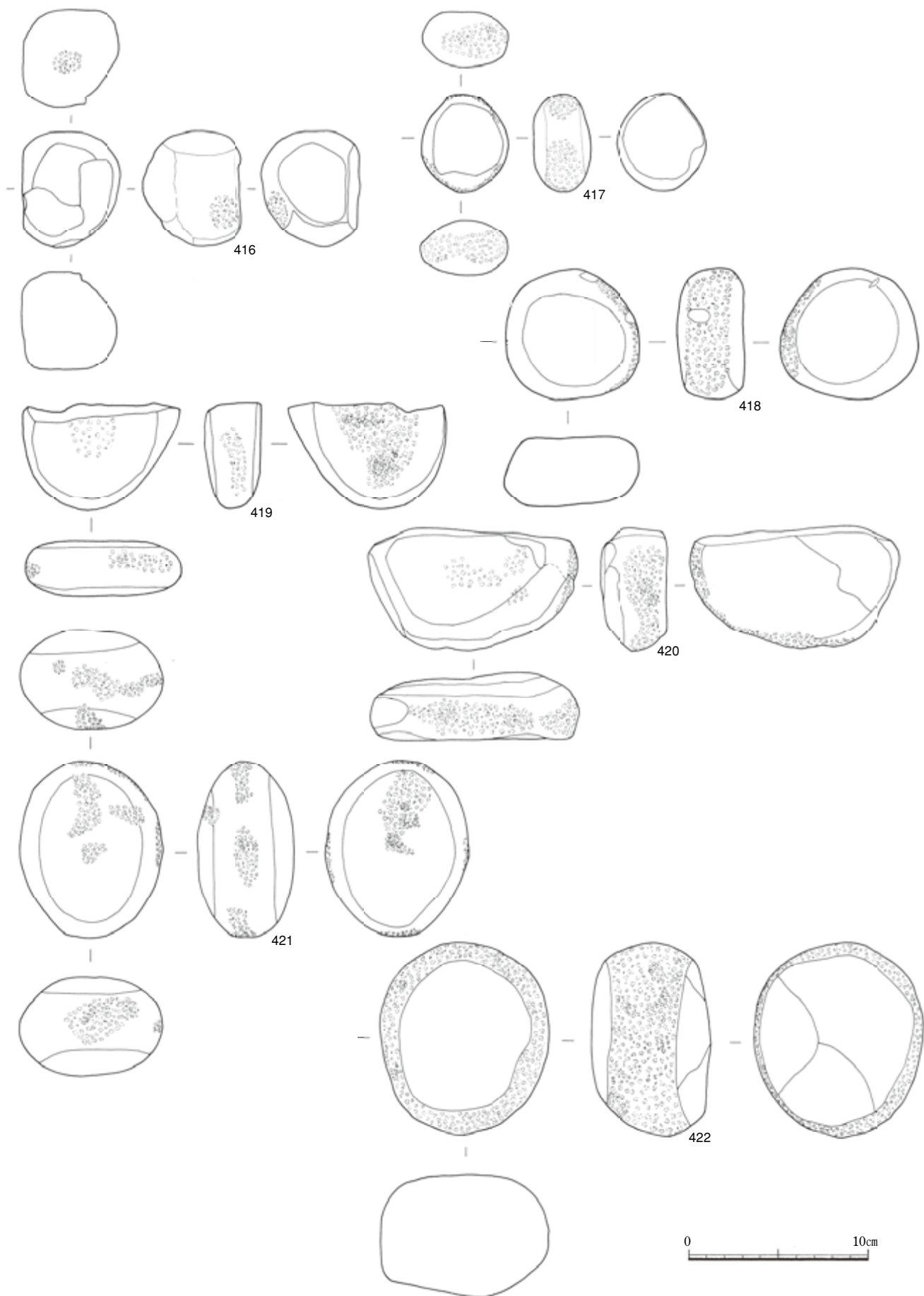
第50図 縄文時代早期石器 8



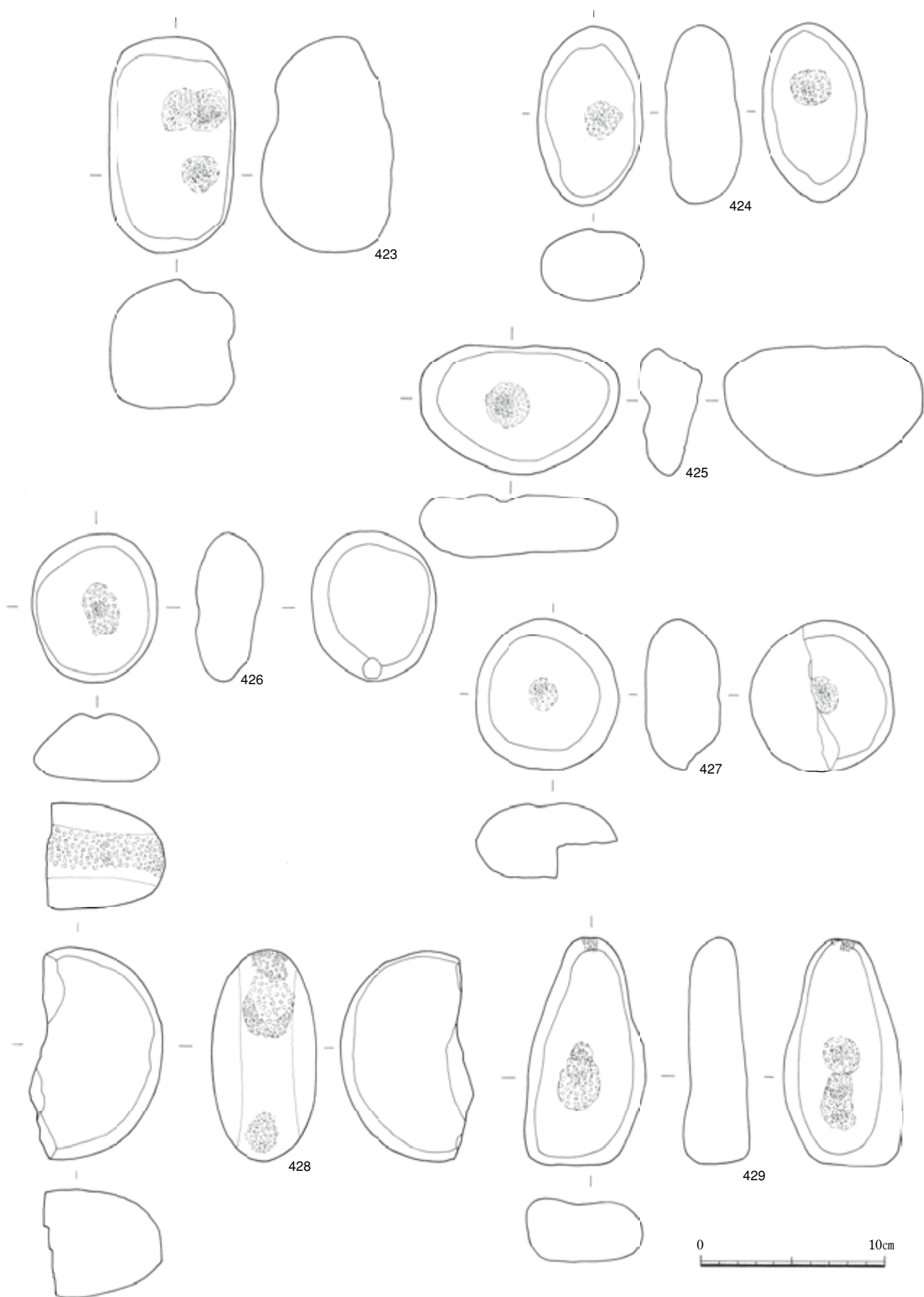
第51図 縄文時代早期石器 9



第52図 縄文時代早期石器10



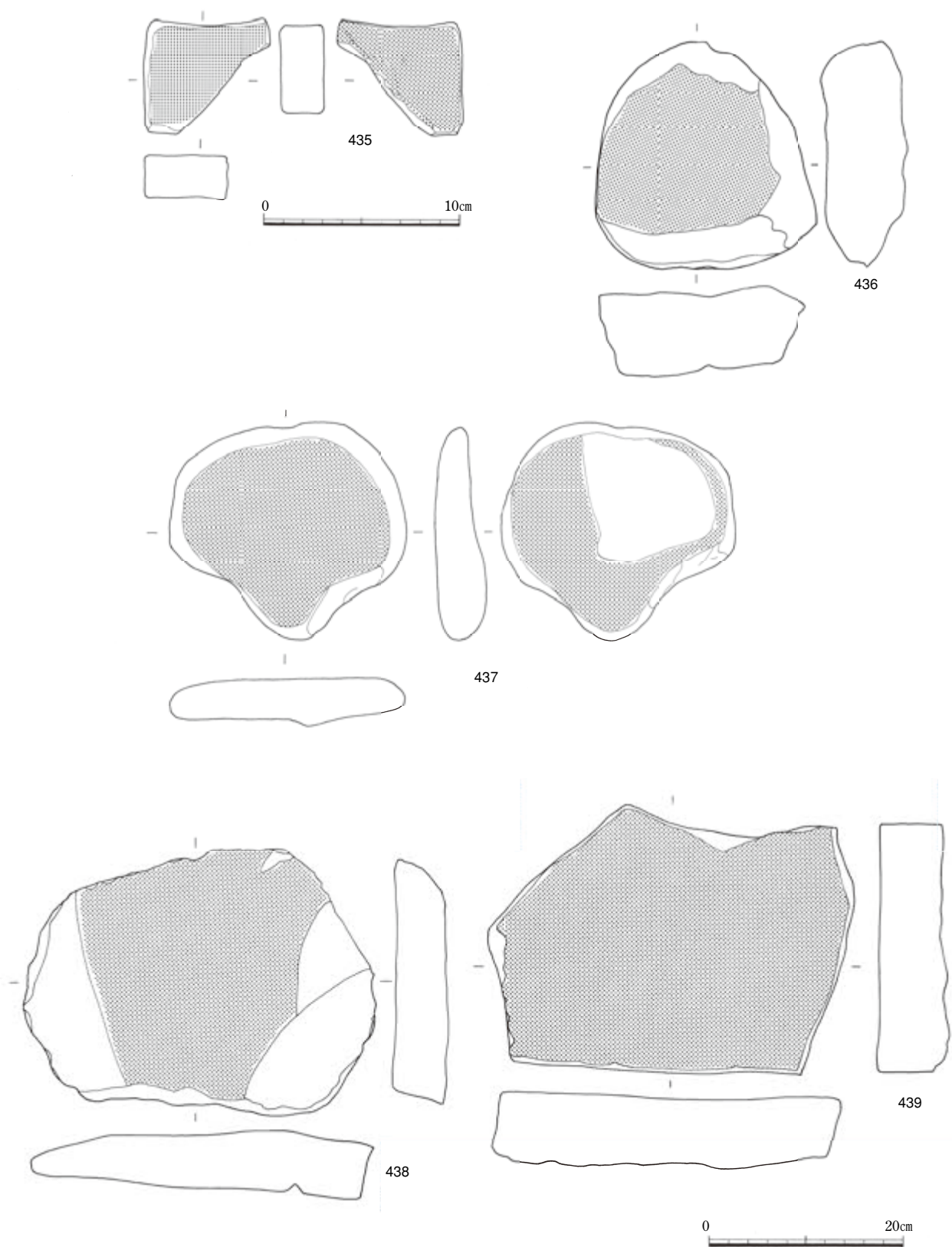
第53図 縄文時代早期石器11



第54図 縄文時代早期石器12



第55図 縄文時代早期石器13



第56図 縄文時代早期石器14

縄文時代早期石器観察表

挿図番号	番号	器種	出土区	層位	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
						cm	cm	cm	g	分類
第43図	316	石鏃	J-18	VIII	黒色安山岩	1.3	1.4	0.4	0.4	A-a-b
	317	石鏃	K-18	VIII	チャート	1.4	1.5	0.3	0.4	A-a-b
	318	石鏃	J-18	VIII	頁岩	1.7	1.7	0.3	0.5	A-a-b
	319	石鏃	J-18	VIII	頁岩	1.5	1.8	0.4	0.73	A-a-b
	320	石鏃	K-19	VIII	頁岩	1.6	1	0.3	0.4	A-a-b
	321	石鏃	K-18	IV	頁岩	1.6	1.1	0.3	0.6	A-a-b
	322	石鏃	J-18	VIII	シルト質頁岩	2.4	2	0.6	2.3	A-a-b
	323	石鏃	K-18	IV	黒色安山岩	(1.2)	1	0.3	0.3	A-b-b
	324	石鏃	J-18	IV	ホルンフェルス	(1.5)	1.3	0.3	0.5	A-b-b
	325	石鏃	K-20	IV	安山岩	(2)	1.5	0.2	0.7	A-b-b
	326	石鏃	J-18	VIII	黒色安山岩	(1.9)	1.6	0.5	1	A-b-b
	327	石鏃	J-18	IV	安山岩	2.3	1.7	0.4	1	A-b-b
	328	石鏃	J-18	VIII	安山岩	2.2	1.8	0.5	1.2	A-b-b
	329	石鏃	J-18	VIII	シルト質頁岩	(1.9)	1.7	0.3	0.7	A-b-b
	330	石鏃	K-18	VIII	シルト質頁岩	2.2	1.8	0.4	1	A-b-b
	331	石鏃	L-18	VIII	黒曜石(三船)	(1.3)	1.1	0.3	0.2	A-b-c
	332	石鏃	M-18	IV	黒曜石(上牛鼻)	1.8	1.3	0.3	0.4	A-b-c
	333	石鏃	K-18	IV	チャート	(2.2)	1.8	0.4	0.9	A-b-c
第44図	334	石鏃	J-20	IV	チャート	(1.7)	1.2	0.3	0.5	A-b-?
	335	石鏃	K-19	IV	チャート	(1.7)	1.5	0.4	0.8	A-b-?
	336	石鏃	J-18	VIII	頁岩	2.1	1.2	0.2	0.75	A-b-?
	337	石鏃	L-18	IV	頁岩	(1.5)	0.8	0.3	0.2	A-b-?
	338	石鏃	K-18	IV	チャート	(1.7)	1.1	0.3	0.5	A-b-?
	339	石鏃	K-19	VIII	黒色安山岩	1.9	1.2	0.4	0.6	A-c-a
	340	石鏃	J-18	VIII	シルト質頁岩	2.3	1.5	0.3	1	A-c-a
	341	石鏃	K-19	VIII	頁岩	(1.7)	1	0.4	0.6	A-c-b
	342	石鏃	K-20	IV	黒曜石(三船)	2.1	1.4	0.3	0.6	A-c-b
	343	石鏃	J-18	VIII	シルト質頁岩	2.2	1.6	0.4	0.8	A-c-b
	344	石鏃	—	IV	安山岩	(2.4)	1.8	0.5	1.4	A-c-b
	345	石鏃	M-18	IV	黒曜石(三船)	(1.6)	1.4	0.4	0.7	A-c-c
	346	石鏃	K-19	IV	黒曜石(上牛鼻)	1.3	1.1	0.2	0.3	B-a-a
	347	石鏃	J-18	VIII	安山岩	2.2	1.5	0.4	1.4	C-a-a
	348	石鏃	J-18	VIII	シルト質頁岩	3.6	2.4	0.6	5.31	C-b-a
	349	石鏃	M-18	IV	珪質岩	(3.8)	1.5	0.4	2.8	C-c-b
	350	石鏃	J-18	VIII	頁岩	1.9	(1.2)	0.5	0.7	?
	351	石槍	L-18	IV	ホルンフェルス	6.6	1.8	0.85	10.3	
第45図	352	スクレイパー	K-19	VIII	頁岩	5.3	4.4	1.3	29.02	
	353	スクレイパー	K-18	IV	ホルンフェルス	5.1	8	1.5	39.5	
	354	スクレイパー	K-18	IV	ホルンフェルス	5.2	8.75	1.95	77.5	
	355	スクレイパー	K-18	IV	ホルンフェルス	5.25	7.85	1.4	40.8	
	356	剥片	K-19	IV	頁岩	9.2	2.1	0.95	12.9	
	357	剥片	J-18	IV	頁岩	18.55	4.8	1.1	88.3	
	358	磨製石斧	J-19	VIII	頁岩	17.2	9.9	3.4	188.52	
	359	磨製石斧	K-18	IV	ホルンフェルス	10.46	3.35	1.25	58.9	
	360	磨製石斧	K-20	IV	安山岩	10.8	5.8	1.55	139.5	
第46図	361	打製石斧	K-18	IV	安山岩	15.2	5.15	2.75	343	
	362	打製石斧	J-19	VIII	ホルンフェルス	8.2	4.45	2	71.9	
	363	打製石斧	L-19	IV	頁岩	10.85	3.8	1.85	107.91	
	364	礫器	K-18	IV	頁岩	7.9	9.05	2.95	245	
	365	礫器	J-19	IV	ホルンフェルス	14.5	10.05	4.15	650	
	366	礫器	K-18	IV	頁岩	11.15	13.3	2.55	465	
	367	礫器	K-18	IV	ホルンフェルス	8.85	13	3.95	490	
第47図	368	磨石	J-18	IV	砂岩	6.4	4.7	4.3	160.2	
	369	磨石	K-19	VIII	砂岩	7.2	5.2	4.4	250.39	
	370	磨石	K-18	VIII	砂岩	5.9	5.3	3.3	165	
	371	磨石	J-18	VIII	砂岩	8.3	6.7	5.5	412	
	372	磨石	K-19	IV	砂岩	4.1	3.1	2.9	54.5	
	373	磨石	J-20	IV	砂岩	6.9	4.9	2	85.71	
	374	磨石	J-19	IV	砂岩	7.7	5.7	4.7	263.46	
	375	磨石	J-19	VIII	砂岩	7.2	5.7	5	253	
	376	磨石	J-18	VIII	砂岩	8.9	5.8	5.2	400	
	377	磨石	L-18	IV	砂岩	7.9	5	5.3	269.26	
	378	磨石	J-18	VIII	砂岩	8	5.1	4.4	199.63	
	379	磨石	K-18	IV	安山岩	7.6	6.8	4.7	316.04	

縄文時代早期石器観察表

挿図番号	番号	器種	出土区	層位	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考 分類
						cm	cm	cm	g	
第48図	380	磨石	K-19	Ⅳ	砂岩	8.6	6.2	4.3	319.54	
	381	磨石	J-18	Ⅷ	砂岩	7.2	6.3	4.7	282.37	
	382	磨石	K-18	Ⅷ	砂岩	6.1	6.1	3.7	190	
	383	磨石	J-18	Ⅷ	砂岩	10	6.6	4.3	395	
	384	磨石	L-18	Ⅳ	砂岩	8.1	9.1	3.1	355	
	385	磨石	L-18	Ⅳ	砂岩	11.3	5	4	320	
	386	磨石	—	Ⅳ	砂岩	10.6	5.1	3.2	278.49	
	387	磨石	L-18	Ⅳ	砂岩	9.3	2.9	2	75	
	388	磨石	J-17	Ⅳ	安山岩	12.8	10	5	1070	
第49図	389	磨石	J-18	Ⅷ	砂岩	10.2	9.6	8.3	1160	
	390	磨石	L-18	Ⅳ	安山岩	10.7	9.7	5.6	760	
	391	磨石	J-18	Ⅷ	砂岩	11.4	10.7	8.1	1300	
	392	磨石	J-18	Ⅷ	砂岩	13.2	9.5	5.7	1070	
	393	磨石	L-18	Ⅳ	砂岩	7.3	5.5	2.9	171.97	
第50図	394	磨石	K-18	Ⅳ	安山岩	11.6	10	5.7	990	
	395	磨石	K-18	Ⅷ	砂岩	8	7.1	5.3	369	
	396	磨石	J-18	Ⅷ	砂岩	7.5	6.2	5.6	317.47	
	397	磨石	J-18	Ⅷ	砂岩	9	5.7	4.4	276.31	
	398	磨石	K-18	Ⅳ	砂岩	(9.8)	9	5.2	665	
第51図	399	磨石・敲石	J-18	Ⅷ	砂岩	(8.9)	6.9	5	390	
	400	磨石・敲石	K-18	Ⅳ	砂岩	7.3	5.3	3.8	197.38	
	401	磨石・敲石	J-18	Ⅳ	砂岩	5	4.8	3.6	130	
	402	磨石・敲石	K-18	Ⅷ	砂岩	6.6	5.9	3.9	160	
	403	磨石・敲石	K-18	Ⅳ	頁岩	13.1	4.7	3.1	302.64	
	404	磨石・敲石	J-19	Ⅷ	砂岩	6.4	7	4.6	322.03	
	405	磨石・敲石	K-18	Ⅳ	砂岩	10.8	8.3	4.7	590	
	406	磨石・敲石	K-19	Ⅳ	安山岩	12.9	8.7	7.2	1130	
	407	磨石・敲石	J-18	Ⅷ	砂岩	6.7	4.5	2.8	112.57	
第52図	408	磨石・敲石	L-18	Ⅳ	砂岩	10	9.1	4	490	
	409	磨石・敲石	K-18	Ⅳ	砂岩	6.5	4.4	3.9	143.46	
	410	磨石・敲石	L-18	Ⅳ	砂岩	12.6	8.2	5.9	650	
	411	磨石・敲石	—	Ⅳ	砂岩	10.4	7	3.8	460	
	412	磨石・敲石	J-19	Ⅷ	砂岩	7.9	5.5	3.7	190.7	
	413	磨石・敲石	K-18	Ⅳ	砂岩	7.5	7.7	3.8	192.84	
	414	磨石・敲石	J-18	Ⅷ	砂岩	12.6	6.7	5	620	
	415	磨石・敲石	K-20	Ⅳ	砂岩	(8.9)	7.7	3.7	355	
第53図	416	磨石・敲石	K-19	Ⅷ	砂岩	6.4	(5.4)	5.4	256.81	
	417	磨石・敲石	K-19	Ⅷ	砂岩	5.4	4.8	3.1	110	
	418	磨石・敲石	J-20	Ⅳ	砂岩	7.3	7.5	3.6	316.37	
	419	磨石・敲石	J-20	Ⅳ	砂岩	(5.9)	8.7	3.1	205	
	420	磨石・敲石	J-19	Ⅳ	砂岩	6.7	11.6	3.7	420	
	421	磨石・敲石	J-18	Ⅳ	砂岩	9.7	8	5.3	550	
	422	磨石・敲石	J-19	Ⅷ	砂岩	10.7	9.2	6.6	990	
第54図	423	磨石・敲石・凹石	K-19	Ⅳ	砂岩	11.7	6.8	7	890	
	424	磨石・敲石・凹石	K-19	Ⅷ	砂岩	9.7	5.7	3.9	292.27	
	425	磨石・敲石・凹石	L-19	Ⅷ	砂岩	6.9	10.7	2.9	330	
	426	磨石・敲石・凹石	K-18	Ⅷ	砂岩	8.1	6.8	3.7	277.78	
	427	磨石・敲石・凹石	K-18	Ⅷ	砂岩	8.1	7.7	4	313.58	
	428	磨石・敲石・凹石	K-20	Ⅳ	安山岩	11.7	(6.9)	5.8	700	
	429	磨石・敲石・凹石	K-18	Ⅳ	砂岩	12.3	6.4	3.5	420	
第55図	430	磨石・敲石・凹石	L-19	Ⅳ	砂岩	11.3	8.8	4.2	615	
	431	磨石・敲石・凹石	K-18	Ⅳ	砂岩	(6.0)	5.9	3.8	155	
	432	磨石・敲石・凹石	K-19	Ⅳ	砂岩	10.9	6.6	3.9	430	
	433	磨石・敲石・凹石	L-18	Ⅳ	砂岩	11	4.2	3.8	282.08	
	434	磨石・敲石・凹石	J-19	Ⅳ	砂岩	15	6	4.4	505	
第56図	435	石皿	K-20	Ⅳ	砂岩	8.6	9.4	3.6	390	
	436	石皿	J-18	Ⅷ	安山岩	23.1	22.7	8.6	1170	
	437	石皿	K-18	Ⅳ	砂岩	22	24	5	3700	
	438	石皿	K-18	Ⅳ	砂岩	27.3	36	5.3	7800	
	439	石皿	J-17	Ⅳ	砂岩	27	36.6	7.4	5100	

2 縄文時代中期・後期

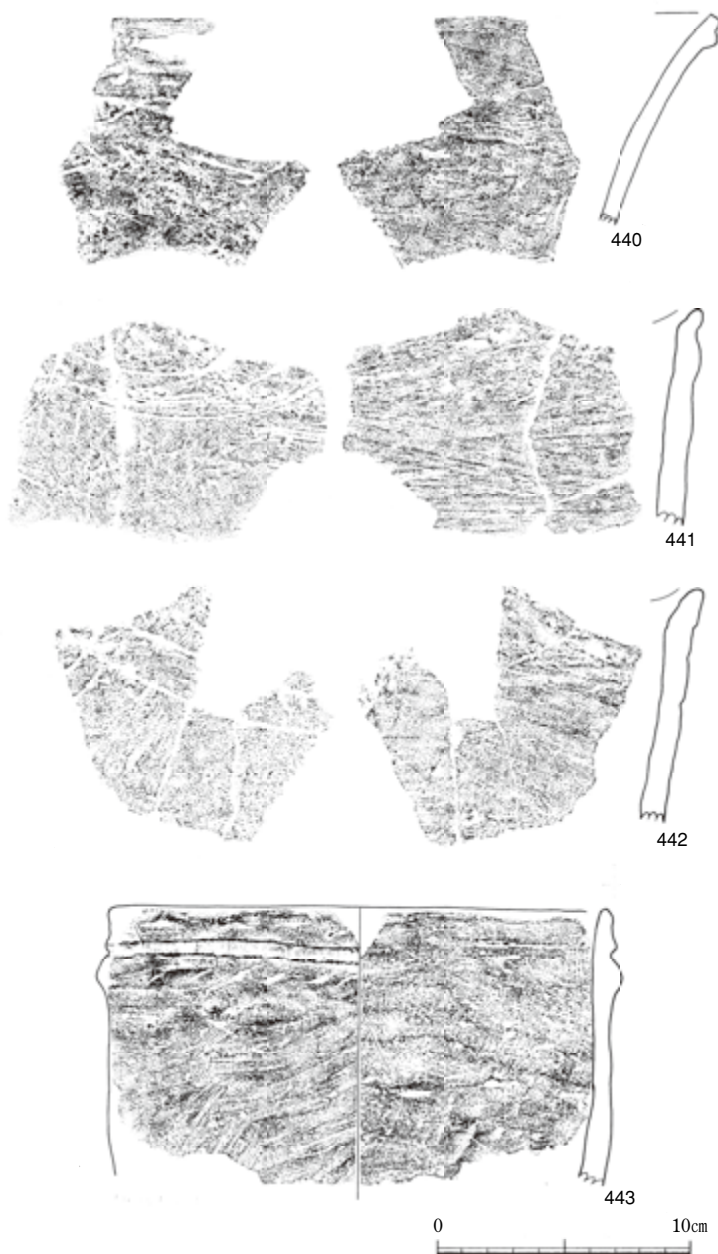
縄文時代中期・後期については、遺構は検出されず、遺物のみが出土した。遺物は土器で、点数も4点と少ない。

(1) 土器 (第57図 440～443)

Ⅲ類～Ⅴ類土器に分類した。

440はⅢ類土器に分類したものである。胎土に滑石を含み、口縁部は外側を肥厚させて突帯をつくる。

441・442は同一個体と思われるもので、Ⅳ類に分類した。口縁部は波状口縁を呈し、外面には沈線が施される。443はⅤ類土器に分類したものである。口縁部は外側に肥厚し、凹線が廻る。胴部は無文で、ナデ調整が施される。



3 縄文晩期

縄文時代晩期は、西側調査区から土坑が1基、東側調査区から柱穴列が6基検出された。遺物は土器と石器が出土したが、出土量は非常に少ない。

(1) 遺構

①土坑 (第58図～第62図)

西側調査区K-20区、Ⅳ層上面で検出された。平面プランはほぼ円形で直径約1mを測り、掘り込みは約15cm程度である。

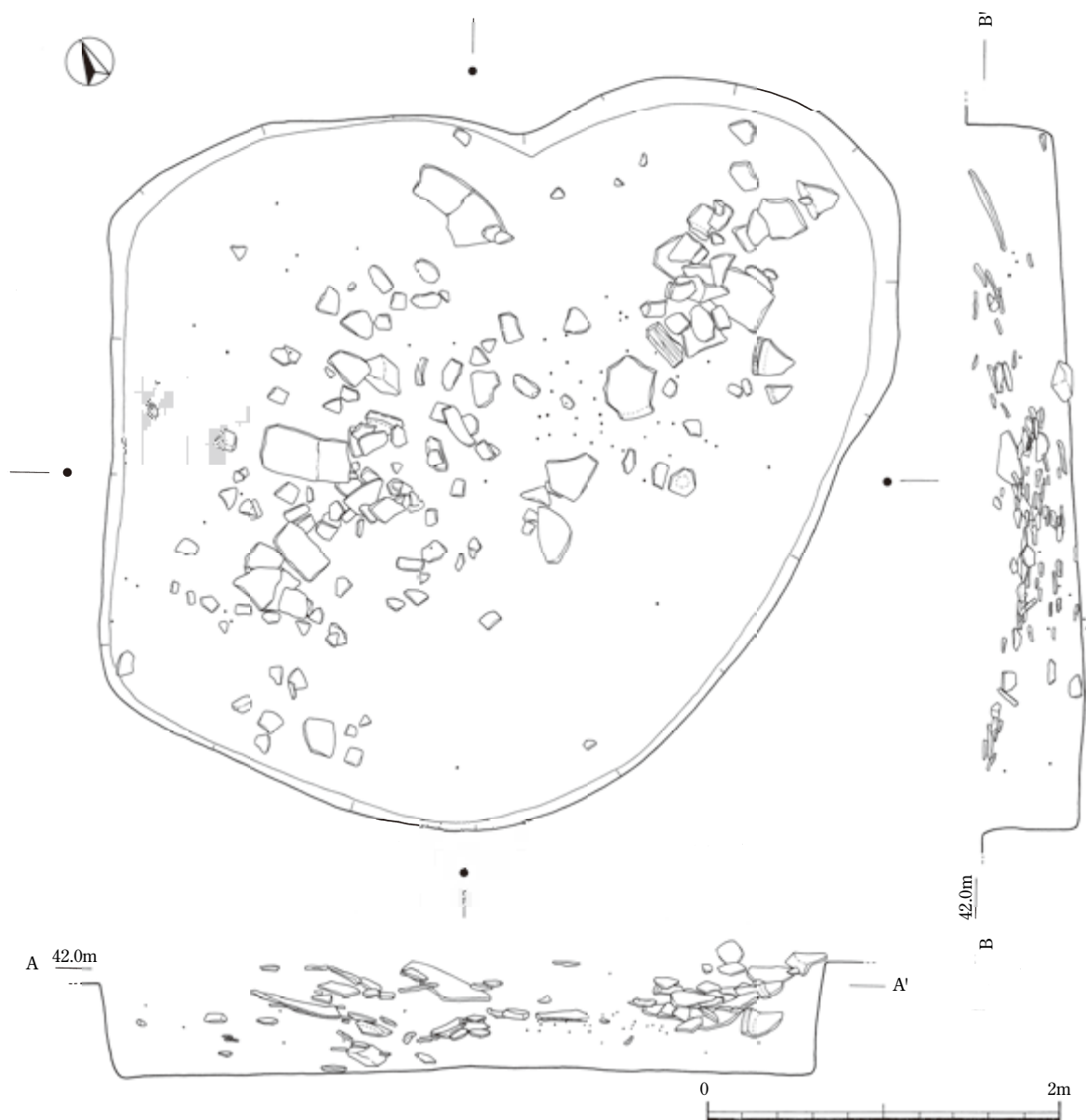
土坑内からはⅢ類に分類される土器片が多く出土し、そのうち3個体についてはほぼ完形に復元することができた。またその他に石器2点と管玉2点も出土した。444・445・447は、Ⅲ類土器に分類されるものである。そのうち444・445はほぼ完形に復元できた資料である。胴部最大径が器高を二分する位置にあり、口縁部とほぼ同じ大きさを呈する。444は深鉢形土器で、口縁部幅が狭くやや内側に内湾する。また凹線が先端の丸い工具を使用して3条廻る。底部はわずかに上げ底となる。器面調整は、内外面

第57図 Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類土器

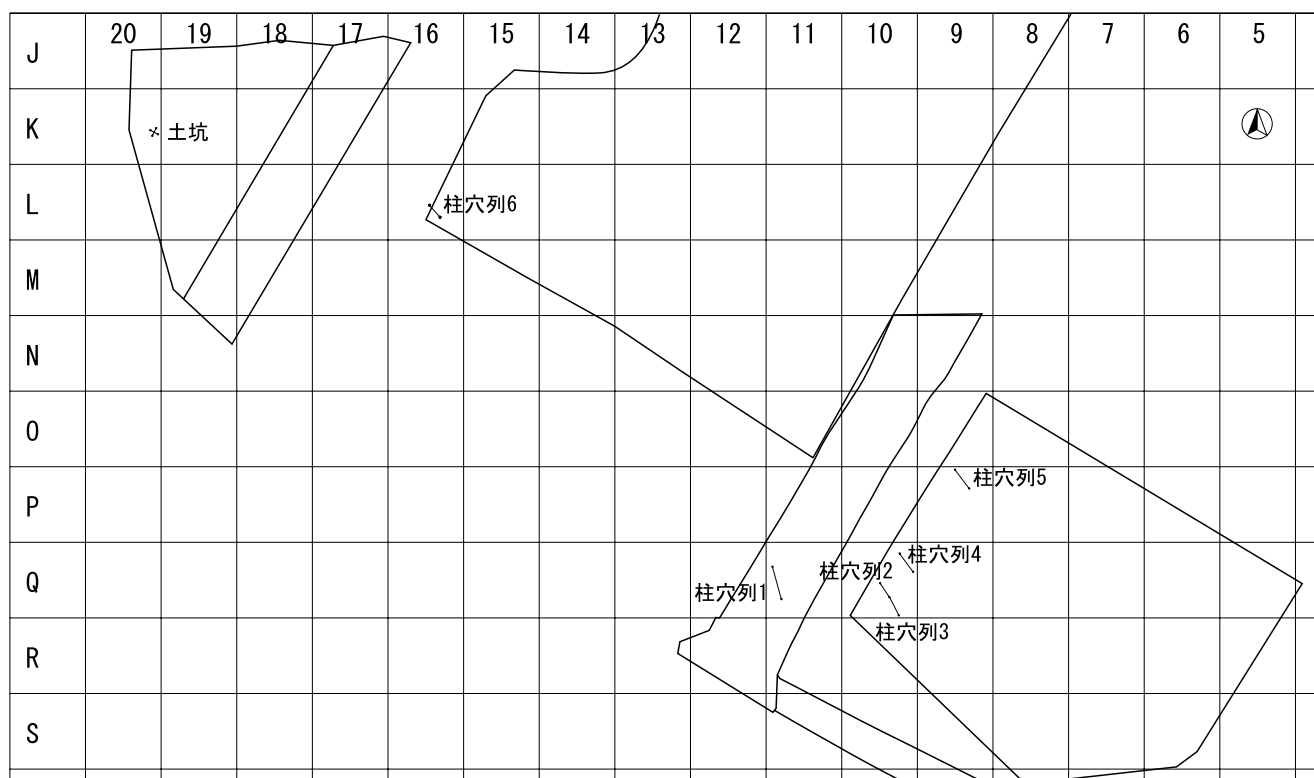
とも条痕を施した後ナデ調整を行っているが、一部条痕が残る部分も見られる。445は深鉢形土器と浅鉢形土器の中間的な形状のものである。胴部は最大径部分で「く」の字状に屈曲し、頸部で外反した後口縁部でもわずかに開く。口縁部幅は狭く、1条の凹線が廻る。また、ゆるやかな山状突起を4か所有し、凹点を施す。底部は高台風に作り出している。器面調整は内外面とも丁寧なミガキが施される。447は、445と同様の器形を呈する深鉢形土器の口縁部である。446はⅢ類土器に分類される深鉢形土器

の口縁部である。448は小型の深鉢形土器である。Ⅺ類土器に相当するものと思われる。底部から胴部下半に欠けて「ハ」の字状に開き、そこから上方へ延びる。口縁部はやや内傾し、斜位の沈線が格子状に施される。底部は平底で厚い。449はⅪ類土器に分類される深鉢形土器の胴部である。胴部最大径部で「く」の字状に屈曲し、わずかに湾曲しながら頸部へと延びる。450は、Ⅺ類に分類される鉢形の

土器である。内外面とも丁寧なナデ調整が施され、煤が付着する。451～454はⅪ類土器に分類される浅鉢形土器である。肩部と頸部の間が短く、頸部で「く」の字状に外側へ屈曲し、短い口縁部をもつ。肩部の屈曲もシャープなため、稜が明瞭である。内外面ともミガキ調整が施される。455はⅪもしくはⅫ類に相当すると思われる深鉢形土器の底部である。456は頁岩製の磨製石斧の刃部である。457は黒



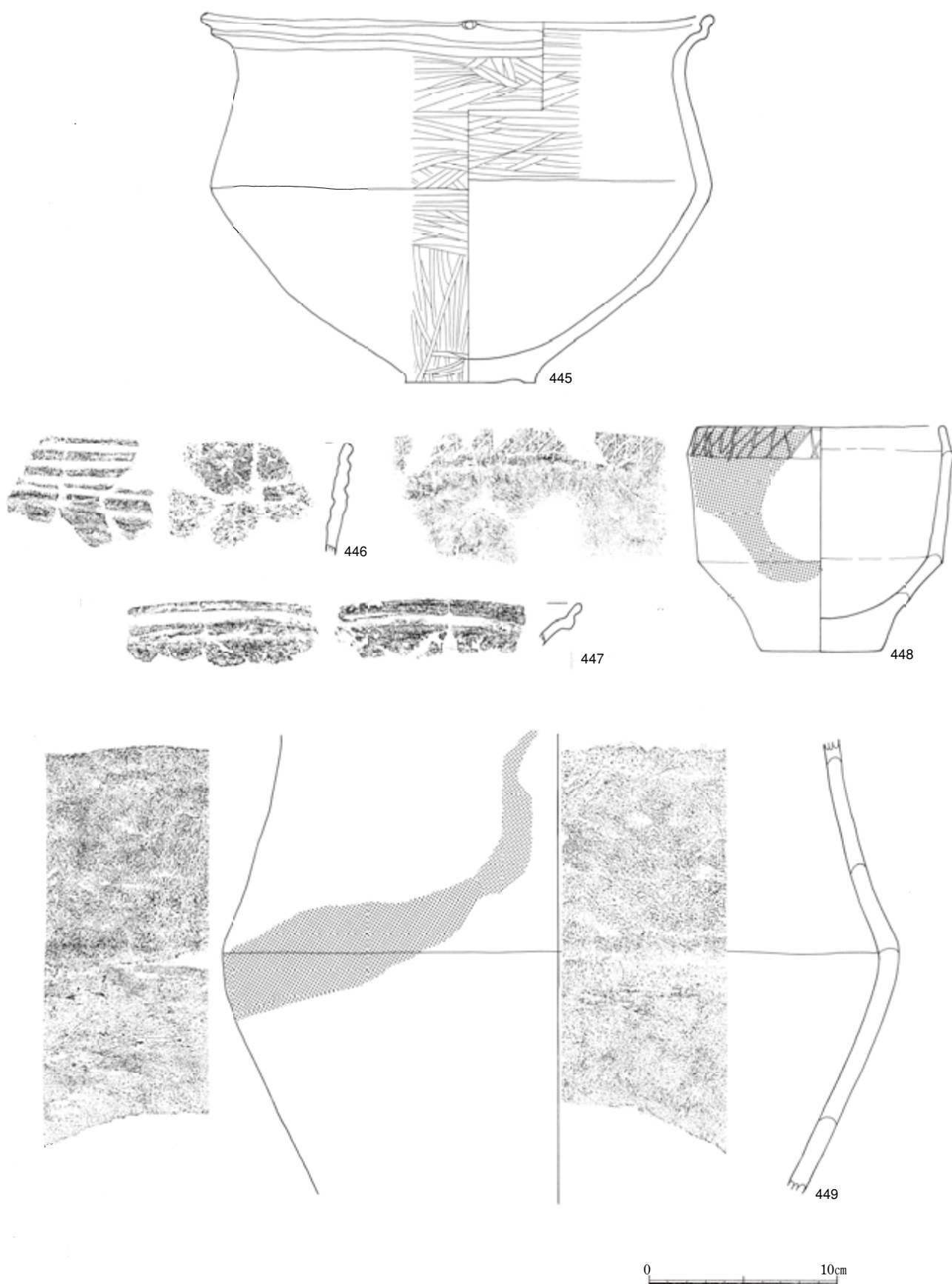
第58図 土抗



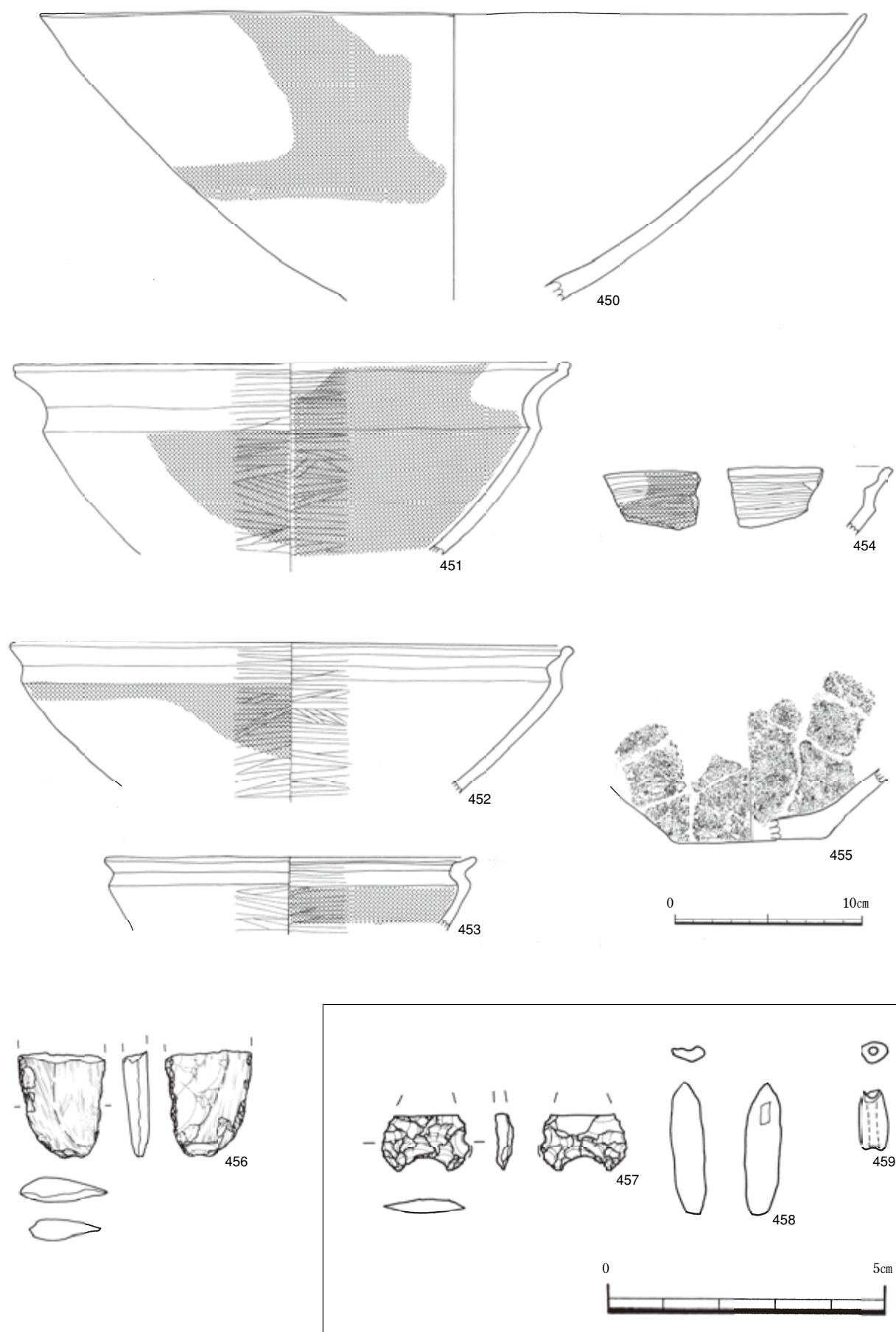
第59図 縄文時代晩期遺構配置図 (1/2000)



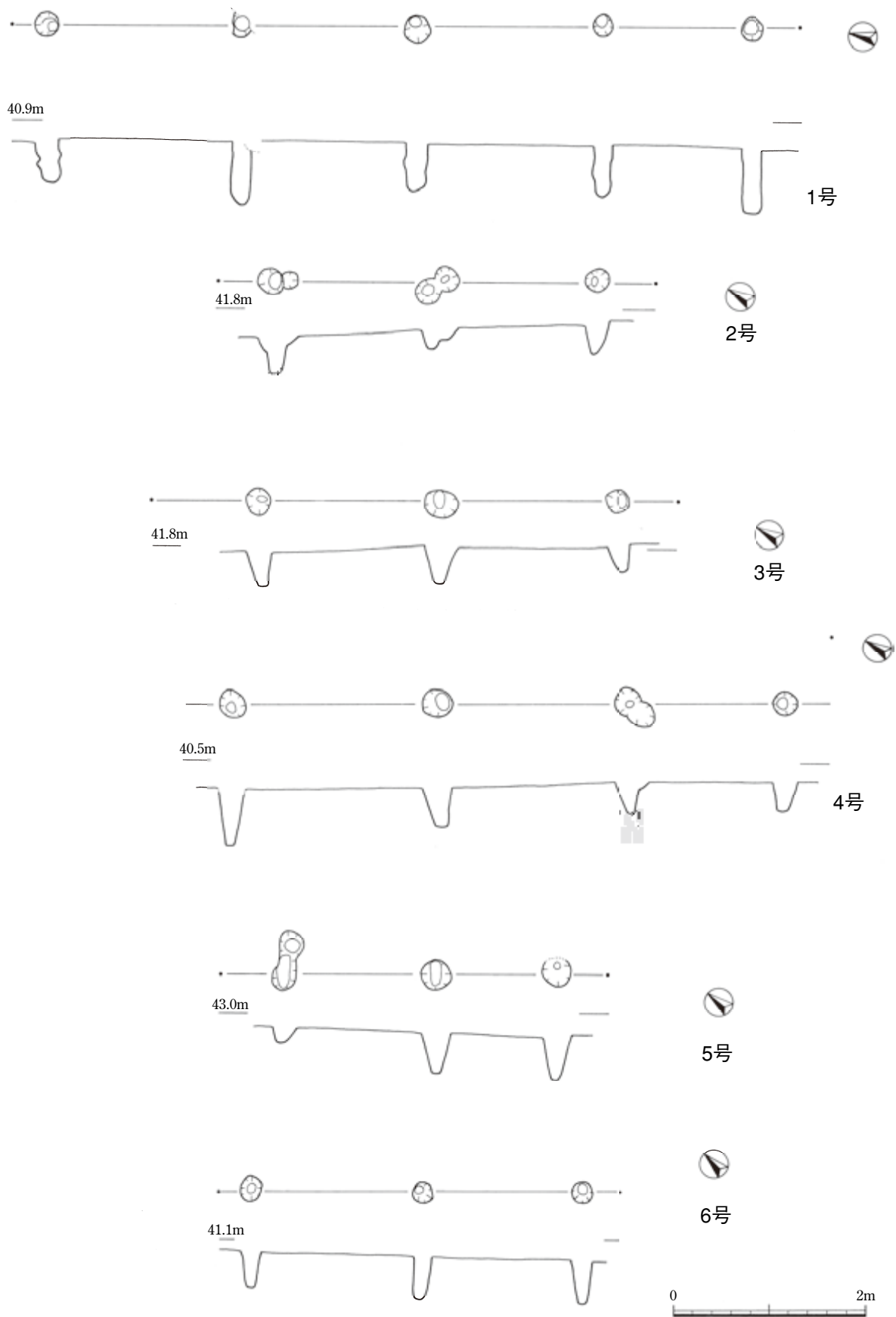
第60図 土坑内出土遺物 1



第61図 土坑内出土遺物 2



第62図 土坑内出土遺物 3



第63图 柱穴列



第64図 XI・XII類土器

曜石製の石鏃であるが、先端部は欠損している。458・459は管玉である。石材は結晶片岩様緑色岩を使用している。

柱穴列（第63図）

柱穴列は、東側調査区においてIV層上面で6基検出された。軸方向は6基ともおよそ北北西—南南東である。そのうち5基はP・Q—9～11区に集中している。柱穴は5つ並ぶものが1基、4つが1基で、他は全て3つである。柱穴列の性格については不明である。

（2）遺物（第64図・第65図 460～471）

縄文時代晩期の遺物は西側調査区において土器と石器が出土したが、その出土量は少ない。

①土器（第64図 460～467）

図化できたのは8点であった。460～462はXII類土器に分類される深鉢形土器である。やや内傾した口縁部には3条の凹線が廻る。461は器面が摩耗しており調整痕が不明であるが、460・462はミガキ調整が施される。463・465はXI類土器に分類される深鉢形土器の口縁部と胴部である。どちらも器面調整は外面が条痕、内面はナデである。465は肩部と頸部で強く屈曲する。464・467はXIもしくはXII類土器に相当する底部である。若干の凹凸は見られるが、平底である。466はXII類土器に分類される浅鉢形土器である。頸部は「く」の字状に外側へ屈曲し、短い口縁部には2条の沈線が廻る。内外面ともミガキ調整が施される。

中期・後期土器観察表

挿図 番号	報告 番号	出土区	層位	部位	色調		胎土				焼成	外 面	内 面	備 考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他				
第 57 図	440	L-18	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○		良	ナデ	ヘラケズリ	口縁部突帯
	441	J-19	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	黄橙(スス付着)	○				良	ナデ 沈線	ヘラケズリ後ナデ	
	442	J-19	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	黄橙(スス付着)	○				良	ナデ 沈線	ヘラケズリ後ナデ	
	443	SK2	Ⅳ	口縁部	明黄褐	明黄褐	○				良	ケズリ・沈線・貝殻刺突文	ヘラケズリ	

縄文時代晩期 土坑内出土遺物観察表

挿図番号	報告番号	部位	色調		胎土				焼成	外 面	内 面	備 考
			内	外	石英	長石	角閃石	その他				
第60図	444	深鉢完形	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○				良	沈線 ナデ	ナデ	
	445	深鉢完形	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○				良	沈線 ナデ	ナデ	
	446	小形深鉢口縁～底部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○				良	細沈線	ヘラケズリ	
	447	深鉢口縁部	にぶい灰褐	にぶい黄褐	○		○	○	良	沈線	ヘラケズリ	
第61図	448	深鉢底部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○		○		良	ナデ	ナデ?	
	449	深鉢胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○		○		良	ナデ	ナデ	
	450	浅鉢口縁～胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○				良	ナデ	ナデ	
	451	浅鉢口縁～胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○		○		良	ミガキ	ミガキ	
第62図	452	浅鉢口縁～胴部	にぶい黄褐	にぶい褐	○		○		良	ミガキ	ミガキ	
	453	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	○		○		良	ミガキ	ミガキ	
	454	口縁部	にぶい黄褐	灰黄褐	○		○		良	ミガキ	ミガキ	
	455	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	○		○					
第62図		種別	石材	産地	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考			
	456	磨製石斧	頁岩		5.8	4.7	1.4	39.6				
	457	打製石鏃	黒曜石	三船?	1.0	0.6	0.3	0.6				
	458	管玉	結晶片岩様緑色岩		2.4	0.7	0.2	4.8				
	459	管玉	結晶片岩様緑色岩		1.0	0.4	0.3	3.4				

柱穴列1号(Q-11区)

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
1	54	28	24	
2	66	24	16	
3	50	40	34	
4	54	24	20	
5	70	26	22	
柱間距離 (cm)		全長 (cm)		
P1-P2	204	724		
P2-P3	182			
P3-P4	184			
P4-P5	154			

柱穴列2号(Q-10区)

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
1	40	42	27	
2	22	48	26	
3	35	25	25	
柱間距離 (cm)		全長 (cm)		
P1-P2	161	326		
P2-P3	165			

柱穴列3号(Q-10区)

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
1	36	28	25	
2	39	34	30	
3	29	24	24	
柱間距離 (cm)		全長 (cm)		
P1-P2	188	370		
P2-P3	182			

柱穴列4号(Q-10区)

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
1	55	30	26	
2	41	32	29	
3	38	48	28	
4	31	25	24	
柱間距離 (cm)		全長 (cm)		
P1-P2	210	640		
P2-P3	270			
P3-P4	160			

柱穴列5号(P-9区)

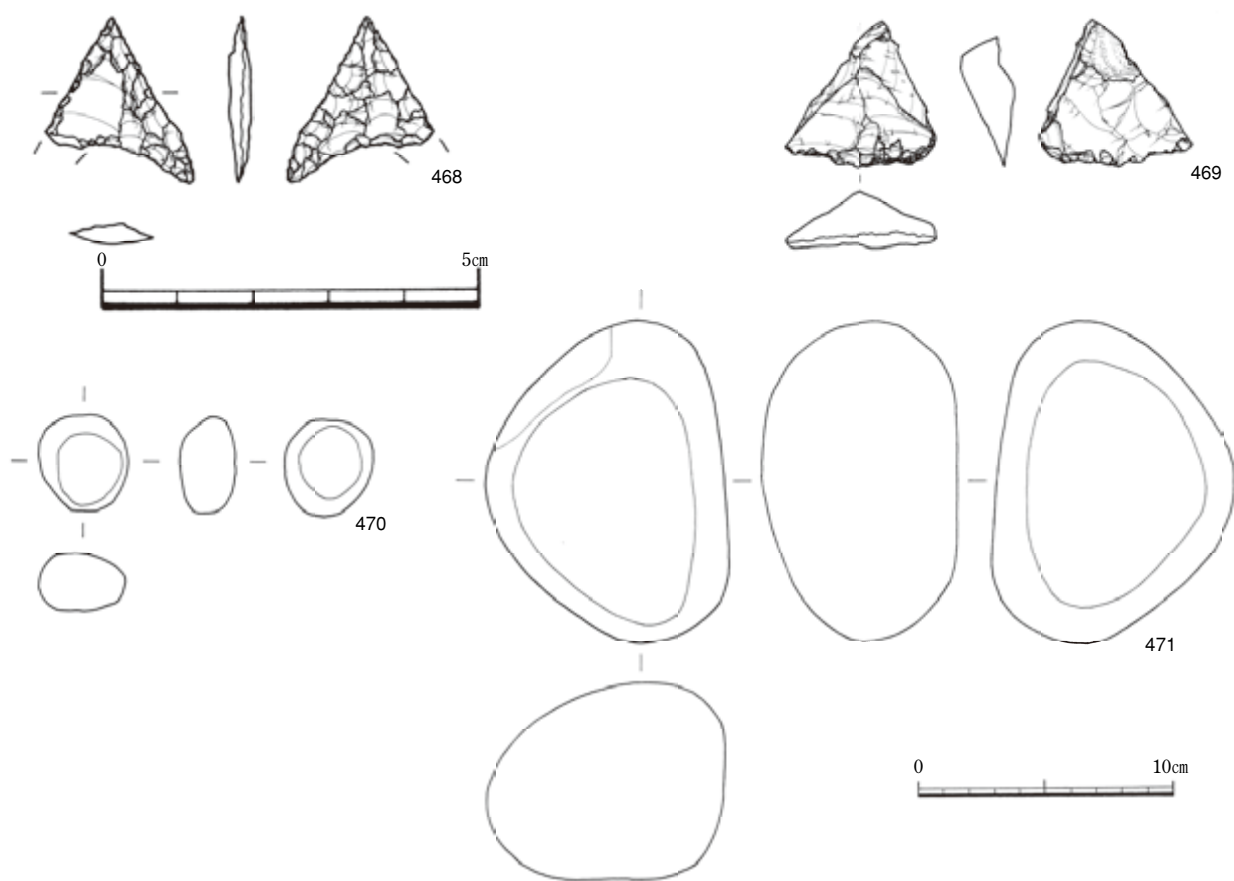
Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
1	48	29	29	
2	40	31	30	
3	17	60	24	
柱間距離 (cm)		全長 (cm)		
P1-P2	125	280		
P2-P3	155			

柱穴列6号(L-16区)

Pit	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	掘り方
1	39	26	23	
2	45	22	20	
3	45	23	22	
柱間距離 (cm)		全長 (cm)		
P1-P2	178	346		
P2-P3	168			

縄文時代晩期土器観察表

挿図 番号	報告 番号	出土区	層位	部位	色調		胎土				焼成	外 面	内 面	備考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他				
第 64 図	460	K-20	Ⅲ	口縁部	にぶい赤褐	にぶい褐	○	○			良	沈線	ミガキ	
	461	J-19	Ⅲ	口縁部	浅黄	浅黄橙	○		○		良	沈線	ナデ	
	462	L-18	Ⅲ	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	○	○			良	沈線	ミガキ	
	463	L-18	Ⅳ	口縁部	浅黄	にぶい黄橙	○	○			良	沈線	板ナデ	
	464	M-18	Ⅲ	底部	橙	にぶい黄橙	○				良	ナデ	板ナデ?	
	465	M-18	Ⅲ	胴部	浅黄褐	にぶい黄橙	○	○			良	沈線	板ナデ	
	466	K-15	Ⅲ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			良	沈線	ミガキ	
	467	L-15	Ⅲ	底部	浅黄褐	にぶい黄橙	○	○			良	ナデ	ヘラケズリ後ナデ	



第65図 縄文時代晩期石器

縄文時代晩期石器観察表

挿図番号	番号	器種	出土区	層位	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
						cm	cm	cm	g	分類
第65図	468	石鏃	K-15	Ⅲ	頁岩	2.2	2	0.3	0.7	A-b-c
	469	スクレイパー	—	表	黒曜石	3.9	4.05	1.5	14.6	
	470	磨石	—	Ⅱ	砂岩	3.9	3.4	2.2	35	
	471	磨石	L-15	Ⅲ	砂岩	12.6	9.4	7.7	1290	

②石器（第65図 468～471）

縄文時代晩期の石器は、石鏃、スクレイパー、磨石が出土した。

石鏃

468は入念な剥離が施された打製石鏃である。石材は頁岩で基部の一部が欠損している。P21にある農業開発総合センター遺跡群の石鏃分類図によると、A-b-cに分類される。

スクレイパー

469はスクレイパーである。黒曜石製で、肉眼観察によると上牛鼻産に類似するものと思われる。下部に刃部形成が施されている。

磨石

470・471は砂岩製の磨石である。両面に磨石の作業面が見られる。敲打痕などは見られなかった。

第6節 小結

宗円堀遺跡においては、旧石器時代（細石器文化期・ナイフ形石器文化期）、縄文時代早期、中期、後期、晩期、中世の各時代の遺構・遺物が出土している。そのうち中世については溝状遺構が検出されており、他の溝状遺構との関連から諏訪脇遺跡の中で掲載した。

旧石器時代

旧石器時代の遺物は、東側と西側に出土地点を分けることができる。東側は、調査範囲全面に200点近い遺物が点在している。西側は、層の区分が難しく、Ⅷ層とⅣ層の一部を旧石器時代の遺物と設定し、集中区・石材の分布状況から3つのブロックを設定した。

東側調整区（1～39）で、出土が顕著なものはナイフ形石器である。点数が18点と多く、東側出土量の1割弱を占める。石材別にみると、黄褐色に白い筋が混ざる玉髓を利用しているものが多い。同一母岩から剥ぎ取ったものもあると思われる。また、シルト質頁岩製のものも多い。石器製作所だった可能性も考えられる。

西側調整区（40～88）は、石材と器種の分布から3つのブロックとそれ以外の地点からの出土と設定した。各ブロックから、細石刃核・細石刃が出土している。また、細石刃核は比較的小さなものが多い。

縄文時代早期

縄文時代早期の遺構は、西側調査区J-19区において、集石が3基集中して検出された。

縄文時代早期の土器は、Ⅰ類土器～Ⅻ類土器の12種類に分類した。それぞれの類に比定する土器型式は以下のとおりである。

- Ⅰ類土器 岩本式土器（早期前半）
- Ⅱ類土器 志風頭式土器（早期前半）
- Ⅲ類土器 加栗山式土器（早期前半）
- Ⅳ類土器 小牧3A段階（早期前半）
- Ⅴ類土器 吉田式土器（早期前半）
- Ⅵ類土器 石坂式土器（早期前半）
- Ⅶ類土器 下剥峯式土器（早期前半）
- Ⅷ類土器 桑ノ丸式土器（早期前半）
- Ⅸ類土器 中原式土器（早期前半）

Ⅹ類土器 押形文土器（早期後半）

Ⅺ類土器 塞ノ神式土器（早期後半）

Ⅻ類土器 右京西タイプ（早期後半）

これらのうち出土量が最も多いものはⅥ類土器の石坂式土器である。口縁部が外反もしくはやや外反するものと直行するものの2タイプがあり、前者をⅥa類土器、後者をⅥb類土器とした。宗円堀遺跡の石坂式土器は、Ⅵa類土器が中心で、これは前迫亮一氏の分類におけるⅠ式（古段階）に相当する。口唇部は丸みを帯び、口縁部は外反し、胴部はやや膨らむ形状を呈する。文様は口唇部と体部に浅い刻目を有し、胴部は綾杉状の貝殻条痕文や格子目の条痕文が施されるものである。また、Ⅵb類土器はⅡ式（新段階）に相当するものであるが、口縁部が外傾もしくは直行するものの他にやや内湾する資料もありバリエーションに富んでいる。

縄文時代早期の石器は、他の農業開発総合センター遺跡群の出土状況とさほど変わりはない。

石鏃は打製石鏃がほとんどであった。入念な交互剥離で調整されている。石鏃の平均長は1.82cmで、その中で、最長だったC-c-b型に分類した石器は、大久保型石鏃といわれるもので、近隣の遺跡でも数点検出されている。

出土数が最も多かった石器は磨石であった。掲載数は67点であった。磨石のみの機能を持つものが31点。磨石と敲石の機能を持つものが24点、磨石・敲石・凹石の機能を持つものが12点であった。石材は砂岩が61点で他の7点は安山岩であった。

石皿は5点とも敲打痕はみられなかった。

縄文時代中期・後期

遺物はⅫ類土器からⅣ類土器で4点と非常に少なく、遺構も検出されなかった。Ⅻ類土器は大きく外傾した口縁部先端を外側に肥厚させ突帯をつくるもので、胎土には滑石を含む。中期後半の中尾田Ⅲ類の範疇ではないかと思いたい、類例がなく今後の資料の増加を待ちたい。Ⅳ類土器は外面口縁部付近に先端の鋭い工具により沈線を施すもので、口縁部は波状口縁を呈する。指宿式土器の範疇ではないかと思いたい。Ⅳ類土器は市来式土器に比定されるものである。

縄文時代晩期

縄文時代晩期は土坑1基、柱穴列6基が検出された。特に土坑内からはⅪ類に分類される上加世田式土器が多く出土し、そのうち3個体(444・445・448)についてはほぼ完形に復元することができた。これらの土坑内出土土器は、上加世田式土器におけるセット関係を知る上で貴重な資料である。

またその他に石器2点と結晶片岩様緑色岩製の管玉2点も出土した。結晶片岩様緑色岩製の玉類については、農業センター遺跡群で本遺跡のほか、尾ヶ原遺跡で勾玉1点、諏訪脇遺跡で管玉1点、勾玉1点、小玉2点、南原内堀遺跡で小玉1点、諏訪脇遺跡で管玉1点の計4遺跡で7点が出土している。いずれも縄文時代晩期の包含層から出土しており、上加世田式土器段階から入佐式土器段階にかけてのものと思われる。これら玉類の石材の原産地については不明であるが、諏訪前遺跡から有溝砥石が出土していることから、農業センター遺跡群の玉類は諏訪前遺跡で製作されたものと思われる。

柱穴列については、詳細な用途等ははっきりしないが、6基中5基がP・Q—9～11区に集中して検出されており、軸方向もほぼ同じであることから、同時期に何らかの施設があったものと思われる。

遺物については、出土量は少ない。Ⅺ類土器の上加世田式土器、Ⅺ類土器の入佐式土器が出土している。なお近年の研究において、これまで晩期前半としていた土器を後期後葉とする見方があり、大坪遺跡(鹿児島県出水市)の報告書で東和幸氏は、上加世田式土器を後期後半、入佐式土器古段階を後期終末、入佐式土器新段階を晩期初頭、黒川式土器を晩期前半から中半に位置づけているが、農業センター遺跡群では従来の編年に従って述べた。

縄文時代晩期の石器は、石鏃、スクレイパー、磨石が出土している。しかし出土量が少量であるため詳しいことは断定できなかった。

参考文献

- 清田純一1998「縄文後・晩期土器考—中九州の縄文後・晩期土器とその並行形式について—」『肥後考古』第11号 肥後考古学会
- 高橋信武・安藤英治1983「大分県官地前遺跡の採集資料—大分県の晩期前半を中心とした土器編年—」『赤れんが』第2号 熊本大学考古学研究会
- 前迫亮一 2003「石坂式土器再考」 『縄文の森から』創刊号 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(69)『大原野遺跡』2004
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(79)『大坪遺跡』2005
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(98)『尾ヶ原遺跡』2006
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(112)『諏訪牟田遺跡・諏訪前遺跡・南原内堀遺跡・加治屋堀遺跡』2007

神 原 遺 跡

第Ⅵ章 神原遺跡の発掘調査成果

第1節 調査の経過と層位

神原遺跡は、平成13年10月10日～10月18日までと、平成14年10月15日～平成15年1月17日まで本調査を実施した。本調査は、13年度に支線道路建設部分、14年度に農業センターの病中付帯施設建設地に相当する範囲を対象とした。また、範囲内に工事が行なわれないため未調査とした部分があり、今後、掘削等を行なう場合には発掘調査の必要がある。なお、一部遺物で、調査期間中の大雨により流出し、出土地点不明となったものがある。

1 日誌抄

13年度

10月 調査開始

Ⅱ層掘り下げ。溝状遺構精査。写真撮影。

Ⅲ～Ⅴ層掘り下げ。溝状遺構精査。

12月

遺構内遺物実測。遺物取り上げ。遺構実測。

14年度

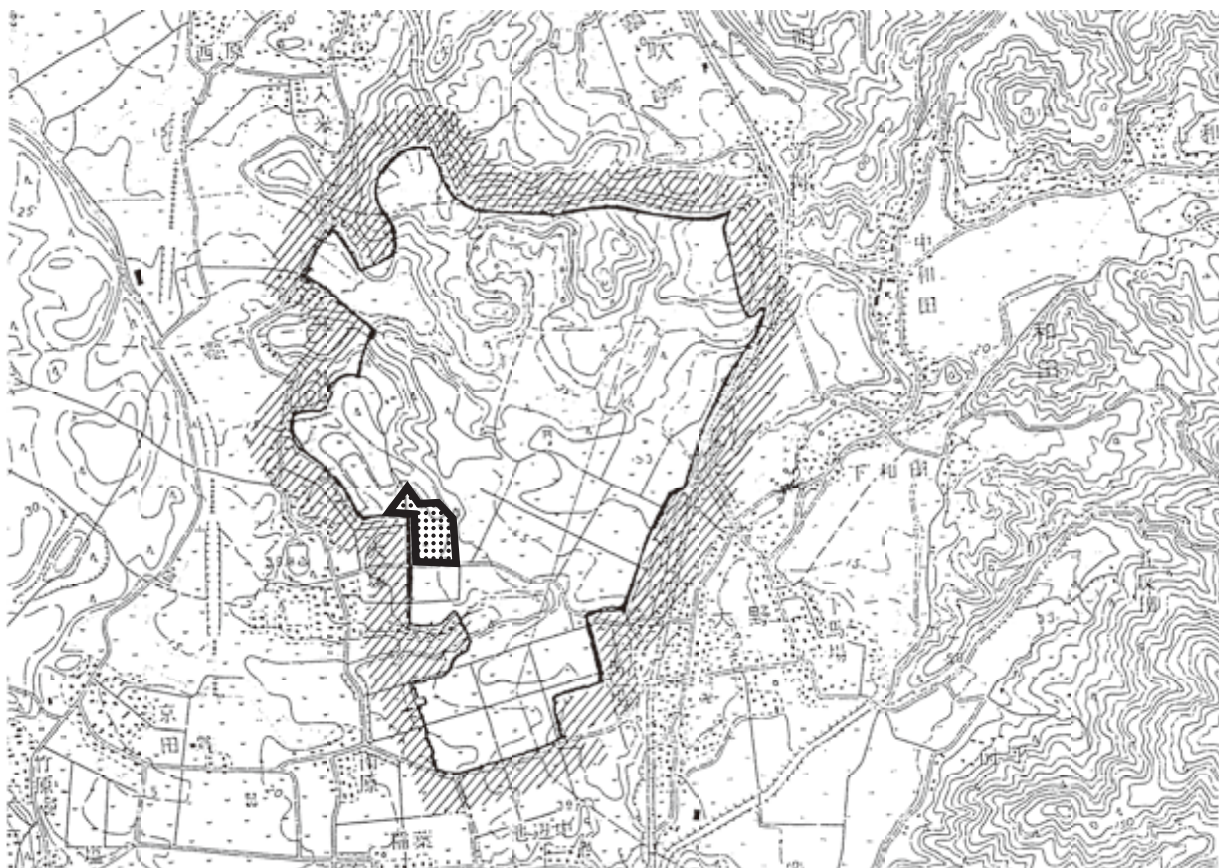
10月 調査再開

表土剥ぎ。K～L－8区、O－5区、トレンチ掘り下げ。L－7、M－6、N－6、O－6区Ⅳ層掘り下げ。I・J－9区古道検出、写真撮影。Ⅳ層遺物取り上げ。K－8区礫群写真撮影。

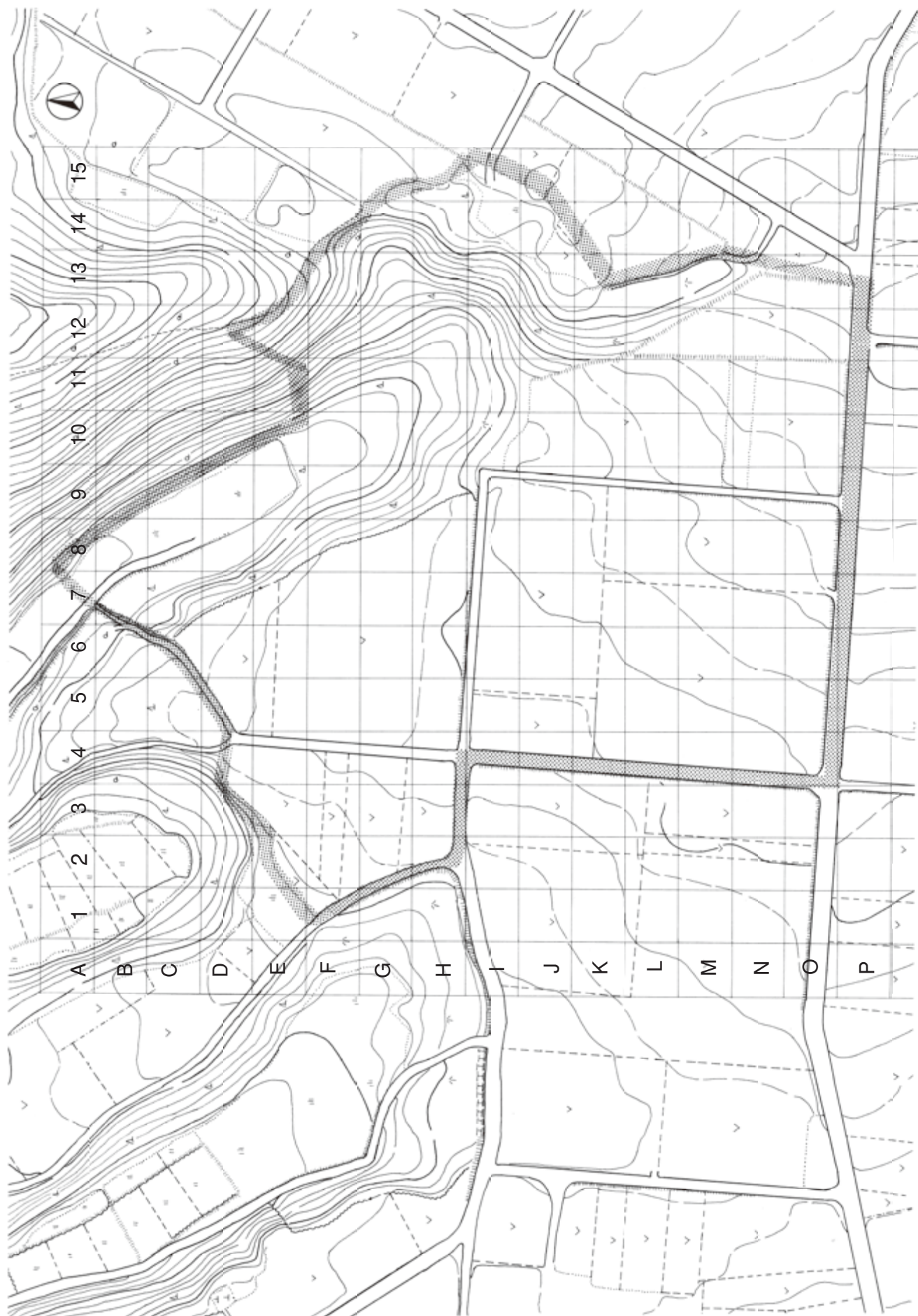
11月 O・M－8区、M・N－6区、トレンチ掘り下げ。I・J・K－8・9区、Ⅶ・Ⅷ層掘り下げ。土層断面図作成、写真撮影。中世・晩期遺構実測。柱穴・土坑検出。半裁・写真撮影。柱穴列・礫群写真撮影。

12月 I・J・K－8・9区Ⅶ・Ⅷ層掘り下げ。M・K－7区柱穴列完掘写真撮影。グリッド杭打ち。掘立柱建物完掘写真撮影。L－7区晩期土坑掘り下げ。礫群写真撮影、実測。遺物取り上げ。

1月 遺物取り上げ。集石実測。J－9区掘り下げ。I～K－9区土層断面図作成。旧石器礫群実測、取り上げ。



第1図 神原遺跡位置図

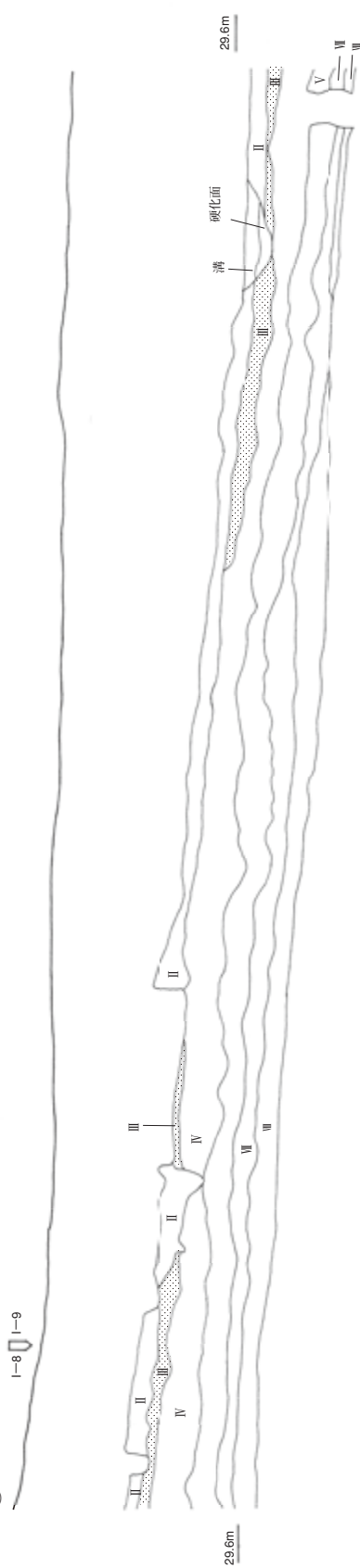


第2図 地形図及びグリッド配置図

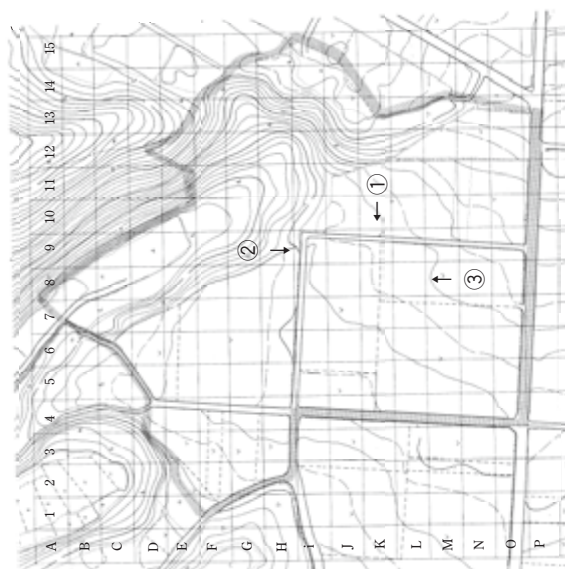
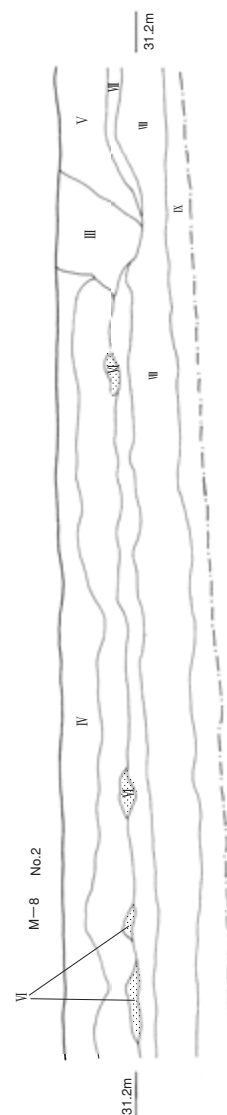
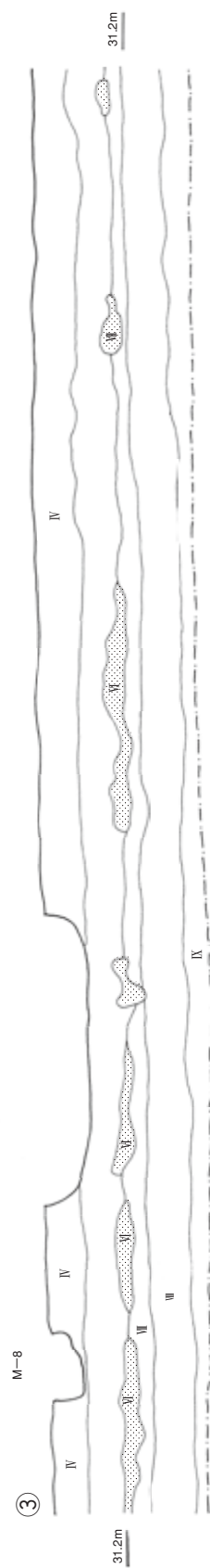


第3図 土層断面 (1)

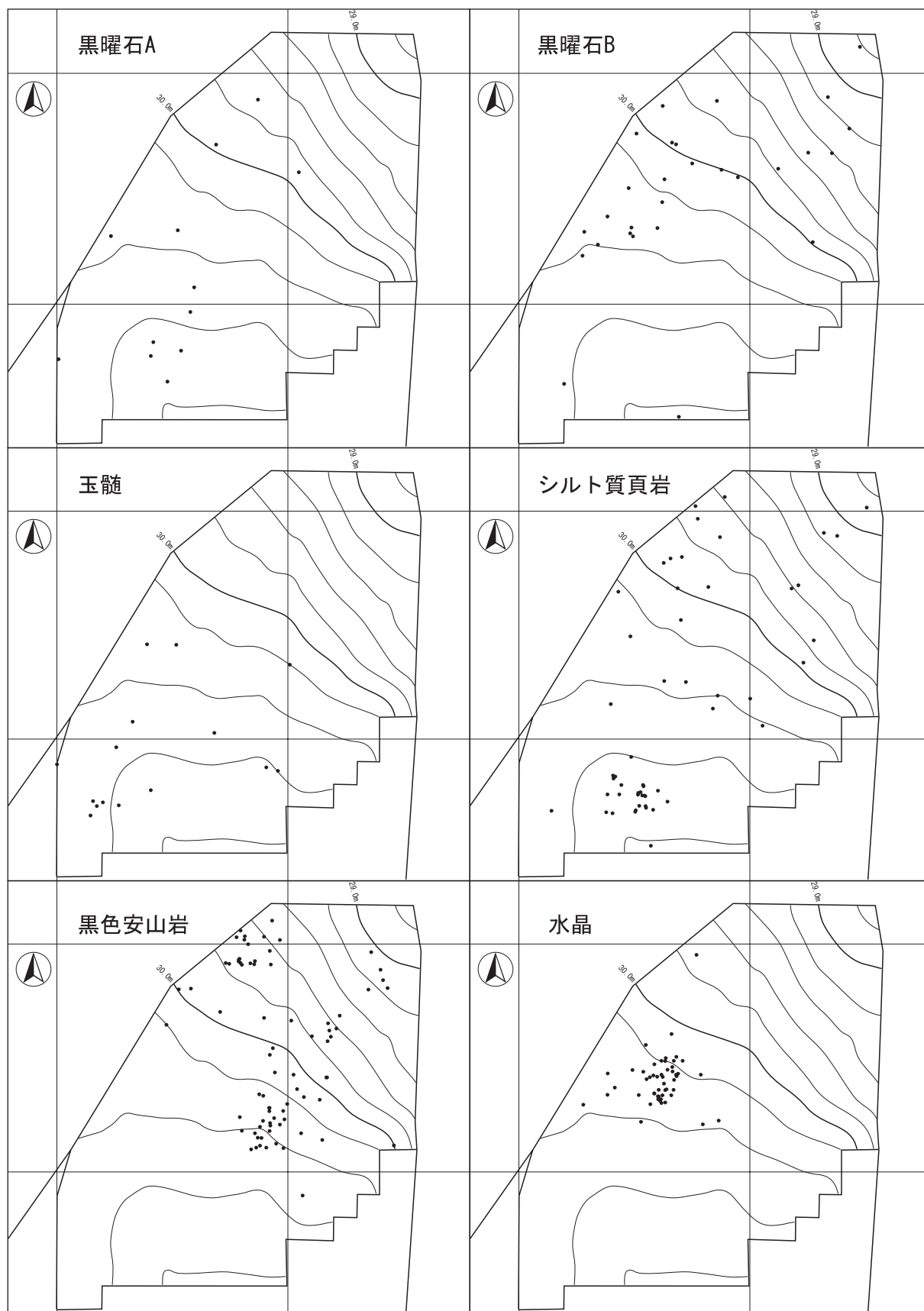
②



③

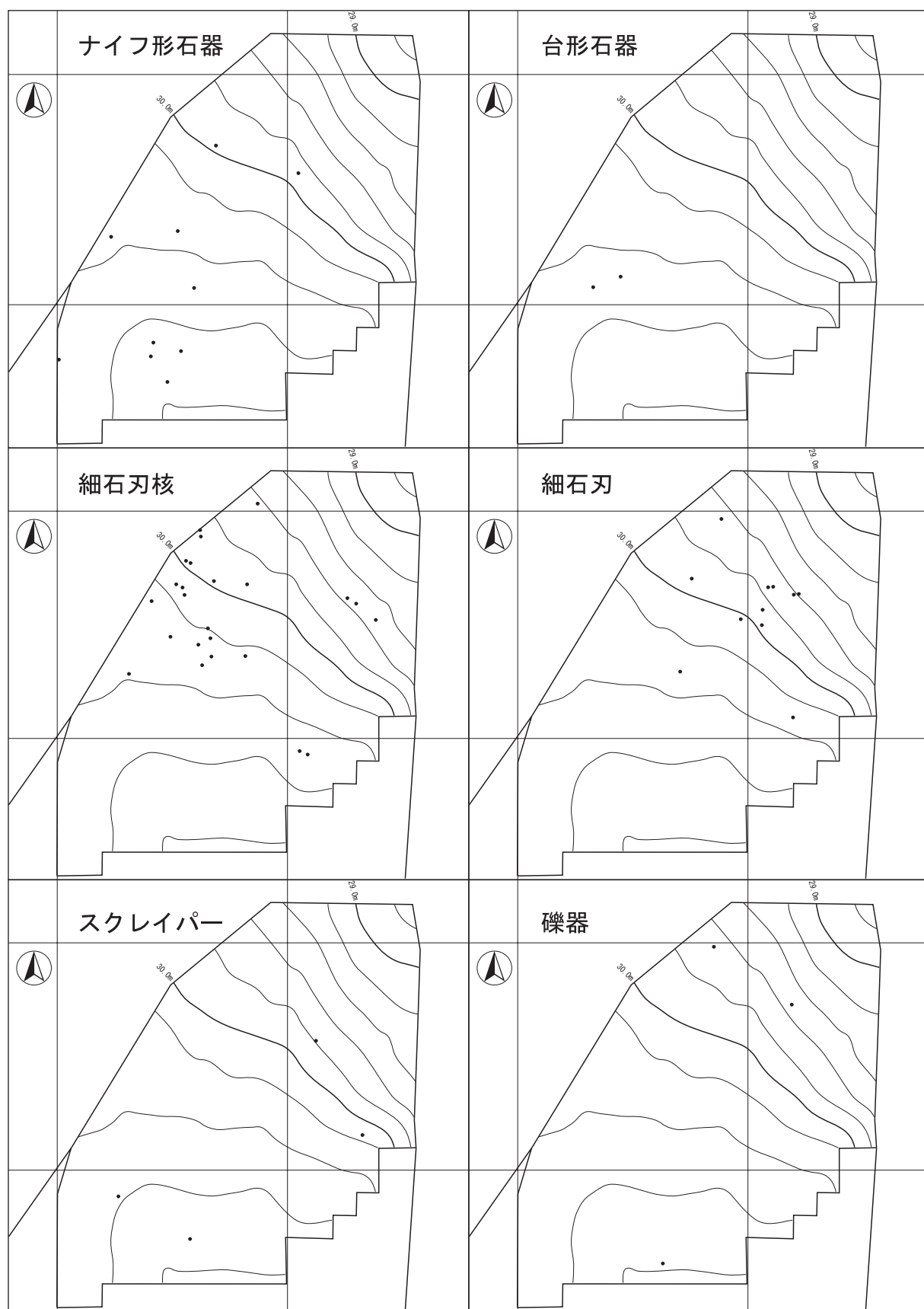


第4図 土層断面 (2)



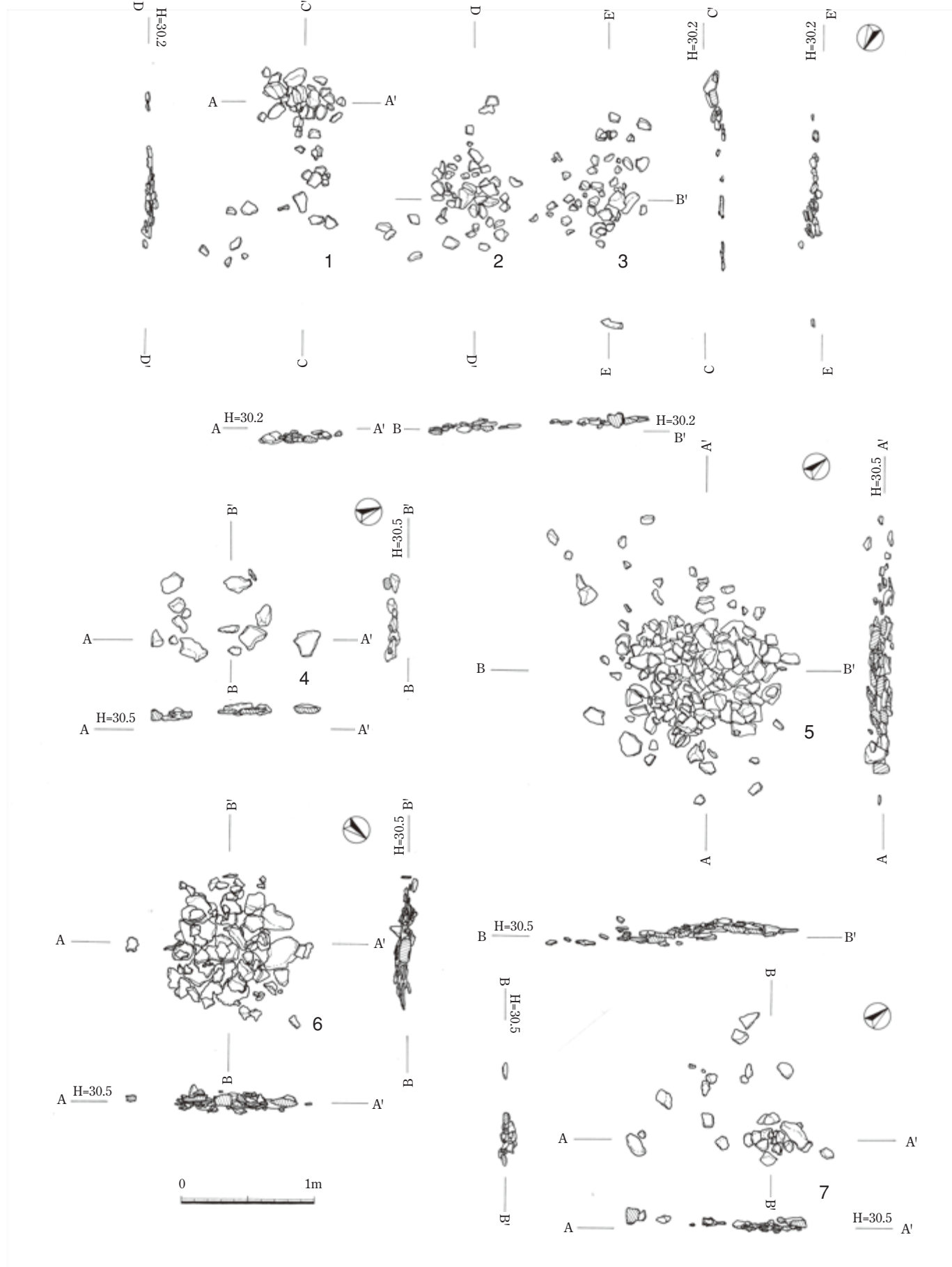
(1グリッド20m)

第6図 旧石器時代石材別分布図

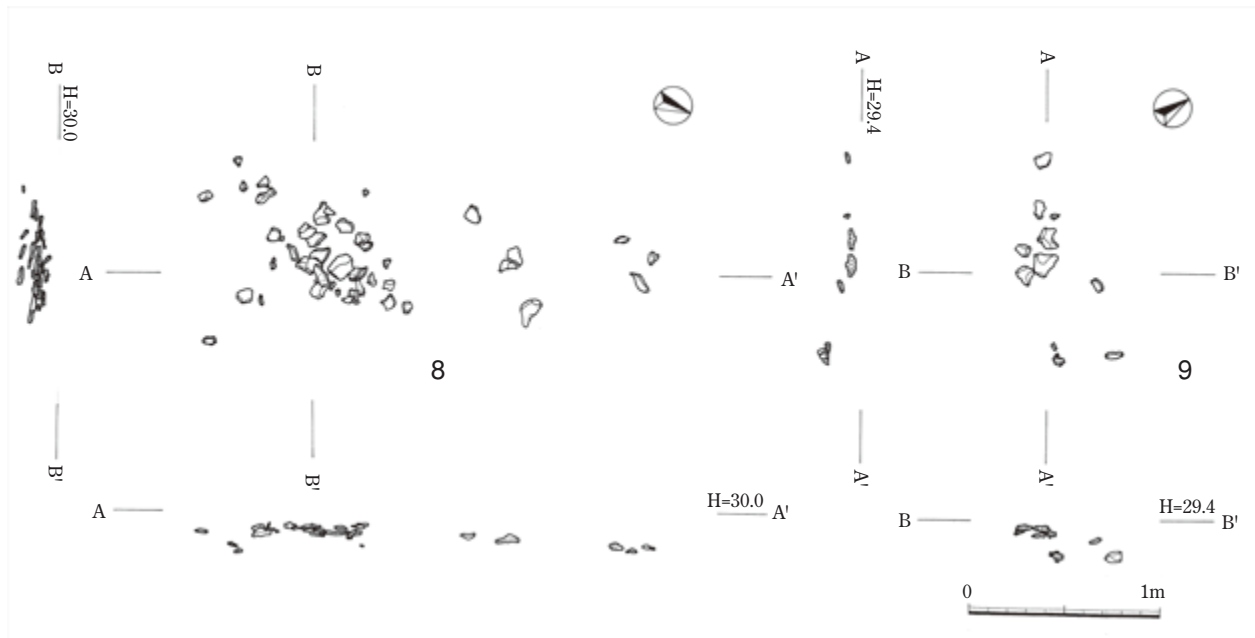


(1 グリッド20m)

第7図 旧石器時代石器別分布図



第 8 図 旧石器時代礫群 1



第9図 旧石器時代礫群2

第2節 遺跡の層序

主な時代と包含層、遺物・遺構は以下のとおりである。

- ・ 平安時代～中世（Ⅱ層）
溝状遺構・古道・土師器・須恵器・青磁
- ・ 弥生時代～古墳時代初期（Ⅱ層）
土器
- ・ 縄文時代晩期（Ⅱ～Ⅲ層）
掘立柱建物跡・柱穴列・土坑・土器・石器
- ・ 縄文時代早期（Ⅳ～Ⅴ層）
土器・石器
- ・ 縄文時代草創期（Ⅶ層）
集石
- ・ 旧石器（Ⅷ層）
礫群・石器・剥片

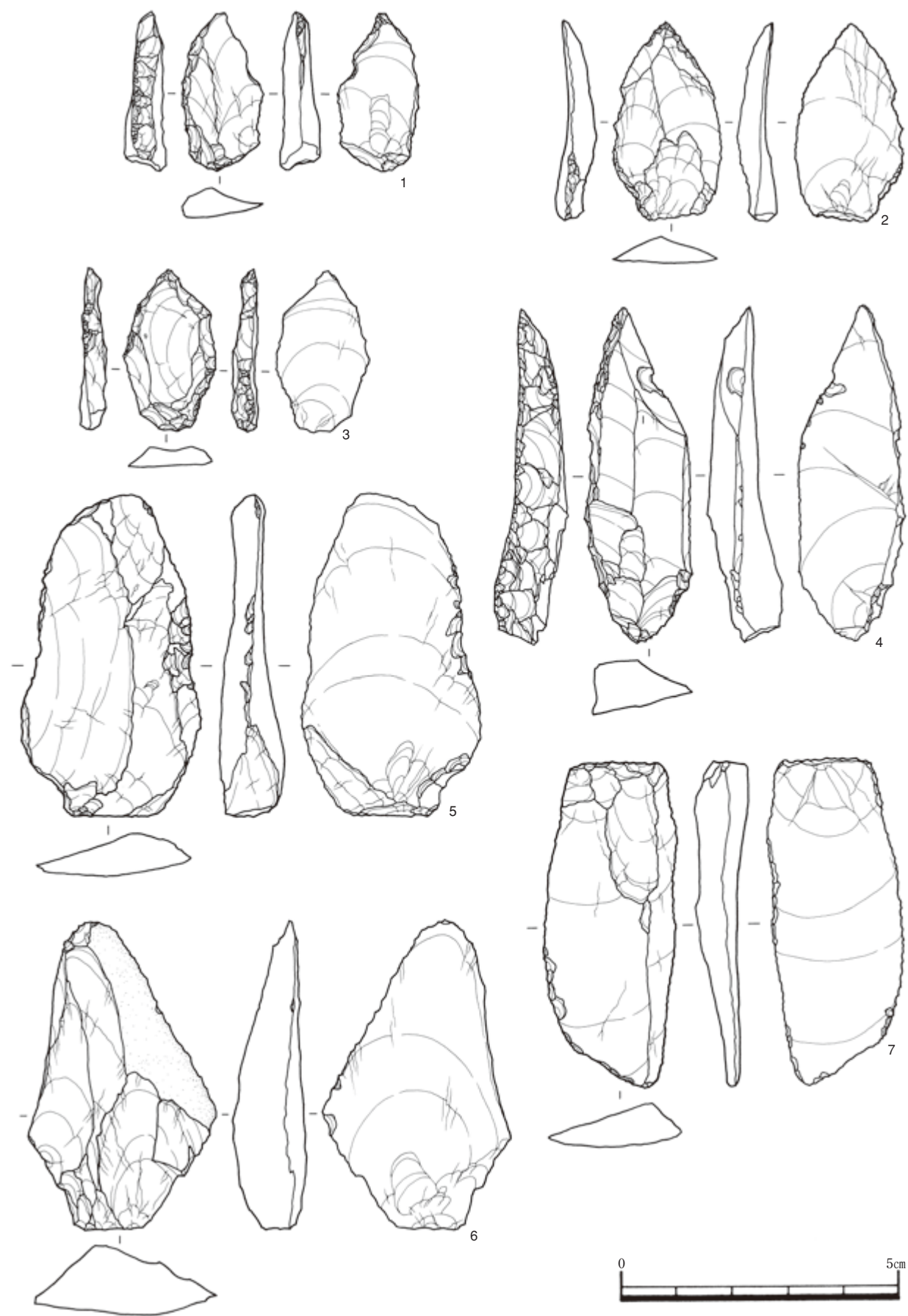
第3節 発掘調査の方法及び概要

神原遺跡は、ハツ手状に開析された台地の南東部に位置し、北東側に比高差15mの谷が位置している。調査のためのグリッドを20m×20mで設定し、調査面積は7600㎡である。

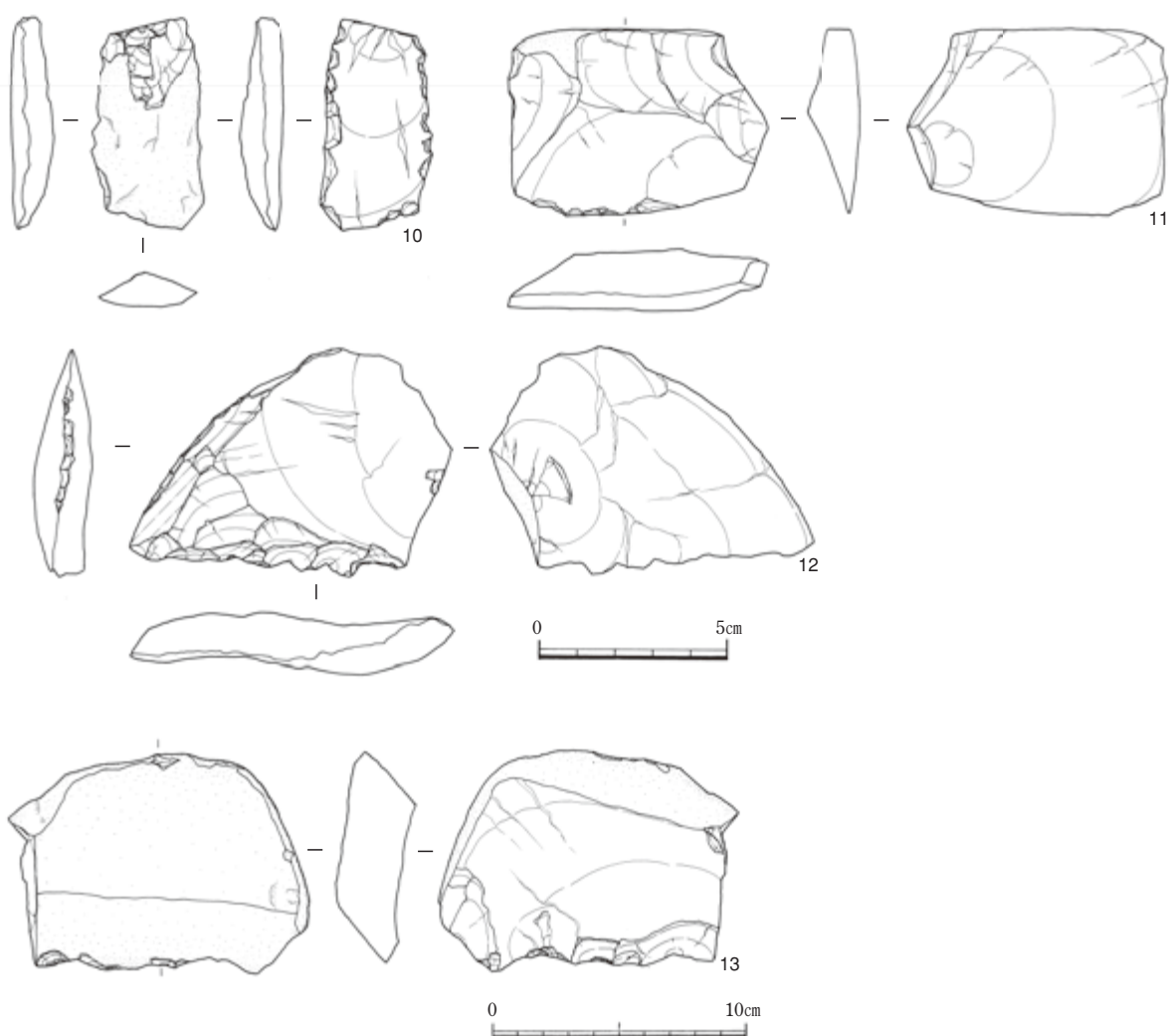
13年度は、支線道路建設部分の調査を実施した（L-12区～P-13区）。発掘調査区の標高の高い面に3本のトレンチを設定して掘り下げたが、表土下

はシラス層であった。トレンチ結果をふまえて、発掘調査は平坦地のみ実施した。平坦面の部分は表土を除去した段階では、Ⅲ層（アカホヤ層）下面以下が存在していた。しかし、現道に近い部分においてはシラス層まで攪乱を受けていた。調査はⅢ層面の精査及び掘り下げから行なった。遺物の出土量は多くはなかったが、Ⅲ層を掘り込んでいくと、黑色土を埋土とする溝が2条検出された。1条の溝は、掘り込みが浅く、遺物の出土もなかった。もう1条の溝は、深いところで1m以上の深さがあった。溝からは古代の須恵器・土師器が出土した。Ⅳ層面からは、縄文時代早期の土器が数点出土した。

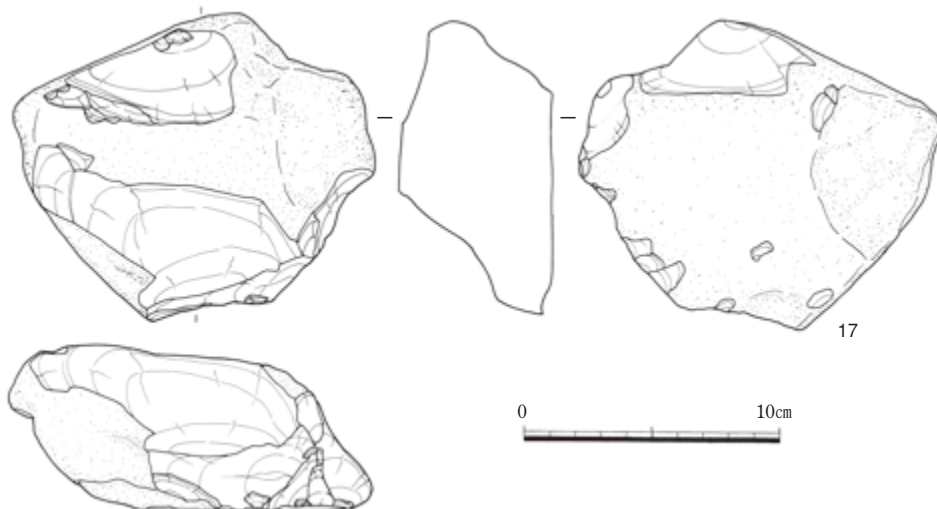
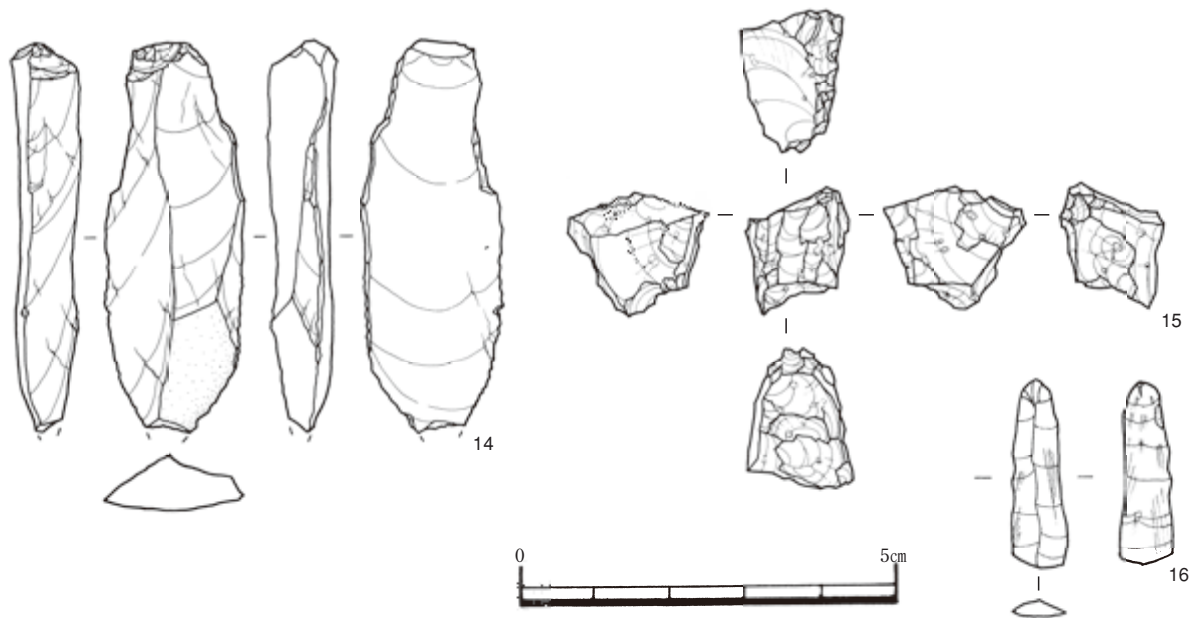
14年度は、農業開発総合センター病中付帯施設部分の調査を実施した（I-9区～O-4区）。Ⅲ層から、縄文時代晩期の掘立柱建物跡3棟、土坑2基、柱穴列2基が検出された。北東側の谷に向かって傾斜する地点で、旧石器時代、縄文時代草創期の遺構・遺物が多数発見された。Ⅶ層から、縄文時代草創期の集石、Ⅷ層からは旧石器時代の遺構として礫群9基、同じく旧石器時代の遺物として、ナイフ形石器、細石刃等が出土した。旧石器時代の遺物・遺構はナイフ形石器を伴う時期と細石刃を伴う時期のものに大きく二分できると考えられる。



第10図 旧石器 1



第11図 旧石器 2



第12図 旧石器3

第4節 旧石器時代の調査

旧石器時代の遺物の総数は、黒曜石、頁岩、玉髓等を中心に約1800点を数える。出土区は、I～K—8～9区である。石材ごとに出土地点を分類したところ、7つのブロックに分けることができた（第5図）。また、ブロックで主に出土する器種が、ナイフ形石器（6ブロック）、細石刃核（1～5、7ブロック）と異なるため、ブロックごとに時期差があるものと考えられる。

石材については、全面的に黒曜石が多くを占めるが、ブロックによって玉髓や水晶が多く出土している。なお、黒曜石は肉眼により観察した特徴をもとに、下記のように分類を行なった。

黒曜石A・・・黒色で炭化している。不純物が少なく光を通さない。樋脇町上牛鼻産に類似する。

黒曜石B・・・黒色、アメ色で不純物を含む。鹿児島市三船産に類似する。

黒曜石C・・・黒色、ガラス質で小粒の不純物が多く含まれる。大口市日東産に類似する。

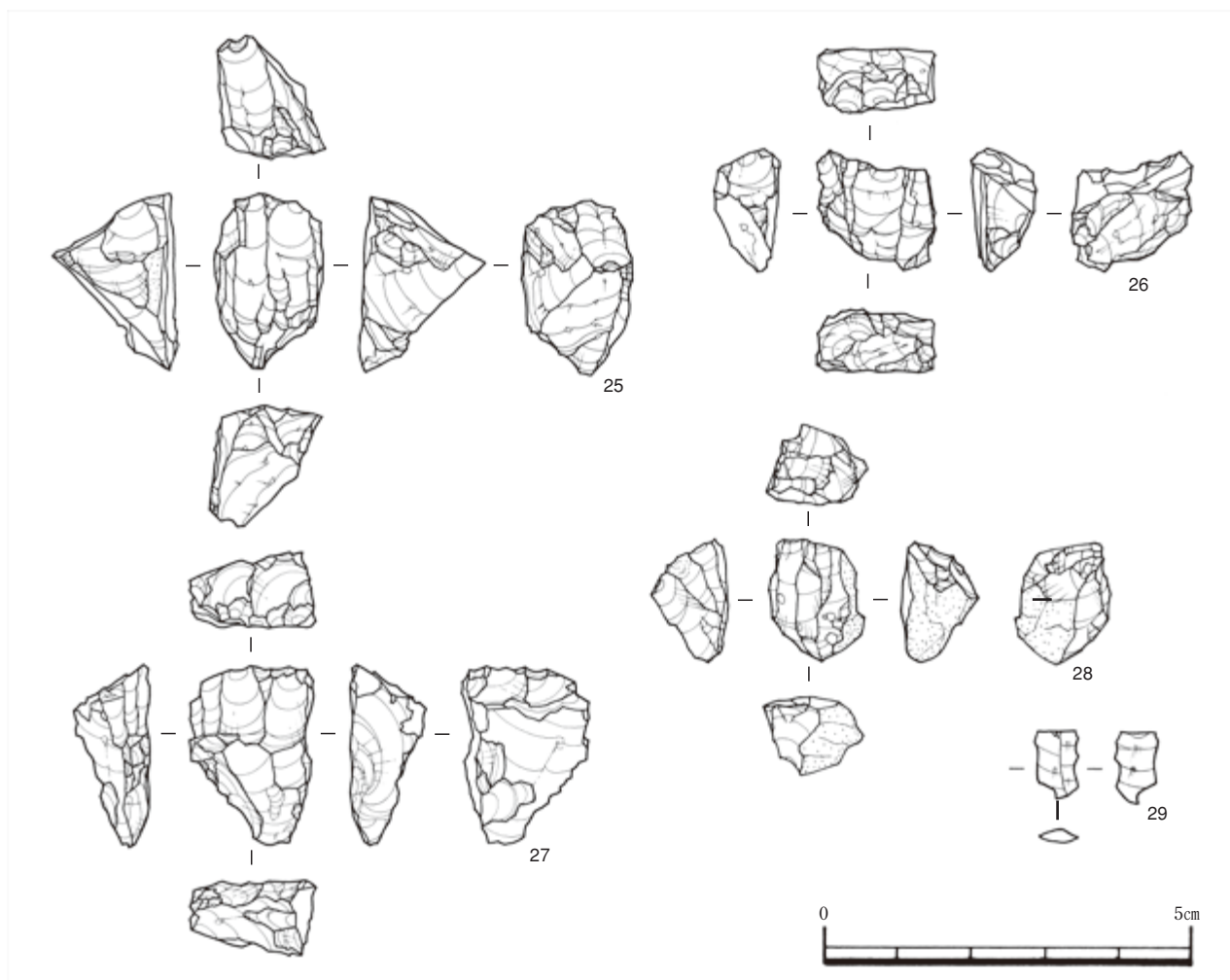
（1）遺構

礫群1・2・3（第8図）

J—8区で検出された。礫が近接して検出されたが、集中部が3つ存在するため、3ヶ所存在すると



第13図 旧石器 4



第14図 旧石器 5

判断した。1は、礫数53，平均重量87.84 gである。南側に10cm大の礫が集中している。2は、礫数47，平均重量73.40 gである。10cm大の角礫で構成されている。3は、礫数47，平均重量64.04 gである。集中区は存在するが，全体的にまとまりに欠ける。

礫群 4（第 8 図）

K－8区で検出された。礫数14，平均重量406.43 gである。礫は約15cmの大きなものが多いが，散在している。

礫群 5（第 8 図）

K－8区で検出された。礫数173，平均重量162.20 gである。上部は10cmほどの礫だが，その下部に20cmほどの大きな礫が多数使用されており，密集度も高い。

礫群 6（第 8 図）

K－8区で検出された。礫群 5と隣接している。

礫数97，平均重量179.87 gである。20cm以上の大きな礫を多数使用し，中心部にそのほとんどが集中している。

礫群 7（第 8 図）

J－8区で検出された。礫数33，平均重量159.55 gである。周辺でナイフ形石器が出土している。10 cm大の礫で構成されているが，全体的にまばらで，20cm大の礫に数点集中している。

礫群 8（第 9 図）

J－8区で検出された。礫数49である。10cm大の礫と5cm大の礫で構成され，中心部はあるが，まとまりはみられない。周辺で細石刃核が多数出土しており，関連性があると思われる。

礫群 9（第 9 図）

I－9区で検出された。礫数12で，集中区もない。



第15図 旧石器 6

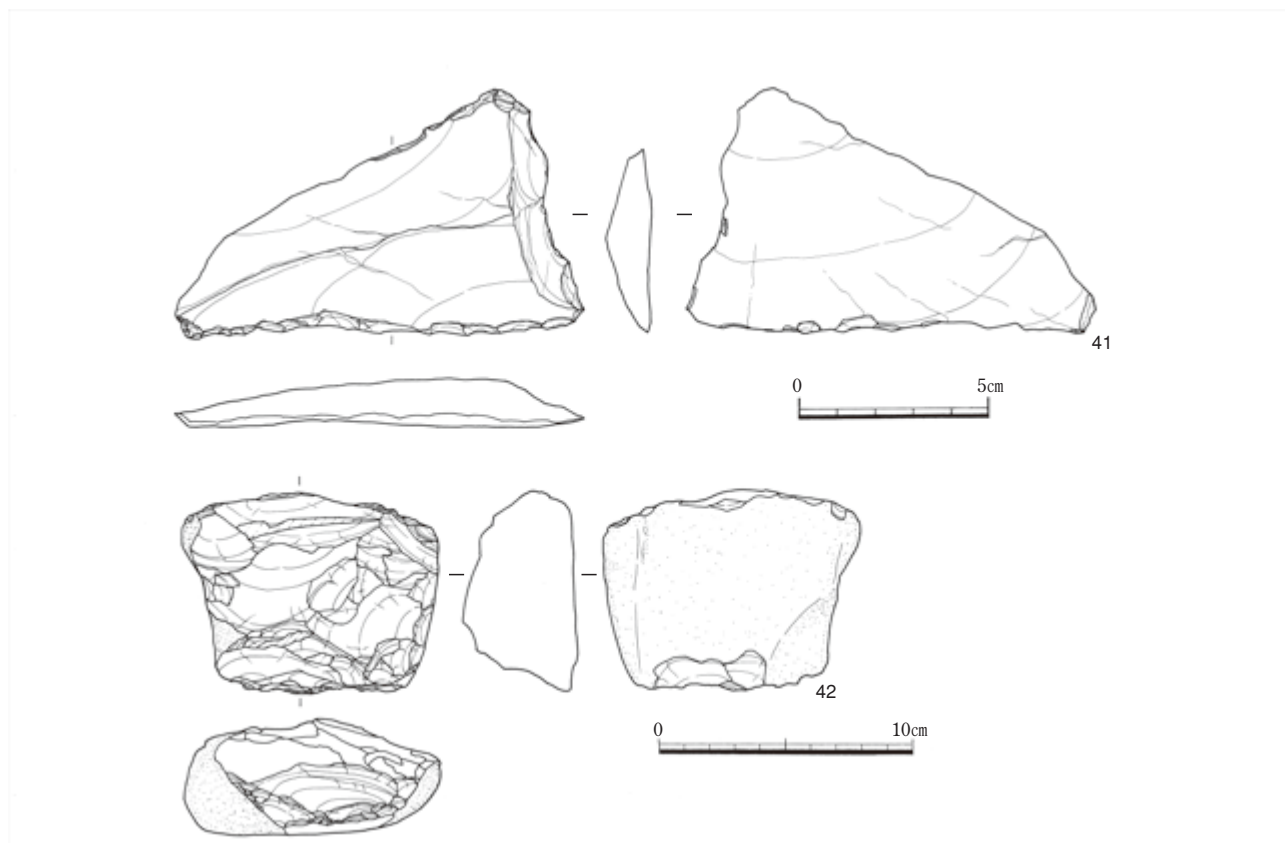
(2) 遺物

ブロック 6 (第10～11図 1～13)

J・K-8区にわたる、径約15m×12mの範囲に分布するブロックである。頁岩およびシルト質頁岩を主体とし、黒曜石A・黒曜石B、玉髄が点在し、東側を中心としてナイフ形石器が多く出土している。

1～6はナイフ形石器である。1は黒色安山岩製。縦長剥片の左側縁に剥離を施している。2は頁岩製。縦長剥片を素材とし、先端部に使用痕が確認できる。

3は玉髄製。基部側からの打撃で縦長の剥片を取り出し、その後、細かな加工を右側面下部・左側面上部に施している。4は、頁岩製。左側面を加工して刃部を形成した後、さらに細かな加工を施している。5は縦長の薄い剥片を加工したもの。右側縁に正面から加工を施している。6は自然面を残すもので、先端部に使用痕が確認できる。7は使用痕剥片である。上部に二次加工を、左側縁部に使用痕を観察できるが、表面の風化が激しい。8・9は、台形石器である。8は玉髄製の縦長剥片の両側縁部に急角



第16図 旧石器 7

度の二次加工を施している。9はやや厚みのある黒曜石B製。右側面部は先端部から基部にかけて二次加工が施される。10～12はスクレイパーである。10は自然面を残す縦長剥片で、裏面から両側縁部に二次加工を施し、刃部を形成している。11は、横長の剥片を加工し、下部に刃部を形成している。12も下部に刃部を形成している。また、左側縁上部に細かな二次加工が施されている。13は礫器である。正面全体に自然面を残すもので、下部に鋸歯状の刃部を形成している。

ブロック 1（第12図14～17）

I・K－8区にわたる、径約6m×6mの範囲に分布するブロックである。分布の様子から、調査区外にも範囲が広がっていると考えられる。黒色安山岩、頁岩が集中して出土している。

14は使用痕剥片である。縦長剥片を素材とし、上部に二次加工を施している。15は細石刃核である。平坦な面を打面として設定し、小口面から細石刃を取り出している。16は黒曜石Aの細石刃（スポール）である。17は頁岩製の礫器である。正面・背面に自然面を残す、手のひら大の角礫を素材としている。

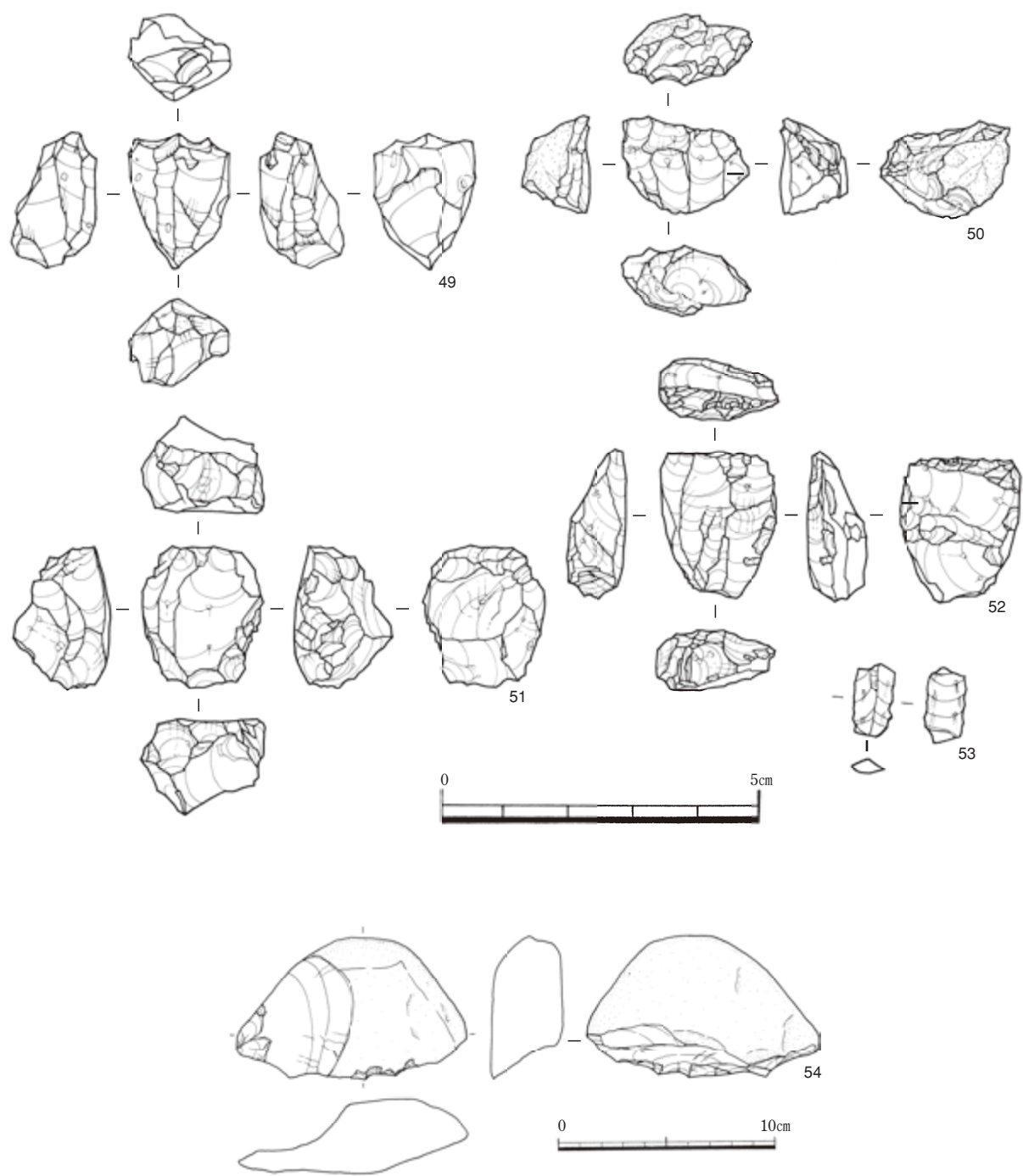
ブロック 2（第13・14図18～29）

J－8区の径約9m×6mと東西にわたるブロックである。石材別出土状況は、黒曜石Aを主体とし、黒曜石B、シルト質頁岩が出土している。また、細石刃核が集中して出土している。

18はナイフ形石器である。縦長剥片を素材とし、両側縁部に細かな加工を施している。上部に自然面を残す。19～28は細石刃核である。19は自然面をのこすもので、左側縁部を作業面としている。21は横長の薄い剥片を素材としている。22は正面に作業面を有する。23は自然面を裏面に残す角礫を素材とし、正面に作業面を有する。24は幅広の礫を利用したもので、打面は後方に傾斜する。25も打面は後方に傾斜している。26は横長の剥片を加工しており、正面に作業面を有する。27は打面が平坦で後方に傾斜している。作業面は正面で、左側縁部にいくに従って薄くなっている。下部が窄まり、全体が楔形を呈する。28は黒曜石Bで、裏面・右側面に自然面を残すものである。左側面上部に細かな調整がある。29は細石刃である。右側縁部に使用痕が確認できる。



第17図 旧石器 8

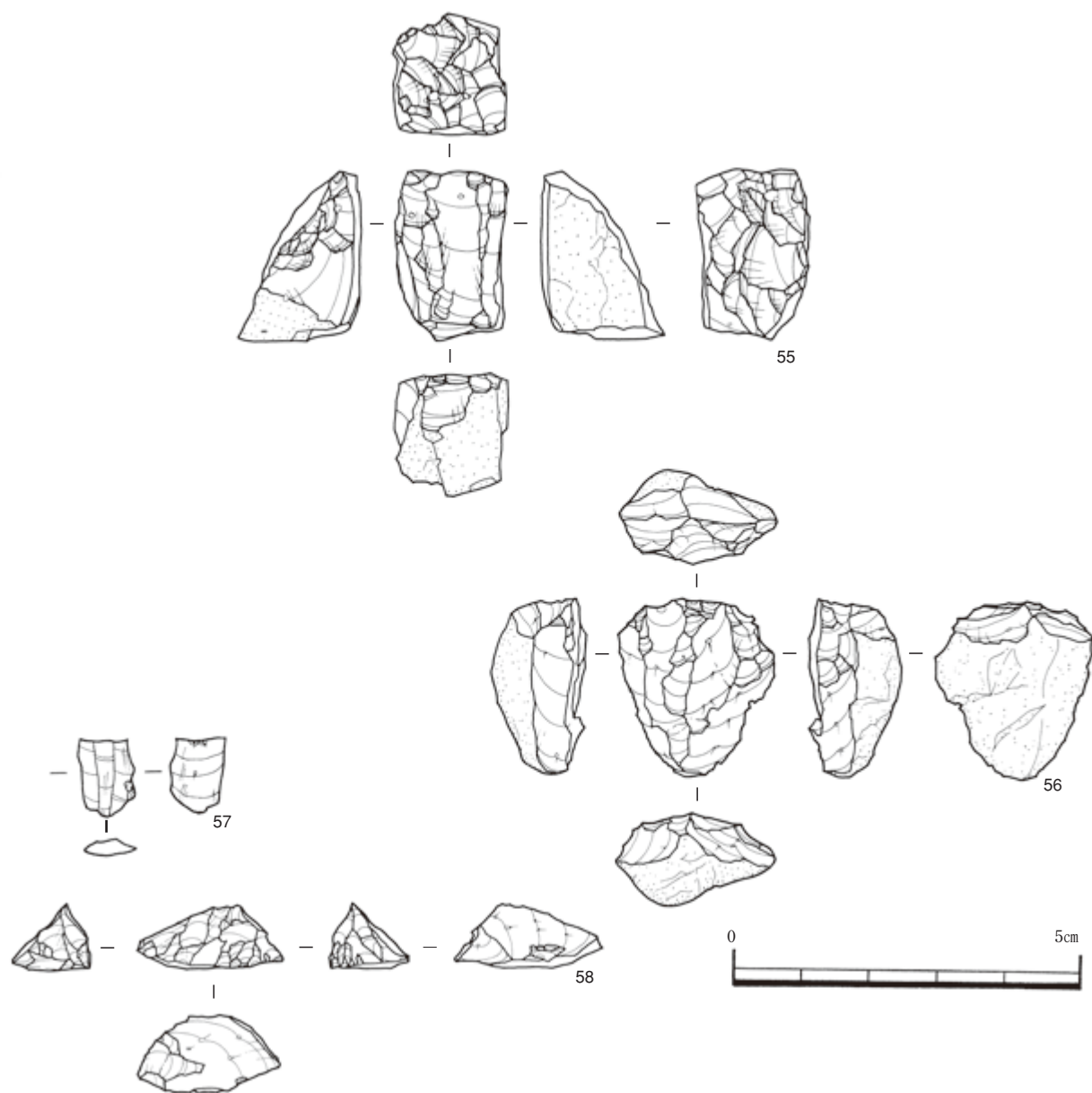


第18図 旧石器 9

ブロック 3 (第15・16図30~42)

I - 9 区の北東から南西に細長く分布する、径約 15m×9mのブロックである。全面にわたり黒曜石 A が多く出土している。特に南東側に密集区が存在し、細石刃核、細石刃が出土しており、石器製作所だった可能性がある。ほかには、頁岩、黒曜石 B が点在している。

30は黒曜石 A のナイフ形石器である。先端部から打撃を加えた縦長剥片を素材とし、左側縁部に急角度のブランディングを施している。31~33は細石刃核である。31は黒曜石 A。角礫を素材としている。正面を作業面としているが、裏面にも細かな調整が施されている。32は右側面部に自然面を残すものである。平坦部を打面とし、後方に長く傾斜している。



第19図 旧石器10

33も平坦部が後方に傾斜している。正面が作業面であるが、両側面が裏面に向かって窄まり、上面から見ると三角形になる。34～40は細石刃である。石材はすべて黒曜石Aである。34はスポールで、断面が台形を呈する。37は左側縁部にわずかながら使用痕が観察できる。41は頁岩製のスクレイパーである。薄い横長剥片を素材として、下部に正面から加工を施し刃部を形成している。右側面、上面にも加工が確認できる。42は礫器である。自然面の残る拳大の角礫を素材としている。正面と左上部に加工による凹みがあり、握り部分としたと思われる。

ブロック 4（第17図43）

Jー8区の径約6 m×7 mのブロックである。黒曜石Aが集中して出土している。

43は細石刃核である。平坦面を打面としているが、正面の作業面が狭い。

ブロック 5（第17・18図44～54）

Jー8区の径約6 m×6 mのブロックである。中心部に黒曜石Aが集中して出土している。また、このブロックでのみ、水晶製の石器が多く出土しているのが特徴である。

44・45はナイフ形石器である。44は右側面に急角

旧石器時代石器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
						cm	cm	cm	g	
第10図	1	K-8	VIII	ナイフ	黒色安山岩	2.85	1.5	0.75	2.54	
	2	K-8	VIII	ナイフ	頁岩	3.55	1.8	0.5	3.13	
	3	K-8	VIII	ナイフ	玉髄	2.9	1.6	0.45	2.04	
	4	K-8	VIII	ナイフ	頁岩	6	1.8	1	10.78	
	5	J-8	VIII	ナイフ	頁岩	5.75	2.8	1.15	16.3	
	6	K-8	VIII	ナイフ	頁岩	5.65	3.3	1.3	18.58	
	7	K-8	VIII	使用痕剥片	頁岩	5.95	2.35	0.95	10.9	
第11図	8	J-8	VIII	台形石器	玉髄	3.4	1.5	1.05	3.88	
	9	J-8	VIII	台形石器	黒曜石C	2.8	1.5	0.85	4.06	
	10	K-8	VIII	スクレイパー	頁岩	5.6	3	0.9	20	
	11	K-8	VIII	スクレイパー	頁岩	4.9	6.8	1.65	60	
	12	K-8	VII	スクレイパー	頁岩	6.05	6.95	1.55	60	
	13	K-8	VIII	礫器	頁岩	8.3	11.8	2.6	400	
第12図	14	J-8	VIII	使用痕剥片	シルト質頁岩	5.2	1.8	0.8	7.6	
	15	I-8	VIII	細石刃核	黒曜石A	1.65	1.4	1.8	3.42	
	16	J-8	VIII	細石刃	黒曜石A	2	0.8	0.25	0.33	
	17	J-8	VIII	礫器	頁岩	12.1	14.2	6.4	1158	
第13図	18	J-8	VIII	ナイフ	黒曜石A	2.55	1.7	0.6	2.52	
	19	J-8	VIII	細石刃核	黒曜石A	1.7	2.3	1.4	4.72	
	20	J-8	VIII	細石刃核	黒曜石A	1.85	1.65	2	5.63	
	21	J-8	VIII	細石刃核	黒曜石A	1.85	1.8	0.9	2.36	
	22	J-8	VIII	細石刃核	黒曜石A	1.8	1.9	1.25	3.91	
	23	J-8	VIII	細石刃核	黒曜石A	2	1.9	1.4	5.65	
	24	J-8	VIII	細石刃核	黒曜石A	2.8	3	1.4	10.72	
	25	J-8	VIII	細石刃核	黒曜石A	2.4	1.5	1.7	4.24	
第14図	26	J-8	VIII	細石刃核	黒曜石A	1.65	1.6	0.9	1.83	
	27	J-8	VIII	細石刃核	黒曜石A	2.45	1.75	1	3.54	
	28	J-8	VIII	細石刃核	黒曜石B	1.65	1.35	1.1	2.06	
	29	J-8	VIII	細石刃	黒曜石A	0.95	0.6	0.2	0.08	
第15図	30	J-9	VIII	ナイフ	黒曜石A	3.5	1.75	1.05	5.13	
	31	J-9	VIII	細石刃核	黒曜石A	2.3	1.85	1.4	5.23	
	32	J-9	VIII	細石刃核	黒曜石A	2.35	1.3	1.5	3.57	
	33	J-9	VIII	細石刃核	黒曜石A	1.8	2	1.7	4.23	
	34	J-9	VIII	細石刃	黒曜石A	1.4	0.7	0.2	0.34	
	35	J-9	VIII	細石刃	黒曜石A	1.15	0.7	0.3	0.17	
	36	J-9	VIII	細石刃	黒曜石A	1.2	0.6	0.2	0.09	
	37	J-9	VIII	細石刃	黒曜石A	1.35	0.65	0.3	0.21	
	38	J-9	VIII	細石刃	黒曜石A	1.1	0.65	0.25	0.26	
	39	J-9	VIII	細石刃	黒曜石A	1.15	0.6	0.15	0.12	
	40	J-8	VIII	細石刃	黒曜石A	1	0.6	0.2	0.1	
第16図	41	J-9	VIII	スクレイパー	頁岩	6.5	10.8	1.3	70	
	42	J-9	VIII	礫器	頁岩	12.45	4.7	1.4	465	
第17図	43	J-8	VIII	細石刃核	黒曜石A	1.45	1.8	1.85	4.47	
	44	J-8	VIII	ナイフ	シルト質頁岩	3.5	1.35	0.9	3.6	
	45	J-8	VIII	ナイフ	頁岩	5.05	1.7	0.6	5.5	
	46	J-8	VIII	細石刃核	水晶	1.75	1.9	1.4	4.24	
	47	J-8	VIII	細石刃核	水晶	1.45	1.1	1.6	2.43	
	48	J-8	VIII	細石刃核	水晶	1.8	1.9	0.9	3.24	
	49	J-8	VIII	細石刃核	黒曜石A	2.1	1.65	1.3	3.24	
第18図	50	J-8	VIII	細石刃核	黒曜石A	1.5	2	1.1	2.96	
	51	J-8	VIII	細石刃核	黒曜石A	2.2	1.9	1.5	6.03	
	52	J-8	VIII	細石刃核	黒曜石A	2.3	1.85	0.95	4.25	
	53	J-8	VIII	細石刃	黒曜石A	1.1	0.6	0.25	0.11	
	54	J-8	VIII	礫器	頁岩	6.1	10.6	3.4	270	
	55	K-9	VIII	細石刃核	黒曜石A	2.55	1.65	1.6	8.4	
第19図	56	K-9	VIII	細石刃核	黒曜石A	2.6	2.3	1.4	7.43	
	57	J-9	VIII	細石刃	黒曜石A	1.2	0.8	0.25	0.17	
	58	J-9	VIII	スクレイパー	黒曜石A	1.2	2.1	0.9	1.68	

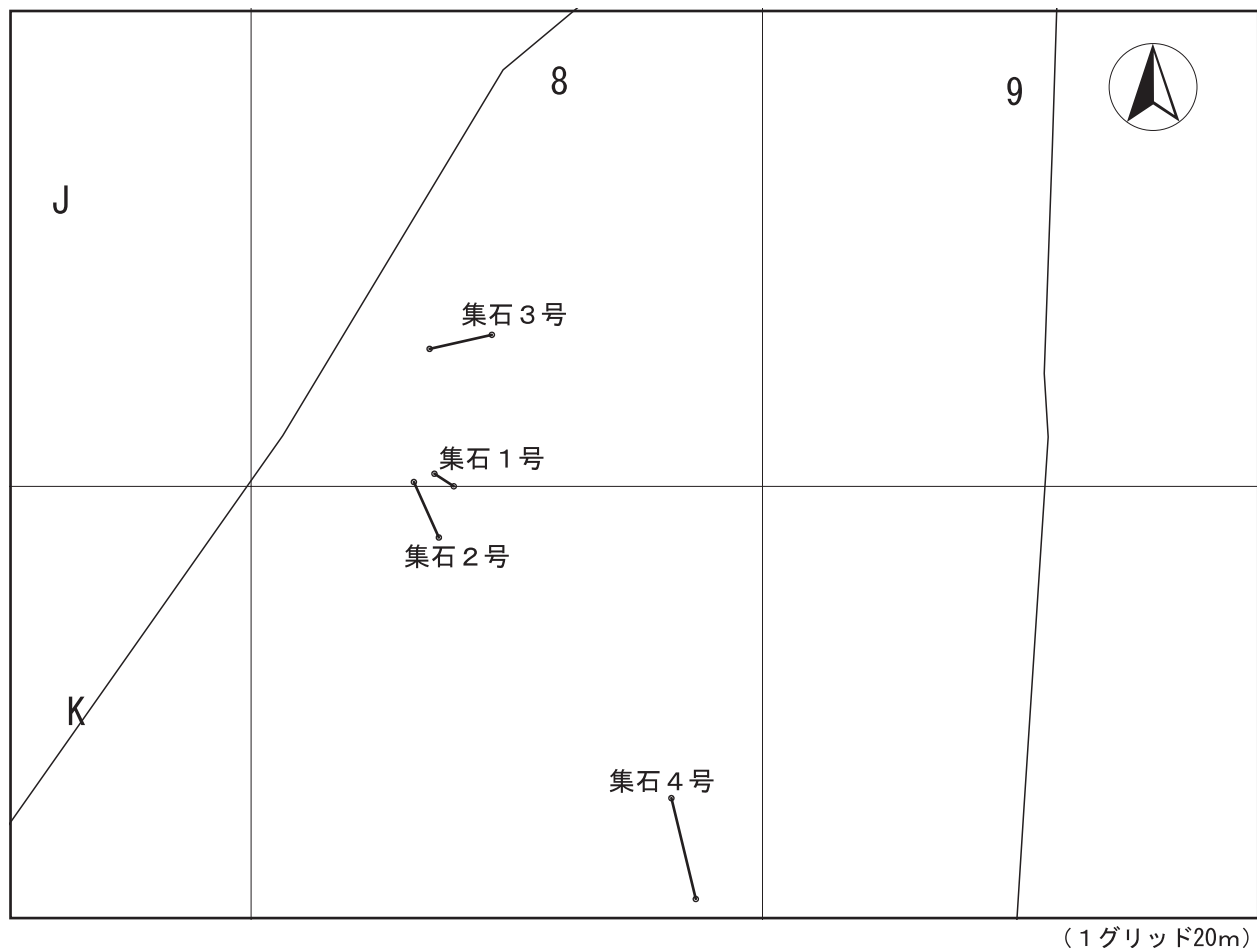
度のブランディングを施す。45は両側縁先端部に細かなブランディングを施すものである。46～52は細石刃核で、46～48は水晶製である。46は底面と裏面に自然面を残すもので、上部が側面から見るとV字状になる。47は平坦面を打面とし、正面の作業面と垂直になる。48は平坦面を打面とし後方に傾斜する。正面の作業面と、ほぼ平行する裏面を有する。49は薄手の剥片で打面が狭い。50は左側面と裏面に自然面を残すものである。51は右側面に細かな調整が観察できる。打面が狭く裏面上部を欠損する。52は上部から下部にかけて逆V字状を呈するもので、打面は薄く残っている。作業面は正面であるが、背面にも剥離が観察できる。53は黒曜石Aの細石刃である。両側縁に使用痕を観察できる。54は礫器である。自

然面を残す円礫を加工したもので、主に裏面より剥離を形成している。

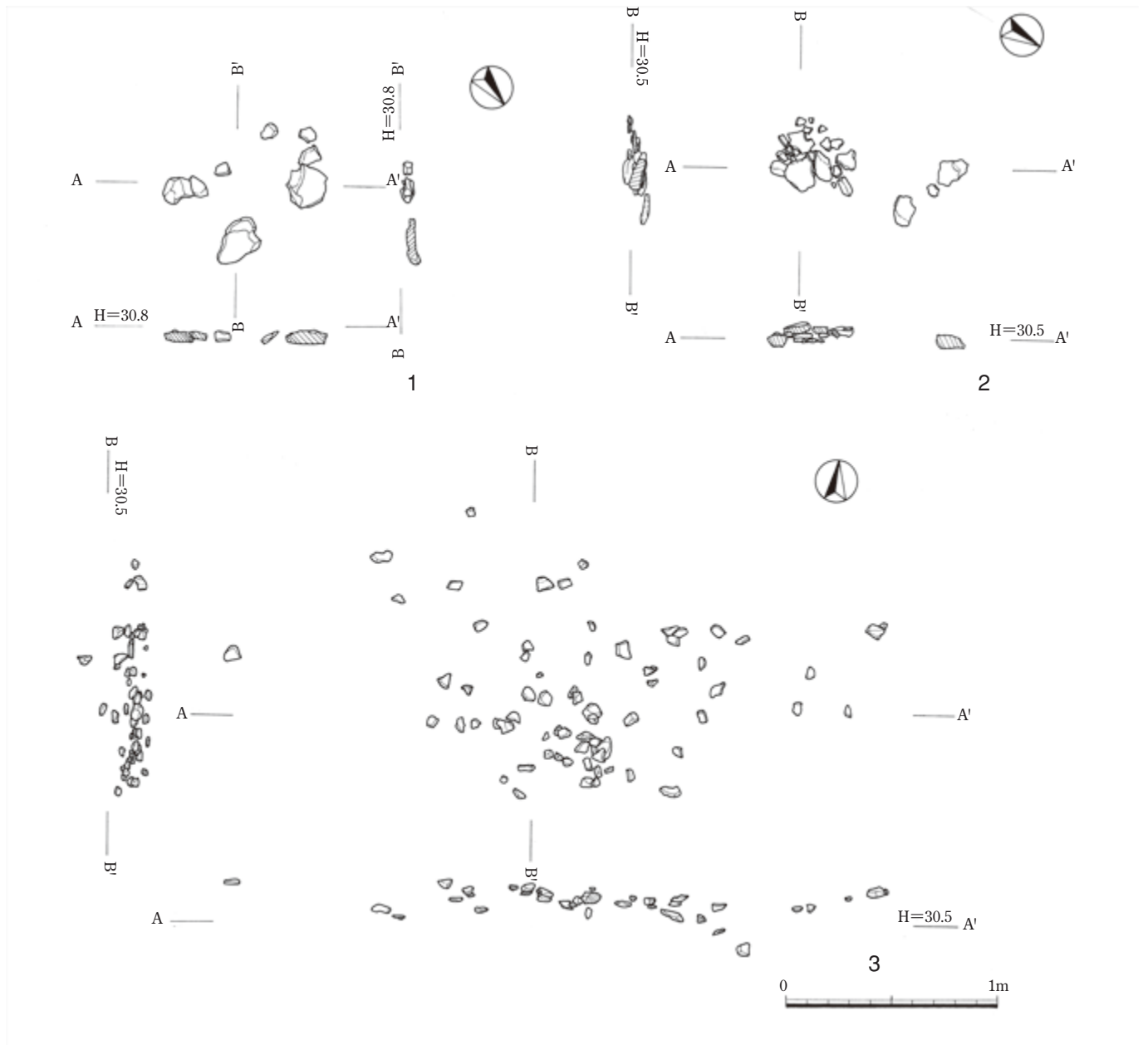
ブロック7（第19図55～58）

J—9，K—8～9区に北東から南西方向にわたる径約12m×7mに分布するブロックである。石材は黒曜石Aがほとんどである。

55・56は細石刃核である。55は底面・右側面に自然面を残すもので、打面は底部まで後方に傾斜する。作業面は平坦で、2cmほどの長さを有する。56は裏面から両側面にかけて自然面を残すもので、調整があまり見られない。57は細石刃である。やや幅広で、断面が台形状になる。58は黒曜石Aのスクレイパーである。三角錐状の形状を呈し、下面は平坦になる。正面下部に細かな剥離を観察できる。



第20図 縄文時代草創期遺構配置図



第21図 縄文時代草創期集石遺構 1

第5節 縄文時代の調査

1 縄文時代草創期の調査

草創期では、Ⅶ層より集石が4基検出された。礫数には差がある。

集石1（第21図）

J-8区で検出した。礫数8，平均重量627.5gである。20cm大の大きな礫が使われている。礫数が少なく，まばらに散在する。

集石2（第21図）

K-8区で検出した。礫数23，平均重量245.2gで

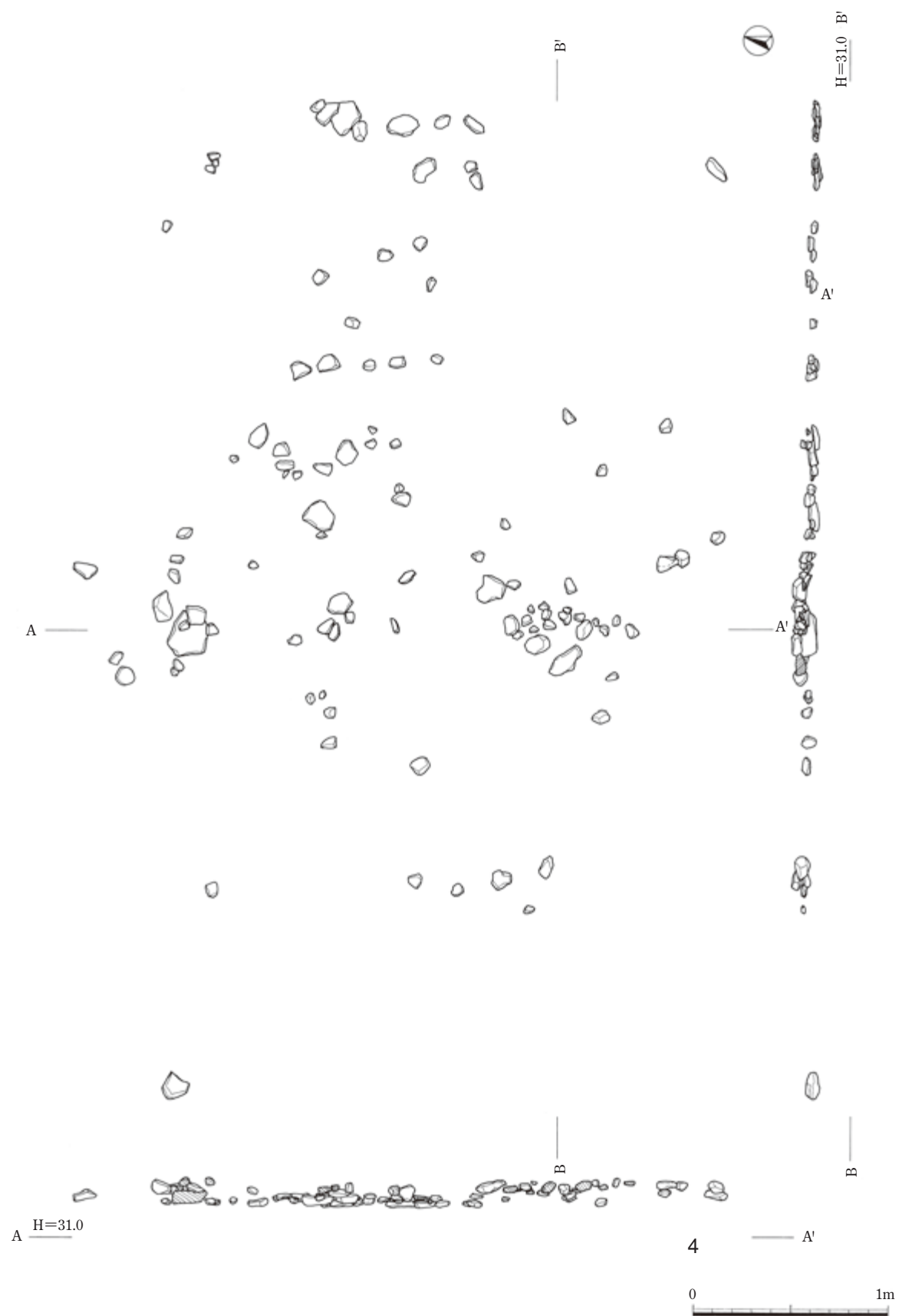
ある。南側に集中部分があり，20cm大の礫が重なり合っている。

集石3（第21図）

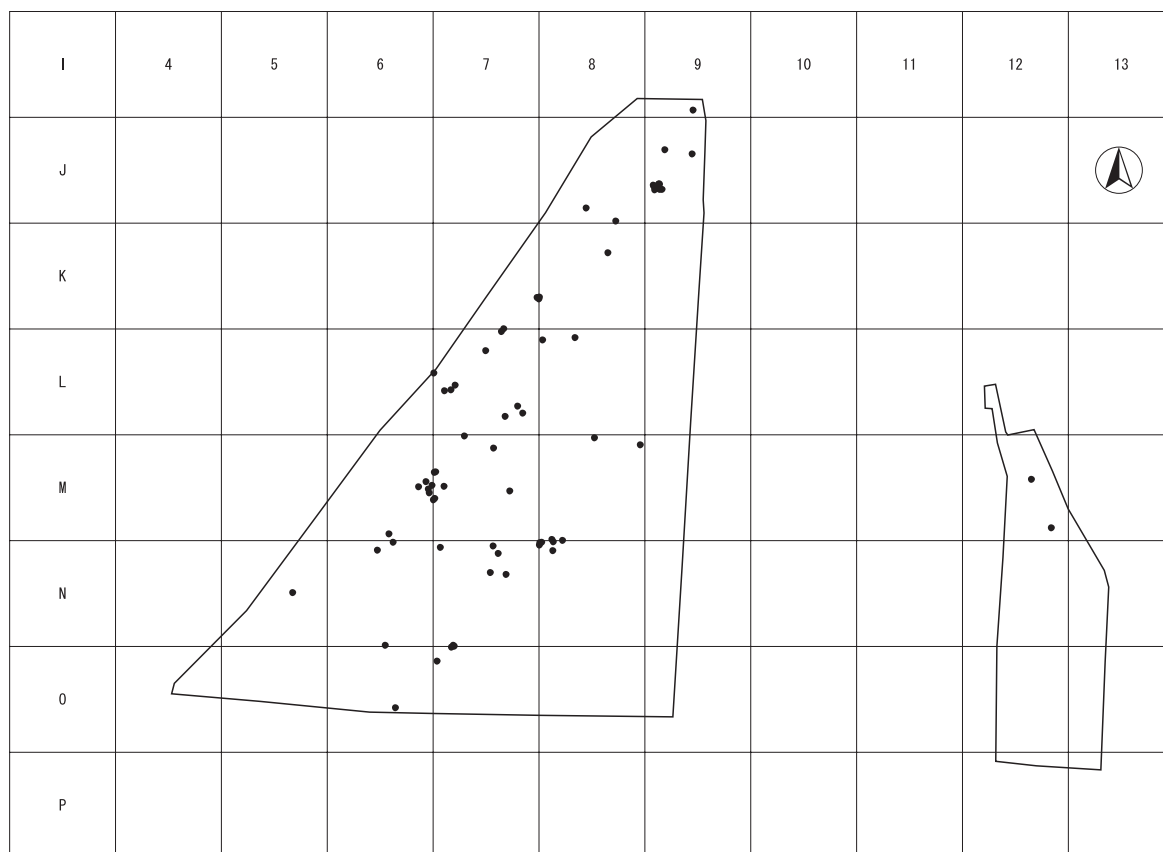
J-8区で検出した。礫数70，平均重量90.43gである。10cm大の礫が全面に散在した状態である。集中区はあるが，数は少ない。

集石4（第22図）

K-8区で検出した。礫数104，平均重量189.95gである。径約5m×3.5mと広範囲に礫が散在しており，明確な集中区は見られない。

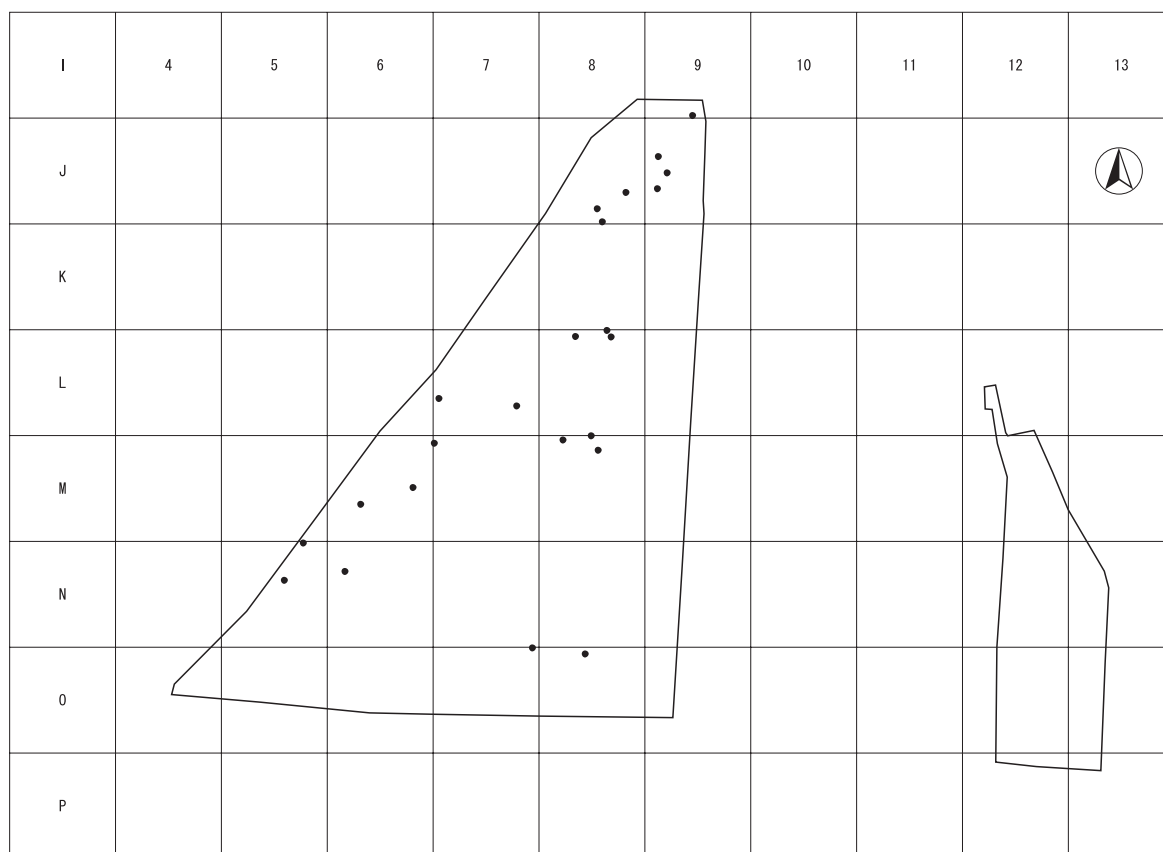


第22図 縄文時代草創期集石遺構 2



土器出土状況図

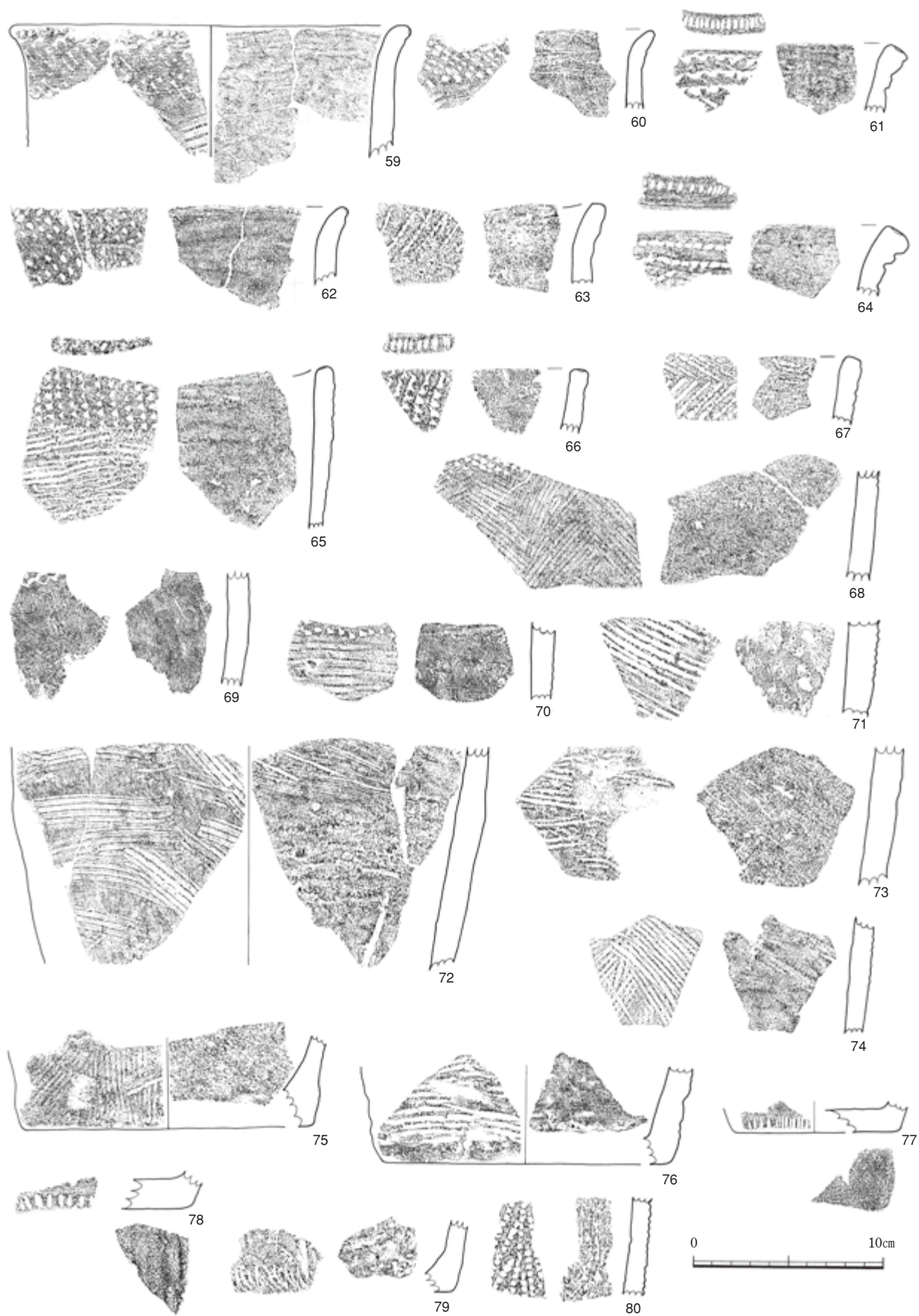
(1グリッド20m)



石器出土状況図

(1グリッド20m)

第23図 縄文時代早期遺物出土状況図



第24図 I 類・II 類土器

2 縄文時代早期の調査

早期では遺構がなく、土器と石器がⅣ層から検出された。土器は数が少なく、早期中葉のものが主体で、Ⅰ～Ⅳ類に分類した。石器も数は少なく、磨製石斧、礫器、磨石、敲石などが出土している。

(1) 土器 (第24・25図)

Ⅰ類土器 (第24図59～79)

Ⅰ類土器は、口縁部に貝殻刺突文が廻り、胴部には貝殻条痕文が施されている円筒形の土器である。器壁は厚く、口縁部がやや肥厚するものが多い。

59～67は口縁部である。59～64は口縁部がゆるやかに外反し、65～67は口縁部が直行する。59は、口縁部に貝殻刺突文を羽状に施し、口唇部外側に刻みを施すものである。60は、斜位の刺突文が口縁部に施されている。61は、口縁部に横位の刺突文が3条廻る。64は、横位の刺突文と斜位の刺突文の組み合わせである。口唇部に刻み目がある。65は、口唇部が波状になるものである。67は、口縁部の刺突文が羽状に施され、口唇部は平坦である。68～74は胴部である。胴部には貝殻条痕文が横位や斜位に施されている。68は、条痕文が綾杉状に施されている。69は、口縁部の刺突文は確認できるが、胴部の施文は風化により確認できない。72は、外面の条痕文がまばらに施されている。内面は、ヘラケズリで横方向に調整されており、木目が確認できる。75～79は、底部である。残存部が少なく、胴部の文様が判別しにくいいため、一括してⅠ類土器の底部で扱うことにした。75は縦位に、76は横位に貝殻条痕文が外面に施されている。77～79は、外面下部に刻み目が施されている。

Ⅱ類土器 (第24図80)

Ⅱ類土器は、80のみである。円筒の胴部で、外面は貝殻刺突文を縦位と斜位に施すものである。内面は縦方向にヘラケズリが施されている。

Ⅲ類土器 (第25図81～83)

Ⅲ類土器は、器形は円筒で、口縁は直行する。口縁部から貝殻条痕文が横位に施されている。81は、口縁部である。横位の条痕文が約1.5mm間隔で施されている。82・83は、胴部である。横位の条痕文が廻らされているが、83は、間隔が空く。

Ⅳ類土器 (84・85)

Ⅳ類土器は2点である。円筒形で、浅い条痕文が施されている。84・85ともに口縁部で、外面に条痕文が斜位に施される。85は、口唇部がやや肥厚する。

(2) 石器 (第26～30図)

石鏃 (86～88)

86は、両面から細かな剥離が施されて、先端が鋭く伸びている。87は、先端部分が欠損している。88は、小型で挟りが施されていない。

石斧 (89)

89は、磨製の石斧である。表面を縦方向に磨いている。刃部・裏面が欠損・剥落している。

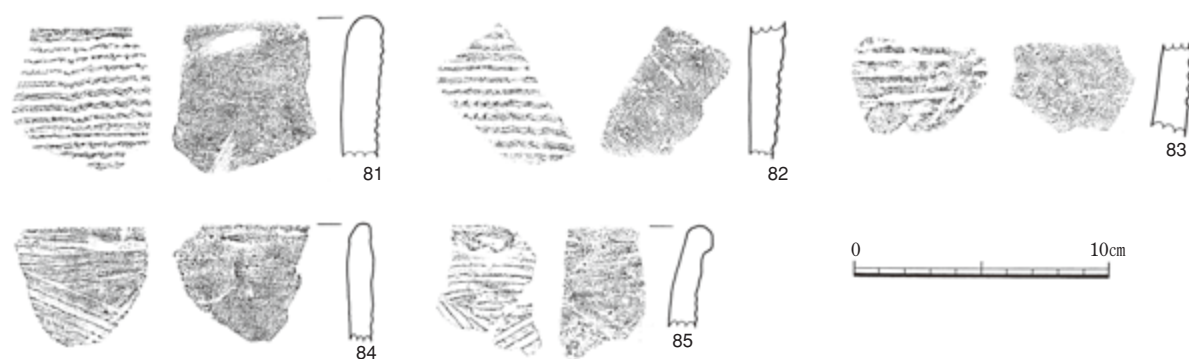
礫器 (90)

90は、頁岩製の礫器である。拳大の礫の下部に剥離を形成している。また、上部の細かな剥離は、握りやすくするためのものと思われる。

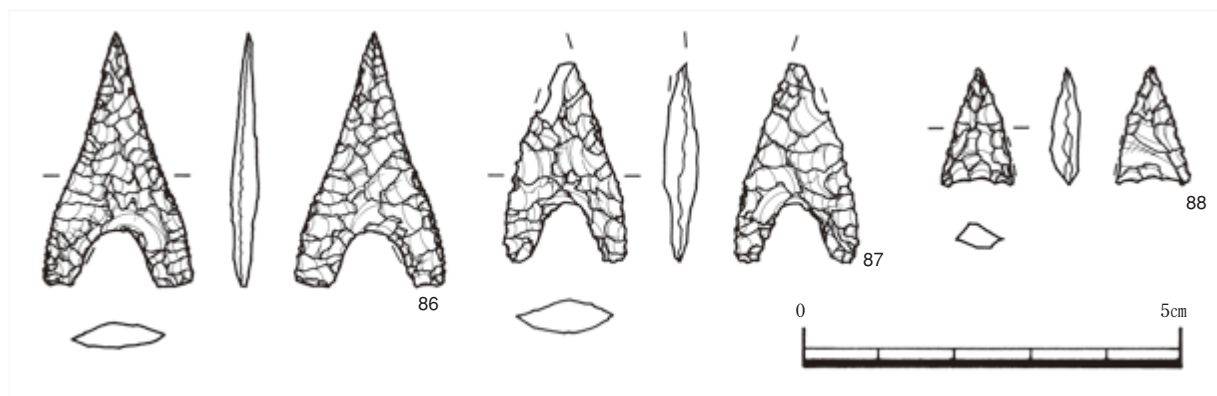
スクレイパー (91)

91は、頁岩製のスクレイパーである。自然面を残す横長剥片を加工している。

磨石・敲石 (92～103)



第25図 Ⅲ類・Ⅳ類土器



第26図 縄文時代早期石器 1

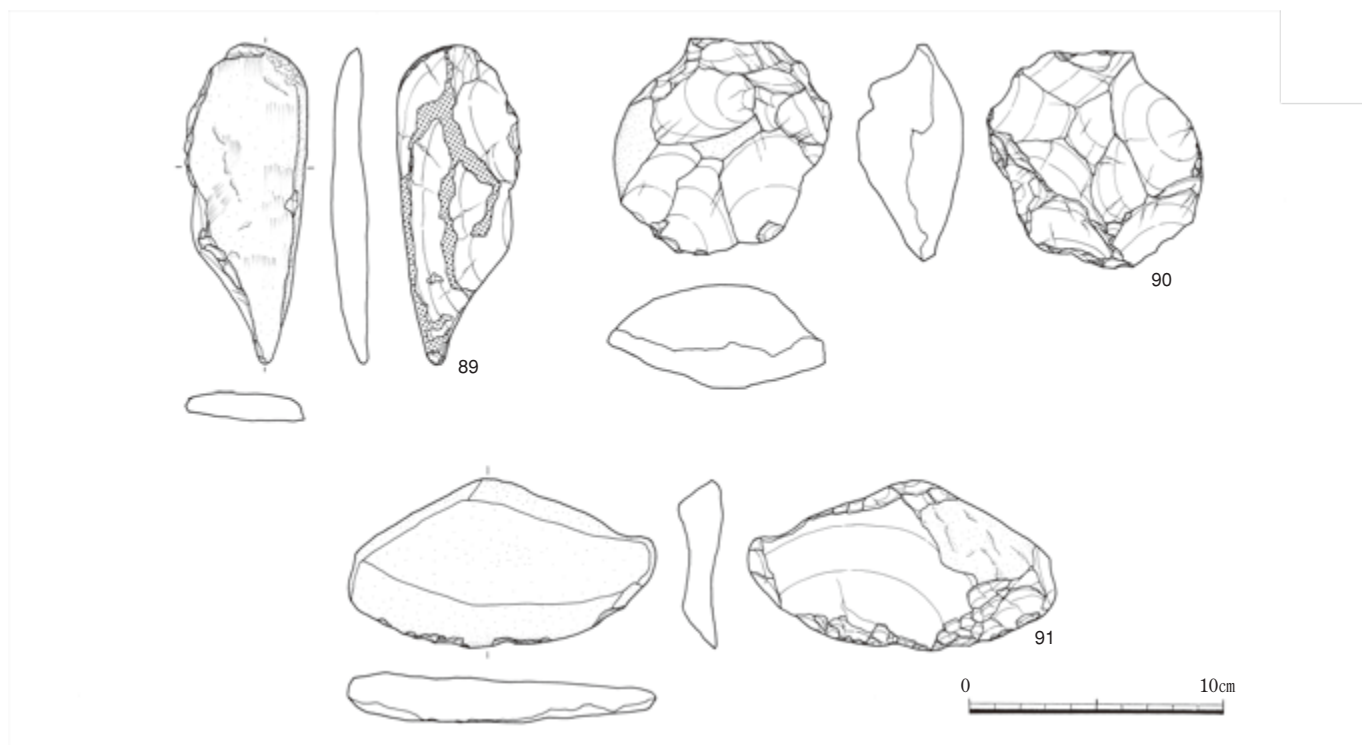
92～103は、磨石・敲石である。93は全面に敲打痕が多数見られる。94は、上部のみ敲打痕がある。95～103は、ほぼ円形となるものである。

石皿 (104)

104は、安山岩製の石皿。正面全体に使用痕が残る。裏面は大きな加工が見られず、不安定である。

縄文時代早期土器観察表

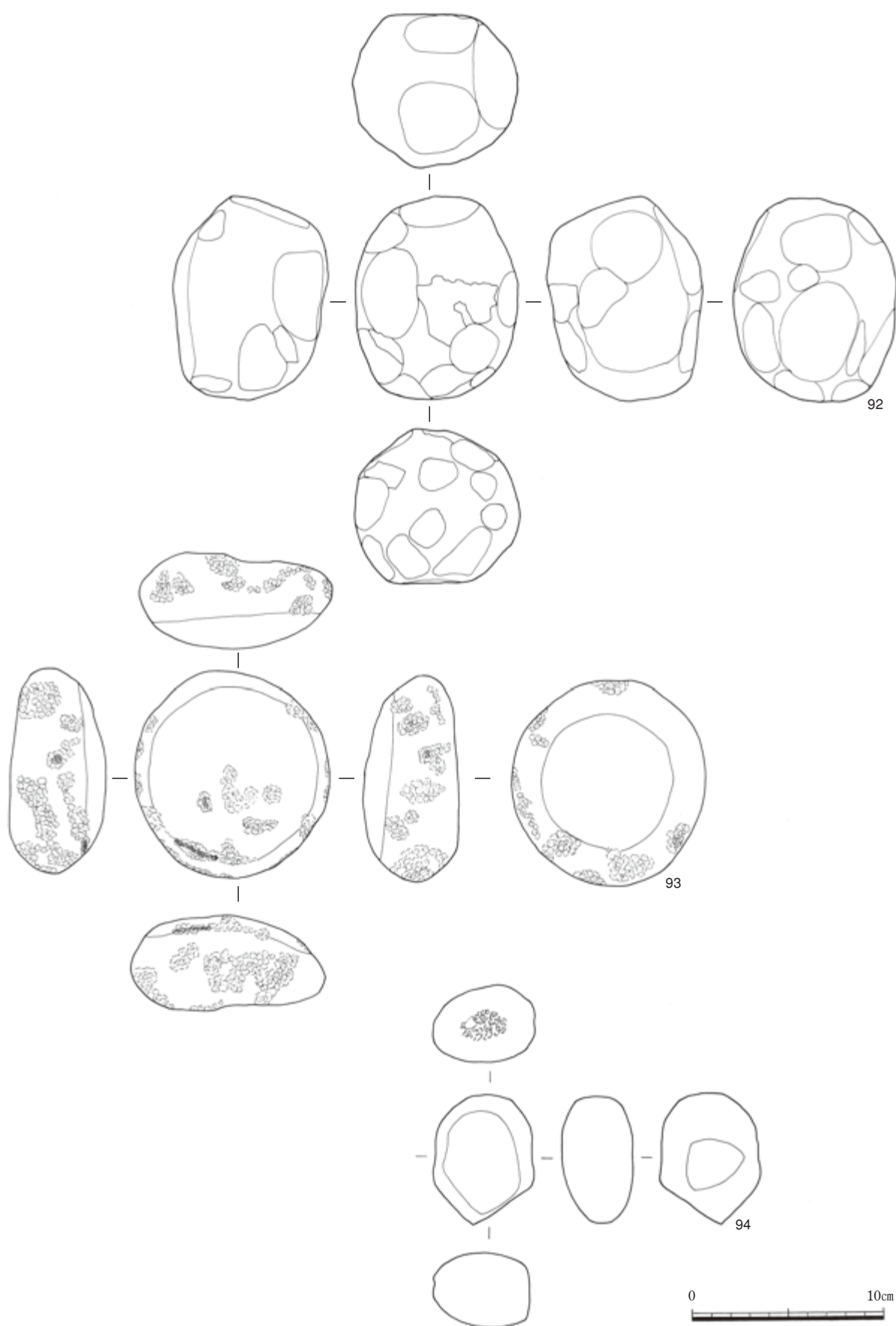
挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	部位	色調		胎土				焼成	外 面	内 面	備 考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他				
第 24 図	59	O-7	IV	口縁部	赤褐	赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ミガキ	
	60	N-6	IV	口縁部	にぶい黄橙	浅黄	○	○			良	貝殻刺突文	ナデ	
	61	—	—	口縁部	橙	にぶい橙	○	○			良	貝殻刺突文	ナデ	
	62	M-6	IV	口縁部	橙	明黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ナデ	
	63	J-9	IV	口縁部	橙	明黄褐	○	○			良	貝殻刺突文	ナデ	
	64	—	—	口縁部	明赤褐	明赤褐	○	○			良	貝殻刺突文	ナデ	
	65	—	—	口縁部	にぶい赤褐	灰黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ナデ	
	66	M-12	III	口縁部	橙	明赤褐		○			良	貝殻刺突文	ナデ	
	67	—	—	口縁部	橙	にぶい黄橙	○	○			良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ナデ	
	68	—	—	胴部	橙	橙(スス付着)	○	○	○		良	貝殻刺突文・綾杉状貝殻条痕文	ナデ	
	69	—	—	胴部	黄褐	にぶい赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ナデ	
	70	—	—	胴部	にぶい赤褐	にぶい褐(スス付着)	○	○			良	条痕・刺突文	ナデ	
	71	J-9	IV	胴部	黒	赤褐	○	○			良	貝殻刺突文	ナデ	
	72	K-7	IV	胴部	黄灰	明黄褐	○	○	○		良	貝殻条痕文	条痕後ナデ	
	73	N-7	IV	胴部	にぶい黄橙	橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	74	—	—	胴部	橙	明黄褐	○	○			良	綾杉状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
	75	—	—	底部	橙	浅黄	○	○	○		良	貝殻条痕文		
	76	J-9	IV	底部	暗灰	明赤褐	○	○			良	貝殻条痕文	ハケ目・ナデ	
	77	—	—	底部	明赤褐	橙	○	○	○		良	刻目		
	78	—	—	底部	明赤褐	橙	○	○			良	刻目		
	79	—	—	底部	橙	にぶい橙	○	○			良	刻目	指圧痕	
	80	M-12	III	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○			良	刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
第 25 図	81	—	—	口縁部	にぶい黄橙	オリーブ黒	○	○	○		良	貝殻条痕文	ミガキ	
	82	—	—	胴部	浅黄	浅黄	○	○	○		良	貝殻条痕文	ミガキ	
	83	L-8	IV	胴部	明赤褐	褐	○	○			良	貝殻条痕文	ナデ	
	84	K-7	IV	口縁部	明黄褐	にぶい黄橙	○	○			良	条痕文	ナデ	
	85	M-12	IV	口縁部	灰黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	条痕文	ナデ	



第27図 縄文時代早期石器 2

縄文時代早期石器観察表

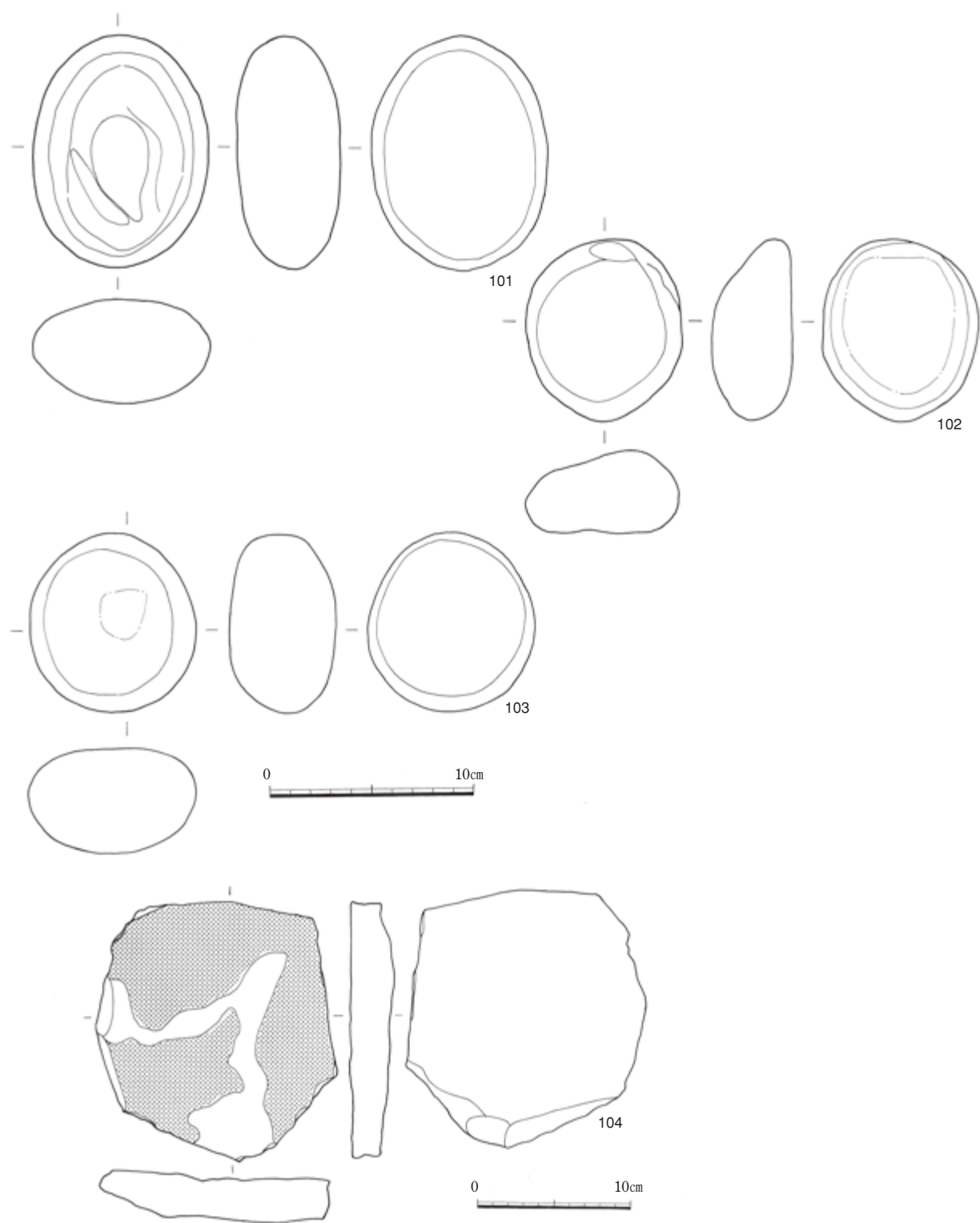
挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考 (分類)
						cm	cm	cm	g	
第 26 図	86	N-5	Ⅳ	打製石鏃	チャート	3.4	2	0.4	1.4	A-c-c
	87	M-8	Ⅳ	打製石鏃	黒曜石A	2.7	1.7	0.5	1.3	A-c-c
	88	K-9	Ⅶ	打製石鏃	黒色安山岩	1.6	1	0.4	0.4	A-b-b
第 27 図	89	J-8	Ⅷ	石斧	頁岩	7.9	11	4.6	118	
	90	O-8	Ⅳ	礫器	頁岩	8.55	8.5	4.1	260	
	91	O-7	Ⅳ	スクレイパー	頁岩	6.6	12.1	1.7	165	
第 28 図	92	J-8	Ⅷ	磨石	砂岩	10.7	8.6	8.1	1030	
	93	—	—	敲石	砂岩	10.8	10.2	5	730	
	94	J-9	Ⅷ	敲石	砂岩	6.7	5.3	3.8	200	
第 29 図	95	M-7	Ⅷ	磨石	砂岩	13.1	14.1	4.3	1240	
	96	J-9	Ⅷ	磨石	砂岩	7.4	6.1	3.6	210	
	97	K-8	Ⅷ	磨石	砂岩	11.6	9.1	5	600	
	98	J-9	Ⅷ	磨石	砂岩	6.25	5.85	4.6	200	
	99	K-8	Ⅷ	磨石	砂岩	14.5	8.5	5.9	910	
	100	J-9	Ⅷ	磨石	砂岩	7.5	6	3.8	240	
第 30 図	101	M-8	Ⅳ	磨石	砂岩	11.4	8.7	5.1	720	
	102	M-6	Ⅳ	磨石	砂岩	8.9	7.6	4	360	
	103	M-6	Ⅳ	磨石	砂岩	8.8	8.2	5.3	520	
	104	J-9	Ⅳ	石皿	安山岩	25	22.8	4.5	2930	



第28図 縄文時代早期石器 3



第29図 縄文時代早期石器 4



第30図 縄文時代早期石器 5

3 縄文時代中期・後期の調査

縄文時代中期・後期については、遺物の量が非常に少なく、遺構も検出されなかった。

遺物（第31図）

V類土器

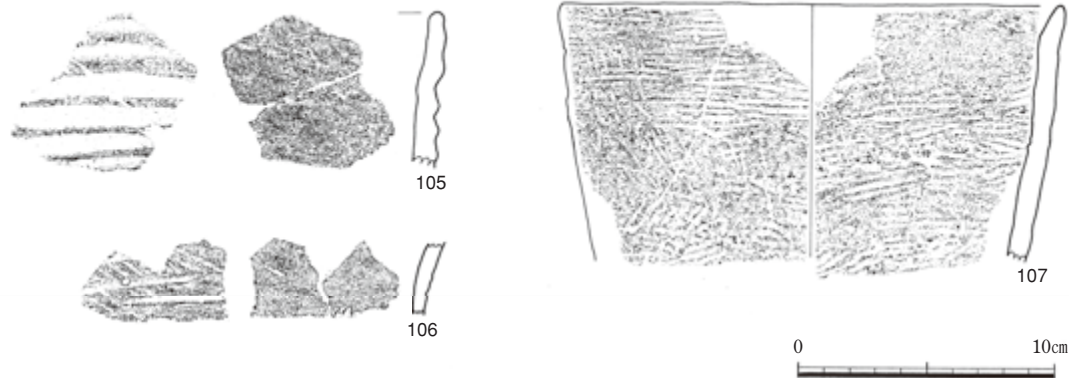
105の1点だけである。外面は約1 cm幅の凹線文、内面はナデで器面調整が施されている。

VI類土器

106の1点だけである。外面は浅い条痕文、内面はナデで器面調整が施されている。

VII類土器

107の1点だけである。口縁径19.8cmを測る円筒形の土器である。外面は条痕文、内面は条痕文後ナデが施されている。口縁がやや開き、厚さが一定ではないため、指でおさえて形成したものと思われる。



第31図 V類・VI類・VII類土器

縄文時代中後期土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	部位	色調		胎土				焼成	外 面	内 面	備 考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他				
第 31 図	105	O-6	Ⅳ	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	凹線文	ナデ	
	106	L-7	Ⅲ	胴部	暗灰黄	黒褐	○	○			良	条痕文	ナデ	
	107	L-7	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	橙	○	○			良	条痕文	条痕後ナデ	スス付着

4 縄文時代晩期の調査

縄文時代晩期の調査では、土坑2基、掘立柱建物跡3棟、柱穴列2列が検出された。（第32図）

（1）遺構

①土坑（第33図）

土坑は2基検出された。形状はほぼ円形で、土坑内から遺物も出土している。いずれの土坑も用途等詳細については不明である。

土坑1号

M-7区、Ⅲ層上面で検出された。平面プランは不整形で、イモ穴により南西側が一部削平をうけていた。深さ約10cm。埋土は暗灰色土で、2 mm大の炭化物が多く含まれていた。土坑内からは、土器108～110が出土している。

108は、円筒形土器の口縁部。外面はヘラケズリで調整されている。109は、精製の深鉢形土器の口縁部である。頸部からの立ち上がり内湾気味に外反する。内外面ともに、ていねいなヘラケズリを施されている。110は、深鉢の胴部である。外面はヘラケズリによる器面調整を施す。内面は風化により剥落している。

土坑2号

M-7区、Ⅲ層上面で検出された。平面プランは楕円で、長軸約90cm、短軸約82cm、深さ約20cm。埋土は暗茶褐色土で、炭化物がまばらに含まれていた。土坑内からは土器片が3点出土しているが、いずれも小片で掲載していない。

②掘立柱建物跡（第34図）

掘立柱建物跡と考えられる遺構が3棟検出された。いずれも1間×1間の建物で、農業開発総合センター遺跡群の各遺跡の晩期で多くみられる。柱穴等からの遺物は出土していない。

掘立柱建物跡1号

K-7区で検出された。いずれの柱穴にも、Ⅱ層の土が入っていた。

掘立柱建物跡2号

L-7区で検出した。P2・P3内は、明茶色のブロックを含む灰色の土が壁際で検出され、内側にⅡ層の土が入っていた。

掘立柱建物跡3号

L-7区で検出した。P1内は明茶色土、P2・P4内からはⅡ層の土、P3内には黄橙色のパミスを含む灰色の土が入っていた。

③柱穴列

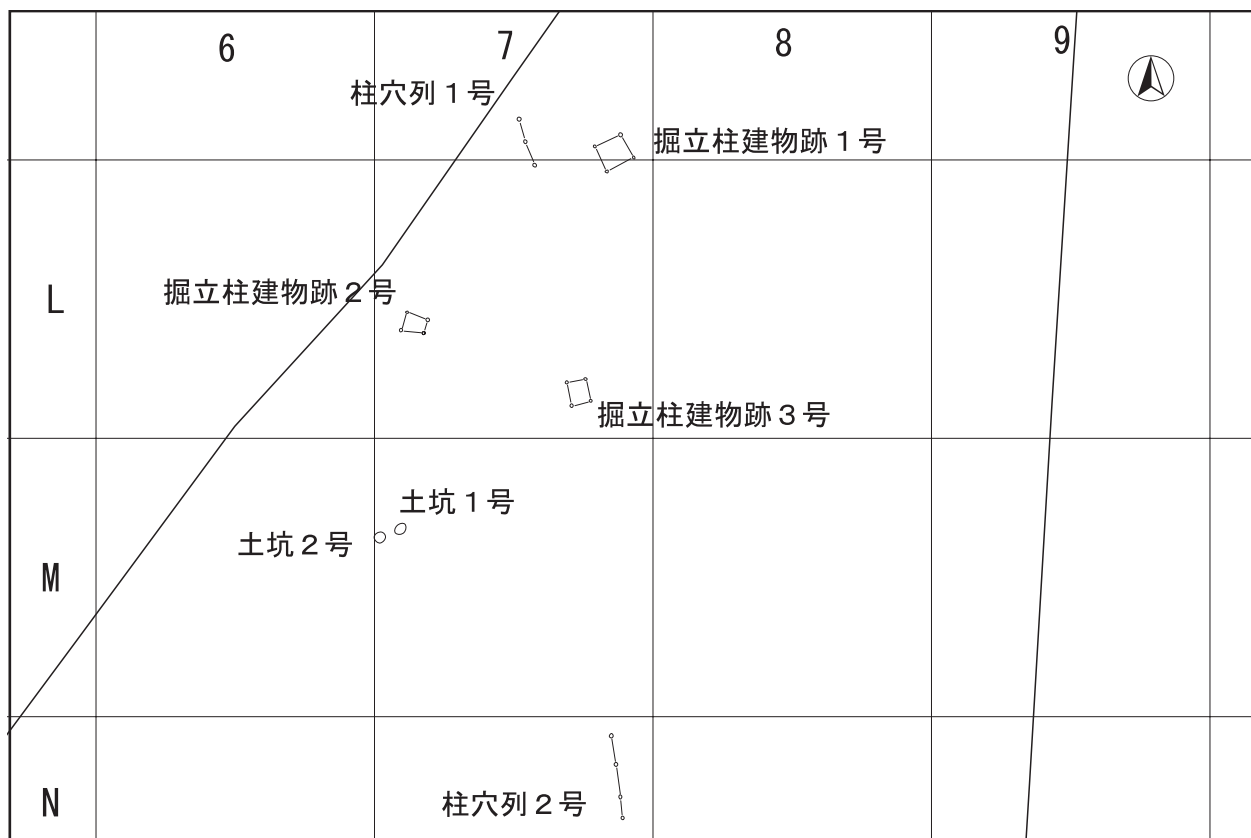
柱穴列は農業開発総合センター遺跡群においてはよく見られる遺構である。調査区内で柱穴と思われるものが20近く検出したが、3個以上の柱穴が直線上に並んでいるものを人為的な遺構としてとらえた。

柱穴列1号

K~L-7区で検出した。ほぼ南北方向に並んでいる。P1内は、茶黄色のブロックが混入する灰色の土が入っていた。P2・P3は、同じく灰色の土の内側に、Ⅱ層の土が入っていた。

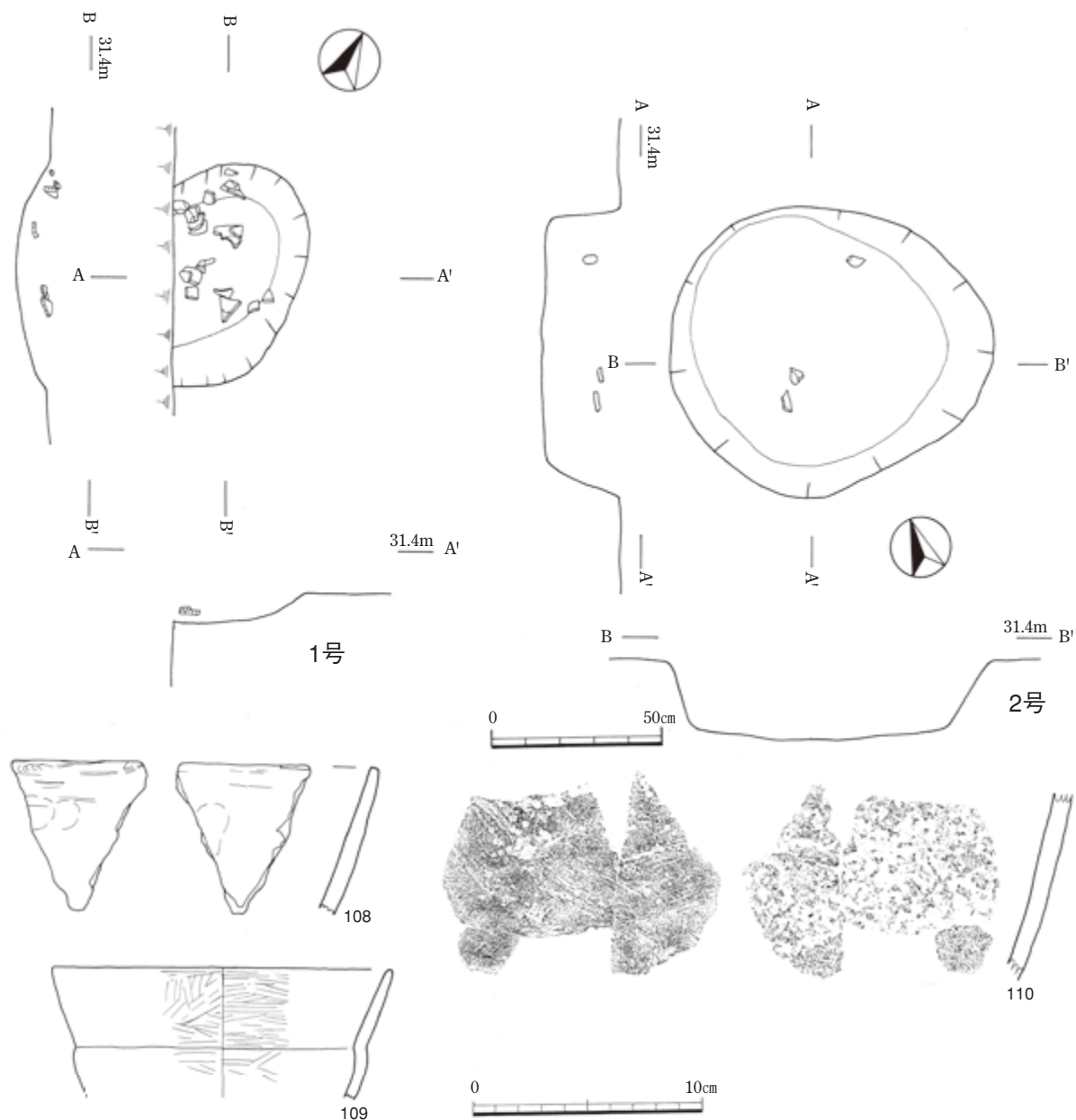
柱穴列2号

N-7区で検出した。ほぼ南北方向に並ぶ。いずれの柱穴も、掘り込みが浅く、底部は断面で円形に近い。P1~P3内は、外側に明茶色の土が混入した黒色土、内側にⅡ層の土が入っていた。P4内は、明茶色のさらさらした土とⅡ層の土が入っていた。



(1グリッド20m)

第32図 縄文時代晩期遺構配置図



第33図 縄文時代晩期土坑及び土坑内遺物

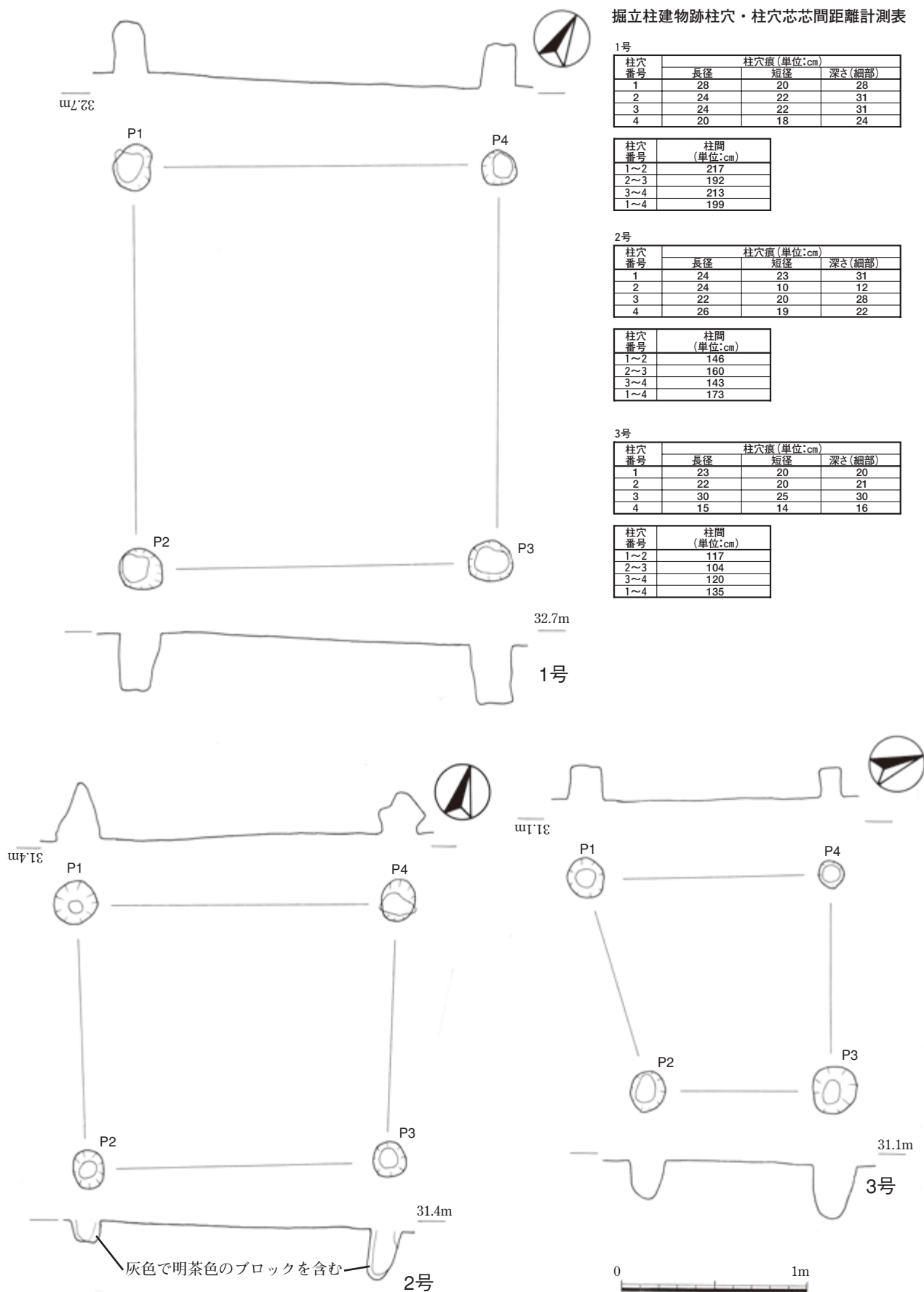
(2) 遺物

①土器 (第36図111~120)

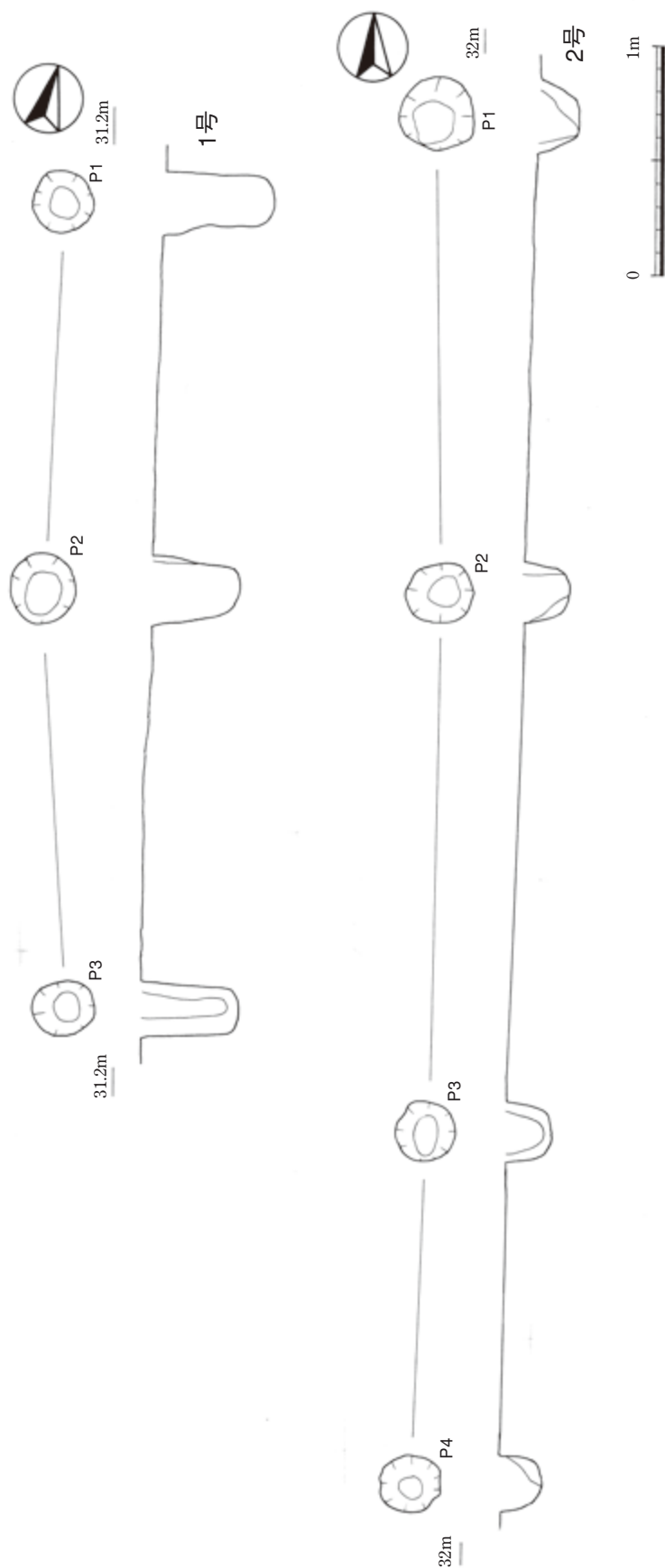
縄文時代晩期の土器は、深鉢形土器 (111~116) と浅鉢形土器 (117~120) に形態分類できる。概して深鉢形土器は粗製、浅鉢形土器は精製である。

111は、口縁部である。横位の沈線文を施す。上部の沈線は口縁に向かってあがっており、三叉文を形成している。112は、口唇部をヘラで平坦に仕上

げている。114は深鉢の胴部である。下位がやや丸みを帯びながら窄まる形状である。器面調整はヘラケズリで、下位で風化によると思われる剥落が見られる。115・116は底部である。117は、口縁部が外反し、肩部が「く」の字に内側に屈曲する精製土器である。口縁径45cmを測り、ていねいなミガキで器面調整が施されている。口縁部に沈線を廻らす。118も同じく精製土器の口縁部である。口唇部が丸



第34図 縄文時代晩期掘立柱建物跡

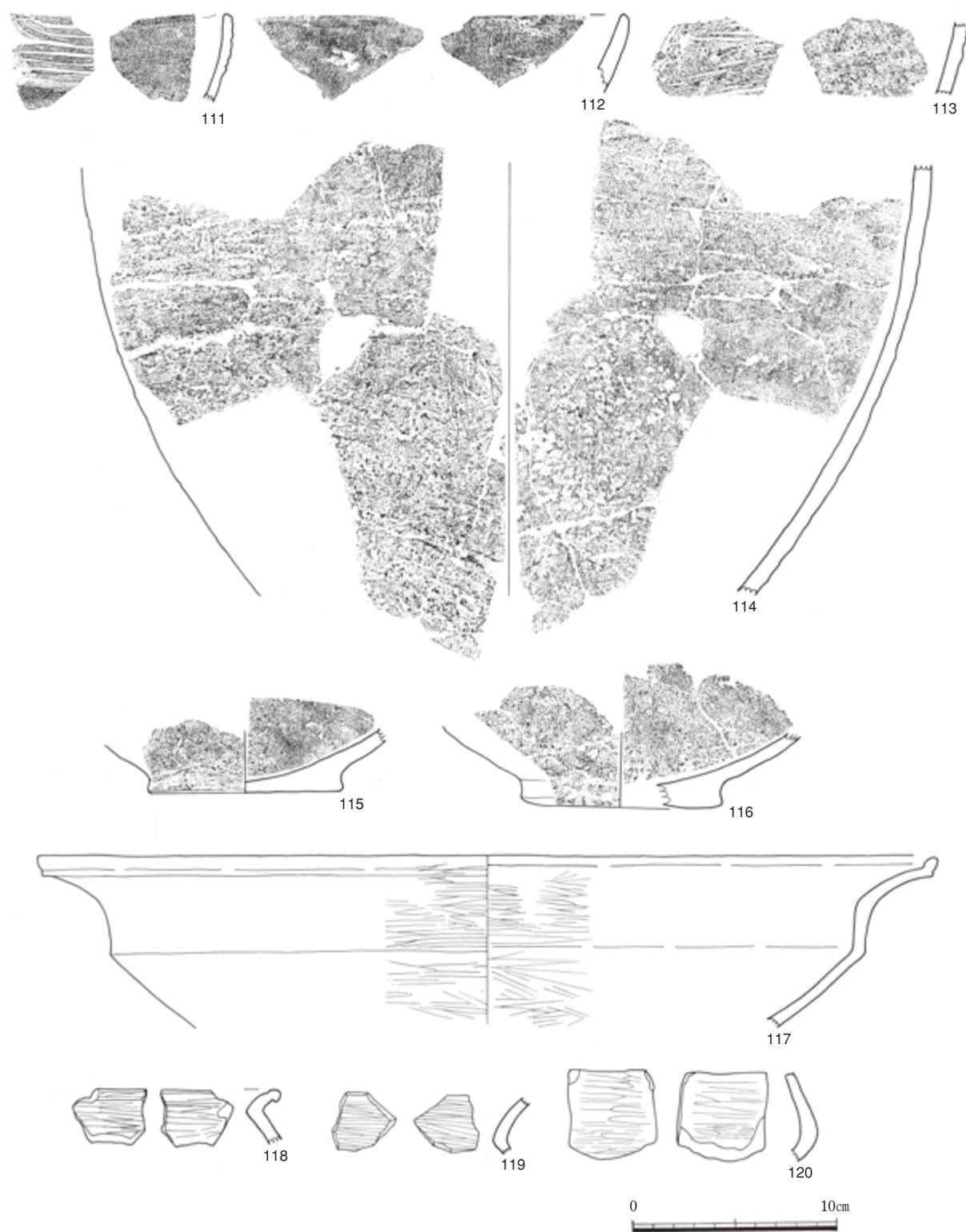


柱穴列柱穴計測・柱穴芯間距離計測表

1号		柱穴痕 (単位:cm)			柱穴	柱間
柱穴番号		長径	短径	深さ (細部)	番号	(単位:cm)
1		28	25	49	1~2	175
2		30	22	37	2~3	185
3		30	25	41	1~3	360

2号		柱穴痕 (単位:cm)			柱穴	柱間
柱穴番号		長径	短径	深さ (細部)	番号	(単位:cm)
1		32	27	18	1~2	205
2		23	20	21	2~3	240
3		26	25	20	3~4	155
4		27	25	17	1~4	600

第35図 縄文時代晩期柱穴列

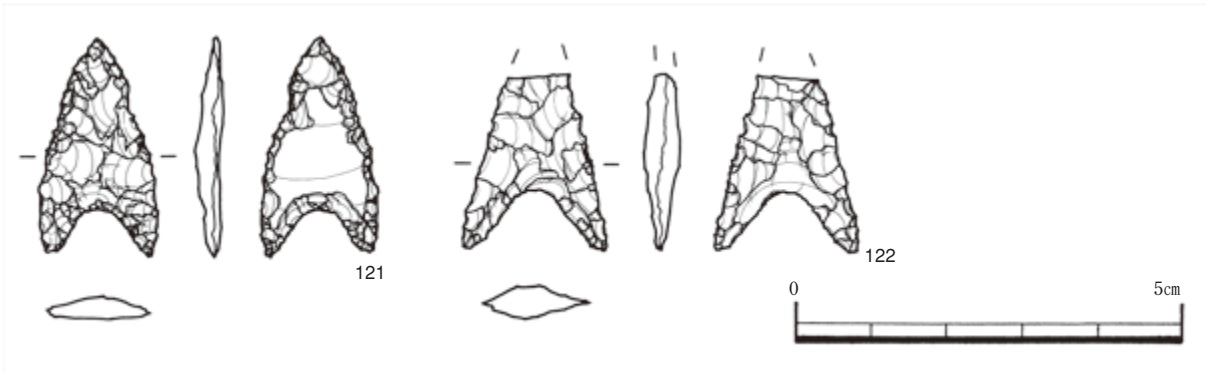


第36図 縄文時代晩期土器

く膨らむ。119は口縁部から内湾している頸部。120は、胴部。胴部中央で内側へ大きく屈曲した後、口縁部へと到るものである。

②石器（第37図121・122）

121は、黒曜石製の石鏃。縦長の剥片を加工しているが、裏面は一次剥離面をほぼ残し、側縁部のみ細かな剥離を施している。122は、チャート製の石鏃。先端部を欠損している。



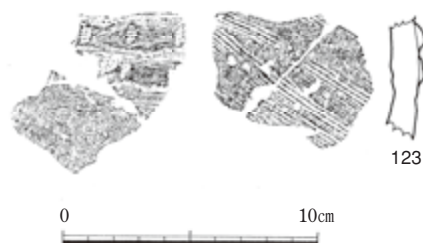
第37図 縄文時代晩期石器

縄文時代晩期土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	部位	色調		胎土				焼成	外 面	内 面	備 考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他				
第33図	108	SK-1	—	口縁部	灰黄褐	黒褐		○			良	ヘラケズリ・指圧痕	ヘラケズリ・指圧痕	
	109	SK-1	—	口縁部	黒褐	赤褐		○			良	ヘラケズリ	ヘラケズリ	
	110	SK-1	—	胴部	にぶい黄橙	橙		○			良	ヘラケズリ	ヘラケズリ	
第36図	111	N-12	Ⅲ	口縁部	暗灰黄	暗灰黄		○			良	三叉文	ナデ	
	112	M-12	Ⅲ	口縁部	橙	灰黄褐	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	113	N-12	Ⅲ	胴部	浅黄	にぶい黄橙	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	114	L-7	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙(スス付着)	橙(スス付着)	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	116	—	—	底部	灰黄	にぶい黄橙	○	○	○		良	ナデ	ナデ	
	117	L-7	Ⅲ	口縁部	浅黄(灰オリーブ)	にぶい黄	○	○			良	ミガキ	ミガキ	
	118	一括	—	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○			良	ミガキ	ミガキ	
	119	一括	—	頸部	明黄褐	明黄褐		○			良	ミガキ	ミガキ	
	120	一括	—	胴部	灰	灰		○			良	ミガキ	ミガキ	

縄文時代晩期石器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	分類
						cm	cm	cm	g	
第37図	121	N-13	Ⅲ	打製石鏃	黒曜石B	2.9	1.6	0.4	1.2	A-b-c
	122	N-13	Ⅲ	打製石鏃	チャート	2.3	1.9	0.5	1.5	A-b-c



第38図 古墳時代土器

第6節 古墳時代の調査

遺構は発見されなかった。遺物は123の1点のみである。外面に刻み目突帯が廻る。内外面共にヘラケズリで器面調整が行なわれており、工具は4～5条の木目をもつものと思われる。

古墳時代土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	部位	色調		胎土				焼成	外 面	内 面	備 考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他				
第38図	123	—	—	胴部	灰黄褐	暗灰黄		○			良	刻目突帯 ハケ目	ハケ目	

第7節 古代・中世の調査

古代～中世の調査では、溝状遺構、道跡と思われる遺構、少量の遺物を検出できた。

(1) 遺構

① 溝状遺構（第39～第43図）

溝は、神原遺跡と頭無遺跡において検出されているが、両遺跡は道路を隔てて北側に神原遺跡、南側に頭無遺跡が在り（第43図）、溝も連続しているものである。そのために、頭無遺跡で検出された溝も

神原遺跡の項で取り扱うこととした。

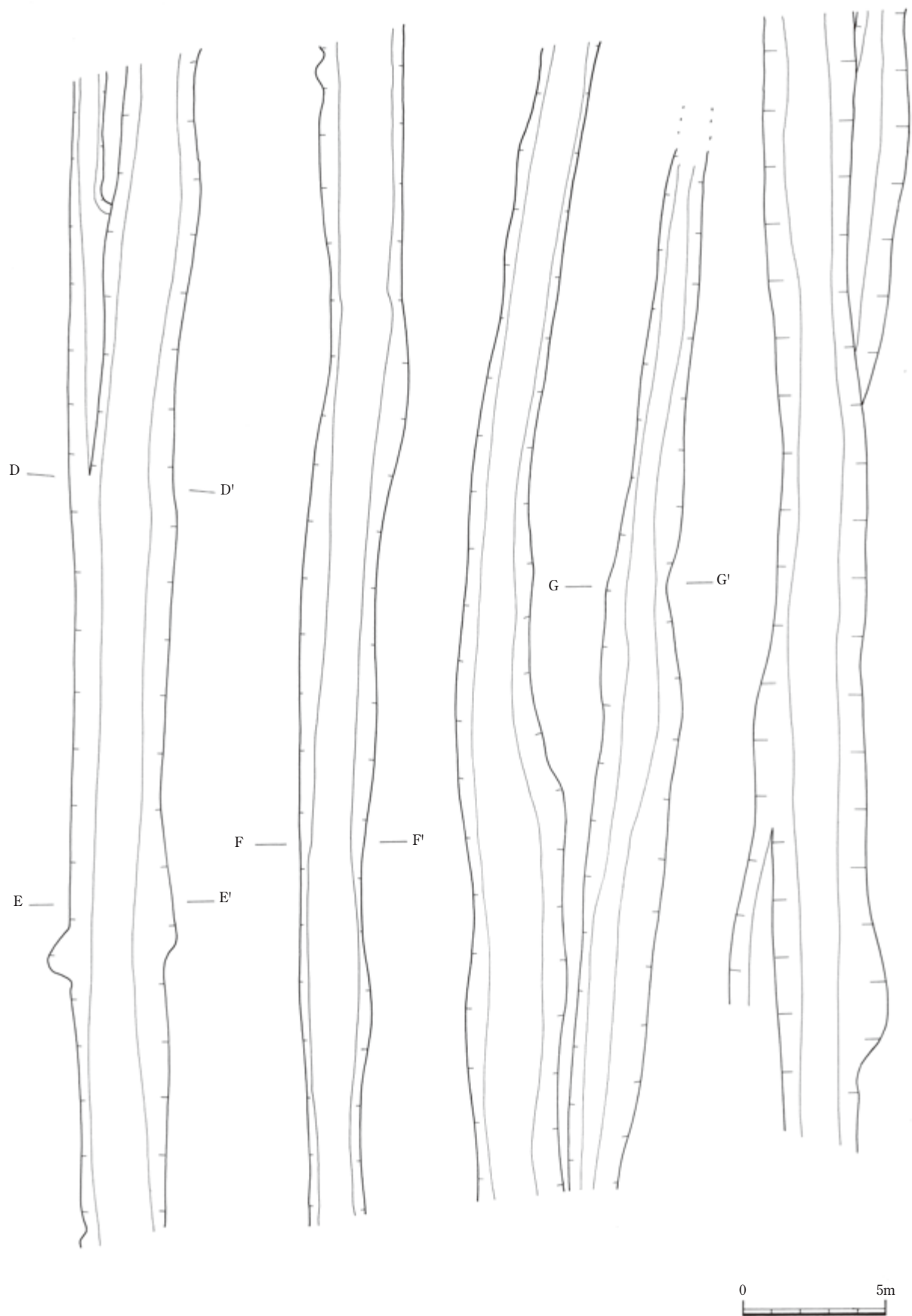
溝は、西の吹上砂丘側から延びてきている狭小な谷（水田）と、西北側にある桜谷遺跡と荒田遺跡の間を延びてきている狭小な谷により野首状になった一番幅の狭い部分に、両方の谷を繋ぐような状況で検出されている。全長は約160mで、最大幅は約3.6m、最小幅は約0.5mである。南側から北側にかけて傾斜している。

古代～中世遺構内遺物観察表

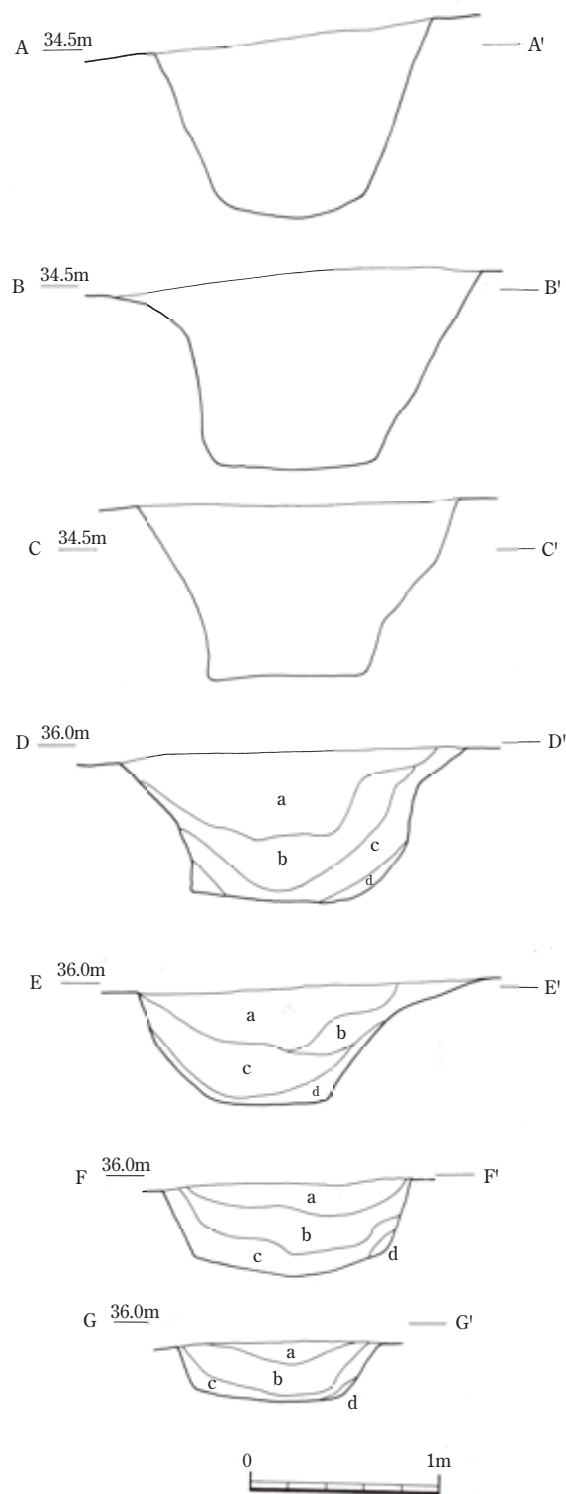
挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	部位	色調		胎土				焼成	外 面	内 面	備 考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他				
第44図	124	溝状遺構	—	完形	灰白	灰白		○			良	ナデ・ヘラ切り	ミガキ	底部(ヘラ切り)
	125	溝状遺構	—	口縁部	明褐	明赤褐					良	ヘラケズリ	ヘラケズリ	
	126	溝状遺構	—	完形	灰褐	明赤褐					良	ヘラケズリ	ヘラケズリ	
	127	溝状遺構	—	口縁部	灰褐	明赤褐					良	ヘラケズリ	ヘラケズリ	
	128	溝状遺構	—	胴部	黄橙	黄橙					良	格子目タタキ	平行タタキ	
	129	溝状遺構	—	胴部	黄橙	黄橙					良	格子目タタキ	同心円タタキ・平行タタキ	
第45図	130	溝状遺構	—	口縁部	灰	にぶい褐					良	平行タタキ	同心円タタキ	
	131	溝状遺構	—	胴部	灰	にぶい褐					良	平行タタキ	平行タタキ	
	132	溝状遺構	—	完形	にぶい黄褐	にぶい黄褐					良	長格子目タタキ後ナデ	横ナデ	
	133	溝状遺構	—	口縁部	灰白	灰白					良	長格子目タタキ後ナデ	横ナデ	ヘラ記号
第46図	134	古道	—	口縁部	明緑灰	明緑灰					良			



第39図 古代溝状遺構 1



第40図 古代溝状遺構 2



a	黒色土。きめ細かく、混ざりがほとんどない。
b	黒灰色土。しまりがある。
c	黒褐色土。黒褐色にV層の土が混ざる。
d	V層の土。

第41図 古代溝状遺構3（断面図）

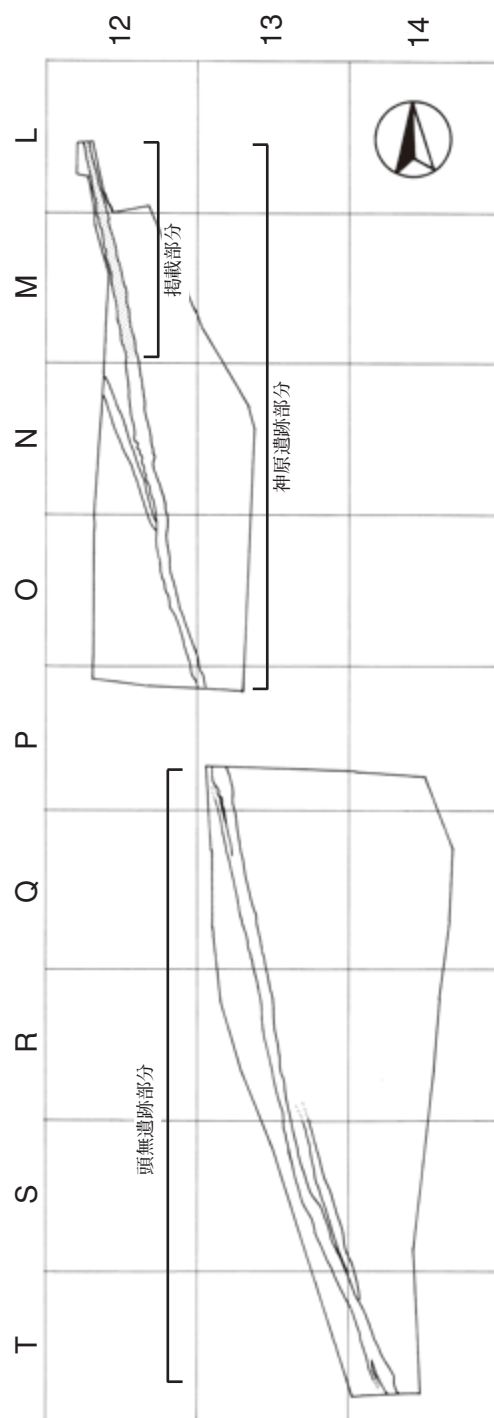
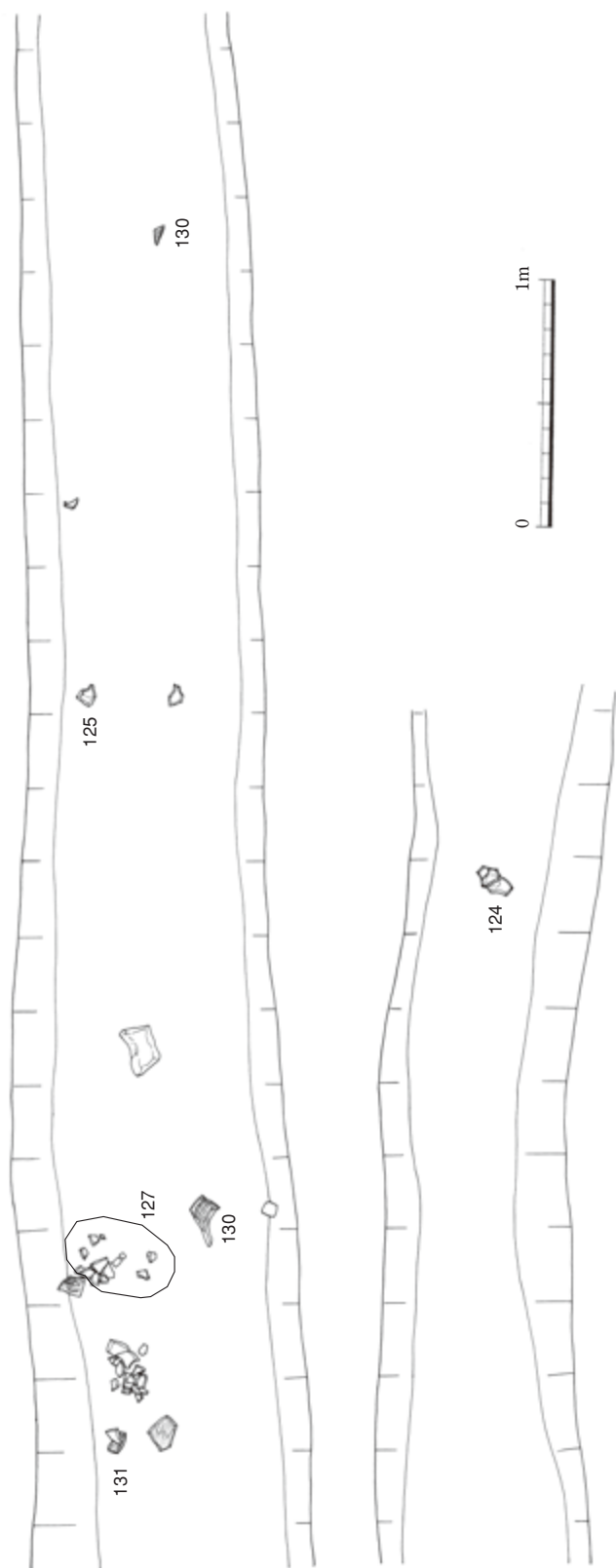
遺物（第44・45図124～133）

溝内からは、土師器と須恵器が出土しているが、神原遺跡の北側を中心に集中して出土しており、頭無遺跡ではほとんど出土していない。また、溝の底面及び底面に近い深さで出土している。

124～127は土師器。124は杯で、口縁部径12cm，器高4.2cmを測る。平底の底部から外方へ立ち上がり，端部は丸くおさめる。125～127は，甕形土器。いずれも胴部はあまり膨らまず，口縁部は「く」の字状に外反する。底部は欠損しているが，丸底と思われる。器面調整はヘラケズリが見られる。124は口縁部径16cmを測る小型のものである。128～133は須恵器。128～131は甕，132・133は壺である。128・129は外面が格子目タタキで，内面は，下部は平行タタキ，肩部は同心円タタキである。130・131は同一個体と思われるもので，口縁部径22cmを測る。くびれた頸部から口縁部は外反し，胴部は膨らむものである。外面は平行タタキ，内面は下部は平行タタキ，胴部最大径の部分から肩部へかけては同心円タタキである。132・133は肩部が張り，最大径が肩部にある特徴をもつものである。132は口縁部を欠損するが，ほぼ完形に復元できたものである。底部は径12cmの安定した平底であるが，わずかに上げ底になる。胴部はほぼ直線的に肩部へ到る。肩部はあまり丸みを帯びずに張っている。頸部は径4.5cmと細くしまり，口縁部は外反する。器面調整は，外面は長格子目タタキの跡でナデが施され，底部付近ではタタキの痕跡も残っていない。内面は横ナデである。また，輪積みの痕跡も明瞭に認められる。133は132とほぼ同様の形状である。焼が甘いためか白っぽく仕上がっている。外面は長格子目タタキの後でナデが施されている。肩部に「X」のヘラ記号が認められる。内面は横ナデで，輪積みの痕跡が明瞭である。また，132・133共に内面の肩部付近に小石を布で包んだと思われる当て具の痕跡が認められる。

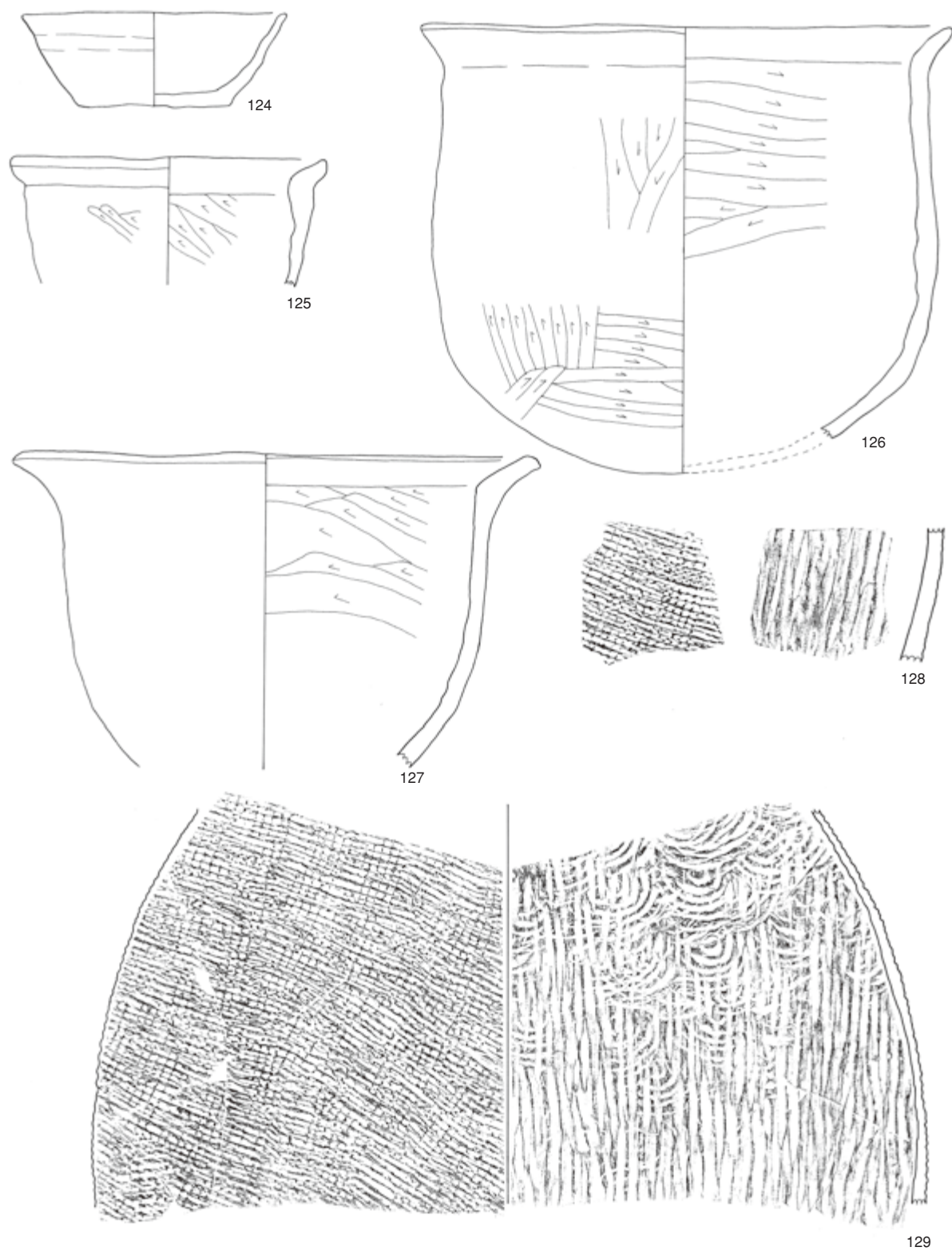


第42図 古代溝状遺構内遺物出土状況図 1



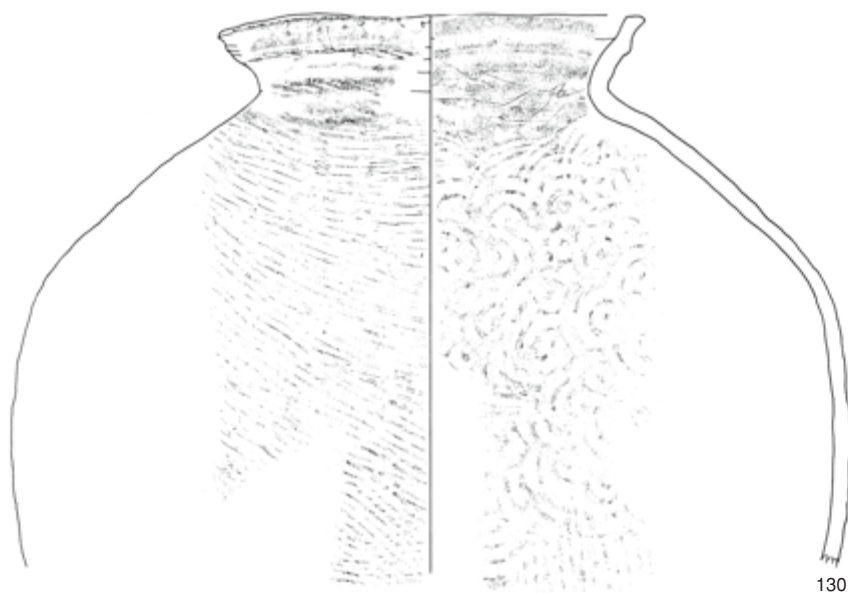
溝状遺構全体図 (1 グリッド20m)

第43図 古代溝状遺構内遺物出土状況図 2

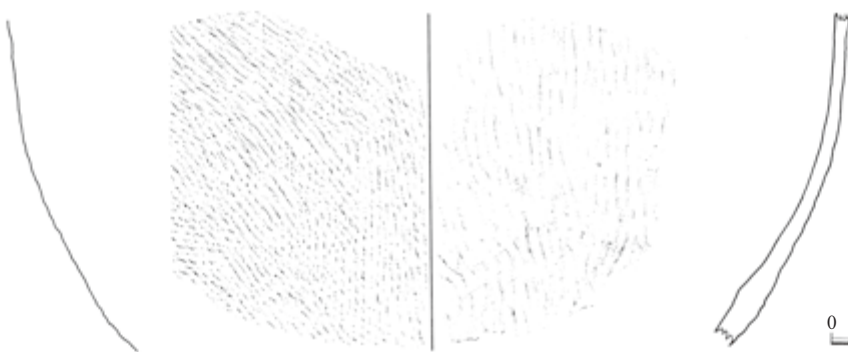


0 10cm

第44図 古代溝状遺構内出土遺物 1

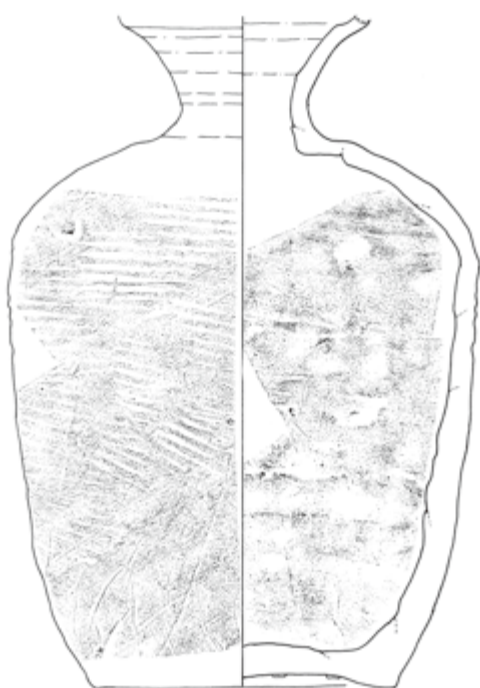


130

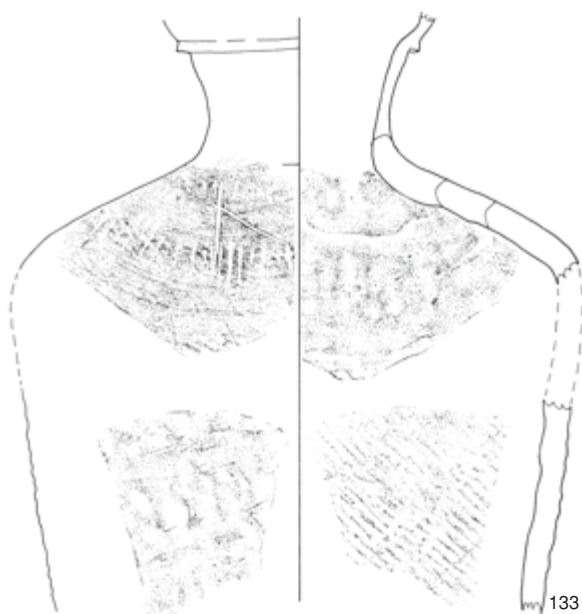


131

0 10cm



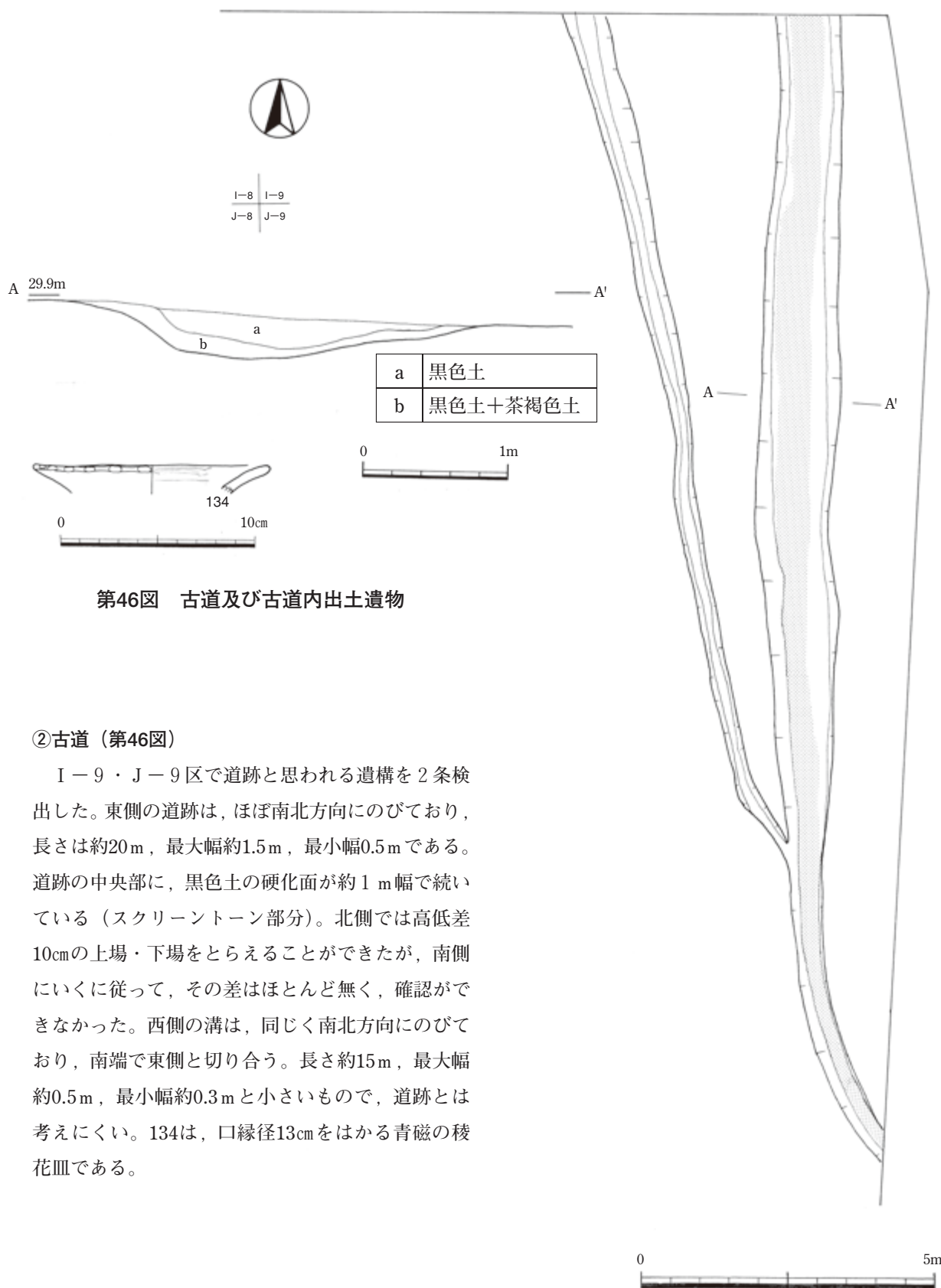
132



133

0 10cm

第45図 古代溝状遺構内出土遺物 2



第46図 古道及び古道内出土遺物

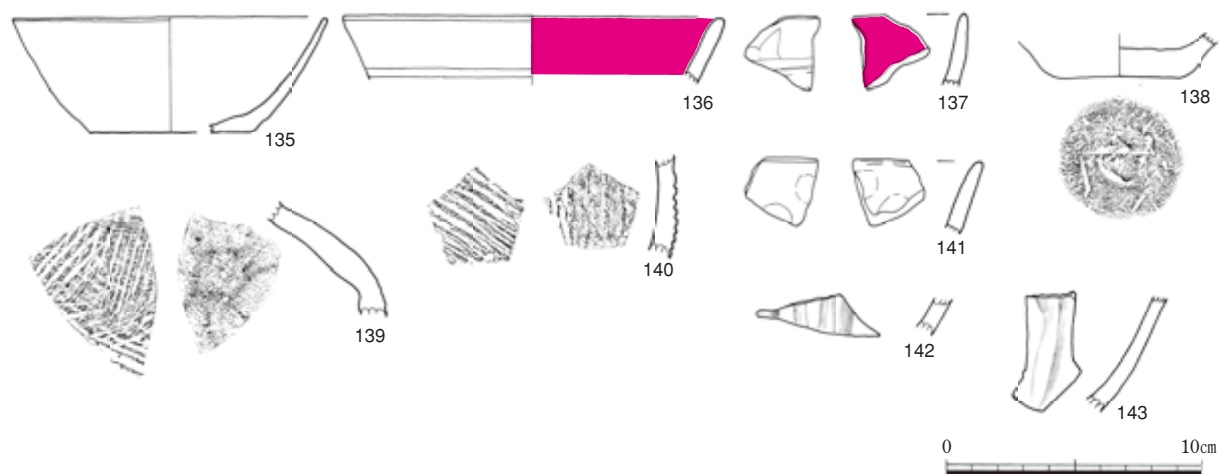
②古道（第46図）

I-9・J-9区で道跡と思われる遺構を2条検出した。東側の道跡は、ほぼ南北方向にのびており、長さは約20m、最大幅約1.5m、最小幅0.5mである。道跡の中央部に、黒色土の硬化面が約1m幅で続いている（スクリーントーン部分）。北側では高低差10cmの上場・下場をとらえることができたが、南側にいくに従って、その差はほとんど無く、確認ができなかった。西側の溝は、同じく南北方向にのびており、南端で東側と切り合う。長さ約15m、最大幅約0.5m、最小幅約0.3mと小さいもので、道跡とは考えにくい。134は、口縁径13cmをはかる青磁の稜花皿である。

(2) 遺物 (第47図135～143)

135は、口縁径12cmの土師器の碗である。136・137も土師器の口縁部で、内外面ともにヘラケズリで調整され、内面は朱が塗られている。138は、土師器の底部である。底部は糸切りである。139は、須恵器の壺の肩部である。外面調整は格子目タタキ、

内面は小石を布で包んだと思われる当て具の痕跡が認められる。140は、須恵器の甕の胴部で、内外面共に平行タタキで器面調整がなされている。141～143は青磁である。141は口縁部で、灰色味がかかる。142・143は胴部で、連弁文が観察できる。



第47図 古代・中世遺物

古代～中世出土遺物

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	部位	色調		胎土				焼成	外 面	内 面	備 考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他				
第 47 図	135	一括	—	完形	淡黄	淡黄		○			良	ナデ	ナデ	
	136	一括	—	口縁部	にぶい褐	浅黄					良	ミガキ	ミガキ	内赤
	137	一括	—	口縁部	にぶい褐	浅黄					良	ミガキ	ミガキ	内赤
	138	一括	—	底部	淡黄	淡黄		○			良	糸切り	ミガキ	
	139	一括	—	胴部	暗灰黄	黄褐		○			良	格子目タタキ	指圧痕(布)	
	140	一括	—	胴部	灰黄	暗灰黄					良	平行タタキ	平行タタキ	
	141	一括	—	口縁部	灰オリーブ	灰オリーブ					良	連弁文		
	142	一括	—	胴部	緑灰	緑灰					良	連弁文		
	143	一括	—	胴部	緑灰	緑灰					良	連弁文		

第8節 小結

神原遺跡では、旧石器時代から古代・中世までの調査成果を挙げる事ができた。

なお、平成14年度の調査部分において、大雨のために出土地点が不明になった遺物があり、詳しい出土区・層位を掲載できないものがある。それらについては、土器形式などから時代を設定した。

1 旧石器時代（遺構・遺物）

14年度の調査範囲から、9基の礫群と1600近くの遺物を検出した。

礫群の範囲・礫数は様々で、共通性はあまり見られない。また、1・2・3号、5・6号は近接しているが、それ以外は距離が離れている。

遺物については、出土遺物を石材ごとに分類を行ったところ、集中区が確認できたので、7つのブロックが存在すると判断した。また、ブロックごとに主として出土する遺物が異なるのが大きな特徴といえる。ブロック6は中・大型のナイフ形石器が、それ以外は細石刃核が出土しているため、6とそれ以外のブロックは、形成時期に差があるものと考えられる。また、ブロック3においては、黒曜石Aが全面にわたって出土しており、広範囲にわたる石器製作所だった可能性もある。さらにブロック5では、水晶を素材とする石器・チップが出土しているのが特徴的である。

(石材別出土割合)

石材	割合(%)	石	材	割合(%)
黒曜石A	63.94		シルト質頁岩	3.41
黒曜石B	1.87		水晶	3.28
黒曜石C	0.39		玉髄	0.97
頁岩	9.34		チャート	0.13
黒色安山岩	5.02		その他	11.65

2 縄文時代

縄文時代では、出土量は全体的に少なめであるが、草創期から晩期にわたって、遺構や遺物が出土して

いる。

(1) 草創期（遺構）

集石遺構4基をJ・K-8区で検出した。明確な集中区を持つものはほとんどない。また、礫数にも差があり、それぞれの関連性については不明である。

(2) 早期（遺物）

縄文時代早期では、他時代と比較して、土器・石器が出土している。土器はⅠ類からⅣ類にまで分類でき、Ⅰ類土器がそのほとんどを占める。Ⅰ類土器は、口縁部が肥厚しやや外反する円筒形の土器で、口縁部に貝殻刺突文、胴部に綾杉状条痕文を施すものである。石坂式に比定されるものである。Ⅱ類は1点のみの出土であるが、胴部に刺突文のみ施していることから、下剥峯式土器に類するものであると考えられる。Ⅲ類は条痕が横位に施される円筒形の土器で、中原式土器に比定されるものである。Ⅳ類土器は円筒形条痕文土器である。石器は、磨石・敲石を中心に出土している。

(3) 中後期土器（遺物）

中後期では、土器3点が出土しているが、形式の特定が難しい。

(4) 晩期（遺構・遺物）

晩期では、土坑2基・掘立柱建物跡3棟・柱穴列2基を検出した。土坑1号と2号は近接しているが、出土遺物が少なく、共通点もないことから、関連性は薄いと考えられる。掘立柱建物跡は、3棟検出された。いずれも1間×1間の建物で、農業センター遺跡群ではよく見られるが、大きさ・方向・柱間形状等に統一性は見られない。柱穴列は2列とも北北西～南南東に並ぶが、穴数が違うことや検出地点が離れていることから関係性はないものと思われる。

遺物は土器・石器が出土している。111は三叉文土器であるが、同形式は1点のみの出土で、他遺物との関連性が確認できなかった。その他の土器については、残存部の形状から入佐式土器に比定されるものである。

3 古墳時代（遺物）

123の1点のみである。層位等不明であるが、刻目突帯を貼り付けていることから、古墳時代の遺物

であると判断した。

4 古代～中世（遺構・遺物）

古代の遺構として溝を検出した。溝は神原遺跡及び頭無遺跡で検出されており、間の道路を隔てて連続しているものである（第43図参照）。溝の底部は、南南東の頭無遺跡から北北西の神原遺跡に向けて下っており、遺物が神原遺跡の溝の最深部（北北西側）でのみ出土していることも、この傾きが関係しているのではないかと思われる。遺物は土師器・須恵器が完形に近い形で出土している。須恵器は器高が60cm以上になる大型のものもある。

また、14年度の調査で、中央部分に硬化面がある道跡と思われる遺構も検出し、遺構内から15世紀代と思われる青磁の稜花皿が出土している。

頭 無 遺 跡

第Ⅶ章 頭無遺跡の発掘調査成果

第1節 調査の経過

頭無遺跡は、平成15年度に本調査を実施した。本調査は研究畑、研究付帯施設（土肥）、付帯共同用施設予定地の削平部分1～4地点を対象とした。

平成15年度日誌抄

7月14日（月）～7月18日（金）

調査開始。1地点・2地点・3地点表土剥ぎ、Ⅲ層・Ⅳ層掘り下げ。トレンチ設定及び掘り下げ。グリッド杭打ち。

7月22日（火）～7月24日（木）

Ⅲ層掘り下げ。トレンチ設定、掘り下げ。縄文早期集石写真撮影。

8月4日（月）～8月7日（木）

溝状遺構写真撮影、掘り下げ、遺物取り上げ。Ⅳ層掘り下げ。

8月11日（月）～8月12日（火）

台風後保全、安全点検。Ⅳ層掘り下げ。縄文早期遺物取り上げ。プレハブ移転準備。

8月18日（月）～8月20日（水）

プレハブ移設。Ⅳ層掘り下げ完了。溝状遺構掘り下

げ完了。遺物取り上げ。

10月15日（水）～10月17日（金）

溝状遺構埋土断面分層、写真撮影、実測。

10月21日（火）～10月23日（木）

溝状遺構完掘削。溝および周辺の精査。

11月4日（火）～11月7日（金）

清掃。空中写真撮影。

11月18日（火）～11月20日（木）

4地点精査。Ⅲ層掘り下げ。縄文早期集石検出、写真撮影。鹿児島大学本田道輝助教授に縄文時代の遺物指導を受ける。

12月1日（月）～12月5日（金）

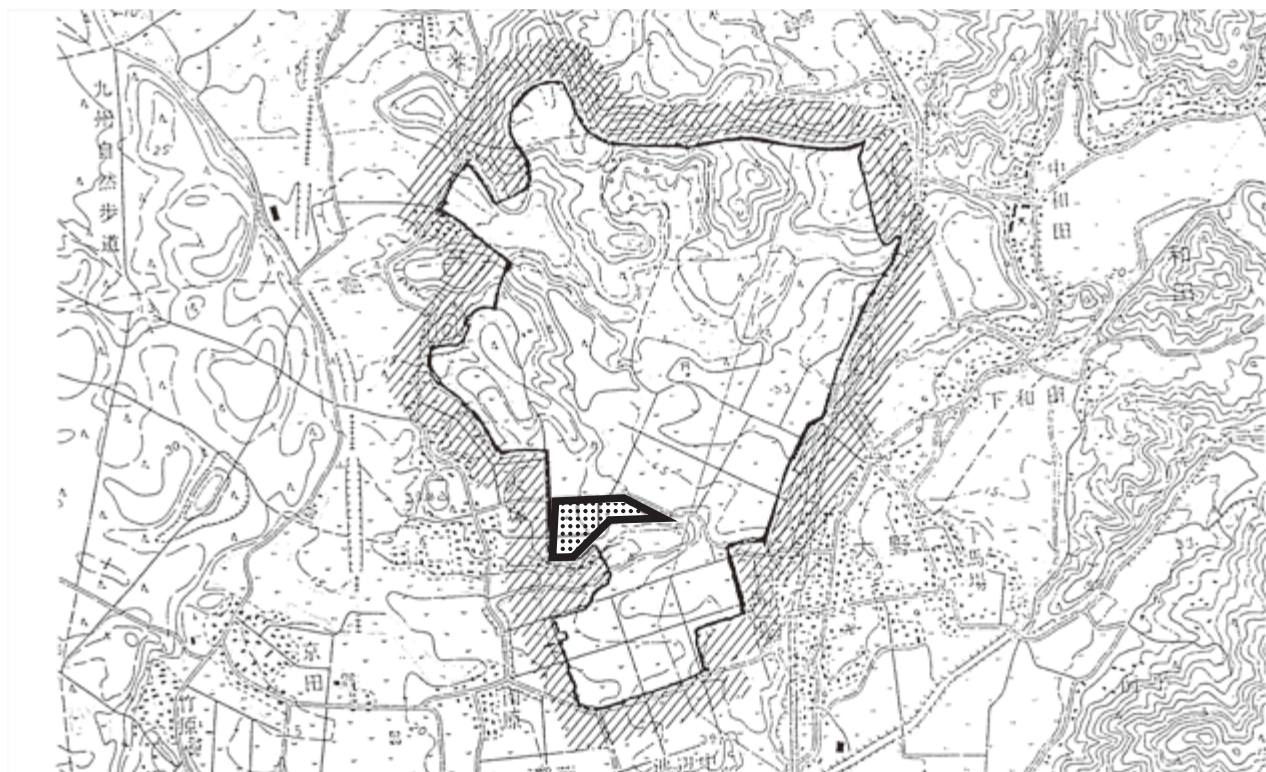
Ⅲ層Ⅳ層掘り下げ。Ⅲ層遺物取り上げ、地形図（20cmコンタ）作成。Ⅳ層遺物取り上げ。ピット実測、写真撮影。

12月8日（月）～12月12日（金）

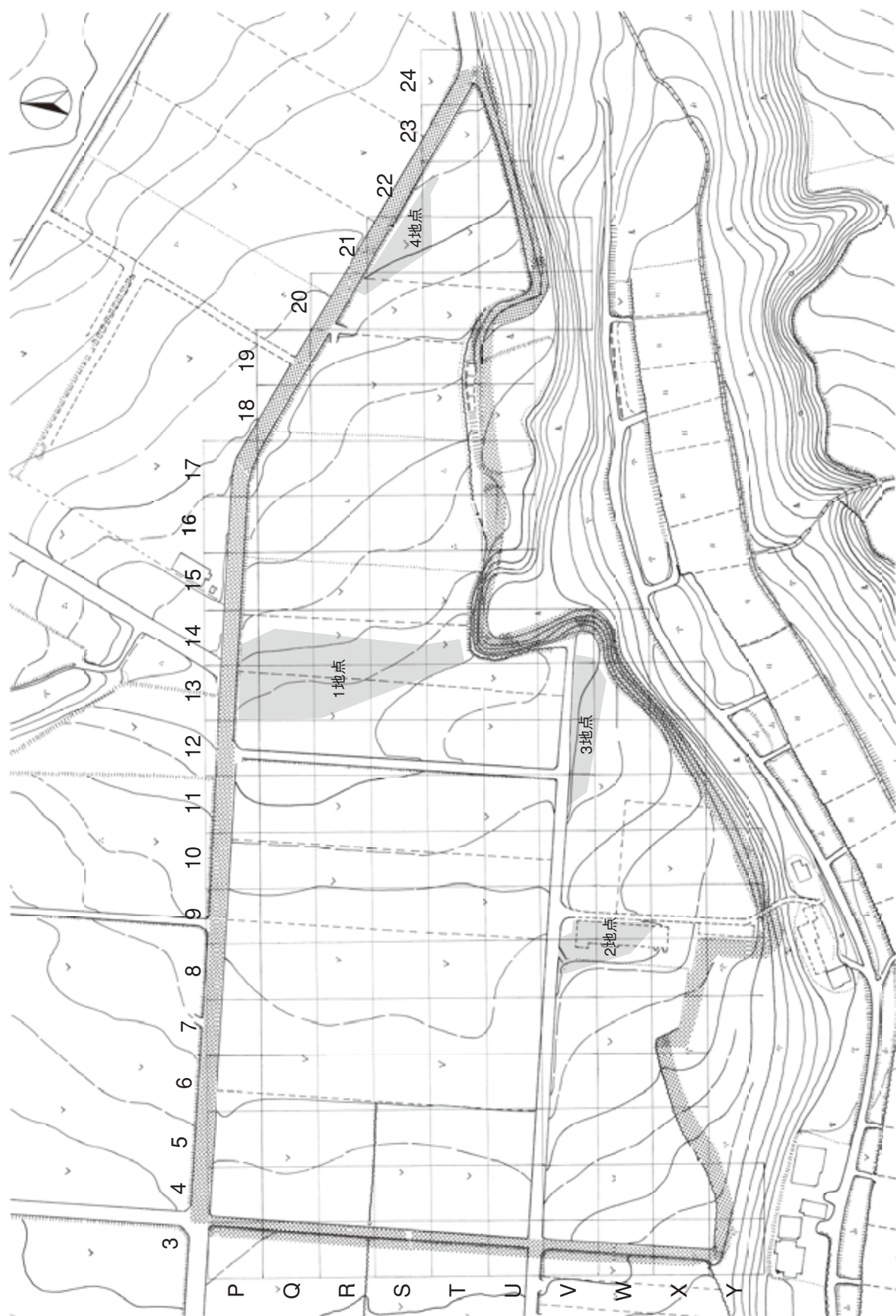
Ⅳ層掘り下げ終了。集石検出、写真撮影。3地点トレンチ設定、掘り下げ。土層断面図実測、写真撮影。

12月15日（月）～12月16日（火）

3地点トレンチ土層断面写真撮影、実測。4地点集石検出、写真撮影。遺物取り上げ。引き渡し。

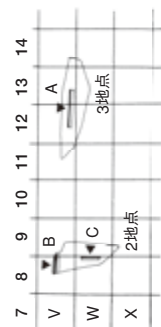
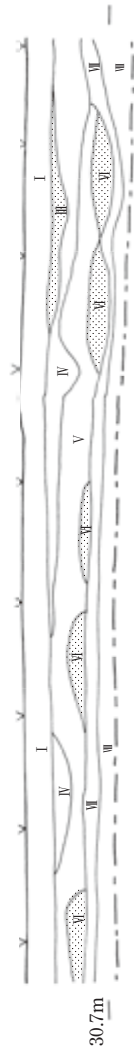
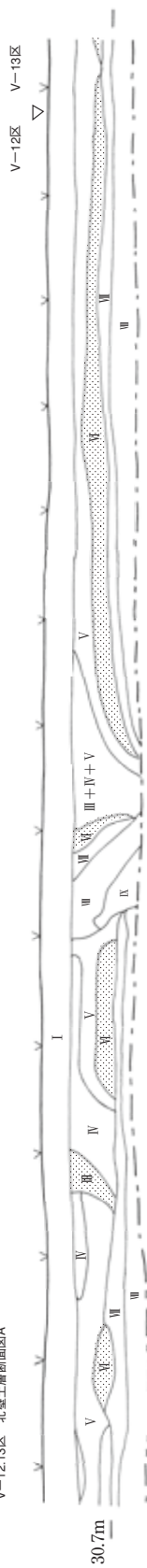


第1図 頭無遺跡位置図（1／25,000）

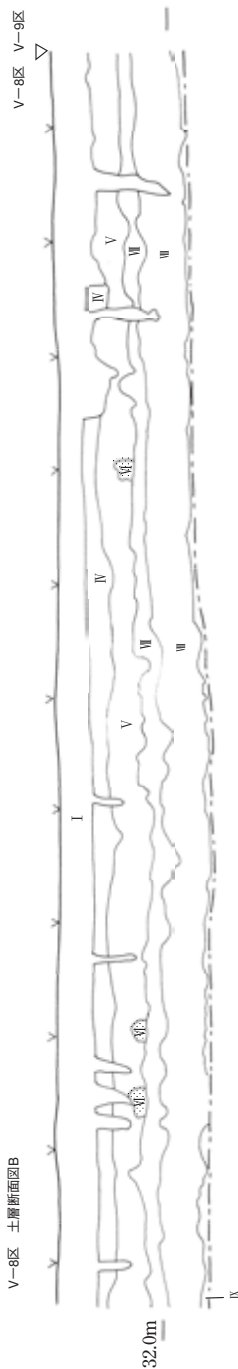


第2図 地形図及びグリッド配置図

V-12,13区 北壁土層断面図A



V-8区 土層断面図B



- I層 灰黒色土 (現耕作土)
- III層 黄褐色火山灰土
- IV層 (アカホヤ火山灰)
- V層 黄褐色土
- VI層 黒褐色土
- VII層 暗黄褐色火山灰
- VIII層 明茶褐色粘質土
- IX層 暗茶褐色粘質土
- X層 黄褐色シルト層

W-8区 東壁土層断面図C



第3図 土層断面

第2節 遺跡の層序（第3図）

頭無遺跡における層序は、農業開発総合センター遺跡群における標準的な層序と同様である。調査を実施した範囲の標高を見ると東側が41m、西側が31mと東側から西側へ傾斜している地形である。大半が削平されておりⅡ層は見られず、地点によってはⅢ・Ⅳ層も削平されている。

第3節 発掘調査の方法及び概要

頭無遺跡は、農業開発総合センター内の調整池と迫田の北側にある台地に立地し、北側は神原遺跡と宗円掘遺跡に隣接している。

発掘調査は国土座標に合わせた20m×20mの調査範囲（グリッド）を設定して実施し、遺跡内の北側からA・B・C…、西側から1・2・3…とした。調査面積は3,190㎡である。調査方法は表土を重機で掘り下げ、その後人力での掘削を行った。削平部分は4地点である。

1地点で表土剥ぎを行ったところ一部分はⅤ層が露出し、畑地利用で激しく削平を受けていた。精査したところ、表土直下で、平成13年度に神原遺跡の調査で確認されていた古代の溝状遺構の延長部分を検出した。その後、下層確認トレンチを設定し、Ⅳ層上面までの掘り下げを行った。

2・3地点で表土剥ぎを行ったところⅢ層が残存していた。そのⅢ層上部で縄文時代早期のものと思われる集石を3基検出した。遺物は、土器片が数点出土した。その後、下層確認トレンチを設定し、Ⅳ～Ⅸ層上面までの掘り下げを行った。

4地点で表土剥ぎを行ったところⅢ層が残存していた。そのⅢ層上部で縄文時代晩期のもと思われる集石5基を検出し、Ⅳ層まで調査を行った。遺物は、土器片・磨石・石斧が数点出土した。その後、下層トレンチを設定し、Ⅳ～Ⅸ層上面まで掘り下げを行った。

第4節 縄文時代の調査

1 縄文時代早期の調査

縄文時代早期では、遺物・遺構に限られた地点で出土し、集石遺構も集中している。

（1）遺構（第4図～第5図）

集石遺構8基が検出されている。3基は調査第2地点の南側のW-12区とW-13区で検出されている。残りの5基は、調査第4地点のS-21区とT-21区の境界線を中心に検出されている。第4地点に集中する密度が高い。

1号集石遺構（第4図）

W-13区で検出されたもので、45×40cmの範囲に広がる。拳大の礫を中心に18個からなる。礫は、集中しているが、ほぼ平坦で掘り込みは見られない。

2号集石遺構（第4図）

W-12区で検出されたもので、110×85cmの範囲に広がる。角張った拳大の礫がほとんどだが、一部、丸みを帯びたものが61個見られる。土器片が3点相伴している。

3号集石遺構（第4図）

W-13区で検出されたもので、70×145cmの範囲に広がる。拳大の礫を中心に21個からなる。礫数も少量でまとまりにかけている。掘り込みは見られず、ほぼ平坦である。

4号集石遺構（第4図）

S-21区の南側、T-22区との境目近くで検出されたもので、140×90cmの範囲に広がる。角張った礫を中心に87個からなる。集中して礫は見られるが、掘り込みは見られず、ほぼ平坦である。

5号集石遺構（第4図）

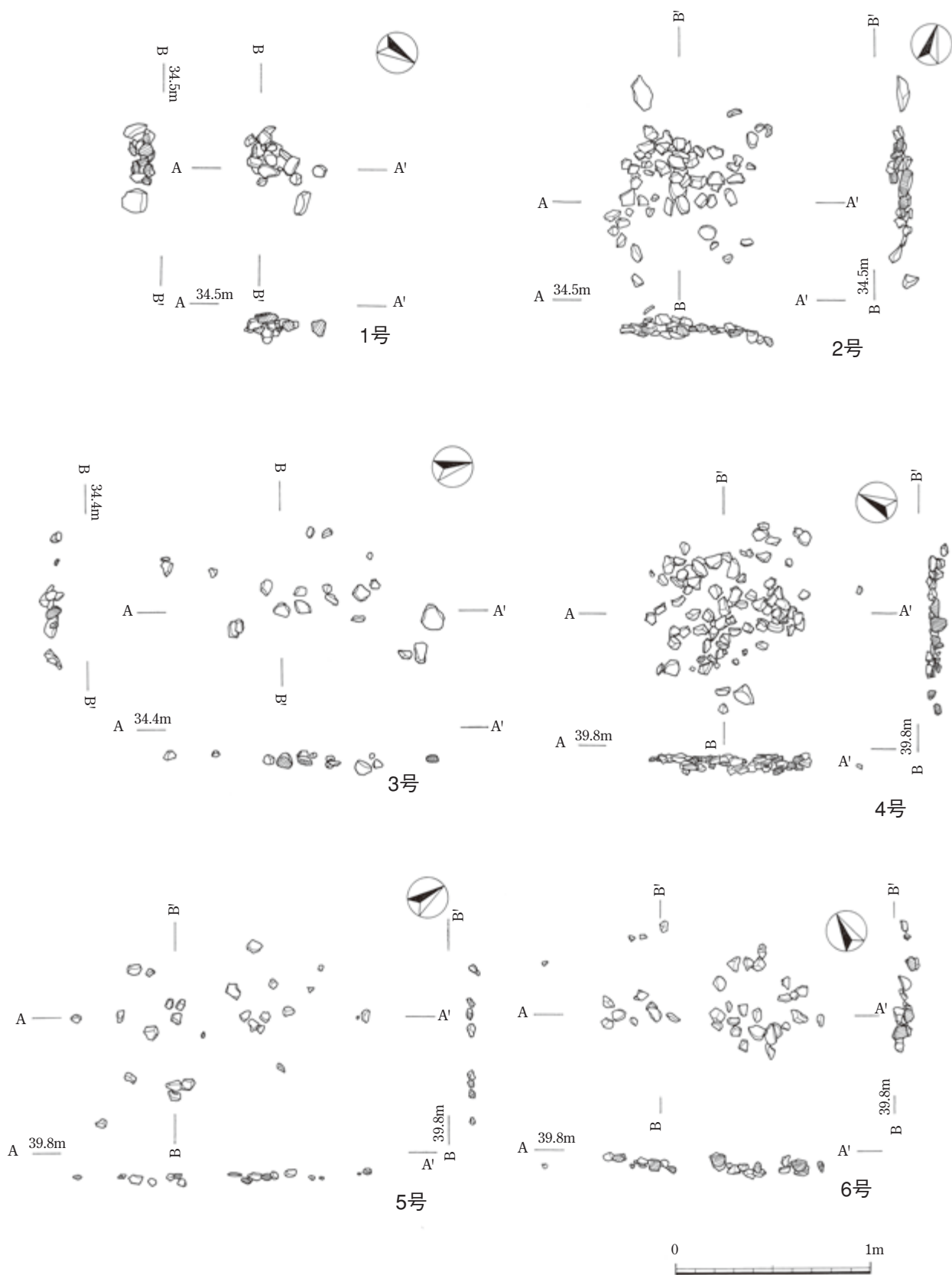
T-21区で検出されたもので、84×153cmの範囲に広がる。角張った礫を中心に28個がまばらな状態で見られる。掘り込みは見られず、ほぼ平坦である。

6号集石遺構（第4図）

T-21区で検出されたもので、68×144cmの範囲に広がる。角張った礫を中心に35個からなる。掘り込みは見られず、ほぼ平坦である。

7号集石遺構（第5図）

S-21区の南側、T-21区の北側の境目近くで検出されたもので、8基中、最も礫の範囲が広く



第4図 縄文時代早期1～6号集石遺構



第5図 縄文時代早期7・8号集石遺構



第 6 図 集石遺構内遺物

集石遺構内遺物観察表

挿図 番号	遺物 番号	層位	出土区	部位	色 調		胎	土				焼成	外 面	内 面	備 考
					内	外		石英	長石	角閃石	その他				
第6図	1	SS	W-12	胴部	にぶい黄橙	橙	○	○				良	貝殻条痕文	条痕文	スス

189×270cmの範囲に広がる。角張った礫を中心に108個からなり北側に集中している。掘り込みは見られず、ほぼ平坦である。

8号集石遺構（第5図）

T-21区で検出されたもので、190×150cmの範囲に広がる。拳大の礫を中心に29個からなる。掘り込みは見られず、ほぼ平坦である。

（2）遺構内遺物（第6図）

①縄文早期土器

1は2号集石内で検出された。外面は不規則な貝殻条痕文。内側は条痕が見られ、表面には煤が付着している。

（3）遺物（第7図～第8図）

①土器（第7図）

縄文時代早期の土器は少量で13点を図化することができた。2～6はⅠ類土器、7～10はⅡ類土器、12・13はⅢ類土器に分類される。

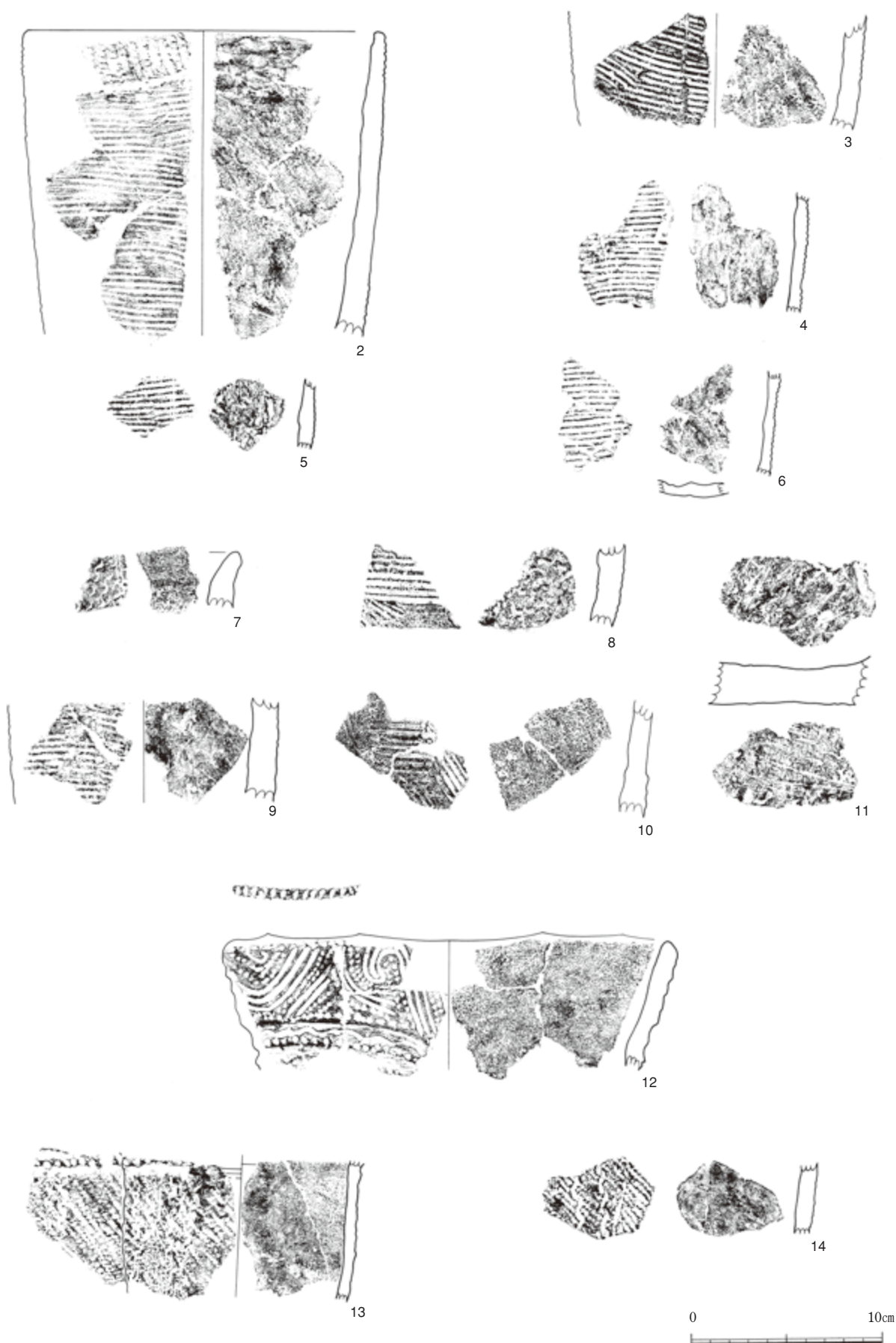
2は口縁径19cmを測る。口縁部に縦位の連続する貝殻刺突文があり、胴部には横位の貝殻条痕文が施

されている。3～6は胴部で横位の貝殻条痕文が施されている。6は角筒の胴部である。7は口縁部が外反し、貝殻による刺突文が斜位に施されている。

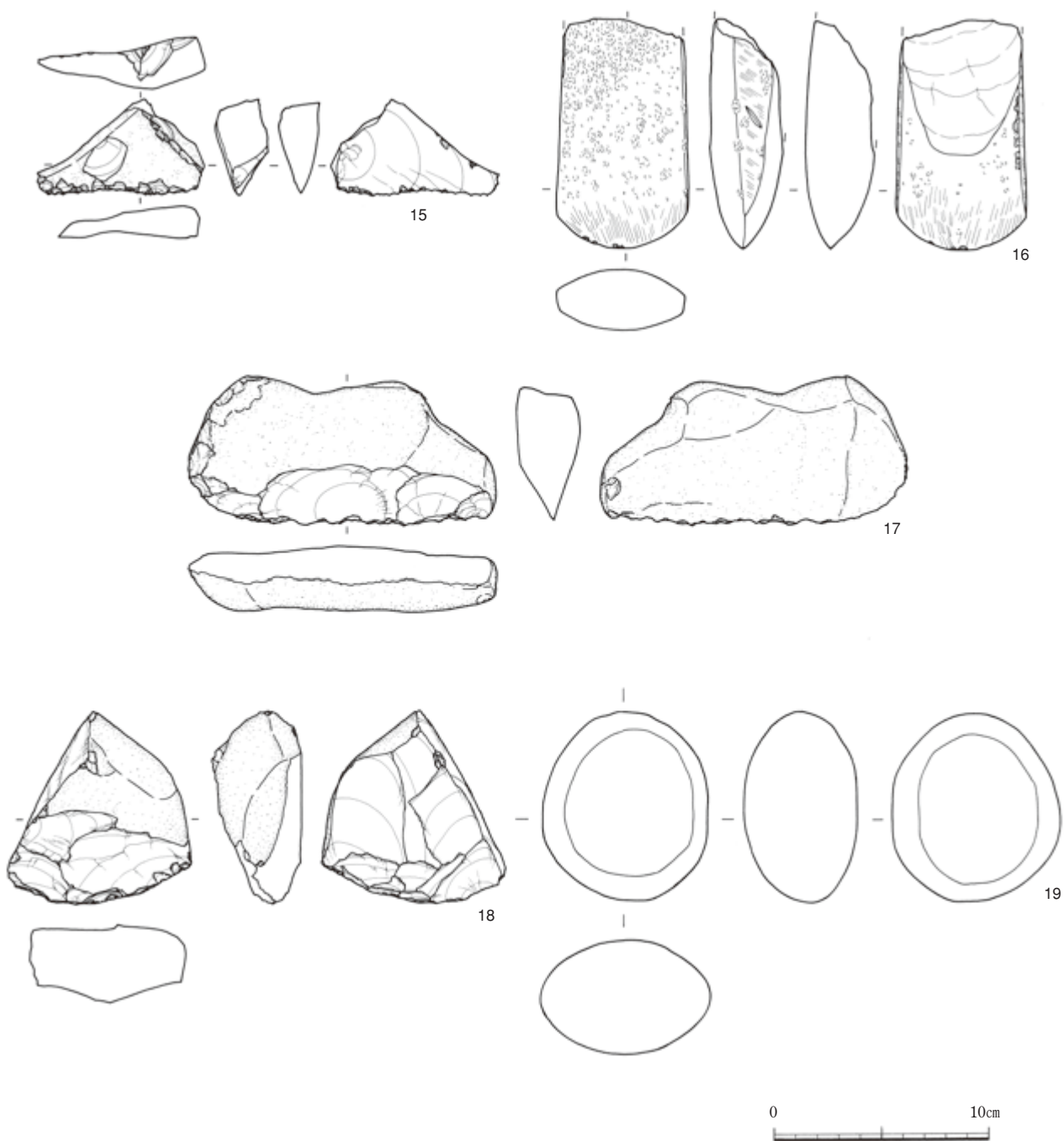
8～10は胴部に綾杉状の条痕文が施されている。11は厚みのある底部である。12は口縁部で口縁径が24cmを測る。直径3mmくらいの棒状施文具による沈線文、連続刺突文が施されている。13・14は胴部でRLの一段による結節縄文が施されている。

②石器（第8図）

15は頁岩の縦長剥片を素材とした、スクレイパーで下縁部に剥離調整が施され刃部としている。16は刃部形成に入念な調整が見られる磨製石斧である。表面には敲打痕も見られる。17・18はホルンフェルスの礫器である。17は自然面を多く残し、下部に刃部形成の痕が見られる。18は荒い剥離が行われ自然面を多く残している。19は砂岩を素材とする磨石である。敲打痕ではなく磨石だけの機能を持つ。



第7図 縄文時代早期土器



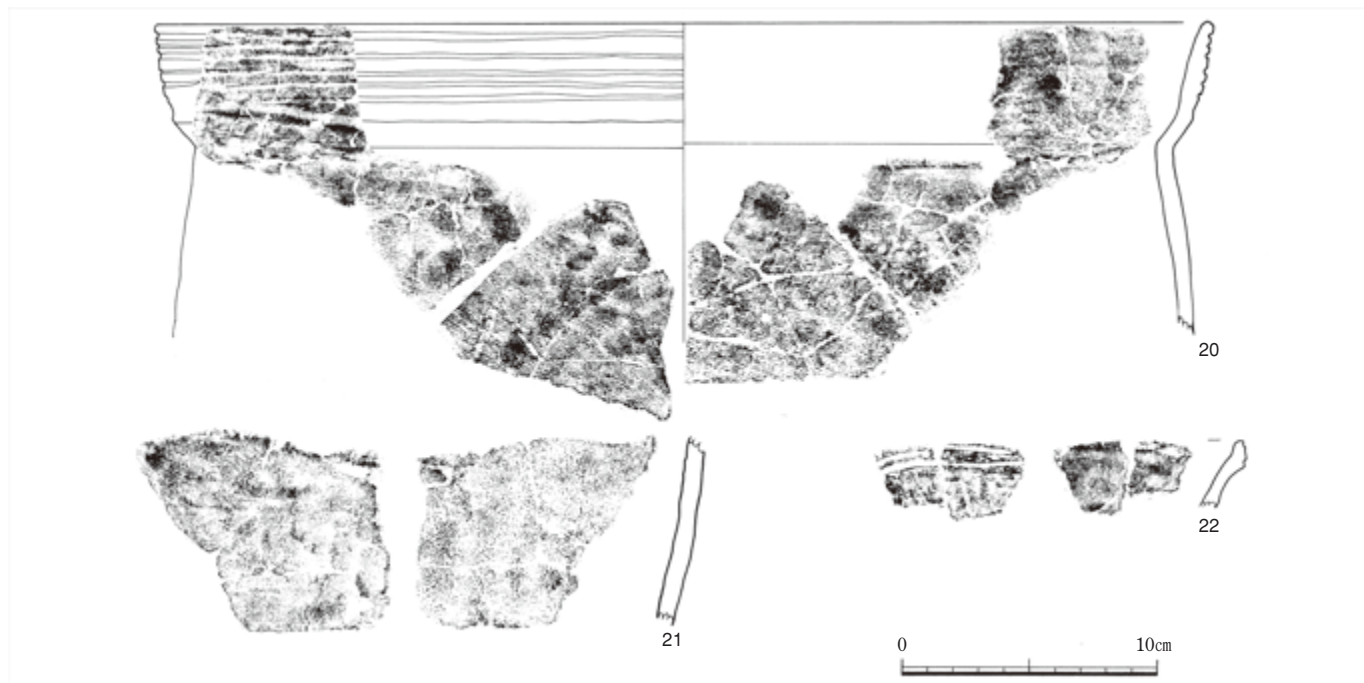
第 8 図 縄文時代早期石器

縄文時代早期土器観察表

挿図 番号	遺物 番号	層位	出土区	部位	色		胎	土				焼成	外 面	内 面	備 考
					内	外		石英	長石	角閃石	その他				
第 7 図	2	Ⅳ	S-14	口縁部	暗褐	にぶい褐	○	○				良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	3	Ⅳ	S-14	胴部	暗褐	にぶい褐	○	○				良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	4	Ⅳ	S-14	胴部	黒褐	にぶい橙	○	○				良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	5	Ⅳ	S-14	胴部	黒褐	にぶい橙	○	○				良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	6	Ⅳ	S-14	胴部	黒褐	灰褐	○	○				良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	角筒
	7	Ⅳ	—	口縁部	灰褐	黒褐	○	○				良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	
	8	Ⅳ	—	胴部	黒褐	橙	○	○				良	綾杉条貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	9	Ⅳ	S-14	胴部	にぶい黄褐	にぶい橙	○	○				良	綾杉条貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	10	Ⅳ	—	胴部	黒褐	にぶい褐	○	○				良	綾杉条貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	11	Ⅳ	S-14	底部	にぶい橙	褐灰	○	○				良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	
	12	Ⅳ	S-14	口縁部	橙	にぶい橙	○	○	○	金雲母		良	棒条痕文・棒状刺突文	ヘラケズリ	
	13	Ⅳ	S-14	胴部	橙	橙	○	○	○	金雲母		良	結節縄文	ヘラケズリ	
	14	Ⅳ	—	胴部	にぶい黄褐	橙	○	○	○			良	結節縄文	ヘラケズリ	

縄文時代早期石器観察表

挿図番号	番号	器種	出土区	層位	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
						cm	cm	cm	g	
第8図	15	スクレイパー	V-13	Ⅳ	頁岩	7.9	4.4	1.4	490	
	16	磨製石斧	—	Ⅳ	頁岩	10.7	3.1	2.8	330	
	17	礫器	S-14	Ⅳ	ホルンフェルス	7.1	14.45	3.1	395	
	18	礫器	V-8	Ⅳ	ホルンフェルス	9.1	8.65	4.25	315	
	19	磨石	—	Ⅳ	砂岩	8.8	7.8	5.3	440	



第9図 縄文時代晩期土器

縄文時代晩期土器観察表

挿図番号	遺物番号	層位	出土区	部位	色調		胎土				焼成	外面	内面	備考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他				
第9図	20	Ⅳ	S-14	口縁部～胴部	褐灰～灰黄	浅黄橙	○	○	○		良	沈線文 ナデ	ミガキ	
	21	Ⅳ	S-14	胴部	灰黄	浅黄橙	○	○	○		良	ナデ	ミガキ	
	22	Ⅳ	S-14	口縁部	明赤褐	明赤褐	○	○	○		良	沈線文 ミガキ	ミガキ	

2 縄文時代晩期の調査

縄文時代晩期は、遺構は検出されなかった。遺物は限られた地点で少数だが出土している。

(1) 遺物

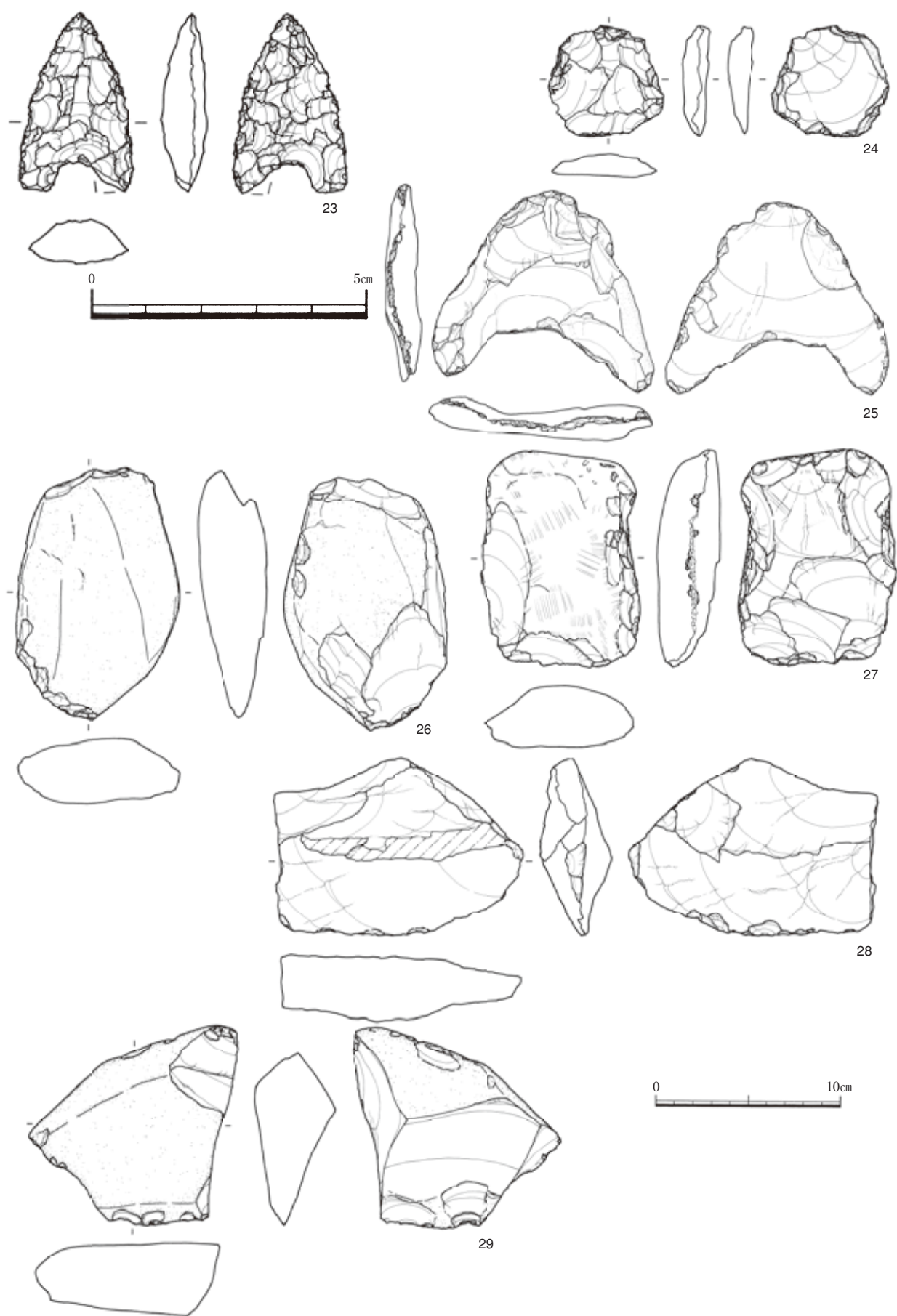
①土器 (第9図)

20～22は深鉢形土器である。20は口縁径41cmを測る。口縁部に沈線があり、屈曲した頸部から口縁部は外反する。口縁部はわずかに肥厚し、5～6条の沈線文が施される。21は胴部で20と同一個体の可能性がある。22は口縁部である。頸部から外反した口縁部は端部近くで肥厚し直行気味になる。又、2条の沈線文を施す。

②石器 (第10図～第12図)

23は打製石鏃で針尾産に類似する黒曜石が使用さ

れている。本報告書P21の農業開発総合センター内の石鏃分類図ではA-b-dに分類される。基端の片方が破損している。24・25はスクレイパーである。24は全体に調整を施している。25は剥離の後、各面に調整の痕が見られる。26は打製石斧である。側面に剥離痕があり、下部は破損している。27～29は礫器である。27は自然面を多く残し、下部に刃部の形成痕がある。28は安山岩で横長剥片を素材にし、下部に刃部形成痕がある。29は自然面を残し、下部に刃部の形成痕がある。30は棒状磨石の一部である。砂岩で作業面は片面である。31・32・34は砂岩で磨石と敲石の機能を持ったもので側面に敲打痕がある。33は磨石と凹石の機能を持ったものである。



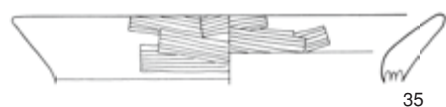
第10図 縄文時代晩期石器 1



第11図 縄文時代晩期石器 2

縄文時代晩期石器観察表

挿図番号	番号	器種	出土区	層位	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
						cm	cm	cm	g	
第10図	23	石鏃	—	—	黒曜石	3.3	1.7	0.8	4.39	A-b-d
	24	スクレイパー	—	—	頁岩	6.4	5.3	1.1	60	
	25	スクレイパー	V-12	Ⅲ	ホルンフェルス	10.75	12	2.1	185	
	26	打製石斧	V-13	Ⅲ	頁岩	11.8	8.7	3.5	465	
	27	礫器	V-13	Ⅲ	ホルンフェルス	13.85	8.95	3.85	550	
	28	礫器	V-11	Ⅲ	安山岩	9.75	13.55	3.9	425	
	29	礫器	V-8	Ⅲ	頁岩	11	11.35	4.4	511	
第11図	30	磨石	V-13	Ⅲ	砂岩	5.5	4.6	2.6	150	
	31	磨石	V-13	Ⅲ	砂岩	11.1	9.1	5.2	670	
	32	磨石	—	—	安山岩	16.9	12.3	6.5	2200	
	33	磨石	V-14	Ⅲ	砂岩	9.7	7.7	4.9	620	
	34	磨石	V-13	Ⅲ	砂岩	12.7	10.8	3.1	610	



第12図 古墳時代土器

古墳時代土器観察表

挿図番号	遺物番号	層位	出土区	部位	色調		胎土				焼成	外面	内面	備考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他				
第12図	35	—	—	口縁部	橙	橙	○	○	○		良	ハケ目	ハケ目	
	36	—	—	メンコ	橙	橙	○	○	○		良	ミガキ	ケズリ	

第5節 古墳時代の調査

古墳時代では、遺構は検出されなかったが、古墳時代の遺物と思われる土器片が検出された。

(1) 遺物 (第13図)

35は小型の甕形土器の口縁部である。口径約13.8 cmを測る。内側、外側ともハケ目調整が見られる。36は土器片を加工した土製品で一般にメンコと呼ばれている物で大きさは3×3cmである。

第6節 古代の調査

(1) 遺構

古代の調査では、第1地点で溝状遺構が検出された。精査したところ、平成13年に神原遺跡で検出された古代の溝状遺構の延長であると確認された。神原遺跡では溝内から多くの須恵器・土師器が出土しているが、本遺跡では遺物が見られなかった。神原遺跡と同一の溝であるため、神原遺跡の項でまとめて記

述することにした。

第7節 小結

頭無遺跡では、縄文時代早期・晩期、古墳時代、古代の遺構・遺物が出土している。農業開発総合センター遺跡群の他の遺跡と比べるとその量は多くはない。しかし、縄文時代早期の前平式土器、石坂式土器、平栴式土器や縄文時代晩期の上加世田式土器が出土していることや神原遺跡と結合される溝状遺構も検出され、他の遺跡と同時期にこの地でも生活が営まれていたことが想像される。

縄文時代早期では、集石遺構が8基検出された。掘り込みのない物ばかりであるが第2地点に3基、第4地点に5基とまとまったところから検出されている。また、2号集石には遺構内遺物として縄文時代早期の土器が出土した。形式分類は不明である。縄文時代早期の土器はⅠ類を前平式土器、Ⅱ類を石

坂式土器、Ⅲ類を平楯式土器として分類した。特に平楯式土器は農業開発総合センター内では数が少ない。また、スクレイパー、磨製石斧等の石器も検出されている。

縄文時代晩期では、遺構は検出されなかったが、上加世田式土器と思われる沈線文の入った土器が数点、打製石鏃が1点、砂岩の磨石や礫器が数点ずつ検出された。

古墳時代では成川式土器の小型の壺と思われる口縁部や二次加工したメンコが検出された。

古代では神原遺跡と結合する溝状遺構が検出された。神原遺跡では、遺構内遺物として須恵器等が多数検出されたが、頭無遺跡では遺物が検出されなかった。

頭無遺跡では、遺構・遺物の検出・出土が少量であったので、時代ごとの時期などを特定することは難しかった。

<参考文献>

- 1 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（112）
農業開発総合センター遺跡群（Ⅳ）「諏訪牟田遺跡・諏訪前遺跡・南原内堀遺跡・鍛冶屋堀遺跡」2007年3月鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 2 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（98）
農業開発総合センター遺跡群（Ⅲ）「尾ヶ原遺跡」
2006年3月鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 3 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（83）
農業開発総合センター遺跡群。（第1分冊）「窪見ノ上遺跡・建石ヶ原遺跡・古里遺跡・西原遺跡」
2005年3月鹿児島県立埋蔵文化財センター

跡 遺 田 迫 無 頭

第Ⅷ章 頭無迫田遺跡の調査成果

第1節 調査の経過

頭無迫田遺跡は、平成11年度、12年度、15年度に本調査を実施した。本調査は、1号調整池建設に伴う削平部分、及び作物付帯研究施設建設に係る範囲を対象とした。

平成11年度日誌抄

平成12年

2月 調査開始。表土剥ぎ、掘り下げ。縄文晩期及び早期の遺物が多く出土する。早期集石遺構検出。

3月 掘り下げ継続。早期遺物出土、集石遺構検出。

鹿児島大学上村俊雄教授・本田道輝助教授に現地指導を受ける。

10日調査終了、引渡し。

平成12年度日誌抄

平成13年

2月 表土剥ぎ。Ⅱ層掘り下げ。Ⅲ層上面での遺構検出。縄文晩期柱穴列検出。中世掘立柱建物跡検出。掘立柱建物跡は隣接の市

堀遺跡の建物と一連のものと思われる。

3月 掘立柱建物跡の調査。21日調査終了。

平成15年度日誌抄

平成15年

10月 遺跡の範囲確認のためのトレンチによる確認調査。上層は削平を受けている範囲が多く、Ⅲ層、Ⅳ層の調査とⅧ層の調査を平行して実施する。Ⅲ層から縄文晩期の遺物出土。Ⅳ層から縄文早期の遺物出土。

11月 Ⅲ層・Ⅳ層・Ⅷ層掘り下げ。Ⅷ層よりナイフ形石器出土。チャート礫の集積遺構検出。土坑検出。

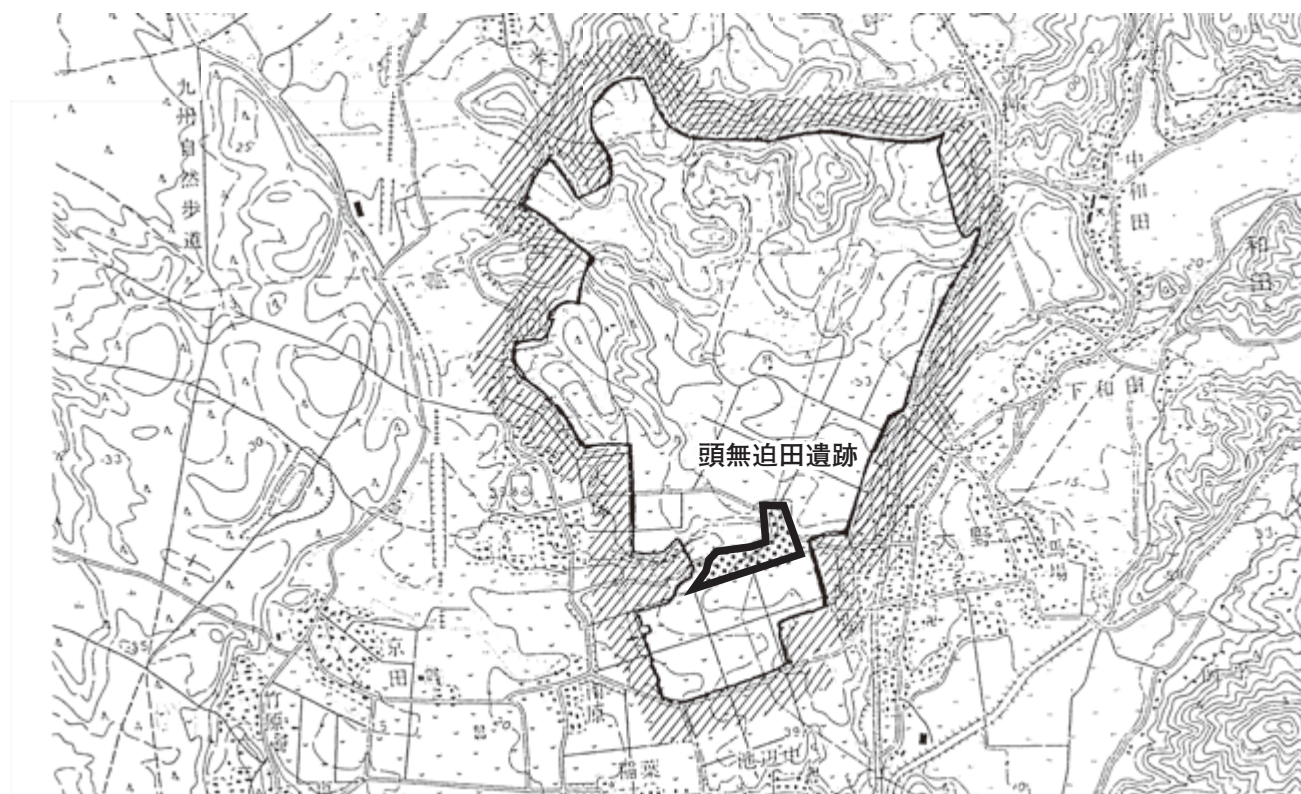
鹿児島大学本田道輝助教授の現地指導。

12月 Ⅳ層掘り下げ、集石遺構検出。Ⅷ層掘り下げ。

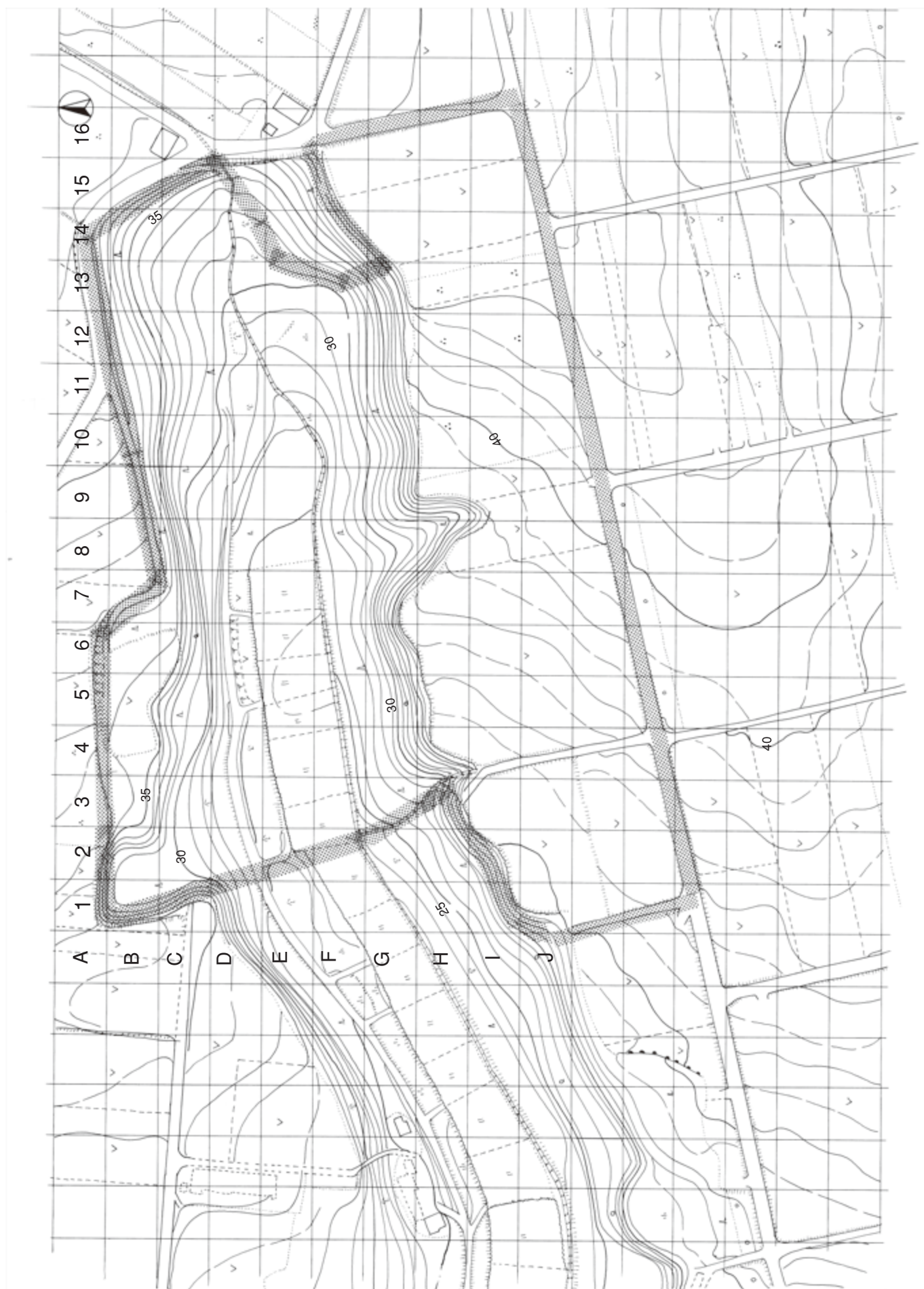
平成16年

1月 Ⅳ層掘り下げ、集石遺構調査（実測・写真撮影）。Ⅷ層掘り下げ。土層断面実測。

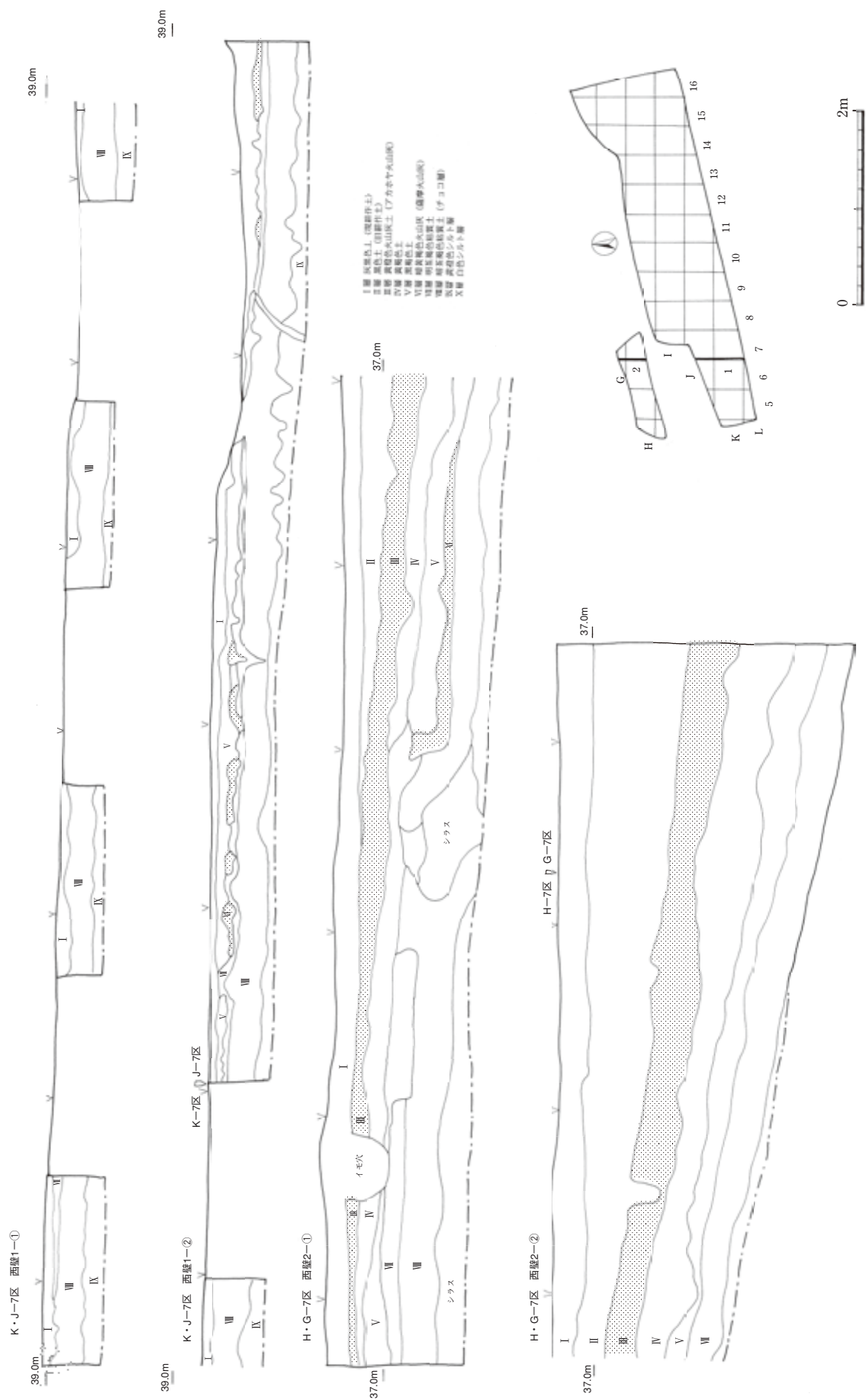
2月 下層確認トレンチ調査。土層断面実測。別府大学橘正信教授現地指導。6日調査終了。



第1図 頭無迫田遺跡位置図（1／25,000）



第2図 地形図及びグリッド配置図（1グリッド：20 m）



第4図 土層断面図2

第2節 発掘調査の方法及び概要

発掘調査は国土座標にあわせた20×20mの調査範囲（グリッド）を設定して実施し、遺跡地内の北側からA・B・C…、西側から1・2・3…とした。

遺跡は、谷を挟んで北側は宗円堀遺跡・頭無遺跡、東側は市堀遺跡、南側は中尾遺跡に接している。標高35～43mの傾斜地に在り、北側に比高差15mの谷が入り込んでいる。

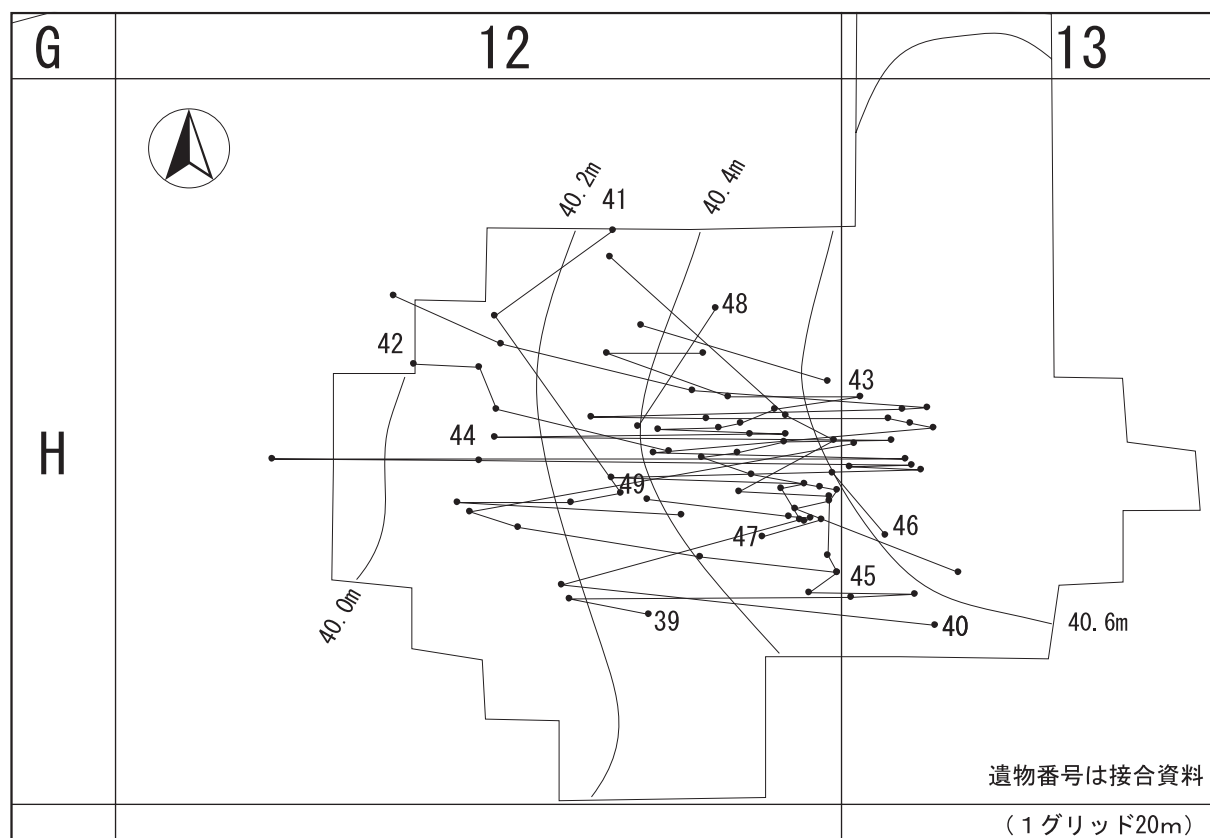
調査の結果、東側の市堀遺跡に接している所では中世の掘立柱建物跡が検出され、市堀遺跡の掘立柱建物跡群と一連のものととらえたい。Ⅱ層は削除されているため中世の遺物は出土していない。Ⅲ層からは縄文時代晩期の入佐式土器がわずかに出土している。Ⅳ層・Ⅴ層からは縄文時代早期の遺構・遺物が多く出土している。遺構は集石遺構が8基検出され、遺物は石坂式土器を中心に前平式土器・桑ノ丸式土器・下剥峯式土器・押型文土器・塞ノ神式土器等が出土している。また、石器も石鏃・石斧・磨石・石皿等豊富である。Ⅷ層からは、旧石器時代のブロックが検出され、ナイフ形石器や台形石器が出

土している。また、剥片も多く出土し、接合もできる状況である。

第3節 遺跡の層序（第3図・第4図）

頭無迫田遺跡における層序は、農業開発総合センター遺跡群における標準的な層序と同様である。字頭無迫田は大野原台地の南側に位置し、西側から入り込んでいる谷を含めて谷の南北に広がる。本調査を実施したのは、1号調整池により削除される範囲及び作物付帯研究施設建設に伴う範囲で、いずれも谷の南側である。調査を実施した範囲の標高を見ると南東側が43m、南西側が38m、北東側が42m、北西側が36mと南東から北西へ傾斜している地形で、北側は谷へ向けて急傾斜で、谷との比高差は15m程度である。高い部分では上層が削平されている所が多く、旧地形はもっと傾斜が強かったと思われる。

南側の大半が削平を受けⅡ・Ⅲ層は見られない。また、部分的にⅣ～Ⅵ層まで削平されている所もある。平成11年度に調査された北側では、Ⅲ層がよく残っており、谷に近い傾斜地ではⅡ層の堆積も厚く残っている。



第5図 旧石器時代遺物出土状況

第4節 旧石器時代の調査成果

旧石器時代の遺物包含層はⅧ層である。H-12・13区において石器や剥片が集中しているブロックが検出されている。また、H-13区ではチャートの礫6個がまとまって出土する集積遺構。I-12区において落とし穴と思われる土坑が検出されている。遺物はナイフ形石器・台形石器と剥片が出土している。

1 遺構（第5図・第6図・第7図）

遺構はブロックとチャートの礫集積遺構および落とし穴が検出されている。

（1）ブロック（第5図）

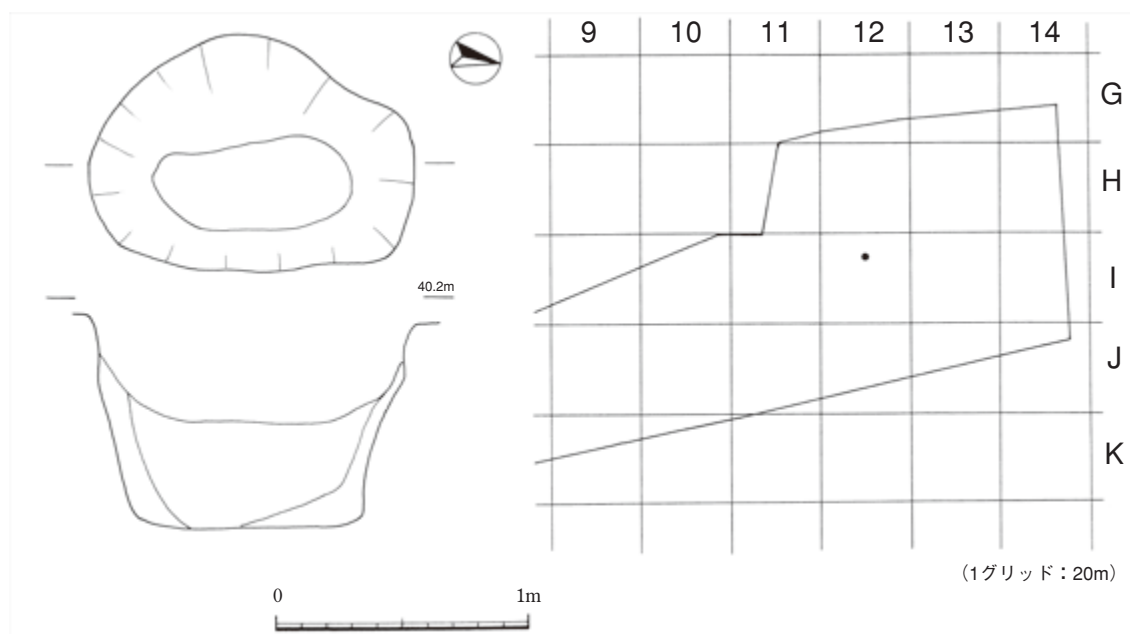
ブロックは、H-12・13区を中心に検出され、ナイフ型石器・台形石器・剥片等が集中して出土している。石材は、頁岩・チャート・玉髄・黒曜石を主体とするものである。

（2）落とし穴（第6図）

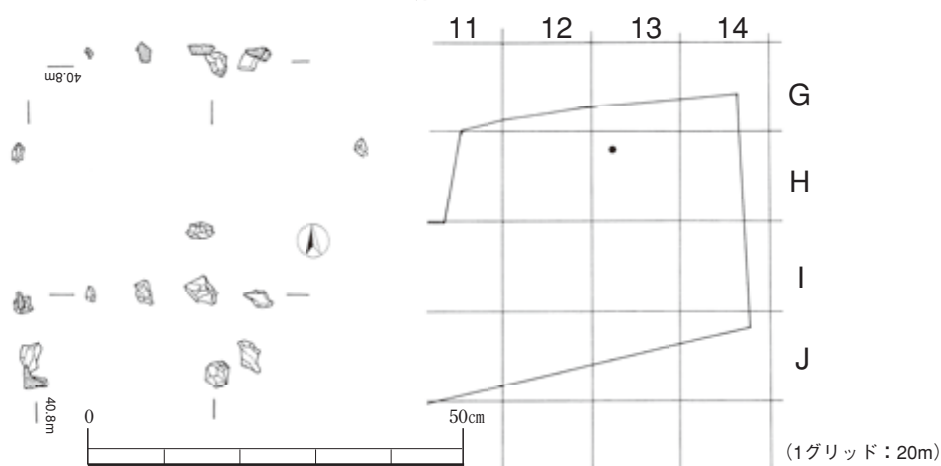
落とし穴は、I-12区のⅧ層上面において検出されたもので、長さ1.27m、幅0.95m、深さ0.8mの規模である。平面形状は略楕円形で、掘り込みはほぼ垂直に近い。また、底面に小ピットは存在しない。埋土の下部はシラス混じりのやや明るいが、上部は、Ⅷ層の暗茶褐色粘土が入っている。底面に小ピットは存在しないが形状から落とし穴と考えたい。

（3）集積遺構（第7図・第8図）

集積遺構はH-13区のⅧ層において検出された。約50cmの範囲に4～10cm大のチャートの礫7点と頁岩の剥片1点がまとまって出土している。1-①は石核と厚手の分割剥片の接合図である。節理面を利用して分割された可能性がある。②はその平坦な分断面を打面とする石核である。正面部分にわずかな



第6図 落とし穴



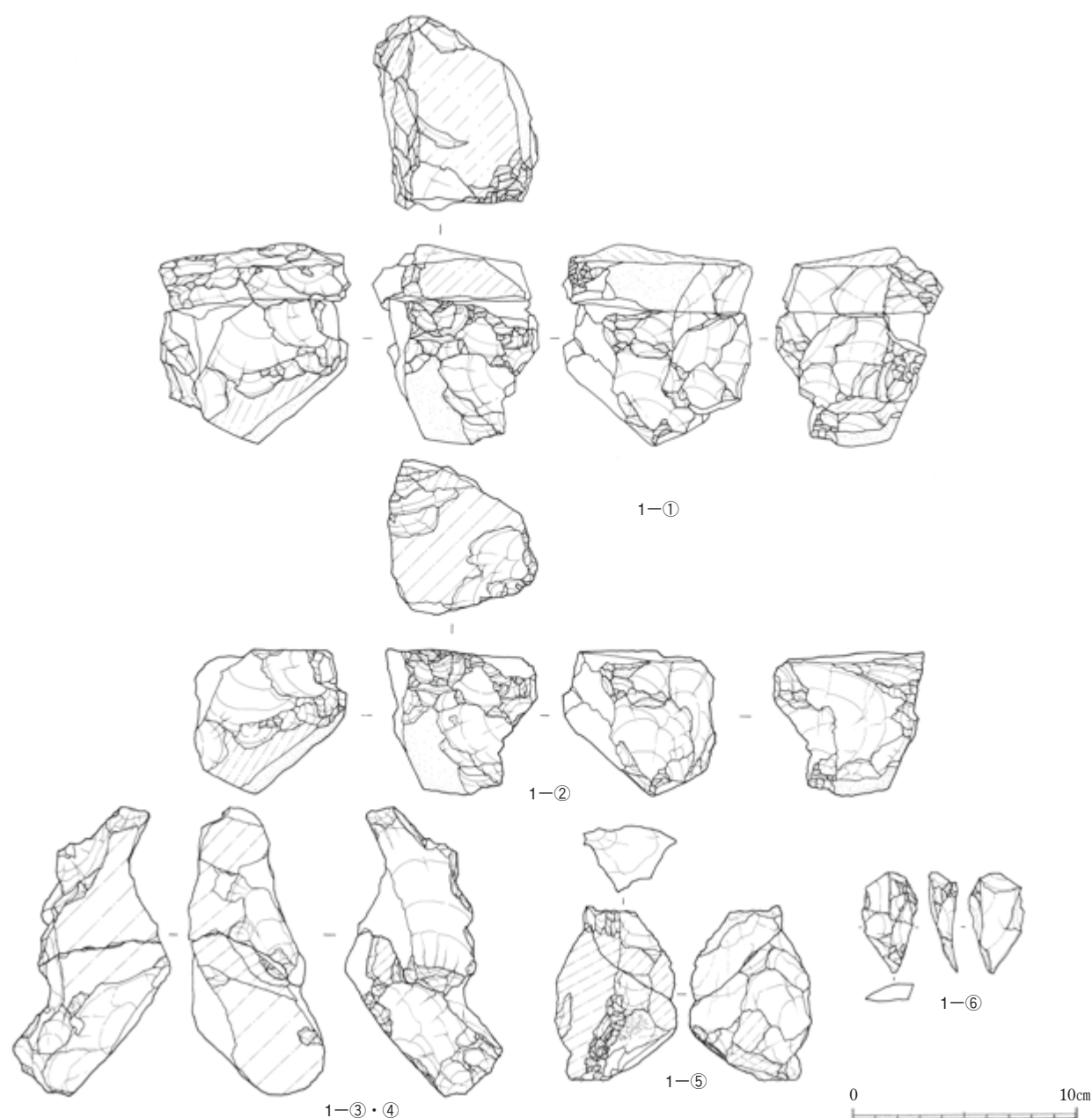
第7図 チャート集積遺構

剥離が見られるが、剥片剥離は進んでなく準備段階で止めたと考えられる。③と④の接合資料は分割された厚手の剥片が接合したものであり、石核の素材剥片である。⑤も節理面から分割された剥片の接合資料である。⑥は1の一括資料に含まれる他石材の剥片である。石材は頁岩であり部分的に二次加工が認められる。

(4) 旧石器時代の遺物 (第9図～第20図)

2～8はナイフ形石器である。2は砂岩製で比較

的大きなものであり縦長剥片の基部と片側先端部に二次加工を施したものである。先端部をわずかに欠損する。3は三船産黒曜石製の小型縦長剥片を素材とし、基部と右側縁にブランディングを施したものである。4は玉髓の剥片を使用し基部と先端部近くにブランディングを施したもので裏面にも平坦剥離が施されている。5はチャート製の小型縦長剥片を素材とし、基部にブランディングを施したものである。6・7は同一母岩と考えられる珪質頁岩の剥片

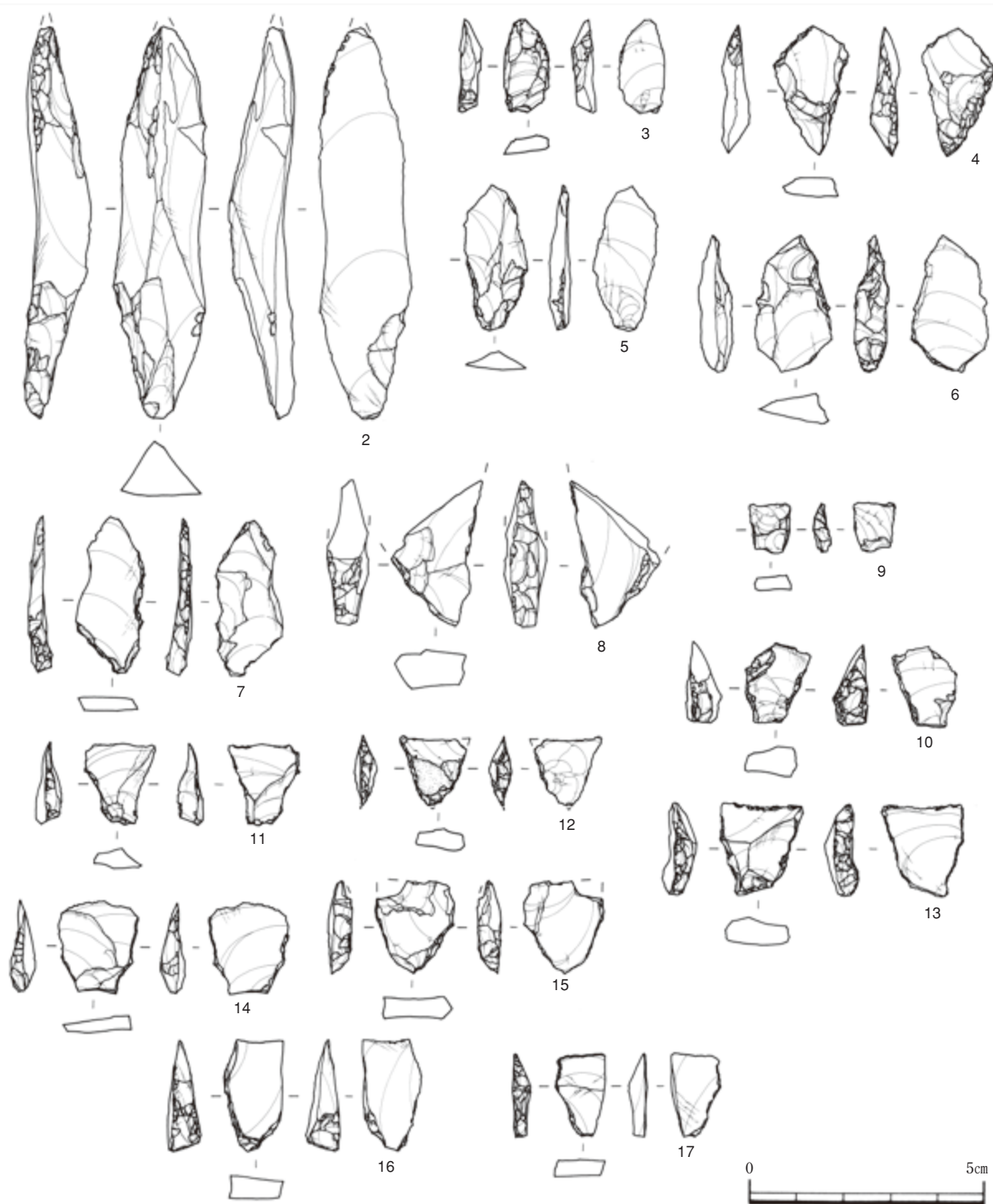


第8図 旧石器1

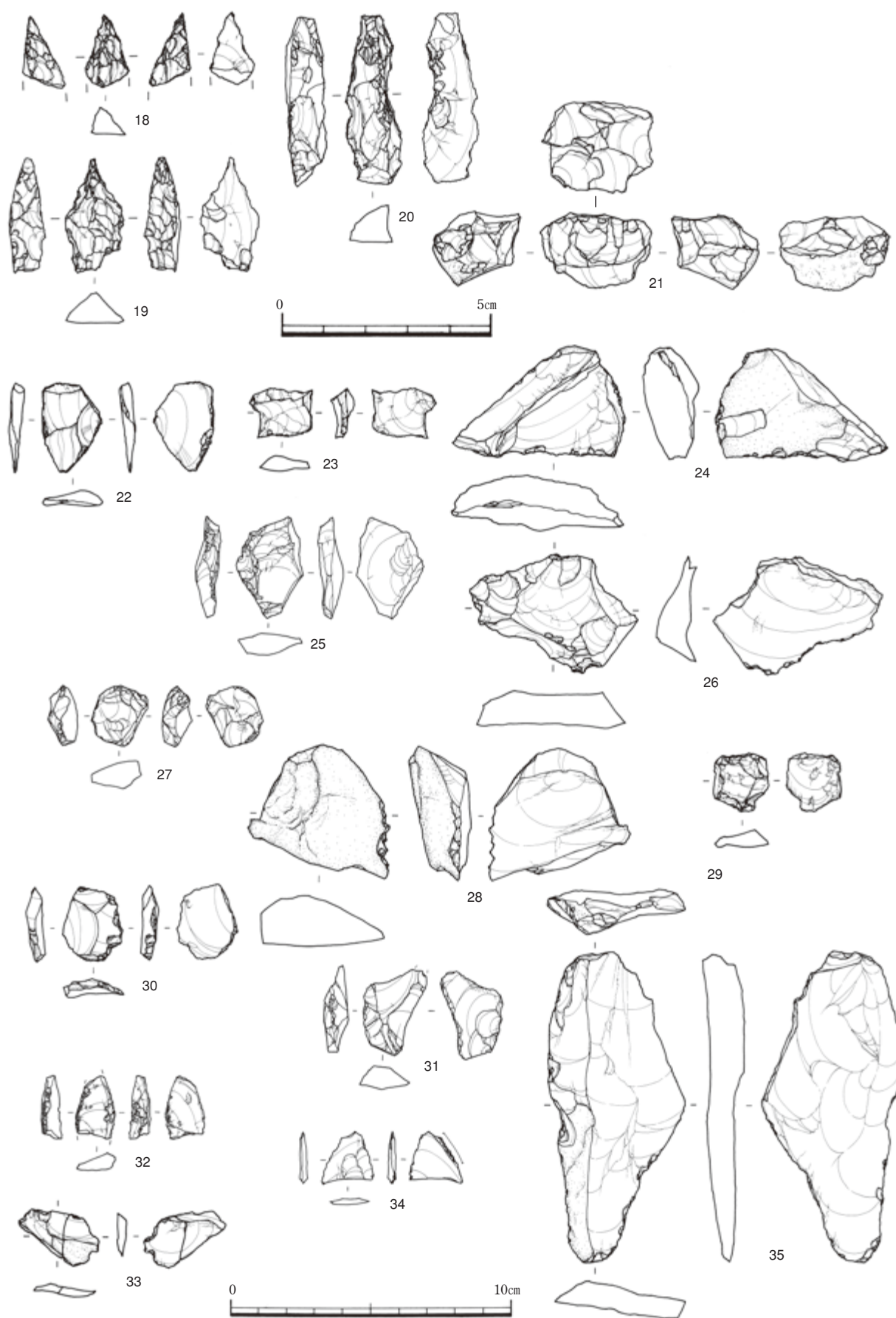
にブランディングを施したものである。8は厚手の幅広剥片を素材としてブランディングを施したものであるが先端部を欠損している。

9～17は台形石器である。9は三船産黒曜石の剥片を横位に使用し、細かいブランディングを施した部分を両側縁にしたものである。10～15は比較的小さい不定形剥片を素材として、両側縁にブランティ

ングを施し、剥片の鋭利な縁辺を上部水平方向に用いた台形石器である。このうち15は上牛鼻産黒曜石を石材としている。10・13・14は玉髄製である。16・17は11と同一母岩の珪質頁岩製であり、幅広の剥片を素材として基部から片側側縁にブランディングを施したもので、片側側縁は折断のままである。



第9図 旧石器2



第10図 旧石器 3

18～21は三稜尖頭器である。18は三船産黒曜石で両側面に整形加工が施された先端部である。19・20は上牛鼻産黒曜石の横長剥片を素材とし、二次加工により両側面を整形したものであり、稜上調整も施されている。19は基部を20は先端部を欠損している。21は石核である。上牛鼻産黒曜石製で背面に自然面が残るが、正面と両側面には剥片剥離が施されており、打面も周囲から求心状に剥片剥離が行なわれている。

22～35はスクレイパーとしたものである。22は良質黒色を呈する腰岳産に近い西北九州系の黒曜石製剥片に二次加工を施し、刃部としたものである。23は玉髄質剥片の縁辺に二次加工が認められ、2ヶ所の突端近くに細かい二次加工が認められ突端部は錐として使用されたと思われる。24は硬質砂岩の縁辺に二次加工が施されたもの。25～28は同一母岩と推定される珪質頁岩を利用して縁辺に粗い二次加工が施されたものである。29～34は三船産黒曜石や玉髄系剥片の縁辺に二次加工を施して刃部としたものである。

35はシルト質頁岩製で大型の縦長剥片の一部に二次加工を施したものである。

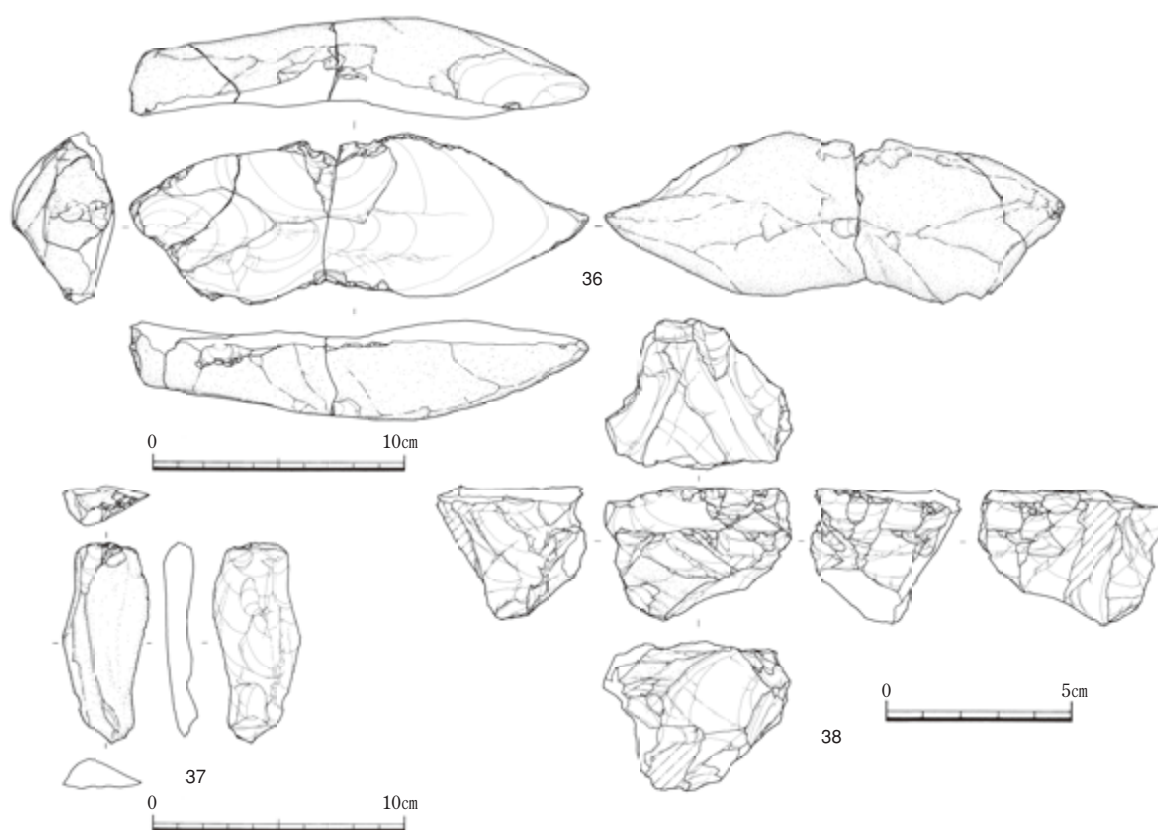
36はシルト質頁岩の大型剥片を素材とした石核である。礫皮面を打面にして剥片を剥いでいる。また、側面を打面にして求心状に剥離を行なっている。

37は36と同一母岩の可能性があるもので、表皮のついた最初の剥片である。

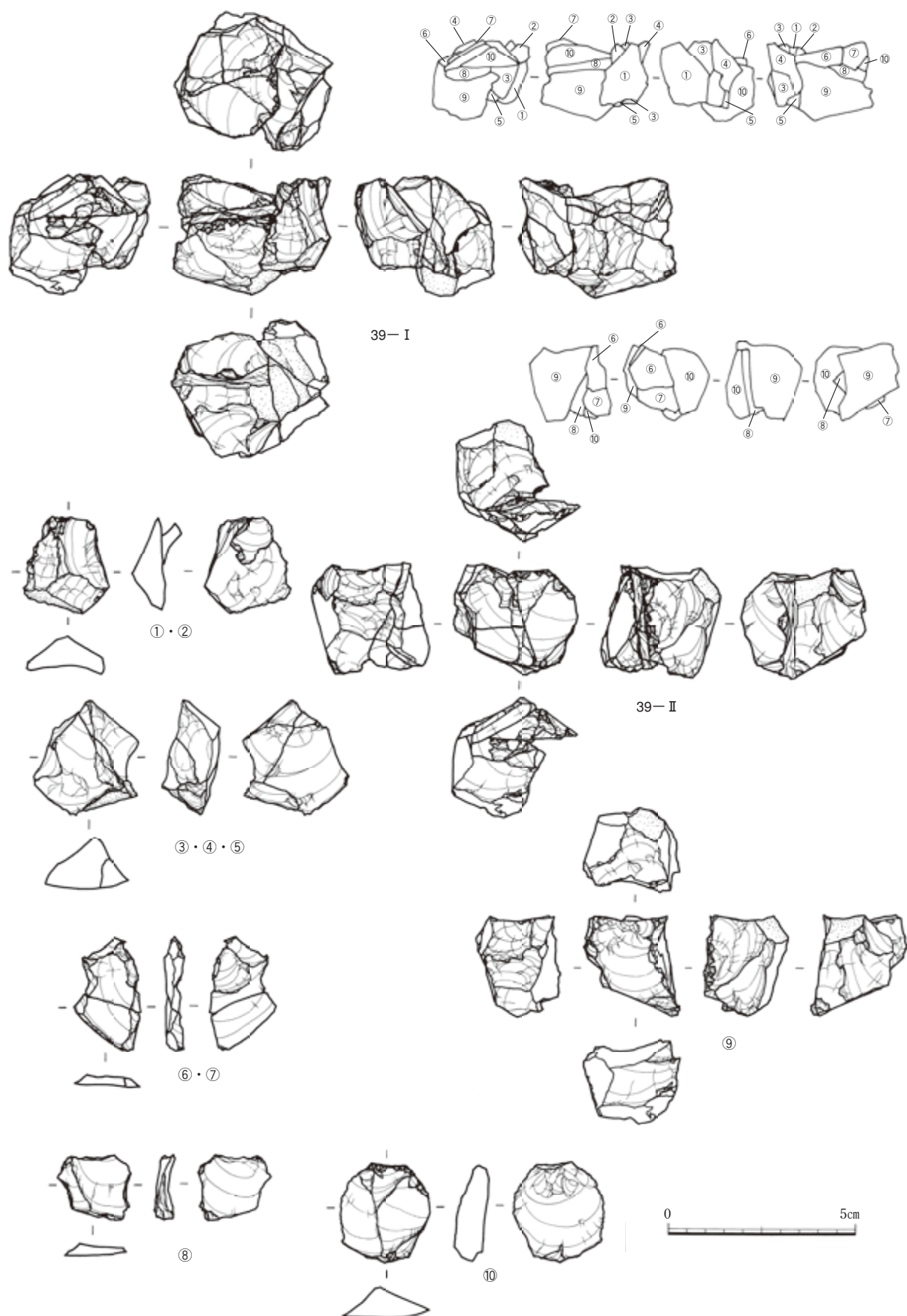
38は平坦な節理面を打面にして、そこから剥片剥離を行なった石核である。縦長剥片を意識して剥離しているが、節理の目によりステップしている。

39～49は接合資料である。39は鉄石英を石材とした接合資料である。39-Iは全体の接合関係であり、39-IIではより細かくなった段階、そして⑨が最終段階の石核であり、最後まで剥片剥離が行なわれている。このことは目的剥片がちいさくても使用可能であることを意味している。

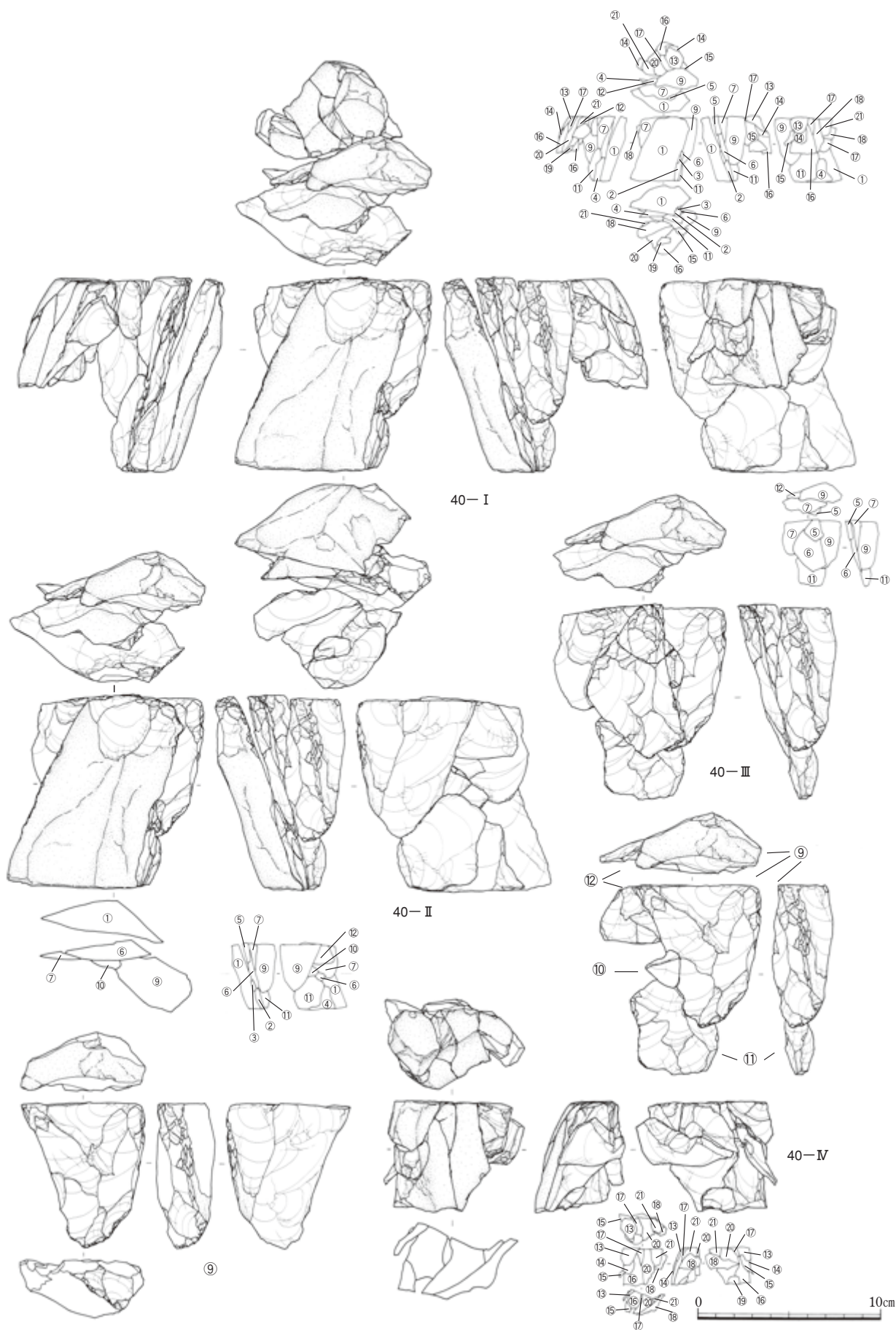
40はシルト質頁岩を石材とする接合資料である。比較的中型から大型の縦長剥片を取ることを目的としたものと考えられる。



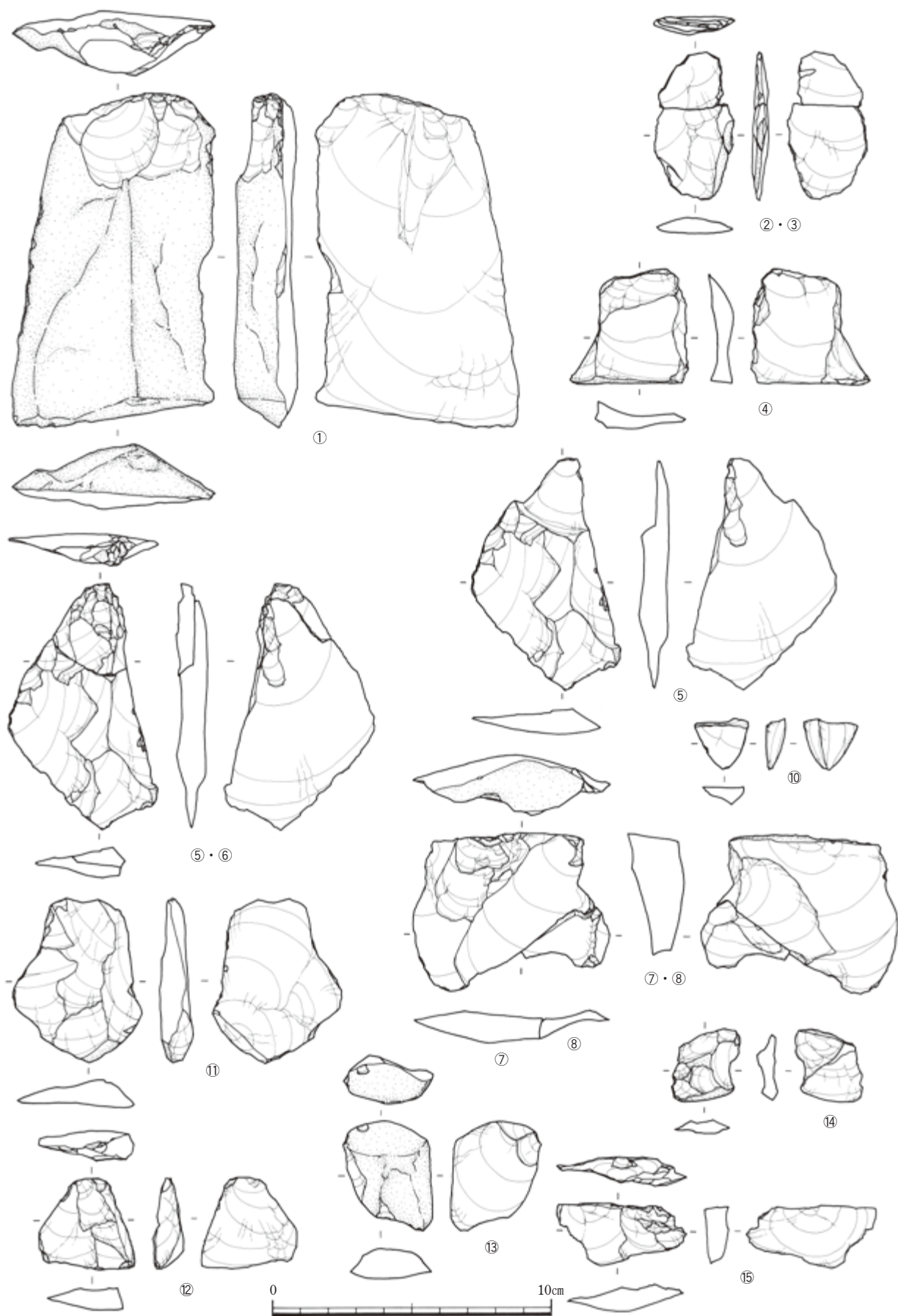
第11図 旧石器 4



第12図 旧石器 5



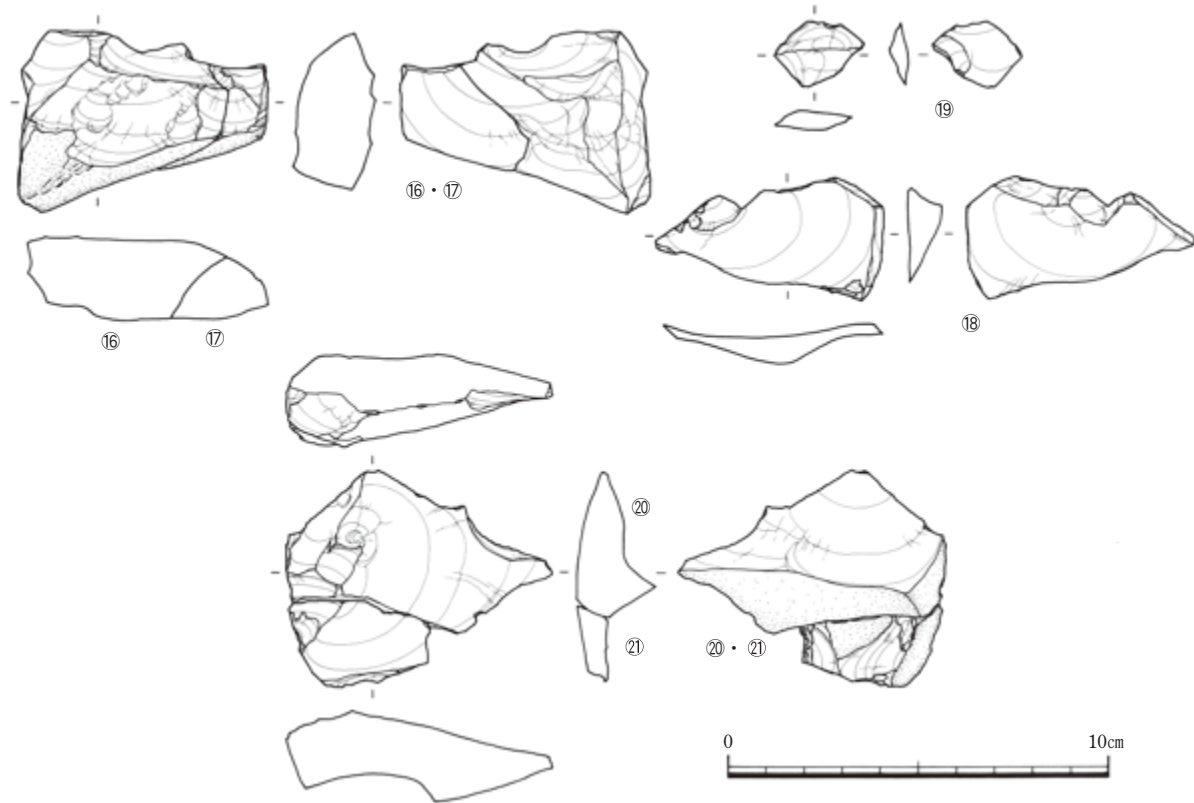
第13图 旧石器 6



第14図 旧石器 7

41～43は41と同一母岩と考えられるものである。一連の剥片剥離の一部と考えられる。このうち43は剥片とスクレイパーが接合したものである。43-②は幅広の剥片の両側縁に比較的粗い二次加工を施し刃部としている。

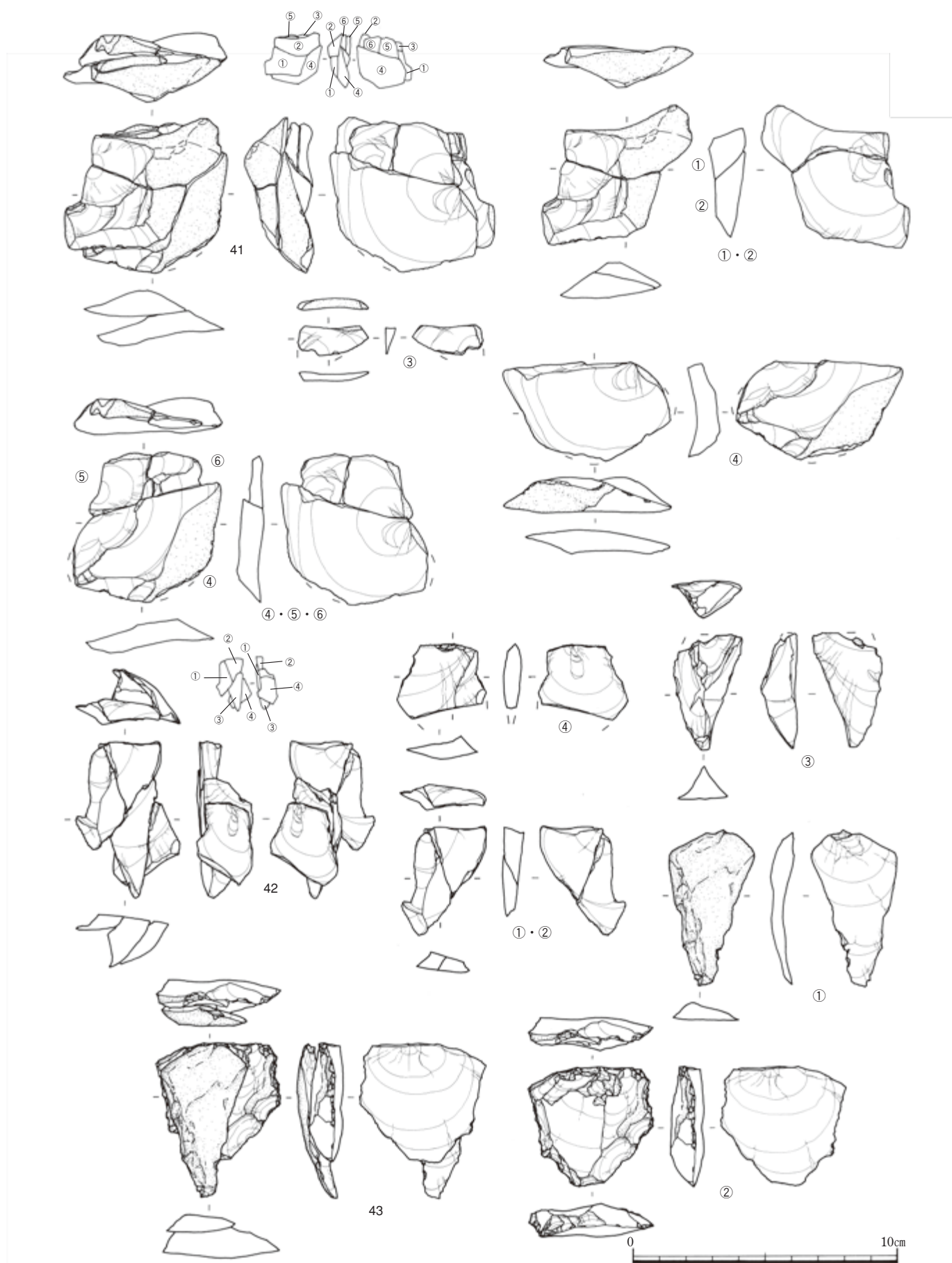
44～49は珪質頁岩を石材とするもので同一母岩と考えられるものである。石核は残されていないが一連の剥片剥離過程がうかがえる資料である。なおナイフ形石器や台形石器・スクレイパー等としてこれらの剥片が使用された同一母岩系のものが6・7・11・16・17・25～28である。



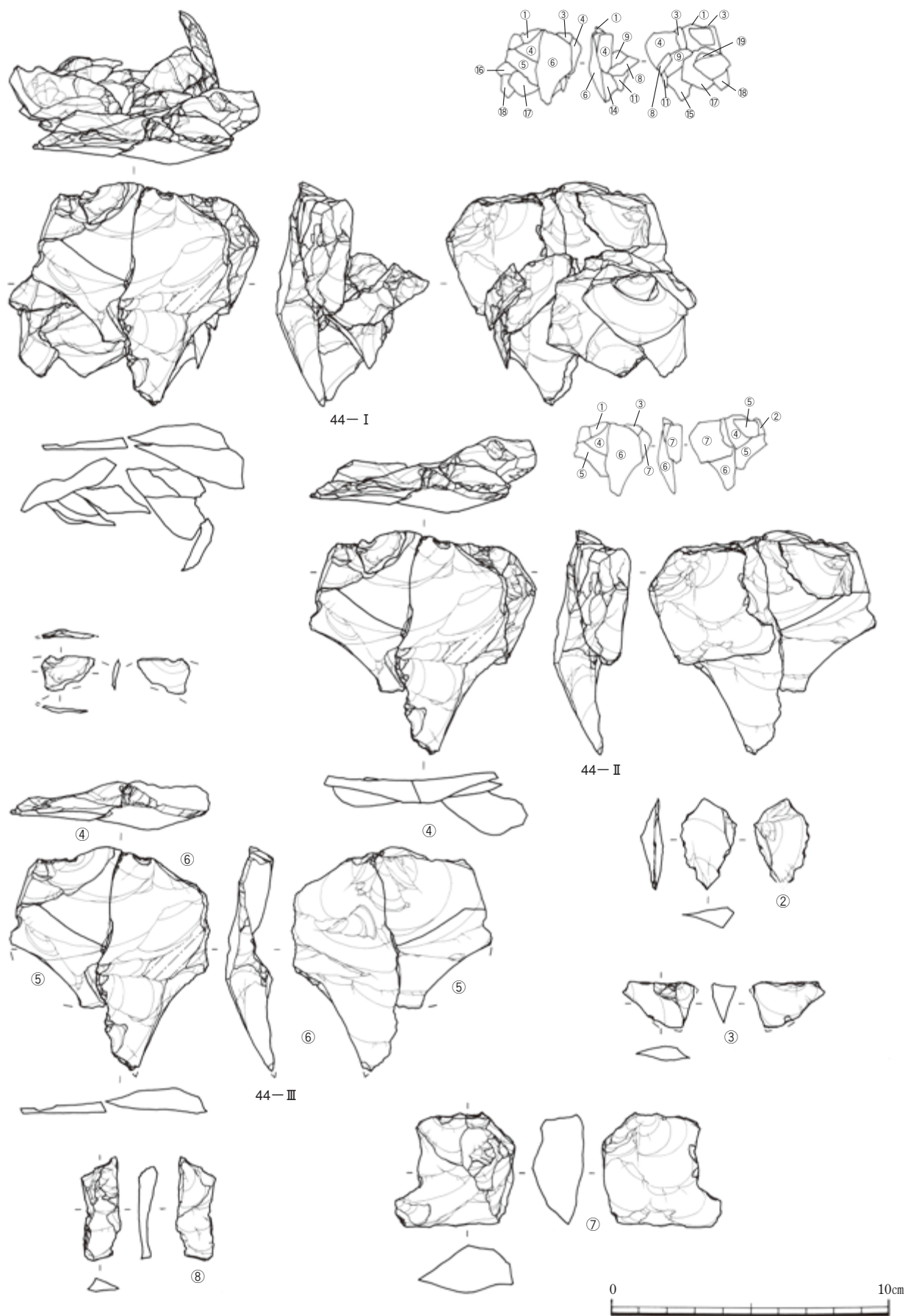
第15図 旧石器 8

旧石器時代観察表 1

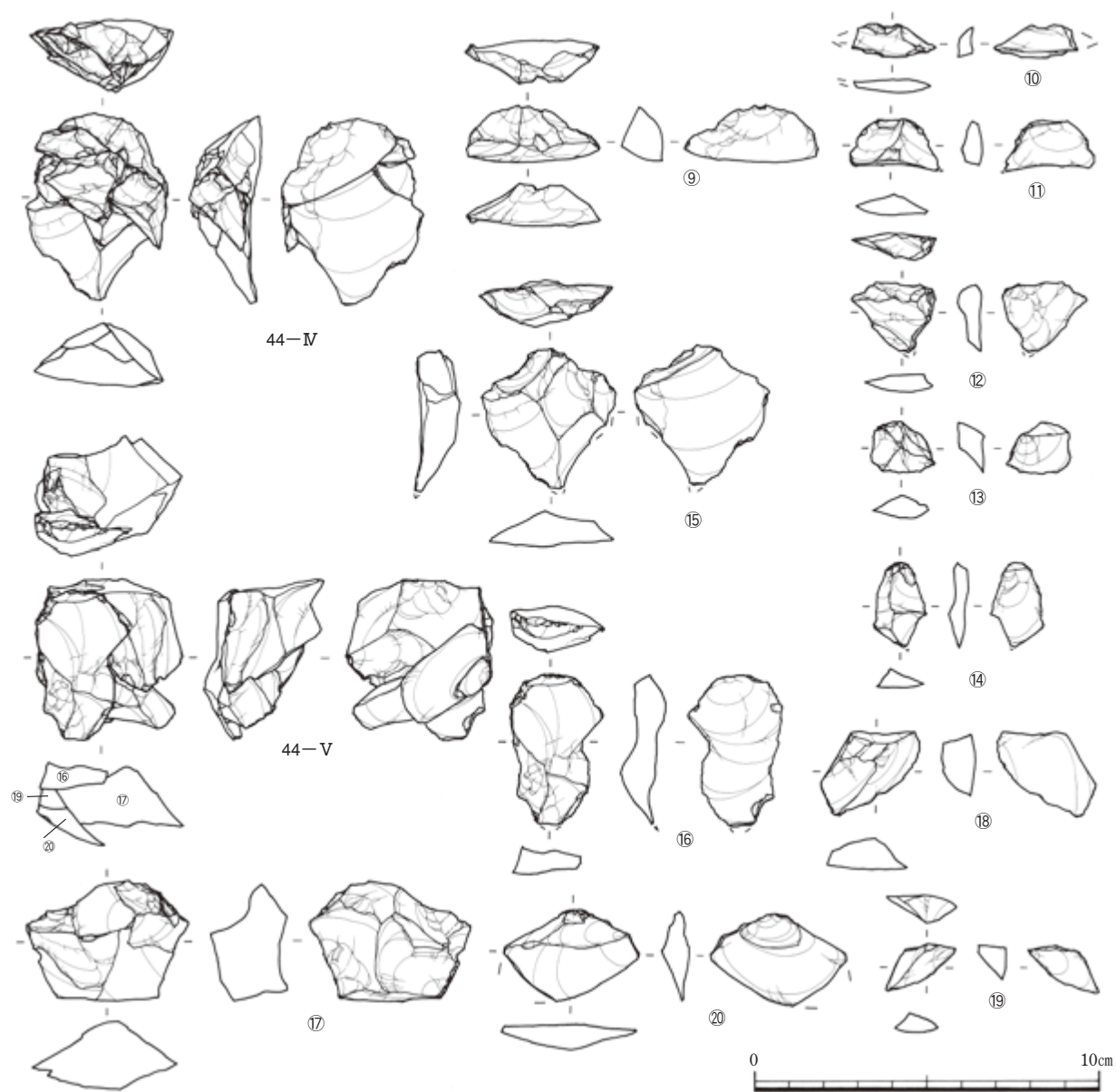
挿図 番号	番号	器種 遺構	出土区	層位	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
第8図	1	集積遺構	H-13	VIII	チャート	—	—	—	—	接合資料
	1-⑥	剥片	H-13	VIII	頁岩	4.50	2.50	1.30	1.15	
第9図	2	ナイフ形石器	I-13	VIII	砂岩	(8.40)	2.00	1.45	18.30	
	3	ナイフ形石器	H-13	VIII	黒曜石(三船)	2.00	1.00	0.50	0.90	
	4	ナイフ形石器	H-12	VIII	玉髄	2.75	1.60	0.62	2.10	
	5	ナイフ形石器	H-13	VIII	チャート	3.10	1.35	0.45	1.60	
	6	ナイフ形石器	H-12	VIII	珪質頁岩	2.90	1.70	0.70	3.70	
	7	ナイフ形石器	H-12	VIII	珪質頁岩	3.30	1.50	0.60	2.20	
	8	ナイフ形石器	H-12	VIII	頁岩	3.10	1.90	0.90	4.10	
	9	台形石器	H-13	VIII	黒曜石(三船)	1.05	0.90	0.40	0.30	
	10	台形石器	H-12	VIII	玉髄	1.75	1.40	0.75	1.50	
	11	台形石器	H-12	VIII	珪質頁岩	1.80	1.50	0.60	1.10	
	12	台形石器	H-12	VIII	黒曜石(上牛鼻)	(1.50)	(1.40)	0.50	0.70	
	13	台形石器	H-12	VIII	玉髄	2.00	1.80	0.75	2.30	
	14	台形石器	H-13	VIII	玉髄	2.00	1.70	0.55	1.40	
	15	台形石器	H-13	VIII	黒曜石(上牛鼻)	2.00	1.70	0.55	1.90	
	16	台形石器	H-13	VIII	珪質頁岩	2.40	1.30	0.70	2.20	
	17	台形石器	H-12	VIII	珪質頁岩	1.80	1.10	0.40	0.90	



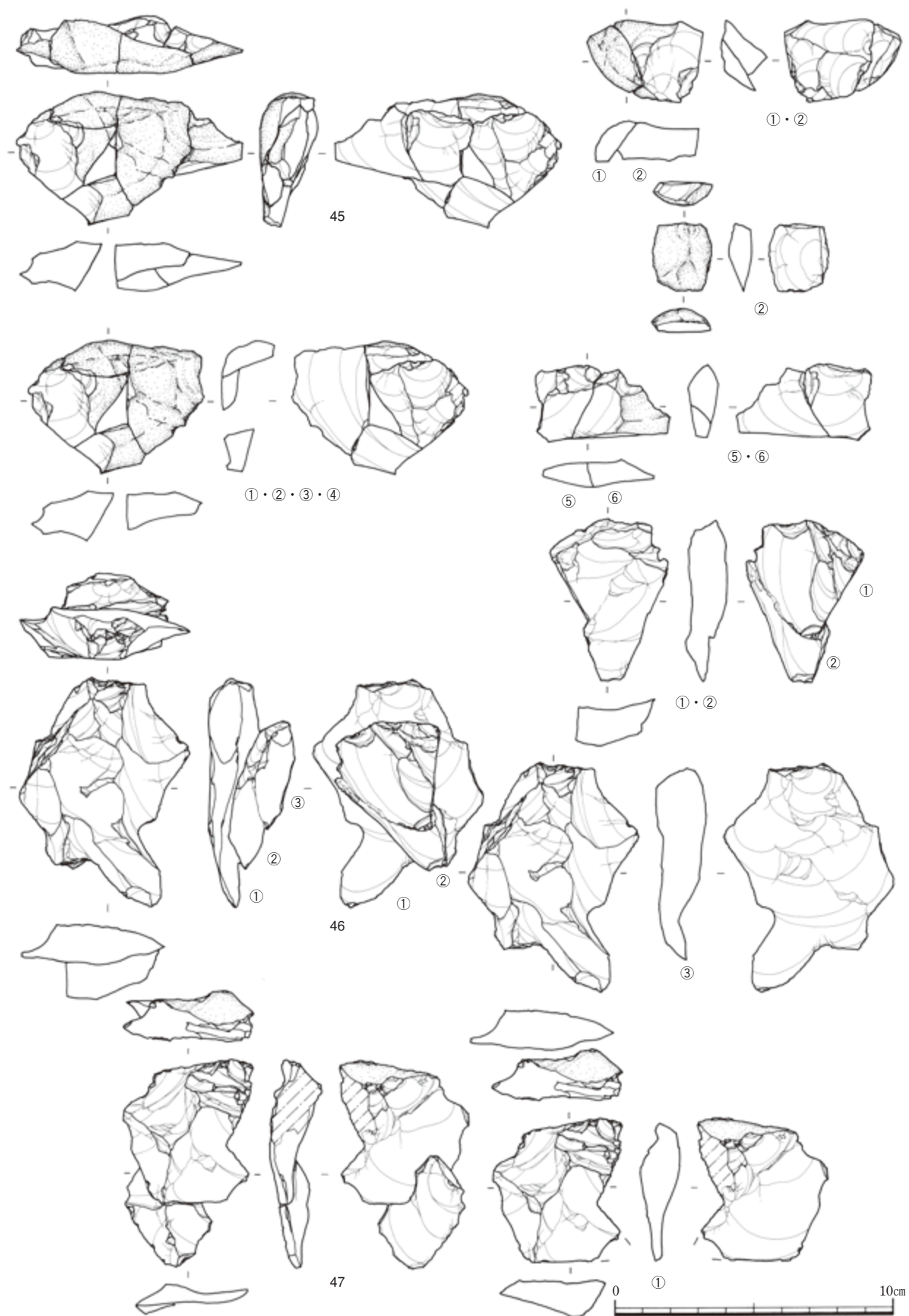
第16图 旧石器 9



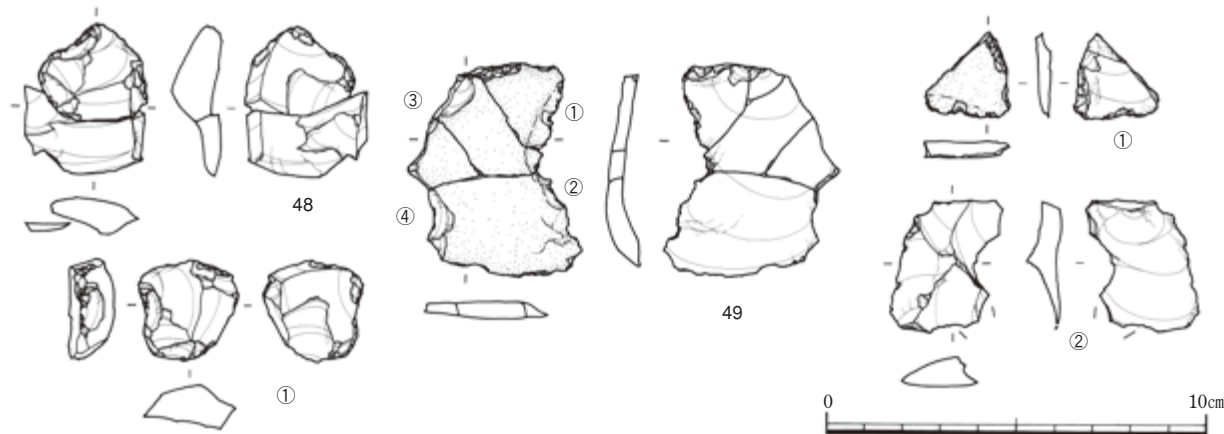
第17图 旧石器10



第18图 旧石器11



第19图 旧石器12



第20図 旧石器13

旧石器時代観察表 2

挿図 番号	番号	器種	出土区	層位	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
第10 図	18	三稜尖頭器	I-12	VII	黒曜石(三船)	(1.75)	(1.10)	(1.00)	0.90	
	19	三稜尖頭器	H-12	VII	黒曜石(上牛鼻)	2.75	1.40	0.90	2.40	
	20	三稜尖頭器	H-13	VII	黒曜石(上牛鼻)	4.10	1.35	0.95	5.30	
	21	ブランク	H-12	VII	黒曜石(上牛鼻)	1.80	2.65	2.10	10.90	
	22	スクレイパー	H-12	VII	黒曜石(西北九州系)	3.25	2.15	0.60	2.50	
	23	スクレイパー	H-13	VII	玉髄	1.80	2.50	0.90	2.50	
	24	スクレイパー	H-12	VII	硬質砂岩	4.10	6.20	2.00	32.20	
	25	スクレイパー	H-12	VII	珪質頁岩	3.60	2.40	0.90	6.40	
	26	スクレイパー	H-13	VII	珪質頁岩	5.30	6.00	1.50	30.50	
	27	スクレイパー	H-13	VII	珪質頁岩	2.20	2.00	1.10	4.30	
	28	スクレイパー	H-12	VII	珪質頁岩	4.80	5.10	2.30	44.30	
	29	スクレイパー	H-13	VII	黒曜石(三船)	2.15	2.00	0.65	2.80	
	30	スクレイパー	H-13	VII	玉髄	2.70	2.15	0.70	3.20	
	31	スクレイパー	H-13	VII	玉髄	(3.10)	(2.20)	0.90	4.20	
	32	スクレイパー	G-13	VII	黒曜石(三船)	(2.25)	(1.40)	(7.05)	1.90	
	33	スクレイパー	H-12・13	VII・VIII	玉髄	2.10	2.90	0.50	2.20	
	34	スクレイパー	H-12	VII	玉髄	1.90	1.90	0.30	0.90	
第11 図	35	スクレイパー	H-12	VII	シルト質頁岩	11.20	4.90	1.60	62.20	
	36	石核	H-13	VII	シルト質頁岩	7.00	18.60	4.10	475.0	
	37	剥片	H-13	VII	シルト質頁岩	8.20	3.50	1.70	41.90	
第12 図	38	石核	H-13	VII	頁岩	3.70	5.10	4.10	68.60	
	39	接合資料	H-12・13	VII	鉄石英	—	—	—	—	
	40	接合資料	H-12・13	VII	シルト質頁岩	—	—	—	—	
	41	接合資料	H-12	VII	シルト質頁岩	—	—	—	—	
	42	接合資料	H-12	VII	シルト質頁岩	—	—	—	—	
	43	接合資料	H-12	VII	シルト質頁岩	—	—	—	—	
	44	接合資料	H-12・13	VII	珪質頁岩	—	—	—	—	
	45	接合資料	H-12	VII	珪質頁岩	—	—	—	—	
	46	接合資料	H-12・13	VII	珪質頁岩	—	—	—	—	
	47	接合資料	H-12	VII	珪質頁岩	—	—	—	—	
	48	接合資料	H-12	VII	珪質頁岩	—	—	—	—	
	49	接合資料	H-12	VII	珪質頁岩	—	—	—	—	

第5節 縄文時代の調査成果

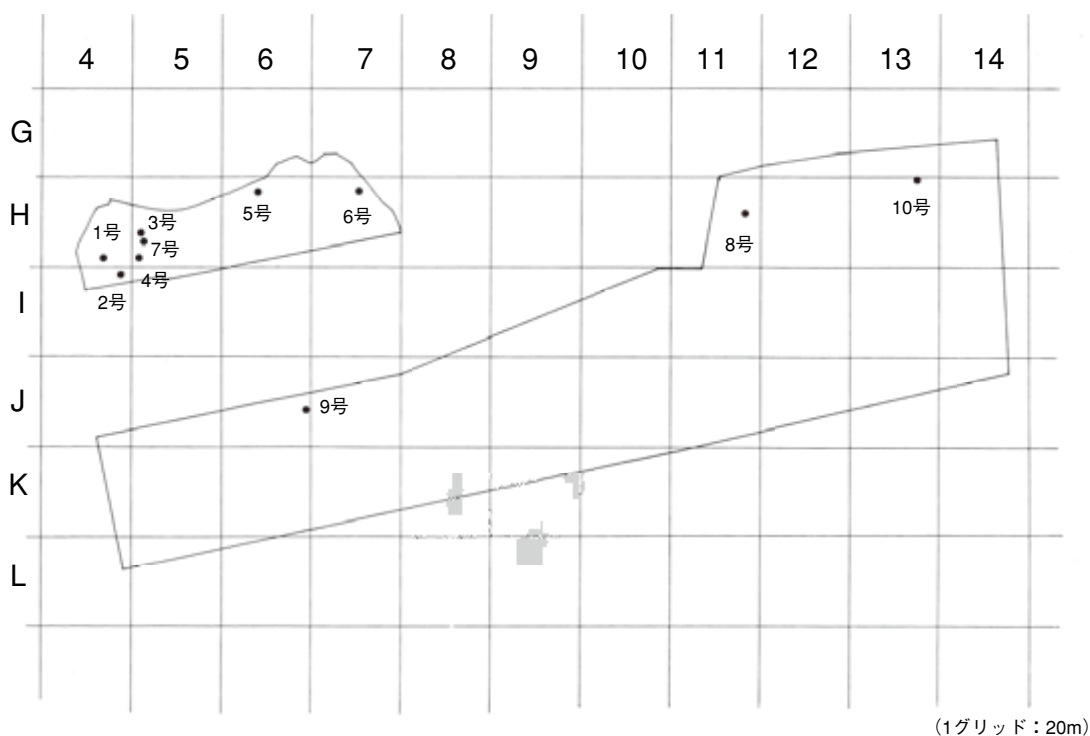
縄文時代は早期の遺物出土量が際立っている。早期では、集石遺構10基が検出され、土器・石器が多く出土している。晩期では、1間×1間の掘立柱建物跡、柱穴（3～6個）が一列に並ぶ柱穴列が検出され、土器・石器も多く出土している。土器は入佐式土器が主体である。後期は市来式土器が1点出土したのみで、遺構も検出されなかった。

1 縄文時代早期の調査成果

縄文時代早期では、前葉から後葉（Ⅰ類～Ⅺ類）までの11類の土器が出土している。その中で出土量の多いのはⅤ類土器、次いでⅢ類土器・Ⅱ類土器・Ⅳ類土器である。遺構は集石遺構が10基検出されている。

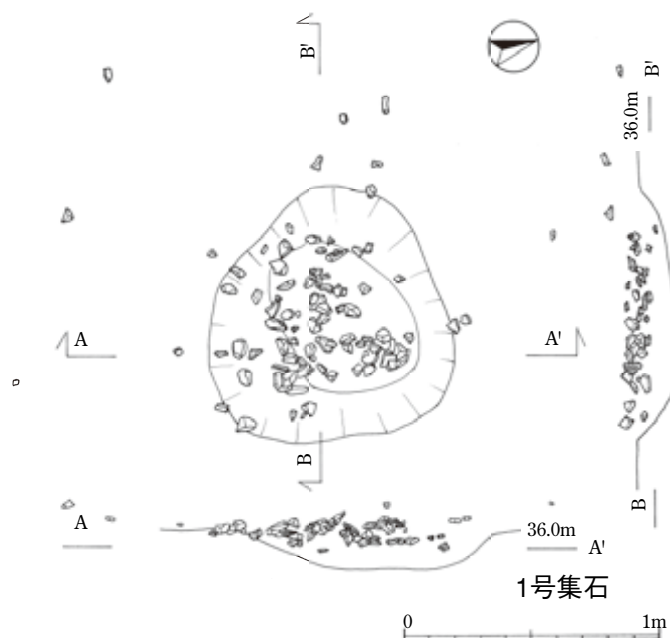
（1）遺構（第21図～第25図）

縄文時代早期の遺構は、平成11年度調査分7基、平成15年度調査分3基、合わせて10基が検出されている。



1号集石遺構（第21図）

H－4区において検出されたもので1.5m×1.5mの範囲に広がるが、集中範囲は0.6m×0.6mである。こぶし大の角礫98個からなり、掘り込みは中心部に位置し、長さ1m、幅1m、深さ0.15mの不整形なものである。また、礫は掘りこみの床面より上位にあり、ほぼ平坦である。



第21図 縄文時代早期集石遺構配置図 1号集石遺構

2号集石遺構（第22図）

I－4区において検出されたもので、1.5m×1mの範囲に広がる。こぶし大の角礫63個からなり、礫は、やや集中しているが、ほぼ平坦で掘り込みは見られない。

3号集石遺構（第22図）

H－5区において検出されたもので、2.5m×1.8mの範囲に広がる。こぶし大の角礫62個がまばらな

状態で見られる。掘りこみは見られずほぼ平坦である。

4号集石遺構（第23図）

H－5区において検出されたもので、1.5m×1mの範囲に広がる。こぶし大から小礫まで46個からなり、南端にわずかな集中が見られ、北側へのびている。掘り込みは見られずほぼ平坦である。



5号集石遺構（第23図）

H－6区において検出されたもので、 $1.5\text{m} \times 1.3\text{m}$ の範囲に広がる。こぶし大の角礫を中心に56個からなる。北側の傾斜が強いため、一部が傾斜に沿って落ちている状況である。掘り込みは見られない。

6号集石遺構（第23図）

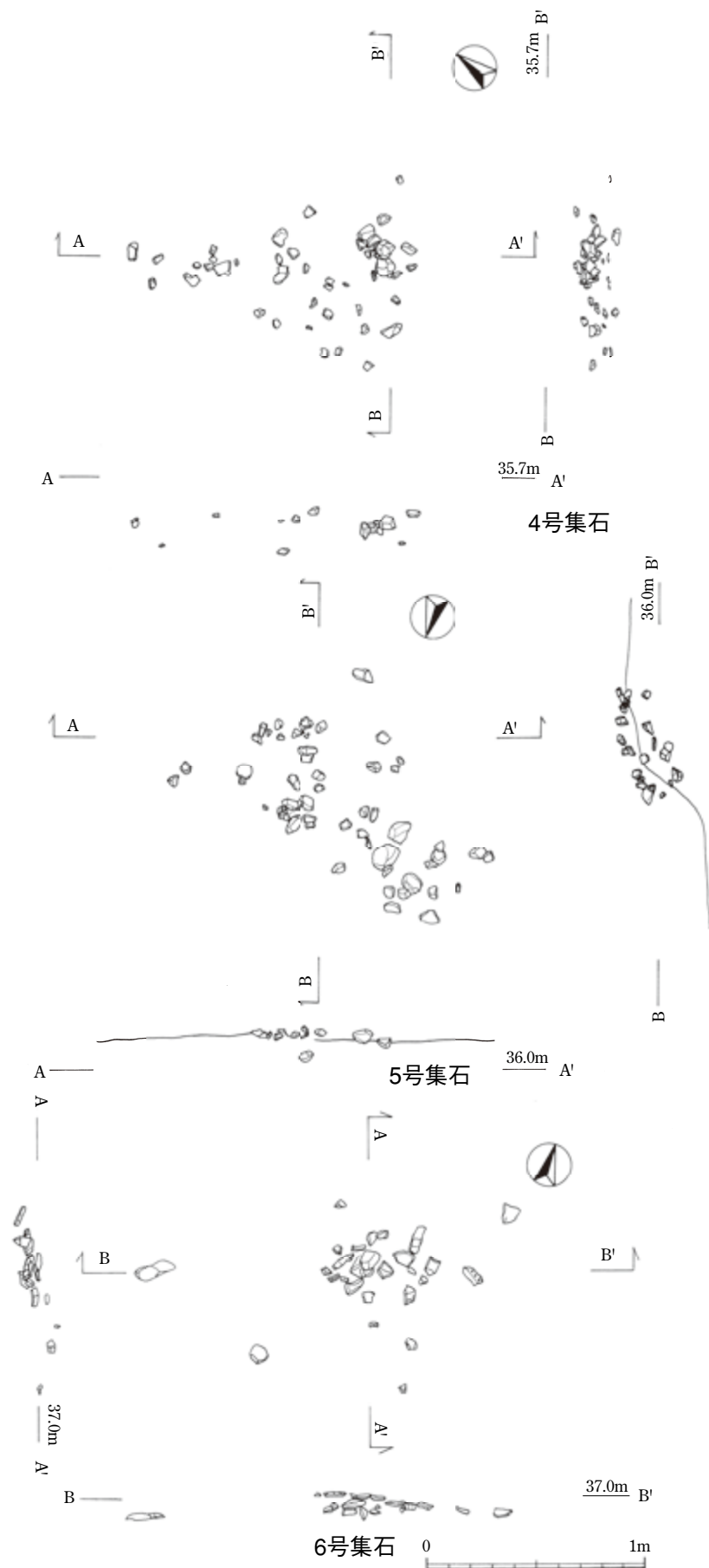
H－7区において検出されたもので、 $1.6\text{m} \times 1\text{m}$ の範囲に広がる。10cm大の角礫を中心に26個からなり、中心部にわずかな集中がある。東側に土器片2点も見られる。掘り込みは見られず平坦である。

7号集石遺構（第24図）

H－5区において検出されたもので、 $1\text{m} \times 1\text{m}$ のこぶし大の角礫126個が集中している。掘り込みは集中域の下で、 $0.7\text{m} \times 0.6\text{m}$ 、深さ0.2mである。礫も掘り込みの下部まで入り込んでいる。

8号集石遺構（第24図）

H－11区において検出されたもので、 $2.3\text{m} \times 1.8\text{m}$ の範囲にこぶし大の角礫35個がまばらな状態で見られる。掘り込みはなく平坦である。



第23図 4号・5号・6号集石遺構

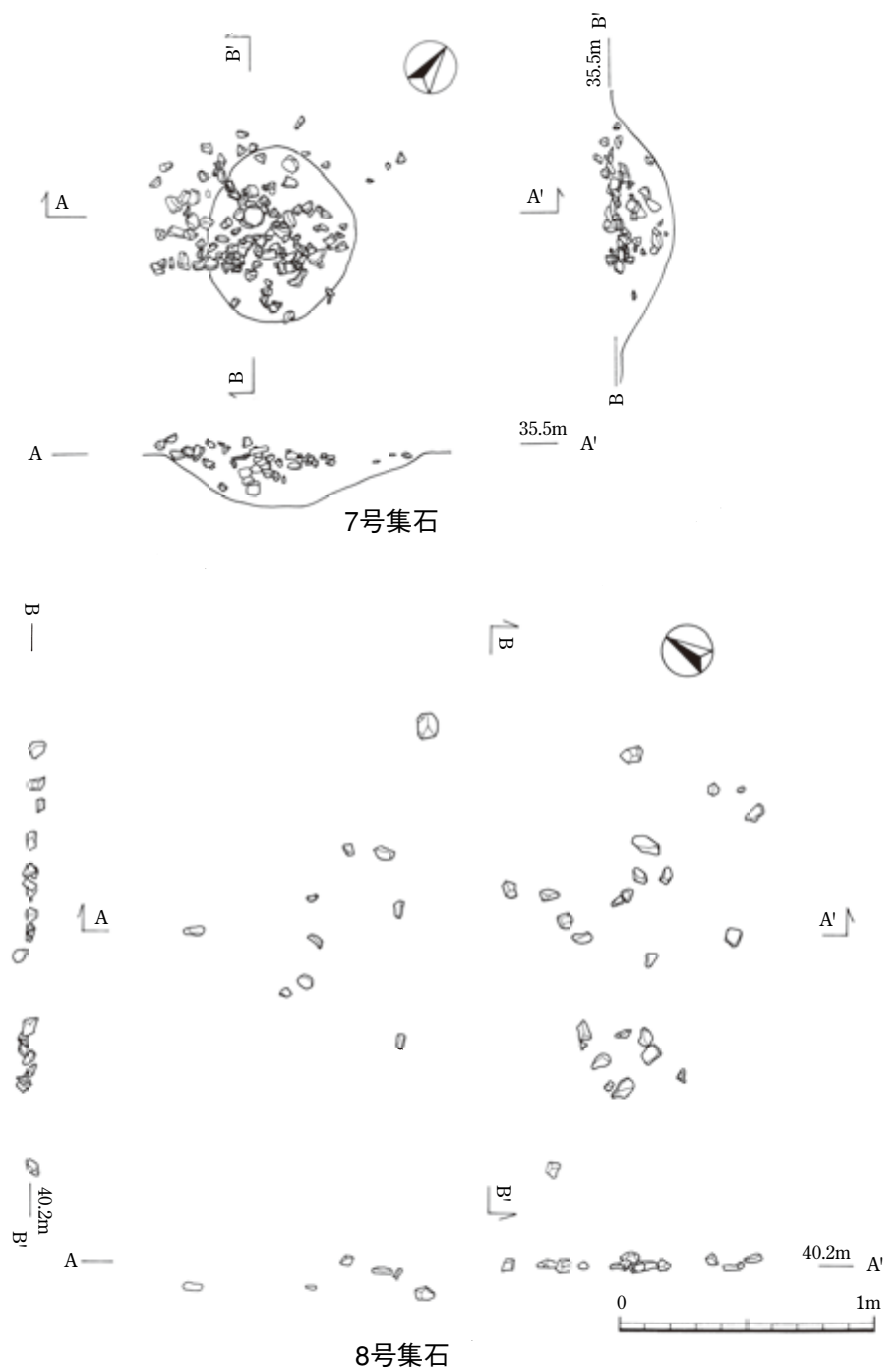
9号集石遺構（第25図）

J-6区において検出されたもので、3m×3mの広い範囲に見られる。こぶし大よりやや大きめの角礫を中心に309個の礫が1m×1mのやや集中した範囲を中心にして周辺はまばらに散在している状況である。掘り込みは集中している範囲の下位にあり、1.35m×1.25mの円形プランであるが、深さは

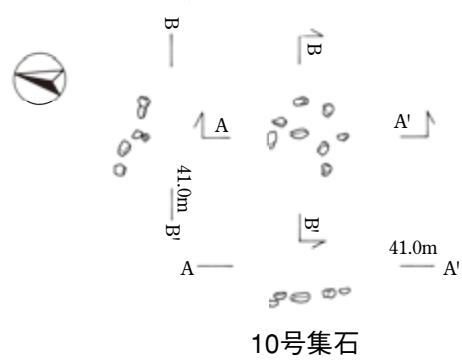
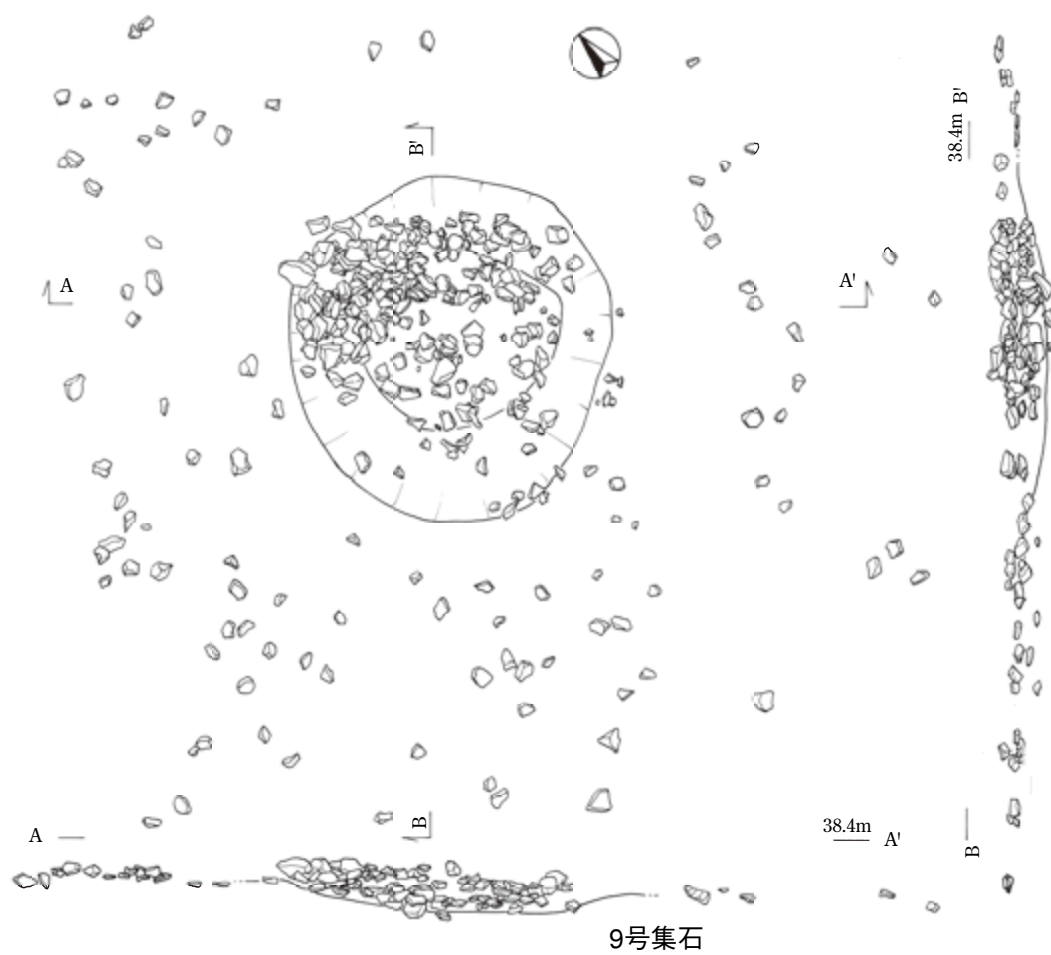
0.2mと浅いものである。周辺に散在している礫は中心部から掻き出されたものと思われる。

10号集石遺構（第25図）

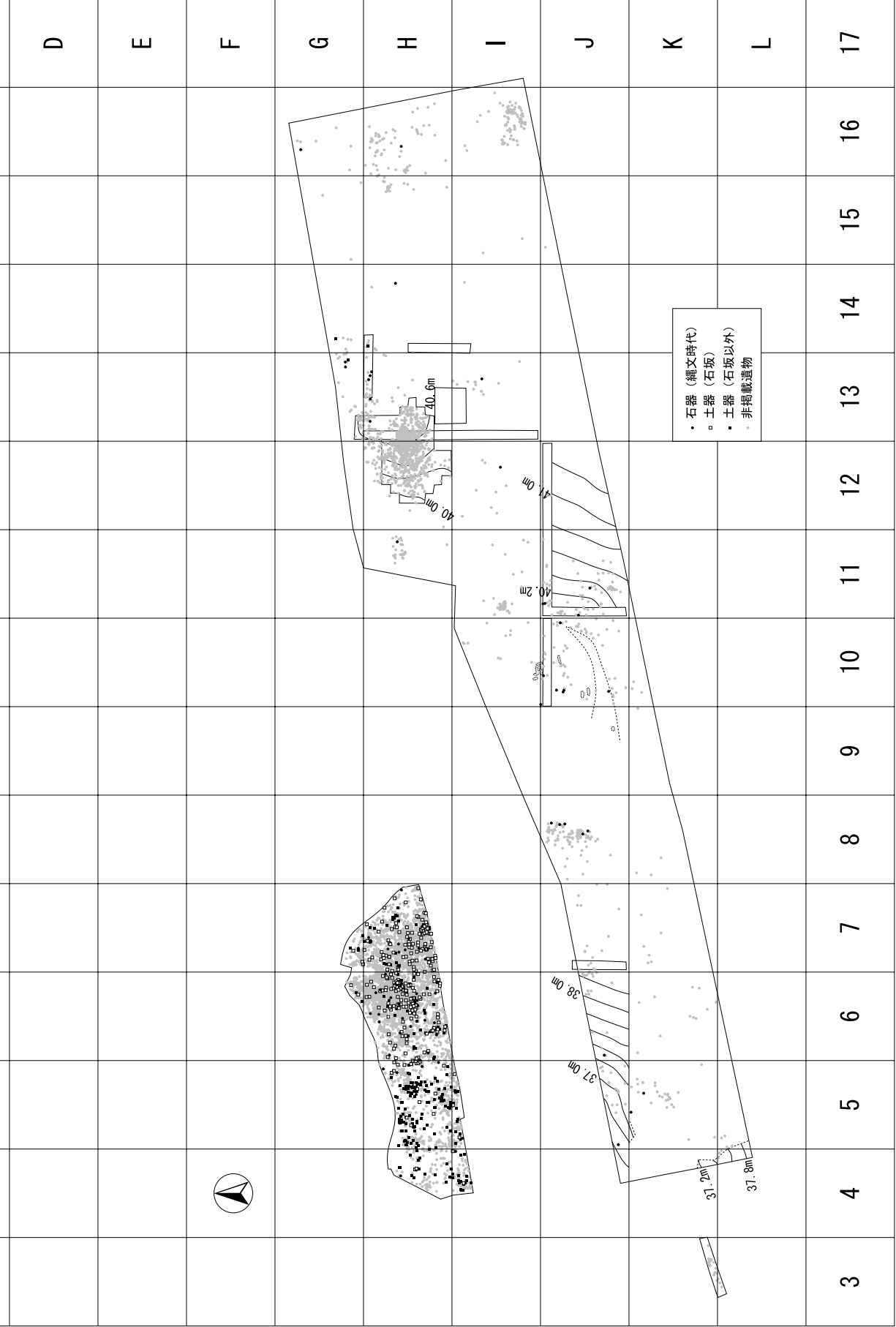
H-13区において検出されたもので、0.3m×0.3mの範囲に10cm未満の角礫8個がまばらな状態で見られる小さなものである。掘り込みはなく平坦である。



第24図 7号・8号集石遺構



第25図 9号・10号集石遺構



第26図 縄文時代早期遺物出土状況

(2) 遺物 (第27図～第59図)

①土器 (第27図～第49図)

縄文時代早期の土器は、Ⅰ類～Ⅵ類の11類に分類される。Ⅱ類土器・Ⅲ類土器・Ⅴ類土器はまとめて出土しているが、他の類は数は少ない。

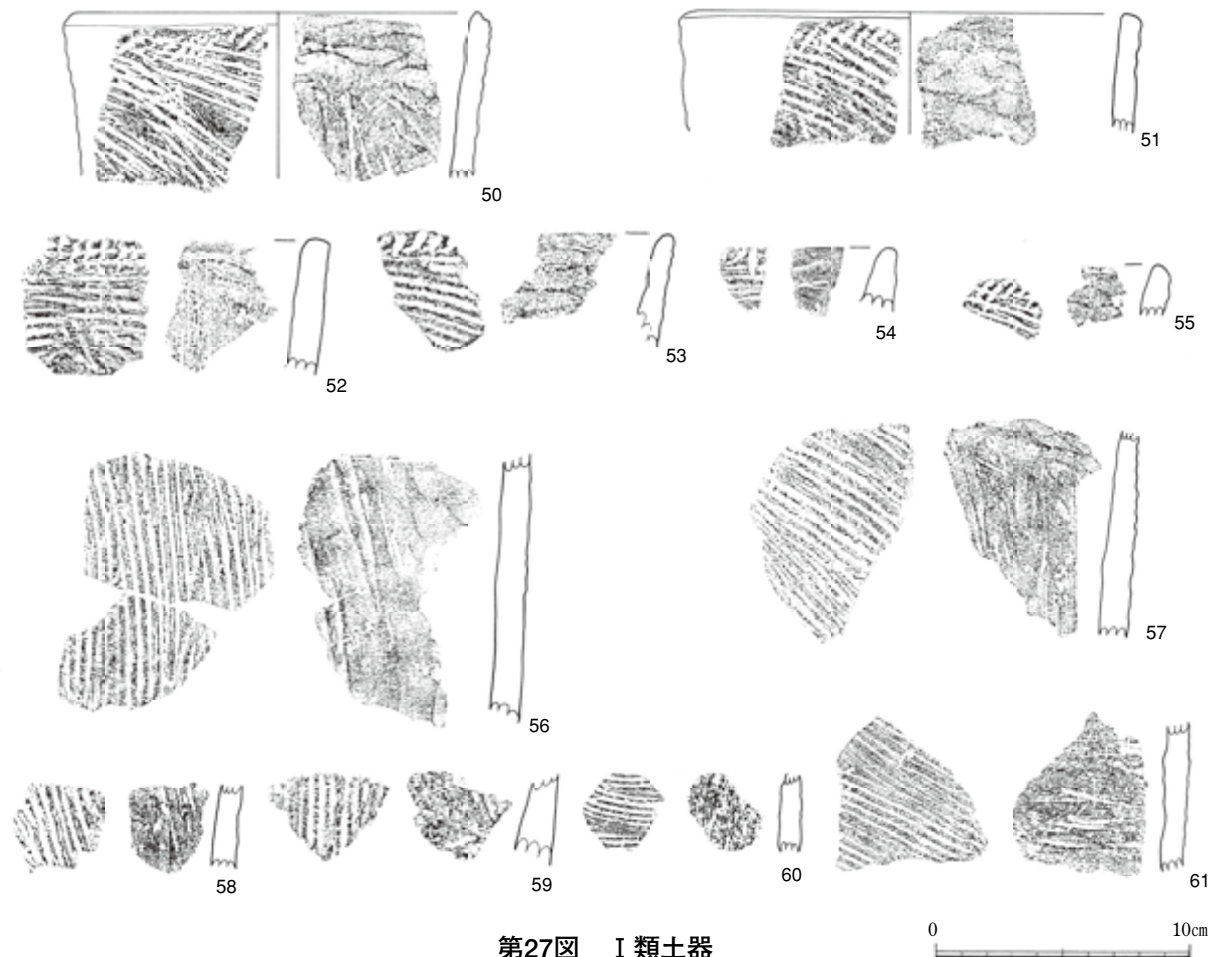
Ⅰ類土器 (第27図)

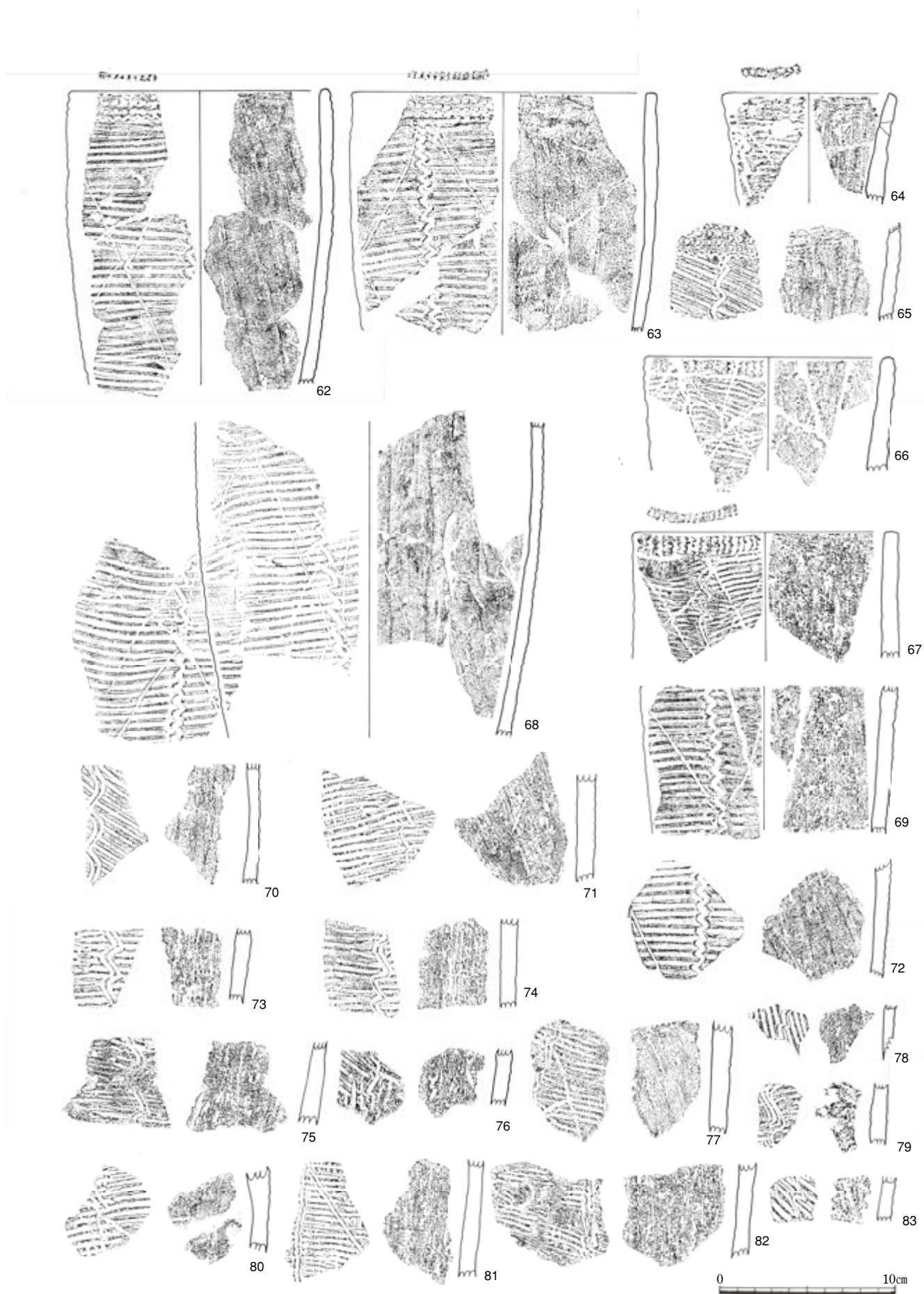
Ⅰ類土器はほぼ直行する円筒土器である。口縁端部にへう状施文具もしくは貝殻腹縁による刻目を施し、胴部は荒い斜行する貝殻条痕が施されるものである。50は口縁部径16.8cmを測る。わずかに外開き気味の器形で、口縁端部に貝殻腹縁による刻目を施し、胴部は荒い条痕である。51は口縁部径18.2cmを測る。ほぼ直行する器形で、口縁部端部に刻目を施し、胴部は荒い貝殻条痕である。52～55は口縁部で、端部に刻目を施すものである。56～61は胴部で、荒い貝殻条痕が施されるものである。

Ⅱ類土器 (第28図～第31図)

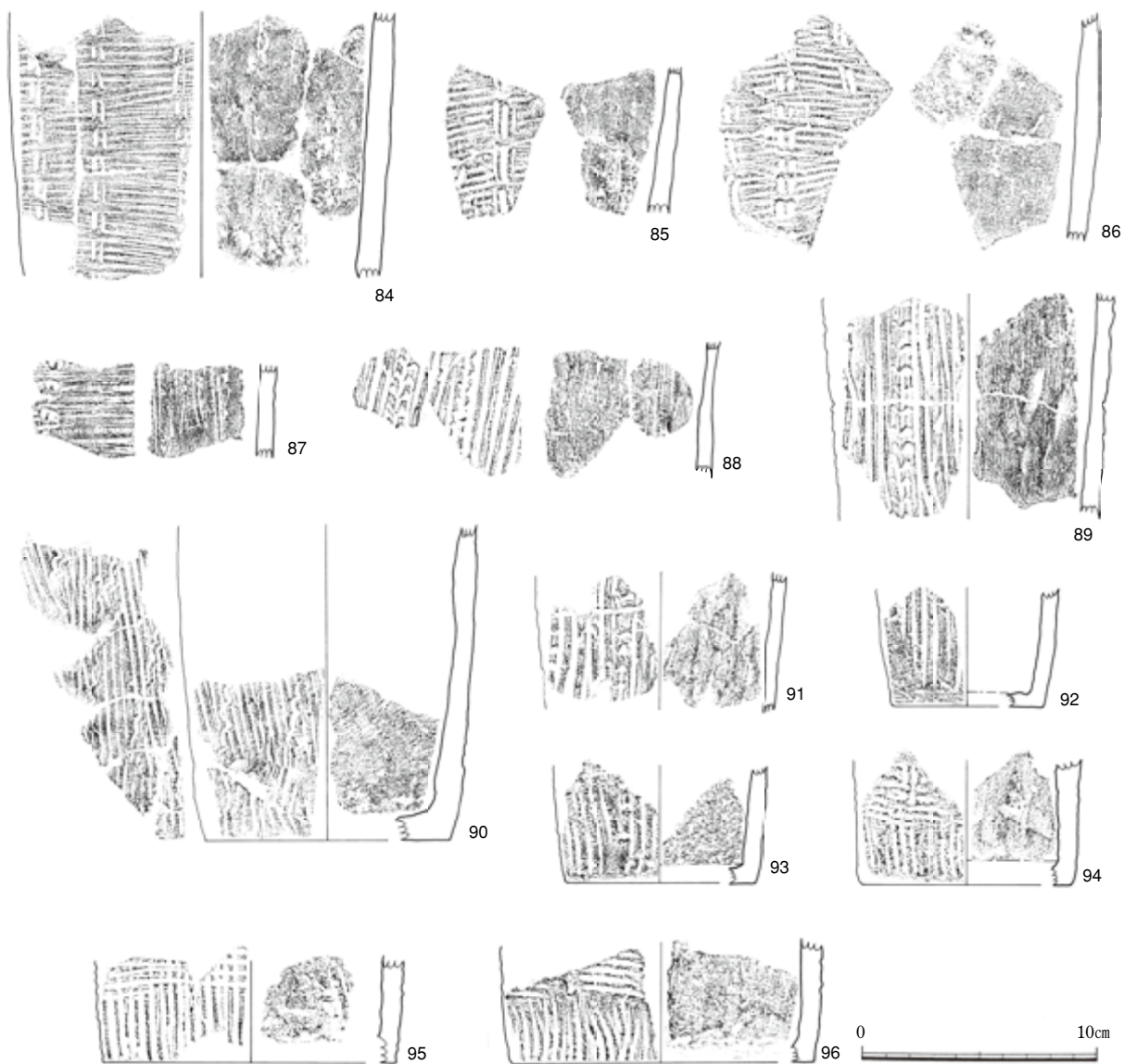
Ⅱ類土器には、円筒土器・角筒土器・レモン形土器の3つの形態がある。文様構成は口縁部には横位若しくは縦位の貝殻刺突文を施し、胴部には地文と

して整然とした横位の貝殻条痕文を施し、その上に沈線文及び流水文・刺突連点文等を施す二重施文が特徴である。62～96は円筒土器である。62と63は胴部から口縁部へわずかに内湾気味に直行するもので、62は口縁部径14.8cm、63は口縁部径17.3cmを測る。64は口縁部が外反するもので、補修孔が認められる。67・68は口縁部が直行するものである。84～91は縦位の刺突連点文が施されるものである。88～94は貝殻腹縁による刺突連点文が施され、地文の貝殻条痕が縦位に施されるものである。90～96は底部。下には縦位の荒い沈線文が施される。97～114は角筒土器。文様構成は円筒土器とほぼ同様である。97は1辺9.5cmを測るもので、角の部分が山形になる。98・99は口縁部で、角の部分が山形になるものである。98には補修孔が見られる。115と116は口縁部上面観がレモンの様な形をしているのでレモン形土器とされているものである。口縁部に縦位の貝殻刺突文を施し、胴部には地文の貝殻条痕文と刺突連点文が施される。





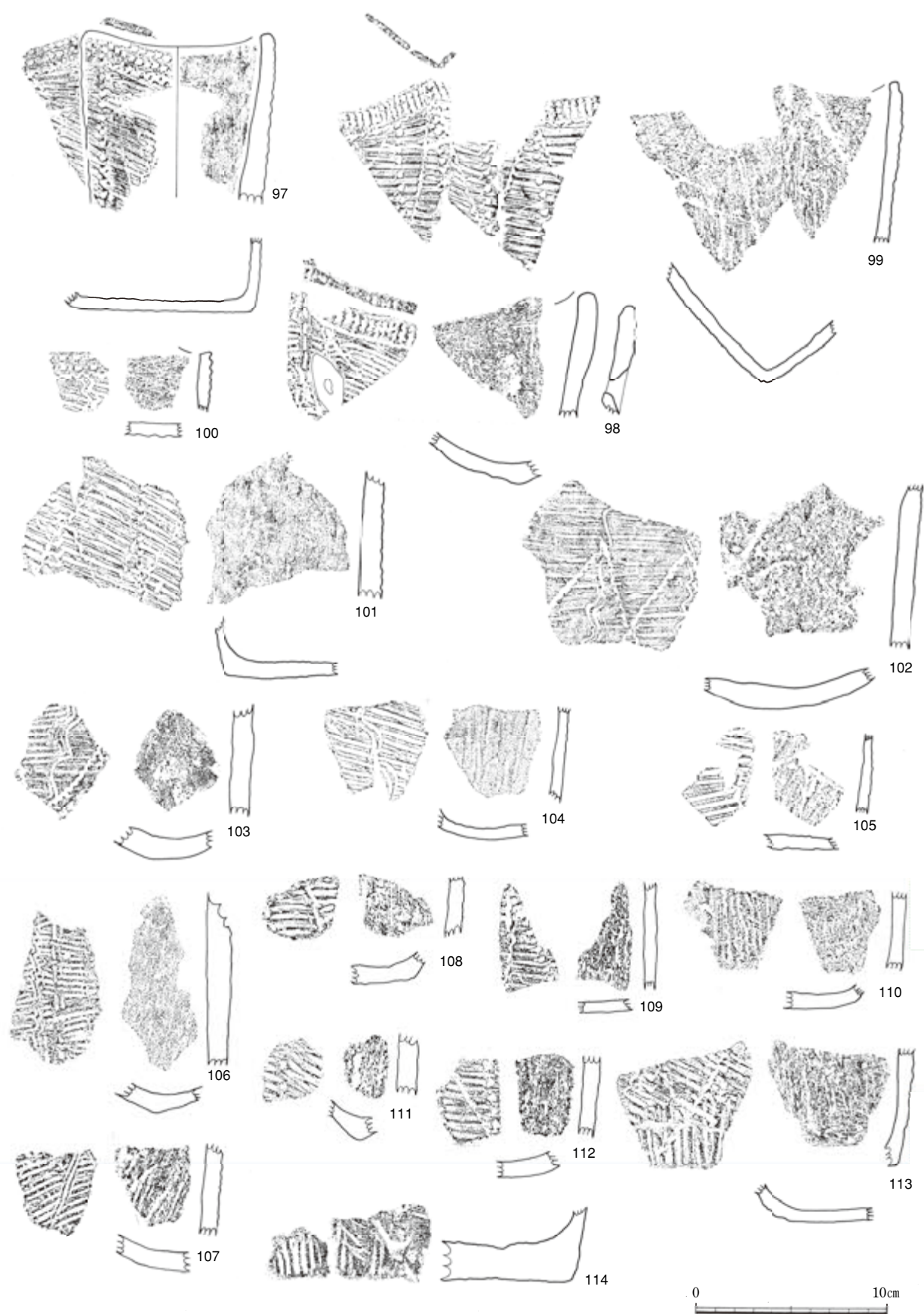
第28図 II類土器 (1)



第29図 II 類土器 (2)

I 類土器観察表

挿図 番号	番号	出土区	層位	部位	色 調		胎 土				焼 成	外 面	内 面	類	備 考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他					
第 27 図	50	H-5	Ⅳ	口縁部	浅黄	暗灰黄	○	○	○		良	貝殻刻目・条痕文	ヘラケズリ・ヘラミガキ	I	
	51	H-7	Ⅳ	口縁部	オリーブ黄	にぶい黄	○	○	○		良	貝殻刻目・条痕文	ヘラミガキ	I	
	52	H-5	Ⅳ	口縁部	明黄褐	明黄褐	○	○			良	貝殻刻目・条痕文	ヘラケズリ	I	
	53	H-7	Ⅳ	口縁部	灰オリーブ	オリーブ黄	○	○			良	ヘラ刻目・条痕文	ヘラミガキ	I	
	54	H-6	Ⅳ	口縁部	黄褐	にぶい黄	○	○			良	ヘラ刻目・貝殻条痕文	ナデ	I	
	55	G-6	Ⅳ	口縁部	黄灰	黄褐	○	○			良	貝殻刻目・条痕文	ヘラミガキ	I	
	56	H-5	Ⅳ	胴部	にぶい黄	明黄褐	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	I	
	57	H-5	Ⅳ	胴部	浅黄	浅黄	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	I	
	58	H-7	Ⅳ	胴部	浅黄	にぶい黄橙	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	I	
	59	—	Ⅳ	胴部	暗オリーブ褐	オリーブ褐	○	○			良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	I	
	60	H-5	Ⅳ	胴部	黒褐	黒褐	○	○			良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	I	
	61	H-6	V	胴部	灰オリーブ	にぶい黄	○	○			良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	I	



第30図 II類土器 (3)



第31図 II類土器（4）

II類土器観察表

挿図 番号	番号	出土区	層位	部位	色調		胎土					焼成	外 面	内 面	類	備 考	
					内	外	石英	長石	角閃石	その他							
第28図	62	H-5・6	Ⅳ・Ⅴ	口縁～胴部	黒褐	黒褐	○	○				良	貝殻刺突文・条痕文・沈線文・流水文	ヘラケズリ	Ⅱ		
	63	H-5	Ⅳ	口縁～胴部	オリーブ褐	黒褐	○	○				良	貝殻刺突文・条痕文・沈線文・流水文	ヘラケズリ	Ⅱ		
	64	H-5	Ⅳ	口縁部	黒	にぶい黄褐	○	○				良	貝殻条痕文・流水文	ヘラケズリ	Ⅱ	補修孔有	
	65	H-5	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文・流水文	ヘラケズリ	Ⅱ		
	66	H-4	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	黒褐	○	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅱ		
	67	H-4	Ⅳ	口縁部	灰黄褐	黒褐	○	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅱ		
	68	H-5,7	Ⅳ	胴部	黒褐	にぶい黄橙	○	○				良	貝殻条痕文・沈線文・流水文	ヘラケズリ	Ⅱ		
	69	H-5	Ⅳ	胴部	黒褐	黒褐	○	○				良	貝殻条痕文・沈線文・流水文	ヘラケズリ	Ⅱ		
	70	H-5	Ⅳ	胴部	暗灰黄	黄褐	○	○				良	貝殻条痕文・流水文	ヘラケズリ	Ⅱ		
	71	—	Ⅳ	胴部	褐	にぶい褐	○	○				良	貝殻条痕文・流水文	ヘラケズリ	Ⅱ		
	72	H-5	Ⅴ	胴部	オリーブ黒	黒褐	○	○				良	貝殻条痕文・沈線文・流水文	ヘラケズリ	Ⅱ		
	73	H-6	Ⅳ	胴部	灰黄褐	黒褐	○	○				良	貝殻条痕文・流水文	ヘラケズリ	Ⅱ		
	74	H-6	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	オリーブ褐	○	○				良	貝殻条痕文・流水文	ヘラケズリ	Ⅱ		
	75	H-6	Ⅳ	胴部	オリーブ黒	にぶい褐	○	○				良	貝殻条痕文・流水文	ヘラケズリ	Ⅱ		
	76	H-6	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○				良	貝殻条痕文・流水文	ヘラケズリ	Ⅱ		
	77	H-4	Ⅳ	胴部	灰黄褐	にぶい黄褐	○	○				良	貝殻刺突文・条痕文・流水文	ヘラケズリ	Ⅱ		
	78	I-4	Ⅳ	胴部	暗オリーブ褐	黄灰	○	○				良	貝殻条痕文・流水文	ヘラケズリ	Ⅱ		
	79	H-7	Ⅳ	胴部	暗灰黄	浅黄	○	○				良	貝殻条痕文・流水文	ヘラケズリ	Ⅱ		
	80	H-5	Ⅳ	胴部	褐	褐	○	○				良	貝殻条痕文・流水文	ヘラケズリ	Ⅱ		
	81	H-7	Ⅳ	胴部	オリーブ褐	にぶい黄橙	○	○	○			良	貝殻条痕文・沈線文・流水文	ヘラケズリ	Ⅱ		
82	H-5	Ⅳ	胴部	黒褐	褐	○	○				良	貝殻刺突文・条痕文・流水文	ヘラケズリ	Ⅱ			
83	H-5	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	褐	○	○				良	貝殻条痕文・流水文	ヘラケズリ	Ⅱ			
第29図	84	H-6	Ⅳ	胴部	暗オリーブ褐	暗灰黄	○	○				良	連点文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅱ		
	85	H-7	Ⅳ	胴部	黄褐	黄褐	○	○	○			良	連点文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅱ		
	86	H-6	Ⅳ	胴部	灰黄褐	にぶい黄褐	○	○				良	連点文・貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅱ		
	87	H-6	Ⅴ	胴部	にぶい褐	灰褐	○	○				良	連点文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅱ		
	88	H-5	Ⅳ	胴部	黒褐	黄灰	○	○				良	連点文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅱ		
	89	H-5	Ⅳ	胴部	黒褐	浅黄	○	○				良	連点文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅱ		
	90	I-4	Ⅳ・Ⅴ	底部	褐	にぶい褐	○	○	○			良	流水文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅱ		
	91	H-5	Ⅳ	胴部	黒褐	にぶい黄褐	○	○				良	連点文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅱ		
	92	H-5	Ⅳ	底部	にぶい黄褐	黄褐	○	○				良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅱ		
	93	H-5	Ⅳ	底部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○				良	連点文・貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅱ		
	94	I-5	Ⅳ	底部	にぶい黄	にぶい黄褐	○	○				良	貝殻条痕文・沈線文	ヘラケズリ	Ⅱ		
	95	H-5・6	Ⅳ・Ⅴ	底部	黒褐	褐	○	○				良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅱ		
	96	H-5	Ⅳ	底部	褐	にぶい黄褐	○	○				良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅱ		
	第30図	97	H-5・6	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	黄灰	○	○				良	貝殻刺突文・条痕文・流水文	ヘラケズリ	Ⅱ	角筒
		98	H-4	Ⅳ	口縁部	暗褐	暗褐	○	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅱ	角筒・補修孔有
99		H-6	Ⅳ	口縁部	橙	にぶい黄褐	○	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文・連点文	ヘラケズリ	Ⅱ	角筒	
100		H-4	Ⅳ	口縁部	褐灰	にぶい黄橙	○	○				良	貝殻刺突文・条痕文・流水文	ヘラケズリ	Ⅱ	角筒	
101		H-5	Ⅳ	胴部	黄褐	にぶい黄橙	○	○				良	貝殻刺突文・条痕文・連点文・流水文	ヘラケズリ	Ⅱ	角筒	
102		H-5	Ⅳ	胴部	褐	黒褐	○	○				良	貝殻刺突文・条痕文・流水文	ヘラケズリ	Ⅱ	角筒	
103		H-7	Ⅳ	胴部	暗灰褐	黄褐	○	○				良	貝殻刺突文・条痕文・流水文	ヘラケズリ	Ⅱ	角筒	
104		H-5	Ⅳ	胴部	オリーブ褐	黄褐	○	○				良	貝殻条痕文・流水文	ヘラケズリ	Ⅱ	角筒	
105		H-5	Ⅳ	胴部	褐	にぶい褐	○	○				良	貝殻条痕文・流水文	ヘラケズリ	Ⅱ	角筒	
106		H-5	Ⅳ	胴部	にぶい黄	にぶい黄	○	○	○			良	貝殻条痕文・連点文・流水文	ヘラケズリ	Ⅱ	角筒	
107		H-5	Ⅳ	胴部	明黄褐	橙	○	○				良	貝殻条痕文・沈線文	ヘラケズリ	Ⅱ	角筒	
108		G-7	Ⅳ	胴部	黒褐	褐	○	○				良	貝殻条痕文・連点文	ヘラケズリ	Ⅱ	角筒	
109		H-6	Ⅳ	胴部	にぶい黄	浅黄	○	○				良	貝殻刺突文・条痕文・連点文	ヘラケズリ	Ⅱ	角筒	
110		I-4	Ⅳ	胴部	にぶい褐	暗赤褐	○	○				良	貝殻条痕文・流水文	ヘラケズリ	Ⅱ	角筒	
111		—	Ⅳ	胴部	暗褐	褐	○	○	○			良	貝殻条痕文・連点文	ヘラケズリ	Ⅱ	角筒	
112		H-6	Ⅳ	胴部	明黄褐	にぶい褐	○	○				良	貝殻刺突文・条痕文・連点文	ヘラケズリ	Ⅱ	角筒	
113		H-6	Ⅴ	底部	黒褐	にぶい黄橙	○	○				良	貝殻刺突文・条痕文・沈線文	ヘラケズリ	Ⅱ	角筒	
114		H-5	Ⅳ	底部	にぶい赤褐	にぶい褐	○	○				良	貝殻条痕文・沈線文	ヘラケズリ	Ⅱ	角筒	
第31図	115	H-4	Ⅳ	口縁部	褐	黒褐	○	○				良	貝殻刺突文・条痕文・連点文	ヘラケズリ	Ⅱ	レモン形	
	116	H-5・6	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	黒褐	○	○				良	貝殻刺突文・条痕文・連点文	ヘラケズリ	Ⅱ	レモン形	

Ⅲ 類土器（第32図～第35図）

Ⅲ 類土器には円筒土器・クサビ形貼付文の円筒土器・角筒土器の3つの形態がある。円筒土器は、口縁部に横位の貝殻刺突文を施し、胴部には貝殻刺突文と斜位の貝殻条痕文を押引状に施すものである。117～125は口縁部である。口唇部が平坦なものには刻目が施されているが、120～122・124は口唇部がやや丸みを帯び、刻目が施されていない。

117は口縁部径12.4cmを測るもので、わずかに内湾する形態である。口縁部に3条の刺突文を廻らし、胴部には縦位の貝殻刺突文と斜位の条痕文を施す。平坦な口唇部にはヘラによる刻目が見られる。119は口縁部径12cmを測るものでほぼ直行する形態である。文様構成は117と同様である。118は口縁部径22.5cmを測るものである。口縁部に7条の貝殻刺突文を廻らし、胴部の貝殻条痕文は横位に近いものである。

126～180は胴部片である。いずれも貝殻刺突文と押引状の貝殻条痕文が施されるものである。181～183は底部である。181は底部径11.2cmを測るもので、ヘラによる沈線文を縦位に施す。182は底部径7.5cm

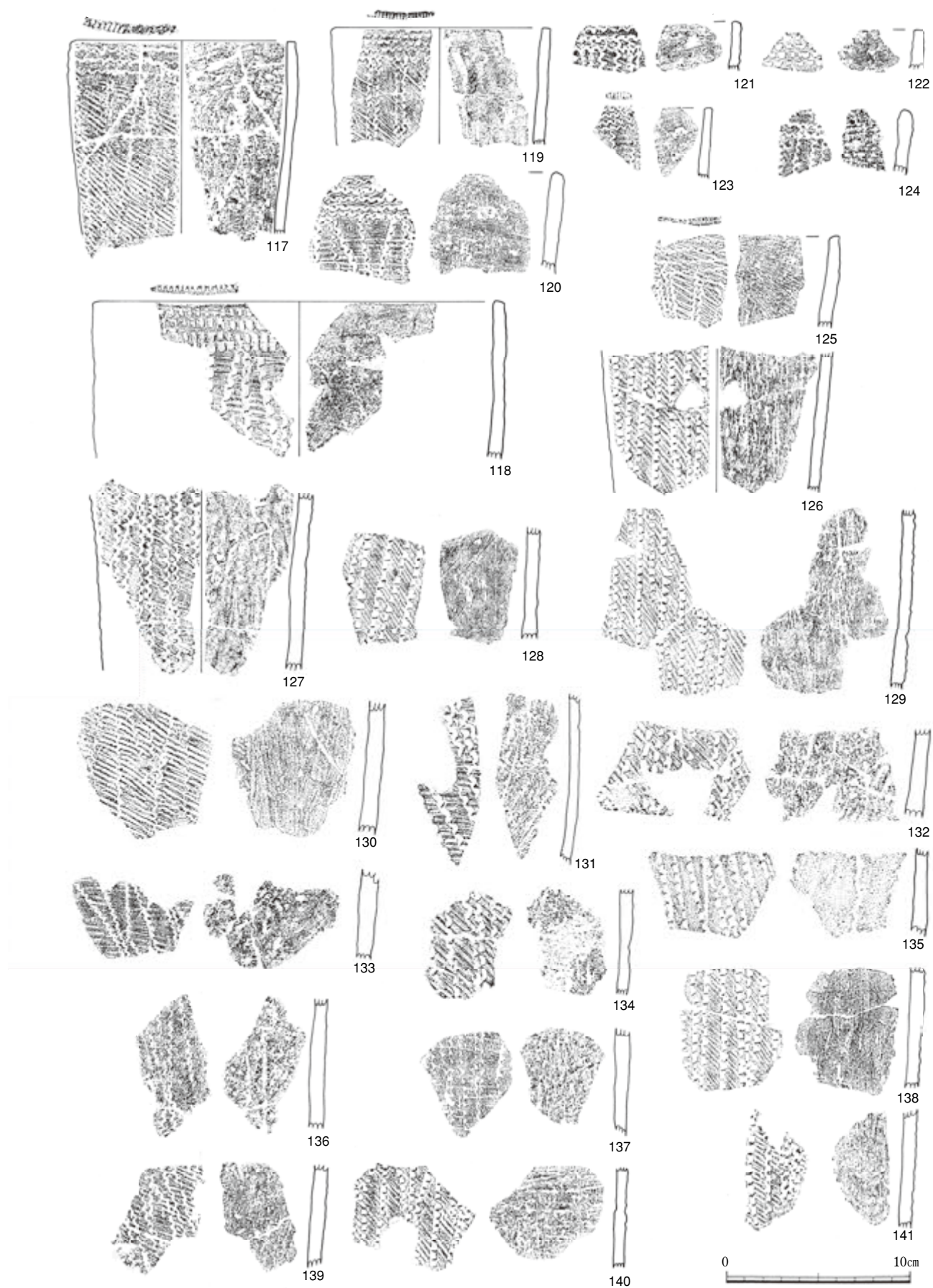
を測るもので、細い沈線文が縦位に施されるが不規則である。183はヘラによる沈線文を縦位に施すものである。

184～205はクサビ形貼付文を有する円筒土器である。口縁部に横位の貝殻刺突文、胴部には縦位の貝殻刺突文と斜位の押引状貝殻条痕文を施し、平坦な口唇部に刻目が見られる所は円筒土器と同様である。クサビ形貼付文は胴部上位に2段施されているものがほとんどである。184～190は口縁部。184は口縁部径17cmを測るもので、わずかに外反する。185は口縁部径13.5cmを測るものでほぼ直行する。191～205は胴部である。198, 203, 205は胴部の貝殻条痕文がナデ消されている。192, 199, 200は胴部の貝殻条痕文が横位である。

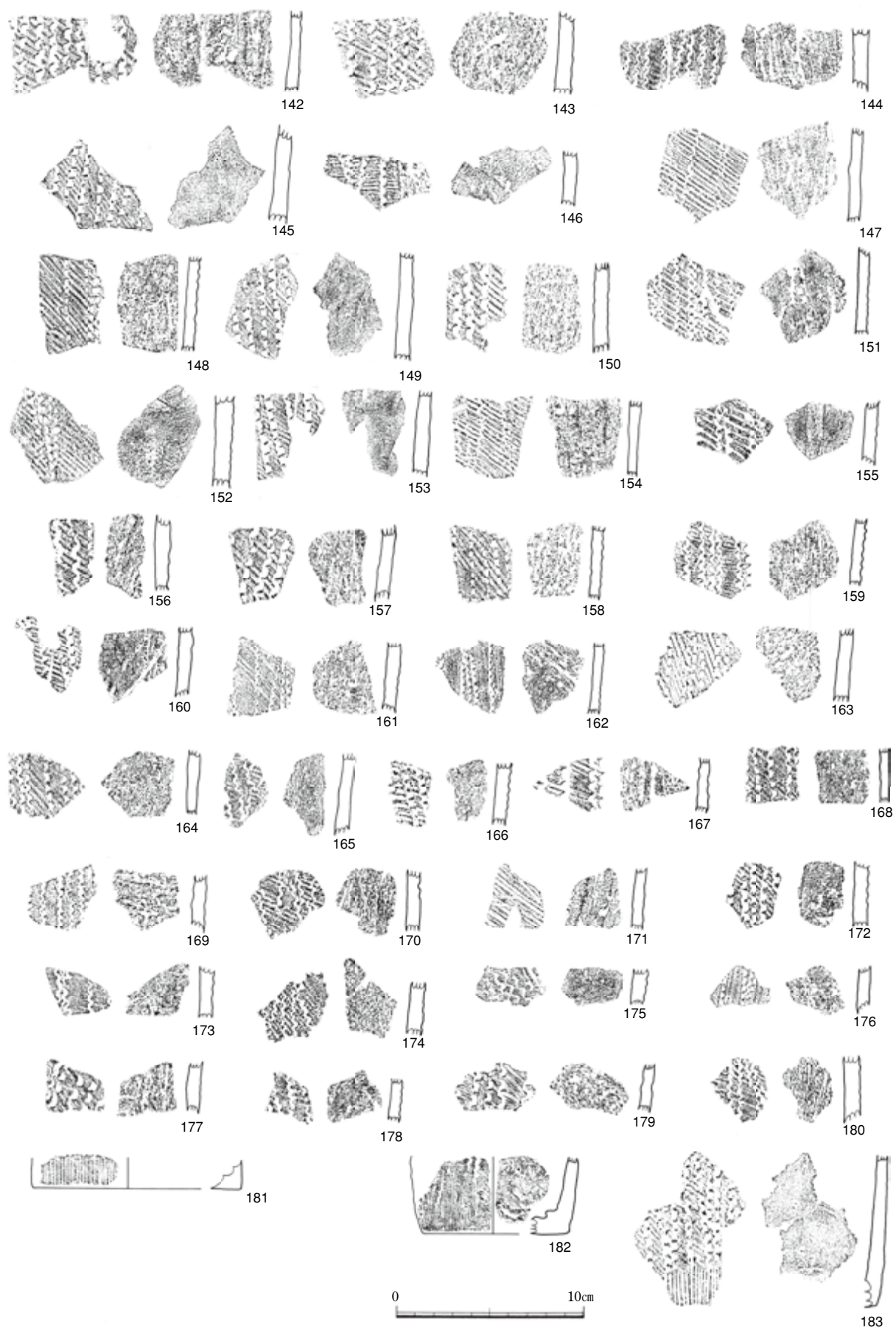
206～222は角筒土器である。文様構成は円筒土器・クサビ形貼付文を有する円筒土器と同様である。206は口縁部である。口縁部には横位の貝殻押引文を施し、胴部は貝殻刺突文と押引状の条痕文を施すものである。207～222は胴部である。

Ⅲ 類土器観察表

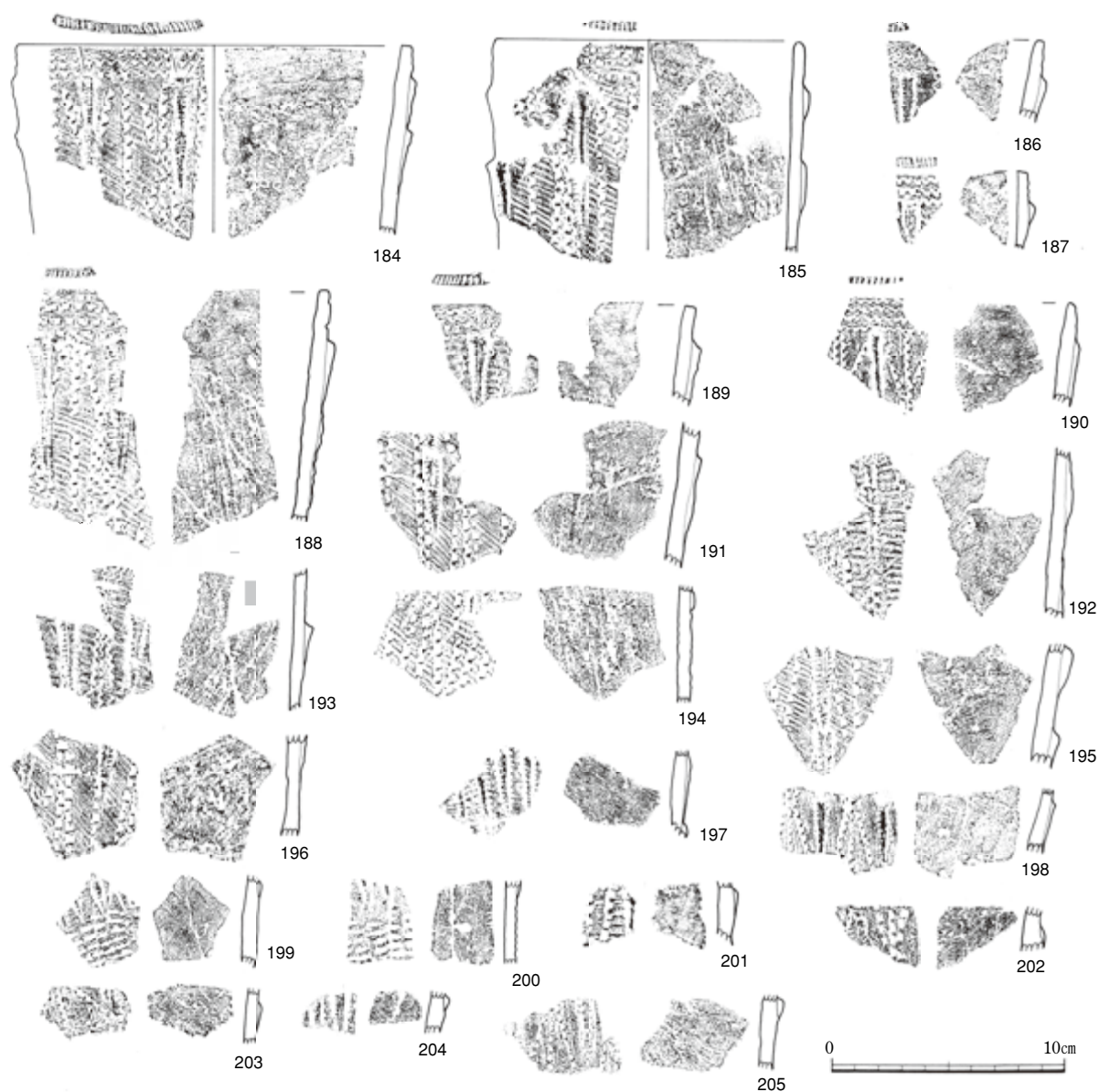
挿図 番号	番号	出土区	層位	部位	色 調		胎 土					焼 成	外 面	内 面	類	備 考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他						
第 32 図	117	H-4・5	Ⅳ・Ⅴ	口縁～胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○				良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	118	H-5	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	119	—	—	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ・ナデ	Ⅲ	
	120	H-5	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	橙	○	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	121	H-7	Ⅳ	口縁部	黄褐	黒褐	○	○				良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	122	H-5	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○			良	貝殻刺突文 ナデ	Ⅲ		
	123	H-6	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	暗灰黄	○	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	124	H-5	Ⅳ	口縁部	浅黄	黄褐	○	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	125	H-6	Ⅳ	口縁部	褐	明褐	○	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	126	H-5	Ⅳ	胴部	褐	にぶい褐	○	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	127	H-6	Ⅳ	胴部	浅黄	浅黄	○	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	128	H-5	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	褐	○	○				良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅲ	
	129	I-5	Ⅳ	胴部	にぶい褐	褐	○	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	130	G-13	Ⅳ	胴部	黄褐	にぶい黄橙	○	○				良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	131	H-5	Ⅳ	胴部	にぶい褐	にぶい黄褐	○	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	132	H-5	Ⅳ	胴部	にぶい黄	にぶい黄橙	○	○				良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	133	H-5	Ⅳ	胴部	褐	にぶい褐	○	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	134	H-5	Ⅳ	胴部	にぶい黄	にぶい黄橙	○	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	135	H-5	Ⅳ	胴部	明赤褐	明赤褐	○	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	136	I-5	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	にぶい褐	○	○				良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	137	—	—	胴部	にぶい黄橙	にぶい褐	○	○				良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	138	H-5	Ⅳ	胴部	にぶい橙	橙	○	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	139	H-I-5	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	にぶい橙	○	○				良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	140	H-5	Ⅳ	胴部	にぶい赤褐	にぶい黄褐	○	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	141	H-5	Ⅳ	胴部	黒褐	にぶい黄橙	○	○				良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	



第32図 Ⅲ類土器（1）



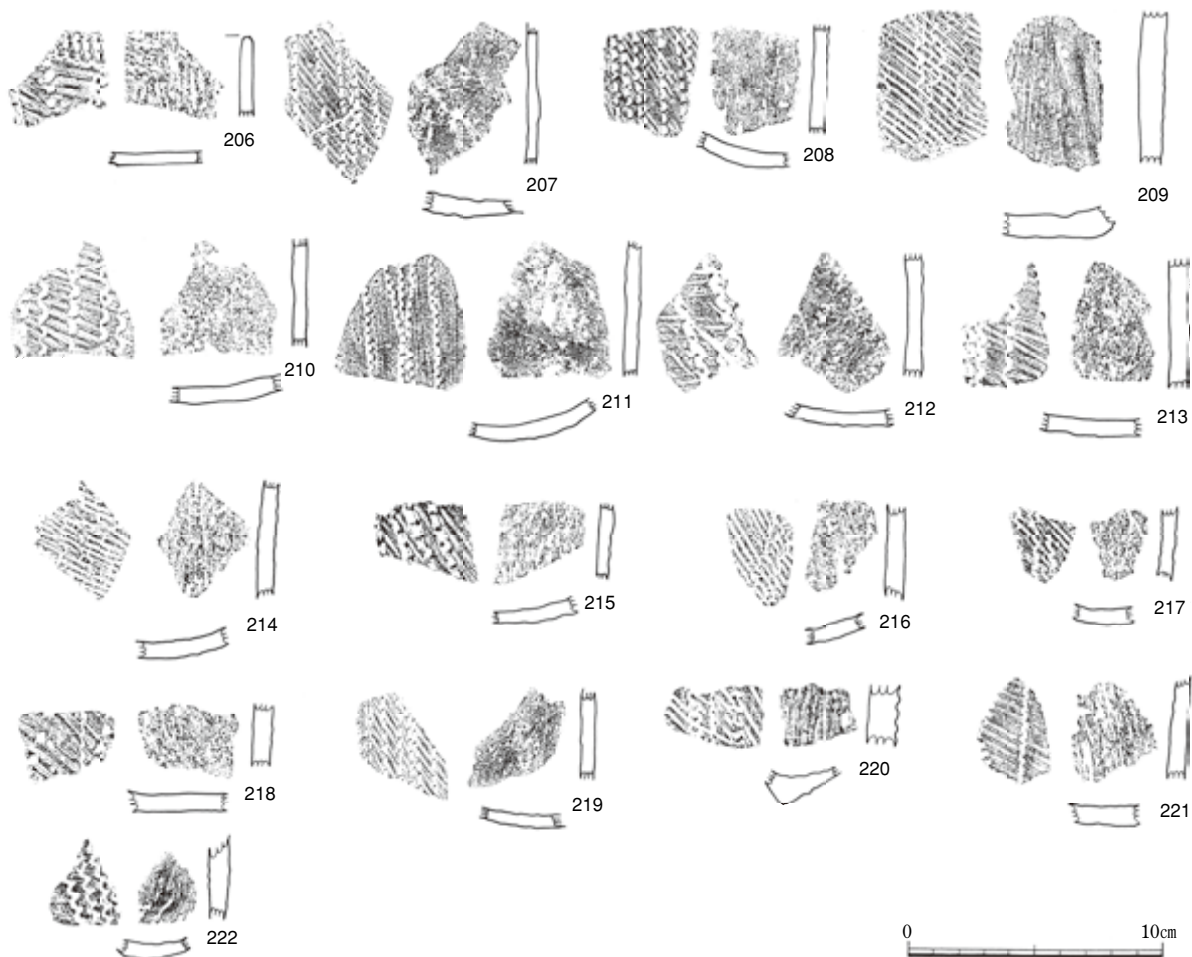
第33図 Ⅲ類土器（2）



第34図 III類土器（3）

III類土器観察表

挿図 番号	番号	出土区	層位	部位	色 調		胎 土				焼 成	外 面	内 面	類	備 考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他					
第 33 図	142	H-5	IV	胴部	にぶい黄褐	暗褐	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	143	H-6	IV	胴部	浅黄	にぶい黄橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	144	H-5	IV	胴部	黄褐	にぶい黄橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	145	H-5	IV	胴部	にぶい褐	にぶい褐	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ナデ	Ⅲ	
	146	H-6	VI	胴部	にぶい黄	にぶい赤褐	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ナデ	Ⅲ	
	147	I-4	V	胴部	黒褐	浅黄	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	148	I-4	IV	胴部	褐	にぶい褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	149	H-5	IV	胴部	にぶい褐	にぶい橙	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	150	H-5	IV	胴部	黄褐	暗灰黄	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	151	H-5	IV	胴部	にぶい黄褐	明黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	152	H-7	IV	胴部	にぶい黄褐	にぶい橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・条痕文	ナデ	Ⅲ	
	153	H-5	V	胴部	灰黄褐	にぶい褐	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ナデ	Ⅲ	
	154	H-5	IV	胴部	オリブ褐	にぶい黄	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	155	H-5	IV	胴部	にぶい黄橙	暗灰黄	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅲ	
	156	H-5	IV	胴部	にぶい黄	にぶい黄橙	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	157	H-5	IV	胴部	灰黄	にぶい褐	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	158	I-4	IV	胴部	褐	にぶい褐	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	159	H-4	IV	胴部	オリブ褐	にぶい褐	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	160	H-5	V	胴部	黄褐	灰黄褐	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ・ナデ	Ⅲ	
	161	I-4	IV	胴部	黄褐	にぶい褐	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	



第35図 III類土器（4）

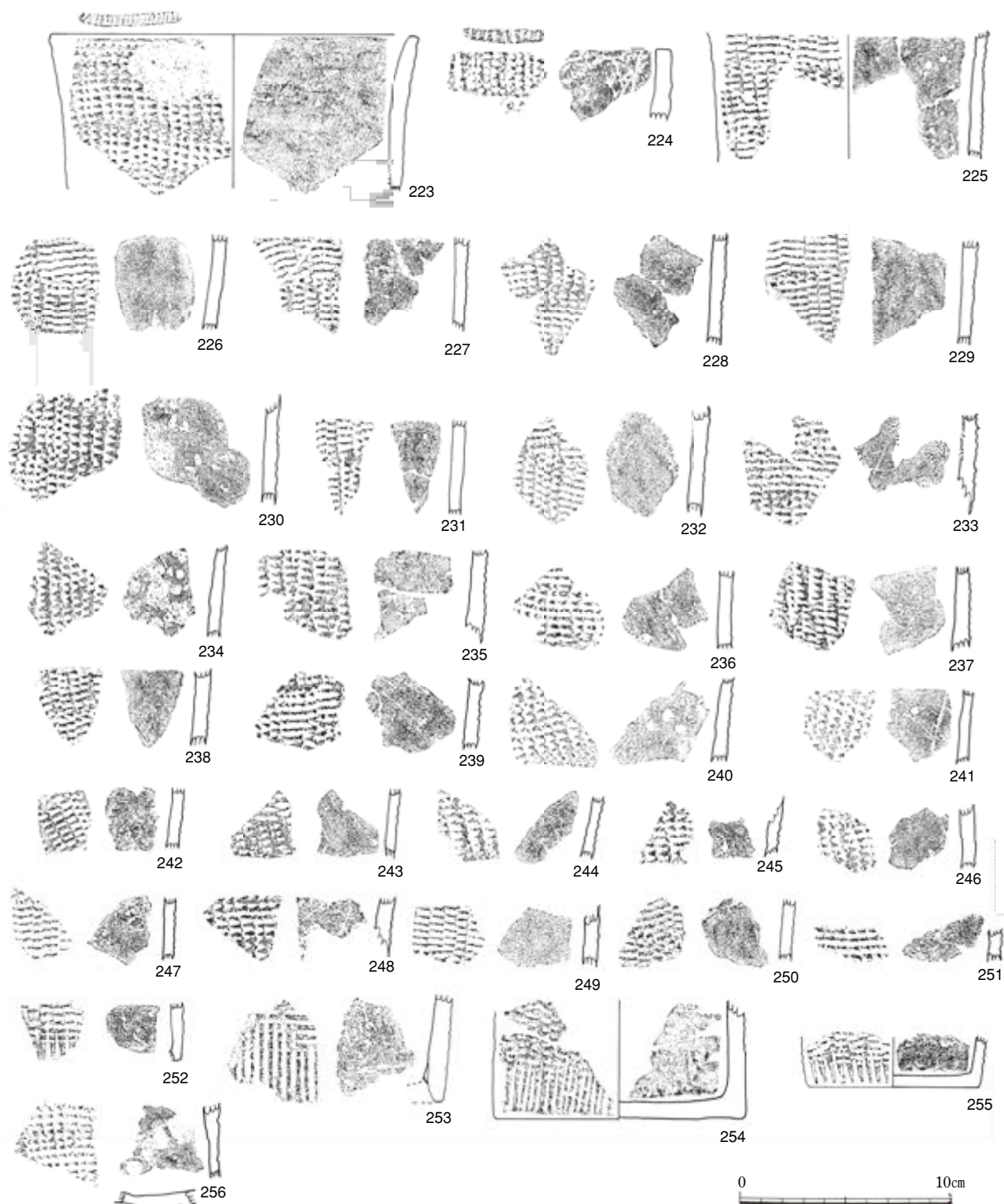
III類土器観察表

挿図 番号	番号	出土区	層位	部位	色 調		胎 土				焼 成	外 面	内 面	類	備 考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他					
第 33 図	162	H-5	IV	胴部	黒褐	黄褐	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	163	H-4	IV	胴部	褐	にぶい褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	164	I-5	IV	胴部	明黄褐	にぶい黄橙	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	165	H-5	IV	胴部	黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	166	H-4	IV	胴部	にぶい赤褐	にぶい褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・条痕文	ナデ	Ⅲ	
	167	H-5	IV	胴部	にぶい橙	にぶい黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	168	I-5	IV	胴部	にぶい橙	にぶい褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・条痕文	ナデ	Ⅲ	
	169	H-5	IV	胴部	浅黄	暗灰黄	○	○			良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	170	H-5	V	胴部	暗灰黄	にぶい黄橙	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	171	H-5	IV	胴部	にぶい黄	にぶい黄	○	○	○		良	貝殻条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	補修孔有
	172	H-4	IV	胴部	暗灰黄	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	173	I-4	IV	胴部	黄灰	にぶい橙	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ナデ	Ⅲ	
	174	I-5	IV	胴部	黄褐	浅黄	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅲ	
	175	H-7	IV	胴部	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○	○		良	貝殻刺突文	ナデ	Ⅲ	
	176	H-5	IV	胴部	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○			良	貝殻刺突文	ナデ	Ⅲ	
	177	I-5	IV	胴部	浅黄	にぶい黄	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	178	H-6	IV	胴部	褐	にぶい褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・条痕文	ナデ	Ⅲ	
	179	H-5	IV	胴部	黄褐	黄褐	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	180	G-13	IV	胴部	黒褐	にぶい褐	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ後ナデ	Ⅲ	
	181	H-5	IV	底部	褐灰	橙	○	○			良	沈線文		Ⅲ	
	182	H-5	IV	底部	黒褐	暗褐	○	○	○		良	貝殻刺突文	ヘラケズリ	Ⅲ	
	183	H-4	IV	底部	にぶい黄褐	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・条痕文・沈線文	ヘラケズリ	Ⅲ	

Ⅳ類土器（第36図）

Ⅳ類土器には円筒土器，角筒土器の形態がある。胴部に横位の押引文を施すもので，口唇部には刻目が見られるものである。223・224は口縁部である。223は口縁部径17.7cmを測るもので，やや外反する。口縁部に横位の貝殻刺突文を2段に施し，胴部はきめの細かい横位の貝殻押引文を施す。口唇部にはヘラによる刻目が見られる。224は貝殻刺突文は無く，

横位の押引文だけである。口唇部には刻目が見られる。225～252は胴部である。いずれも，きめの細かい横位の押引文が施されるものである。253～255は底部である。いずれもヘラによる縦位の沈線文を施すものである。254は底部径11.7cm，255は底部径8cmを測る。256は角筒土器である。円筒土器と同様にきめの細かい横位の貝殻押引文を施すものである。



第36図 Ⅳ類土器

Ⅲ・Ⅳ類土器観察表

挿図 番号	番号	出土区	層位	部位	色調		胎土				焼成	外 面	内 面	類 備 考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他				
第 34 図	184	I-4	V	口縁部	にぶい黄褐	にぶい橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・条痕文・クサビ	ヘラケズリ・ヘラミガキ	Ⅲ
	185	H-7	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・条痕文・クサビ	ヘラケズリ	Ⅲ SS1107
	186	H-6	Ⅳ	口縁部	にぶい褐	にぶい橙	○	○			良	貝殻刺突文・クサビ	ヘラケズリ	Ⅲ
	187	G-6	Ⅲ	口縁部	赤褐	にぶい赤褐	○	○			良	貝殻刺突文・クサビ	ヘラケズリ	Ⅲ
	188	H-5	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	黒褐	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文・クサビ	ヘラケズリ・ナデ	Ⅲ
	189	H-6	Ⅳ	口縁部	黒褐	黒褐	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文・クサビ	ナデ	Ⅲ 補修孔有
	190	H-5	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文・クサビ	ナデ	Ⅲ
	191	H-5	Ⅳ	胴部	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・条痕文・クサビ	ヘラケズリ	Ⅲ
	192	H-4	Ⅳ	胴部	褐	にぶい褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・条痕文・クサビ	ヘラケズリ後ナデ	Ⅲ
	193	H-6	Ⅳ	胴部	褐	にぶい褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・条痕文・クサビ	ヘラケズリ	Ⅲ
	194	H-5	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・条痕文・クサビ	ヘラケズリ	Ⅲ
	195	H-5	Ⅳ	胴部	褐	にぶい黄橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・条痕文・クサビ	ヘラケズリ	Ⅲ
	196	H-5	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文・クサビ	ヘラケズリ	Ⅲ
	197	H-5	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・クサビ	ナデ	Ⅲ
	198	H-5	Ⅳ	胴部	褐	褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・クサビ	ヘラケズリ	Ⅲ
	199	H-5	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○			良	貝殻刺突文・押引文・クサビ	ナデ	Ⅲ
	200	H-5	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	暗褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・押引文・クサビ	ナデ	Ⅲ
	201	H-4	Ⅳ	胴部	にぶい褐	褐	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文・クサビ	ナデ	Ⅲ
	202	H-5	Ⅳ	胴部	橙	明黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・クサビ	ナデ	Ⅲ
	203	H-5	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	黒褐	○	○			良	貝殻刺突文・クサビ	ヘラケズリ	Ⅲ
	204	—	—	胴部	にぶい黄橙	褐	○	○			良	貝殻刺突文・クサビ	ナデ	Ⅲ
	205	H-4	Ⅳ	胴部	黒褐	黒褐	○	○			良	貝殻刺突文・クサビ	ナデ	Ⅲ
第 35 図	206	H-6	Ⅳ	口縁部	にぶい橙	黄褐	○	○			良	貝殻刻目・刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ 角筒
	207	I-4	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	明赤褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ 角筒
	208	H-5	Ⅳ	胴部	黒褐	褐	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ 角筒
	209	H-13	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ 角筒
	210	H-6	Ⅳ	胴部	にぶい黄	にぶい黄橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ 角筒
	211	I-4	Ⅳ	胴部	黒褐	にぶい黄褐	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ 角筒
	212	H-5	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	灰黄褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・条痕文	ナデ	Ⅲ 角筒
	213	H-5	Ⅳ	胴部	にぶい褐	暗灰黄	○	○	○		良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ 角筒
	214	H-5	Ⅳ	胴部	黄灰	浅黄	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ 角筒
	215	I-5	Ⅳ	胴部	暗黄褐	にぶい黄橙	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ 角筒
	216	H-5	Ⅳ	胴部	浅黄	にぶい黄橙	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ 角筒
	217	H-5	Ⅳ	胴部	暗灰黄	にぶい橙	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ナデ	Ⅲ 角筒
	218	H-6	Ⅳ	胴部	にぶい橙	橙	○	○	○		良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ 角筒
	219	H-5	V	胴部	黒褐	にぶい赤褐	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ 角筒
	220	I-4	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	にぶい赤褐	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ 角筒
	221	H-5	Ⅳ	胴部	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○		良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ 角筒
	222	H-6	Ⅳ	胴部	浅黄	浅黄	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ヘラケズリ	Ⅲ 角筒
第 36 図	223	H-5	Ⅳ	口縁部	褐	褐	○	○	○		良	貝殻押引文	ヘラミガキ	Ⅳ
	224	H-7	Ⅳ	口縁部	明黄褐	明黄褐	○	○			良	貝殻押引文	ナデ	Ⅳ
	225	H-6・7	Ⅳ	胴部	褐	褐	○	○	○		良	貝殻押引文	ナデ	Ⅳ
	226	H-7	Ⅳ	胴部	暗灰黄	オリブ褐	○	○			良	貝殻押引文	ナデ	Ⅳ
	227	H-7	Ⅳ	胴部	明黄褐	黄褐	○	○	○		良	貝殻押引文	ナデ	Ⅳ
	228	H-5	Ⅳ	胴部	灰褐	にぶい橙	○	○	○		良	貝殻押引文	ナデ	Ⅳ
	229	H-7	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	褐	○	○	○		良	貝殻押引文	ナデ	Ⅳ
	230	H-5	Ⅳ	胴部	にぶい褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	貝殻押引文	ナデ	Ⅳ
	231	H-7	Ⅳ	胴部	にぶい黄	浅黄	○	○			良	貝殻押引文	ナデ	Ⅳ
	232	H-7	Ⅳ	胴部	にぶい褐	にぶい褐	○	○			良	貝殻押引文	ナデ	Ⅳ
	233	H-5	Ⅳ	胴部	灰黄褐	にぶい褐	○	○			良	貝殻押引文	ナデ	Ⅳ
	234	H-5	Ⅳ	胴部	にぶい黄	にぶい橙	○	○			良	貝殻押引文	ナデ	Ⅳ
	235	H-5	Ⅳ	胴部	褐灰	にぶい黄褐	○	○			良	貝殻押引文	ナデ	Ⅳ
	236	H-5	Ⅳ	胴部	灰黄褐	にぶい黄橙	○	○			良	貝殻押引文	ナデ	Ⅳ
	237	H-5	Ⅳ	胴部	黒褐	にぶい褐	○	○			良	貝殻押引文	ナデ	Ⅳ
	238	H-7	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○	○		良	貝殻押引文	ナデ	Ⅳ
	239	H-5	V	胴部	褐灰	黒褐	○	○			良	貝殻押引文	ナデ	Ⅳ
	240	H-5	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	褐	○	○			良	貝殻押引文	ナデ	Ⅳ
	241	H-5	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	明黄褐	○	○	○		良	貝殻押引文	ナデ	Ⅳ
	242	H-7	Ⅳ	胴部	黒褐	灰黄褐	○	○			良	貝殻押引文	ナデ	Ⅳ
	243	H-5	Ⅳ	胴部	明黄褐	にぶい褐	○	○			良	貝殻押引文	ナデ	Ⅳ
	244	H-5	V	胴部	にぶい黄褐	黒褐	○	○			良	貝殻押引文	ナデ	Ⅳ
	245	H-5	Ⅳ	胴部	黒褐	暗褐	○	○			良	貝殻押引文	ナデ	Ⅳ
	246	H-5	Ⅳ	胴部	褐灰	灰黄褐	○	○			良	貝殻押引文	ナデ	Ⅳ
	247	H-7	Ⅳ	胴部	褐灰	にぶい黄橙	○	○			良	貝殻押引文	ナデ	Ⅳ
	248	H-5	Ⅳ	胴部	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○	○		良	貝殻押引文	ナデ	Ⅳ
	249	G-7	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	にぶい橙	○	○	○		良	貝殻押引文	ナデ	Ⅳ
	250	H-7	Ⅳ	胴部	灰黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	貝殻押引文	ナデ	Ⅳ
	251	H-5	Ⅳ	胴部	灰黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	貝殻押引文	ナデ	Ⅳ
	252	H-7	Ⅲ	胴部	黒褐	にぶい黄褐	○	○			良	貝殻押引文・沈線文	ナデ	Ⅳ
	253	I-4	Ⅳ	底部	オリブ黒	にぶい褐	○	○			良	貝殻押引文・沈線文	ナデ	Ⅳ
	254	H-4・5	Ⅳ	底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			良	貝殻押引文・沈線文	ヘラケズリ	Ⅳ
	255	H-7	Ⅳ	底部	にぶい褐	オリブ褐	○	○	○		良	貝殻押引文・沈線文	ナデ	Ⅳ
	256	H-5	Ⅳ	胴部	にぶい褐	にぶい黄褐	○	○	○		良	貝殻押引文	ナデ	Ⅳ 角筒

V類土器（第37図～第48図）

V類土器は、全形は円筒形で、口縁部に貝殻刺突文、胴部に貝殻条痕文を施すものである。口縁部の器形、文様、胴部の条痕文、底部の刻目等により細分される。

口縁部の器形では、外反するものと外傾し直行するものとで大別される。文様では、貝殻腹縁による刺突文が、横位・斜位・縦位または羽状に施されたものに分類される。胴部の条痕文は綾杉状になるものが多く見られる。

257～283は、口縁部が外反し、貝殻腹縁による刺突文を斜位に施し、胴部に条痕文を施すものである。257は、口径20cm、器高22cmを測る中形のものである。口縁部の外反は大きく貝殻腹縁による刺突文が斜位に施されており、補修孔も確認できる。

胴部には、綾杉状条痕文が見られる。258も、同様に口縁部の外反は大きく斜位の貝殻刺突文を有する。口唇部は257より厚みがあり、刻目が施されているのが特徴である。胴部には綾杉状条痕が施され、口径は18cmを測る。259は口径16cm、260は19cmを測り、共に257・258ほど口縁部の外反は著しくなく、斜位の貝殻刺突文が施され、口唇部には刻目が、胴部には綾杉状条痕文が見られる。261～265は、外反が緩やかで口縁部には斜位の貝殻刺突文が、胴部には条痕文が施されている。266は口縁部の外反が緩やかであるが、267はやや大きく、共に口縁部に斜位の貝殻刺突文、口唇部に刻目、胴部に条痕文が見られる。

268・269は、口縁部に斜位の貝殻刺突文が、胴部には条痕文が施されている。270・271は、口縁部に斜位の貝殻刺突文が見られる。

272～275の口縁部には斜位の貝殻刺突文が施され、272の胴部には条痕文、273の口唇部には刻目が見られる。276～283は、口縁部に斜位の貝殻刺突文が施され、276～278及び281～283は胴部に綾杉状の条痕文が見られる。276の口唇部には刻目も見られる。281～283は、口径がそれぞれ36cm、33.6cm、26.2cmを測る大形のものである。

284～292は、口縁部がやや外反し、羽状の貝殻刺突文が施されているものである。284～287までは口唇部に刻み目が見られる。291の刺突文はヘラ状工具によるものと貝殻によるものとの複合模様である。

293～349までは、口縁部が外反し、多くは横位の貝殻刺突文が施され、口唇部には刻目が、胴部には綾杉状の条痕文が見られる。293は、口縁部が緩やかに外反し、横位の貝殻刺突文が施され、補修孔が確認できる。口唇部には刻目が、胴部には条痕が見られる。口径は22.5cm、器高は22cmを測る。

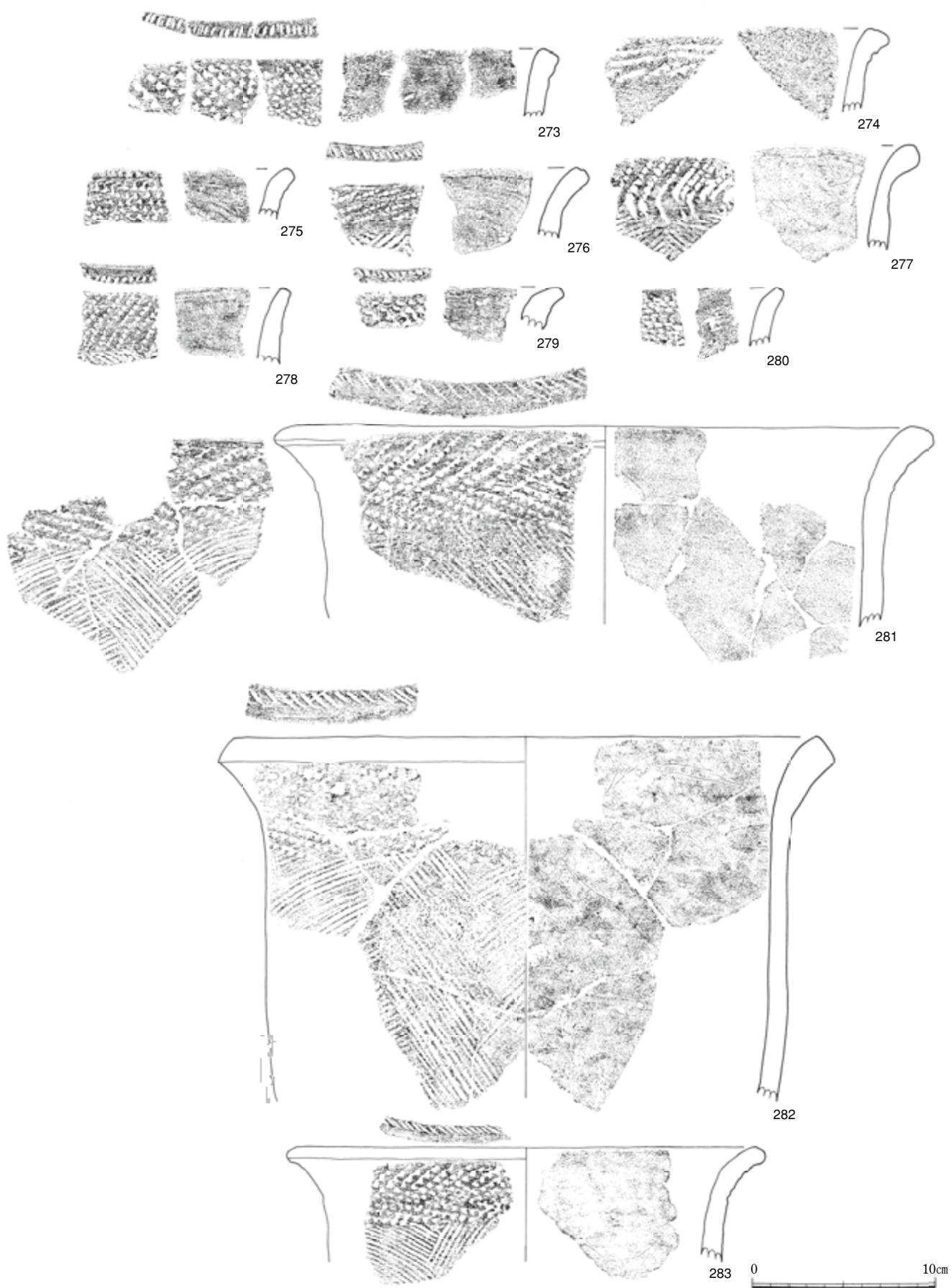
298・299、305～313は、口縁部の貝殻刺突文が横位と斜位を組み合わせた状態で存在する。315、326は、口縁部にヘラ状工具による斜位の刺突文と横位の貝殻刺突文を有し、胴部にかけて綾杉状の条痕文を施す。306、312・313は山形口縁で、突出部が2ヶ所である。327には補修孔を穿こうとした痕跡が見られる。

V類土器観察表 1

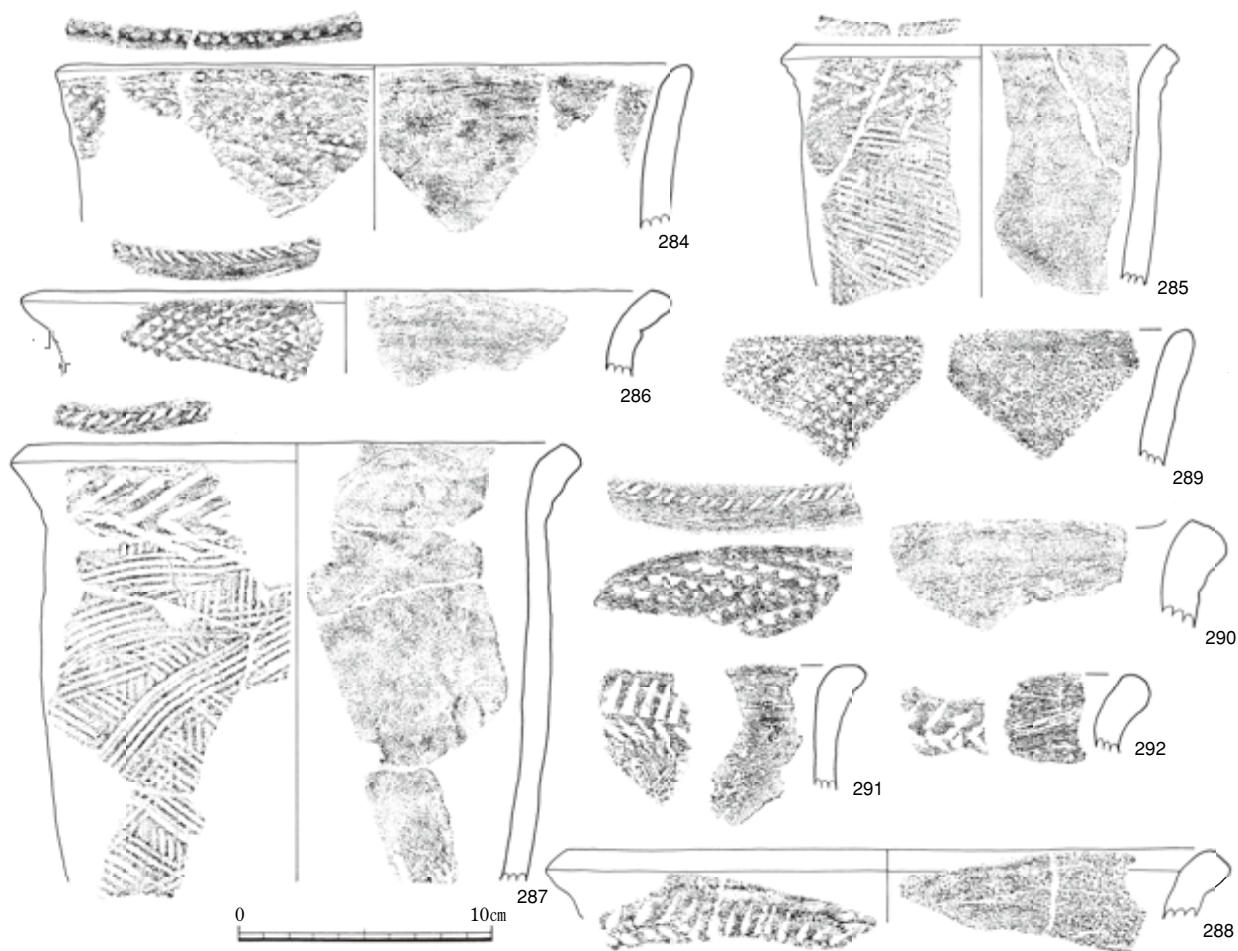
図 番号	番号	出土区	層位	部位	色調		胎	土				焼成	外	面	内	面	備 考
					内	外		石英	長石	角閃石	その他						
第 37 図	257	H-6・7	IV	完形	橙～黒	橙～明赤褐	○	○				良	貝殻刺突文(斜位)条痕文(綾杉状)		ナデ		補修孔
	258	H-6・7	IV	口縁～胴部	褐	明褐	○	○				良	貝殻刺突文(斜位)条痕文(綾杉状)		ナデ		口唇刻目
	259	H-6・7	IV	口縁～胴部	黒褐	黒褐	○	○				良	貝殻刺突文(斜位)条痕文(綾杉状)		ナデ		口唇刻目
	260	H-6	IV	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○			良	貝殻刺突文(斜位)条痕文(綾杉状)		ナデ		口唇刻目
	261	H-6	IV	口縁部	にぶい赤褐	にぶい褐	○	○				良	貝殻刺突文(斜位)条痕文		ナデ		口唇刻目
	262	H-7	IV	口縁部	にぶい黄褐	明褐	○	○				良	貝殻刺突文(斜位)条痕文		ナデ		
	263	H-7	IV	口縁部	褐	明黄褐	○	○				良	貝殻刺突文(斜位)条痕文		ナデ		
	264	H-7	IV	口縁～胴部	黒褐	褐	○	○				良	貝殻刺突文(斜位)条痕文		ナデ		
	265	H-7	IV	口縁～胴部	黒褐	暗オリーブ褐	○	○				良	貝殻刺突文(斜位)条痕文		ナデ		
	266	H-7	IV	口縁部	暗褐	暗褐	○	○				良	貝殻刺突文(斜位)条痕文		ナデ		口唇刻目
	267	H-7	IV	口縁部	褐	黒褐	○	○				良	貝殻刺突文(斜位)条痕文		ナデ		口唇刻目
	268	H-6・7	IV	口縁部	暗オリーブ褐	赤褐	○	○				良	貝殻刺突文(斜位)条痕文(綾杉状)		ナデ		口唇刻目
	269	H-6	IV	口縁部	黄褐	にぶい黄褐	○	○				良	貝殻刺突文(斜位)条痕文(綾杉状)		ナデ		
	270	H-7	IV	口縁部	褐	黄褐	○	○				良	貝殻刺突文(斜位)条痕文		ナデ		口唇刻目
	271	H-6	IV	口縁部	暗褐	褐	○	○				良	貝殻刺突文(斜位)		ナデ		口唇刻目
	272	H-7	IV	口縁部	にぶい褐	暗オリーブ褐	○	○				良	貝殻刺突文(斜位)条痕文		ナデ		口唇刻目



第37図 V類土器（1）



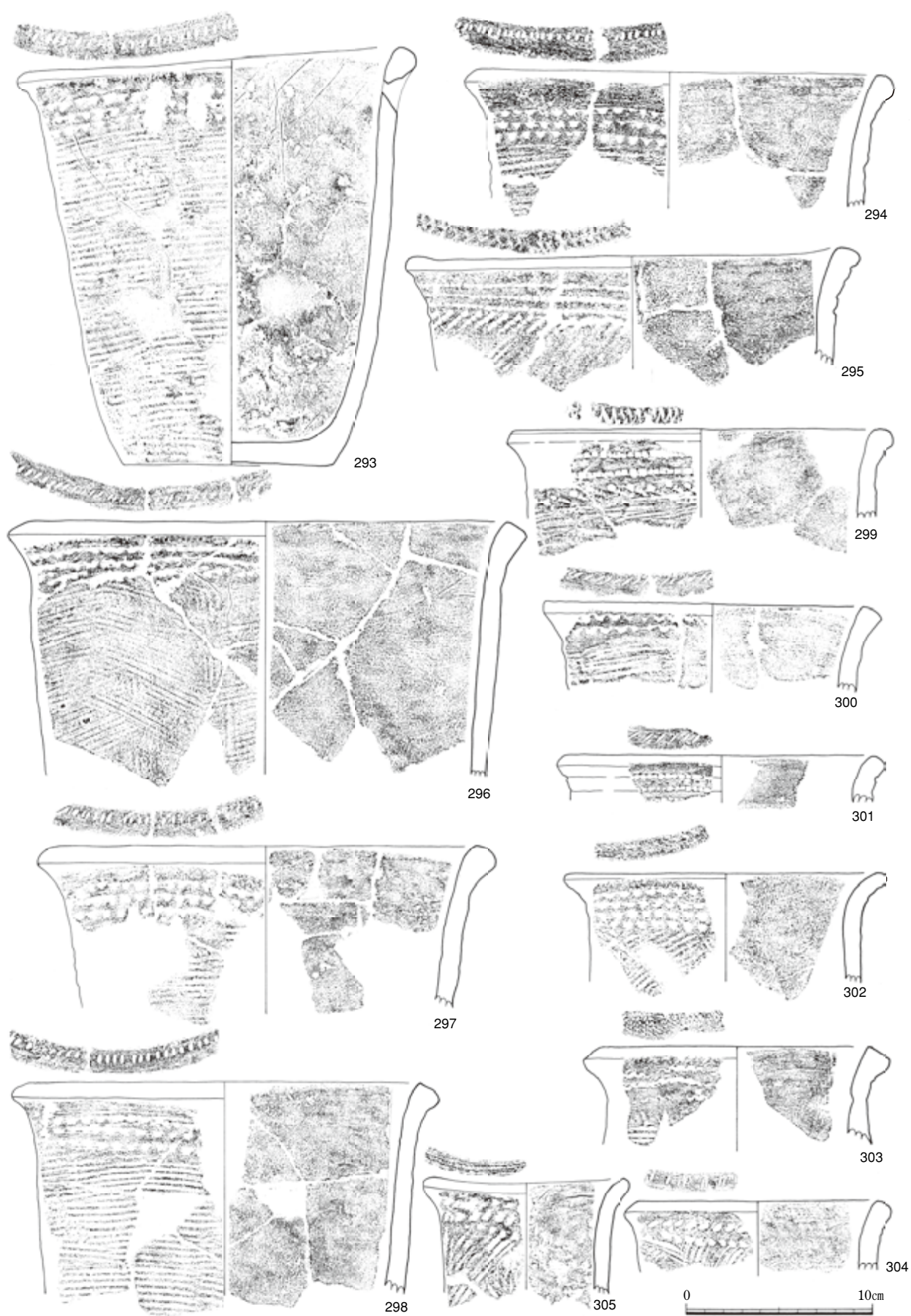
第38図 V類土器（2）



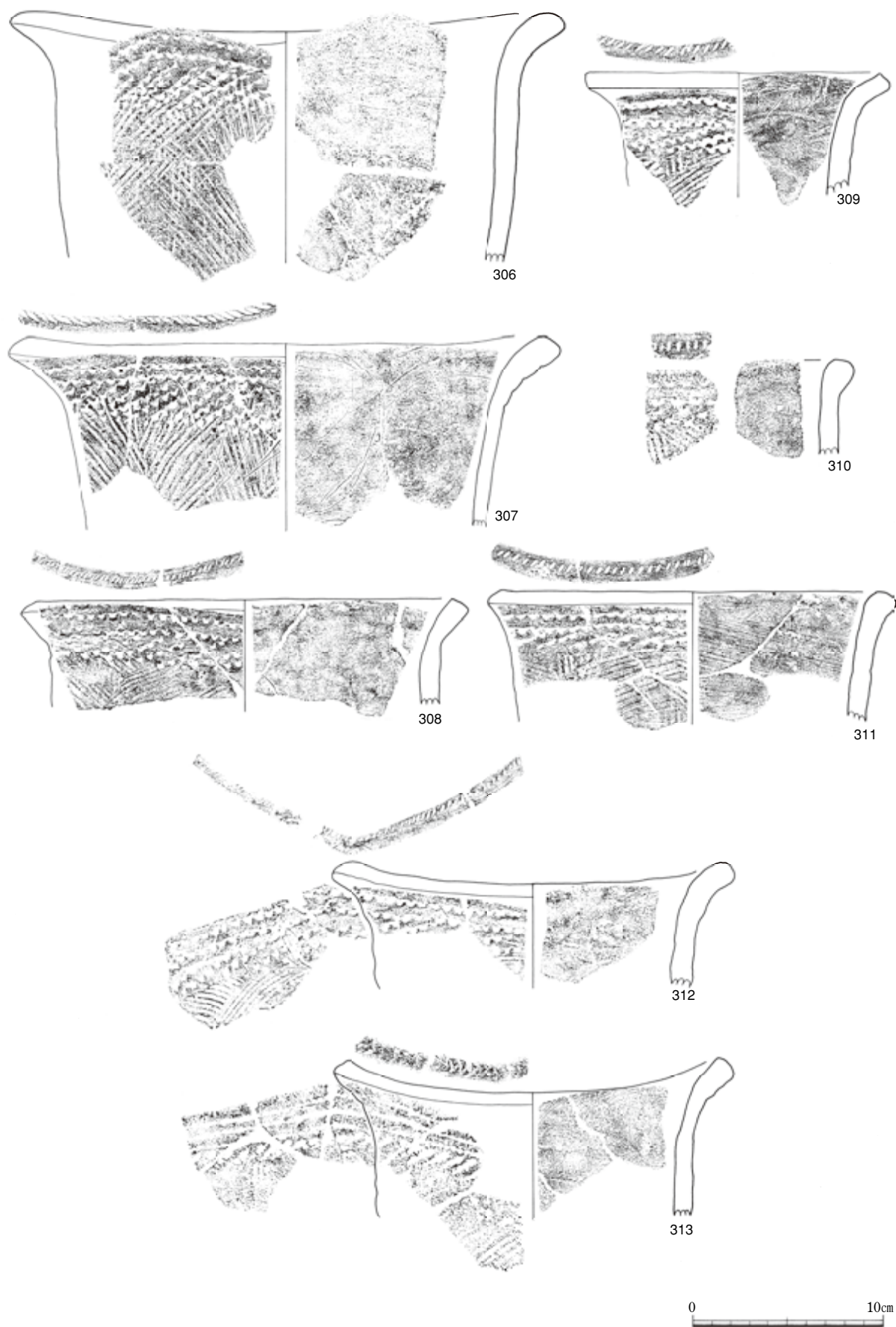
第39図 V類土器 (3)

V類土器観察表 2

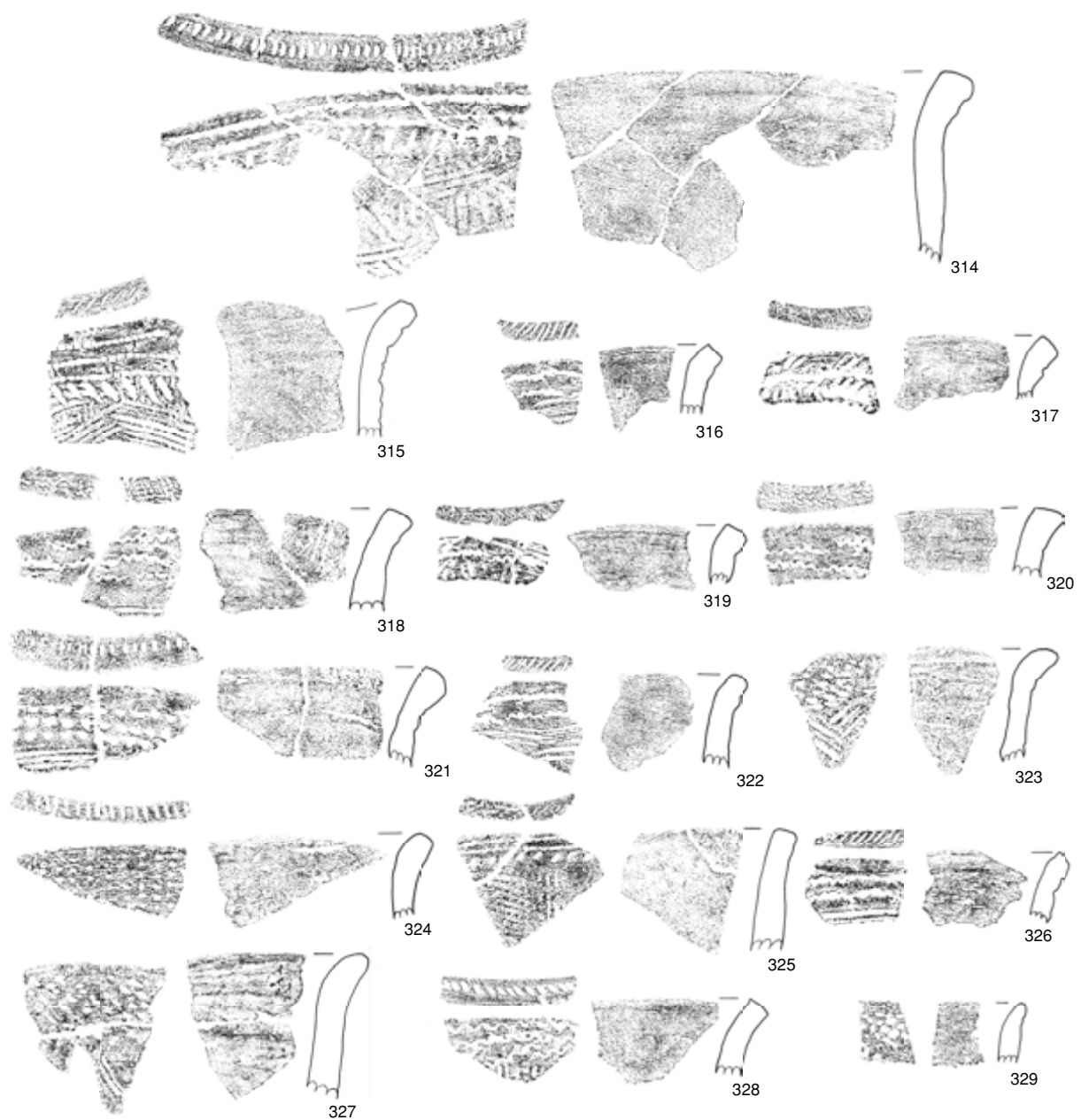
挿図 番号	番号	出土区	層位	部位	色		調 外	胎	土				焼成	外 面	内 面	備 考
					内	外			石英	長石	角閃石	その他				
第38 図	273	H-6	IV	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○					良	貝殻刺突文(斜位)	ナデ	口唇刻目
	274	H-6	IV	口縁部	にぶい黄褐	明褐	○	○					良	貝殻刺突文(斜位)	ナデ	
	275	H-7	IV	口縁部	暗灰黄	オリーブ褐	○	○	○				良	貝殻刺突文(斜位)	ナデ	
	276	H-7	IV	口縁部	明赤褐	にぶい褐	○	○					良	貝殻刺突文(斜位)条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
	277	H-5	IV	口縁部	にぶい黄橙	明赤褐	○	○	○				良	貝殻刺突文(羽状)条痕文(綾杉状)	ナデ	
	278	H-7	IV	口縁部	にぶい褐	黄灰	○	○					良	貝殻刺突文(斜位)条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
	279	H-6	IV	口縁部	褐	にぶい橙	○	○					良	貝殻刺突文(斜位)	ナデ	口唇刻目
	280	H-7	IV	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○	○				良	貝殻刺突文(斜位)	ナデ	
	281	H-5	IV	口縁～胴部	明赤褐	にぶい赤褐	○	○					良	貝殻刺突文(斜位)条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
	282	H-5・6	IV	口縁～胴部	褐	明赤褐	○	○					良	貝殻刺突文(斜位)条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
第39 図	283	H-6	IV	口縁部	橙	橙	○	○					良	貝殻刺突文(羽状)条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
	284	H-7	IV	口縁部	橙	褐	○	○					良	貝殻刺突文(羽状)	ナデ	口唇刻目
	285	I-5	IV	口縁～胴部	にぶい黄橙	橙	○	○					良	貝殻刺突文(羽状)条痕文	ナデ	口唇刻目
	286	H-5	IV	口縁部	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○					良	貝殻刺突文(羽状)	ナデ	口唇刻目
	287	H-5・6	IV	口縁～胴部	浅黄	黄褐	○	○					良	貝殻刺突文(羽状)条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
	288	H-6	IV	口縁部	明黄褐	にぶい褐	○	○					良	貝殻刺突文(羽状)	ナデ	
	289	H-6	IV	口縁部	にぶい褐	褐	○	○					良	貝殻刺突文(羽状)	ナデ	
	290	H-7	IV	口縁部	橙	明褐	○	○					良	貝殻刺突文(羽状)	ナデ	口唇刻目
	291	H-5	IV	口縁部	黒褐	褐	○	○					良	ヘラ状工具による刺突文及び貝殻刺突文(羽状)	ナデ	
	292	H-6	IV	口縁部	明黄褐	オリーブ褐	○	○					良	貝殻刺突文(羽状)	ナデ	
第40 図	293	H-5・6・7	Ⅲ・Ⅳ	完形	にぶい橙	にぶい橙	○	○					良	貝殻刺突文(横位)条痕文	ナデ	口唇刻目、補修孔
	294	H-6・7	IV	口縁部	明褐	明褐	○	○					良	貝殻刺突文(横位)条痕文	ナデ	口唇刻目
	295	H-6・7	IV	口縁部	明赤褐	赤褐	○	○					良	貝殻刺突文(横位・斜位)条痕文	ナデ	口唇刻目
	296	G-7, H-6	IV	口縁～胴部	明赤褐	にぶい橙	○	○					良	貝殻刺突文(横位・斜位)条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
	297	H-6	IV	口縁～胴部	明黄褐	明褐	○	○					良	貝殻刺突文(横位)条痕文	ナデ	口唇刻目
	298	H-4, H-6・7	IV	口縁～胴部	褐	明赤褐	○	○					良	貝殻刺突文(横位)条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
	299	I-4・5	IV	口縁部	黄褐	にぶい黄褐	○	○					良	貝殻刺突文(横位・斜位)条痕文	ナデ	口唇刻目
	300	H-7	IV	口縁部	にぶい橙	にぶい赤褐	○	○					良	貝殻刺突文(横位)条痕文	ナデ	口唇刻目
	301	H-6	IV	口縁部	黄褐	にぶい赤褐	○	○					良	貝殻刺突文(横位)	ナデ	口唇刻目
	302	H-6	IV	口縁部	黄褐	明赤褐	○	○					良	貝殻刺突文(横位)条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
	303	H-7	IV	口縁部	にぶい黄褐	褐	○	○	○				良	貝殻刺突文(横位)条痕文	ナデ	口唇刻目
	304	H-6	IV	口縁部	にぶい褐	黄褐	○	○					良	貝殻刺突文(横位)条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
	305	H-7	IV	口縁部	暗赤褐	暗赤褐	○	○					良	貝殻刺突文(横位)条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目



第40図 V類土器（4）



第41図 V類土器（5）



第42図 V類土器（6）

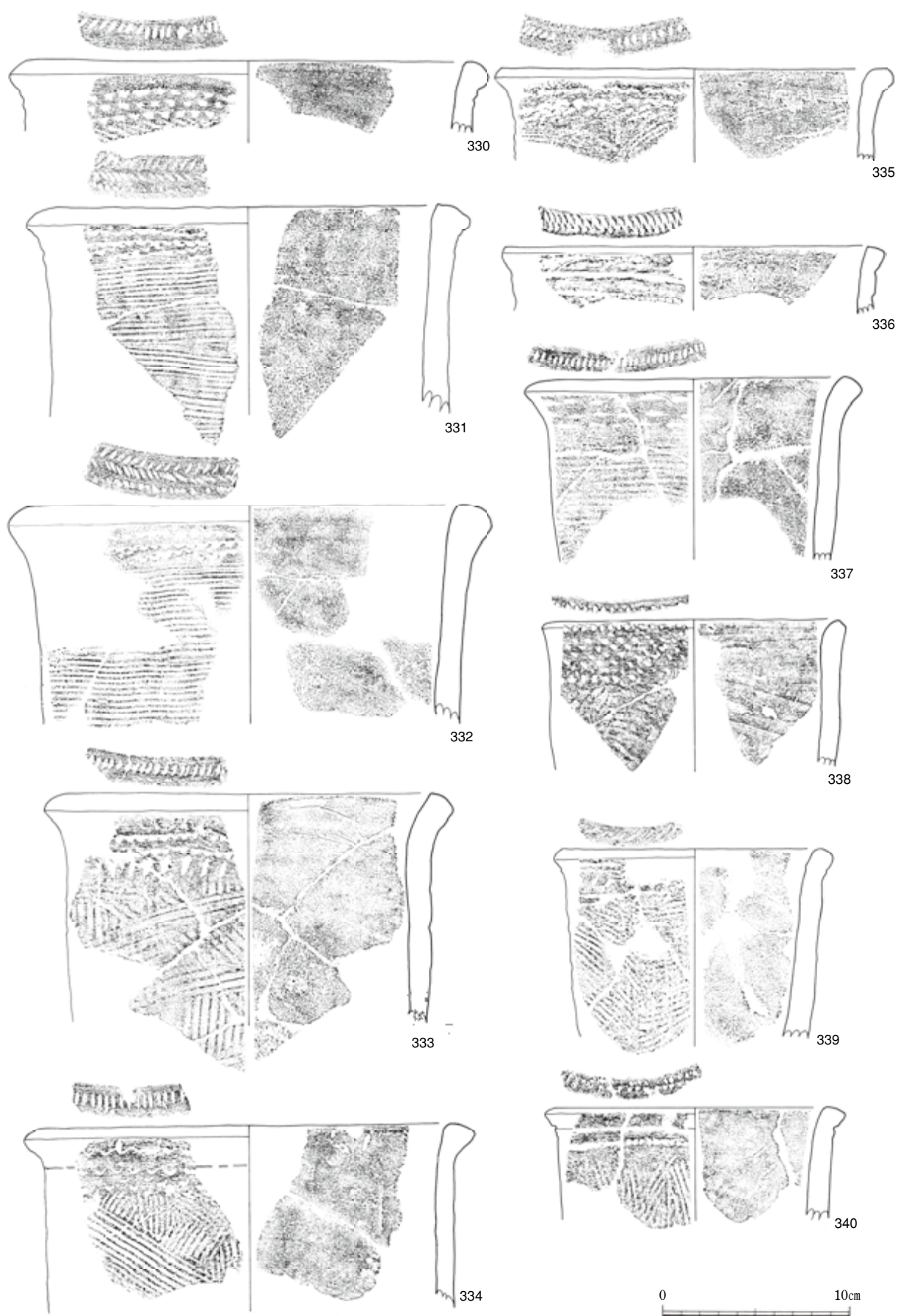
328, 330・331, 335・336には、口縁部に横位と斜位を組み合わせた貝殻刺突文を確認できる。337は、口縁部にヘラ状工具による刺突文と胴部には貝殻条痕が残る。

350～365までは、口縁部が直行し、直線的な胴部を経ているものである。350～352は、直線的な口縁部に横位の貝殻刺突文と胴部に綾杉状の条痕文を有し、口唇部には刻目が見られる。353は、口縁部に膨らみがあり斜位の貝殻刺突文が見受けられる。359の口縁部に見られる斜位の貝殻刺突文は他の刺突文と比べると特に深く顕著である。胴部に向かっては条痕文が見られ、指頭圧痕も残っている。

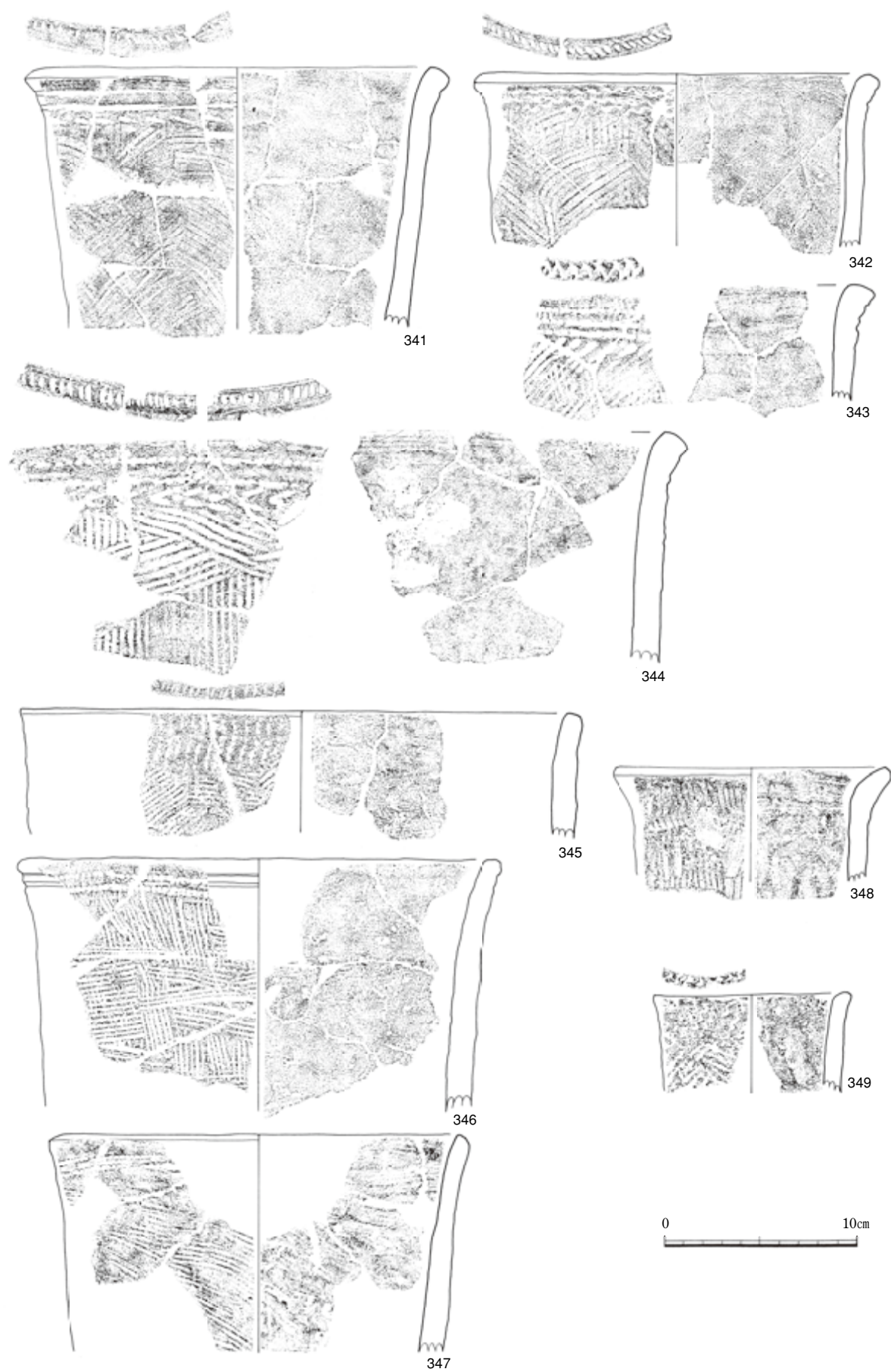
365は、口縁部周辺に横位の貝殻刺突文が広がり、口縁部より2cmほど隆起するコブ状突起を有するものである。

366・367は、口縁部がやや外反し、一列横位に竹管文を有する。口径はそれぞれ、27cm, 32cmと大形のものである。368・369は、口縁部に羽状の貝殻刺突文を施し、一部、ナデ消し後条痕文が見られる。368は、頸部から口縁部が急激に外反する。

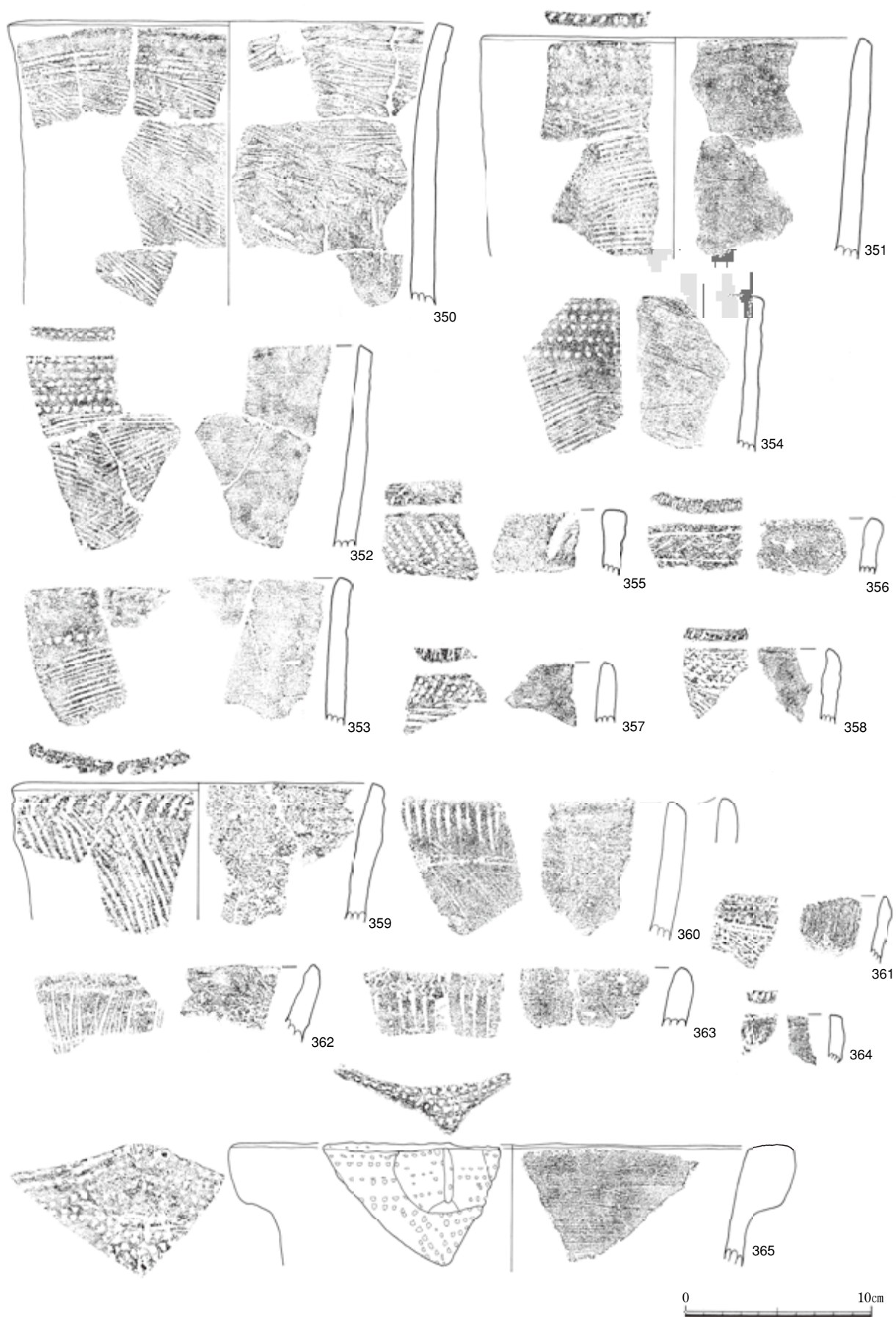
370～374は、胴部から底部にかけての部位である。胴部には、綾杉状の貝殻条痕が見られ、底部外面を囲むようにヘラによる浅い5mmほどの沈線が縦位に施されている。



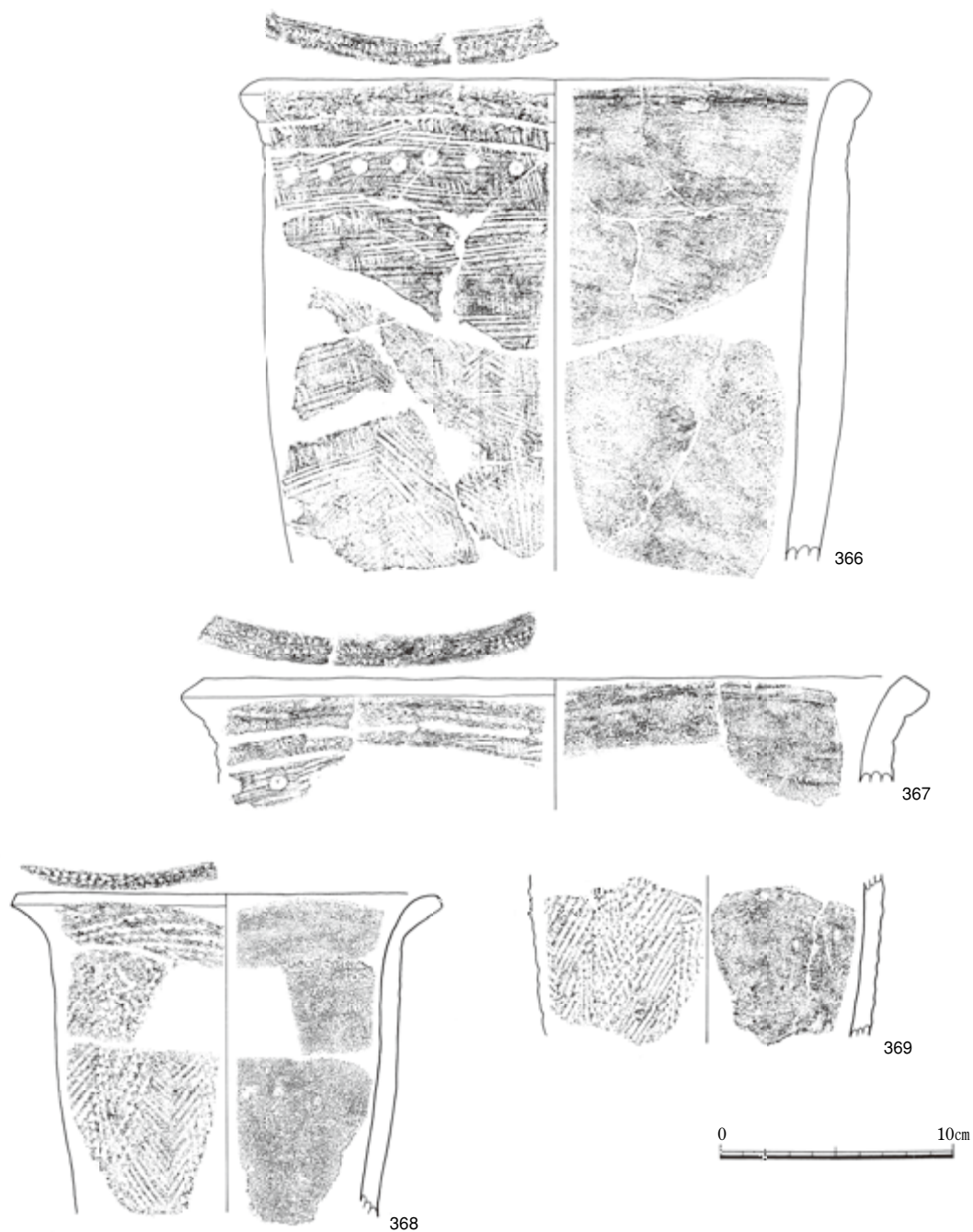
第43図 V類土器 (7)



第44図 V類土器（8）



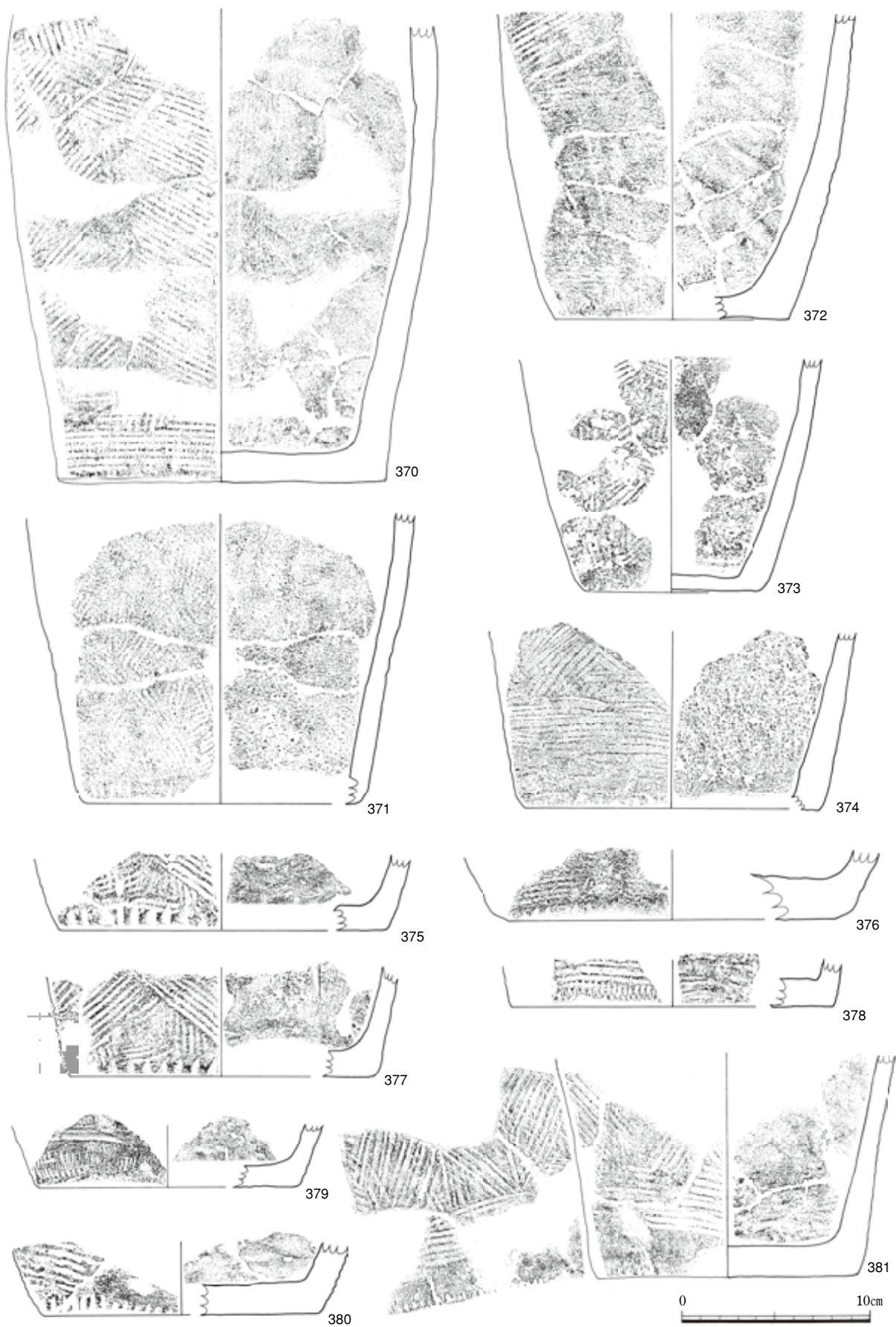
第45図 V類土器 (9)



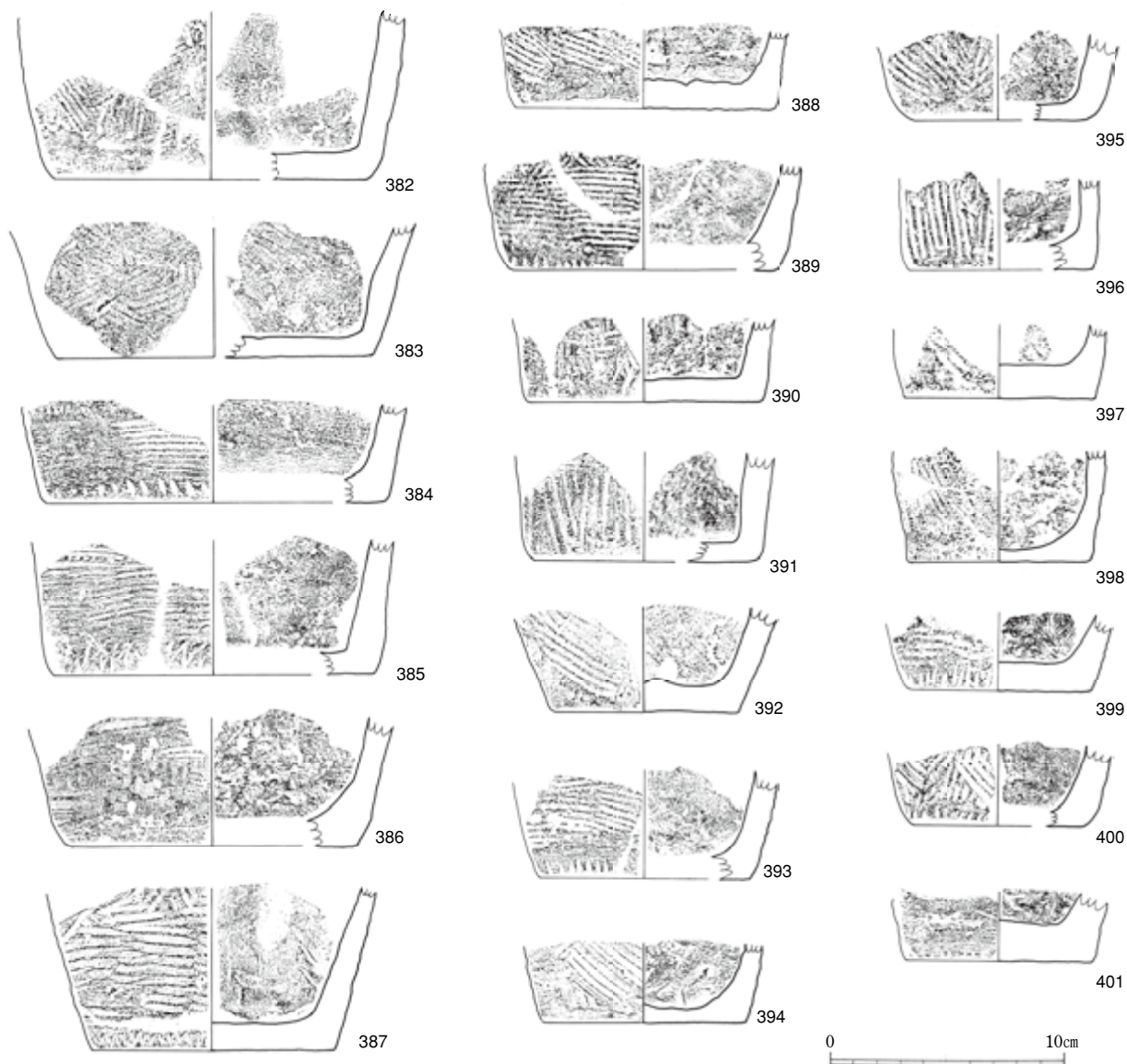
第46図 V類土器 (10)

375～380は底部である。375は、綾杉状の貝殻条痕が確認でき、底部外面周囲には、1 cmほどの深い沈線が縦位に施されている。376～380は貝殻条痕及びヘラによる浅い沈線が縦位に確認できる。

381～401は、底部で、その多くが貝殻による条痕文、ヘラによる縦位の沈線が施されている。387の内面、401の内底面には、指圧痕が確認できる。



第47図 V類土器 (11)



第48図 V類土器 (12)

V類土器観察表 3

挿入 番号	番号	出土区	層位	部位	色調		胎	土質				焼成	外 面	内 面	備 考
					内	外		石英	長石	角閃石	その他				
第41図	306	H-6	IV	口縁~胴部	黄褐	橙	○	○				良	貝殻刺突文(横位・斜位)条痕文(綾杉状)	ナデ	
	307	H-6	IV	口縁~胴部	橙	橙	○	○				良	貝殻刺突文(横位・斜位)条痕文	ナデ	口唇刻目
	308	H-6	IV	口縁部	にぶい黄	にぶい黄橙	○	○				良	貝殻刺突文(横位・斜位)条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
	309	H-5	IV	口縁~胴部	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○				良	貝殻刺突文(横位・斜位)条痕文	ナデ	口唇刻目
	310	H-6	IV	口縁部	にぶい黄橙	黄褐	○	○				良	貝殻刺突文(横位・斜位)条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
	311	H-5・6・7	IV	口縁~胴部	にぶい黄褐	褐	○	○				良	貝殻刺突文(横位・斜位)条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
	312	G-7,H-6	IV	口縁~胴部	浅黄	浅黄	○	○				良	貝殻刺突文(横位・斜位)条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
	313	G-6,H-7	IV	口縁~胴部	にぶい橙	にぶい褐	○	○				良	貝殻刺突文(横位・斜位)条痕文	ナデ	口唇刻目
	314	G-7,H-7	IV	口縁部	赤褐	暗赤褐	○	○				良	貝殻刺突文(横位)条痕文	ナデ	口唇刻目
	315	H-6	IV	口縁部	にぶい黄褐	黄灰	○	○				良	ヘラ状工具による刺突文・貝殻刺突文(横位)条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
第42図	316	H-6	IV	口縁部	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○				良	貝殻刺突文(横位)条痕文	ナデ	口唇刻目
	317	H-6	IV	口縁部	黄褐	褐	○	○				良	貝殻刺突文(横位)	ナデ	口唇刻目
	318	H-7	IV	口縁部	褐	にぶい褐	○	○				良	貝殻刺突文(横位)条痕文	ナデ	口唇刻目
	319	H-7	IV	口縁部	暗オリーブ褐	褐	○	○				良	貝殻刺突文(横位)条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
	320	H-7	IV	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○	○				良	貝殻刺突文(横位)	ナデ	口唇刻目
	321	H-6	IV	口縁部	褐	にぶい橙	○	○				良	貝殻刺突文(横位)条痕文	ナデ	口唇刻目
	322	H-7	IV	口縁部	オリーブ黒	にぶい黄	○	○				良	貝殻刺突文(横位)条痕文	ナデ	口唇刻目
	323	H-7	IV	口縁部	暗灰黄	明褐	○	○				良	貝殻刺突文(横位)条痕文(綾杉状)	ナデ	
	324	H-7	IV	口縁部	にぶい黄橙	橙	○	○				良	貝殻刺突文(横位)	ナデ	口唇刻目
	325	H-6	IV	口縁部	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○				良	貝殻刺突文(横位)条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
	326	H-7	IV	口縁部	灰オリーブ	にぶい黄	○	○				良	ヘラ状工具による刺突文・貝殻刺突文(横位)条痕文	ナデ	口唇刻目
	327	H-4	IV	口縁部	明黄褐	褐	○	○				良	貝殻刺突文(横位)条痕文	ナデ	
	328	H-7	IV	口縁部	にぶい赤褐	にぶい褐	○	○				良	貝殻刺突文(横位・斜位)	ナデ	口唇刻目
	329	H-7	IV	口縁部	オリーブ黄	明黄褐	○	○				良	貝殻刺突文(横位)	ナデ	

V類土器観察表 4

挿図 番号	番号	出土区	層位	部位	色調		胎 石	英	長	石	閃	石	土 石	他	焼成	外 面	内 面	備 考
					内	外												
第43図	330	H-6	IV	口縁部	明褐	明赤褐	○	○							良	貝殻刺突文(横位・斜位)条痕文	ナデ	口唇刻目
	331	H-6・7	IV	口縁～胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○	○						良	貝殻刺突文(横位・斜位)条痕文	ナデ	口唇刻目
	332	H-6・7	IV	口縁～胴部	明赤褐	にぶい橙	○	○							良	貝殻刺突文(横位)条痕文	ナデ	口唇刻目
	333	H-6・7	IV	口縁～胴部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○							良	貝殻刺突文(横位)条痕文	ナデ	口唇刻目
	334	H-7	IV	口縁～胴部	にぶい橙	にぶい褐	○	○							良	貝殻刺突文(横位)条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
	335	H-7	IV	口縁部	にぶい黄橙	褐	○	○							良	貝殻刺突文(横位・斜位)条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
	336	H-6・7	IV	口縁部	にぶい黄褐	灰オリーブ	○	○							良	貝殻刺突文(横位・斜位)	ナデ	口唇刻目
	337	H-6	IV	口縁～胴部	明赤褐	赤褐	○	○							良	ヘラ状工具による刺突文・条痕文	ナデ	口唇刻目
	338	H-6	IV	口縁～胴部	にぶい赤褐	にぶい黄褐	○	○							良	貝殻刺突文(横位)条痕文	ナデ	口唇刻目
	339	H-6	IV	口縁～胴部	にぶい黄褐	橙	○	○							良	貝殻刺突文(横位)条痕文	ナデ	口唇刻目
第44図	340	H-4・7	IV	口縁部	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○							良	貝殻刺突文(横位)条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
	341	H-7	IV	口縁～胴部	にぶい褐	褐	○	○							良	貝殻刺突文(横位)条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
	342	H-5	IV	口縁～胴部	にぶい褐	明黄褐	○	○							良	貝殻刺突文(横位)条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
	343	H-6	IV	口縁部	にぶい黄褐	明赤褐	○	○							良	貝殻刺突文(横位・斜位)条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
	344	H-6	IV	口縁～胴部	褐	黄褐	○	○							良	貝殻刺突文(横位・斜位)条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
	345	H-7	IV	口縁部	にぶい黄橙	明黄褐	○	○							良	貝殻刺突文(横位)条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
	346	H-4	IV	口縁～胴部	黄褐	にぶい黄褐	○	○	○						良	貝殻刺突文(横位)条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
	347	H-6・7	IV	口縁～胴部	褐	暗褐	○	○							良	貝殻刺突文(横位)条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
	348	H-5,7	IV	口縁部	明赤褐	明赤褐	○	○							良	条痕文	ナデ	指圧痕(外面)
	349	H-7	IV	口縁部	灰オリーブ	黄褐	○	○							良	貝殻刺突文(横位)条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
第45図	350	H-6・7	IV	口縁～胴部	にぶい赤	赤褐	○	○							良	貝殻刺突文(横位)条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
	351	H-7	IV	口縁～胴部	にぶい橙	にぶい橙	○	○							良	貝殻刺突文(横位)条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
	352	H-6・7	IV	口縁～胴部	にぶい黄褐	にぶい橙	○	○							良	貝殻刺突文(横位)条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
	353	H-6	IV	口縁部	にぶい黄橙	浅黄橙	○	○							良	貝殻刺突文(斜位)	ナデ	口唇刻目
	354	H-7	IV	口縁部	明赤褐	褐	○	○							良	貝殻刺突文(横位)条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
	355	H-6・7	Ⅲ・Ⅳ	口縁部	赤褐	赤褐	○	○							良	貝殻刺突文(横位)条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
	356	H-6	IV	口縁部	にぶい黄橙	橙	○	○							良	貝殻刺突文(横位・斜位)	ナデ	口唇刻目
	357	H-6	IV	口縁部	黄褐	にぶい黄	○	○							良	貝殻刺突文(斜位)条痕文	ナデ	口唇刻目
	358	H-6	IV	口縁部	褐	褐	○	○	○						良	貝殻刺突文(斜位)条痕文	ナデ	口唇刻目
	359	H-6	IV	口縁部	にぶい褐	灰褐	○	○							良	貝殻刺突文(斜位)条痕文	ナデ	口唇刻目
	360	H-6	IV	口縁部	明褐	にぶい黄橙	○	○							良	貝殻刺突文(縦位)条痕文	ナデ	口唇刻目
	361	H-7	IV	口縁部	灰褐	褐	○	○	○						良	貝殻刺突文(斜位)	ナデ	口唇刻目
	362	H-7	IV	口縁部	オリーブ褐	暗灰黄	○	○							良	貝殻刺突文(横位)条痕文	ナデ	口唇刻目
	363	H-5・6	IV	口縁部	橙	橙	○	○							良	貝殻刺突文(縦位)	ナデ	口唇刻目
	364	H-7	IV	口縁部	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○							良	貝殻刺突文(横位・斜位)	ナデ	口唇刻目
	365	H-7	IV	口縁部	にぶい明赤褐	暗オリーブ褐	○	○							良	貝殻刺突文(横位)	ナデ	口唇刻目
第46図	366	H-7	IV	口縁～胴部	暗灰黄	にぶい黄褐	○	○							良	竹管文・条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
	367	H-7	IV	口縁部	明黄褐	にぶい黄褐	○	○							良	竹管文・条痕文	ナデ	口唇刻目
	368	H-6	IV	口縁～胴部	にぶい黄褐	褐	○	○							良	貝殻刺突文(羽状)ナデ消し後条痕文	ナデ	口唇刻目
	369	H-6	IV	胴部	浅黄	にぶい黄褐	○	○							良	貝殻刺突文(羽状)ナデ消し後条痕文	ナデ	口唇刻目
	370	H-6・7	IV	胴～底部	黄褐	明褐	○	○	○						良	貝殻条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
第47図	371	G・H-6	Ⅲ	胴～底部	暗褐	にぶい褐	○	○							良	貝殻条痕文(綾杉状)ヘラによる沈線	ナデ	口唇刻目
	372	H-6・7	Ⅳ・Ⅴ	胴～底部	暗褐	暗褐	○	○	○						良	貝殻条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
	373	H-7	IV	胴～底部	灰褐	橙	○	○							良	貝殻条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
	374	H-6	IV	胴～底部	黒褐	にぶい褐	○	○							良	貝殻条痕文(綾杉状)ヘラによる沈線	ナデ	口唇刻目
	375	H-6	IV	底部	暗灰黄	にぶい黄橙	○	○							良	貝殻条痕文(綾杉状)ヘラによる沈線	ナデ	口唇刻目
	376	H-7	IV	底部	にぶい赤褐	赤褐	○	○							良	貝殻条痕文・ヘラによる沈線	ナデ	口唇刻目
	377	H-6・7	IV	底部	にぶい黄橙	橙	○	○							良	貝殻条痕文(綾杉状)ヘラによる沈線	ナデ	口唇刻目
	378	H-6	V	底部	明褐	にぶい褐	○	○							良	貝殻条痕文・ヘラによる沈線	ナデ	口唇刻目
	379	H-7	IV	底部	灰黄褐	灰黄褐	○	○							良	貝殻条痕文・ヘラによる沈線	ナデ	口唇刻目
	380	H-7	IV	底部	赤褐	赤褐	○	○							良	貝殻条痕文(綾杉状)ヘラによる沈線	ナデ	口唇刻目
第48図	381	H-5・6	IV	胴～底部	明赤褐	褐	○	○	○						良	貝殻条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
	382	H-7	IV	底部	暗褐	にぶい褐	○	○							良	貝殻条痕文(綾杉状)ヘラによる沈線	ナデ	口唇刻目
	383	H-6	IV	底部	明赤褐	明赤褐	○	○							良	貝殻条痕文(綾杉状)ヘラによる沈線	ナデ	口唇刻目
	384	H-7	IV	底部	にぶい褐	明褐	○	○							良	貝殻条痕文・ヘラによる沈線	ナデ	口唇刻目
	385	H-5	IV	底部	黒褐	にぶい褐	○	○							良	貝殻条痕文・ヘラによる沈線	ナデ	口唇刻目
	386	H-6	IV	底部	暗褐	にぶい褐	○	○							良	貝殻条痕文	ナデ	口唇刻目
	387	H-6	IV	底部	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○							良	貝殻条痕文	ナデ	口唇刻目
	388	H-6・7	IV	底部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○							良	貝殻条痕文	ナデ	口唇刻目
	389	H-6	IV	底部	橙	橙	○	○							良	貝殻条痕文・ヘラによる沈線	ナデ	口唇刻目
	390	H-6・7	IV	底部	にぶい橙	黄褐	○	○							良	貝殻条痕文	ナデ	口唇刻目
	391	H-6	IV	底部	にぶい褐	にぶい褐	○	○							良	貝殻条痕文	ナデ	口唇刻目
	392	H-6	IV	底部	にぶい橙	にぶい橙	○	○							良	貝殻条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
	393	H-6	IV	底部	褐	橙	○	○							良	貝殻条痕文・ヘラによる沈線	ナデ	口唇刻目
	394	H-6	IV	底部	にぶい黄褐	にぶい黄	○	○							良	貝殻条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
	395	H-6	IV	底部	明黄褐	橙	○	○							良	貝殻条痕文(綾杉状)	ナデ	口唇刻目
	396	I-4	IV	底部	明赤褐	橙	○	○							良	貝殻条痕文	ナデ	口唇刻目
	397	H-6	IV	底部	にぶい黄	暗灰黄	○	○							良	ヘラによる沈線	ナデ	口唇刻目
	398	H-6	IV	底部	黒褐	褐	○	○							良	貝殻条痕文	ナデ	口唇刻目
	399	H-7	IV	底部	にぶい褐	にぶい黄褐	○	○							良	貝殻条痕文・ヘラによる沈線	ナデ	口唇刻目
	400	H-5	IV	底部	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○	○							良	貝殻条痕文(綾杉状)ヘラによる沈線	ナデ	口唇刻目
	401	H-6	IV	底部	明褐	橙	○	○							良	貝殻条痕文・ヘラによる沈線	ナデ	口唇刻目

Ⅵ類土器（第49図）

Ⅵ類土器は、貝殻刺突文を器面全面に施すものである。刺突文は斜位に施され綾杉状になる部分も見られる。402は山形になる口縁部で補修孔を有する。

403は胴部。404～406は底部である。406は規則制のある貝殻刺突文で、ヘラによる縦位の沈線文を施すものである。

Ⅶ類土器（第49図）

Ⅶ類土器はヘラによる刺突文を鋸歯状に施すものである。407・408は胴部である。

Ⅷ類土器（第49図）

Ⅷ類土器は貝殻条痕文を施すものであるが、縦位の流水文と横位の直線文が施される。409～411は胴部。412は底部である。

Ⅸ類土器（第49図）

Ⅸ類土器は貝殻条痕文を口縁部から胴部上位にか

けて横位に廻らすものである。413は口縁部径17cmを測るものである。414は胴部下半部から底部にかけてのものであるが、横位の貝殻条痕文の下から底部へかけて縦位の貝殻条痕文を施すものである。

Ⅹ類土器（第49図）

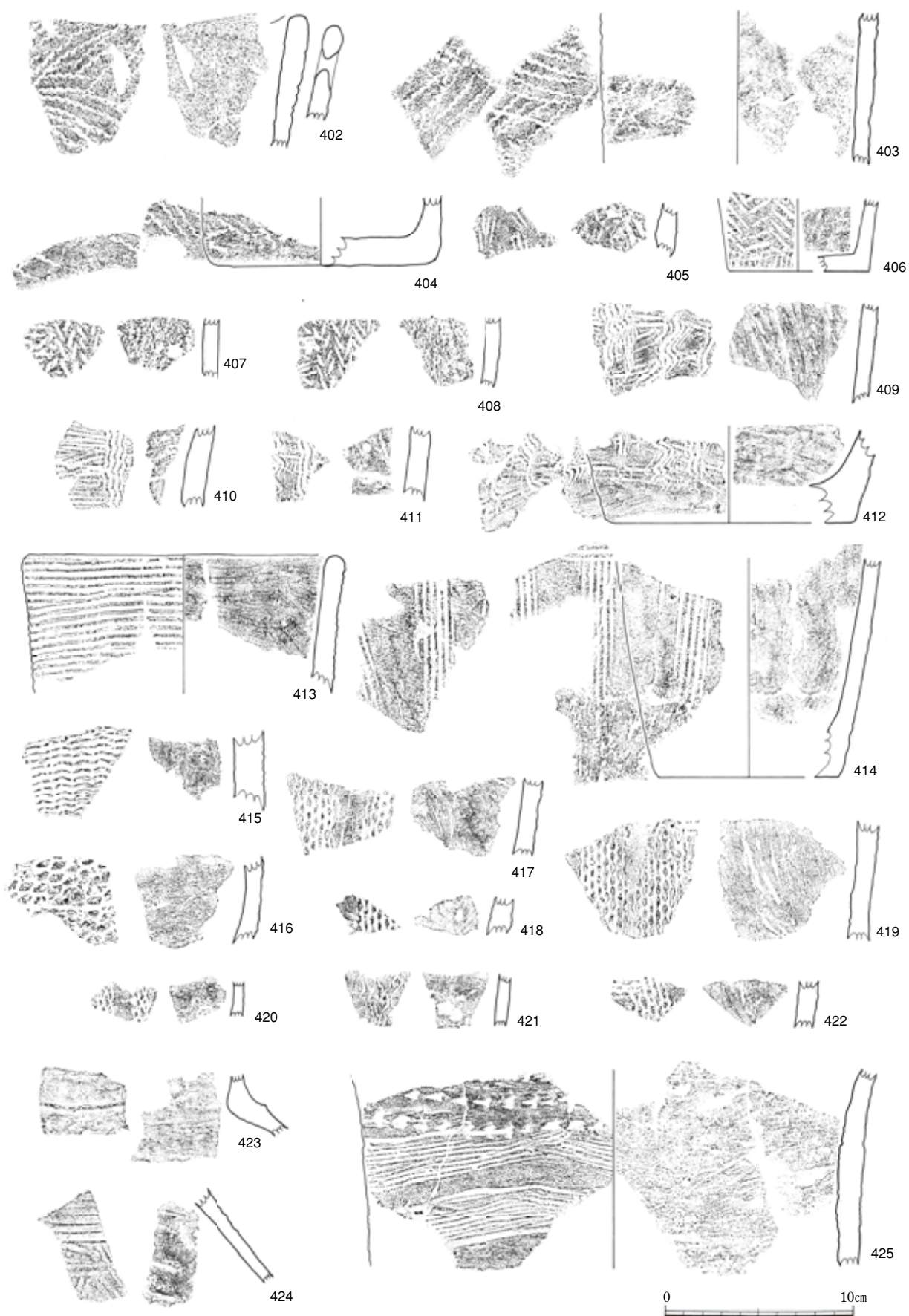
Ⅹ類土器は押型文土器である。415は山形押型文。416～419、422は楕円押型文である。417～419は同一個体と思われるもので、楕円押型文を縦に施した後に一部をナデ消して無文帯を形成している。

Ⅺ類土器（第49図）

Ⅺ類土器は420・421、423～425である。420・421は網目燃糸文を縦位に施す。423・424は頸部及び肩部に微粒突帯を廻らすもので、壺形土器になるものである。425は頸部に貝殻刺突文を廻らし、胴部には区画内に貝殻条痕を施すものである。

Ⅵ～Ⅺ類土器観察表

採図 番号	番号	出土区	層位	部位	色 調		胎 土				焼成	外 面	内 面	類	備考
					内	外	石英	長石	角閃石	その他					
第 49 図	402	H-11	Ⅳ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	貝殻刺突文	ナデ	Ⅵ	補修孔
	403	H-11	Ⅳ	胴部	褐	褐	○	○			良	貝殻刺突文	ナデ	Ⅵ	
	404	H-11	Ⅳ	底部	赤褐	にぶい赤褐	○	○			良	貝殻刺突文	ナデ	Ⅵ	
	405	J-7	Ⅳ	胴部	黒褐	暗灰黄	○	○			良	貝殻刺突文	ケズリ	Ⅵ	
	406	H-7	Ⅳ	底部	にぶい褐	灰黄褐	○	○			良	貝殻刺突文・条痕文	ナデ	Ⅵ	
	407	H-6	Ⅳ	胴部	オリーブ褐	にぶい橙	○	○			良	ヘラ沈線（鋸歯状）	ナデ	Ⅶ	
	408	H-6	Ⅳ	胴部	暗灰黄	にぶい橙	○	○			良	ヘラ沈線（鋸歯状）	ナデ	Ⅶ	
	409	J-7	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	明赤褐	○	○			良	貝殻条痕文	ナデ	Ⅷ	
	410	J-8	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	貝殻条痕文	ナデ	Ⅷ	
	411	J-8	Ⅳ	胴部	褐	明赤褐	○	○			良	貝殻条痕文	ナデ	Ⅷ	
	412	J-8	Ⅳ	底部	明褐	赤褐	○	○	○		良	貝殻条痕文	ナデ	Ⅷ	
	413	H-11	Ⅳ	口縁部	明赤褐	黄褐	○	○			良	貝殻条痕文	ナデ	Ⅸ	
	414	H-11	Ⅳ	胴～底部	にぶい赤褐	明赤褐	○	○			良	貝殻条痕文	ナデ	Ⅸ	
	415	J-5	Ⅳ	胴部	暗灰黄	明黄褐	○	○	○		良	山形押型文	ナデ	Ⅹ	
	416	J-8	Ⅳ	胴部	にぶい黄	橙	○	○			良	楕円押型文	ナデ	Ⅹ	
	417	J・K-10	Ⅳ	胴部	黒褐	黒褐	○	○			良	楕円押型文	ケズリ後ナデ	Ⅹ	
	418	J-10	Ⅲ	胴部	褐灰	褐	○	○			良	楕円押型文	ナデ	Ⅹ	
	419	J-10	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	楕円押型文	ケズリ後ナデ	Ⅹ	
	420	K-4	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	網目燃糸文	ナデ	Ⅺ	
	421	G-7	Ⅳ	胴部	黄褐	明褐	○	○			良	網目燃糸文	ナデ	Ⅺ	
	422	J-10	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	褐	○	○			良	楕円押型文	ナデ	Ⅹ	
	423	G-7	Ⅳ	頸部	橙	橙	○	○			良	微粒突帯	ナデ	Ⅺ	壺
	424	H-6	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	明褐	○	○			良	微粒突帯	ナデ	Ⅺ	壺
	425	J-5	Ⅳ	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄	○	○			良	区画内条痕	ケズリ	Ⅺ	



第49図 VI・VII・VIII・IX・X・XI類土器

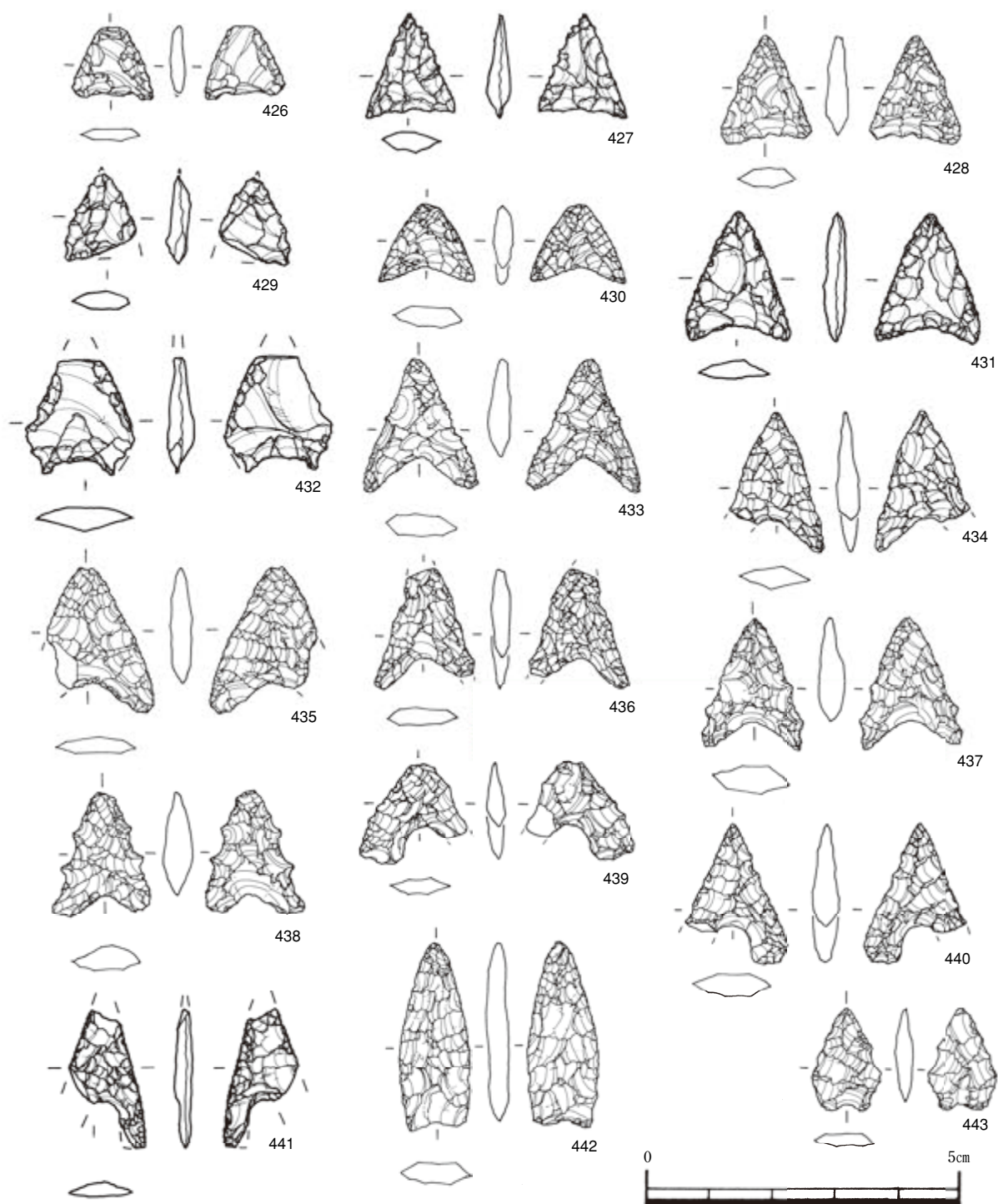
(2) 石器 (第50図～第59図)

石器は石鏃・石斧・スクレイパー・礫器・磨石・敲石・凹石・砥石状石器・石皿等が出土している。

石鏃 (第50図)

石鏃は18点が出土している。素材は黒曜石・頁岩・チャート・玉髄等である。農業開発総合センター遺跡群の統一した分類 (21頁・第13図) で見ると、

426～428はA-a-a類, 429～432はA-a-b類, 433～438はA-a-c類, 439・440はA-a-d類, 442はA-c-d類, 443はC-c-d類, 441はB-a-b類に分類される。437・438は剥離が強く鋸歯状を呈する。いずれも両面交互剥離による丁寧な作りであるが, 438は剥離面を大きく残している。



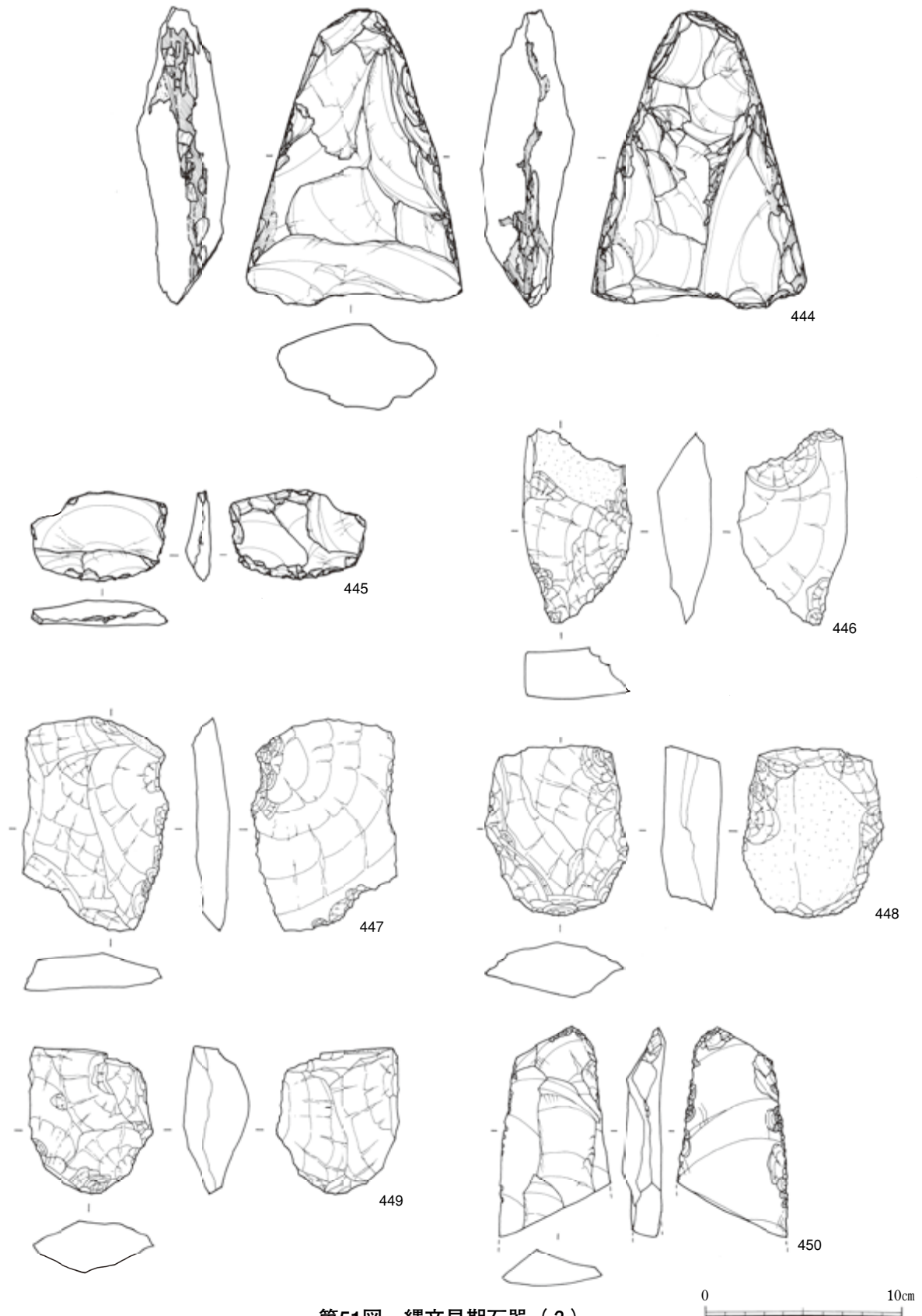
第50図 縄文早期石器 (1)

石斧（第51図）

444は石斧である。刃部を欠損するやや大型の打製石斧でバチ形を呈する。両面の一部及び側面には研磨痕が認められる。頁岩を素材とする。

スクレイパー（第51図・第52図）

スクレイパーは8点出土しているがほとんどが頁岩を素材とするものである。445は横長剥片で両面交互剥離による刃部を作る。446は片面の剥離であ



第51図 縄文早期石器（2）

る。447は側面に刃部を有する。448は両側面に粗い剥離の刃部を有する。450は縦長剥片の素材を利用し、側面に細かな剥離を施す。451・452は礫器に近いものである。

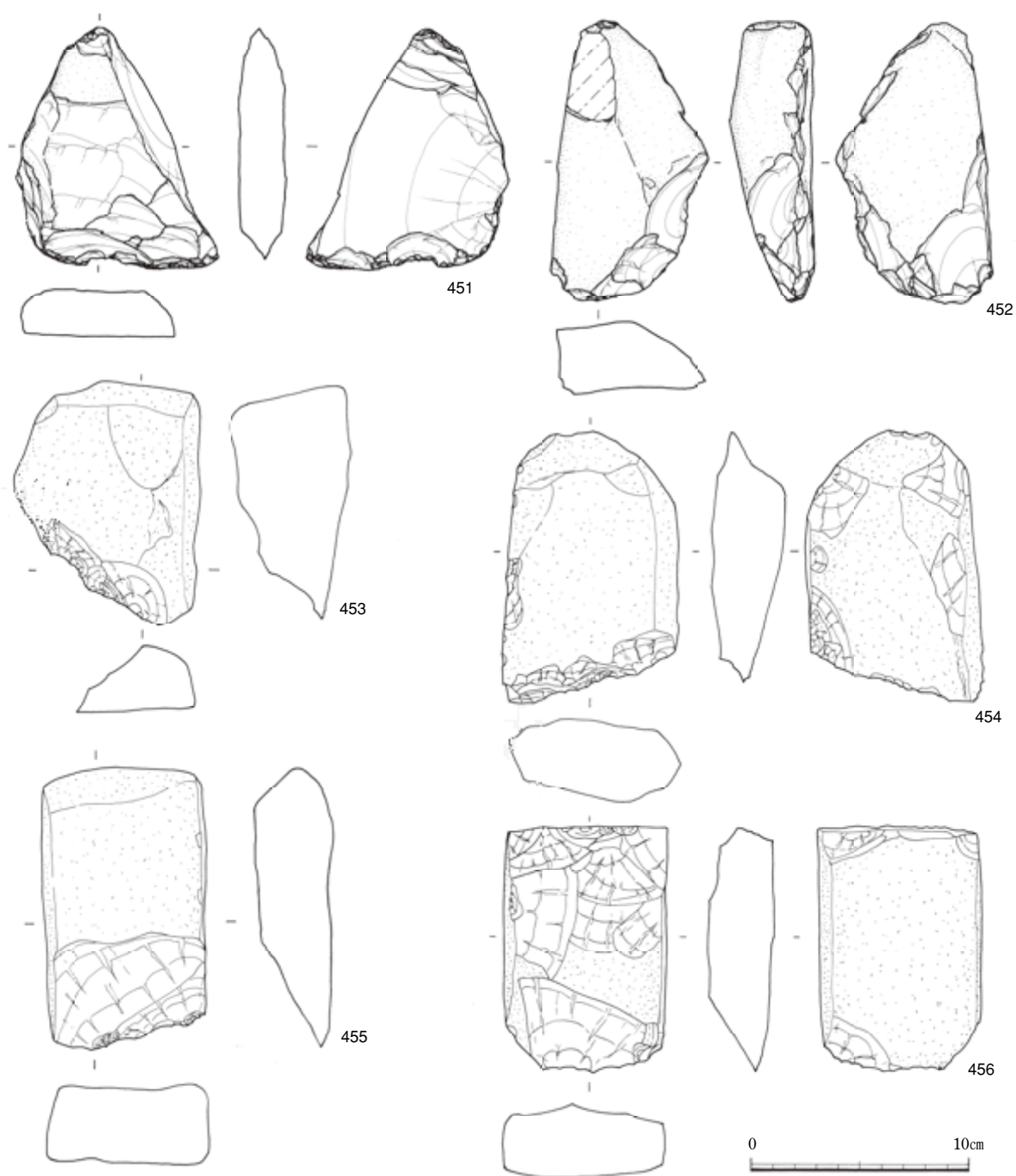
礫器（第52図・第53図）

礫器は自然礫の一部を粗い剥離により刃部とするもので7点が出土している。頁岩・砂岩・安山岩を

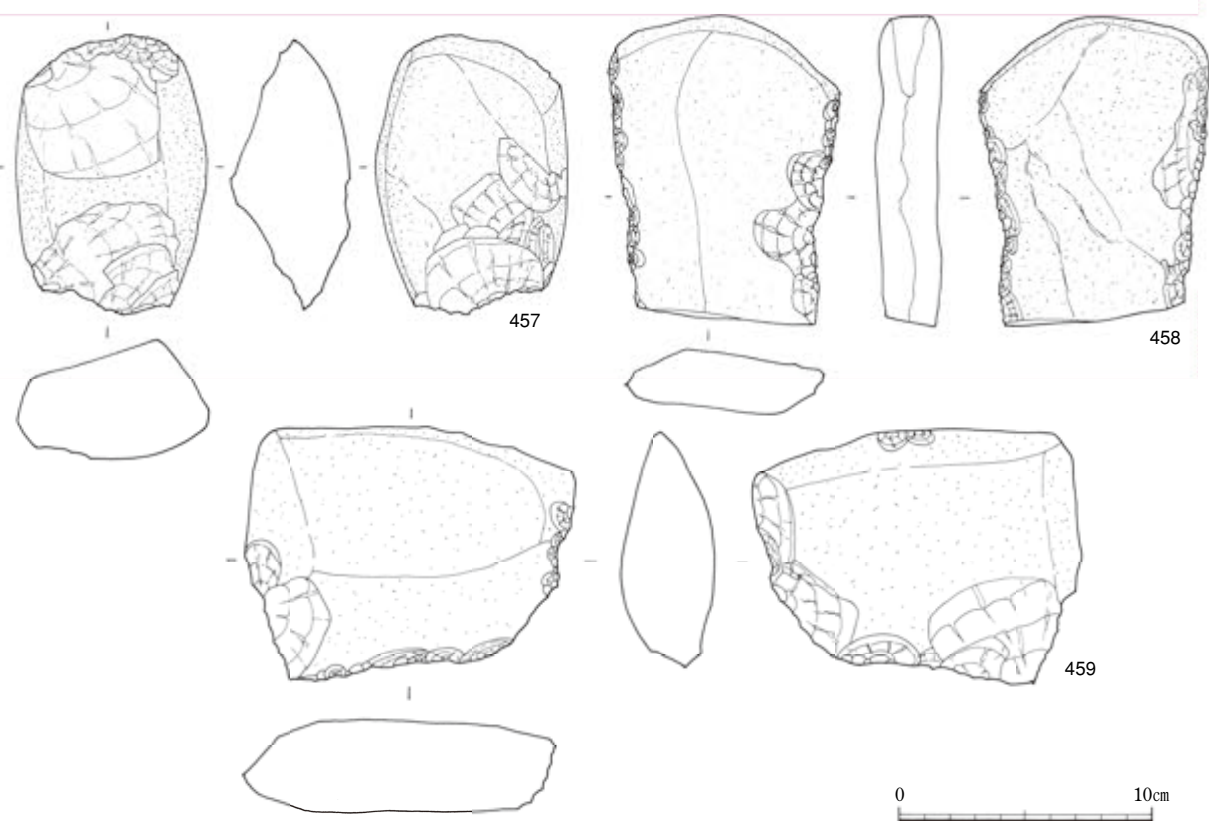
素材とする。453～457は縦長で下辺に刃部を有する。458は両側面に刃部を有する。459は横長で片側面と下辺に刃部を有する。

磨石（第54図～第57図）

磨石としたものには28点が見られるが、磨石だけの機能をもつもの（460～476）。磨石と敲石の機能を持つもの（477～479）。磨石と凹石の機能をもつ



第52図 縄文早期石器（3）



第53図 縄文早期石器（4）

縄文時代早期石器観察表 1

挿図 番号	番号	器 種	出土区	層 位	石 材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
第 50 図	426	剥片	H-7	Ⅳ	黒曜石(桑ノ木津留)	1.20	1.30	0.20	0.31	
	427	打製石鏃	J-13	Ⅷ	頁岩	1.70	1.40	0.40	0.50	
	428	打製石鏃	H-7	Ⅳ	黒曜石(三船)	1.75	1.50	0.35	0.62	
	429	打製石鏃	I-12	Ⅷ	黒曜石(上牛鼻)	(1.40)	(1.10)	0.30	0.50	
	430	打製石鏃	—	—	頁岩	1.20	1.50	0.35	0.40	
	431	打製石鏃	K-5	Ⅷ	珪質頁岩	2.10	1.70	0.40	1.10	
	432	打製石鏃	J-11	Ⅳ	黒曜石(上牛鼻)	(1.90)	1.70	0.40	1.10	
	433	打製石鏃	I-5	Ⅳ	玉髄	2.10	1.80	0.40	0.76	
	434	打製石鏃	H-6	Ⅳ	頁岩	2.20	1.50	0.40	0.66	
	435	打製石鏃	H-6	Ⅳ	黒曜石(針尾)	2.35	1.60	0.35	0.89	
	436	打製石鏃	H-6	Ⅳ	黒曜石(針尾)	1.90	1.60	0.30	0.63	
	437	打製石鏃	H-7	Ⅳ	黒曜石(針尾)	2.10	1.60	0.45	0.82	
	438	打製石鏃	H-7	Ⅳ	黒曜石(針尾)	2.00	1.50	0.50	0.86	
	439	打製石鏃	H-6	Ⅳ	黒曜石(針尾)	1.60	1.70	0.30	0.52	
	440	打製石鏃	H-6	Ⅳ	チャート	2.30	1.60	0.50	0.96	
第 51 図	441	打製石鏃	J-5	Ⅳ	黒曜石(針尾)	2.30	1.10	0.30	0.60	
	442	打製石鏃	H-6	Ⅳ	頁岩	2.80	1.10	0.30	1.17	
	443	打製石鏃	H-7	Ⅳ	玉髄	1.65	1.10	0.25	0.39	
	444	打製石斧	J-8	Ⅳ	ホルンフェルス	15.15	10.95	4.75	667.00	
	445	スクレイパー	J-8	Ⅳ	頁岩	6.90	4.50	1.30	40.03	
	446	スクレイパー	H-7	Ⅳ	頁岩	9.60	5.40	2.60	151.00	
第 52 図	447	スクレイパー	H-6	Ⅳ	頁岩	10.70	7.00	1.70	166.50	
	448	スクレイパー	H-6	Ⅳ	頁岩	8.40	6.90	2.65	227.50	
	449	スクレイパー	H-6	Ⅳ	頁岩	7.20	6.00	3.20	184.50	
	450	スクレイパー	J-8	Ⅳ	ホルンフェルス	(10.65)	(5.60)	2.00	117.10	
第 53 図	451	スクレイパー	J-10	Ⅳ	頁岩	11.15	9.30	2.30	284.00	
	452	スクレイパー	H-13	Ⅷ	頁岩	12.70	6.70	4.00	375.00	
	453	礫器	H-4	Ⅳ	頁岩	10.80	8.40	5.40	555.40	
	454	礫器	H-4	Ⅳ	頁岩	11.80	8.00	3.30	429.50	
	455	礫器	H-15	Ⅳ	頁岩	12.80	7.90	4.10	640.40	
	456	礫器	H-7	Ⅳ	頁岩	11.20	7.40	3.30	439.00	
第 53 図	457	礫器	H-13	Ⅳ	頁岩	11.00	7.45	4.70	431.50	
	458	礫器	H-6	Ⅳ	砂岩	12.00	9.00	2.40	390.00	
	459	礫器	H-5	Ⅳ	安山岩	10.00	12.70	3.70	650.00	

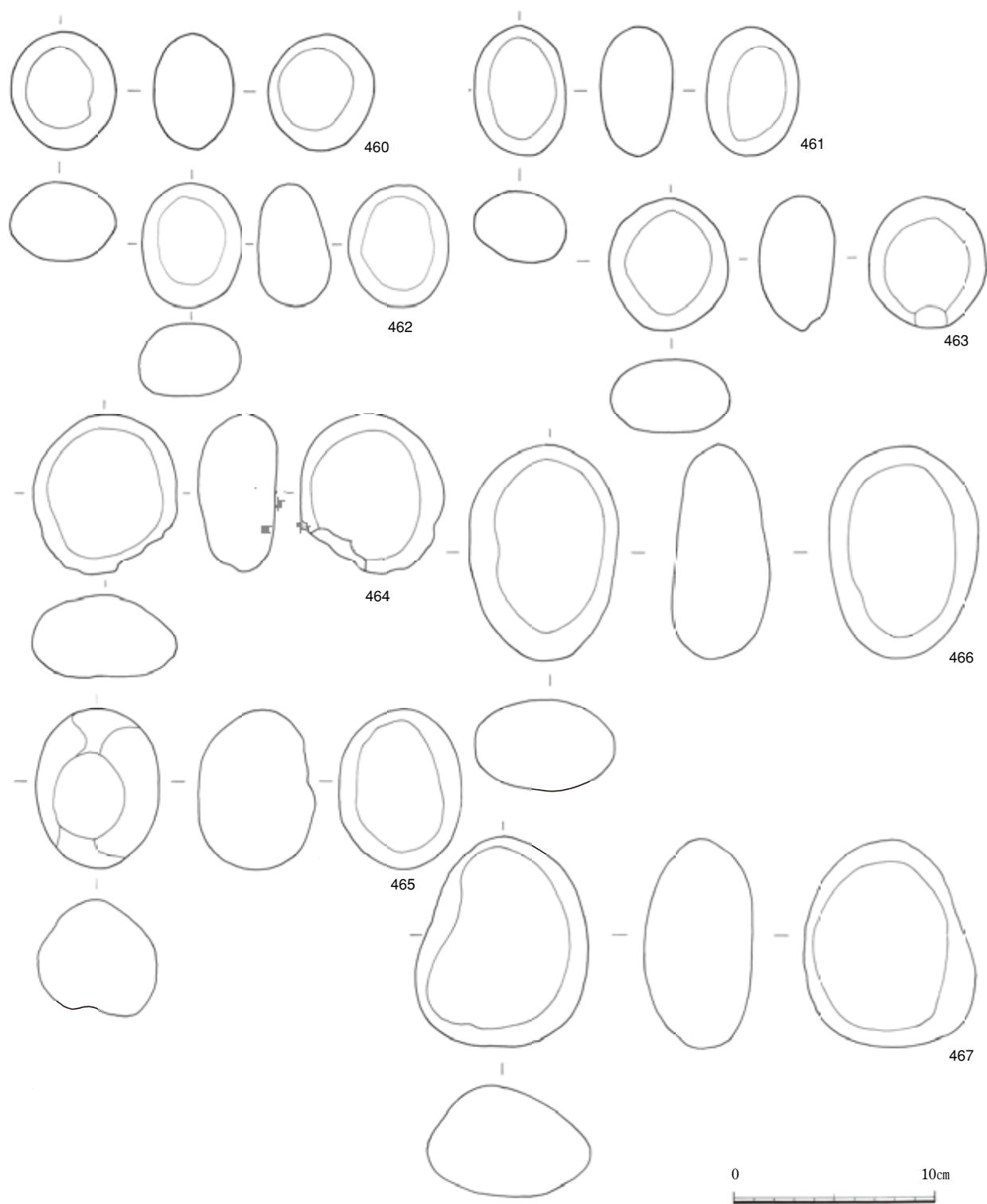
もの（480～487）がある。素材は砂岩及び安山岩である。477は上辺に敲打痕が見られる。

478・479は上辺から側面の一部にかけて敲打痕が見られる。480～482は片面に凹みがあり，483～486は両面に凹みがある。また，487は片面に凹みがあ

り，側面には敲打痕が見られるものである。

砥石（第57図）

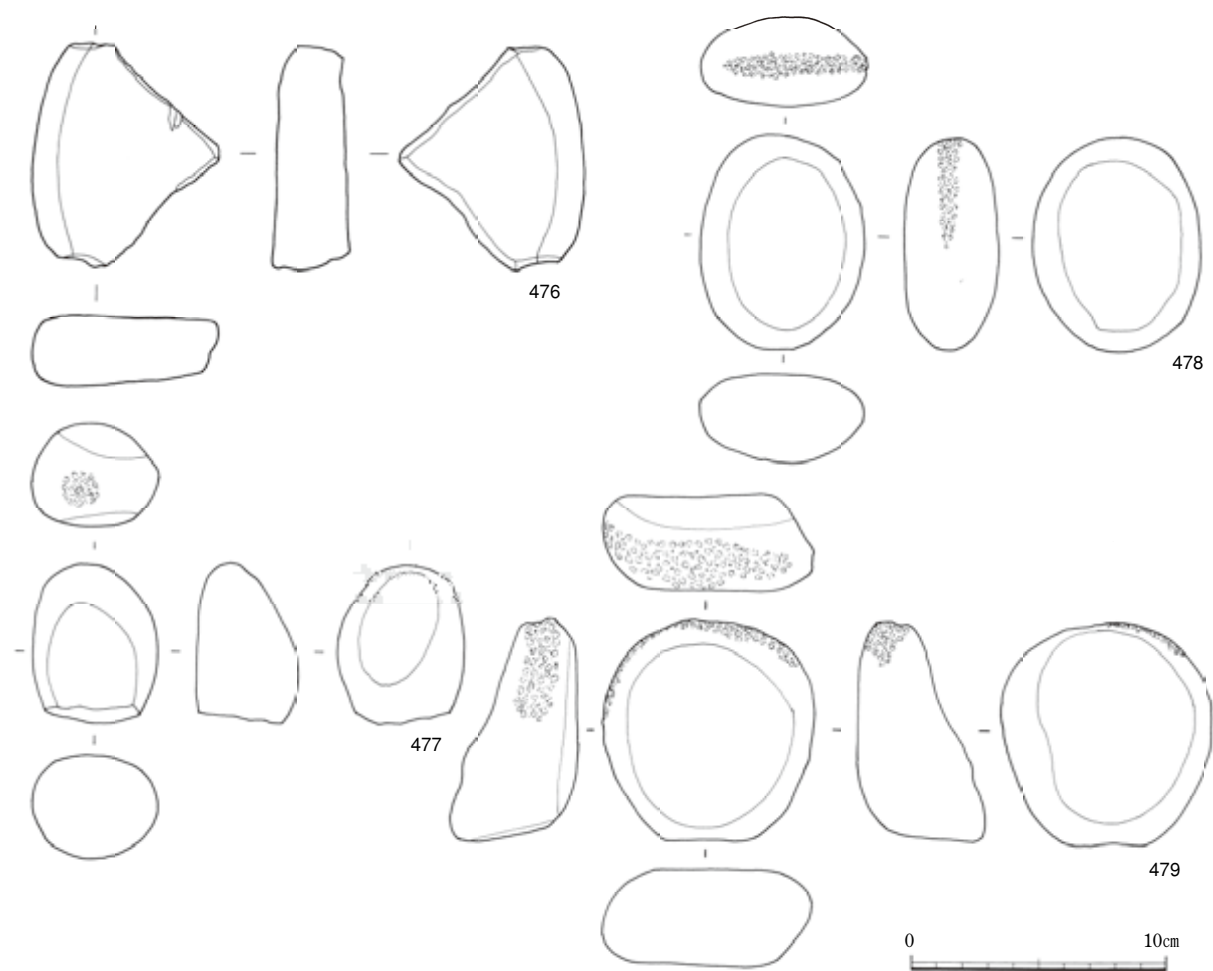
砥石としたものは1点だけである。488は砂岩を素材とした扁平な礫で，表面に著しい研磨の痕跡が認められる。



第54図 縄文早期石器（5）



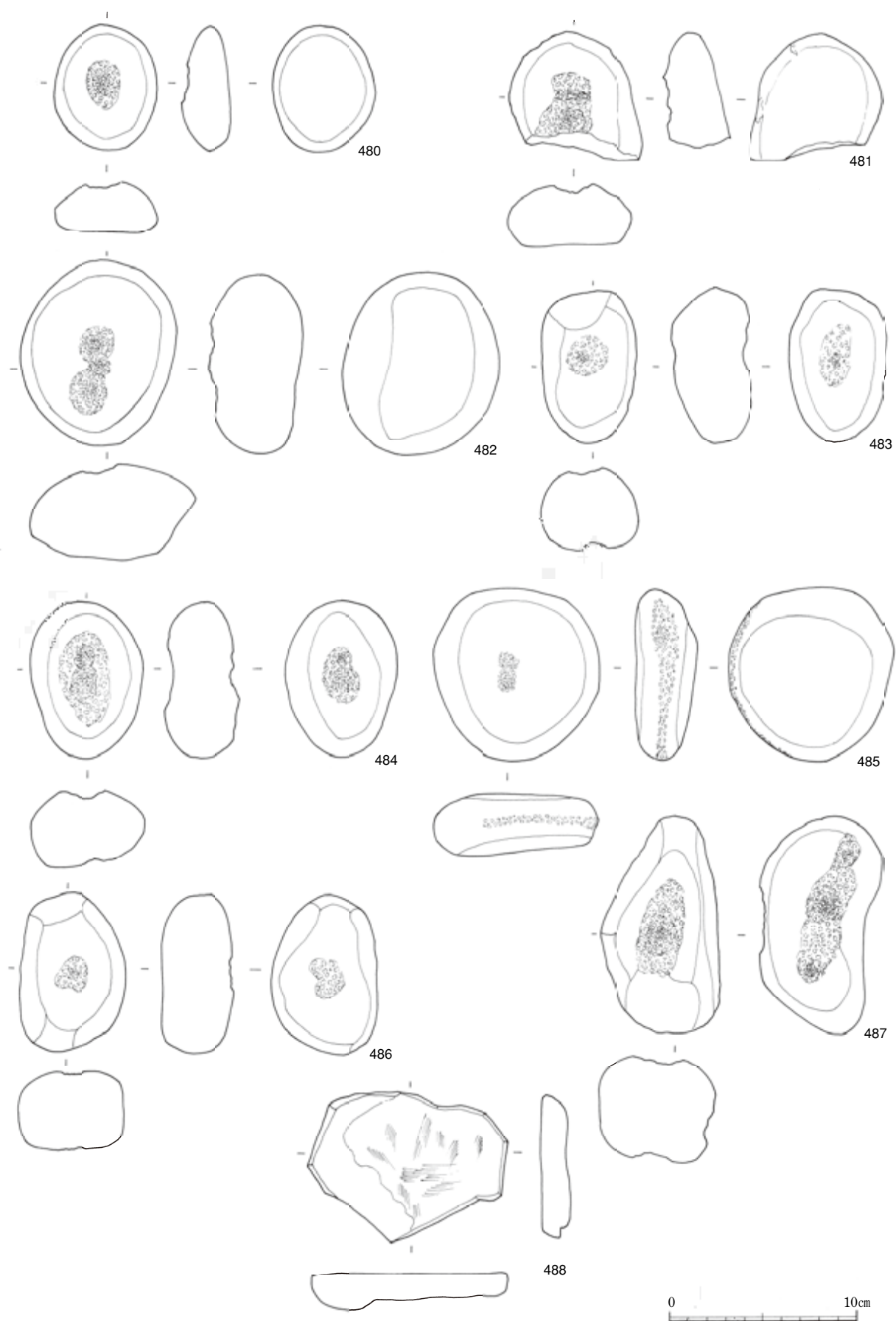
第55図 縄文早期石器（6）



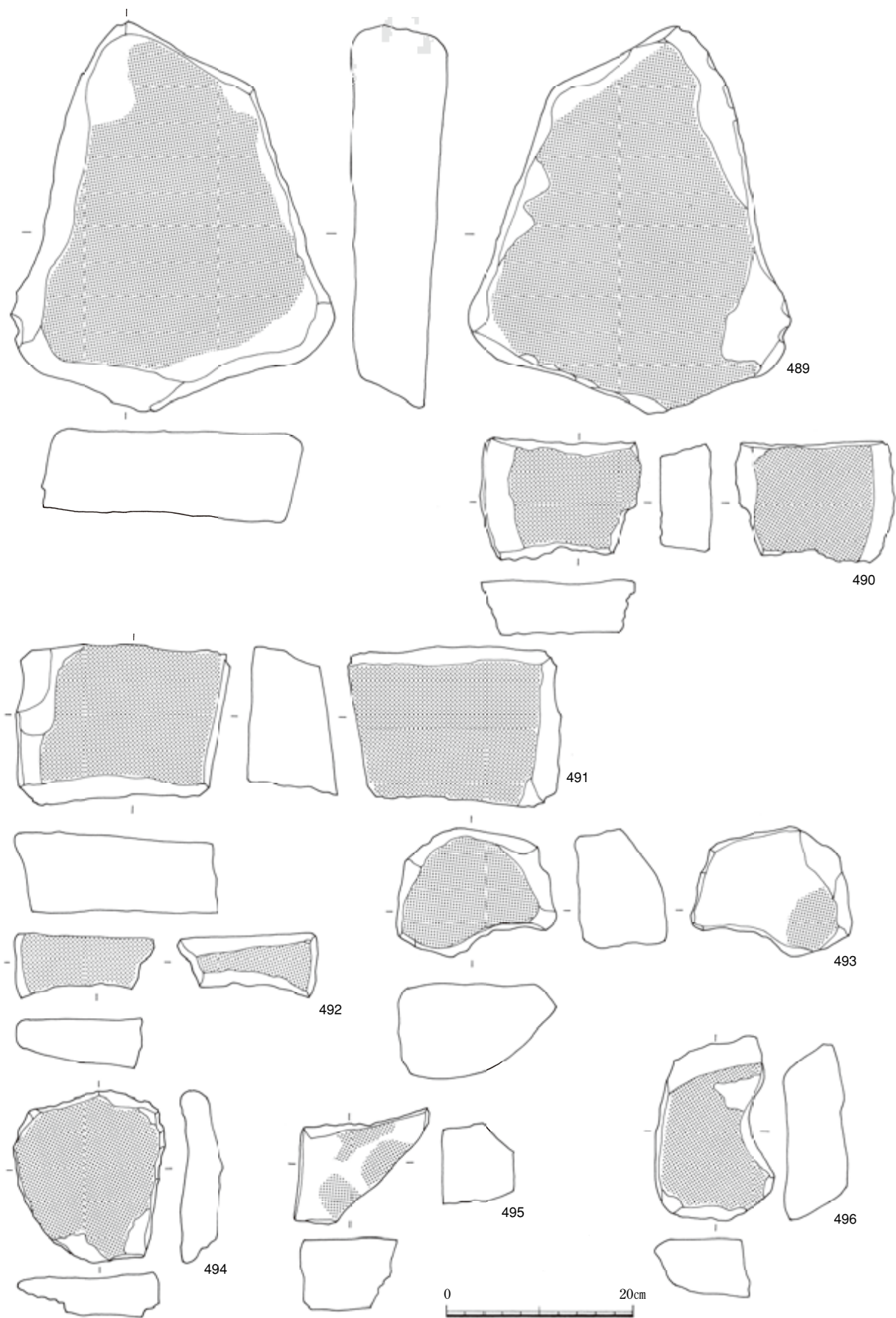
第56図 縄文早期石器（7）

縄文時代早期石器観察表 2

挿図 番号	番号	器 種	出土区	層 位	石 材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
第 54 図	460	磨石	H-6	Ⅳ	安山岩	5.85	5.20	4.00	149.00	
	461	磨石	H-6	Ⅳ	砂岩	6.45	4.50	3.50	128.40	
	462	磨石	I-5	Ⅶ	砂岩	6.10	5.00	3.60	157.50	
	463	磨石	H-7	Ⅳ	砂岩	6.55	5.80	3.60	185.00	
	464	磨石	H-6	Ⅳ	砂岩	7.90	7.15	3.95	295.50	
	465	磨石	H-11	Ⅳ	砂岩	7.90	6.00	5.90	340.00	
	466	磨石	H-7	Ⅳ	砂岩	10.60	7.30	4.80	496.00	
第 55 図	467	磨石	J-8	Ⅳ	砂岩	10.04	8.50	5.35	568.50	
	468	磨石	H-5	Ⅳ	安山岩	11.30	10.45	2.90	572.50	
	469	磨石	—	V	砂岩	13.00	8.70	4.80	739.50	
	470	磨石	H-13	Ⅳ	保留	12.01	8.05	6.40	868.00	
	471	磨石	H-5	Ⅳ	砂岩	4.75	6.55	3.50	144.50	
	472	磨石	H-14	Ⅳ	砂岩	6.40	8.15	2.50	132.50	
	473	磨石	H-6	Ⅳ	安山岩	3.00	8.50	5.50	167.00	
第 56 図	474	磨石	H-6	Ⅳ	砂岩	4.70	7.60	3.70	150.00	
	475	磨石	H-7	Ⅳ	安山岩	3.50	8.80	4.60	184.00	
	476	磨石	H-6	Ⅳ	砂岩	8.80	7.30	2.70	233.00	
	477	磨石	H-6	Ⅳ	砂岩	6.30	4.95	4.20	166.50	
	478	磨石	G-13	Ⅳ	砂岩	8.40	6.55	3.60	272.00	
	479	磨石	J-4	Ⅳ	砂岩	8.70	8.30	4.55	477.00	



第57図 縄文早期石器（8）



第58図 縄文早期石器（9）

石皿（第58図・第59図）

石皿は12点出土している。素材は安山岩・砂岩・花崗岩である。磨耗した作業面が両面にあるもの

（489～493，499）と片面のもの（494～498，500）

がある。499・500は作業面の一部に敲打された痕跡が認められる。



第59図 縄文早期石器（10）

縄文時代早期石器観察表3

挿図 番号	番号	器 種	出土区	層 位	石 材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
第 57 図	480	磨石	J-8	Ⅳ	砂岩	6.65	5.45	2.65	127.00	
	481	磨石	H-6	Ⅳ	砂岩	6.25	6.70	3.50	205.00	
	482	磨石	H-6	Ⅳ	砂岩	9.80	8.10	5.10	505.50	
	483	磨石	—	Ⅳ	砂岩	8.20	5.50	4.10	239.50	
	484	磨石	H-6	Ⅳ	砂岩	8.30	6.00	3.30	262.50	
	485	磨石	H-6	Ⅳ	砂岩	9.20	8.80	3.20	363.50	
	486	磨石	G-13	Ⅳ	砂岩	8.40	5.55	4.15	335.00	
	487	磨石	H-5	Ⅳ	安山岩	11.60	6.20	6.30	582.00	
第 58 図	488	砥石	H-13	Ⅳ	砂岩	8.00	10.60	2.00	176.00	
	489	石皿	H-5	Ⅳ	砂岩	41.00	34.40	9.20	196.00	
	490	石皿	H-6	Ⅳ	花崗岩	12.80	16.80	5.60	1940.00	
	491	石皿	H-6	V	安山岩	16.80	21.80	9.80	6120.00	
	492	石皿	H-5	V	砂岩	6.80	14.90	5.25	575.00	
	493	石皿	—	—	花崗岩	13.70	17.10	10.00	2900.00	
	494	石皿	H-6	Ⅳ	花崗岩	18.20	16.00	4.60	1540.00	
	495	石皿	—	—	安山岩	10.70	13.20	9.90	1325.50	
第 59 図	496	石皿	—	—	砂岩	19.00	12.80	6.50	2215.50	
	497	石皿	H-7	Ⅳ	安山岩	32.70	25.20	5.70	5400.00	
	498	石皿	—	—	安山岩	36.80	25.70	4.90	4900.00	
	499	石皿	H-7	Ⅳ	砂岩	18.80	21.00	8.00	4550.00	
	500	石皿	H-7	Ⅳ	砂岩	19.10	18.20	8.85	4600.00	

2 縄文時代後期の調査成果

縄文時代後期では土器が1点出土したのみで、遺構は検出されなかった。501はⅫ類土器としたものである。口縁端部を欠損するが、断面が三角形に肥厚するものである。



第60図 Ⅻ類土器

横位の凹線文と凹線文の間にヘラ状施文具による刺突文が施されている。また、その下位にヘラによる刻目が施されている。内面は貝殻条痕が見られる。

3 縄文時代晩期の調査成果

(1) 遺構 (第61図)

晩期の遺構は上部の層が削平されていることもあって少ない。Ⅰ-14区、Ⅱ-13区において、農業開発総合センター遺跡群においてよく見られる柱穴列(柱穴が3～6個一列に並んでいる)が3基検出されたのみである。

1号柱穴列 (第61図)

Ⅰ-14区において検出されたもので、4個の柱穴からなる。主軸はほぼ南北方向でN-18度-Wである。全長4.4mで、各柱穴間はほぼ1.3mである。柱穴の径は柱穴1は12cm、柱穴2～4は16cmと小さめである。深さは0.2～0.4mで不揃いである。埋土は黒褐色土で堅く中世の掘立柱建物跡の柱穴の埋土とは色調共合わせて判別可能である。

2号柱穴列 (第61図)

Ⅰ-14区において検出されたもので、3個の柱穴からなる。主軸はほぼ南北方向でN-28度-Wである。全長4.3mで、各柱穴間はほぼ2mである。柱穴の径は柱穴は20cm、深さは30～36cmである。埋土は柱穴列1号と同様である。

3号柱穴列 (第61図)

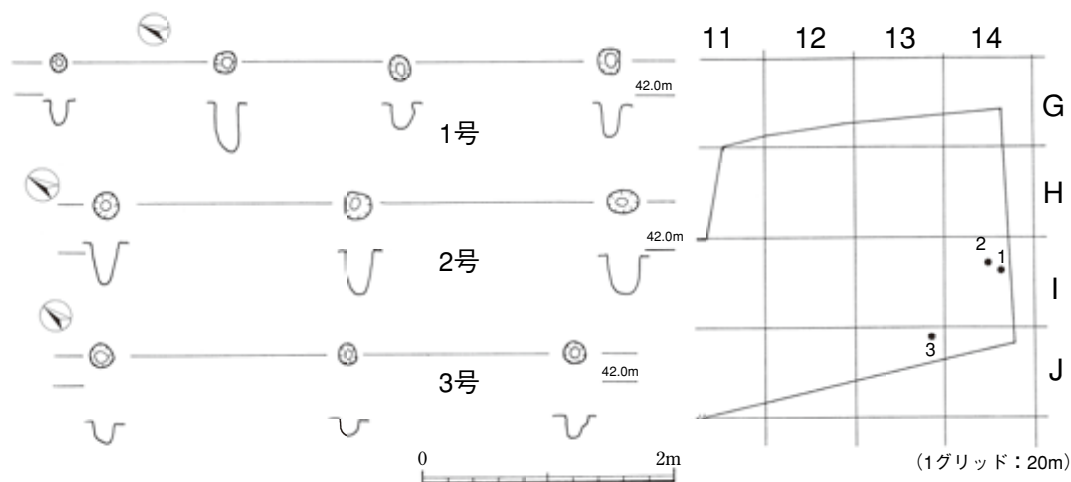
Ⅱ-13区において検出されたもので、3個の柱穴からなる。主軸はほぼ南北方向でN-32度-Wである。全長3.9mで、各柱穴間はほぼ1.9mである。柱穴の径は柱穴は18cm、深さは14～18cmと浅いが上層が削平されていることに起因するものと思われる。埋土は柱穴列1号・2号と同様である。

(2) 遺物 (第62図～64図)

遺物は土器と石器が出土しているが、出土量は多くない。

土器 (第62図)

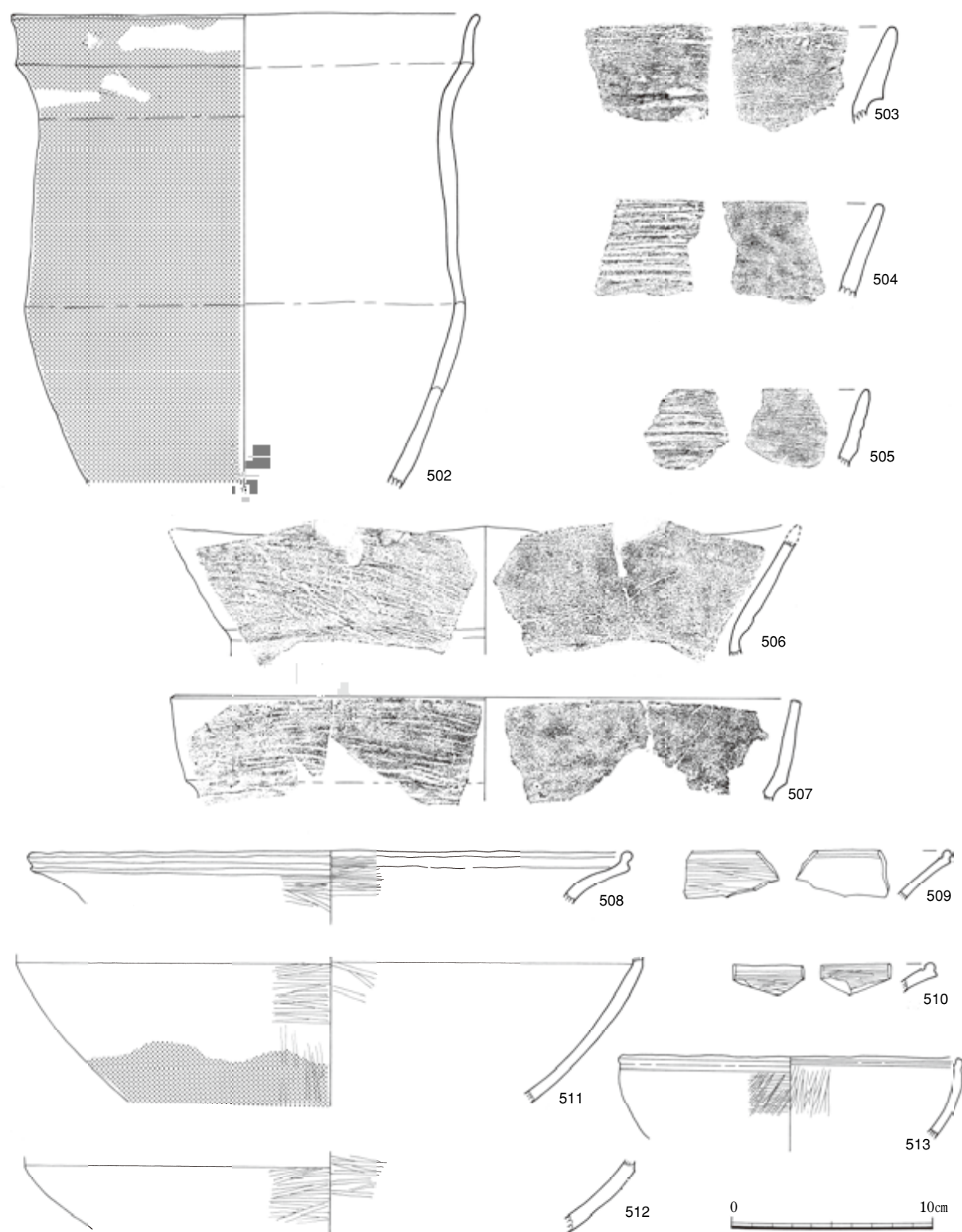
土器は深鉢形土器と浅鉢形土器合わせて12点を図化した。502～507は深鉢形土器、508～513は浅鉢形土器である。502は口縁部径23.2cmを測るものである。胴部の屈曲部は弱く、わずかに内傾して頸部へ到るもので、口縁部はやや外反し、端部は丸くおさめるものである。503～507は外反する口縁部である。503はやや肥厚するもの、506は口縁部が波状になるもの、507は口縁部が直行気味である。



第61図 縄文時代晩期柱穴列

508～513は精製浅鉢形土器である。508は口縁部径30cmを測るもので、509・510と同様に頸部の屈曲部から大きく外反する口縁部で、端部は上方へ短く立ち上げるものである。口縁部直下に沈線文を巡らし内面にも沈線文を廻らすものもある。511・

512は胴部の屈曲部から底部近くの部位で、わずかに丸みを帯びる。513は底部から内湾しながら口縁部へ到るもので、やや深目の浅鉢形土器である。口縁端部はわずかに外反するものである。



第62図 Ⅷ類土器

石器（第63図・第64図）

石器は石鏃・石斧・礫器・磨石などが出土しているが、それぞれ出土量は多くない。

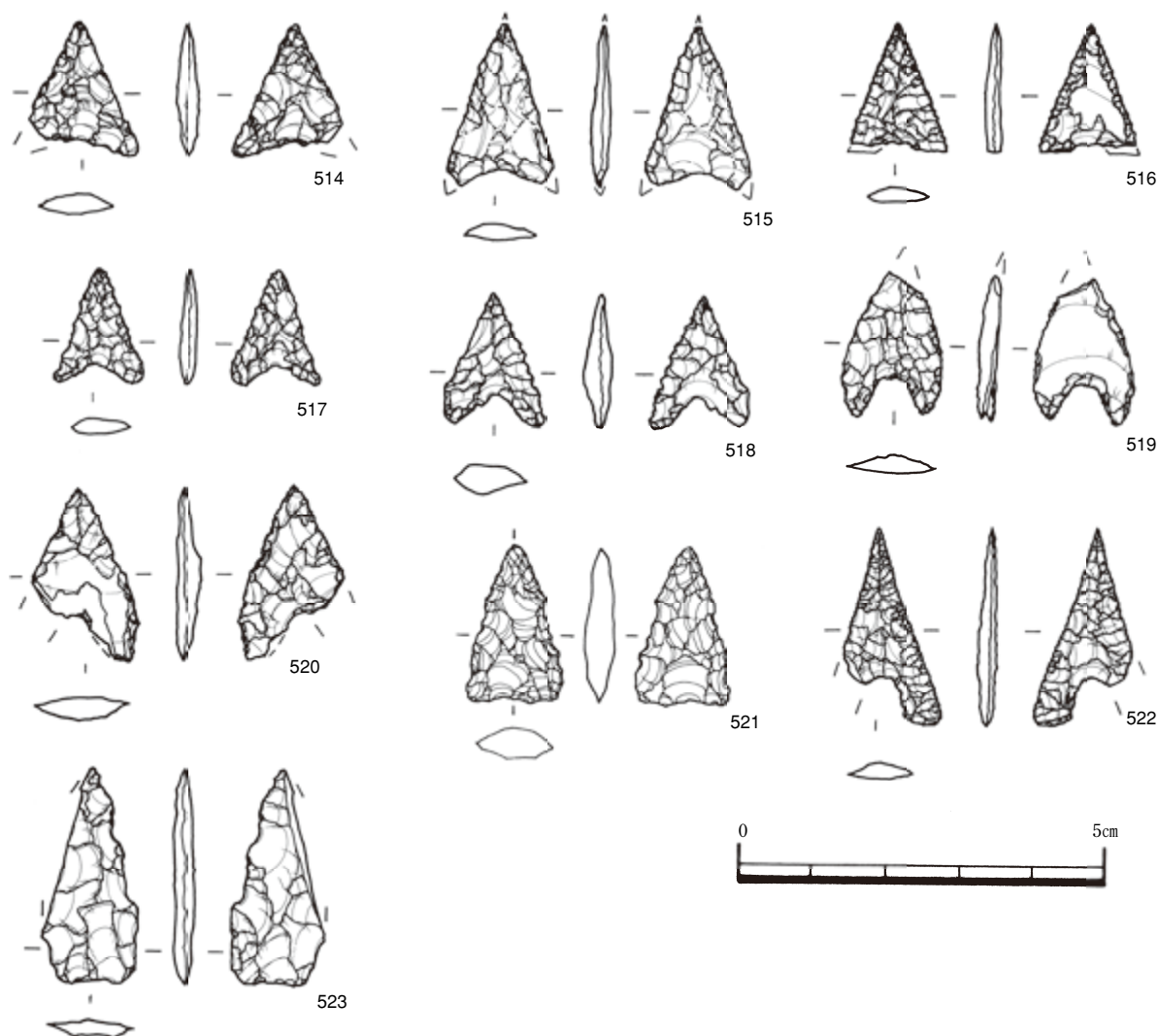
石鏃（第63図）

石鏃は10点出土している。石材は黒曜石・頁岩・チャート・玉髄である。石鏃の分類については、本報告書での統一した分類図（21頁・第13図）に従う

ことにする。514はA-a-bタイプ、515・516はA-a-bタイプ、517・518はA-a-cタイプ、519・520はA-a-dタイプ、521はA-b-aタイプ、522はA-b-dタイプ、523はA-c-aタイプに分類される。また、519は剥片石鏃と思われる。

XII・XIII類土器観察表

挿 図 番 号	番 号	出 土 区	層 位	部 位	色 調		胎 土				焼 成	外 面	内 面	類	備 考
					内	外	石 英	長 石	角 閃 石	そ 他					
第 62 図	501	H-6	Ⅲ	胴部	明赤褐	明赤褐	○	○			良	横線文・刻目・条痕	貝殻条痕文	XII	
	502	K-5	Ⅳ(横転)	口縁〜胴部	黄褐	明赤褐	○	○			良	ナデ	ナデ	XIII	内外面煤付着
	503	J-10	Ⅲ	口縁部	灰黄	浅黄	○	○			良	ナデ	ナデ	XIII	外面煤付着
	504	J-11	Ⅲ	口縁部	黒褐	暗褐	○	○			良	貝殻条痕文	ミガキ	XIII	
	505	I-16	Ⅲ	口縁部	黒褐	黒褐	○	○			良	貝殻条痕文	ミガキ	XIII	
	506	I-16	Ⅲ	口縁部	橙	明赤褐	○	○			良	条痕後ナデ	ナデ	XIII	
	507	H-6	Ⅲ	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			良	条痕後ナデ	ナデ	XIII	
	508	I-16	Ⅲ	口縁部	黒	暗褐	○	○			良	沈線・ミガキ	ミガキ	XIII	
	509	H-16	Ⅲ	口縁部	黒褐	黒褐	○	○			良	沈線・ミガキ	沈線・ミガキ	XIII	
	510	H-16	Ⅲ	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○			良	沈線・ミガキ	沈線・ミガキ	XIII	
	511	H-7	Ⅲ	胴部	黄灰	にぶい黄	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	外面煤付着
	512	I-16	Ⅲ	胴部	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○	○			良	ミガキ	ミガキ	XIII	
	513	I-16	Ⅲ	口縁部	褐灰	褐灰	○	○			良	沈線・ミガキ	沈線・ミガキ	XIII	



第63図 縄文晩期石器（1）

石斧・磨石（第64図）

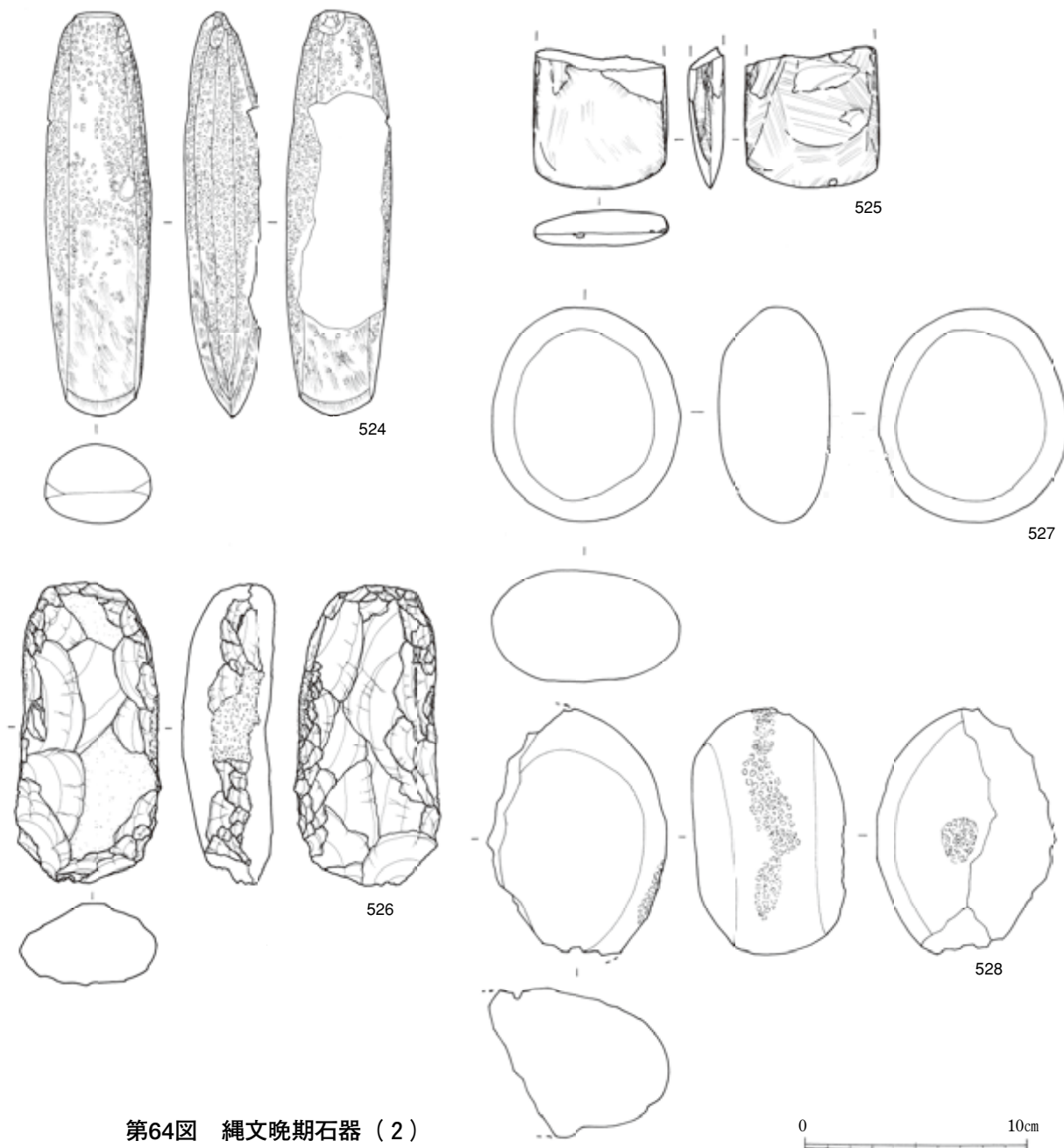
石斧は3点が出土している。524は基部・中間部・刃部の3つに割れていたものが接合したものである。全面を丁寧な敲打整形をした後で刃部を中心に研磨が施される。やや細身の石斧である。525は

磨製石斧である。全面に丁寧な研磨が施されている。

526は打製石斧である。粗い剥離が施される。527は磨石、528は磨石と凹石、敲石の機能を備えたものである。

縄文時代晩期石器観察表

挿図番号	番号	器種	出土区	層位	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	備考
第63図	514	打製石鏃	H-6	Ⅳ	頁岩	1.80	1.50	0.30	0.50	
	515	打製石鏃	J-11	Ⅲ	頁岩	2.20	1.40	0.30	0.70	
	516	打製石鏃	J-8	Ⅲ	チャート	1.80	1.30	0.30	0.50	
	517	打製石鏃	I-4	Ⅲ	玉髄	1.60	1.20	0.30	0.20	
	518	打製石鏃	H-16	Ⅲ	黒曜石(針尾)	1.80	1.40	0.40	0.50	
	519	打製石鏃	J-10	Ⅲ	安山岩	2.00	1.40	0.30	0.60	
	520	打製石鏃	J-11	Ⅲ	黒曜石(針尾)	2.40	1.50	0.40	0.70	
	521	打製石鏃	H-6	Ⅲ	チャート	2.10	1.30	0.50	0.87	
	522	打製石鏃	J-11	Ⅲ	チャート	2.70	1.40	0.30	0.60	
	523	打製石鏃	J-11	Ⅲ	頁岩	3.00	1.30	0.30	1.10	
第64図	524	磨製石斧	J-10	Ⅲ	安山岩	18.20	4.80	(3.50)	414.00	
	525	磨製石斧	H-6	表	ホルンフェルス	(6.35)	(6.05)	(1.65)	94.40	
	526	打製石斧	H-6	表	安山岩	13.35	6.65	4.15	500.00	
	527	磨石	K-5	Ⅲ	安山岩	9.70	8.45	4.90	582.00	
	528	磨石	G-16	Ⅲ	安山岩	10.85	8.00	6.70	451.00	



第64図 縄文晩期石器（2）

第6節 中世・近世の調査成果

1 遺構

遺構は、掘立柱建物跡1棟が検出されているが、隣接の市堀遺跡の掘立柱建物跡群と一連のものとして考えられるものである。市堀遺跡では7棟の掘立柱建物跡が検出されている。2006年刊行の報告書「農業開発総合センター遺跡群Ⅱ，馬塚松遺跡・市堀遺跡・大門口遺跡」の市堀遺跡で3号掘立柱建物跡として報告されているものである。

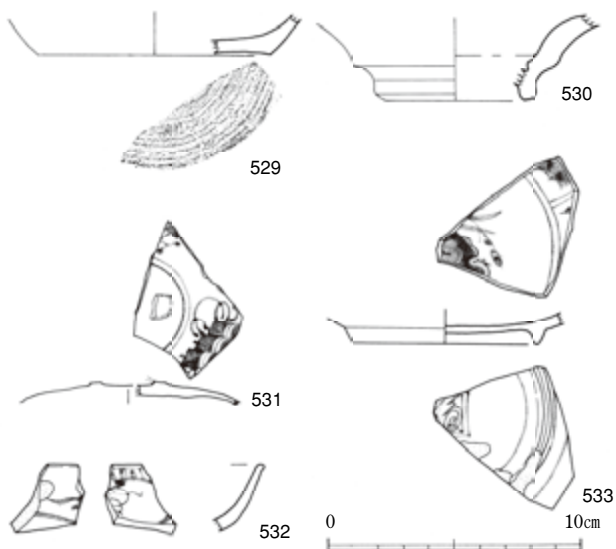
掘立柱建物跡は、2間×3間で主軸がほぼ東西方向である。東側・北側・西側に庇と思われる柱穴が見られるが、一部柱穴の無い部分がある。

2 遺物（第65図）

遺物は、土師器・青磁・磁器（染付）が出土しているが、5点と少ないものである。529は土師器の皿と思われる。底部は糸切り離しによるものである。

530は青磁碗である。531～533は染付である。

531は蓋で上面にはつまみがみられる。533は碗の底部で底面には「うず福」が描かれる。532は碗の口縁部である。



第65図 中・近世の遺物

第7節 小結

頭無迫田遺跡では旧石器時代から中世までの遺構・遺物が出土している。

旧石器時代では、ブロックが1箇所確認されている。また、落とし穴が1基検出されている。ブロック内ではチャートの礫の集積遺構も検出されている。また、接合資料も11例が確認されており、石器製作に係わるブロックと考えられる。石器はナイフ形石器・三稜尖頭器・台形石器・スクレイパー等が出土しているが、ナイフ形石器が小型化する新しい段階のものと思われる。

縄文時代早期では、集石遺構が10基検出されているが、どの型式の土器に伴うかは不明である。ただし質量共に他の型式を上回るⅤ類（石坂式土器）に伴うものと考えたい。

土器型式でみるとⅠ類土器からⅪ類土器まで11類に細分される。Ⅰ類は前平式土器、Ⅱ類は志風頭式土器、Ⅲ類は加栗山式土器、Ⅳ類は吉田式土器、Ⅴ類は石坂式土器、Ⅵ類は下剥峯式土器、Ⅶ類は辻タ

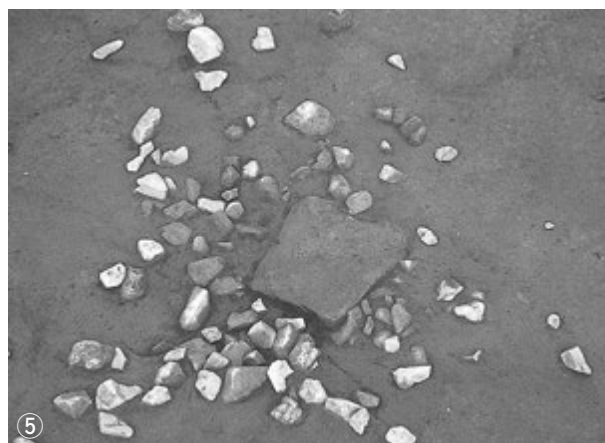
イブ、Ⅷ類は桑ノ丸式土器に比定される。Ⅸ類は円筒系条痕文土器とされていたものであるが、木崎康弘による中原Ⅲ式・Ⅳ式土器に類似する。また、Ⅹ類は押型文土器、Ⅺ類は塞ノ神式土器に比定されるものである。志風頭式土器には円筒土器の他に角筒土器及びレモン形土器も含まれる。加栗山式土器・吉田式土器にも角筒土器が含まれる。Ⅴ類の石坂式土器は多量に出土しており、口縁部が外反するもの、直行気味のもの、こぶ状突起を有するもの等変化に富んでおり、細分される可能性を含んでいる。Ⅶ～Ⅺ類は数点ずつの出土である。Ⅺ類の中には壺形土器も見られる。

縄文時代後期では、Ⅻ類が市来式土器に比定されるが1点のみの出土である。

縄文時代晩期では、農業開発総合センター遺跡群でよく見られる柱穴列が3基検出されている。この遺構も用途・性格が不明なものであるが、なんらかの住居と考えたい。土器についてみるとⅫ類とした粗製の深鉢形土器と精製黒色研磨の浅鉢形土器が見られるが、出土量は少ないものである。入佐式土器に比定出来よう。

註1 熊本県文化財調査報告書第158集「蒲生・上の原遺跡」熊本県教育委員会1996年

版 图 真 写



①遺跡空中写真 ②遺跡遠景写真 ③土層断面 ④4号集石 検出状況
⑤2号集石検出状況 ⑥2号集石 検出状況



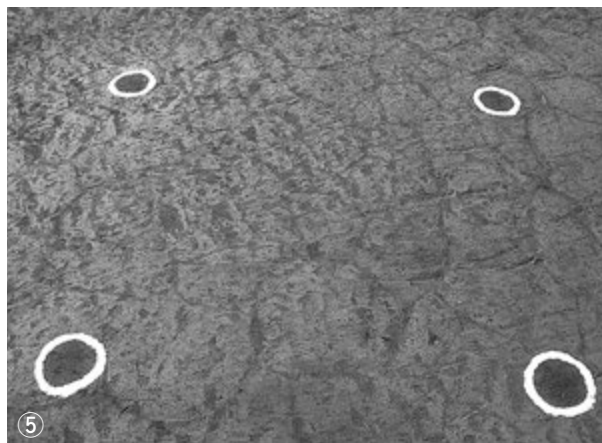
埋設土器 1 号



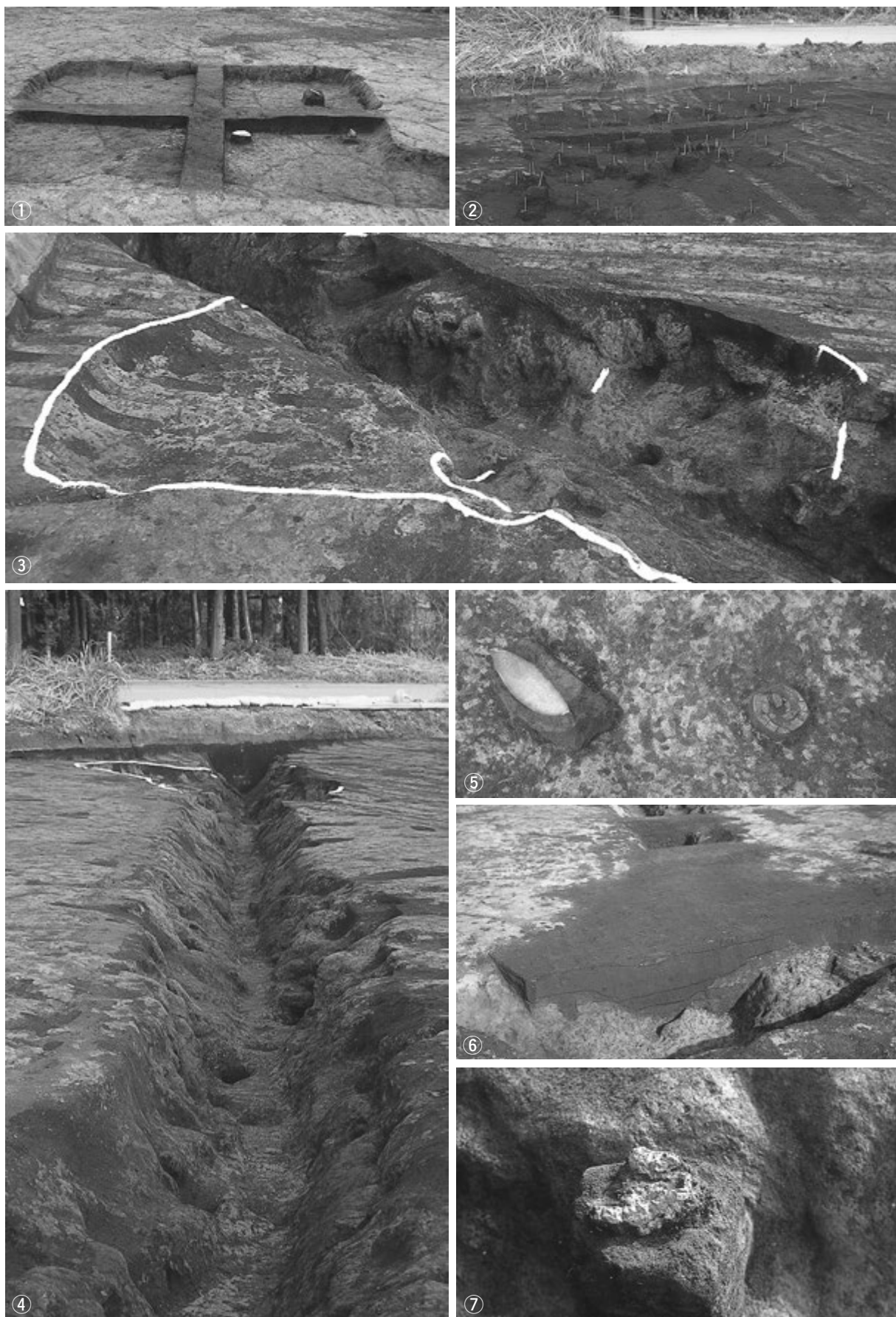
埋設土器 2 号



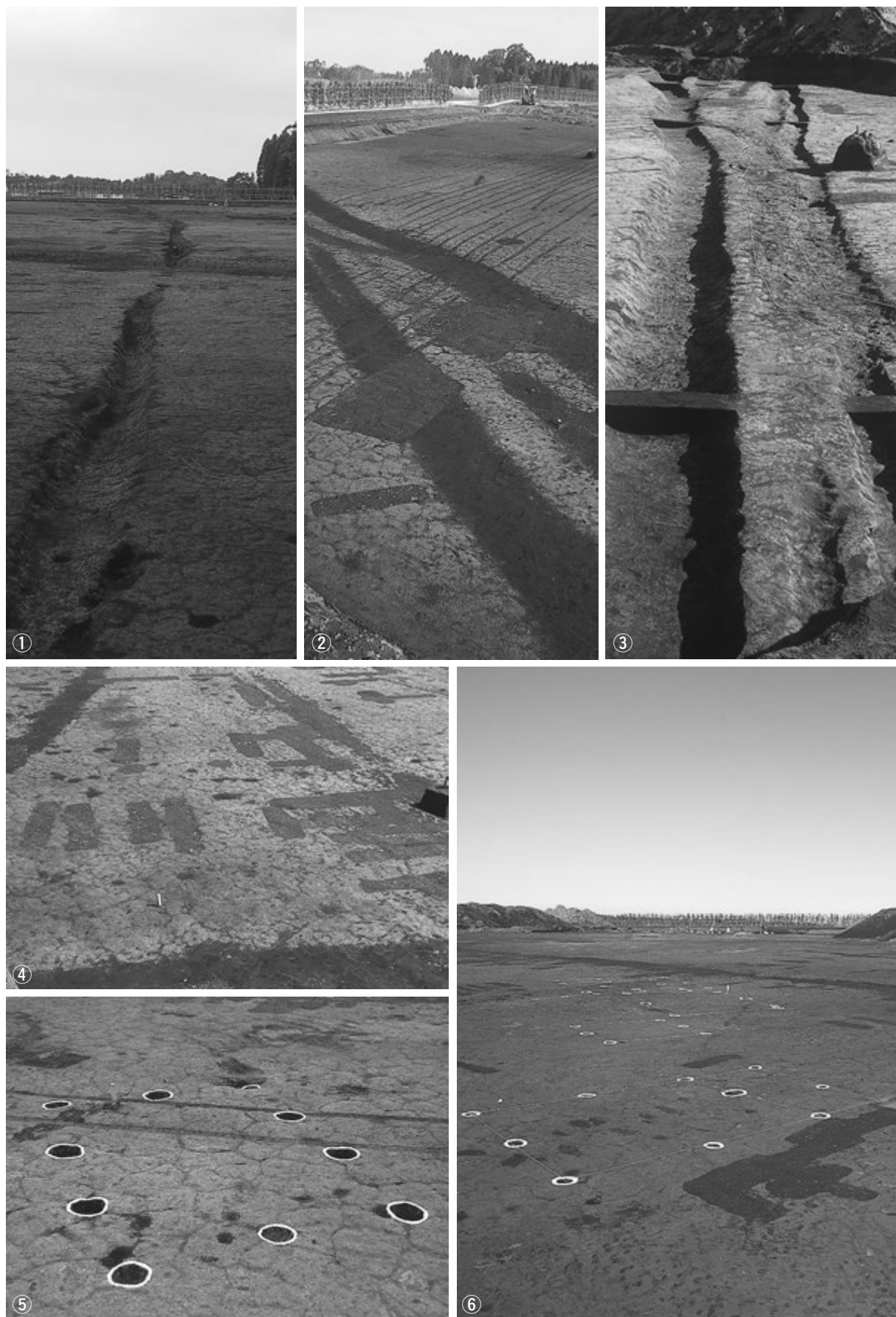
縄文時代晩期 埋設土器



① 1号土坑半裁遺物出土状況 ② 1号土坑サンプリング風景 ③ 2号土坑完掘 ④ 6号土坑完掘
⑤ 掘立柱建物跡検出状況 ⑥ 掘立柱建物跡完掘 ⑦ 柱穴列完掘 (半裁)

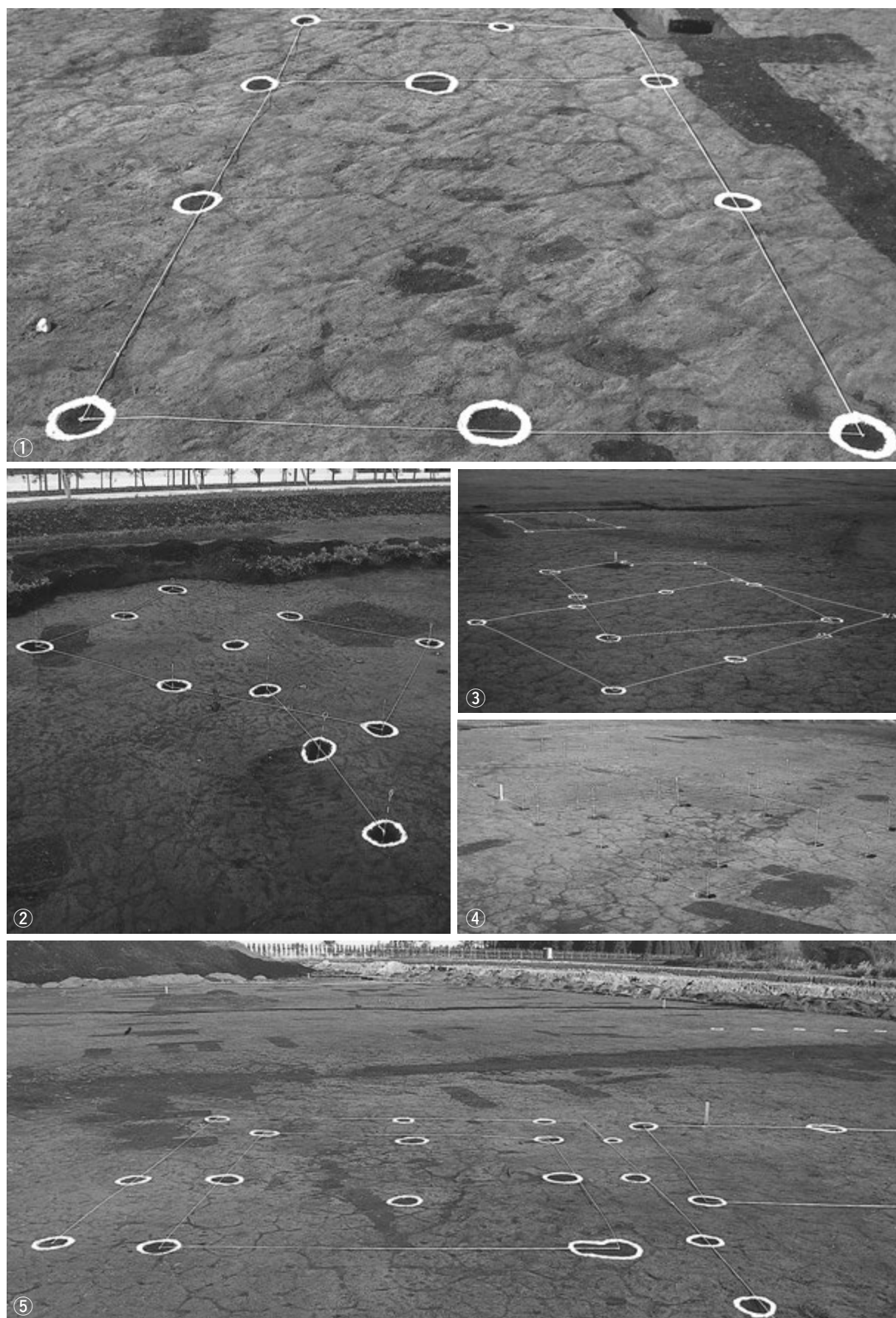


① 竪穴状遺構土層断面 ② 溝内遺物出土状況 ③ 竪穴状遺構 ④ 溝3完掘
⑤ 溝6遺物出土状況 ⑥ 溝3, 4合流部断面 ⑦ 鉄滓

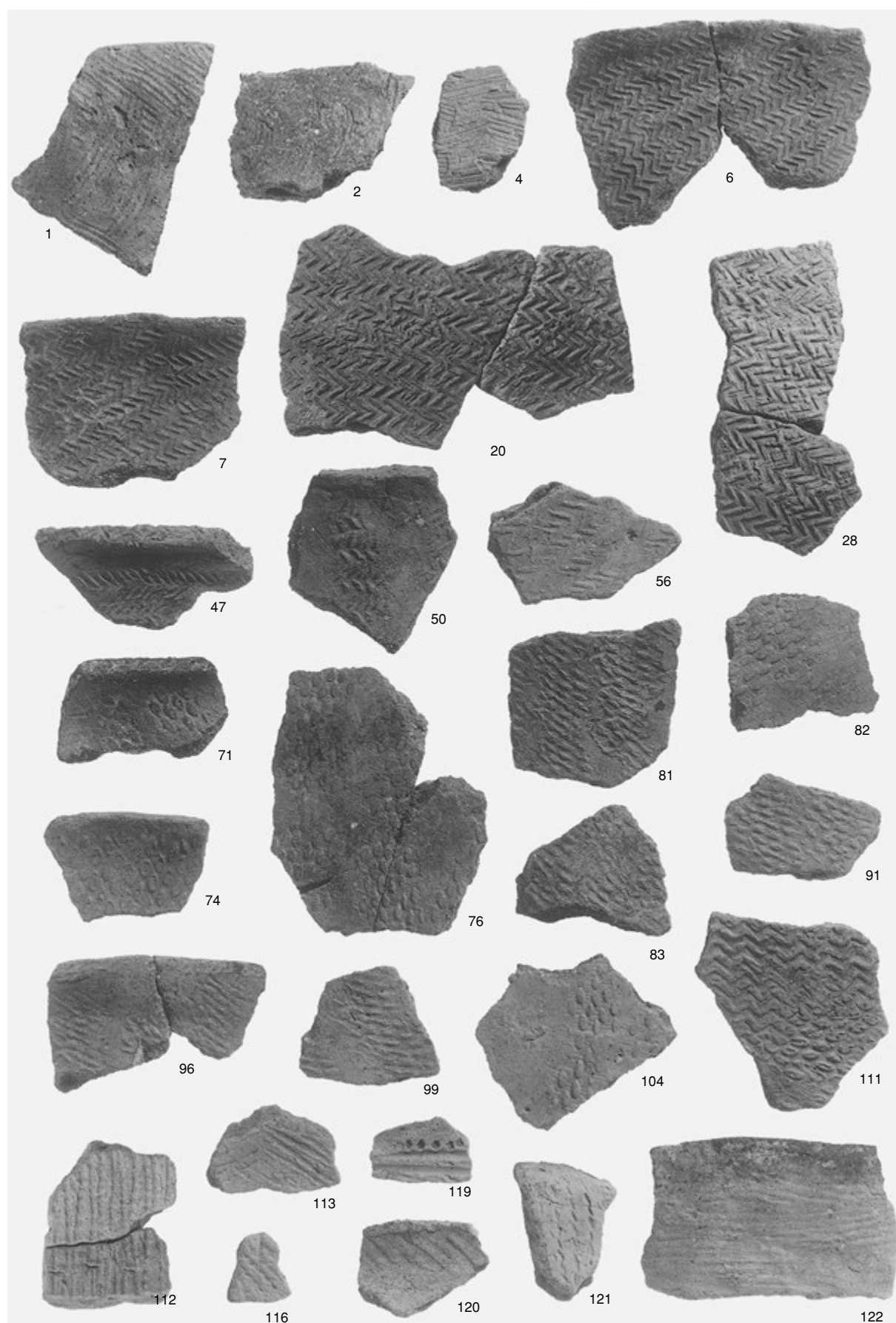


①～④溝状遺構 ⑤・⑥掘立柱建物跡

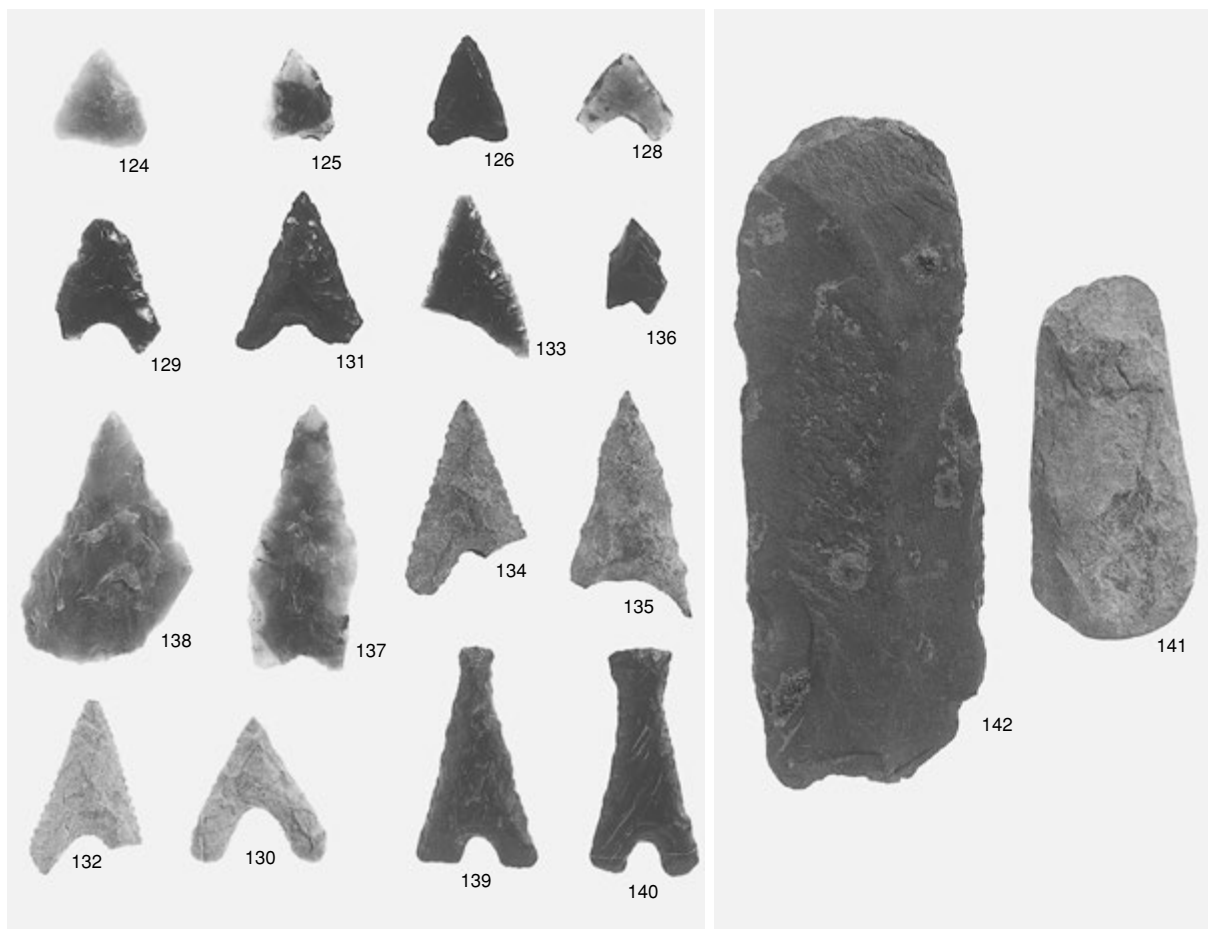
図版 6
(諏訪脇)



掘立柱建物跡



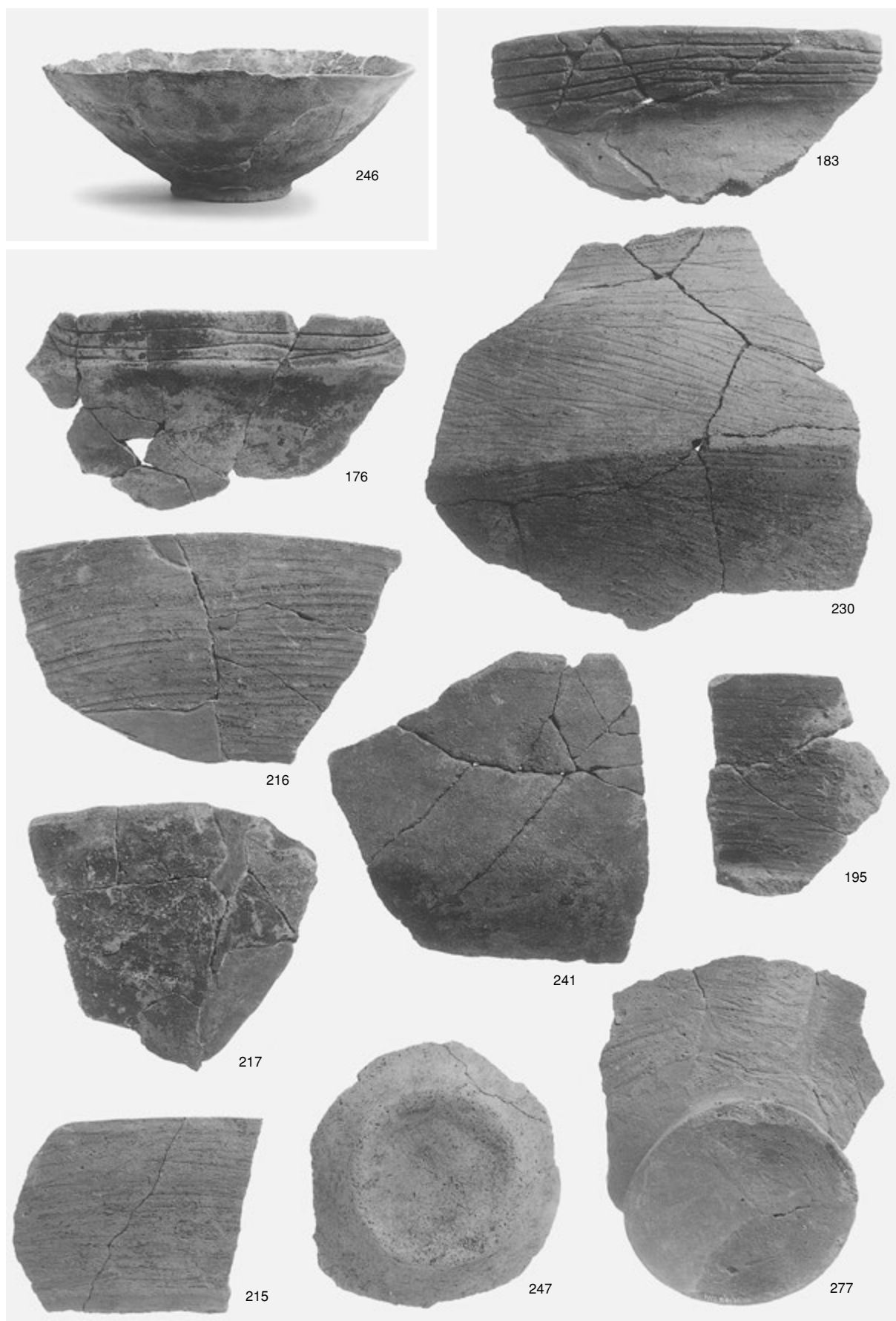
縄文時代早期土器



諏訪脇遺跡縄文時代早期石器



縄文時代中期・後期土器



晩期土器 1



1号土坑内



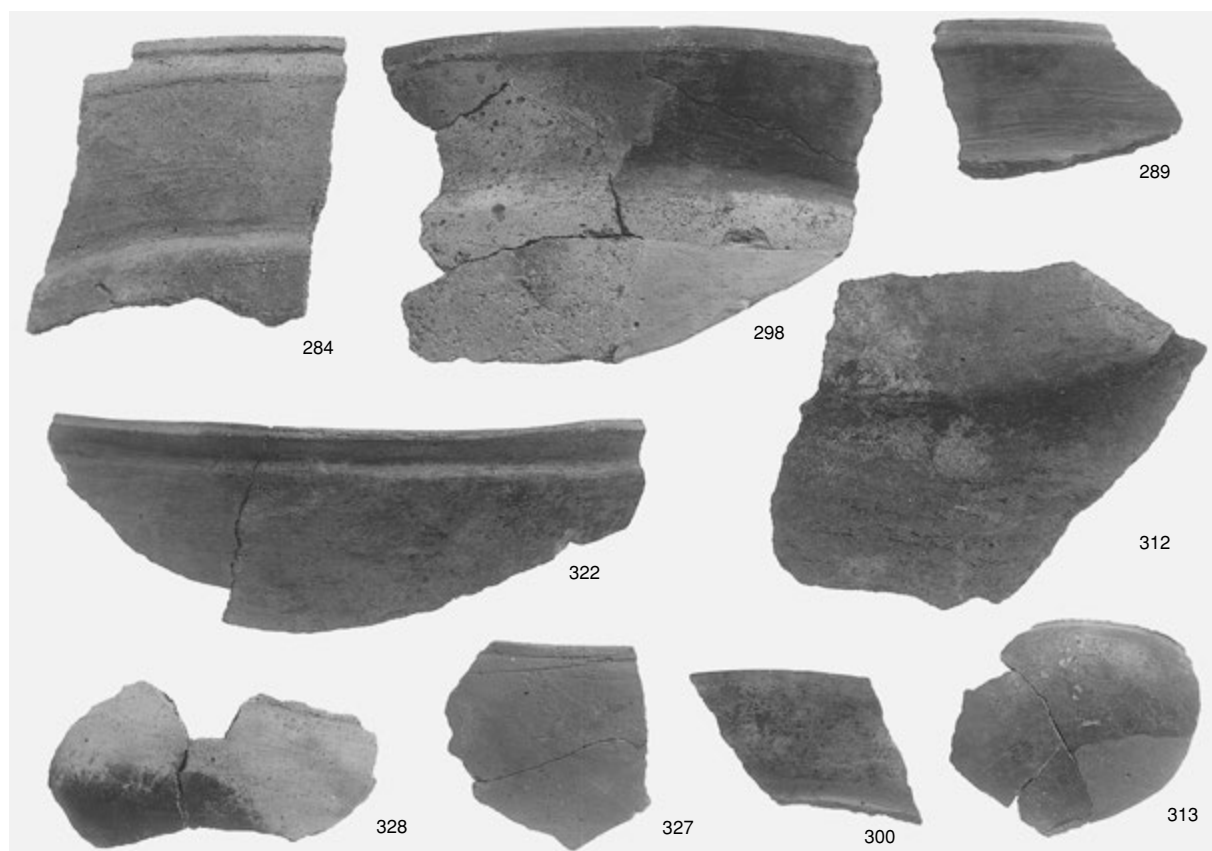
1号土坑内



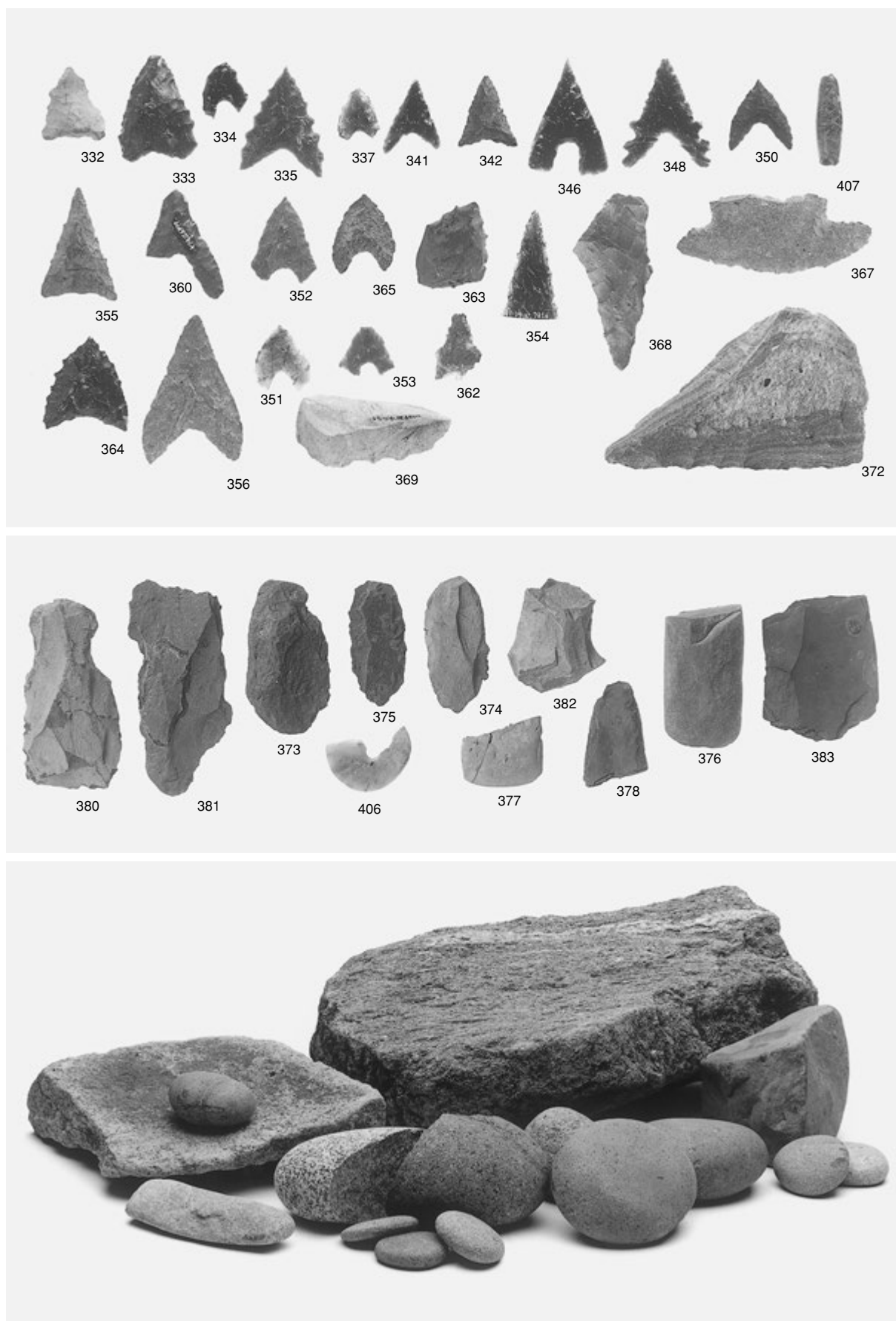
埋設土器1号



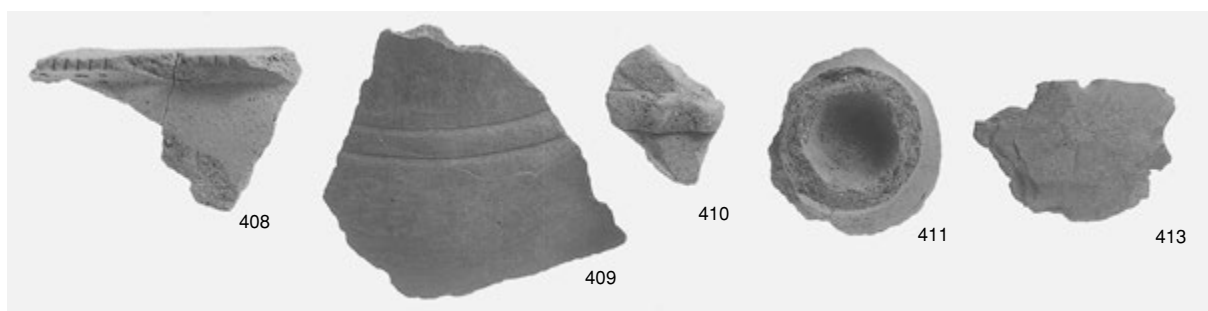
埋設土器2号



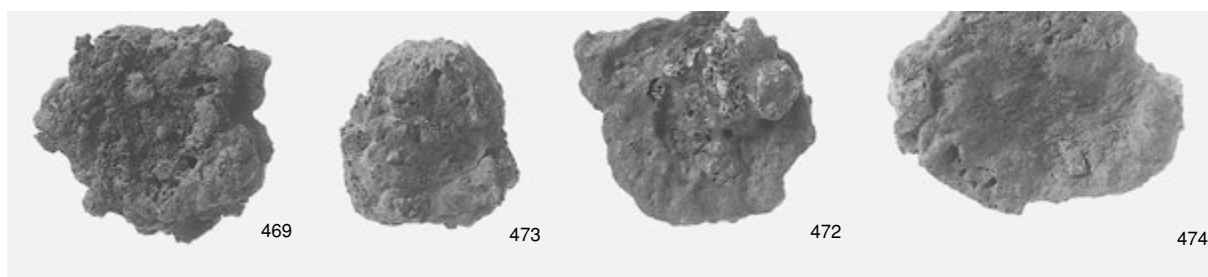
晚期土器2



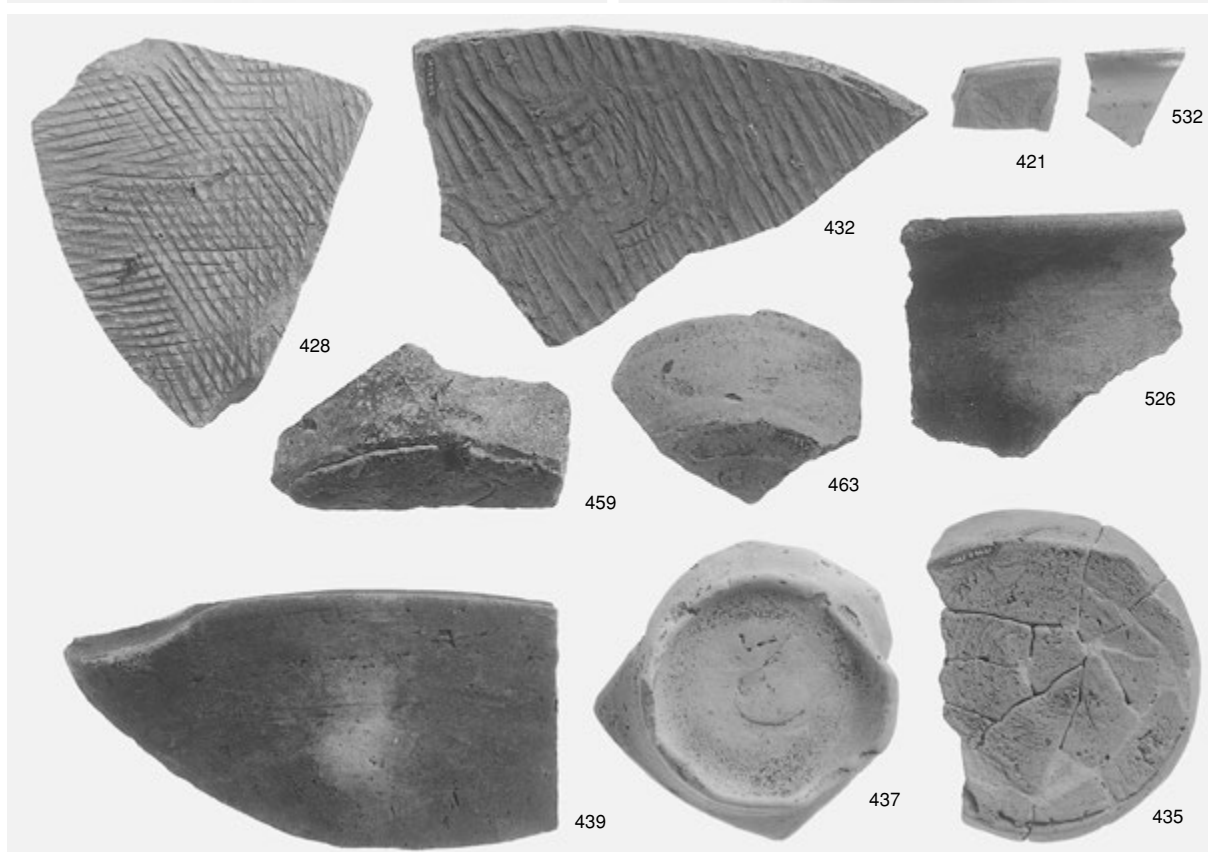
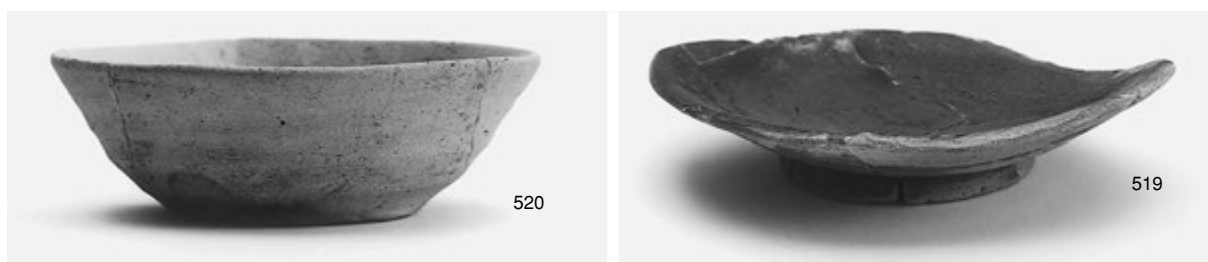
縄文時代晩期 石器



弥生・古墳時代遺物



鉄滓



弥生・古墳時代・古代・中世遺物



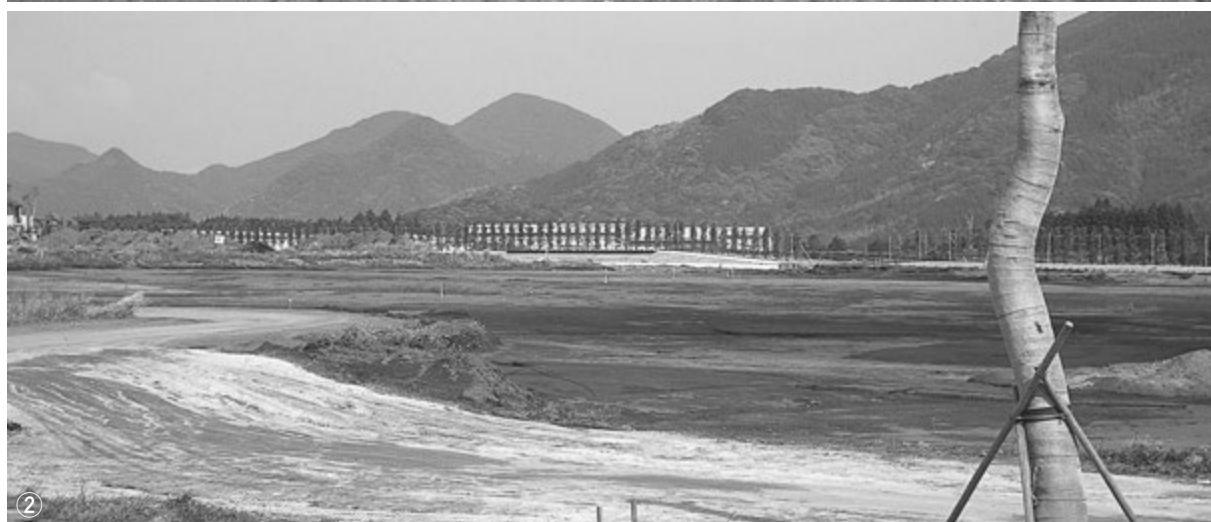
東側調査区 ①土層断面 ②遺跡遠景 ③旧石器時代遺物出土状況 ④ナイフ形石器出土状況
⑤ハンマー出土状況 ⑥石核出土状況 ⑦作業風景
西側調査区 ⑧土層断面



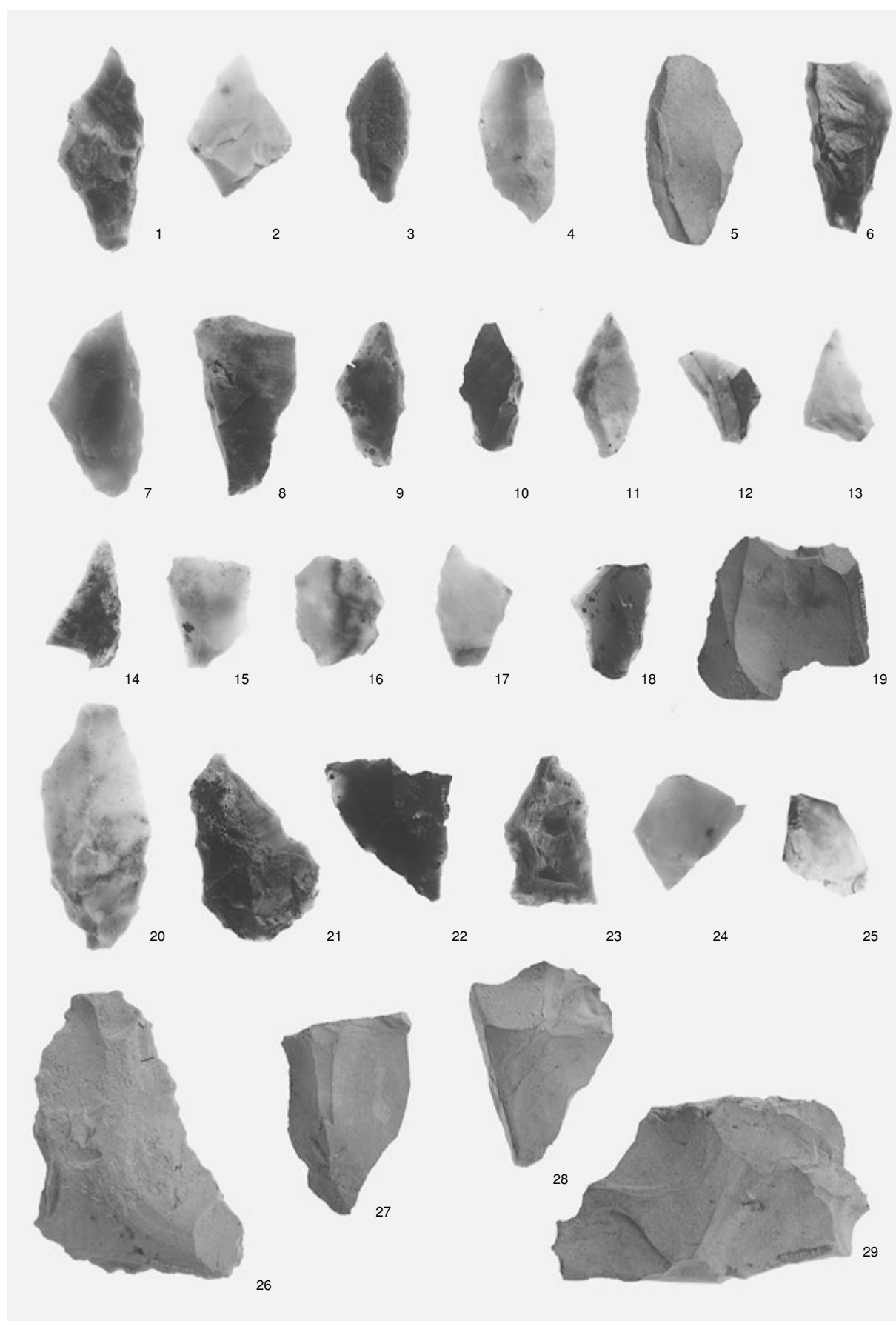
西側調査区 ①旧石器時代遺物出土状況 ②台形石器出土状況 ③ナイフ形石器出土状況
④～⑧旧石器時代礫群検出状況



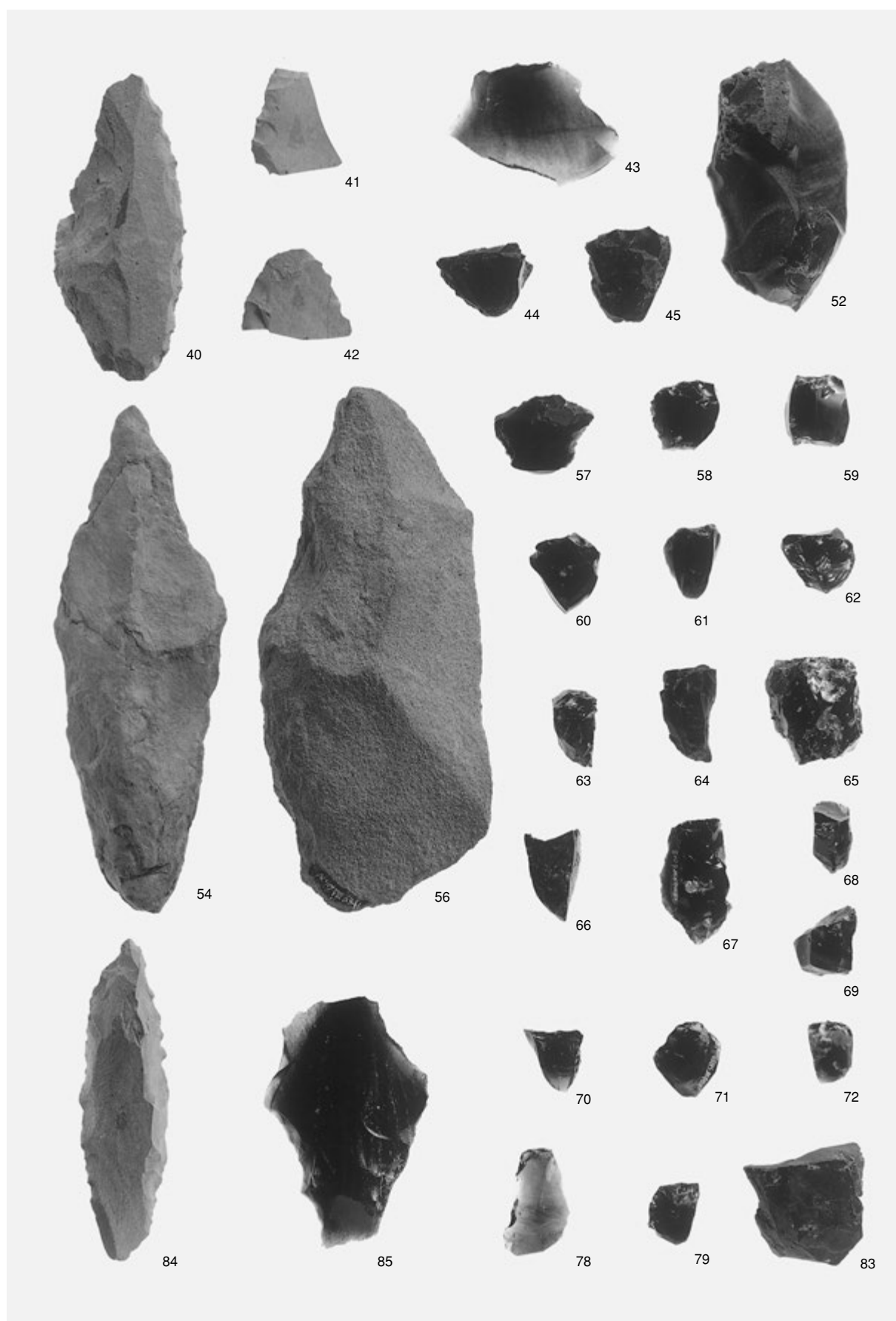
西側調査区 ①旧石器時代礫群検出状況 ②縄文時代早期遺物出土状況
③～⑤縄文時代早期集石検出状況 ⑥・⑦柱穴列 2・3 検出状況



西側調査区 ①縄文時代晩期土坑検出状況 ②・③調査終了状況



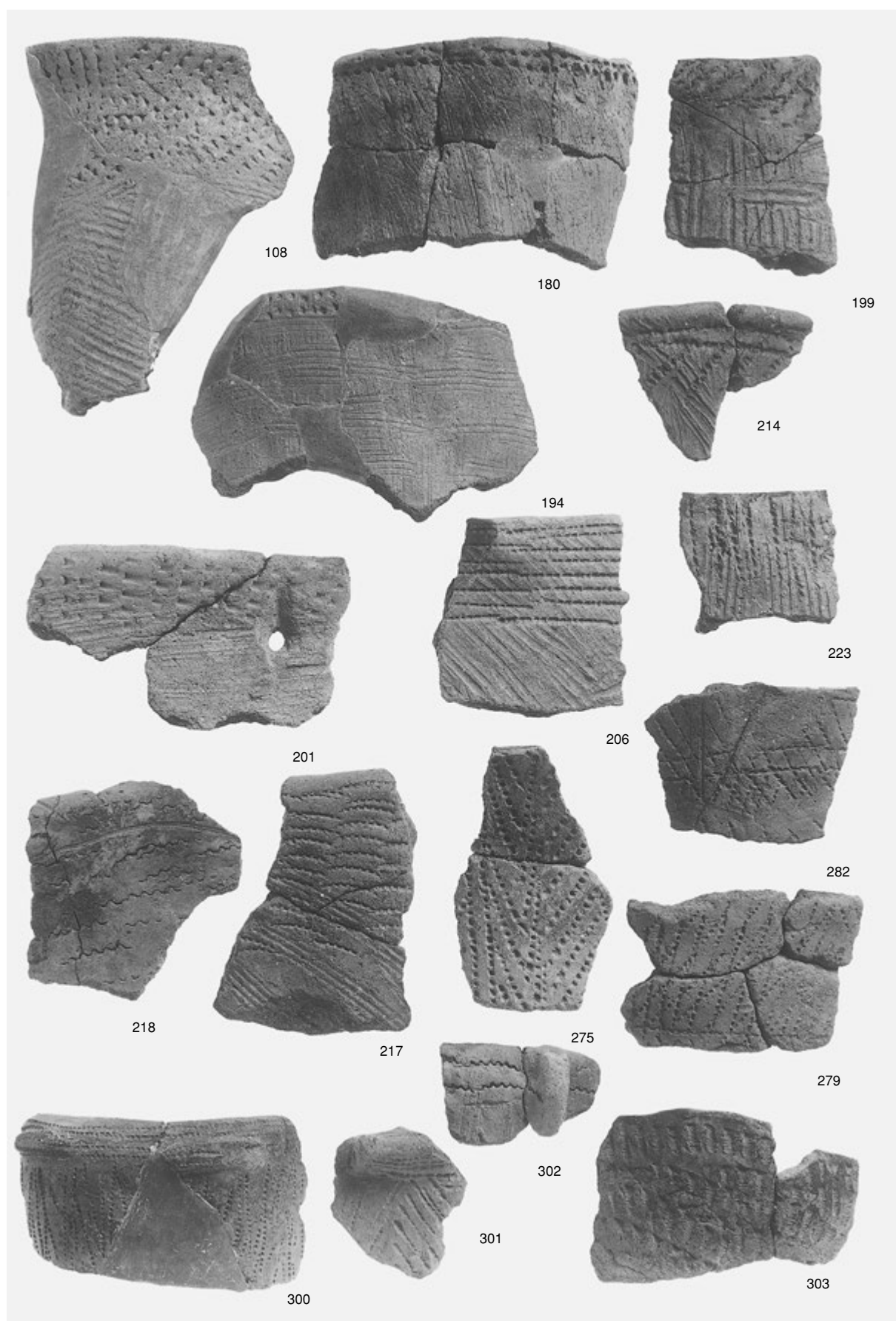
旧石器時代石器 1



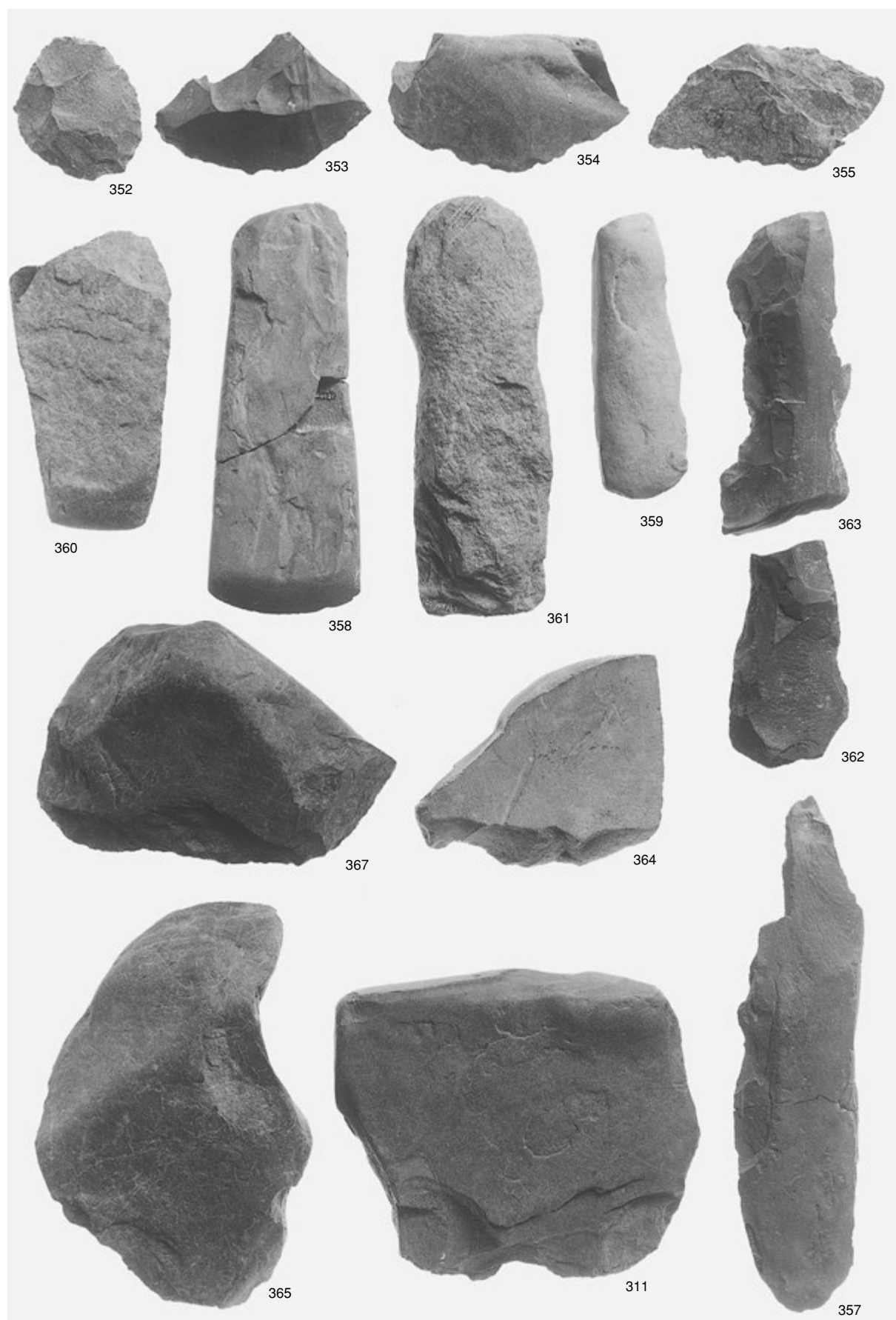
旧石器時代石器 2



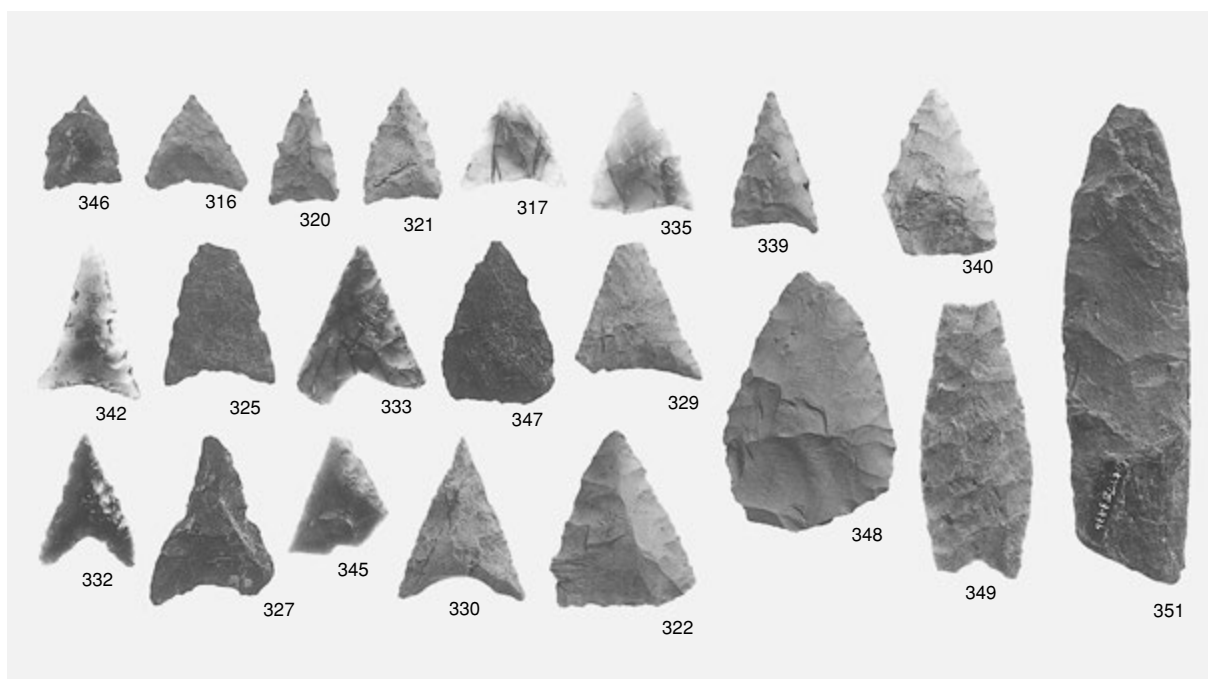
縄文時代早期土器 1



縄文時代早期土器 2



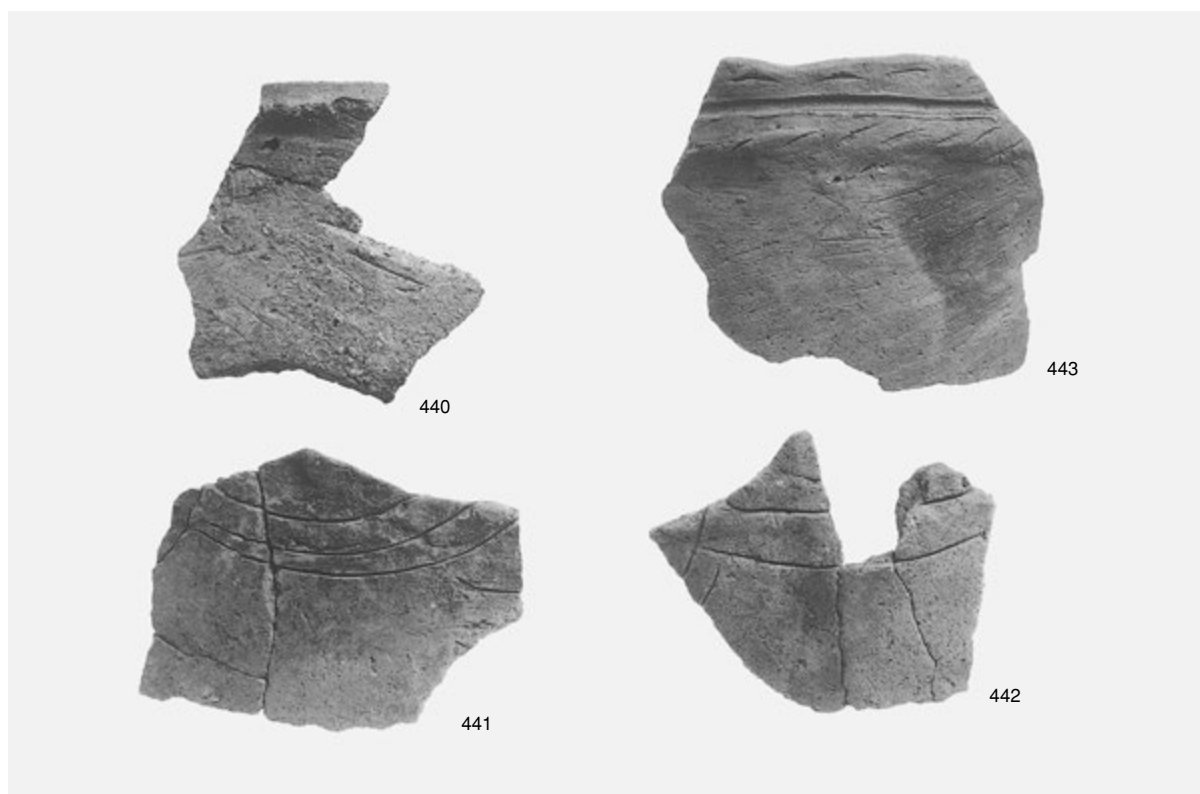
縄文時代早期石器 1



縄文時代早期石器 2



縄文時代早期石器 3



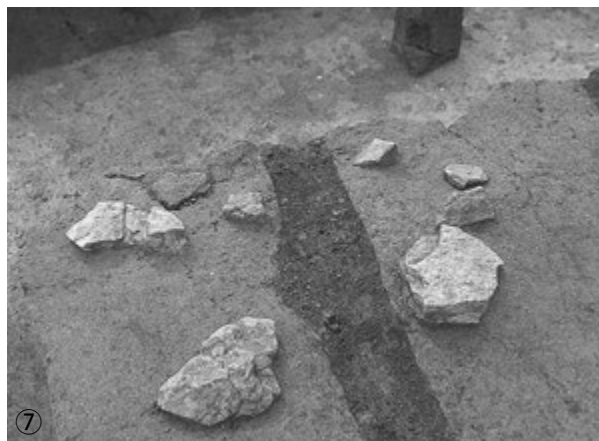
縄文時代中期・後期土器



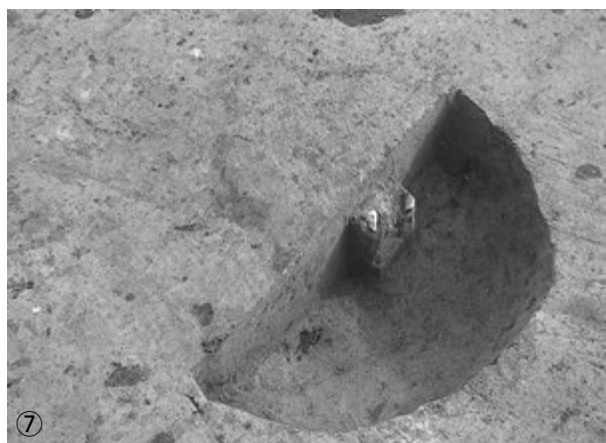
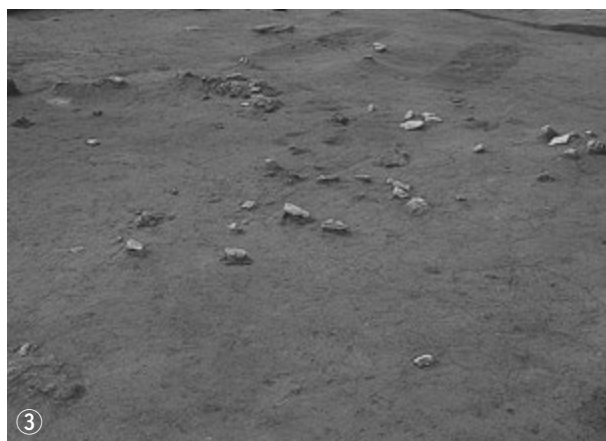
縄文時代晩期土坑内出土遺物 1



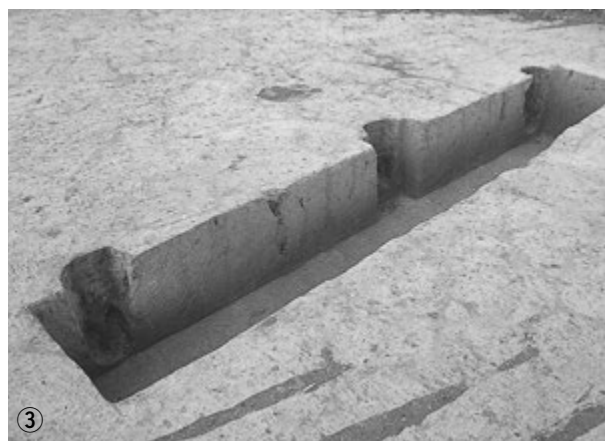
縄文時代晩期土坑内出土遺物 2



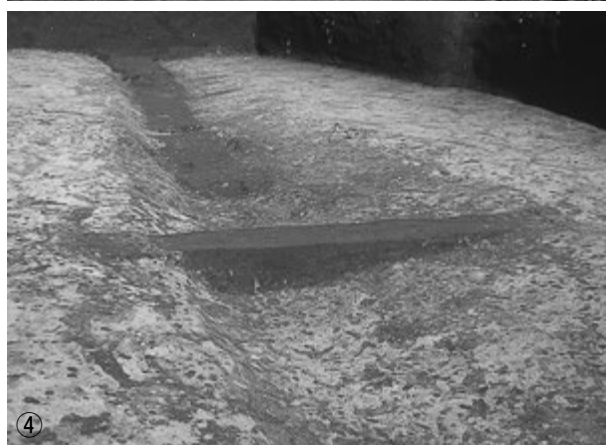
①遺跡遠景 ②～⑦旧石器時代礫群



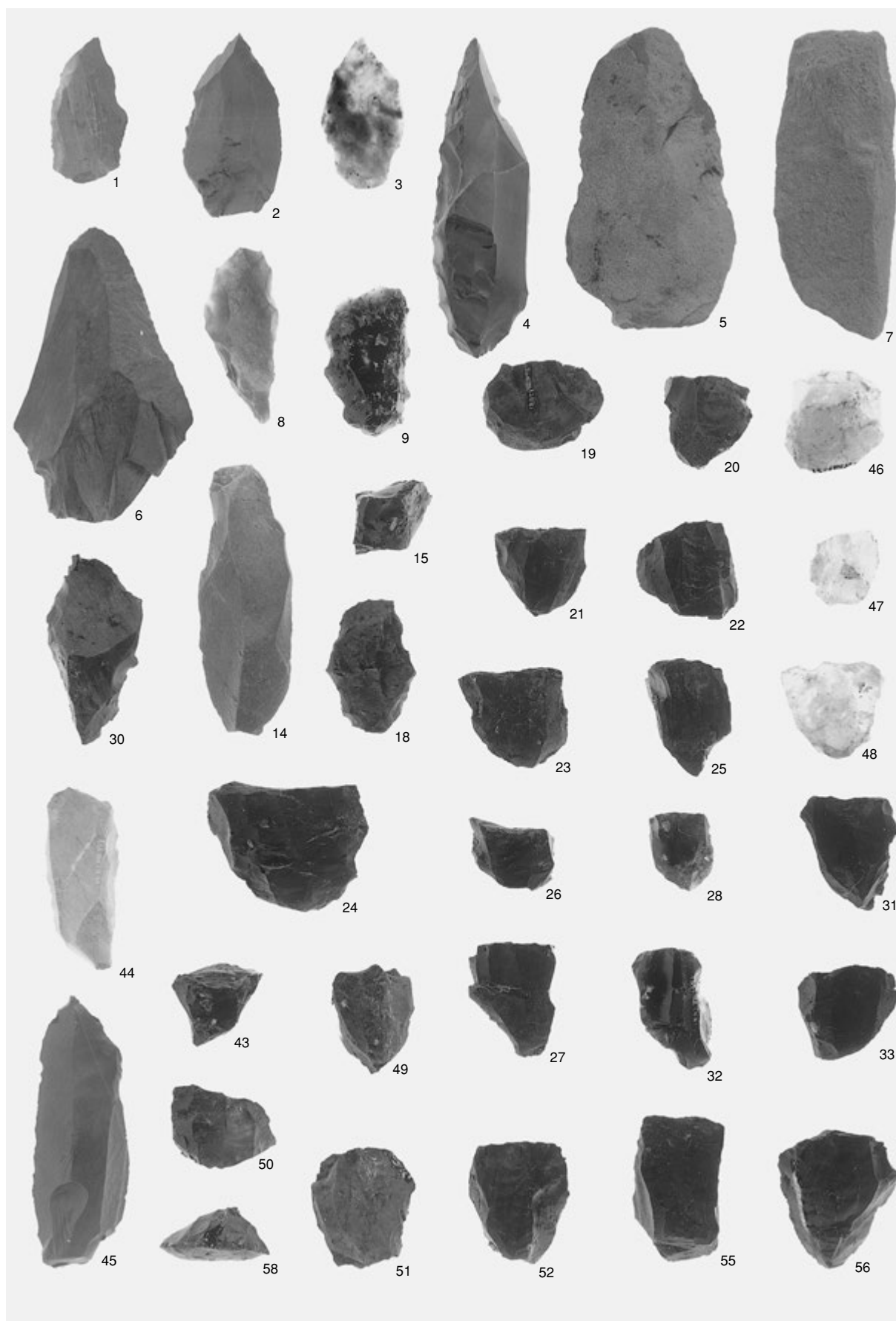
①建物集中区 ②・③草創期集石1号・4号 ④・⑤晚期土坑1号
⑥・⑦晚期土坑2号 ⑧晚期堀立柱建物跡1号



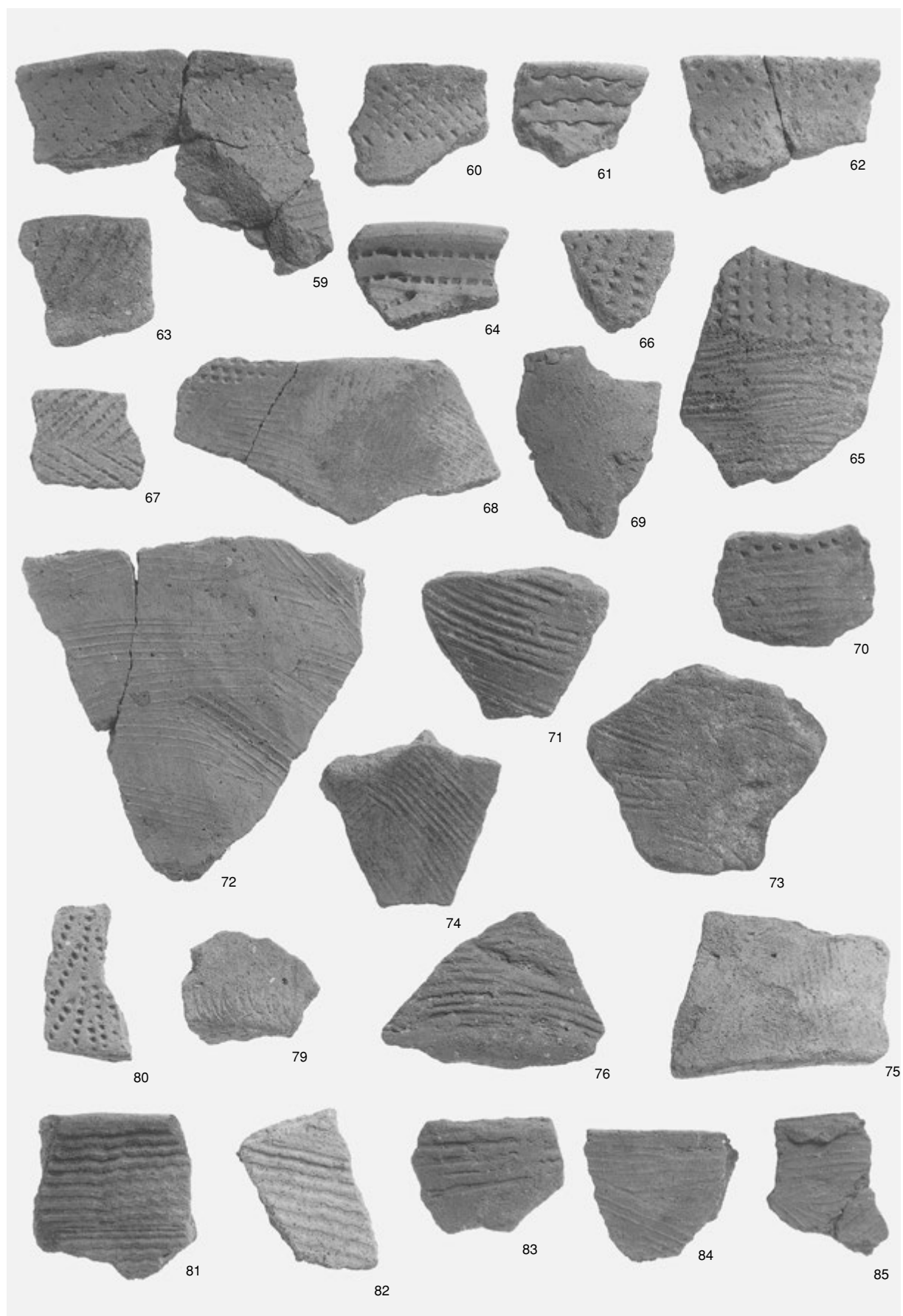
①・②晩期堀立柱建物跡2号・3号 ③・④晩期柱穴列1号・2号
⑤・⑥溝状遺構検出状況



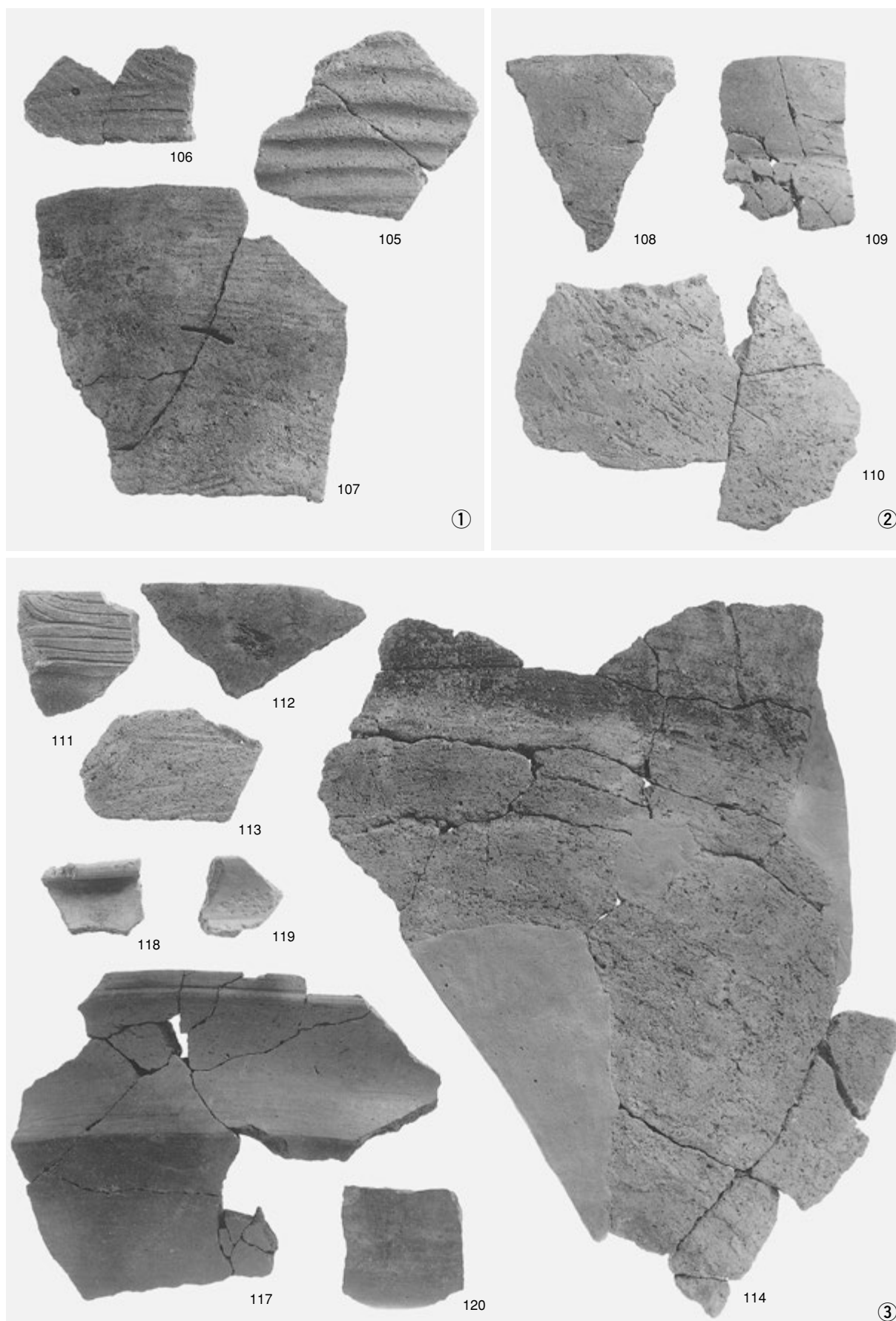
①～③溝状遺構断面 ⑤溝状遺構内出土遺物 ④・⑥古道



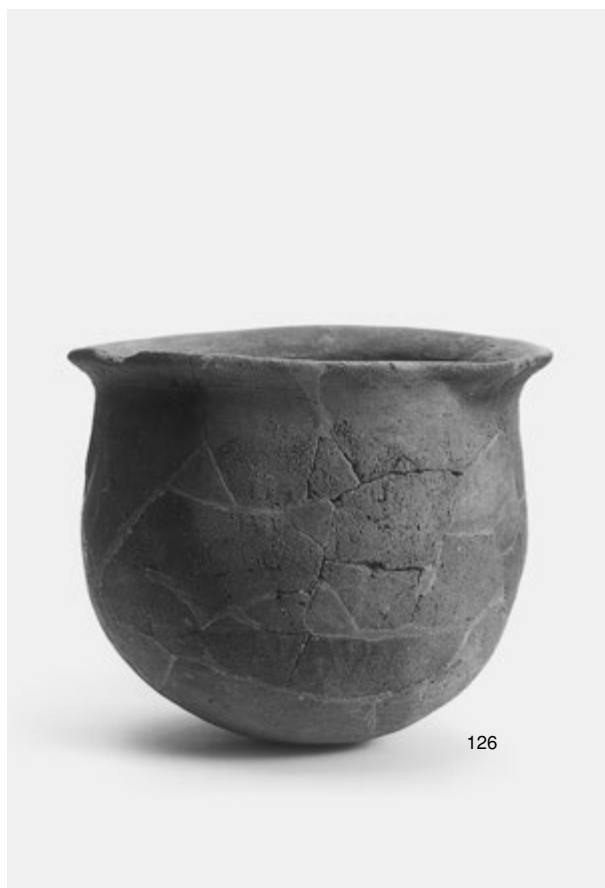
旧石器時代石器



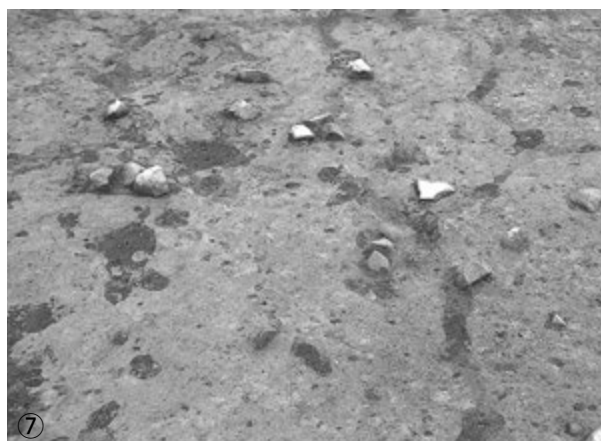
縄文時代早期土器



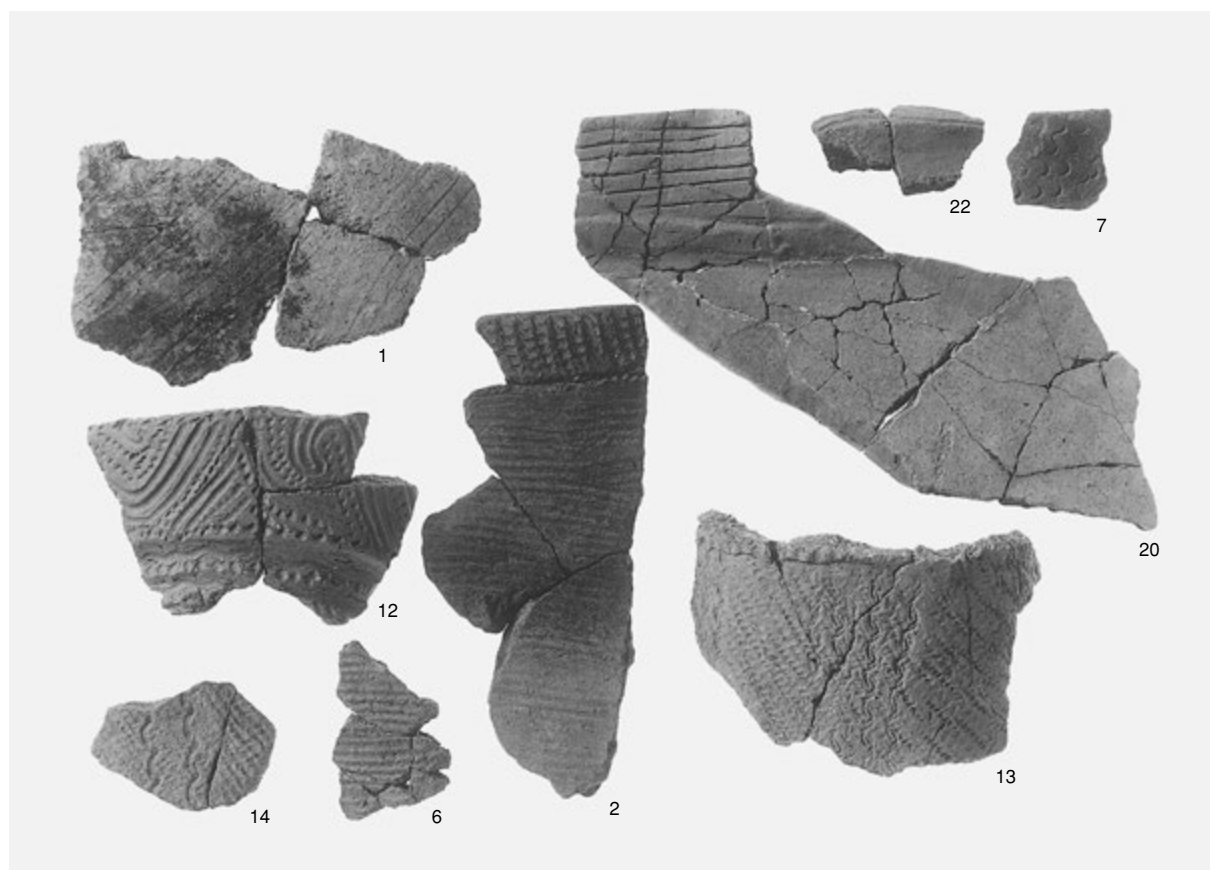
①縄文時代中後期土器 ②縄文時代晩期土坑内遺物 ③縄文時代晩期土器



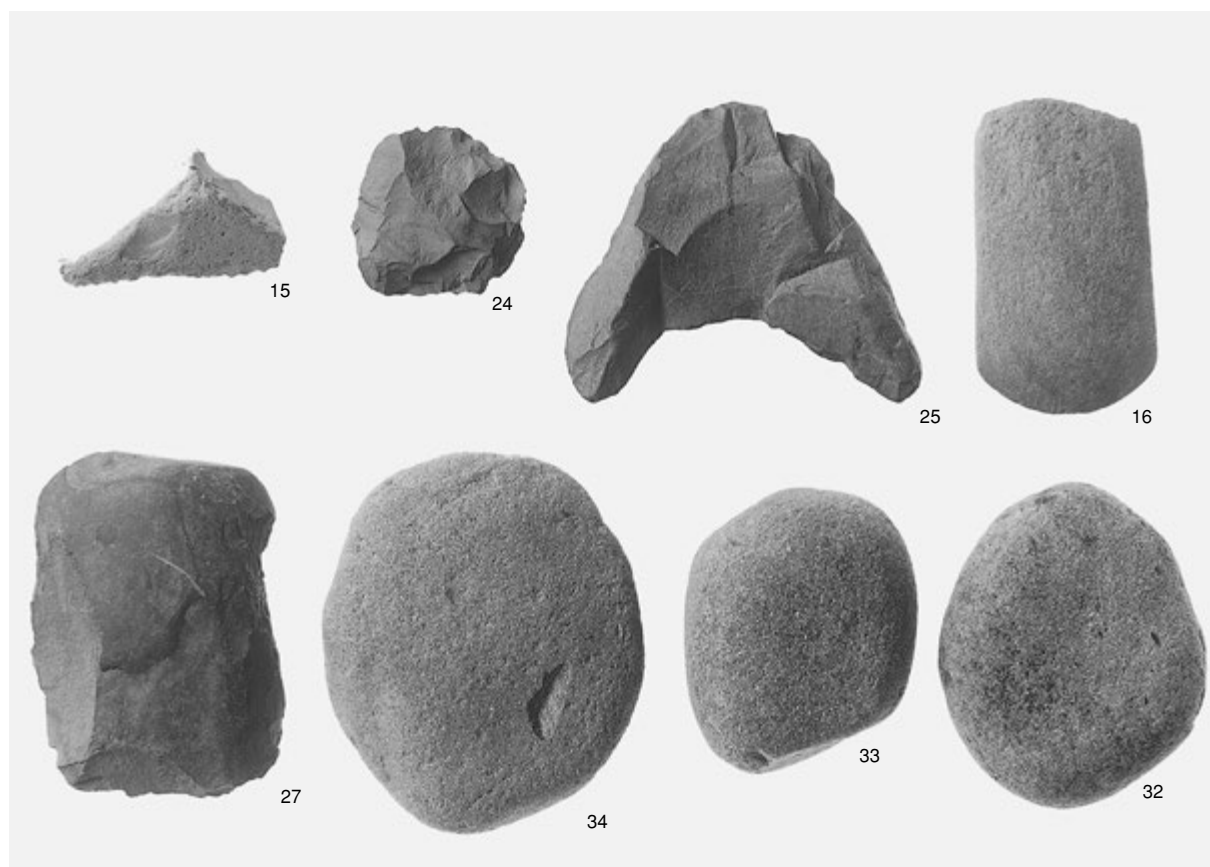
溝状遺構内出土遺物



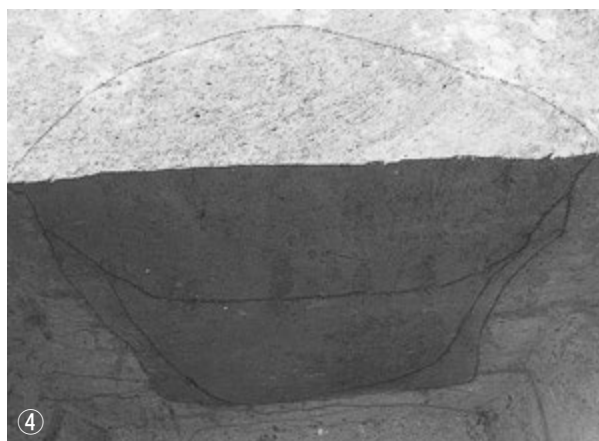
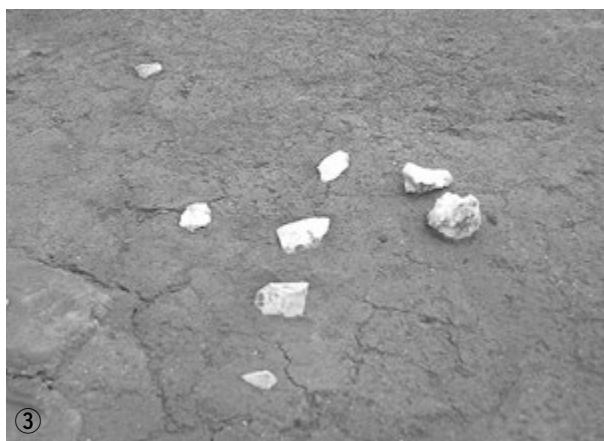
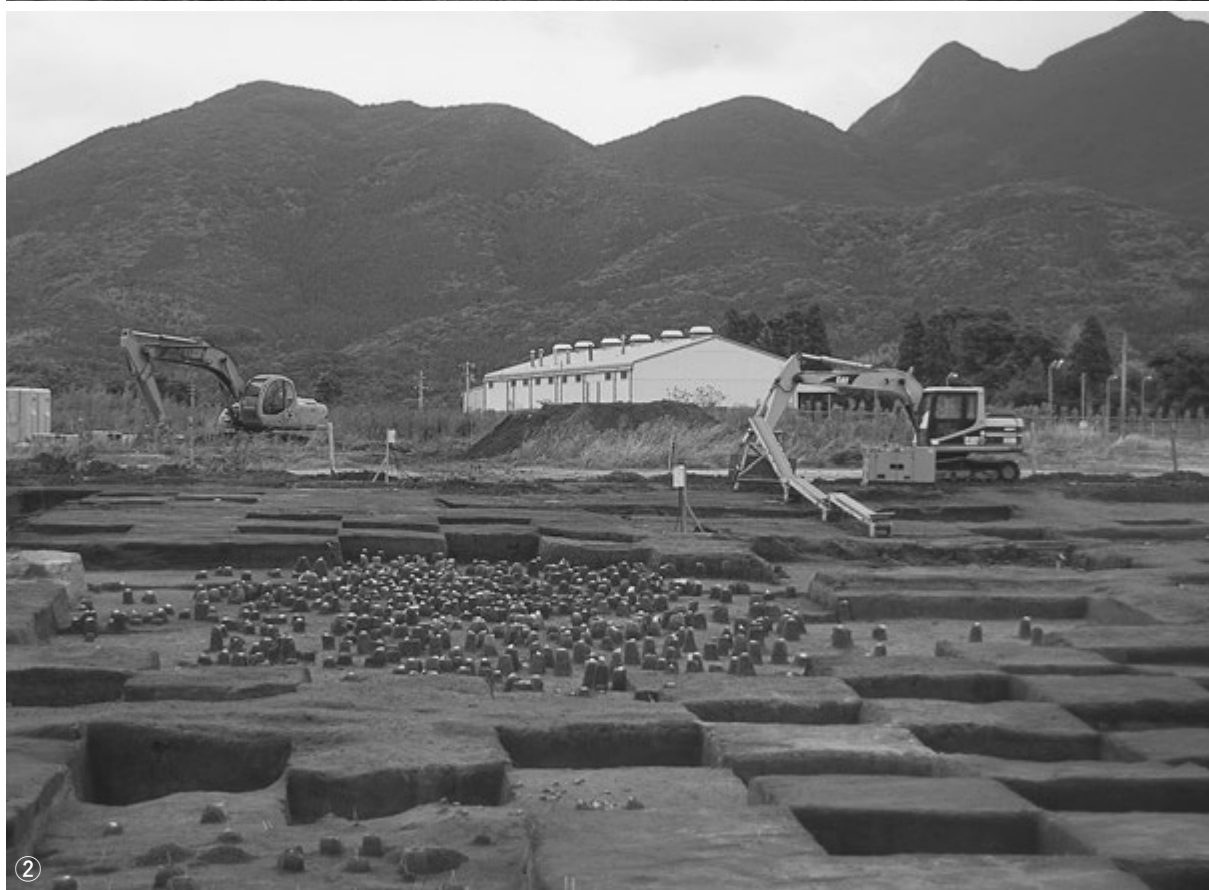
①現場風景 ②溝掘り下げ ③～⑦集石 1～5



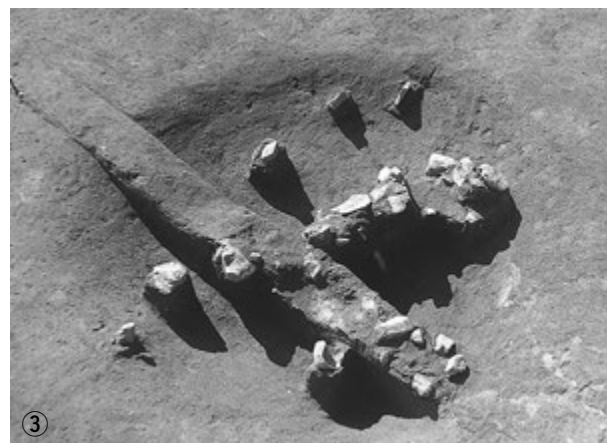
縄文時代土器



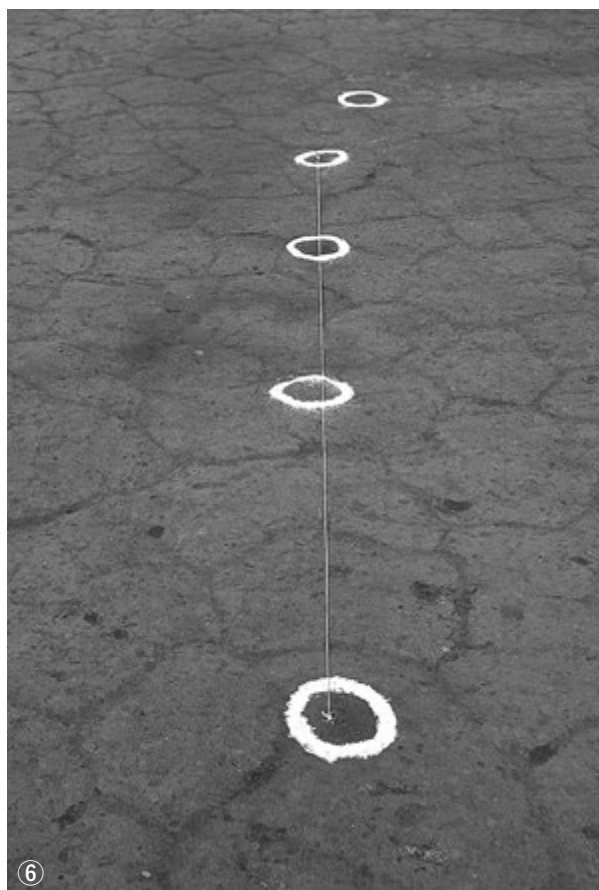
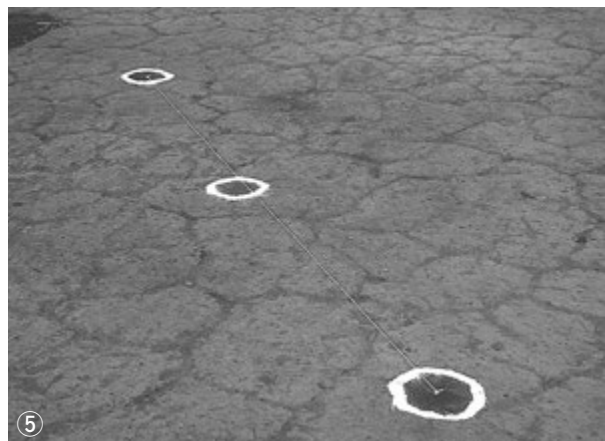
縄文時代石器



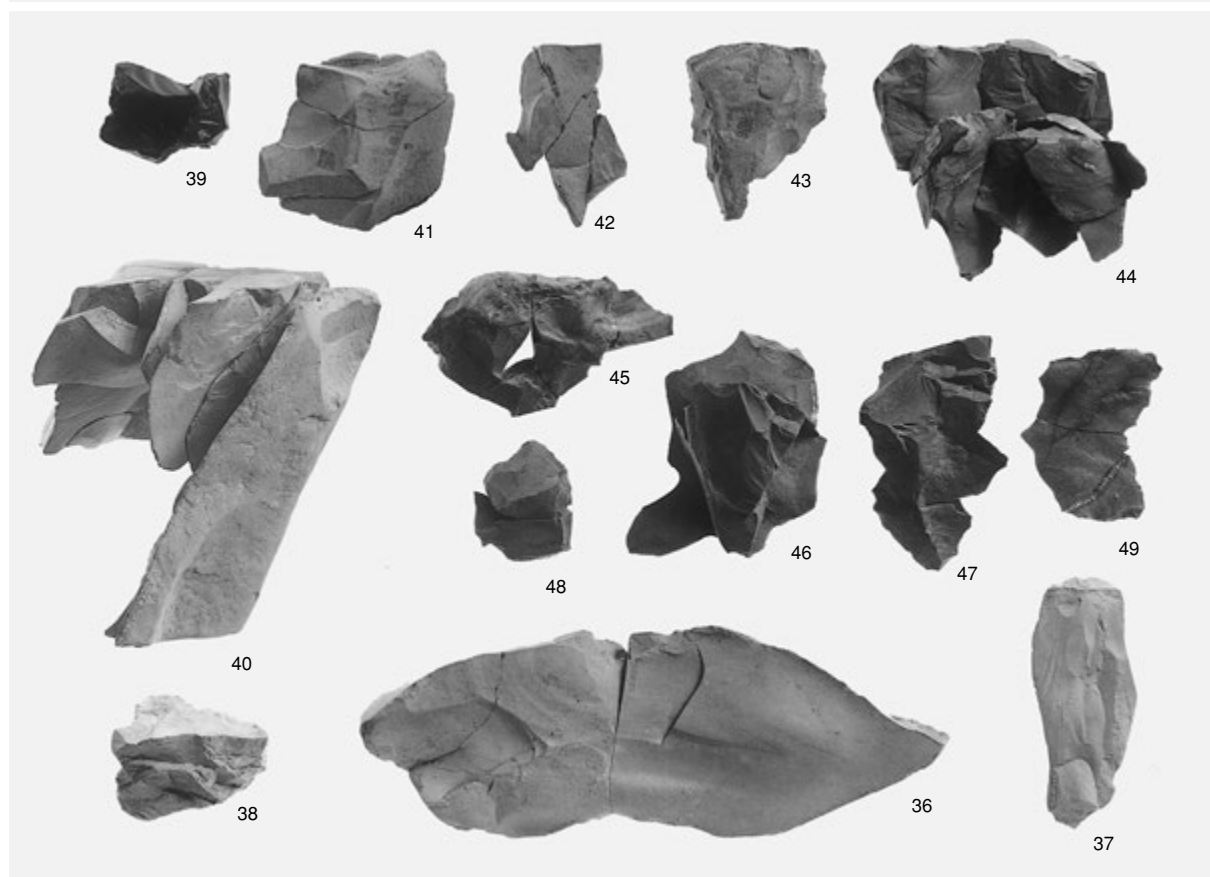
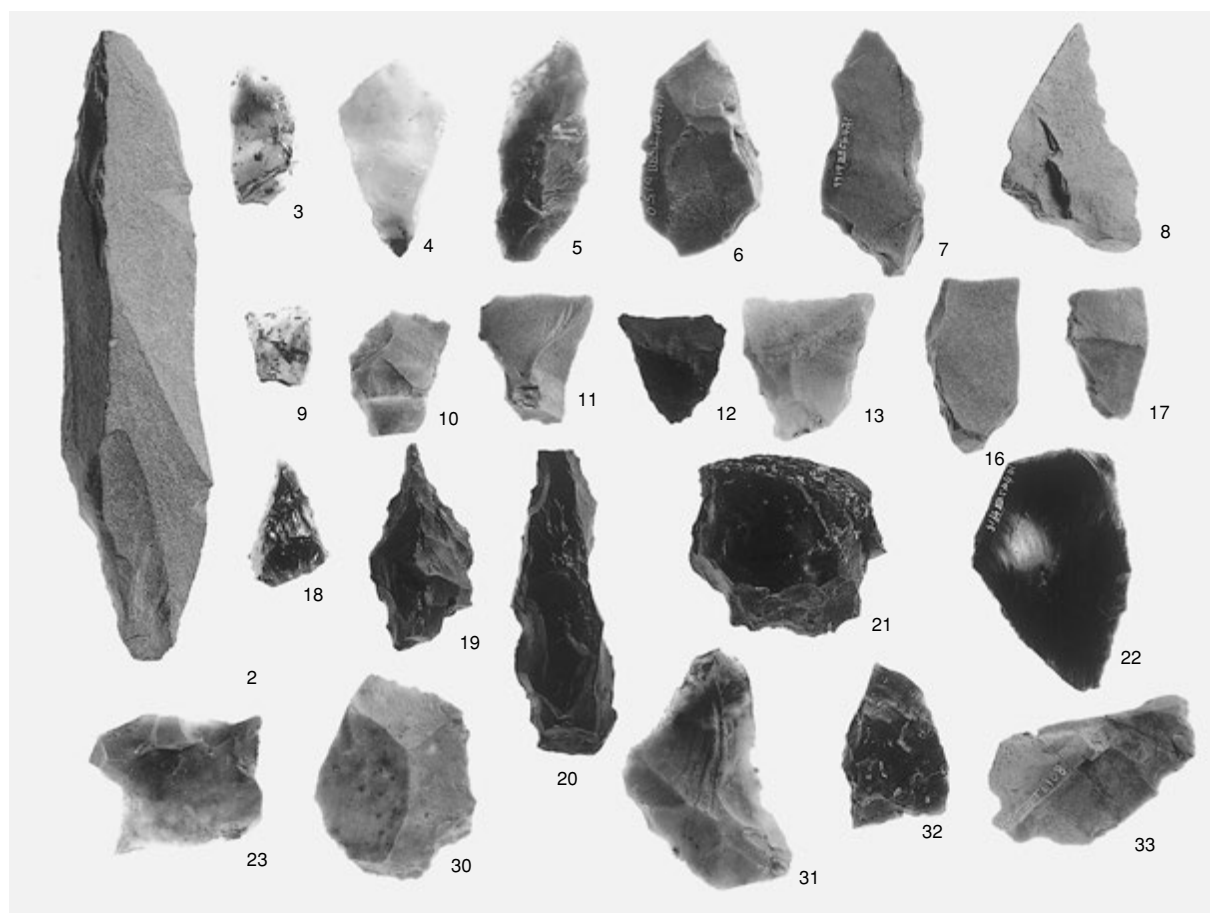
①近景 ②旧石器ブロック検出状況 ③チャート集積遺構
④落とし穴半裁状況



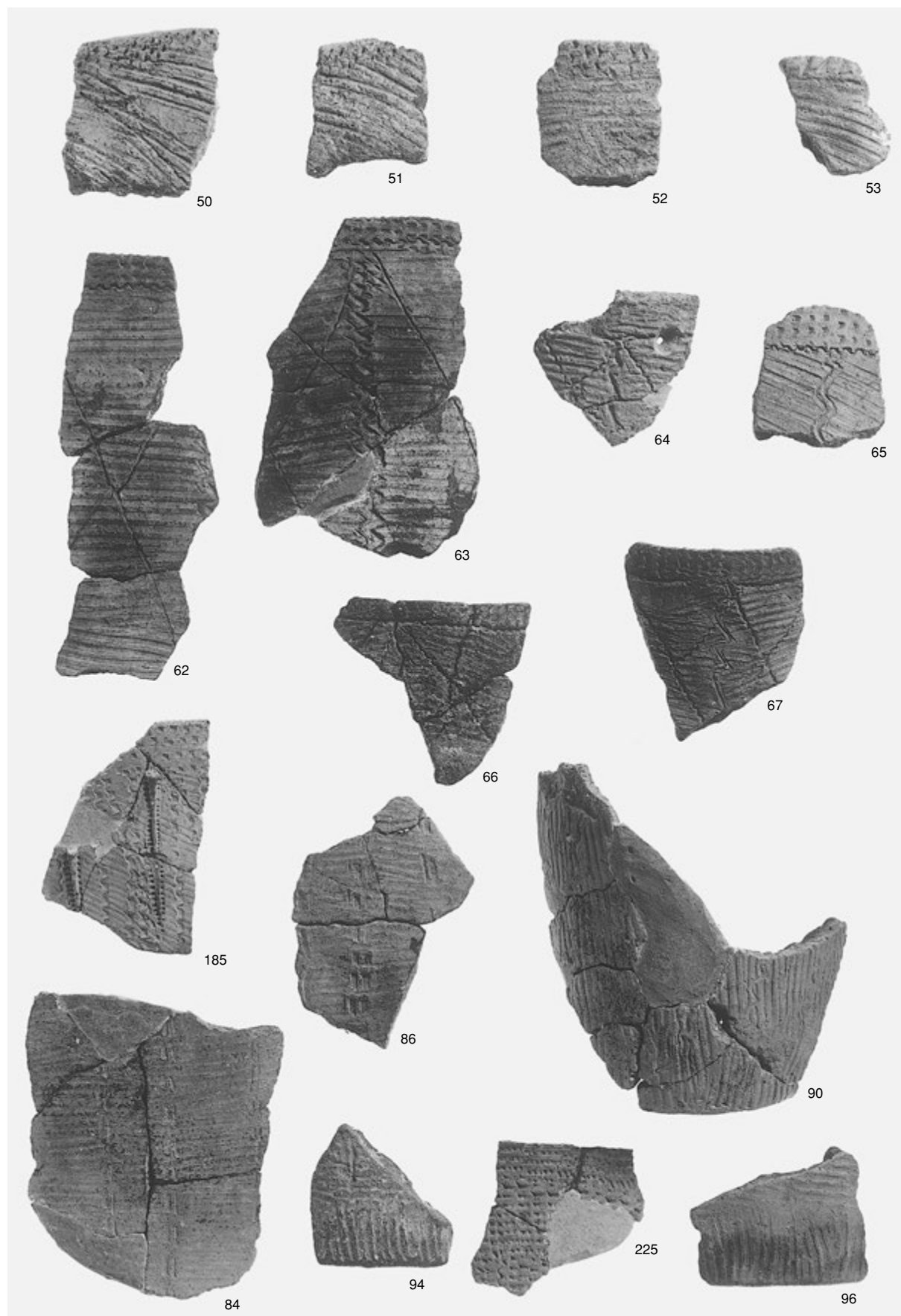
①縄文早期遺物出土状況 ②旧石器(ナイフ)出土状況
③1号集石状況 ④2号集石状況 ⑤4号集石状況



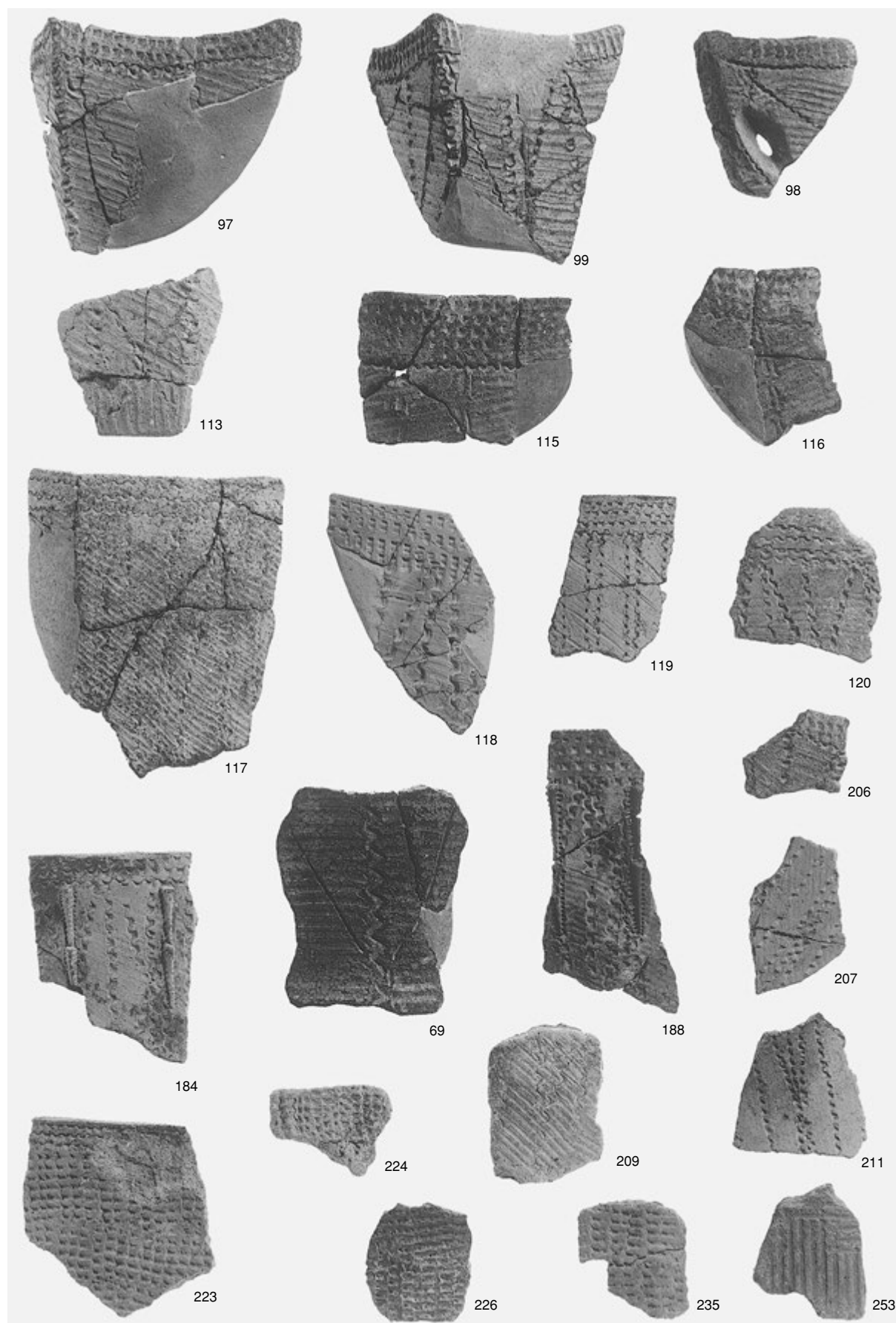
① 5号集石状況 ②Ⅳ層下面検出集石 ③縄文早期土器(366)出土状況
④縄文晚期土器(502)出土状況 ⑤縄文晚期1号柱穴列 ⑥縄文晚期2号柱穴列



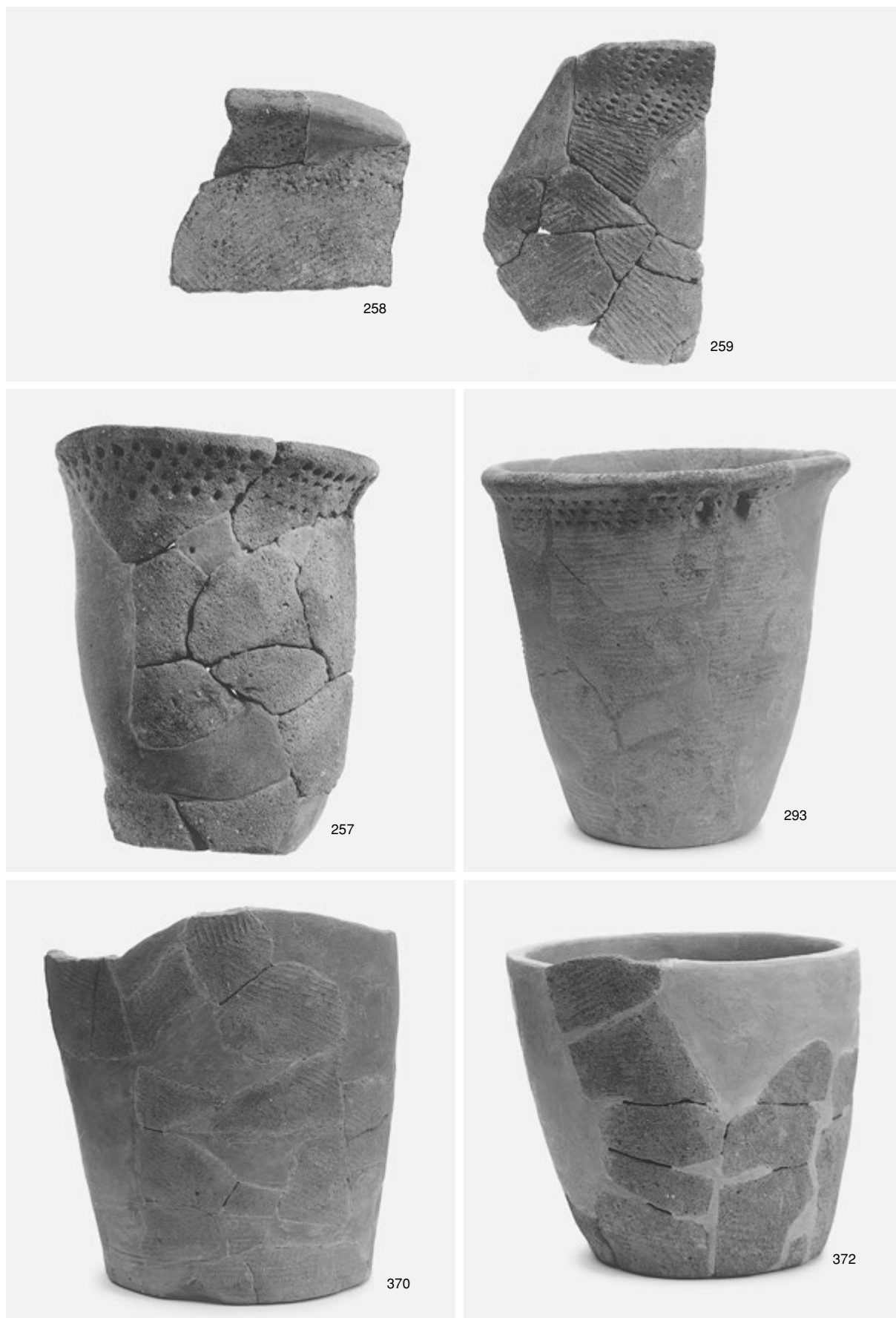
旧石器時代石器



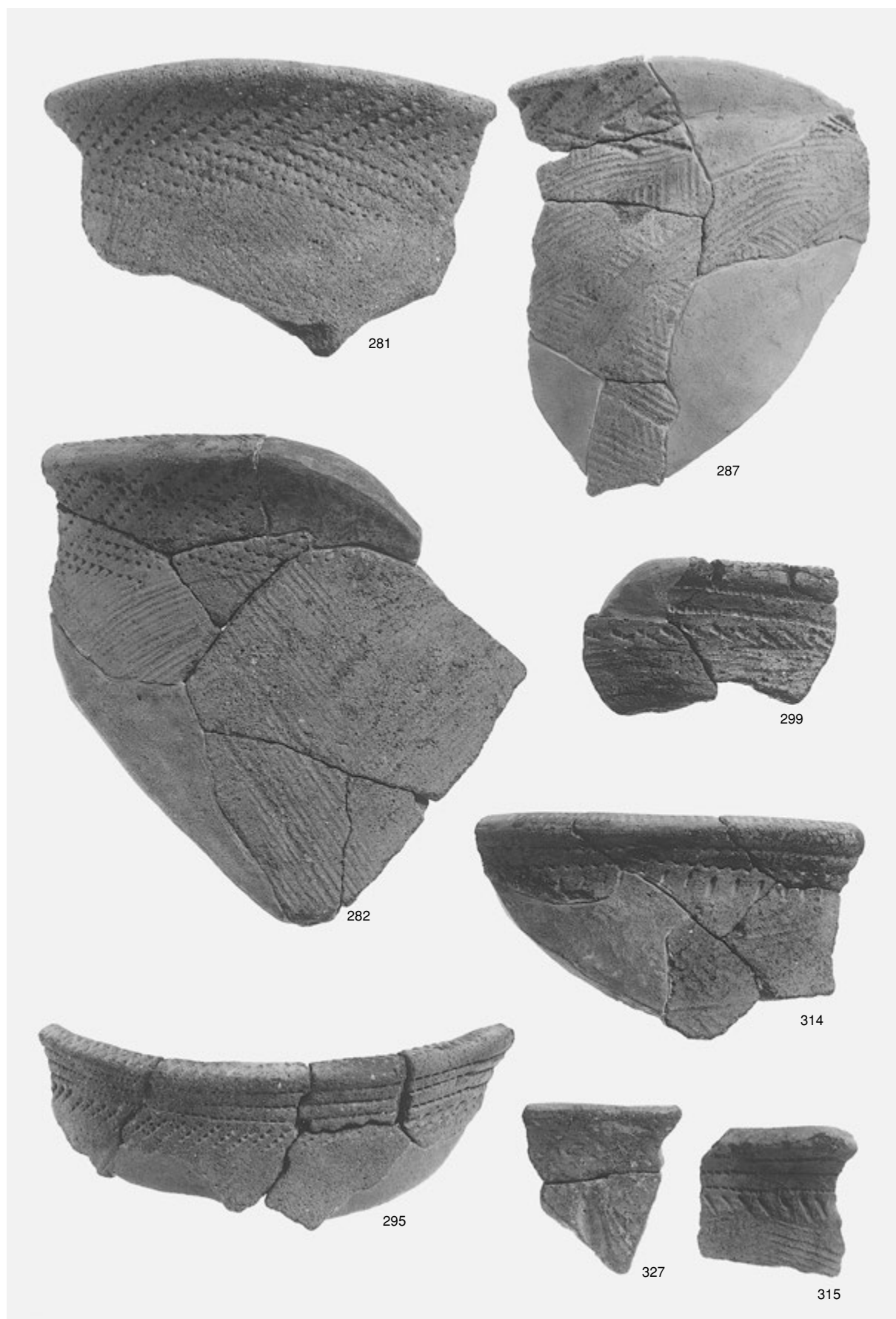
縄文時代早期土器 1



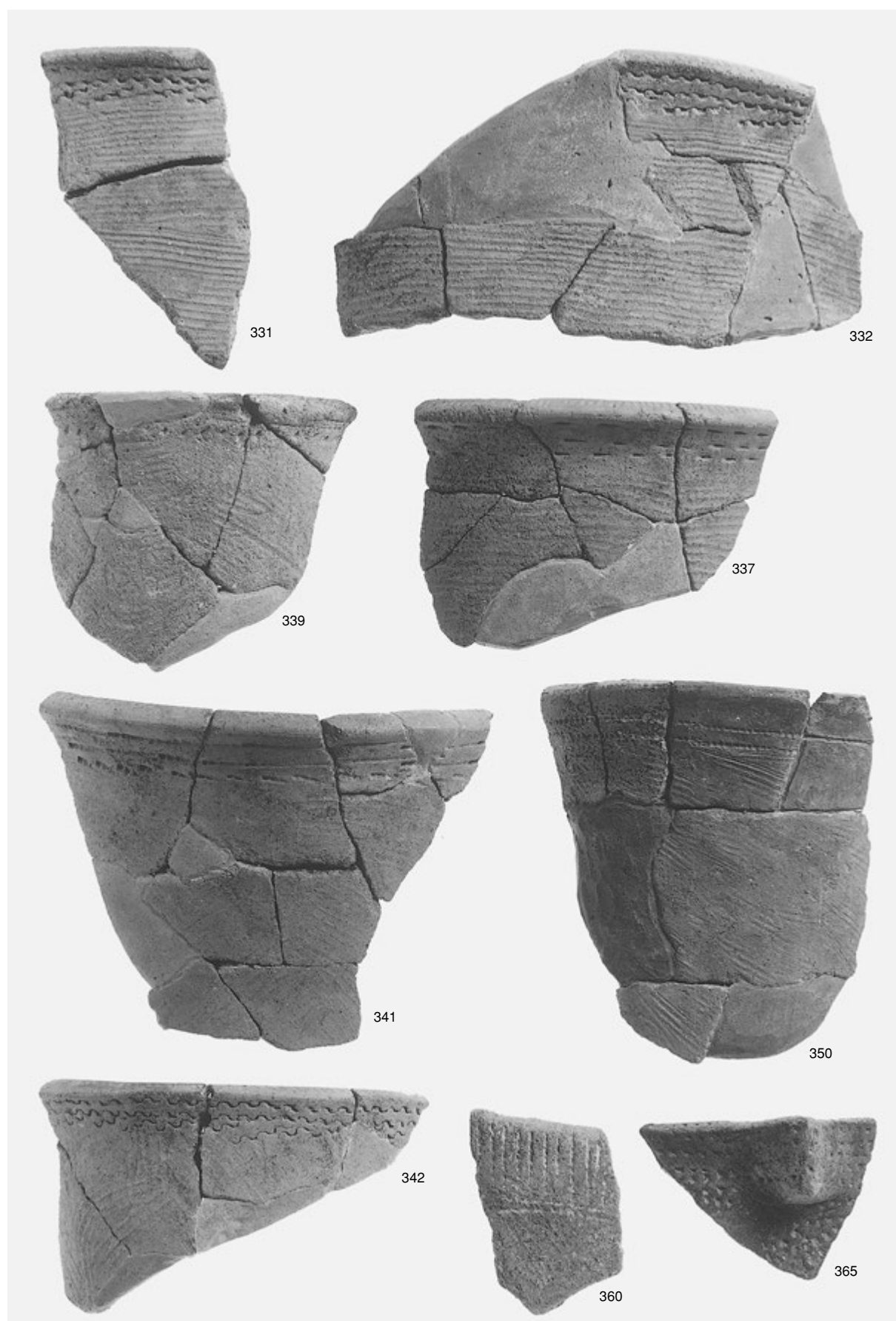
縄文時代早期土器 2



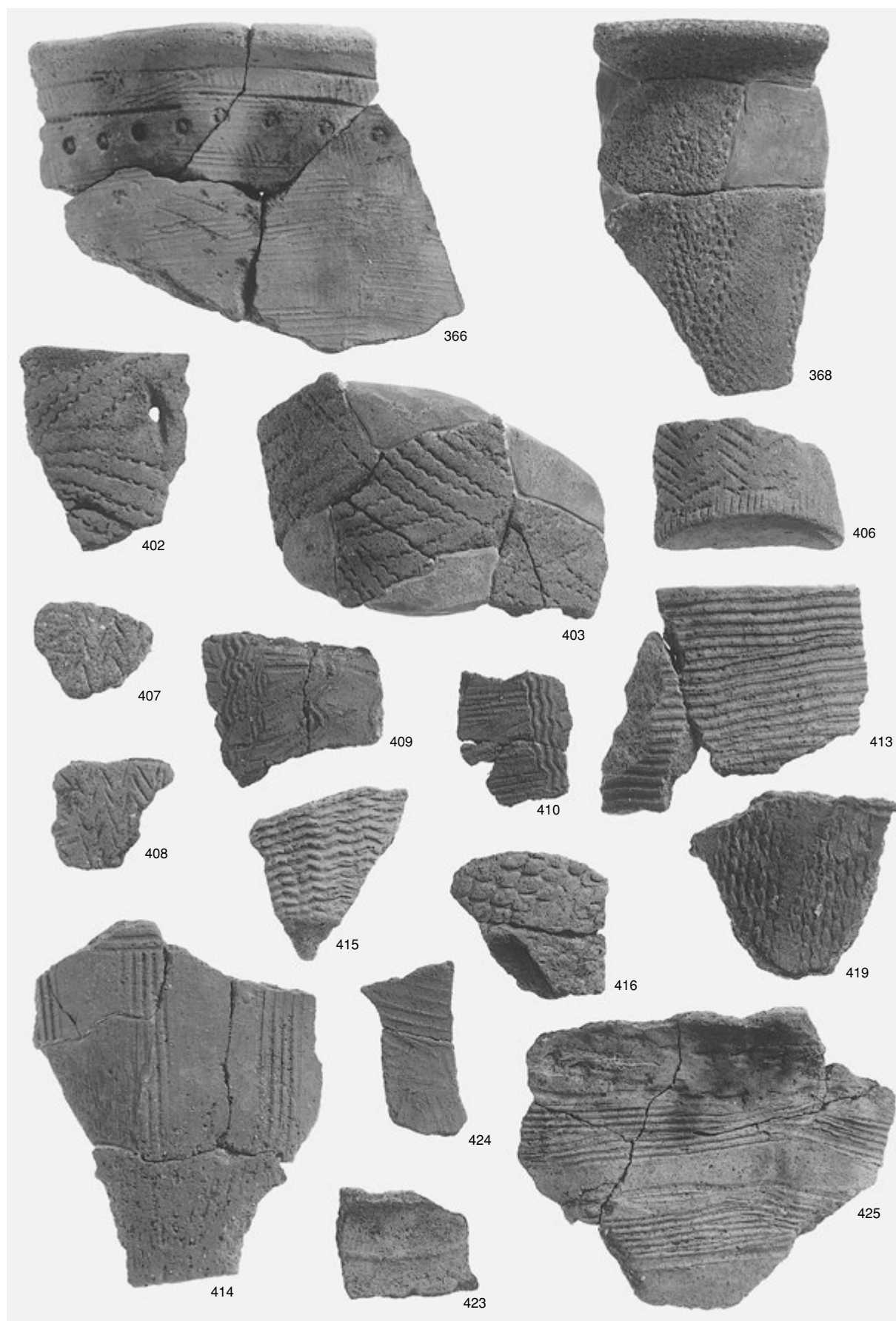
縄文時代早期土器 3



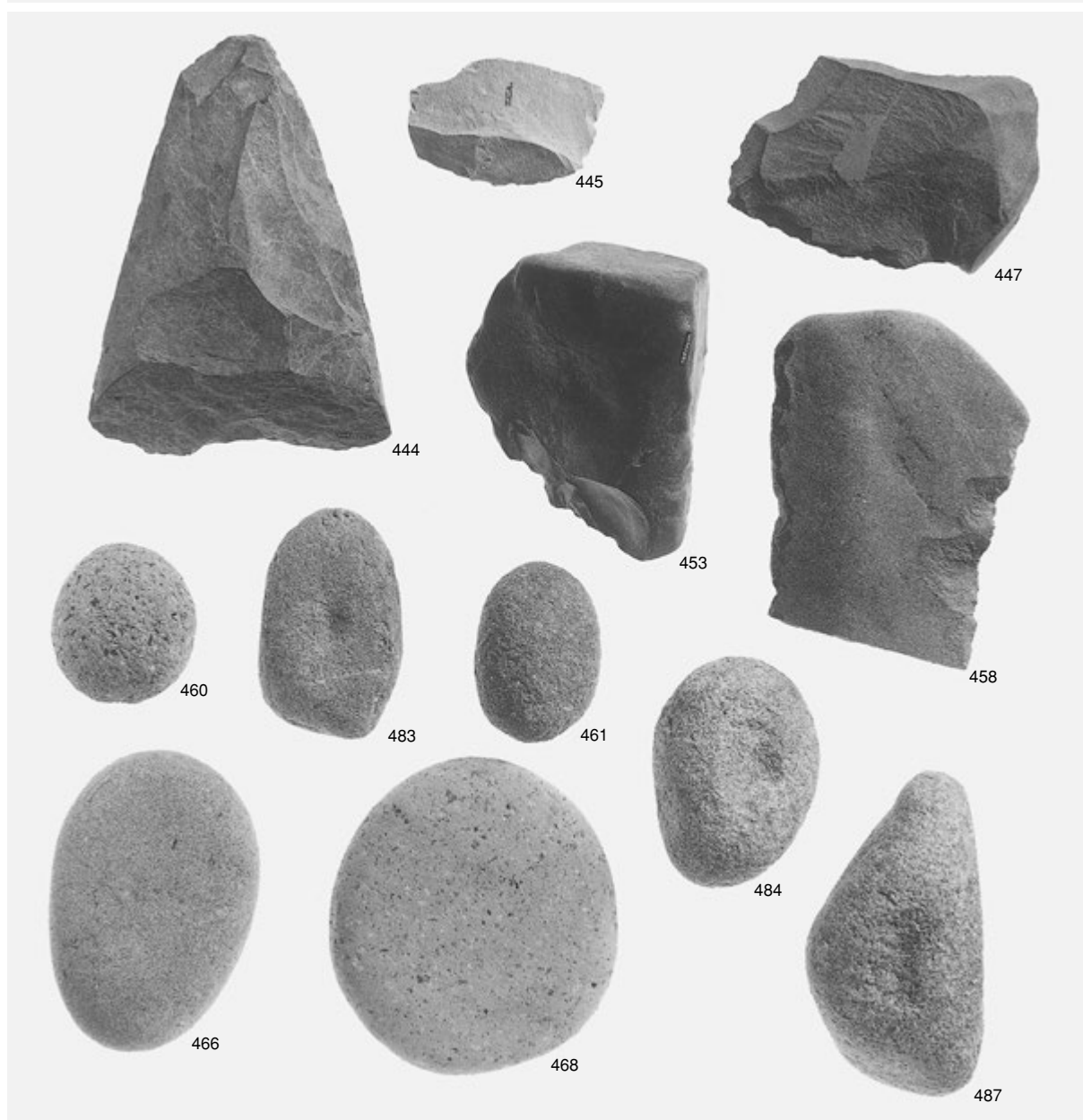
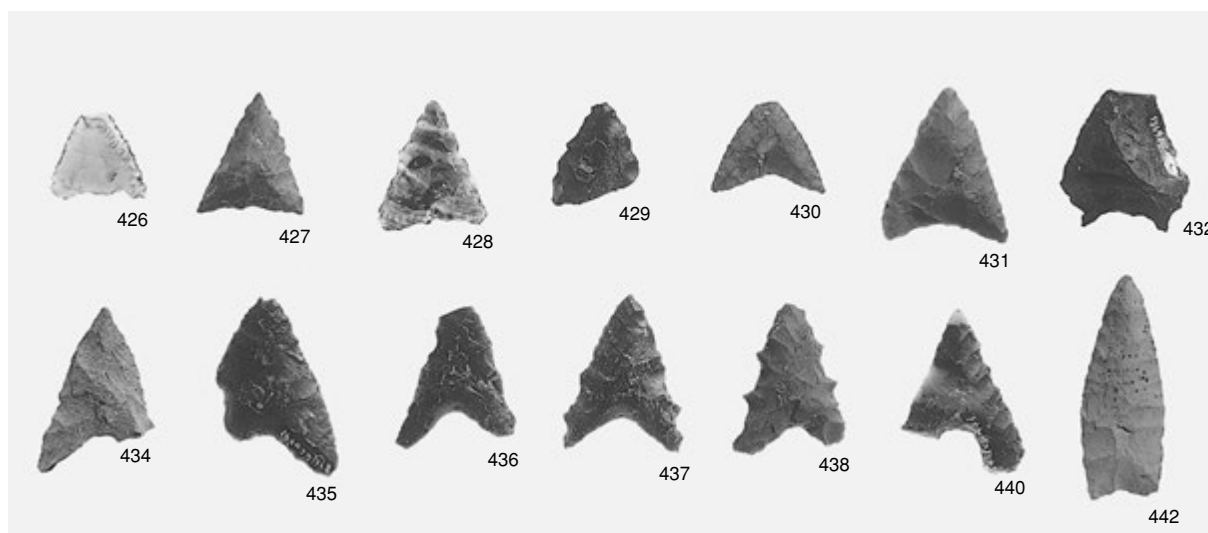
縄文時代早期土器 4



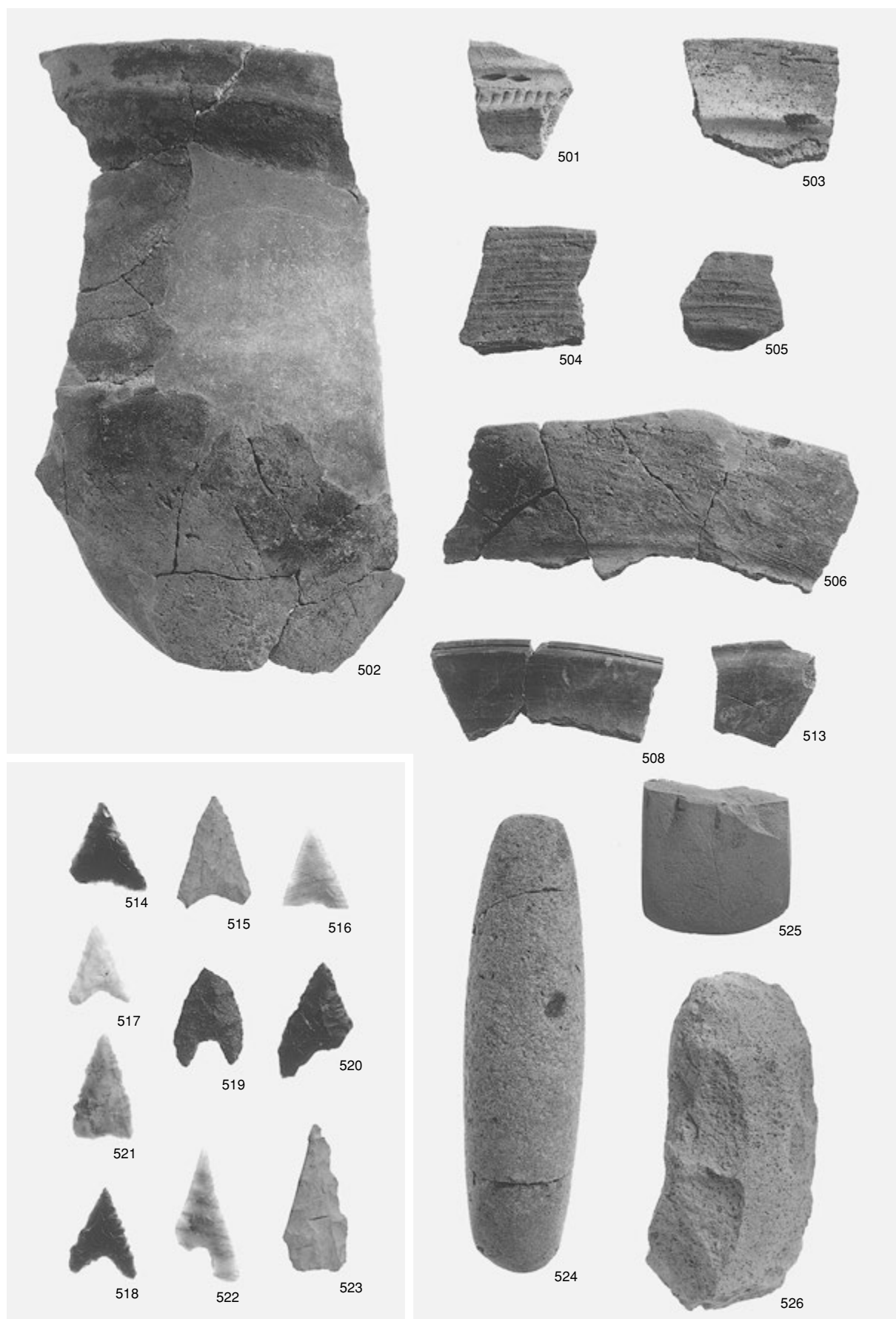
縄文時代早期土器 5



縄文時代早期土器 6



縄文時代早期石器



縄文時代晩期土器・石器

あ と が き

農業開発総合センター建設に伴う発掘調査報告書も今年度で5冊目になりました。今年度は南さつま市に所在する諏訪脇遺跡、宗円堀遺跡、神原遺跡、頭無遺跡、頭無迫田遺跡の5遺跡の報告になりました。

これまでは旧石器時代の遺構・遺物の報告が少ないでしたが、今回は宗円堀遺跡、神原遺跡、頭無迫田遺跡等、旧石器時代の遺物が豊富で担当者も慣れない石器に四苦八苦しながらの原稿執筆に当たりました。

旧石器時代では、ブロック・落とし穴・集積遺構等の遺構と共に豊富な遺物を紹介できました。ナイフ形石器・三稜尖頭器・台形石器を中心とする時期と、細石器文化の時期に分けられます。特に頭無迫田遺跡では接合資料も10点以上もありました。これらが旧石器時代の研究に寄与できれば幸いです。

縄文時代も早期の石坂式土器をはじめ豊富な資料が出土しています。

弥生時代及び古墳時代の遺構や遺物は少ない状況でしたが、古代（平安時代）の大溝が検出され、溝中から多くの須恵器・土師器が出土しています。

これらの資料が、郷土の歴史研究に役立つことが出来れば幸いです。

発掘調査に携わっていただいた南さつま市、日置市の皆様、報告書刊行のために整理作業に携わっていただいた皆様に深く感謝し御礼申し上げます。

最後に、発掘調査中並びに整理作業中に以下の方々に御指導いただきました。末尾ではありますが御礼申し上げます。

上村俊雄（国際大学教授）、河口貞徳（鹿児島県考古学会長）、五味克夫（鹿児島大学名誉教授）、中村明蔵（国際大学教授）、中村直子（鹿児島大学准教授）、永山修一（ラサール学園教諭）、本田道輝（鹿児島大学准教授）

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(122)

農業開発総合センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書V

農業開発総合センター遺跡群V

す わ わ き い せ き そ う え ん ぼ り い せ き か ん ば る い せ き
諏訪脇遺跡・宗円堀遺跡・神原遺跡

か し た な し い せ き か し た な し き こ だ い せ き
頭無遺跡・頭無迫田遺跡

発行月 2008年3月

発 行 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318
鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号
TEL (0995) 48-5811

印刷所 株式会社 秀巧社印刷
〒890-0072 鹿児島市新栄町25-7
TEL (099) 257-3300

